モンスターハンター　～人と竜と竜人と～

秋夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　～人と竜と竜人と～

【Ｎコード】
Ｎ３６４６Ｐ

【作者名】
秋夜空

【あらすじ】
人と竜が時には争いながらも共存してきたこの世界。
この世界では竜――総じてモンスターを狩ることを生業とする人間、ハンターと呼ばれる人々が存在する。

ハンターになってまだ二年と経験が浅いジュンキだったが、ある時無理を承知でジュンキの住むココット村の村長にリオレウスを討伐して欲しいとお願いされてしまう。もちろん敵うはずもなく、死の淵まで追いやられたジュンキを、リオレウスは何故か殺さなかった。

それから一年半あまりが経ち、狩りの拠点をココット村からミナガルデの街、そしてドンドルマの街へと移したジュンキの前に、あの時のリオレウスが現れる。そしてリオレウスはジュンキに、お前は竜人であると告げる――――。

世界の均衡が崩れる時、人と竜の間に生まれた竜人の末裔が目を覚ます。

世界は竜のものなのか。
世界は人のものなのか。

二種族の狭間に生まれ落ちた竜人の向かう先とは――――。

構想五年の壮大なモンスターハンター二次創作小説、ここに誕生！？

ＭＨ１ｓｔ　プロローグ（前書き）

初めまして。秋夜空です。男です。
初めての投稿となるこの作品、明らかにモンスターハンターです。
自己満足の塊となっています（汗
以前は自前のサイトを持っていたのですが管理が面倒だったので引っ越してきました。
拙い文章ですが、最後まで読んで頂けたら幸いです。

MH1st プロローグ

「リオレウス!?リオレウスってあの…?」
「うむ、そうじゃ。あのリオレウスじゃ…」
この村の村長は難しい顔で答えた。
「リオレウスを俺1人で倒せって!?」
「…すまぬ。緊急の依頼なんじゃ」
村長は頭を下げた。こんなことは初めてだ。
「わしが無理なお願いをしておるのも分かっておる。じゃが、今この村におるハンターはおぬしだけなんじゃ…」
そう言われて、辺りを見渡す。村人達が心配そうにこちらを見てはいるが、ハンターの姿はない。
「頼む…無理なら帰ってきてもよいのじゃ。狩りに出た、その記録だけでもいいんじゃ…」
「…分かったよ」
了解の意を伝えると、村長はようやく頭を上げた。
「すまぬ…」
「はい、契約金」
契約金を支払うと、この村の裏にある狩り場――森と丘へ向かった。

「よいしょ…」
キャンプに着くなり背中の大剣バスターブレイドを下ろし、納品ボックスに立て掛ける。支給品を確認するために、支給品ボックスを開いた。
「え…」
驚いた。応急薬や携帯食料等が普段の2倍入っていたのだ。村長のはからいだろう。
「村長…」
全部は持てないので、半分だけアイテムポーチに入れる。

「装備はと…」
全身をくまなく見る。体を守るランポスシリーズに、異常は見られなかった。
「…よし、行くか」
バスターブレイドを背負い直すと、ベースキャンプを出発した。

「…？」
すぐ異変に気がついた。いつもならのんびり若草を食んでいるアプトノス達が1匹もいないのだ。
「どうしたんだろう…」
ふと、歩みを止めて耳を澄ました。
「…静かだな」
今日の森はやけに静かだった。鳥の鳴き声が聞こえないのだ。不安でたまらなくなったが立ち止まり続けるのも仕方がないので、とりあえず奥へと進むことにした。小さな坂を上り、小高い丘に出る。いつもならランポス達が4～5匹くらいいたりするのだが、今日はランポスでさえ1匹もいなかった。
「やっぱりリオレウスに警戒してるのかな…」
不安と恐怖が膨らむばかりだった。
「本当に誰もいないみたいだ…」
ここにいても仕方がないので、隣の丘へ続く小道に入った。ランポス1匹通れない細い道を通り抜けると、開けた草原地帯に出た。
「！」
その草原のほぼ中央に、赤い巨体が立ち尽くしていた。そう、これが――
「空の王者、リオレウス…」
正直驚いた。ランポスとは比べ物にならないほど大きいとは聞いていたが、まさかここまでとは思わなかったのだ。そのリオレウスは今、こちらに尾を向けた状態で空を見上げていた。
「…？」

ちょっと意外なところもあった。空の王者と呼ばれているからには狂暴かと思っていたが、こんなにものどかな姿を見せているからだ。だが、今回の獲物もこのリオレウス…。覚悟を決めて、バスターブレイドの柄を右手で握った。ここからは狩りの時間だ。

「はあああああっ！」

リオレウスに気づかれる前に一気に駆け寄り、右脚を斬りつけようとした。したのだが…バスターブレイドは鈍い音をたてて弾かれた。

「なっ！？」

リオレウスは奇襲に驚いたのか、巨大な尻尾を振り回してきた。それが大剣を弾かれた衝撃で隙だらけの腹に打ち込まれる。

「がはっ！？」

体が「く」の字に曲がって吹き飛ぶ。地面を二転三転し、ようやく止まる。

「ぐ…」

顔を上げると、リオレウスがこちらに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えた。ふらつく脚でゆっくり立ち上がると、再びリオレウス目掛けて走り出した。

「やあああああっ！」

リオレウスが口を大きく開けて飲み込もうとしたところをすれすれで避け、リオレウスの腹の下に潜り込み、すれ違いにバスターブレイドで腹を切り裂いた。リオレウスの腹がバックリと裂け、真っ赤な血液が噴き出す。

「よしっ！」

リオレウスはゆっくりとこちらを振り向いたが、何も攻撃せずに飛び去っていった。

「え？ええっ！？」

これには本当に驚いた。飛竜が縄張りを侵した人間に対して何もせずに逃げていくなんて聞いたことがなかった。しかし…そのリオレウスは逃げ去っていったのだ。

「…意外と臆病なのかな…とにかく探さないと。どこ行ったんだろ

う…」

バスターソードを背中に戻すと、とりあえず北の森――地図上でエリア１０と書かれている場所へと行ってみることにした。

「ペイントするの忘れた…」

「痛っ…」

思わず顔をしかめる。先程のリオレウスの尻尾…相当応えたらしい。鈍い痛みが走る。

「早く終わらせないとな…！」

突然右側の草むらがガサッと動いたので、思わず身構えてしまう。

「ブヒ…」

「…モス」

モスと呼ばれる小型の豚だったので、思わず気が抜けてしまう。気を取り直して進むと、少し開けた場所に出た。隅には小さな池があり、近くに大きな足跡が見られた。

「ここにも来てるのか…」

一応辺りを見回してみるが、特におかしなものは見当たらなかった。

「…ここじゃないか」

小さなため息を吐くと、来た道を戻ることにした。この先は本当に狭い場所しかない。リオレウスが降りるのは無理だろう。

先程の草原地帯に戻ると、再びリオレウスが尾を向けて立っていた。アイテムポーチからペイントボールを取り出し、投げると同時に素早く背中のバスターブレイドに手を伸ばして走り出した。

「やあああああっ！」

目の前に降りている尻尾に向かって斬りかかる。だが目の前で尻尾は右に逃げた。ペイントボールも外れる。リオレウスが気付いたのだ。

「なっ！？」

勢いがありすぎたのが災いした。バスターブレイドが地面に突き刺

さったのだ。リオレウスは尻尾を回した勢いで一回転し、そのまま小さなハンターの左脇腹に直撃した。
「がッ！」
体が簡単に吹き飛び、近くの岩壁に激突した。衝撃で岩壁にヒビが入る。
「――――ッ！！！」
口から唾液が飛び出す。視界が少しずつ暗くなっていく中で、リオレウスが自分を覗き込んでいることだけが分かっていた。

「ん…」
気が付くと、目の前にはテントの天井が広がっていた。
「大丈夫かニャ？」
突然視界に広がる猫の顔。
「うわっ！」
「傷付くニャ…。せっかく運んであげたのニャに…」
「あ…ごめん…」
小さく謝ると、猫――――アイルーは機嫌をなんとか取り直してくれた。
「ま、いいニャ。ともかく、おミャーさんは倒れたのニャ。だから、報酬金の3割カットなのニャ」
その言葉を聞いて、気が引き締まる。村長によると、ハンターは一度の依頼で3回倒れ運ばれると、これ以上の期待を持てないということで契約が破棄されてしまうらしいのだ。
「ま、がんばるニャ！」
アイルーはそう言い残して地面に穴をバリバリと掘り、そのまま地面の中に消えてしまった。
「…ふう」
思わずため息を吐く。自分は1回負けたのだ。しかし、どうしてあのリオレウスは倒れた自分を喰わなかったのだろうか。
「…考えていても仕方ないか」

ふと体を見るとインナーの下に包帯が所々に巻かれ、防具はきれいに脱がされ、テントの隅に固められて置いてあった。ベットから立ち上がり、防具を着始める。グリーヴに足を通し、メイルを着ようとして異変に気付いた。

「あ…」

ランポスメイルの鉄鉱石で作られた胴甲が凹んでいるのだ。

「…帰ったら直さないとな」

装備を整えると、バスターブレイドを砥ぐ。

「どこにいるかな…リオレウス…」

砥石を置くと、バスターブレイドを担いだ。

「巣に行ってみようかな…」

そう独り言を漏らすと、ベースキャンプを出発した。

小高い山の中腹に横穴が一つ、ポッカリと空いている。この山の中は大きな洞窟になっていて、飛竜達の巣になっているのだ。誰もいない静かな丘を一人横切り、この横穴を覗く。

「こんにちは～…」

風が通り抜ける音に、僅かながら「音」が聞こえる。

「いるみたいだな…」

この先にリオレウスがいる。怖いが気を引き締め、ゆっくりと洞窟の中へと入った。

「お邪魔しま～す…」

明るい丘から急に暗い洞窟に入ったので真っ暗に見えるが、まばたきを繰り返して目を慣らす。すると、洞窟の中の様子がよく分かってきた。

「…！」

辺り一面骨、骨、骨。その中央で、リオレウスはいびきをかいて眠っていた。このリオレウスの姿を見て、正直いらっときた。

「俺じゃ相手にならないってか」

前回もすこし戦っただけで逃げられてしまい、いざ追ってみれば寝

ている。よほど自信があるのだろうか。
「…」
足音を立てないように、そっとリオレウスに近付き始めた。一面を埋め尽くす骨は意外に頑丈で、踏み進んでいても折れたりはしなかった。だが中には風化しているものもあったらしく、踏みしめた瞬間足元の骨が折れ、乾いた音が洞窟に響いた。
「しまっ…！」
まずいと思った瞬間、リオレウスの蒼い瞳が開き、重い音を立てて立ち上がった。ゆっくりと体を回し、眼と目が合うと、頭の中が真っ白になった。
「ご、ごめんなさい…」
やっとのことで出た言葉が通じる訳がなく、返事の代わりに咆哮を送られた。
「ぐっ…！」
爆音に等しい咆哮に思わず両耳を塞いで屈みこむ。突然強風が吹いたと思うと、目の前からリオレウスが消えた。
「なっ…！」
すぐ気付いたが、僅かに遅かった。既にリオレウスは天井近くまで飛び上っていたのだ。
「くそっ…」
呆然と立ち尽くしているとリオレウスが両足を前に突き出し、引っ掻くようにして急降下してきた。降下速度が速く自分の反応が遅れ、リオレウスの巨大で鋭利な足の爪でランポスメイルごと胸を左肩の付け根から右脇腹までを斜めに裂かれた。
「ぐあああああッ！！！」
裂かれた胸から鮮血が噴き出す。鋭利なリオレウスの爪の前では、ランポスの鱗や鉄鉱石などは紙と同然だった。
「ぐっ…ああっ…！」
突然めまい、吐き気、寒気が襲ってきた。リオレウスの爪の猛毒だ。
「ど…毒か…っ！」

歯を食い縛りながら飛んでいるリオレウスを見る。すると、リオレウスはブレスを吐いてきた。
「ぐっ…駄目か…」
避けようとはしたが体が言うことを聞かず、ブレスは目の前に落ちて爆発した。
「ぐは…ッ！」
爆風が胸の裂かれた肉を焼く。簡単に体が吹き飛び、背中から洞窟の岩壁に激突した。
「あぐッ…！」
そのまま抵抗なく、地面に落下した。
「ぐっ…ギッ…！がは…ッ！」
喉が焼けるように熱くなってきたかと思った瞬間、真っ赤な血液が唾液とともに口から飛び出した。同時に視界も霞む。リオレウスは着地するとこちらの様子を見て、ゆっくりと近寄ってきた。
（くそ…ここまで、なのか…？）
力を振り絞ってゆっくり顔を持ち上げると、丁度目の前までやって来ていたリオレウスの蒼い瞳と目が合った。出来る限り憎しみを込めた目で見返す。
（喰われるなら…喰われるまで睨み返してやるっ…！）
どれくらい時間が過ぎただろうか。リオレウスはくんくんと臭いを嗅ぐと反対の方を向いて、遠ざかり始めた。
「なっ…！くそっ…くそっ！」
自分はあのリオレウスに生かされた。それがたまらなく悔しかった。
「覚えてろよ！次に会った時こそ、お前を、殺してやるからな！」
リオレウスは立ち止まり振り返ったがすぐに飛び上がり、天井にポッカリ空いている穴から飛び去って行った。
「覚え…てろよ…っ」
視界が真っ黒になったかと思うとそのまま意識を失い、自分の血の池に顔を落とした。

ＭＨ１ｓｔ　プロローグ（後書き）

以上がこの作品のプロローグとなっています。
この小説ではこのように流血表現がありますので、そこのところはよろしくお願いします。
次回から本文へと入っていきます。楽しみに待っていて下さい。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０１（前書き）

プロローグを読んで頂いた方は分かると思いますが、この小説は展開が早いです。これは私、秋夜空自身の力不足です…。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０１

「ん…あぁ～…」
眩しい。窓から差す朝の日ざしに目を覚まし、体を起こす。窓から見えるミナガルデの街は今日も晴れだった。
「…夢か」
視線を部屋の中に戻すと、さらさらとした薄い茶色の髪をポリポリと掻く。
「あれは１６歳の時…か。２年前だなぁ…」
そう言いながらインナーの上から胸を軽く撫でる。そこには今から２年前につけられた、大きな傷がある。
「あいつ…まだ生きてるのかな…」
物思いにふけっていると、この部屋のドアがノックされた。
「はい？」
「先行ってるぞ～」
返事をすると、いつもの元気な声が聞こえた。
「先行くか…俺も行くかな」
そう呟くとベッドから出て各部屋に１つずつ備え付けてある大きなアイテムボックスを開き、リオレウスの鱗や甲殻、マカライト鉱石から作られた防具、レウスシリーズを着込み、同じくリオレウスの爪やマカライト鉱石から作られた大剣アッパーブレイズを背負う。
「急がないとな…」
アイテムボックスの蓋を閉じ、壁に掛けておいた黒バンダナを取ると薄い茶色の髪をまとめる。床に置いておいたレウスヘルムを左手に取ると、ゲストハウスのビショップルーム――中級クラスの部屋を後にした。ゲストハウスというのは言わばハンターの家だ。自分のハンターとしての技量を表すＨＲ（ハンターランク）によって入れる部屋のランクが決まる、そういうシステムになっている。

「ん～！」
チェックアウトを済ませて外に出ると、思わず背伸びをした。眩しい朝日が青色の瞳とレウスシリーズを焼く。そしてハンターへの依頼が入る酒場の方へ歩き出した。
「茶髪の竜人か…？」
そんな声が聞こえて、ジュンキの顔が引き攣る。特に身に覚えが無いのだが、いつの間にか「茶髪の竜人」という二つ名が付いてしまっていた。正直恥ずかしいので急ぎ足で酒場へ向かう。そこはまだ朝だというのにまずまずの込み具合だった。辺りを見渡し、いつもの2人を探す。中央に並べられた長机の1つに2人は座って待っていた。
「おはよう」
挨拶をしながら空いている3人目の席に座ると、返事が返ってきた。
「おはよー！」
「お、起きたか」
最初に元気に返事をした彼女、チヅル。このパーティ内唯一の女性だ。武器は双剣インセクトオーダー改。防具はクックシリーズだ。ちなみに頭装備はピアス。誰かさんと同じ薄い茶色の髪に真っ黒な瞳をしている。元気ハツラツな17歳だ。
次に返事を返したのはユウキ。このパーティ唯一のガンナーだ。武器はライトボウガンの「クロオビボウガン」で防具はフルフルシリーズだ。さらさらで綺麗な銀色の髪に薄い青色の瞳をしている。チズルに負けないくらい元気な18歳だ。
そして俺、ジュンキ。18歳。武器は大剣アッパーブレイズ。防具はレウスシリーズだ。
「さてと、今日はどうする？」
「ん～そ～だね～」
ジュンキが2人に問うと、チズルが声に出しながら考え始めた。
「あら？あなた達、暇ならちょっといい？」
ふと声がした方を見ると、一人の給仕が立っていた。赤と白をメイ

ンとした色の制服。声をかけてきたのは彼女だろう。
「ベッキー？何？」
チヅルがベッキーと呼んだ彼女はこの酒場の給仕長で管理者だ。ハンターズギルドに入ってくる依頼をハンター達に紹介するのも彼女の仕事である。
「ん～、今ね、珍しい依頼が入ったのよ。どう？」
「どんな依頼だ？」
ユウキが尋ねると、ベッキーは微笑みながら口を開いた。
「リオレウスなのよ」
一瞬間が空いた後、チヅルはフ～とため息を吐いた。
「レウス～？つまんな～い」
そう言って、チヅルは長机にひれ伏した。
「ま、確かにな」
ユウキも文句を言った。
「…あいつかなぁ」
「？…あいつ？」
思わず漏れた言葉がチヅルに聞かれ、ジュンキは「はっ」となった。
「いや、何でもない――」
「ジュンキ～まだ探してるのかぁ？」
ユウキが口をはさむが、チヅルやベッキーは何のことかさっぱり分からないという顔をしている。その様子を見てユウキは2人に教えようと口を開いたが、ジュンキが腕を伸ばして制し、代わりにジュンキが口を開いた。
「16歳の時…だったかな。1匹のリオレウスと戦ったんだ」
ジュンキが思い出すように話す。ユウキはニタニタ笑っているがチヅルとベッキーは真剣に聞いていた。
「結局負けて殺されそうになったけど…そのリオレウスは何故か俺を殺さなかったんだ。その時は悔しくて、ついこう言ったんだ」
――「覚えてろよ！次に会った時こそ、お前を、殺してやるから

な！」

「…ってさ」

ぐるっと周りを見ると、チヅルが必死に笑いを堪えているのが見えた。肩が震えている。

「…チヅル？」

「んくっ…ごめんごめん」

チヅルは申し訳程度に謝ったが、まだ笑っていた。

「でもさ、レウスって話をしないでしょ？」

チヅルの言葉に、ジュンキは急に気恥ずかしくなった。顔が火照るのが分かる。

「う、うるさいなっ」

「あら、残念」

ふと、ベッキーがにこにこしながら言った。

「今回の依頼はリオレウスでも、亜種よ？」

「亜種…」

「そう、リオレウスの亜種。蒼火竜リオソウルよ」

ユウキの言葉に、ベッキーは笑顔で答えた。

「受けるか？」

ジュンキが3人に同意を求める。

「いいよ～」

「レウスはレウスでも、蒼は珍しいからな」

ジュンキは一度軽く頷くと、ベッキーの方を向いた。

「じゃあその依頼、よろしく」

ジュンキの答えを聞いて、ベッキーは微笑んだ。

「毎度～♪出発は今日中にね」

ベッキーはそう言って、いつもの定位置であるカウンターへと戻って行った。

「ところでさ」

チヅルの声に、ジュンキとユウキがチヅルの方を向く。

「ジュンキ、あれから大丈夫なの？」
「ああ、今のところは大丈夫」
以前3人でリオレウスを狩りに行った時、ジュンキがリオレウスの血液を浴びた後に突然発作を起こして意識を失ったことがあったのだ。
「そう？でも何回も起きているんでしょ？」
「…」
ジュンキの顔が曇る。すると、突然隣に座っていたユウキがジュンキの背中を勢いよく叩いた。レウスシリーズのおかげでそこまで痛くは無かったが、ジュンキは思わず声を漏らした。
「ッ！」
「大丈夫大丈夫！ジュンキは茶髪の竜人の二つ名を持ってるんだぞ？心配ないって！」
と、ユウキはケラケラ笑って言った。
「朝御飯、まだでしょ？」
再びベッキーが注文表を持って現れた。
「さ、早く食べよう？」
チヅルはそう言い、ベッキーに注文をとる。そのまま朝食が終わるまで、誰も話をしなかった。

「リオソウルか…」
ジュンキは自分の部屋に戻ると、狩りの準備を始めた。相手は飛竜。真正面から武器一つで挑んでもまず勝てる相手ではない。事前の準備は重要だ。アイテムボックスを開き、回復薬や解毒薬、閃光玉などをレウスフォールドのアイテムポーチに詰めていく。みんなを待たせる訳にはいかないので、アイテムボックスの蓋を閉じると急いで酒場へ向かった。

酒場に入ると、まだユウキが来ていなかった。
「ジュンキ2番目～」

「ユウキは？」
「弾の選定中じゃない？ユウキはガンナーだからさ」
その時、チヅルの言葉に合わせたようにユウキがドカドカと音を立てて酒場に入ってきた。
「遅れた～！」
「お～そ～い～！」

こうしてジュンキとチヅルとユウキはミナガルデの街を出発した。
今回の狩り場は森と丘。飼い慣らされた草食竜アプトノスが引く竜車で街から2～3日で行ける距離である。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０１（後書き）

次回は蒼リオレウスとの戦いです。やはり展開は早いと思いますが…よろしくお願いします（汗

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０２

竜車は太陽が昇りきる前に今回の狩場、森と丘に着いた。竜車から荷物を降ろし、ベースキャンプを整える。
「よし、と。じゃあ作戦会議」
一段落ついた頃に、ジュンキはチヅルとユウキを呼んだ。支給品ボックスから地図を取り出し、地面に広げる。
「戦うとしたら…」
ジュンキはそう言うと、レウスアームを着けた手で地図の「２」と「３」と「４」と指した。
「ここかな」
「エリア９はまずいよね～」
チヅルはそう言って、クックアームを着けた手で地図の「９」を指した。エリア２、３、４は丘になっているが、エリア９は森の谷間みたいになっているのだ。
「巣は確かエリア５だったよな」
ユウキはそう言うと、フルフルガードを着けた手で地図の「５」を指した。
「水場はエリア９と１０だったよね」
チヅルはそう言いながら再び地図の「９」と「１０」を指した。
「とりあえず、そのリオソウルとやらをエリア９へ逃がさないってことだな」
ユウキが簡単な総論を言うと、ジュンキとチヅルは頷いた。
「じゃ、後はどうやって戦うかだね」
チヅルはそう言うと、う～んと考え始めた。
「まず…」
ジュンキが声を上げると、チヅルとユウキはジュンキの方を向いた。
「俺がリオソウルをおびき寄せて、その間にユウキが落とし穴を置く。チヅルが大タル爆弾を置いて、俺が着火する…どう？」

「いいよ～」
「なかなかだぞ」
今回はユウキが余っている大タル爆弾を処分してしまいたいということで一つだけ持ってきている。ジュンキの提案にチヅルとユウキは大きく頷いてみせた。
「じゃあ準備再開」
ジュンキの一言で、チヅルとユウキは自分の準備に取り掛かった。
ジュンキは背中のアッパーブレイズを抜き、砥石をかけると背中に戻した。身を守るレウスシリーズに異常が無いか確かめると、髪を軽く包んでいる黒バンダナの上からヘルムを被った。視界の確保のため、面頬は上げておく。
「準備いいよ～♪」
「俺もだ」
全員が準備を終えるのを確認すると、ジュンキは頷いた。
「よし…じゃあ行くか」
「オ～！」
チヅルが元気に返事して、三人はベースキャンプを出発した。狭くて暗い天然のトンネルを通り、エリア1に出た。午前の日差しがジュンキ達3人を照らす。
「ん～眩し～」
チヅルは日の光に当たるなり気持ちよさそうな声を上げた。
「ちょ…少し待って…」
ユウキの声がして、ジュンキとチヅルは振り返った。ユウキが自分の胸までの高さがある大タル爆弾を運んでいるのだ。だがこの爆弾、威力は大きいがその分重いのだ。
「ユウキ～ファイト～」
「チヅル～…」
チヅルの声援を聞いて、ユウキはがっくりと首を落とした。
「手伝うぞ」
「ああ、悪い」

ジュンキが手を貸し、二人で持つことにした。
「時間はまだあるしさ、ゆっくり行こう？」
チヅルは意地悪そうに、しかし憎めない程に言った。この先の小さな坂を下ると、そのまま草を食んでいる草食竜アプトノスの横を通った。
「平和だね～」
「全然平和じゃねぇ…」
チヅルの平和な声に反し、ユウキは苦しそうな声を上げた。

エリア１の先にある比較的広い丘であるエリア２に出ると、ユウキの口から愚痴が漏れる。
「意外と重いんだな…」
「ああ、重いよ…」
ジュンキが苦笑いしながら答える。
「ランポスはいないみたい」
チヅルがそう言うと先を歩き、ジュンキとユウキはゆっくりと歩き出した。午前のまだ涼しい風が吹き抜ける。
「ん～気持い～♪」
チヅルが嬉しそうに手を伸ばす。
「チヅルも持てよ～？」
ユウキが言うと、チヅルはいかにも嫌そうな顔をした。
「女の子に持たせるの～？」
「お前なぁ～…」
ユウキはあきれ顔になった。

「ここも大丈夫みたい」
先に進んでいたチヅルの報告を受けて、ジュンキとユウキはエリア３へと入っていった。
「もう限界…」
「頑張れよっ…」

ジュンキが苦しそうに声を上げる。
「いないね～」
「ふう…そうだな…」
チヅルの声に、ジュンキが疲れ声で答える。４人はエリアのほぼ中央まで進むと、チヅルが足を止めた。
「さてと、この坂道を上るとまた丘で、このまま真っ直ぐ行くと水場があるけどどうする？」
チヅルの問い掛けに、ジュンキとユウキはう～んと考え込んだ。そして、
「丘！」
ユウキの一言。
「よし、じゃあ行くぞ～…」
ジュンキは枯れ始めた声で出来る限り元気に返事をした。

坂道を上りエリア４に入ったところで、先を歩いていたチヅルが突然止まった。
「どうした？」
ユウキが不思議そうに尋ねる。
「いた」
チヅルがそう答えると、ジュンキとユウキはその場に大タル爆弾を置いた。
「ジュンキ」
チヅルが呼ぶとジュンキは頷き、姿勢を低くしながらチヅルの隣に移動する。この位置からだと青よりも濃い蒼色の大きな尻尾が見える。
「行くぞ」
ジュンキはそう言うと背中のアッパーブレイズの柄を握り、一気に駈け出す。そのままリオソウルとすれ違い様に右脚を斬りつけた。
リオソウルはジュンキを見つけるなり力強く咆哮し、エリアの奥へと既に移動したジュンキを追いかけ始めた。

「行ってくる」
ユウキはそう言うと飛び出し、適当な場所に落とし穴を設置した。
ユウキが紐を引くと火薬に火が付き、小さな爆発音と共に大きなネットが円状に広がった。その後ユウキはチヅルのところへは戻らず、狙撃するためにこのエリアの北西にある高台へと向かった。
「よ～し、次は私だね…」
チヅルはそう言うと、男二人掛かりで運んだ大タル爆弾を一人で持ち上げた。
「このために…爆弾を…運ばなかったのよ～！」
チヅルは自分を元気づけるように一人そう言うと、落とし穴の場所まで駆けて行った。
「ふんっ！」
落とし穴の上に大タル爆弾を置くと、チヅルは叫んだ。
「ジュンキ～後はよろしく～！」
「分かったよ！」
遠くから聞こえたチヅルの声を聞いて、ジュンキは噛み付いてきたリオソウルを避けて両脚の間を通り抜ける。準備が整った合図としてこのエリアの高台に登ったユウキに手を振るとチヅルと合流した。
ユウキは愛銃のクロオビボウガンでリオソウルの背中を撃つ。落とし穴とジュンキ、チヅル、ユウキの位置は丁度一直線上にあるのだ。
リオソウルは落とし穴があることには気付かずユウキ目掛けて走り、落とし穴に落ちた。ジュンキは急いでリオソウルの落とし穴落下の影響で半分沈み込んだ大タル爆弾目掛けてペイントボールを投げつけた。爆音と共にリオソウルが悲痛な声を上げる。爆発によって腹の肉が吹き飛び、真っ赤な血液がドバドバと流れ出始めた。
「やあああああ！！！」
「はあああああ！！！」
ジュンキとチヅルは声を上げながらまだ落とし穴を脱出出来ていないリオソウル目掛けて斬りかかった。
「～♪」

ユウキは通常弾を詰めると、リオソウル目掛けて撃つ。撃つ。撃つ。
（このままいけるか！？）
そう思ったその時、リオソウルはぼろぼろの両翼で何とか落とし穴から脱出した。ジュンキ、チヅルは距離をとる。リオソウルは着地すると、怒りの咆哮を3人に向かって放った。リオソウルの口元から灼熱の炎が噴き出す。リオソウルは一番近いチヅル目掛けて走り出した。
「私を怨むの…？」
チヅルはそう言うとインセクトオーダー改を正面で構え、リオソウルとすれ違いざまに右脚の腱を斬り付けた。新たに鮮血が吹き出し、リオソウルは体勢を崩し、地響きを立てて崩れ落ちた。
「やったか…？」
ジュンキが一言漏らす。だがリオソウルはすぐに体を起してこちらを睨んできた。
「手強いね～…」
チヅルはそう言うと、リオソウルの左翼側に回り込んだ。ジュンキは右翼側に回り、大剣の長さと重さを利用して翼膜をバッサリと裂く。
「♪～」
ユウキは通常弾で応戦する。リオソウルはぐらつきながらも飛び上がり、高台の上のユウキ目掛けてブレスを一発飛ばした。
「うおっ！」
ユウキは急いで高台から降りた。それと同時に高台が吹き飛ぶ。
「危ない危ない…」
「ユウキっ！」
チヅルが叫んだので反射的に振り向くと、思わず薄い青色の瞳が見開いた。リオソウルが前足を突き出して引っ掻いてきたのだ。
「ぐあぁッ！！！」
左腕に鋭い痛みが走り、ユウキはその場にうずくまった。
「私がユウキの所まで行くよ！ジュンキはリオソウルを！」

「分かった！」
ジュンキは返事をすると、降りてきたリオソウル目掛けて走り出した。リオソウルがこちらを振り向く。それに合わせるようにして、ジュンキは閃光玉を投げた。リオソウルの目の前で弾けたそれは、一時的だがリオソウルの視力を奪う。
「はあああああ！！！」
ジュンキの渾身の一撃はリオソウルの脳天に当たり、勢いでリオソウルの顔が地面に埋まる。だがまだ生きている。
「らあああああ！！！」
その場でジュンキはアッパーブレイズの重さを活かして自分ごと回転し、リオソウルの、鱗で守られていない喉を斬り裂く。程なくして、リオソウルは動かなくなった。
「はあ…はあ…」
真っ白な頭の中に、ふとユウキの顔が浮かび上がる。
「そうだ…！」
ジュンキは慌ててユウキの方を向くと、チヅルが大丈夫と言わんばかりに手を大きく振っていた。
「大丈夫そうだな…」
ジュンキがそう思ったその時、突然視界がぼやけ始めた。思わず片膝をつく。
「あ…ぐ…っ！」
まただ、と思う。何かが、腹の奥底から、滲み出てくるような感覚。ジュンキはそのまま意識を手放した。

「ん…」
気がつくと、テントの天井が視界を覆っていた。体を起こすとベッドに腰掛けているチヅルとテントの入口に立っているユウキが目に入った。どうやらここはベースキャンプらしい。
「あ、気がついた？」
「ああ…」

「また…か？」
「…みたいだ」
ユウキはジュンキがリオレウスの血液に弱いことを知っての問いかけだ。ジュンキは苦笑いしながら答える。ふと、ジュンキは大変なことに気づいた。
ハンターは狩場で倒れると、ギルドと契約したアイルー達がハンターをベースキャンプに運んでくれるのだがその際、報酬金の三割が割り引かれてしまうのだ。だがジュンキの心配は杞憂だった。
「ジュンキが倒れたのはリオソウルを討伐した後だろ？なら大丈夫だよ」
「そっか…よかった」
ジュンキがそう言ったその時、チヅルの腹がグ～っと鳴った。
「お腹空いた～…」
チヅルがそう言うと、ジュンキとユウキは小さく笑った。
「もうすぐ帰りの竜車が来るから、それまで待つんだな」
「ふ～い…」
チヅルはそう言うと、アイテムポーチから携帯食料を取り出して齧った。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０２（後書き）

こんにちは。秋夜空です。今回も最後まで読んで頂きありがとうございました。次回は再び街に戻ってからの話です。しばらくこの調子が続きますが、どうかお付き合い下さい。

MH1st　第1章　運命の再会　03

「ただいま～」
狩り場の森と丘から数日かけてミナガルデの街に戻った3人は、ひとまず酒場に向かった。夜の酒場はいつになくにぎやかで、3人の「帰ってきた感」がさらに増した。窮屈な酒場を通ってカウンターまで向かうと、ベッキーが嬉しそうに奥から出てきた。
「あら、お帰りなさい。どうだった？」
「バッチリ！だったよ！」
チヅルが笑顔でそう言うと、ベッキーも応えるように笑った。
「はい、今回の報酬金」
ベッキーはジュンキから依頼書を受け取ると、代わりに報酬金が入った小さな革袋をジュンキに渡した。
「少し食べたいんだけど」
「じゃあ近くの席に座ってね。あと、注文も考えておいてね」
ジュンキの要望に答えると、3人は空いているテーブルに座った。

「じゃあアプトノスのステーキ3つで」
「毎度～♪」
ジュンキが3人分注文すると、ベッキーは喜んでカウンターに戻っていった。
「今回もジュンキ、倒れたね…」
「ははは…」
チヅルが一言言うと、ジュンキは苦笑いした。
「ジュンキって何か変なものが体の中にいるんじゃないか？」
「何だよそれ…」
ユウキの冗談にジュンキは失笑した。
「ま、いいさ。いい思い出になるしな」
ユウキが笑顔でそう言うと同時に、ベッキーが新しく入った依頼書

を掲示板に張り始めた。
「何かいいのあるか？」
「はいどうぞ～」
ユウキが尋ねると同時に、注文したアプトノスのステーキがテーブルに届いた。
「…先に食べよう？」
「もちろん！」
「そうしようか」
チヅルがうるうるした目でジュンキとユウキを見つめると、２人は苦笑いして承諾した。

食後、３人は掲示板の前で次の依頼を探していた。
「ドスランポスは～？」
「う～んダメ」
ユウキがドスランポスを見つけたが、チヅルが即却下した
「あ、これどう？」
今度はチヅルが依頼書を見つけた。
「…ディアブロス！？」
「おっ！いいじゃん！」
ジュンキは驚き、ユウキは喜んだ。
「よ～し、俺が依頼書取ってくる」
ユウキはそう言うと掲示板から依頼書を受け取り、カウンターへと向かった。

しばらくして、ユウキは正式な依頼書を持って戻ってきた。
「出発は明日だってさ」
「じゃあ今日は解散だな」
ユウキの言葉を聞いて、ジュンキはそう言った。
「じゃ、また明日ね～！」
「また明日！」

チヅルとユウキはそう言い、酒場を出ていった。
「さて、どうしようかな…」
ジュンキは腕を組むと、壁に寄りかかって今後のことを考え始めた。
ふと、酒場にいるハンターの何人かはこちらをじ～っと見たりちら見してることに気がついた。
（茶髪の竜人か…。）
ジュンキはそう思うと床に置いておいたレウスヘルムを拾い上げ、酒場を後にした。
（ジュンキも大変ね…）
この酒場の状態を見て、ベッキーは密かに思った。

外は日が落ち、夜の闇が広がっていた。しかしあちらこちらで火が焚いてあったり商店の明かり等で明るかった。何か一つ買って帰るのもいいかなと思ったが今回の狩りの疲れが出てきており、ジュンキは寄り道すること無くゲストハウスに戻った。自室に入るなり、ジュンキはレウスシリーズを装備したままベッドにダイブした。
「疲れた～…」
このままジュンキは朝までぐっすり眠ることになった。

MH1st　第1章　運命の再会　04

数日後、ジュンキ、チヅル、ユウキは「砂漠」とハンター達の間で呼ばれている狩場に到着した。
「あっつ～い…」
竜車から降りるなり、チヅルが灼熱の太陽を見上げながら言った。
「ま、砂漠だからな」
ユウキがジュンキと竜車から支給品ボックスを降ろしながら言った。
「チヅルも手伝えよ～」
「は～い…」
チヅルはとぼとぼ竜車に戻った。

「さてと、作戦を練るわけだが…」
ベースキャンプのセッティングが終わった頃を見計らって、ジュンキは招集をかけた。チヅルは完全装備で出てきたが、ユウキは上半身の防具を脱いだインナー姿で現れた。
「ユウキ…」
「ま、気にするな。作戦練るんだろ?」
ジュンキがちょっと不機嫌そうな声を出すと、ユウキはケラケラ笑って受け流した。
「え～っと、相手はディアブロスだ。気は抜けないぞ?」
「大丈夫!」
「任せとけって!」
2人の返事を受け取ると、ジュンキは赤茶けた地面に砂漠全体の地図を広げた。
「ディアブロスは砂に潜った際に音爆弾が有効だということが確認されている」
「そうだね。じゃあ誰が音爆弾を投げるかだね」
ジュンキが言ったことを受けて、チヅルが2人に問いかけた。

「俺が持つよ」
ジュンキはそう言うと、腰のアイテムポーチから音爆弾を取り出した。
「あ～、支給品ボックスに入っていないと思ったら、ジュンキが持ってたんだ」
「ごめんごめん」
「罠は？」
「…忘れたw」
ジュンキの質問にユウキがそう答えると、チヅルが背中の双剣インセクトオーダー改を抜いた。
「チヅル！落ち着けぇ～！」
「ユ～ウ～キ～！」
ユウキが逃げ出すと同時にチヅルが追いかけ始め、鬼ごっこが始まった。
「待て～！」
「チヅルっ！武器は駄目だ～！」
二人の様子を見て、ジュンキは遠巻きにため息を吐いた。
「罠無しか…」
悩むジュンキを尻目に、ユウキとチヅルはベースキャンプの狭い敷地を走り回っていた。

ベースキャンプは岩陰に設置されていて比較的涼しかったが、一歩外に出るとそこは灼熱地獄だった。一面の砂。遠くは陽炎でよく見えない。
「暑い～…」
チヅルが一言漏らすと、ジュンキとユウキは気が抜けたように長い息を吐いた。
「チヅル、いつディアブロスが砂の中から出てくるか分からないから気を張っているのに、なぁ」
「む～…」

ユウキがそう言うと、チヅルが少し脹れてしまった。
「ジュンキは暑くないの～？」
「暑いよ…」
先頭を行くジュンキの足が止まったのは丁度その時だった。
「どしたの？」
「…地面が揺れてる」
ジュンキの返事を聞いて、チヅルは背中からインセクトオーダー改を抜いた。ユウキもクロオビボウガンを構える。ジュンキは右手をアッパーブレイズの柄に添えるに留まった。

――どれくらいの時間が過ぎただろうか。

突然、四人の真下が揺れた。
「下だ！」
ジュンキの言葉を聞き終わる前に、３人は既にその場を離れていた。それと同時に、砂漠の砂と同じ色の巨大な双角が大地から勢いよく生えた。
「行くぞ！」
「おう！」
「うん！」
ユウキは距離を取り、水冷弾を装填した。チヅルは武器を正面で構え、ジュンキはレウスヘルムの面頬を下ろすと右手をアッパーブレイズの柄に持っていき、ディアブロスの隙を窺う。ディアブロスも砂の中から完全に出てくると、３人に向かって威嚇した。そして地響きを立てながら、チヅル目掛けて突進する。
「来る…！」
チヅルは避けようともせず、インセクトオーダー改を正面で構えた。そしてディアブロスとすれ違い様に右足の腱を斬りつけた。赤い液体が噴き出す。
「俺だって負けてられないな」

ユウキは独り言を漏らしながらも、水冷弾を撃つ。
「はあああああっ！！！」
チヅルとユウキが隙を作った間にジュンキがディアブロスの後ろにまわり、ハンマーのような尻尾の根元を斬りつけ、すぐ離脱する。大剣は隙が大きい武器なので、一撃離脱が基本だ。ディアブロスはジュンキとチヅルから逃げるように尻尾を大きく振り回すと、双角を使って砂の中に潜った。
「あ～潜っちまった…」
ユウキの残念そうな声を遠くに聞きながらジュンキはアイテムポーチから音爆弾を取り出し、ディアブロスが潜った場所に投げつけた。直後、高い周波数の音が響くと同時に、ディアブロスの巨体が砂の中から飛び出した。
「よし…！」
ジュンキとチヅルが苦しそうにもがいているディアブロス目掛けて走り出す。
「双剣使いの奥義！鬼人化！」
チヅルは大声でそう叫び、ディアブロスの腹の下で踊り始めた。ジュンキもチヅルに続く。ディアブロスが悲痛な声を上げると、再び砂の中へと潜った。
「逃がすか…！」
ジュンキは大剣を背中に戻すと、再びアイテムポーチから音爆弾を取り出し投げた。高周波。ディアブロスが飛び出す。砂の中から尻尾が出るところを狙い、ジュンキの大剣が一撃、ディアブロスの尻尾が吹き飛んだ。
「やるな～！」
ユウキが嬉しそうな声を上げると、ディアブロスは砂埃を上げて砂の中へと潜ってしまった。すぐにジュンキはアイテムポーチに左手を突っ込むと、三度目の音爆弾を投げた。爆発はした。だがディアブロスは砂の中から出てこなかった。
「なっ…！」

ジュンキはすぐに異常に気づき離れようとしたが、次の瞬間には宙を舞っていた。
「ジュンキーッ！」
チヅルが叫ぶ中、ジュンキは砂の大地に墜落した。衝撃でレウスヘルムが転がる。
「私が見てくる！」
「こっちは任せろ！」
ユウキがチヅルを安心づけるように言うと、チヅルはぐったりとして動かないジュンキの元に駆け寄った。
「ジュンキ！」
チヅルがジュンキの体を起こすと、ジュンキの口から真っ赤な血液が飛び出した。それでも構わず、チヅルは自分のアイテムポーチから回復薬を取り出すと、ジュンキに飲ませた。
「ジュンキ、しっかり！」
「あ…ぐ…っ！」
チヅルがユウキの方を振り向くと、丁度ディアブロスが砂の中へ潜り、他のエリアへと移動したところだった。

「大丈夫か？」
ユウキがボウガン片手に近寄ってくると声をかけてきた。
「ああ…ぐっ！」
ジュンキは自力で立ち上がったが、すぐに片膝をついてしまった。
よく見ると、ジュンキのレウスメイルに所々ヒビが入っている。
「無茶するな！血まで吐いたんだろ？」
「キャンプで安静にしていた方がいいよ」
「その方がいいか…」
チヅルの提案を飲むとユウキの手を借り、一度ベースに引き上げることにした。

「ジュンキ、大丈夫かなぁ～」

ベースキャンプを出てすぐに、ユウキが一言漏らした。
「最悪、もうハンターを続けられないかもな」
「そんな…！」
ユウキがぼそっと言うと、チヅルの顔が少し青ざめた。
「ジュンキの体は頑丈だ。心配ないと思うけどな」
「も～ユウキったら～…」
「まあまあ。まずは、コイツを狩らないとな」
ユウキがチヅルをなだめるように言った直後に、ディアブロスが砂の中から出てきた。
「ジュンキがいないけど…いくよ～！」
チヅルはそう言うと、ディアブロス目掛けて走り出した。ユウキも続く。ディアブロスは斬られた尻尾を無闇に振り回すがチヅルはしなやかに両足の間に入った。
「はあああああ！！！」
右の足左の足構わず斬りつける、小さな竜巻が起きていた。
「～♪」
ユウキはスコープを覗きながら標準を合わせ、水冷弾を打つ。

遊撃手であるジュンキがいない分ディアブロスの攻撃を避けなければならず、何度も逃がしては追いかけたが、夕暮れまでには何とか決着が着いた。

「ジュンキ～！」
「チヅル…おわっ！」
チヅルはベースキャンプに戻るなり、簡易ベッドで安静にしているジュンキに飛びついた。
「よかった～生きてた～」
「チヅル、そろそろ離してやれよ？ジュンキは一応病人だからな」
ユウキがそう言うと、ジュンキは苦笑いした。
「迎えの竜車が来るまでまだ時間がある。のんびりしようぜ」

ユウキはそう言うと、クロオビボウガンをテントに立て掛けた。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０５（前書き）

他の方が執筆なさっているモンハンの小説を読んで思ったのですが、私の小説はモンスターとの戦闘がとても短いですね…。
理由は単純で、正直面倒なだけなのですが…。
まあ私の小説ではどちらかと言えば物語性を重視しているので…というのは言い訳ですね。
時間に余裕が出来たら、真剣に書きたいと思います。
こんな小説ですが、これからもよろしくお願いします…。

MH1st　第1章　運命の再会　05

「大丈夫だとは思うのですが…」
ミナガルデの街に戻るなり、ジュンキはハンター専用の病院に搬送された。その診察室での結果、ジュンキの担当医から聞いた言葉がこれだった。何とも頼りないことこの上ない。
「つまり、自信を持てないと？」
ユウキがそう言うと、医者は申し訳なさそうに頭を下げた。
「外傷はありません。ただ内部がどうなっているのかは開いてみないと…」
開く。つまり手術だ。だが開くとそこから膿ができてしまいそのまま死亡したという話もある。
「無事な確率を上げる方法とかないのか？」
「フルフルから採れるアルビノエキスを使った元気ドリンコを飲めば、多少は高くなりますよ。」
「元気ドリンコにアルビノエキス！？」
ユウキが大袈裟に驚いてみせると、担当医は静かに笑った。
「ハンターの間では知られていない、秘密の調合ですよ」
「フルフルか…」
ユウキの質問に医者が答えると、チヅルは天井を見上げて考え始めた。
「在庫あったかなぁ…」
「あ、俺あるぞ」
ユウキが嬉しそうに言うと、担当医は首を横に振った。
「出来るだけ新鮮の方がいいです。そうですね…1週間以内の物がいいでしょう」
「じゃあ…狩りに行く？」
「もちろん、な？」
ユウキがそう言ってジュンキを見ると、ジュンキは穏やかな笑みを

浮かべた。
「悪いな…」
「何言ってるんだよ」
ジュンキが申し訳なさそうに言うと、ユウキは照れ臭そうに言った。
「じゃ、行ってくるね。ジュンキはおとなしく街で待ってるんだよ」
「ああ、気をつけて。俺はまだ診察があるからベッキーによろしく言っておいて」
「うん。分かったよ」
ジュンキの言葉を最後に、チヅルとユウキは診察室を後にした。

狩りの報告とフルフル討伐の依頼を受けるために、チヅルとユウキは酒場へと向かった。今は昼間なのでハンターの数は少なく、受付嬢のベッキーもすぐこちらに気がついた。
「お帰りなさい。どうだった?」
「ジュンキがやられた」
ユウキがそう言うとベッキーは目を見開き、祈りの体勢をとった。
「心からご冥福をお祈り致します」
「いや、死んでないから…」
ユウキが慌てて付け加えると、ベッキーは笑った。
「分かってるわよ。あのジュンキ君がそう死んだりしないわ。で、何があったの?」
「まあ…内側の怪我だ」
「あら…。じゃあどうするの?」
ユウキが提出した依頼書を受け取り報酬金を差し出しながら、ベッキーが聞いてきた。
「フルフルから採れる新鮮なアルビノエキスを使うらしい」
「じゃあフルフルね。ちょっと待っててね」
ベッキーはそう言うと、カウンターの奥へと消えた。
「フルフルかぁ…」
「チヅル、苦手か?」

ユウキの言葉に、チヅルは顔を上げる。
「ううん。昔ジュンキがさ。覚えてない？」
「ははは、覚えてる覚えてる」
ユウキが笑う。ベッキーが戻ってきて、カウンターの上に依頼書を置く。
「フルフルの討伐依頼よ。出発は明日」
「じゃ、明日集合ってことで」
ユウキは依頼を受けると、本日は解散とした。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０５（後書き）

物語性を重視してると言っておきながら、文字数が少ないですね…。
どうか気長にお待ちください…。

MH1st　第1章　運命の再会　06

数日後、チヅルとユウキは霧の濃い沼地を歩いていた。
「…！」
ユウキの体が強張る。ユウキの目の前には巨大な昆虫、カンタロスが一匹。――ユウキは虫が苦手だった。そんなユウキの前方で、チヅルが双剣を振り回しながら歩みを進めていた。
「ふんっ！はっ！やあっ！…あっ」
「…どうした？」
チヅルが何か見つけたらしく、素振りが止まった。
「あそこ」
チヅルがそう言って右手の双剣で奥を指す。そこには暗い洞窟が口を開けて待っていた。
「あそこかなぁ…」
2人が洞窟の前に立つと、冷たい風が流れ出てきた。
「ハッグシュ！」
「大丈夫か？」
「うん…」
ユウキが声をかけると、チヅルは申し訳なさそうに答えた。
「前もってホットドリンクを用意しておいて良かったな」
「そうだね」
チヅルとユウキはそれぞれのアイテムポーチからホットドリンクを取り出すと、一息に飲み干した。
「よし、行こっか」
チヅルが先に――ユウキの虫嫌いを知っているので――洞窟の中へと入っていった。

洞窟の中は吐いた息が白くなるほど気温が低かった。
「フルフルってさ、天井に張り付いてることもあるよね…」

チヅルの心配そうな声が洞窟の奥に消えていく。
「だからさ…今にも上からとか…？」
「わっ！」
「きゃあああああっ！！！」
ユウキが大きな声を出すと、チヅルは絶叫した。
「ユウキの馬鹿っ！」
「ごめんごめん――――」
突然ユウキの顔が引き締まったので、チヅルは半ば本能的にユウキの視線の先を見た。洞窟の広くなった場所に、うごめく白い塊があった。
「フルフル…」
「一気に行こう」
チヅルはそう言うとインセクトオーダー改を構えた。ユウキもクロオビボウガンを構える。
チヅルが飛び出すと、ユウキはペイント弾をフルフルに撃ち込んだ。フルフルの、口だけの顔がこちらを向く。
「うえ…気持ち悪…」
チヅルは文句を言いながらも、フルフルの足元に潜り込んで切り刻み始めた。
「おらおらっ！」
ユウキはいつものように、遠くから撃つ。フルフルの体が青白く光り出すと、チヅルはフルフルから急いで距離をおいた。直後、フルフルを強烈な青い光が包み、洞窟が明るくなった。
「電撃か…」
近づくことが出来ないこの状況でも、ボウガンの発射音だけは消えなかった。
「～♪」
青白い光がフルフルの周りから消えると、チヅルは再び斬りかかった。フルフルは敵をなぎ払うように尻尾をぐるりと回すがチヅルはしゃがんで避ける。

（あなたには恨みも何もないけど…ジュンキのために、私はあなたを狩るッ！）

チヅルは全身をバネのように伸ばして垂直に斬り上げた。

この後もフルフルはチヅルとユウキに向かい最後まで抵抗を続けたが、やがてその巨体を地に伏せた。

「うえ～。べとべとだよ～…」

「キャンプの近くに川が流れてるから入ったらどうだ?」

ユウキが言い終わると同時に、砥石がユウキの防具に当たる鈍い音が洞窟に響いた。

「イテテ…ま、アルビノエキスはこれでいっかな」

ユウキはフルフルの動かない体へ近づき、持ってきた採取用ビンを使ってアルビノエキスを採取した。

「剥ぎ取って戻るか」

「うん！ジュンキが待ってる！」

チヅルとユウキはフルフルから素材を剥ぎ取ると、寒くて暗い洞窟を後にした。

MH1st　第1章　運命の再会　07

チヅルとユウキが持ち帰ったフルフルのアルビノエキスによって治療されたジュンキは三日で退院許可をもらった。たった三日でだ。
「ジュンキ、もう治ったの？」
「ああ。もう大丈夫だよ」
病院帰りのジュンキに、チヅルは不安そうな声を上げた。
「しかし、本当に頑丈だな～」
ユウキの言葉に、ジュンキは苦笑いする。
「あ、そうだ。ベッキーに回復したって伝えないとな。酒場に向かってもいいか？」
「そうだね。行こう」
3人は午後の広場を横切り、酒場の中へと入った。

酒場に入ってまず目に入ったのは、銀の鎧を着た兵士三人がベッキーと話をしているところだった。その兵士の腕にはどこかで見たことがある紋章。
（シュレイド王国紋章…？）
「ジュンキ、速く入れよっ」
「おわっ！」
ジュンキが酒場の入口で止まってしまう形になってしまっていたので、ユウキがジュンキの背中を押した。するとジュンキがつんのめる。流石にベッキーや王国軍兵士も気がついた。ジュンキがカウンターの前に立つと、ベッキーはいつもと違う、引き締まった顔でジュンキを見てきた。
「まずは退院、おめでとう。元気そうでよかったわ…」
「ああ、ありがとう…。ベッキー、彼らは…？」
「私達は、シュレイド王国の使者であります」
律儀に答える使者に、ジュンキは思わず閉口する。

「実はね…彼らはジュキって人を探してるの」
「お…俺？」
「おお、貴方が…」
三人いる使者の中のリーダーらしき兵士が一歩前に出てきた。
「私達は貴方様をお迎えに上がりました」
「お、お迎え！？」
「王国の権力は強大です。拒否は出来ませんぞ」
「目的は何だ！？」
「申し訳ありません。私達はただ貴公をお連れするようにと申し付けられたのみでして」
「ベッキー！」
「…」
ジュンキが声を上げるが、ベッキーはにが虫を噛み潰したような顔をして俯いた。
「所詮ハンターズギルドはハンターズギルド。何も手出しは出来ないということですな。さあ、行きますぞ」
兵士がジュンキの腕を握ろうとしたが、伸びてきたチヅルの腕によって邪魔された。
「ちょっと！勝手に連れて行かないでよ！」
「うるさい！小娘が！」
ジュンキに手を伸ばした使者が右手で握り拳をつくり大きく振りかぶった。殴られる――！チヅルは思わず目を閉じたが殴られることはなかった。恐る恐る目を開くと、近くに座っていた面識のない男のハンターが寸前で止めてくれていた。
「おいおい、女を殴るたぁお前、男の風上にも置けねぇなぁ」
「俺達のハンターを連れてくとは、いい度胸じゃねぇか。ああっ？」
酒場にいるハンター達が次々と立ち上がる。
「お前達…」
思わずジュンキも驚く。
「さ、早く行きな」

名も知れぬハンターに礼を言いながら、ジュンキとチヅルとユウキは酒場を脱出した。

「これからどうする!?」
広場に出たところで、ユウキが聞いてきた。
「ひとまず、俺の部屋に…」
「それはまずいんじゃない?」
ジュンキの提案にチヅルの制止が入る。3人はゲストハウスに向かいながらも話し合った。
「相手はジュンキを狙ってるんだよ?だったらジュンキの部屋も見張られている可能性があるんじゃない?」
ジュンキの顔が曇る。
「じゃ、俺の部屋に来いよ」
「…今はそうしよう」
ユウキの提案にジュンキとチヅルは乗った。

「ここだ。ちょっと狭いけど我慢してくれ」
「ユウキ…」
ユウキの部屋の入り口で、ジュンキとチヅルは立ち止った。汚い。足の踏み場がなかった。衣服からボウガンの弾、食べた後の食器にモンスターの素材までもが床にぶちまけられている。
「うえ〜…」
「チヅル、今だけだからさ…」
「うん…」
適当なスペースをすぐ作ると3人は腰を下ろした。
「ひっ…!」
チヅルの小さい悲鳴。
「どうした?」
「何か…ぶよぶよしたものが…」
チヅルが恐る恐る下を見ると、そこには白い皮が置いてあった。

「あ、それフルフル…」
「いや〜！！！」
チヅルは飛び上がり、ジュンキに抱きついた。
「あ！ジュンキ…！あ…」
「大丈夫か？チヅル」
「あ、うん。大丈夫…」
赤くなるチヅル。
「お〜お〜、熱いね〜」
ユウキが冷やかす。
「ユウキの馬鹿っ！」
「物を投げるな〜！」
チヅルは手当たり次第に物をユウキに投げ始めた。
「まったく、いつでも元気な3人組ね…」
部屋の入口から聞こえてきた声に3人が振り返る。
「ベッキー！」
ベッキーは微笑みながら扉を閉じ、部屋の中へと入ってきた。
「ユウキ、もう少し掃除したら？」
「あ〜う〜…はい…」
「よろしい」
「ベッキー、その…どうしてここに？」
ジュンキが驚いた顔で聞くと、ベッキーは座りましょうと言ってその場に座った。ジュンキ達も急いで座る。ジュンキ、チヅル、ユウキ、ベッキーで円を作ると、ベッキーが口を開いた。
「まず、さっきはごめんなさい」
「あの酒場のことか？気にしてないから…」
ジュンキの返事で会話が途切れると、つかさずチヅルの口が開いた。
「あいつら、一体何者なの？」
「シュレイド王国軍…」
ベッキーの表情が曇る。
「シュレイド王国から派遣された騎士達よ。ハンターズギルドが反

論出来る相手じゃないわ…」
「シュレイド王国って何？」
ユウキがジュンキに真顔で聞いた。
「シュレイド王国って言うのはこの大陸を治めている国の名前だ。知らなかったのか？」
「だって生きていく中で必要ないし…」
ユウキの言葉を聞いて、ベッキーは小さく笑った。だがすぐ表情が引き締まる。
「話を戻すわね…。何人も、王国の主張を覆すことは出来ないわ。おまけに、王国とハンターズギルドは仲が悪いし…」
「仲が悪い？」
ジュンキが尋ねる。
「ええ…。これはハンターズギルド創設時の話になるけど…。いい？」
ジュンキ達が頷くと、ベッキーは静かに語り始めた。
「ハンターズギルドが創設される前は、モンスターの退治依頼は王国に依頼されていたの。ただ、達成率は低かったみたいね。王国は実力じゃなくて、権力で階級を作るから。でもハンターズギルドは違った。実力があれば、だれでもＯＫだから」
「つまり、王国はハンターズギルドに仕事を奪われたってことか」
ユウキがそう言うと、ベッキーは小さく頷いた。
「別に私達は王国に喧嘩を売るためにハンターズギルドを創設したわけじゃないのよ」
「そりゃそうだよな」
ユウキの一言。
「でも、それから王国との関係が悪くなった。それは事実なのよ」
ベッキーは結論付けると、少し前屈みになっていた体を起こした。
「…じゃあどうしてジュンキを連れ出そうとしたのかな」
「それは…私にも分からないわ…」
チヅルの質問にベッキーが答えると、もう話すことが無いのか会話

が止まった。
「…ちょっと、思ったんだけど」
ジュンキの言葉に、他の3人がジュンキの方を向いた。
「このままこの街に…ミナガルデに残っていたら危ないんじゃないか？」
「…そうね。いつ、また来るか分からないし…」
ジュンキの言葉は実に当たり前のことだった。いつ再び王国軍がやって来るか分からない。今回のように上手く逃げられるとは限らないのだ。
「あ！」
「どうした？」
ユウキが何かに気がついたように声を上げたので、3人の視線がユウキに集まる。
「ショウヘイとカズキがいる、ドンドルマに行かないか？」
「いいね！それ！あの2人ならきっと事情を分かってくれるよ！」
ユウキの提案に、チヅルは嬉しさを隠そうとせず声を上げた。ショウヘイ…カズキ…。今でこそ3人パーティのジュンキ達だが、一時期は5人パーティだったのだ。離れている二人に会える…。
「…ショウヘイ」
「懐かしいか？」
ジュンキの口から洩れた言葉を、ユウキは聞き逃さなかった。ジュンキは恥ずかしさを隠すように頬を掻く。
「まあ…な」
「あら、丁度いいわね」
ベッキーが嬉しそうに言った。
「何が？」
「私、明日ドンドルマに用事があって、ミナガルデを発つ予定だったの。もし良かったら、一緒に行かない？」
「もちろん！」
ジュンキ、チヅル、ユウキは快諾した。

「出発は明日の…？」
「朝よ。場所はいつもの竜車置き場ね」
「装備と必要最低限の道具を持って、明日は竜車置き場に集合だな」
ジュンキのこの言葉で、今日はお開きになった。

翌朝、ジュンキ達はミナガルデを出発した。目指すはドンドルマの街。ハンターの街としては大陸最大級の街である。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０７（後書き）

さて、次回で新キャラクターが二人出てきます。その内の一人はジュンキとユウキに深い関係があり、もう一人はチヅルの旧来の仲だったりします。次回の更新をお待ちください…。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０８（前書き）

今月から更新速度を早めようと思います。う～ん、そんなこと言って大丈夫かなぁ…。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０８

「でっけ～…」
大きい。とても大きい街だ。目の前の大きな木造の橋を渡ると広場があり、ここから街の様々な場所に行くことができるようになっている。左手にはミナガルデにあったようなゲストハウス――ここではマイハウスと言うらしい――の入口があり、その奥には酒場の――ここでは大衆酒場と呼ばれている――入口がある。広場を真っ直ぐ進むと大きな階段があり、この奥にドンドルマの街を治める大長老が住んでいる大老殿がある。一般のハンターは入ることが出来ないが、ギルドが認めたハンターならば入殿が認められ、困難な依頼が回されるらしい。広場の右手を見ると、もくもくと煙を吐いている建物が目に入る。ドンドルマの武具工房だ。この広場では商人達がハンター相手に様々な品物を売りさばいている。
街の立地場所は山肌だ。山の谷の部分に作られたこの街は天然の要塞でもあり、三方を山で囲まれているのだ。これはモンスターの侵入を防ぐ上で非常に役立っている。唯一開けている側には対モンスター用の迎撃場が設けられている。そんな街をただ茫然と街の入口で眺めているジュンキには、そんな言葉しか出てこなかった。
「いつまで立ってるんだっ」
「おあっ！」
突然ユウキが後ろから押したので、ジュンキは危うく転びそうになった。周りのハンターや街の人がくすくすと笑う。
「さ、まずは酒場に行って登録しないとね」
ベッキーが案内する形で、ジュンキ達は木造の橋を渡って街の中へと入った。
「ねえベッキー。私達の狩りの成績ってどうなるの？」
「あなた達のハンターランクとか？大丈夫よ。正式な紹介状を書いてきたから」

ベッキーはそう言うと、懐からジュンキ達の紹介状を取り出した。
「さ、酒場に入るわよ」
ベッキーを先頭にチヅル、ジュンキ、ユウキの順で酒場に入る。
「天井高〜い！」
チヅルの声を聞いて、ベッキー以外の三人が上を見上げる。
「ミナガルデの酒場は洞窟をくり抜いて作られているから狭いのよね〜…。ちょっと羨ましいわ…」
ベッキーの本音が漏れる。ふと、酒場のカウンターにいた給仕の一人がこちらに向かって走ってきた。
「先輩じゃないですか〜！」
「あらユーリ。久しぶり」
「先輩も久しぶりです！」
「ベッキー、彼女は…？」
「あら、ごめんなさい。ユーリ、紹介するわ。彼らは今日からこの街でお世話になる凄腕ハンターよ」
ベッキーの紹介を受けると、ユーリと呼ばれた給仕は目を輝かせた。
「本当ですか！嬉しいです！」
「ベッキー、あまり誇張しないでくれよ…」
「あらジュンキ、ごめんなさいね。さて、彼女はユーリ。私の後輩で、この街の依頼管理をしているわ。狩りに出るときは彼女に言ってね」
「よろしくお願いします！」
ユーリはそう言うと、元気に頭を下げた。
「じゃ、私は仕事に行かないと。ユーリ、後は任せるわね」
「は〜い！」
ベッキーはそう言うとユーリにジュンキ達の紹介状を渡し、酒場の奥へと消えていった。

「さて、これからどうしますか？」
「人を探しているんだけど…」

「名前は？」
「ショウヘイとカズキ」
「あ、今この酒場にいますよ」
「え」
「ショウヘイさ～ん！カズキさ～ん！」
ユーリが大きな声で二人の名前を呼ぶと、酒場の隅の二人が立ちあがった。薄茶色の防具のハンターは駆け足で近寄ってくるが、黒い防具のハンターはゆったりと歩いてくる。
「ジュンキ…？ジュンキか！」
「カズキ…久しぶり――――おあっ！」
「きゃあっ！」
「おおっ！」
カズキと呼ばれたハンターはジュンキ達に飛び込んだ。
「チヅルにユウキも！久しぶりだなぁ！」
「カズキこそ久しぶり！」
「お久ー！」
「ははは、変わってないな～！ははははは！」
「カズキ、声が大きいぞ」
後ろから聞こえた声に、ジュンキ達は再び声を上げることになる。
「ショウヘイ…」
「ジュンキ、突然どうした？手紙もよこさないで…。まあ嬉しいけどな」
ショウヘイは微笑みながら答える。
「立ち話もなんだし、席に着こうぜ！」
カズキに先導されるがまま、ジュンキ達5人はショウヘイとカズキが座っていた席に向かった。後ろから注文票を持ったユーリがついてくる。席に着くなりユーリが注文を受ける。
「5人とも水でいいかな？」
「よろしく！」
「は～い！」

ユーリがカウンターに戻ると、早速カズキが口を開いた。
「さて、と。一体どうした?手紙もよこさないで…」
カズキが率直に聞いてきたので、ジュンキは今回のいきさつを話した。

「厄介だな~、そりゃ」
そう言って腕を組んだこのハンターはカズキ。18歳。武器はランス「ブロスホーン」で、防具はディアブロシリーズ。ユウキ並みに元気な奴だが、パーティのムードメーカでもあり憎めない。狩りでは常に先頭に立ち、モンスターの目を引き付ける。
「あれ?ショウヘイ、武器変わったの?」
「ん?ああ、まあな」
チヅルの問いに、ショウヘイは軽く笑って答えた。ショウヘイは片手剣使いだったが、今は太刀「斬破刀」を装備している。
「見たこともない防具だな…」
「ああ、ちょっとあってな」
ショウヘイは隠すように言った。ショウヘイの防具はどうやらブラックシリーズと呼ぶらしい。文字通り真っ黒な防具だ。強いて言うなら、ジュンキの装備しているレウスシリーズの深紅の甲殻の部分が黒一色の甲殻になっている、そんな感じの防具だ。
「ま、しばらくはドンドルマに滞在するんだろ?」
「まあ、そうなるかな」
ジュンキが答えると、カズキはニカッと笑った。
「よし!じゃあまた5人パーティだな!」
皆が頷き、微笑む。丁度その時、ユーリがグラス5つと部屋鍵3つを器用に持ってきた。
「はいど~ぞ♪」
「おっ、どうも!」
「ん…?」
ふと、ショウヘイがあることに気がついた。

「部屋が隣だ…」
「えっ、そうなの？」
「ああ…カズキ、俺…隣がジュンキ、続いてチヅル、ユウキみたいだな」
「あ、もしかしてユーリ？」
チヅルが嬉しそうな目でユーリを見ると、ユーリは自信たっぷりに頷いて見せた。
「ふふふ…ちゃ～んと配慮しましたよ♪」
「仕事が早いなユーリは」
「どうも♪じゃ、また何かあったら呼んでね～」
ユーリはそう言うと、カウンターの方へと戻っていった。
「もうすぐ日が暮れる。荷物を部屋に置いてきたらどうだ？」
「そうだね。いつまでも狩り装備だと肩凝っちゃうし…」
チヅルが机にひれ伏しながら言った。
「じゃ、夕食時になったらまたここに集まるとして…解散！」
カズキが高らかに言うと5人は立ち上がり、全員同じ方向に歩きだした。
「あ、部屋隣同士だったな…」
「あはは！」
カズキの恥ずかしそうな声を聞いてチヅルは声を上げて笑い、他の3人は頬を緩ませた。

「いらっしゃいニャ～」
部屋に入るなり、突然テーブルの裏から一匹のアイルーが出てきた。
「今日からあんたの世話をすることになったニャ。何かあったら言いつけて欲しいニャ」
「ああ、よろしく。今は特に無いよ」
「そうかニャ？だったらいいニャ～」
アイルーはそう言うと、机の裏へと消えていった。
「…楽しくなりそうだな」

ジュンキは一人ほくそ笑みながら言うと、レウスヘルムを机の上に置いた。大剣アッパーブレイズを壁に立て掛け、レウスグリーヴ以外の防具を脱ぐ。今は季節的に温かいので簡単な黒いTシャツをインナーの上から一枚着ると、部屋を後にした。

「ジュンキー！」

廊下で呼ばれたので振り向くと、こちらに向かって走って来るチヅルが目に入った。チヅルもクックグリーヴのみ残して簡単なシャツを着ている。

「酒場に集まるんだよね？一緒に行こう？」

「ああ、いいよ。行こう」

「うん！」

ジュンキとチヅルは二人並んで歩き出す。街の広場に出ると、満天の星空だった。

「ジュンキっていつもバンダナを巻いてるよね～」

「ん？これか？」

チヅルの問い掛けに、ジュンキは薄い茶色の髪をまとめている黒いバンダナを指差した。

「狩りの最中はヘルムの中で髪がくしゃくしゃになるからな。それでまとめていたんだけど、今じゃ生活の一部になっちまったんだ」

「そっか～♪」

チヅルの言葉を最後に、二人は大衆酒場の中へと入った。夕食時のせいか、昼間よりは混み合っている。その中でも、六人掛けテーブルを占領している3人のハンターがジュンキとチヅルを呼んでいた。

「みんな早いな…」

「そうだね～。行こ？」

「もちろん」

ジュンキとチヅルが席に着くと、早速カズキが口を開いた。

「どうだった？新しい住まいは」

「すっごく広かったよ！」

「アイルーがいるのか？」
「ああ、まあ世話係みたいなもんだ。仲良くな？」
カズキの言い方に、ジュンキは思わず笑った。
「分かってるよ。心配すんなって」
「…そろそろ夕食にするか？」
「おおお！待ってました！」
ショウヘイの提案に、ユウキが大きな声を上げた。だがその声も、この大衆酒場の騒がしさにすぐ掻き消されてしまう。
「私もお腹空いた～」
チヅルはそう答え、ジュンキは頷いた。
「よ～し、ユーリーーー！！！」
カズキは一度頷くと、大衆酒場のカウンターに向かってモンスターの咆哮にも負けないくらいの大声を出した。周りのハンター達は特に気にも留めなかったが、カウンターにいたユーリは右手を上げて答えた。
「へへへ、この大声はちょっとした自慢なんだ」
「カズキの先祖はディアブロスなんじゃないの？」
チヅルの発言にジュンキ、ショウヘイ、ユウキは笑った。カズキも頭を掻く。
「は～い、ご注文は何ですか～？」
ユーリが伝票を持って来ると、ジュンキ達は自分が食べたいものを注文していった。
「あら、私もご一緒しようかしら」
「ベッキー！」
ふとそんな声が聞こえたかと思うと、ユーリの後ろにベッキーが夕食を入れた盆を右手に、左手に椅子を持って立っていた。チヅルが嬉しそうな声で答える。
「先輩！いたんですか！」
ユーリの驚き様にベッキーは微笑んで返事をすると、ジュンキ達の長机に座った。

「先輩も何か注文があったら呼んで下さいね！」
ユーリはそう言うと、急ぎ足でカウンターへと戻っていった。
「ベッキー、仕事が終わったのか？」
ジュンキがまず訪ねると、ベッキーは「ええ」と答えた。
「これはギルドの仕事だから、ね」
ベッキーが、これ以上は話せない。と言いたいのは明らかだったので、これ以上の探索は止めておくことにした。
「ベッキーはいつミナガルデに戻るの？」
「明日の朝に発つわ」
チヅルの質問に、ベッキーは少し寂しげに答えた。
「それで、どう？この街は」
「いいところだよ」
「広くて大きい！」
ベッキーの質問に、個々の答えが帰って来る。そうしているうちに、ジュンキ達の夕食が運ばれてきた。ドンドルマの街の夜は、更けてゆく。

「ベッキーはこれからどうするの？」
夕食を終えて大衆酒場を出た先の街の広場で、チヅルがベッキーに聞いた。
「私はこれからお風呂にいくわ」
「えっ…お風呂？」
「ああ、説明が抜けてたな」
カズキがそう言ったので、全員がカズキを見る。
「ミナガルデの風呂って言ったら各部屋のシャワーとかだけだったけど、ドンドルマはすげ～ぞ～。ハンターとギルド関係者だけが使える大浴場があるんだ！」
「へ～！知らなかったなぁ」
関心するユウキ。
「みんなで行くか？」

ジュンキの言葉に、ベッキーを含んだ全員が賛同した。

ハンターとギルド関係者だけが使える大きな浴場は、マイハウスが並ぶ廊下の一階の最奥にあった。確かにこのような場所では街人が入れるはずもない。

「じゃ、私とベッキーは女湯だから」

チヅルはそう言うと、ベッキーと一緒に女湯と描かれた暖簾をくぐっていった。

「俺たちも行くか」

ユウキがそう言い、最初に暖簾をくぐる。脱衣所を見る限り、他にも利用している人がいるみたいだった。

「ちゃっちゃと入ろうぜ！」

そう言ってカズキは脱いだ傍から服を棚に放り込み、あっという間に浴場の方へと消えていった。

「あ〜いい湯だ〜」

「おっさんかっ」

カズキのコメントにユウキが突っ込む。

「いいじゃねぇかよ〜」

「ちょ、抱きつくなっ！」

ユウキとカズキがじゃれ合っているのをそっぽに、ジュンキとショウヘイは狩りの中で負ってきた古傷について語り合っていた。

「カズキでも傷はあるんだな…」

「いくらハンターでも、結局は人間だからな」

ジュンキとショウヘイがカズキの体を見て言う。

「ショウヘイも、傷だらけじゃないか」

ジュンキの言葉に、ショウヘイは苦笑いする。

「まあ、俺もガキだった頃があったんだよ。知ってるだろ？」

ショウヘイの台詞に、ジュンキは昔のことを思い出す。

「しかし――」

ショウヘイはすぐに表情を引き締め、ジュンキの方を見た。
「ん？ああ、これか？」
ジュンキはそう言うと、苦笑いしながら胸の大きな傷を指でなぞった。指三本分はある深い傷跡が二本、左肩の付け根から右脇腹にかけて圧倒的な存在感を放っている。
「ショウヘイに見せるのも初めてだったっけ？あの時のレウス戦だよ」
ジュンキの言葉にショウヘイは一瞬空を仰いだが、すぐに思い出したようで大きく頷いた。
「あの時の傷か！」
「そう。あの時…」
ジュンキとショウヘイの懐かしんでる様子を見て、ユウキとカズキも近寄ってきた――その時、聞き慣れた女性の声が聞こえた。
「ベッキーいいなぁ…」
チヅルの声が男湯と女湯を仕切っている壁の向こうから聞こえて、男４人は会話を止めた。
「私よりおっきい…」
「チヅルちゃんもこれから大きくなるわよ」
男四人が互いに顔を見合わせる。
「俺は上がる」
「あ、俺も…」
そう言い残し、ジュンキとショウヘイが浴槽から上がる。ユウキとカズキは互いに顔を見合わせると、大きくゆっくり頷いた。この浴場は洞窟をくり抜いて作られており、天井はあるのだが仕切りは天井付近が空いているのだ。その空間までの仕切りの高さ、３メートルくらいだろうか。
「ユウキ、どっちが上か、ジャンケンだ」
「おう」
湯船の中で、構える二人。
「せ～のっ！最初はランポス！ジャンケン――！」

「！」
「俺の勝ち」
カズキが勝利した。ユウキの肩車で、カズキが仕切りの上に手を置く。
「おっ！」
「うほほっ！」
「やるのか！？」
浴場にいたハンター達がはやし立てる。
「よっ！」
カズキが一気に女湯を覗く。
「え…」
カズキが見たもの――――それはバスタオルに身を包んだチヅルとベッキーだった。おまけにベッキーは風呂桶を構えている。
「カズキく～ん」
ベッキーが風呂桶を投げると、カズキの顔面に直撃した。
「ぐはあっ！」
湯船に水柱が立った。

「ふう…」
自室に入るなり、ジュンキは小さくため息を吐いた。あの後どうやらカズキは本当に女湯を覗いたらしく、大浴場の入口でその時入浴していた全ての女性から袋叩きに遭っていたので、今その始末をしてきたのだ。
「カズキもカズキだけど、ユウキもユウキだよな…」
そう言いながら、小さな二人用のテーブルに座る。すると突然、水の入ったコップが置かれた。
「どうかしたのかニャ？旦那さん」
「ん？いや、仲間が女湯を覗いてね…」
「あニャ～やっちまったニャ。アイルーの世界でも、覗きは厳禁だニャ～」

カズキもアイルーに言われたらおしまいだな、とジュンキは思った。

翌朝、朝食は大衆酒場でと聞いていたのでジュンキはとりあえず向かうことにした。まだ朝早いというのに、広場は既に多くのハンターや街人等で賑わっていた。昨日は街の大きさに驚いて気づかなかったが、街の中心であるこの広場には多くの店が並んでいた。

「市場か…後で行ってみるかな」

ジュンキは市場を横目に、大衆酒場へと足を踏み入れた。夜と違ってそこまで混んではいなかったが、それでも大賑わいだ。席を見渡すと八人掛けテーブルに座っているショウヘイ、ユウキ、チヅル、カズキの他に、今日はベッキーも座っている。

「おは～」

近寄って来るジュンキに気がついて、チヅルが一声上げる。すると他の４人もすぐ気がついた。

「おはよう」

「おう、起きたか」

「遅いぞ～」

ジュンキが席に座ると、カズキがユーリを呼んだ。すぐに伝票を持ってユーリがやってくる。

「はいは～い♪ご注文は何ですか～？」

６人はそれぞれ朝食を注文すると、ユーリは忙しそうにカウンターへと戻っていった。

「なあ、ベッキー」

「なあに？ジュンキ」

「ベッキーは今朝出るんだろう？」

「ええ。でも朝ご飯くらい食べる時間はあるわ」

「そっかぁ～…」

ジュンキとベッキーの会話を聞いて、チヅルが寂しそうな声を出す。

「会おうと思えばいつでも会えるじゃない。そんな寂しそうにしないの」

「うん…」
ベッキーがチヅルの返事に笑顔を見せると同時に注文した朝食が届いたので、6人はとりあえず朝食を済ませることにした。しかし、食べ始めてすぐにショウヘイが異常に気付く。
「ん…？」
「どうしたショウヘイ？」
「クエストボード」
ショウヘイとカズキは合い向かいの席なので、カズキは体を捻じらせてクエストボードを見る。クエストボードとは、ハンターに対しての依頼用紙や仲間を募る求人用紙などを貼るための大きな木製の看板のことだ。また緊急に舞い込んだ依頼なども大々的に貼り出したりすることもあるのだが…ユーリが慌てた様子で何かを貼り出していた。だが綺麗に紙を留められずに苦労している。
「ユーリ…」
大衆酒場のハンター達は当然分かっているのだが、クエストボードは依頼用紙、求人用紙、緊急依頼用紙と三つの貼り出し場所が振り分けられている。ユーリはどうして依頼用紙専用の場所に巨大な緊急依頼用紙を貼りだそうとしているのだろうか。ふと視線を戻すとベッキーも呆れている。ユーリは他の給仕達に言われて気づいたらしく、更に慌てて緊急依頼専用の場所に貼り出した。
「おお…」
「すげぇぞ…」
少し皺が目立つが、貼り出された依頼にハンター達の間に動揺が見られた。その依頼とは――
「クシャルダオラ…」
カズキの口からもその名が漏れた。だがカズキとベッキー以外は知らないようで、ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ、チヅルはさっぱり分からんと顔に出ている。
「カズキ、クシャルダオラっていうのは…？」
「ああ、みんなは知らないか。と言っても、俺も聞いたことがある

だけだが…」
カズキは咳払いを一つ入れると、普段のカズキからは信じられないくらい真剣な目で語り始めた。こういうところは、やはりハンターだなとジュンキは思う。
「クシャルダオラってのは古龍って呼ばれている、飛竜とは一味も二味も違うモンスターなんだ。並の腕前じゃあ歯が立たない相手だな」
「強いの？」
「戦ったことがないから分かんねぇな～」
チヅルの問いに、カズキは眉間に皺を寄せて答えた。
「なあ、どうするよ？」
「俺達じゃあ太刀打ち出来ねぇぞ…」
「でも、放っておいたらこの街に来るかもしれないんだろ？」
大衆酒場のハンター達にも動揺が広がっているみたいで、あちらこちらで不安な声が上がる。
「おい、あれって茶髪の竜人じゃないのか？」
そんな声が聞こえたのはそんな時である。ジュンキの顔が引きつる。
「ジュンキはこの街でも有名なのね～」
ベッキーは呑気にそう言ってくるが、相手は得体の知れないモンスターなのだ。そうすぐに「はい」とは言えなかった。だが…
「未知のモンスターかぁ～。おし、いっちょやったるか！」
ユウキはやる気満々だった。
「私も～！」
チヅルもだ。ショウヘイは静かに笑っている。
「…じゃあクシャルダオラ狩りに行く人～」
ジュンキが半ば嫌々聞くと、ショウヘイやユウキ、チヅルにカズキと全員が手を上げた。
「よ～し…俺も行こう」
ジュンキも参加する意志を伝えると、４人全員が嬉しそうに頷いた。
「…私はミナガルデに戻るわね。気をつけるのよ」

「うん！」
ベッキーの忠告にチヅルが応える。とりあえず今は朝食を済ませることにした。

「さ～て、問題は誰が行くのか、だな」
カズキが話を切り出す。そう、狩りへはギルドの規定で最大４人までなのだ。現在のメンバーはジュンキ、ショウヘイ、ユウキ、チヅル、カズキの５人。つまり、誰か１人は諦める必要がある。
「よ～し、それじゃあ恒例の――」
５人が身構える。
「最初はランポス！ジャンケン――！」
「ポンッ！」
「！」
「あ～っ！」
負けたチヅルは留守番となった。
「へへ～。ま、土産話してやるからな」
「む～…」
カズキの提案に、チヅルは長机に伏して答えた。そしてショウヘイが静かに席を立ち、カウンターにいるユーリのもとへ依頼を正式に受けに向かった。

「ふう…」
ジュンキは部屋に戻るなり、狩りの準備を始めた。
「出発は今日の昼か…」
「狩りに行くのかニャ？」
「ん？ああ、そうだよ」
ジュンキはそう答えながら、アイテムボックスの中の装備を出す。
「はニャ～。もう狩かニャ～。この街に来てからまだ二日目なのに忙しい人だニャ～」
「ん…緊急でね。のんびりしてられないのさ」

ジュンキは横目でちらりと部屋付きアイルーを見ながら準備を進める。
「大変だニャ～。相手はどんなモンスターだニャ？」
「クシャルダオラだってさ」
ジュンキがそっけなく言うと、部屋付きアイルーは飛び上がる程驚いた。
「ニャんと！？あのクシャルダオラかニャ！？」
「知ってるのか？」
「あったり前だニャ！ボクはチラと見たこともあるニャ！」
「話してくれないか？どんな奴か知っておきたいし…」
「お任せなのニャ！」
ジュンキが近くの椅子に座ると部屋付きアイルーはテーブルの上にちょこんと座り、そして思い出すように目を閉じた。
「ボクはチラリとしか見ていないケド…クシャルダオラは鋼のような色をしてるニャ」
「鋼色…」
「それと、これは聞いた話なんだけどニャ。クシャルダオラは天気を自由に操るらしいのニャ」
「天気を？晴れとか雨とか？」
「そうだニャ。だけど戦闘中は悪天候のことがほとんどらしいのニャ」
「なるほど…」
「ボクが知っているのはこれくらいだニャ」
「ありがとう。お礼といっちゃなんだけど…」
ジュンキはそういうとアイテムボックスに戻り、中からアイルー達が大好きなマタタビを取り出した。
「ニャンと！？マタタビだニャ！」
「狩り場から帰ってきたら偶然防具の隙間に刺っててさ、俺は使わないからあげるよ」
「ニャ～ン♪今日からご主人と呼ぶニャ～♪」

「ご主人ね…」
苦笑いしながらも、ジュンキは黒バンダナで髪をまとめる。
「それじゃ、行ってくるよ」
「行ってらっしゃいだニャ～♪」
ジュンキは必要なものをアイテムポーチに入れ、装備を整えると部屋を出た。

大衆酒場に着くと、既に他のメンバーは揃っていた。
「ジュンキも来たか」
「おまたせ」
「気をつけてね～…」
チヅルの見送りの言葉は暗かった。
「よ～し！クシャルダオラだ～！」
対照的なカズキに続いて、ジュンキ達４人――ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ、カズキはドンドルマの街を出発した。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０８（後書き）

長くなってしまいましたね…。次話もお楽しみに。

MH1st　第1章　運命の再会　09

「クシャルダオラか…」
竜車に揺られ遠ざかるドンドルマの街を見ながら、ジュンキは小さく呟いた。
「自信ないのか？」
ショウヘイの問いかけに、ジュンキは小さく笑って竜車の中を振り返る。ユウキは弾薬の調合をしていて、カズキは鼾をかいて寝ている。ショウヘイは荷台の壁に寄りかかって、こちらを見ていた。
「自信か…。初めての相手だから、どうしても出てこないよ」
「俺も同じさ」
ジュンキはショウヘイと向き合うようにして座り、壁に背中を預けた。ユウキは弾薬の調合をしているのもあるだろうが、今は聞きに徹するようだ。
「今更言うのも何だが、久しぶりだな」
そう言って、ショウヘイが話を切り出した。ショウヘイは無口なわけではないのだが、口数は少ない。話しかけられてジュンキは少し驚いた。
「ああ。と言っても、半年くらいだろ？」
「まあそうだな。でも、どうした？手紙もよこさないで急に来るなんて…」
「話すと長いぞ？」
「狩りの目的地である密林に着くまで2、3日かかるんだ。別にいいさ」
「…実はな、俺は狙われているんだ」
ショウヘイの眉間に皺が寄る。
「どうして？ハンターとしての掟を破ったわけではないんだろ？」
「勿論。シュレイド王国からだよ」
「シュレイド王国から？一体どうして？」

「俺にも分からないよ。ベッキーの提案でミナガルデを離れて、ドンドルマに逃げてきたのさ」
「なるほど。そういうことか」
「そういうこと」
ふと、遠ざかるドンドルマを見ようとしてジュンキは竜車の外を見たが、既にドンドルマは山陰に入っていて見えなかった。
「それでも、俺は嬉しいぞ」
「ショウヘイ？」
変なことを言うなと思いながら視線をショウヘイに戻すと、ショウヘイは小さく笑っていた。
「また一緒に狩りが出来るんだからな」
「ああ、そうだな」
ジュンキの言葉を最後に、二人は笑った。
「俺を忘れるなよ？」
「ん、勿論」
竜車の奥から聞こえたユウキの声に、ジュンキは答えた。ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ。この三人は古くからの付き合いだった。
「どれくらい腕を上げたのか楽しみだな」
「こっちこそさ。知らない間に新しい装備を新調して」
ジュンキが言い返すと、ショウヘイは小さく笑った。
「太刀はドンドルマに来てから知って、いまじゃ一番の武器さ」
「その防具は？」
「これか…。あんまり言いたくないんだけど…これは黒龍の防具だ」
「黒龍…？」
「ああ。伝説とされていたが、ひと月前に旧シュレイド城に現れてな。その時に参加して、ついでに作っておいたんだ」
「倒したのか！？」
「いいや、追い返しただけさ」
「それだけで防具一式作れたのか？」
「他のハンターに拾われる前に、ちゃっかり鱗や剥がした甲殻を拾

っておいたのさ」
「ちゃっかりしてるな」
ジュンキがそう言うと、ショウヘイは小さく笑った。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　０９（後書き）

今回は短かかったですね…。次話もよろしくお願いします。

MH1st　第1章　運命の再会　10

「密林」は大きな湖に囲まれていて、陸路では辿り着けない。竜車を近くの村で降り、船で密林のベースキャンプに着いた時には既に二日と半日が過ぎていて、夜の狩り場となっていた。

「雨か…」

船から降りて、ジュンキにとって最初の言葉になった。雨が降り注ぎ、防具の中の、暖かい気候に慣れていない火照った体を直接冷やす。

「どうした?」

ショウヘイが隣にやってきて、不思議そうな顔をする。

「ん、いや、ドンドルマの俺の部屋付きアイルーが、クシャルダオラは天候を自由に操り、戦闘中はさらに荒れるって言ってたからさ…」

「そうか…」

「お〜い、手伝えよ〜!」

「ああ、悪い!」

カズキが呼んだので、ジュンキとショウヘイは急いで船に戻った。

準備を終え、ベースキャンプを出た4人はひとまず小高い山を挟んだ反対側を目指すことにした。地図上でエリア4とだけ記された浜辺を北上する。

「そういや〜ジュンキとユウキは密林は初めてか?」

「ああ、初めてだよ」

「船でベースキャンプに入るんだな〜。俺感動!」

ユウキのオーバーなリアクションに、カズキは嬉しそうに高笑いした。

「なあ…変だと思わないか?」

「ああ…」

「ん？」
「どした？」
ふとジュンキが声を上げたので、ショウヘイ、ユウキ、カズキが振り返った。
「小型モンスター…そう、ランポスとか、ランゴスタとかがいない…」
「そりゃあクシャルダオラが来てるんだから逃げ出すよな～」
「そっか…」
カズキの答えを聞いて、ジュンキは改めてクシャルダオラという古龍の強さを感じた。雨がさらに強くなる。
「近いか…？」
先頭を歩いていたカズキの歩みが止まる。目の前には隣の浜辺へ繋がる小さな洞窟が口を開けていて、強い風が吹き出ていた。
「いるな…」
カズキの表情はディアブロヘルムで包まれているので見えないが、声で顔が引き締まってるのが分かる。
「行くぞ」
カズキはそう言い、４人同時に洞窟をくぐり抜けた。

雨。風。その中に、圧倒的な存在感を放つ龍。クシャルダオラは静かに佇み、ジュンキ達がこのエリアに入ってくるのを座して見ていた。
「余裕たっぷりだな」
ユウキの一言が開戦の合図になる。クシャルダオラは天高く咆哮すると、一気に駆け出した。４人はバラバラに避ける。振り向き様に、ユウキがペイント弾をクシャルダオラに撃ち込んだ。それは背中で弾け、辺りに独特の臭気が漂い始めた。
「はあああああッ！」
手始めにジュンキがアッパーブレイズでクシャルダオラの脇腹を大上段から斬りつける。しかし、アッパーブレイズは固い金属音を立

てて弾かれた。
「くッ…！」
突然突風が吹いたと思うと、ジュンキは思わず尻餅をついた。そこへクシャルダオラがブレスを吐こうとしたので、ジュンキは慌ててその場を離れる。クシャルダオラはブレスを吐いたような動作をしたが、何も見えない。しかしクシャルダオラの目の前に生えていた木々は吹き飛び、宙を舞う。
「風だ！風のブレスだ！」
ショウヘイの声が響く。
「おりゃあああああ！」
カズキがブロスホーンで突くが、これも弾かれる。
「硬い鱗だっ…！」
ユウキもクロオビボウガンの放つ弾に手応えを感じていない。
「閃光玉っ！」
ショウヘイの声で、全員が目を閉じる。次の瞬間に眩い光が弾ける。目を開けた4人が見たもの、それは視力を一時的に失い、混乱しているクシャルダオラの姿だった。
「はあああああッ！」
「やあああああッ！」
「りゃあああああッ！」
ジュンキ、ショウヘイ、カズキが三方向同時に攻撃するが、どれもクシャルダオラの硬い鱗に阻まれてしまう。ここでクシャルダオラの視力が戻ったが、気づけたのは遠くから狙撃するユウキだけだった。
「まずいっ…！」
クシャルダオラは後ろ脚二本で立ち上がるようにして天高く咆哮した。
「なっ…！」
「くっ…！」
「くそっ！」

ジュンキ、ショウヘイ、カズキの三人は反射的にその場で両耳を塞ぎ、その場から動けなくなる。クシャルダオラが着地すると同時に突風が吹き荒れ、3人は吹き飛ばされてしまった。その隙にクシャルダオラは飛び上がり、このエリアから遠ざかっていってしまった。

「なんて奴だ…」

ユウキが舌打ちしながら飛び去るクシャルダオラの背を睨む。

「とんでもない奴だな」

ショウヘイがやれやれと首を振りながら戻ってくる。その後ろには同じような状態のジュンキとカズキもいた。

「ひとまずキャンプに戻ろうぜ」

カズキの提案に従い、一度ベースキャンプに戻ることになった。

「さて、これからどうするか…」

何かと空気が重い中、カズキはようやく口を開いた。

「まあ誰も怪我を負ってないだけ良かったじゃないか」

ユウキの言葉に、ジュンキとショウヘイもぎこちない笑みを浮かべる。

「奴はどうやら風を操ってるみたいだな」

「ああ、クシャルダオラのブレスで木が吹き飛んだのを見た」

「俺は尻餅をついたよ」

ジュンキはやれやれと右手を振る。

「…依頼書には討伐とは書かれていない。撃退だ」

「撃退…」

「そう。倒さなくてもいいから、追い払えってことだ」

「…もう一頑張りしてみるか」

「ああ、勿論だ！」

ショウヘイの提案に、ユウキは拳を固めて応えた。

「ジュンキもいいよな？」

「勿論」

ジュンキはしっかりと頷いた。

クシャルダオラに付着しているペイントの実の臭いを辿って再びエリア４に入ると、クシャルダオラはベースキャンプ側を向いたまま静かに佇んでいた。

「待っててくれたのかな…？」

ユウキの引きつった声が聞こえる。

「さあな…俺には古龍の考えることは分からん…」

カズキもこれには驚いていた。

「みんな、無理は絶対にするなよ。危なくなったらすぐにキャンプに逃げ込め。いいな？」

ジュンキがそう言うと、他の３人は黙って小さく頷いた。それを合図に、クシャルダオラが天高く咆哮する。第二回戦の始まりだった。クシャルダオラは四本の脚で駆け、一気に距離を詰める。４人はすぐに回避したが、ジュンキだけは着地場所を誤り、巨大な湖の中へと落ちた。

「ジュンキっ！？」

ユウキは思わず叫んだが、激しい雨脚に掻き消されてしまう。

「はあああああッ！」

ショウヘイが斬りかかる。ショウヘイの武器、斬破刀は雷属性を有しているが、クシャルダオラは気にする様子がない。そのクシャルダオラが右前脚でショウヘイに殴りかかる。だがショウヘイはそれを紙一重でかわすと、再び斬りつけた。

「おりゃあああああッ！」

カズキがクシャルダオラの背後からブロスホーンで突くが、やはり貫通しない。クシャルダオラはカズキの存在に気づき、長くて強靭な尾を振り回す。カズキはそれをブロスホーンの盾で防いだ。

「貫通弾はどうかな…」

ユウキは離れた場所から貫通弾を撃つことにした。弾を装填し、撃つ。

「おっ…」

発射された貫通弾は確かにクシャルダオラの翼を貫いた。
「やっぱり生物だもんな。そうこなくっちゃ」
ユウキは口元が緩むのを感じながらスコープを覗いた。

「ぷはっ…！」
ジュンキはようやく湖面から顔を出した。この湖はすぐ深くなっていたようで、上がってくるのに時間がかかってしまったのだ。おまけに武器や防具を装備したままなので、泳いだというよりは湖底を歩く羽目になった。
「死ぬかと思った…げほっ…」
急いで陸に上がると、場所を確認した。そこはクシャルダオラの背後で、距離もある。
「…試してみるか」
ジュンキは一人呟くとアイテムポーチからシビレ罠を取り出し、ある程度クシャルダオラに近寄って設置した。
「食らえやっ！」
カズキが応戦してくれているお陰でジュンキは難なく罠の設置を終える。
「よし…」
ジュンキは急いでクシャルダオラと距離をとると、シビレ罠と一緒に持ってきた角笛を吹いた。クシャルダオラがこちらを振り向く。
「ジュンキ…！」
「そうか、罠か！」
クシャルダオラはジュンキ目掛けて一直線に走る。そしてそのまま、シビレ罠を踏んだ。
「よし…なっ！？」
確かにシビレ罠をクシャルダオラは踏んだ。しかし重量に耐えられなかったのか、シビレ罠は破裂してしまい効果は無かった。
「くそおおおおッ！」
この距離では避けられない。例え避けても運良くて吹き飛ばされ、

最悪踏み潰されるだろう。ジュンキは一瞬でそう判断すると、背中の大剣アッパーブレイズを抜き、クシャルダオラ目掛けて走りだした。

「やあああ！！！」

タイミングを合わせて振り下ろす。ジュンキの振り下ろしたアッパーブレイズはクシャルダオラの頭部を捉える。――何かが折れた感覚がした。だが次の瞬間にはクシャルダオラの頭がレウスメイルごとジュンキの腹にめり込んでいた。

「がは…ッ！」

衝撃でレウスヘルムが吹き飛び、ジュンキの口から唾液が飛び出す。ジュンキの体は吹き飛び、何度も地面を転がりようやく止まる。クシャルダオラの悲痛な咆哮が響き、ジュンキの目前に小さな角が落ちた。クシャルダオラの角が折れたのだ。

「う…あ…ッ！」

ジュンキは堪らず嘔吐する。だがクシャルダオラは追撃せず、悔しそうに叫びながらエリアを飛び去っていった。雨脚が弱まり、風も止んでいく。

「どうやら、何とかなったみたいだな」

遠ざかるクシャルダオラを見ながら、カズキが言った。

「ほら」

ジュンキの目に前にレウスヘルムが置かれる。一瞬視界に入った黒い腕防具は、ショウヘイだ。

「無様だな？」

「ほっとけ…」

ジュンキはゆっくりと立ち上がると、レウスシリーズに付着した浜辺の砂を払い落とした。

「さあ～て、街に戻ったら祝杯だ～♪」

ユウキの言葉に、ようやく実感が湧いてきた。俺達は、クシャルダオラを撃退出来たのだということに――。

MH1st　第1章　運命の再会　11

ドンドルマの街に戻ったのはそれから数日経った日の夜だったが、大衆酒場に入ると文字通り祝杯ムードになった。ドンドルマの街の危機は未然に防がれたのだ。ハンター、街人問わず、大衆酒場は徐々に盛り上がっていく。その雰囲気を感じ取ったのか、チヅルも大衆酒場へとやってきた。

「お帰り！どうだったの？クシャルダオラは」

「お～お～、凄かったぜ。何と風を操る――」

相変わらずカズキやチヅルは元気だったが、ジュンキとしては今はゆっくりしたかった。

「しかし、シビレ罠は効かなかったな」

ショウヘイとなら静かに話せそうなので、ジュンキはこちらに集中することにする。反省会だ。

「ああ。お陰で吐く羽目になったよ」

ジュンキに言葉に、ショウヘイは小さく笑う。

「しばらくは休みたいな…」

「ああ。だけどチヅルが許してくれるかな？」

「それなら大丈夫だと思う。俺達がクシャルダオラ撃退に密林へ行っていた時に、チヅルは1人で火山へ鉱石採掘しに行っていたみたいだからな」

「そっか」

ジュンキはそう言って口に水を運び、そして横目で仲間の様子を伺う。こちらは静かに夕食をとっているが、ユウキは酒が入り始めているし、カズキとチヅルは盛り上がっている。

「俺としては、もう寝たいよ」

「同感」

今夜は各自解散。そういうことにして、ジュンキとショウヘイは大衆酒場を後にした。

ショウヘイとはマイハウスの前で別れると、ジュンキは自室に入った。
「お帰りなさいだニャ。ご主人」
「ご主人ね…」
この部屋付きアイルー。先日マタタビを与えたら大いに喜び、それからというもの、ご主人、と呼ばれている。だがジュンキとしてはどうにも慣れない呼ばれ方だった。自分は貴族でも何でも無く、ただのハンターなのだから。
「今日はもう寝るよ。疲れたし…」
ジュンキはそう言いながらレウスヘルムを机の上に置き、大剣アッパーブレイズを壁に立てかけると装備を解き始めた。
「クシャルダオラはどうだったかニャ？」
「撃退」
「流石だニャ！ボクも誇らしいニャ！」
「それじゃ、寝るね」
「はいはいニャ～」
ジュンキは疲れた笑顔でそう言うと、部屋付きアイルーは専用の扉をくぐって奥へと消えていった。
「ふう…」
ベッドに入ると、すぐに睡魔が襲いかかってきた。

翌朝、大衆酒場に朝食をとりに行くと、既に他のメンバーは揃っていて思い思いのことをしていた。ジュンキも朝食を済ませると、他の４人を呼んだ。
「ひとつ提案があるんだけど」
「何？」
「少し休みを入れないか？」
「休みか…」
ジュンキとショウヘイ以外の３人が高い天井を仰ぐ。

「パーティ行動してると、どうしても個人でやりたいことが出来なくなるものだろう？」
「そうだな…俺も武器を強化するための素材が足りないしな」
とショウヘイが言った。
「私、そろそろ新しい装備を新調したいな～って思ってたんだ」
とチヅル。カズキやユウキも何か考えているようだ。
「決まりだな。さて、期間は？」
「七日は？」
「そうだな…そうしようか」
ユウキの提案を受け入れる。
「それじゃあ、一時解散」
こうしてジュンキ達５人は七日間、思い思いの時間を過ごすことになった。

「ユーリ」
「は～い♪丁度いいところに来たね」
「？」
ジュンキはその後、とりあえず大衆酒場のカウンターで何か情報がないか探るつもりだったが、どうやらユーリの方が何か用事があるらしい。
「はいこれ。お手紙ですよ～」
「手紙？誰から？」
「ベッキー先輩です♪」
「ベッキーから？」
ユーリから手渡された封筒。これはハンターズギルドが正式採用している封筒だった。早速中身を見る。
ちょっとお願いがあるの――――ベッキー
「それだけですか？」

ユーリがつまらなそうに言う。
「俺がベッキーに会いに行くしかないようだな。ありがとう」
「どういたしまして」
ジュンキはユーリに礼を言うと、準備の為に一度マイハウスへ戻ることにした。街中で暇そうにしているチヅルやユウキとかを見かけたら声を掛けようかと思ったが、この時は誰とも会わなかった。

マイハウスに戻ると、ジュンキはレウスシリーズを着込み始めた。
「ニャニャ？また狩りかニャ？」
「いや、違うよ。出掛けるだけさ」
「そうですかニャ」
ハンターに私服は少ない。無いと言っても過言では無いだろう。ハンターは防具が私服のようなものだからだ。それに常に防具姿ならばハンターだと周囲の人に理解されるし、防具にはそれぞれモンスターの素材が使われているので自分の技量を見せる意味もある。また、高価な装備の盗難を防ぐ意味合いもあった。ジュンキは普段の狩りと同様に薄茶色の髪を黒いバンダナでまとめると背中に大剣アッパーブレイズを背負い、机の上のレウスメイルを手に取るとマイハウスを後にした。

「やっと着いた…」
ミナガルデの街に着いたのは、ドンドルマの街を出てから3日後だった。再びドンドルマの街の大衆酒場に集合するまでにあと4日しかない。日程はぎりぎりだった。
「ベッキーの用事、厄介事じゃなければいいんだけど」
一人愚痴を漏らしながら竜車を降りる。そのまま酒場へと向かうことにした。
「何も変わってないな…」
少し前までこの街を拠点に狩猟生活を送ってきたのだが、街は何一つ変わっていなかった。それは酒場も同じで、カウンターではベッ

キーがこちらに向かって笑顔で手を振っていた。
「ベッキー」
「久しぶり、じゃないわね」
「ああ、そうだな。…本題に入るけど、お願いって何？」
ジュンキがベッキーに問うと、ベッキーは再び笑顔になった。
「実はジュンキに預けたい子がいるのよ」
「…え？」
ジュンキの思考が固まる。預けたい子とはやはりハンターだろうか。
ベッキーの説明が続く。
「ついこの前この街に来たハンターで、まだパーティを組んでないのよ。そこでジュンキにお願いしたくって…」
「ああ、いいよ」
「いいの？ただでさえジュンキ君のパーティは人数が多いのに」
「大丈夫だって。それより、そのハンターの名前を教えて欲しいんだけど…」
「ええ、名前は――」

「しっ！師匠っ！？」

突然右から大声で叫ばれたので、ジュンキは驚いて振り向いた。そこには目を見開いてこちらを指差している女性ハンターがいた。
「…あれ？違う…？」
そのハンターはジュンキの目の前まで近づいてくるとジュンキの体を調べ始めた。
「ちょ…」
「やっぱり違う…。師匠は双剣のはずだし、防具も似てるけど違う…」
どうやら人違いみたいだ。そしてそのハンターはジュンキの目の前でひどく落ち込んでしまう。
「来たのね、クレハちゃん」

「ベッキー…」
「人違いだったのなら、謝らないといけないんじゃない？」
「あ…」
クレハ、と呼ばれたハンターは一歩下がって頭を下げた。
「ごめんなさい、人、間違えました…」
「ああ、いいよ…」
ジュンキも悪そうに手を振る。
「ジュンキ君、丁度よかったわ。彼女があなたにお願いしたいハンター、クレハちゃんよ」
ベッキーの言葉を聞いてジュンキとクレハは驚き、お互いの顔を見合わせた。
「さ、自己紹介自己紹介」
「うん。え～っと、私はクレハっていいます。よろしく！」
クレハはそう言って右手を差し出した。武器は双剣のツインハイフレイムだろう。防具は雌火竜リオレイアの素材を生かしたレイアシリーズで、頭の先から足の先まで固めている。青い瞳はクレハの明るく元気な性格を表しているかのようによく動き、同じく青色のストレートヘアーは半分レイアヘルムに覆われているもののとても長い。
「俺はジュンキ。よろしく」
ジュンキはクレハの手を握り返す。
「でも…」
ベッキーが声を漏らしたので、ジュンキとクレハはベッキーを振り向く。
「こうやって見ると、ジュンキ君とクレハちゃん、まるで夫婦みたいね」
「！？」
ジュンキとクレハの青い瞳が見開かれ、互いに顔が赤くなる。
「ベッキー！！！」
ジュンキとクレハが声を合わせて反論する。ベッキーはジュンキと

クレハの防具を見てそう言ったのだろう。ジュンキの防具は雄火竜リオレウスから作られたレウスシリーズ。クレハの防具は雌火竜リオレイアから作られたレイアシリーズだからだ。リオレウスとリオレイアは夫婦の象徴とされ、ハンター達にも広く知られている。

「冗談よ。そんなに顔を赤くしないで？」

ふとジュンキとクレハの目が合う。二人はさらに赤くなった。このままでは冷やかされたまま終わってしまうと思ったジュンキは慌てて話題を切り替える。

「と、ところでクレハ…」

「な、何…？」

お互い声が上ずっている。

「その…俺のパーティはミナガルデじゃなくて、ドンドルマを拠点に活動しているんだけど…大丈夫か…？」

「うん…大丈夫…。この前この街に着いたばかりだから、荷物もあまり広げてないし…」

「よ…よし…。今日中にミナガルデを出るから…準備が出来たら…竜車乗り場で…」

「分かったよ…」

会話が終わると、ジュンキとクレハはそそくさと酒場を出ていってしまった。

「けっこうお似合いだと思うんだけどな～。しかし若いわね～、ジュンキ君とクレハちゃんも」

ベッキーは一人自嘲気味に呟いた。

荷物を持ったクレハが竜車乗り場に現れるまでそう時間はかからなかった。

「待たせた？」

「いや、そんなに待ってないよ」

荷物と一緒に竜車の荷台に乗り込む。それと同時に、竜車はドンドルマの街を目指してミナガルデの街を出発した。

「ジュンキって何歳なの？」
もうミナガルデの街が見えなくなった頃に、クレハが口を開いた。
「十八歳だけど」
「十八歳！？十八歳でリオレウスを倒せたの！？」
クレハは驚きを隠さなかった。リオレウスといえば「天空の王者」の名で知られた飛竜だ。手馴れのハンターが四人掛かりでようやくフェアな戦いになる、そんな相手だ。そのリオレウスから作られる武具を、目の前のジュンキというハンターは十八歳で装備しているのだ。
「もちろん俺一人の力じゃないよ。三人で狩りに行って、瀕死の状態でようやく狩った相手なんだ」
「ふ～ん…。でも、十八歳でしょ？すごいよ～」
「そういうクレハも、立派なレイアシリーズを揃えているじゃないか。クレハは何歳なんだ？」
「十七歳」
「じゅ…十七歳！？」
今度はジュンキが驚いた。リオレイアといえば「陸の女王」の名で知れた、リオレウスの番だ。手強さはリオレウスと同等と言って良い。目の前のクレハというハンターは、そのリオレイアを狩ったということになる。
「私も自分一人の力じゃないよ。師匠と一緒に狩りに行ったんだから」
ジュンキは納得したように頷く。
「ねえジュンキ」
「ん？」
「ジュンキはどうしてハンターになったの？」
クレハの質問に、ジュンキの青い瞳が遠くを見つめる。
「…生きるため、かな。ものごころ付いた頃にはもう両親は死んでたから」

「そっか…」
「…クレハは？」
「私？そうだなぁ…」
ジュンキの質問に、今度はクレハの青い瞳が遠くを見つめる。
「…やっぱり生きるためだった思う。私も、もう両親、いないから…」
「そっか…」
しばしの沈黙。
「…ねえ、ジュンキ」
「ん？」
再びクレハに呼ばれたので姿勢を戻すと、クレハの顔がほんのり赤く染まっていることに気がついた。
「さっきの…酒場でベッキーが言ったこと…」
「え…あっ、それは…」
ジュンキの顔も赤くなる。
「…」
「…」
互いに目を合わせられない。かなり時間がかかって、ようやくクレハの口が開いた。
「…これから…よろしくね…ハンターとして…さ…」
「ああ…よろしく…」
この後、二人はこの日の夕食までまともに口がきけなかった。

「おっきい街～！」
ドンドルマに入ったクレハの第一声である。
「ミナガルデの何倍もおっきい！」
街の入口で竜車を降り、広場を横切って大衆酒場に入る。ミナガルデの街を出て四日。集合の日ではあるのだが、流石に今は早朝なので大衆酒場にはショウヘイ達の姿はなく、がらんとしていた。
「ユーリ」

「は～い」
大衆酒場は信じられないくらい静まり返っていて、普通の声量でも十分届いた。
「朝早いな」
「私は受付嬢ですからね…っと、新しい仲間？」
「ああ、紹介するよ。クレハだ」
「よろしく！」
「は～い。私はこの街に届くハンターへの依頼を管理しているユーリです。狩りに出る時は私に言って下さいね」
「早速だけど、クレハのハンター登録をお願いしたいんだ」
「分かりました。紹介状か何か持ってますか？」
「ベッキーから預かってる」
ジュンキはそう言うとクレハの紹介状をユーリに提出した。
「大丈夫ですよ。部屋は近いほうがいいですよね？部屋は開いていますから安心してね」
「ありがとう」
部屋の鍵を受け取ったクレハと共に、今はマイハウスへと向かうことにした。

このあと、ジュンキは街をもっと見て回りたいというクレハに日が暮れるまで振り回されることになる。遠くから紫色の防具に身を包んだ一人のハンターに見られていることに気が付かずに。

日が暮れると、ジュンキはクレハを連れて大衆酒場へ向かった。約束通り、ショウヘイ達も集まっている。
「みんないる？」
「ジュンキ、やっと来たか」
「おせ～ぞ～」
ショウヘイ、ユウキ、チヅル、カズキ――全員揃っている。
「悪かったな。…さてと、みんなに紹介したいハンターがいるんだ」

ジュンキはそう言って、後ろに付いて来ているクレハを紹介した。
これでこのパーティの人数は6人になった。ジュンキとクレハが席に着くと、親睦を深める意味合いも込めて夕食になった。クレハはジュンキの隣で久々のまともな夕食をガツガツ食べていたが、ここでふとジュンキは鋭い視線を感じた。
「…チヅル？」
チヅルの様子が外見と中身共に変わっている事にジュンキは今気が付いた。まず外見はいつもの桃色が可愛らしいクックシリーズではなく、深い紫色をした攻撃的な防具に変わっていた。
「ガルルガシリーズ。イャンガルルガのだよ」
と素っ気無く答えるチヅル。どうやらこの休みの間に揃えたようだ。
そう、中身の違い――――チヅルは不機嫌だった。
「…？」
思わずジュンキも言葉を失う。ジュンキはしばらくチヅルの顔色をうかがうことにしたが、チヅルがディアブロスの如く睨み返してきたのでジュンキは夕食に顔を落とした。
（…なるほどね）
ジュンキとチヅルのやりとりを見て、クレハは何となくこの二人の関係を察知した。どうやら自分がやって来たことに対してチヅルは外見は怒っているが内面は相当焦っているようだ。チヅルが焦る理由、それは一つしかない。それはこのジュンキという男が私、クレハという女を連れて来たことだ。
（…少し手伝ってあげよっかな）
クレハは誰にも気づかれないように小さく笑った。

夕食を済ませ、各々の自己紹介も終わると自然と解散の雰囲気になっていった。
「ジュンキの馬鹿…」
大衆酒場を後にしたチヅルの第一声だった。むしゃくしゃする。今ならディアブロスの如く咆哮を出せそうだ。しかも当の本人が気づ

いていないところがさらにムカつく。
「チヅルちゃん」
後ろから声をかけられ、チヅルは出来る限り平静を装って振り向いた。その声の主が、クレハであったとしても。
「何？クレハちゃん…」
「ちょっと散歩しない？」
「…分かった。いいよ」
出来れば断って今すぐマイハウスに戻り部屋付きアイルーに愚痴をこぼしたかったが、初対面の日に関係を悪化させるのはまずいので承諾した。広場を横切るように、街の入口へと向かう。
（レイアシリーズかぁ…かなりの実力者なんだろうなぁ…）
危なかった。もしこの自由時間の内にショウヘイやユウキ、カズキと一緒にイャンガルルガを狩りに行ってこのガルルガシリーズを作っていなかったら、恐らくクレハに勝てなかっただろう――ハンターとしては。
（しかも私よりおっきい…）
――このままでは女としても負けそうだ。
「チヅルちゃん」
街の入口のすぐ横までやってきて、クレハは口を開いた。
「ジュンキのこと好きでしょ」
「…へ？」
一瞬思考が固まる。だがすぐに自分でも驚くくらい口が動いていた。
「私がジュンキを好き？まさかそんな、あんな脳天気でどん臭くて――」
「好きなんでしょ？」
「…うん」
クレハはしてやったりと言った顔で笑った。
「やっぱりね～。そうだと思ったよ。夕食の時に私とジュンキをチラチラ睨むんだもん」
「う～…」

「おまけに私がジュンキを連れ回していた時に後ろからつけてたでしょ？」
「ううー！」
バレバレだった。ジュンキは鈍いが、どうやらクレハはそうではないらしい。
「じゃあそういうクレハちゃんはどうなの！？ジュンキのこと好き？好きなんでしょ！？」
ここにきてチヅルは反論した。照れたりうろたえたりすることを望んだが、クレハは星空を仰ぎながら澄ました顔で言った。
「うーん。ハンターとしてはいいハンターだと思うよ。だけど一人の男としてはどうかなー？」
「あ…そう…」
チヅルが安心しきった顔を見せたので、クレハは笑顔で向き合った。
「だってまだ出会って数日だよ？」
「…そうだよね。ごめんね、変な勘違いしちゃって…」
「いいのいいの。片思い中の男がいきなり知らない女を連れてきたら誰でも焦るって」
クレハの言葉にチヅルは声を出さずに笑う。
「…これからよろしくね、クレハちゃん」
チヅルが右手を差し出す。
「よろしく。応援してるよ」
二人は固い握手を交わす。そのままお互いのマイハウスへと引き上げていった。

翌朝、大衆酒場にはいつもの6人が揃い朝食を食べていた。
「はーい、いい依頼が入ってますよー」
ユーリが近くを通った際に二枚の依頼書がテーブルに投げ込まれ、それをユウキとカズキがお互いに取る。
「えーっと、ドドブランゴだってさ」
「こっちはババコンガだ」

「…俺はドドブランゴだな」
「じゃ私も」
「私も～」
ジュンキがドドブランゴを選ぶと、チヅルとクレハが即答した。
「俺も付いていくかな」
とショウヘイも名乗りをあげる。
「俺は寒いのは嫌だな」
「俺も同じだ」
とユウキとカズキは気候的に温かい場所の依頼であるババコンガを選んだ。
「大丈夫？２人で…」
「大丈夫っ！ババコンガは何度も相手してきたしな！」
チヅルの心配そうな声に、カズキは親指を立てて答えた。
「ショウヘイはどうしてこっちに？」
「ん？まだジュンキの成長した腕前を見切れてないからな」
ジュンキの問いかけに、ショウヘイは涼しげに答えた。ジュンキ、ショウヘイ、チヅル、クレハが向かうのは雪山。ここドンドルマの街からはかなりの距離があるので、ジュンキはすぐ出発すると決めた。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　１１（後書き）

また長くなってしまいました。この文字数のバランスを何とかしたいものです…。

MH1st　第1章　運命の再会　12

辺り一面白銀の世界。それが雪山だ。見渡す限りの雪原。ジュンキ、ショウヘイ、チヅル、クレハ以外、何もいない。
「…ふう」
ジュンキはレウスヘルムの中でため息を吐いた。かなりの時間を歩いているが、一向にドドブランゴの気配がしない。ショウヘイやチヅル、いつも元気なクレハも今は黙々と歩いていた。
「あ～も～疲れた…。そろそろ休憩しない？」
ついにクレハがその場に座り込んでしまう。
「確かに、これじゃあドドブランゴに出会う前に全員が伸びちまうな」
ショウヘイもそう言って歩みを止める。
「私お腹すいた～」
「…そうだな。休憩するか。でも流石に雪原のど真ん中はまずくないか？」
「雪原のど真ん中だからこそどこからモンスターがやってきても気付けるよ？」
ジュンキはハンターとして当たり前のことを言ったつもりだったが、そこはクレハが押し切った。仕方無しにジュンキがコンパクトに折り畳んだ肉焼きセットを取り出し、チヅルから干し肉を受け取って焼き始める。
「ん～。いい匂い♪」
瞬く間に美味しそうな肉の匂いが辺りを包む。
「クレハ、ちょっといいか？」
「何？ショウヘイ」
「少し気になった事があるんだが…」
「…？」
ショウヘイの言葉に、クレハは首を傾げた。

「俺は主に太刀を使用しているからあまり大きなことは言えないけど…クレハの双剣の剣筋に違和感を感じてね。一般的な双剣の振り方じゃない気がするんだけど…我流か？」
「ううん、これは私が双剣を師匠から教えてもらったから変なクセがついちゃったんだと思う」
「師匠…？」
「あ、ショウヘイ達にはまだ話してなかったね。私には師匠って呼べる人がいるの」
「へぇ…師匠か。名前を聞いてもいいかな？」
「うん。ジークっていうの」
クレハの口から発せられた名前に、ショウヘイは目を見開いた。
「もしかして隻腕のハンターじゃ…？」
「ショウヘイも知ってるの！？」
今度はクレハが目を見開いた。
「ああ…黒龍戦の時の中心的ハンターだったよ。恐れを知らぬ英雄、とまで言われてたね」
「そっか…師匠、元気にしてるんだ…」
クレハは穏やかな笑みを浮かべると、ショウヘイに向き合った。
「…そろそろ肉が焼けると思うよ」

「焼けたぞ、チヅル」
「わ～い♪」
ジュンキがまずチヅルにこんがり焼けた美味しそうな肉を渡そうとしたその時、突然雪の大地が爆発して四人は散り散りに吹き飛ばされた。
「何だっ！？」
ショウヘイが即座に起き上がる。
「ドドブランゴ！」
雪の下から出てきたのはドドブランゴだった。
「あ～っ！」

そのドドブランゴは雪の上に落ちたこんがり肉を一口で食べる。それを見たチヅルはゆっくりと、新調したばかりの双剣テッセン「烏」を抜いた。
「私の…私の肉をおおおおおッ！！！」
チヅルは叫びながら双剣を頭上で交差させて鬼人化すると、ドドブランゴとの距離を一気に縮めて舞いはじめた。
「はあああああああああああッ！！！」
ジュンキやショウヘイ、クレハが戦闘配置につくまでに、雪の大地が赤い花を咲かせたような状態になる。
「チヅルっ！」
ショウヘイがチヅルを呼ぶと、チヅルはジュンキと交代するように入れ替わる。
「はあっ…はあっ…ふう～…」
チヅルは息絶え絶えだった。
「無茶はするなよ」
「分かってるよ～…」
ショウヘイはそう言い残し、急いでドドブランゴに向き直る。そこではジュンキとクレハがドドブランゴを挟み込むような形を取っていた。
「遅れた」
そう言ってショウヘイも加わり、三方向からドドブランゴを囲む形になる。三人とも集中を切らさない。ドドブランゴも動かない。ただチヅルが与えた傷が深いようで、ドドブランゴの脇腹からは真っ赤な血液が今も流れ出ている。この傷は放っておいたら失血死するだろうと思われるが、ハンター三人に囲まれていては迂闊に動けないのだろう。
「…どうする？」
「とりあえずペイントだ」
ショウヘイがアイテムポーチからペイントボールを取り出し、投げようと構える。

「え、何…？あれ…」
そんなチヅルの声がすると同時にドドブランゴも空を見上げ、ジュンキやショウヘイ、クレハも見上げる。そこには一匹の赤い飛竜がこちらに向かって飛んできているところだった。
「リオレウス！？」
クレハが真っ先に気づいた。
「雪山に？どうして？」
ショウヘイが呟くように言うと、そのリオレウスは空からブレスを吐いた。
「なっ！？」
「避けろっ！」
ジュンキ、ショウヘイ、クレハが飛ぶと同時に、ブレスはドドブランゴに直撃爆発した。

「…っ」
「大丈夫！？」
チヅルが駆け寄ってくると、ジュンキは手を借りて立ち上がる。
「ショウヘイやクレハは？」
「大丈夫だ」
「私も。だけど…」
そう言ってクレハは視線を遠くにやった。
「ドドブランゴはダメみたい…」
ジュンキがクレハの視線の先に目をやると、そこにはリオレウスのブレスで焼かれ死んだドドブランゴと、そのリオレウスがこちらを向いて佇んでいた。――ジュンキの脳裏に、二年前の出来事が蘇る。
「…まさか」
「…まさかってジュンキ、もしかして？」
ジュンキの呟きにショウヘイが反応したが、チヅルとクレハは未だに呆然としている。

「ああ…あいつかもしれない」
ジュンキが言い終わると同時に目の前のリオレウスは飛び上がり、南の方へと飛んで行ってしまった。辺りを静寂が包む。
「…とりあえず剥ぎ取る？」
クレハがドドブランゴを指差して言う。
「ああ、勿論。折角の命だからな」
ジュンキはそう言うと腰から剥ぎ取りナイフを抜き、ドドブランゴに近付く。ドドブランゴはブスブスと煙を上げていた。
「…使える素材があるかな？」
「さあな」
ジュンキがショウヘイに尋ねると、ショウヘイは俺に聞くなと言いたげに答えた。
「真っ黒焦げだね…」
「…はぁ」
「でも、これって依頼は達成出来たよね？」
「…そうだな。出来る限り剥ぎ取って、キャンプに戻ろう」
ジュンキが言い終わるなり、他の三人も剥ぎ取りナイフを抜いた。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　１２（後書き）

相変わらずモンスターとの戦いは短いですね…。モンスターとの戦いを期待して読んで頂いている方には申し訳ないです…。

MH1st　第1章　運命の再会　13

「へぇ～、珍しい事もあるんだな～」
「珍しい事で済まさないでよ～。私達のドドブランゴをリオレウスが持ってっちゃったんだよ～？」
雪山からドンドルマの街の大衆酒場に戻ると、テーブルには数日前にババコンガ狩りを終えたユウキとカズキが座っていた。今は太陽が真上にあるので昼食なのだろう。ジュンキやショウヘイも昼食を頼んだがジュンキだけ食が進んでいなかった。
「…？どうしたの？」
ジュンキの右隣に座ったクレハがジュンキの顔を覗く。
「ん？ああ、ちょっと考え事…」
「？…ジュンキらしくないよ」
クレハがそう言うと、ジュンキは小さく笑った。
「俺かって考える時は考えるさ」
「…あのリオレウスのこと？」
「…ああ」
「何かジュンキ関係があるの？」
「…昔ね。でも、あのリオレウスじゃないと思うよ。リオレウスって言ってもこの世界にはどれだけいるか分からないし」
「そだね～」
クレハはそう納得するとすぐ昼食に戻っていった。

夜になると、ジュンキは一人マイハウスのベッドの上で考え事をしていた。そう、先日雪山で会ったリオレウスのことについてだ。
「…あいつなのかな」
考えていても何も始まらない。そう思ったジュンキはベッドから起き上がり、装備を整え始める。あのリオレウスと戦い、負けたあの森と丘へ向かうのだ。そうすれば、何か分かるかもしれない。もし

かしたら、あの時のリオレウスが戻っているかもしれない。
「ニャニャ？こんな夜に狩りですかにゃ？」
「ん？ちょっとね」
ジュンキは部屋付きアイルーの声を後ろに、マイハウスを出た。早足に大衆酒場に入るとカウンターへ向かう。丁度今はユーリがいた。
「ジュンキどうしたの？こんな夜に」
「ああ、ちょっと森と丘に行きたいんだ。簡単な採取クエストってないか？」
「みんなに内緒で？」
「…すまない」
「待ってて。探してみる」
ユーリはそう言うと台帳を取り出し依頼書を探し出す。
「…特産キノコはどう？」
「それでいいよ。よろしく」
「気をつけて行ってきてね～」
そう言って、ユーリはジュンキを送り出した。
「さてと――わっ！」
顔を正面に戻すと、そこにはクレハの顔があったので驚いてしまった。
「ユーリ。ジュンキ、どこに行ったの？」
「さあね～。お客様のプレイバシーですから」
「ジュンキは黙っててって言ってなかったでしょ？」
「…それもそうね。でも詳しくは知らないんだよ？森と丘に行ったことぐらいしか」
「そっかぁ。でも付き合いの長いショウヘイなら分かるかもしれないから。ありがとう」
「ど～いたしまして」
クレハを見送りひと安心する。だがこのあと、クレハが他の４人を引き連れてカウンターへとやってくることをユーリはまだ知らない。

MH1st　第1章　運命の再会　14

晴れた空に浮かぶ淡い満月。今夜の森と丘はランポスの一匹もおらず、ランゴスタすら居ないので、辺りに響くのはレウスシリーズの擦れる音だけである。

「懐かしいな…」

森と丘、と一口に言ってもかなり広い。この前のリオソウル討伐の時に訪れた森と丘とは違う、ジュンキにとって思い入れのある場所だ。そう、2年前にあのリオレウスと戦い、負けた場所なのだ。

「どこに居るのかな…」

立ち止まる訳にもいかず、とりあえず歩みを進めるが、ジュンキはしっかりとこの狩場のことを憶えていた。

「確かこの先がエリア3…」

ジュンキとあのリオレウスが出会った場所。そこに、あのリオレウスはいた。リオレウスは星空を見上げ、黄昏れているようだった。ジュンキは一応警戒しながらもそのリオレウスに近づく。ある程度近寄ったところで、突然リオレウスが体を動かさず首だけをこちらに向けた。

「！」

右腕を背中のアッパーブレイズに持って行きそうになるのを意思で止める。するとリオレウスは再び元の体勢に戻り、星空を見上げた。ここでジュンキは気付く。このリオレウスからは敵意を感じないと。ジュンキは再びリオレウスに近付く。そしてリオレウスの横に着くと背中のアッパーブレイズを下ろし、ジュンキはそのまま座った。聞こえるのは風と虫の音。そして自分とリオレウスの呼吸する音。

「…二年ぶりだよな。よく他のハンターに狩られなかったよな」

「…」

リオレウスは答えない。

「…二年間、何してた？」

「…」

やはりリオレウスは答えない。当たり前だ。相手はリオレウスだ。自分は人間。人と竜では言葉なんて通じない。ジュンキはそう思うと何だか寂しくなり、隣のリオレウスと同じく夜空を見上げる。

「――別に。何も変わらない毎日だった」

「そっか……っ！」

突然夜の丘に響いた、低い男の声。ジュンキはつい返事をしてしまったが、慌てて振り返る。だが誰もいない。

「誰だ！」

声を出してみるが、人の姿は見えない。

「誰だ、か」

「！」

再び聞こえた声。ジュンキは来た道の方を振り返る。やはり誰もいない。

「どこにいる！隠れてないで出て来い！」

「隠れてなどいないぞ。ぬしの隣にいるではないか」

今度はリオレウスの方を振り向く。だがやはり誰もいない。いるのはリオレウスだけ。リオレウス――。

「…まさか、お前…」

ジュンキが驚きの青い瞳でリオレウスの顔を見ると、リオレウスも蒼い瞳で見返してきた。そして、リオレウスの口が開く――。

「儂が話している」

「リオレウスが喋ってる…」

「リオレウスが話してはまずいか？」

何故？どうして？ジュンキは混乱を通り越して逆に冷静になってしまった。とりあえず――。

「…夢じゃないよな？イテテ」

ジュンキは信じられず、自分の頬をつねる。

「…噛み付いてやろうか？」

「遠慮しとくよ」

相手はリオレウス、噛み付かれただけでも大怪我だ。しばらくの沈黙の後、ジュンキはゆっくり口を開いた。
「え～っと…お前は人の言葉を話せるリオレウスなのか？」
「違うな。儂が話しているのは竜の言葉。人の言葉ではない」
「じゃあどうして――」
「ぬしが儂の言葉を理解しているのだよ」
「…え？」
「分からんか？ぬしは今竜の言葉で話し、竜の言葉を聞き取れている」
「…仮にそうだとして、何故？」
「話せば長くなるぞ」
「夜は長いから」
ジュンキの言葉を最後に、話が通じるリオレウスは星空を仰いだ。

昔。と言っても数百年も前の話になる。
まだハンターと呼ばれる人種が確立される前の話だ。
奇跡だった。
有り得なかった。
だが起きたのは事実。
一匹の雄と一人の女が種族を超えた恋に落ちたそうだ。
なっ…！
驚くのも無理はない。儂かて未だに信じられぬ。だが事実だ。
話を続けると、その雄と女の間に子が生まれた。
姿は人間を基としていたが、体表は鱗で覆われ、瞳孔は縦に割れ、耳は長く、背中からは翼が生えていたと聞く。
…。
竜と人との中間的存在。人はそれを竜人と呼んだ。
竜人…？今も俺達人間と共に生きている竜人族のことか？
それは祖先が違う。あくまで竜人だ。竜人族のことではない。
…さて、その竜人は竜の力性と人の知性を受け継いでいた。

それと同時に、竜と人、両方の言葉も話すことが出来た。
竜と人は竜人を長年争ってきた二種族間の和平の象徴とし、竜と人はこれから先互いに傷つけ合うこと無く共存出来るものと思った。
竜人も数を増やし、竜人の集落も出来た。
だが、平和は長く続かなかった。
動いたのは人だった。
…。
人間は国というものを作り、お互いに殺しあっている。
竜人の力性は魅力的だったのだろう。
竜人の多くは連行され、抵抗した者は殺されたと聞く。
…。
だが偶然にも集落を離れていた者、身を隠して見つからなかった者もいた。
その竜人達は人の社会へと徐々に溶け込んでいった。
その間に竜の血は薄まり、数百年の内にとうとう竜人と人の区別がつかなくなった。
儂が何が言いたいか、もう分かったな?

「まさか…俺が…」
「そう、おぬしは竜人…いや、竜人の末裔と言ったところだな」
「俺が…竜人の生き残り…?」
ジュンキは思わず自分の腕を見た。レウスアームで包まれているので素肌は見えないが、そこには脆弱な皮膚がある。とてもじゃないが鱗は生えていない。
「さっきも言ったが、ぬしの中を流れる竜の血は数百年の時を経てかなり薄まっている」
「…じゃあどうして俺がお前と話せているんだ?もう俺は人間なのに…」
「儂も詳しくは分からんが、ぬしの中の竜が目覚めようとしているのかもしれんな」

「…どうして」
「分からん。だが、一つ心当たりがある」
「…？」
ジュンキはリオレウスの蒼い瞳を見る。リオレウスが見つめ返した。
「竜人は、世界の均衡を保つ存在、と」
「え…つまり？」
「この世界の均衡が危うくなると、竜人が現れる、ということかな」
「…」
信じられなかった。だが現に、ジュンキは目の前のリオレウスと会話をしている。ここで会話が途切れてしまうが、ジュンキは此処へ来た本当の目的を思い出す。
「なあ…」
「何だ？」
「二年前のこと、覚えているか？」
「ああ、覚えている」
「二年前に俺を殺さなかったのは、俺が竜人の末裔だと気がついたからか？」
リオレウスはゆっくりと口を開く。
「そうだ」
「そっか…だからか…」
ジュンキはフゥと息を吐いた。
「この際だからさ」
「？」
リオレウスがこちらを見る。
「もう一度、俺と戦ってくれないか？」
「…」
「…やっぱり竜人は大切か？」
「いや、分かった。いいだろう。手加減してやる。今すぐか？」
「明日の昼に、この場所でいいか？」
「分かった。この場所で待っている。ぬしが二年間でどれだけハン

ターとして成長したか、判断してやろう」
「態度デカイな、お前…」
ジュンキの言葉にリオレウスは返事を返さず、星空を見上げた。
「じゃ、また明日」
ジュンキはそう言うと、ベースキャンプに戻るために来た道を戻り始めた。もうすぐこのエリアを出る所まで来て、ジュンキは振り返る。あのリオレウスはまだ空を見上げていた。再び歩き出す。今夜は静かだった。

ベースキャンプと言っても今回は採取クエストでここに来ている。よって支給品は少ないのだが、仮眠用のテントはちゃんと設置してあるので大丈夫だ。ジュンキは大剣を背中から外し内壁に立てかけると、簡易ベッドに横になった。ここは狩場なので不慮の事態に備え、レウスシリーズは解かない。ハンターならこれくらい慣れている。
「明日か…」
レウスメイルの上から二年前にあのリオレウスに付けられた胸の傷を撫でる。そのまま眠ってしまった。

翌日、ジュンキは装備を整えて再びエリア3に向かうと、あのリオレウスは約束通り待っていた。ジュンキの歩みが止まると同時に、リオレウスの口が開く。
「ぬしを殺したりはしない。安心するがいい」
「俺も、お前を殺したりはしない。ただそれだけで、俺は真剣だからな」
「儂に勝てるかな?」
「この装備なら、分かるだろ?」
ジュンキはそう言って、両腕を開いた。武器はリオレウスの爪を使用している大剣アッパーブレイズ。防具は頭の先から足の先までリオレウスの鱗や甲殻をふんだんに使用したレウスシリーズ。まさに

リオレウス一色だ。
「そこらのリオレウスと一緒にしないほうがいいぞ？」
「分かったよ。俺もハンターだ。狩りの最中は油断しない」
「ではいこうか」
「ああ！」
ジュンキはレウスヘルムの面頬を下ろす。それが合図となり、リオレウスがジュンキ目掛けて走り出す。ジュンキは慌てて避ける。
（速いっ！？）
リオレウスの突進は距離があればごく簡単に避けることが出来る。しかしこのリオレウスは桁違いな速さで突進してきたのだ。着地先でジュンキはリオレウスを確認して再び驚かされる。リオレウスのような巨体になると突進の勢いを殺せずに体勢を崩してしまう。ディアブロスのように脚の筋肉が発達していれば話は別だがこのリオレウスは見事に止まってみせたのだ。ジュンキが起き上がったその時には既にこちらへ向かって炎のブレスを吐き出していた。ジュンキはそれを背中の大剣アッパーブレイズで防ぐ。
「ぐっ…」
ブレスは大剣に直撃し、熱波がジュンキを通りすぎる。大剣を背中に戻そうとして、ジュンキは驚きのあまり一瞬止まってしまった。このリオレウス、なんとリオレイアのようにブレスを三発も放っていたのだ。しかもすべて直進で。ジュンキは慌てて大剣アッパーブレイズで防ごうとするが二発目のブレスはジュンキの目の前で爆発した。爆風で大剣アッパーブレイズが吹き飛ばされる。
「なっ！？」
思わずリオレウスから目を離し、宙を舞うアッパーブレイズを目で追う。熱いと感じた時には目の前に三発目のブレスが迫っていた。反射的に腕で防ぐ。ブレスはジュンキの腕に当たって爆発した。
「ぐッ！あああああああッ！！！」
爆発の勢いは全身を使って受け流すことに成功したが両腕が灼熱の炎に包まれる。火に耐性のあるレウスアームでなければ腕が焼け落

ちていたかもしれない。
「――――！」
ジュンキが顔を上げるのと、突進してきていたリオレウスの顔がレウスメイルごとジュンキの腹にめり込んだのは同時だった。それでもリオレウスは突進を止めず、この丘と森を隔てている岩壁に激突する。
「が――――ッ！！！」
レウスヘルムが吹き飛ぶ。あまりの衝撃に岩壁が砕け、ジュンキの体内から骨が軋み、砕ける音が響く。リオレウスが下がると、ジュンキは力なくその場に崩れた。
「ぐ…う…」
リオレウスは目の前にいるが、今すぐ攻撃を加えてくる気配はない。偶然にも、右に数歩のところに先程吹き飛ばされたアッパーブレイズが落ちている。ジュンキは腹の下に力を入れて立ち上がり、痛みを堪えて走り出す。当然リオレウスも動く。
（届け――――！）
目の前の大剣に右腕を伸ばす――――。しかし、寸前のところでリオレウスに左肩を噛まれて手が届かなくなる。
「ぐっ！？」
手を伸ばす。何とか柄に触れることが出来たが、それと同時にリオレウスが身を引き、ジュンキは大剣と遠ざけられてしまう。
「勝負あったかな？」
蒼い瞳に覗かれると、ジュンキは青い瞳で睨み返した。
「…まだ俺は諦めてないぞ」
「強気だな。まあいいだろう。力の差を教えてやるだけだ」
リオレウスはそう言うと、顎に力を入れ始めた。
「ぐうッ！」
左肩の骨のヒビが入っていくのが分かる。――――そしてついにジュンキの左肩がレウスメイルごと噛み潰された。
「ぐあああああああああッッッッ！！！！！」

真昼の丘に絶叫が響く。リオレウスの鋭利な牙が左肩に食い込み、鮮血が吹き出した。ジュンキは痛みを堪えて無事な右腕でリオレウスの鼻先を殴ると、流石にリオレウスも驚きジュンキの左肩から牙を抜いた。それと同時におびただしい量の血が流れ出る。

「ぐ…あぁ…ッ！」

左肩を砕かれた痛みに、ジュンキはその場にうずくまるしかなかった。そこにリオレウスが近寄ってジュンキを仰向けに倒し、その上に右脚を乗せる。

「ぐッ…！」

「その肩では大剣は握れまい。降参するか？」

「…誰が降参なんかするか」

「それが答えか」

リオレウスはそう言うと、今度は無事な右肩に体重を乗せてきた。今度は右肩の骨のヒビが入っていくのが分かる。

「あ…ああ…ッ！」

――右肩がレウスメイルごと踏み潰される。

「――――――ぁぁぁぁあああああああああああッッッッッ！！！！！」

再び絶叫。もう両腕は動かない。

「降参か？」

再びリオレウスの口が開く。だがこれにジュンキは涙目で睨み返した。

「往生際が悪いな」

リオレウスはそう言って、今度はジュンキの両脚に体重を乗せる。

「ッ！」

レウスフォールドが音を立てて砕け、レウスグリーヴが悲鳴を上げる。

「ぐう…ッ！」

リオレウスは一気に体重を乗せる。ジュンキの両腿は一気に砕けた。

「――――――――――ッ！！！」

声にならない悲鳴。
「降参しろ。儂も手加減はそこまで上手くない」
リオレウスからの幾度目かの警告。
「嫌だっ…。俺はっ…絶対にっ…諦めないっ…！」
「…仕方ないな」
リオレウスは半ば呆れ気味にそう言うと、文字通りジュンキを「握り締めた」。
「があああああああああッッッッ！！！！！」
ジュンキの防具、骨、――――心が砕ける。
「がは…ッ！」
真っ赤な血液が口から飛び出す。リオレウスはそれを見てジュンキの上から右脚を下ろし、ジュンキを覗く。
「どうだ？己の無力さを知っただろう？」
「俺の……負け、か……？」
「この戦いに勝負は関係なかろう。ぬしの気が済めばそれで良い」
「…」
「安心するがいい。ぬしはまだ死なん。ここで竜人の特徴をひとつ話しておこう」
「…」
「昨夜も話したが、竜人は人の知性と竜の力性を備えている。その竜の力性の他に、竜が持ち合わせている精神力、回復力も備えている。だからぬしはここまで叩きのめされ、ズタズタにされてもショックを起こさずに生きている。砕けた骨もいずれ治るだろう。…少し砕き過ぎたかもしれんがな」
「…手加減しろよ」
リオレウスは鼻で笑う。
「だがこれで儂も確信を得た。ぬしは現代に蘇りし竜人であると」
「…だったらもっと…丁重に…扱えっ…」
リオレウスは再び鼻で笑う。
「さて、儂はもう行くことにするよ。ぬしの仲間がそこにいるから

な。儂も狩られかねん。…この世界に、何か異変が起きた時に、また迎えに行く。それまでに早く怪我を治すことだな」
リオレウスはそう言い残し、飛び去っていった。遠くに複数の――ハンターの足音が聞こえる。
「…勝手なこと言いやがって…。俺が死んでも…知らないからな…」
ジュンキは一人呟くと、全身を襲う激しい痛みから開放されるように意識を手放した。

ＭＨ１ｓｔ　第１章　運命の再会　１４（後書き）

ついに人の言葉を話すリオレウスが登場しました。しかしリオレウスが人の言葉を話しているのではなくて、実はジュンキがリオレウスの言葉を理解していたのでした。お話はまだまだ続きますので、これからもよろしくお願いします。

ＭＨ１ｓｔ　第２章　竜人の足跡　０１（前書き）

第２章突入です！ここからはジュンキ達の過去の話に入ります。クレハ以外の五人がどのように集ったのかをお楽しみ下さい！

MH1st　第2章　竜人の足跡　01

窓からの日差しに、ジュンキは目を覚ました。視界一面に、古びた天井が広がる。

「…生きてる」

体を動かそうとしたら激痛が走ったので諦める。首だけを動かして部屋の中を見渡すと、ジュンキは驚いた。

「俺の家…？」

そう、自宅だった。つまりここはココット村ということになる。考えれば当然のことで、あのリオレウスと戦った森と丘はココット村の裏山みたいなものだ。重傷を負ったジュンキを運び込むと考えるならここしかない。

「…？」

呼吸する音が聞こえる。勿論自分ではない。視線を巡らせると、寝息の主はすぐ近くにいた。

「…チヅル」

そう、チヅルだった。背中を壁に預けて眠っている。そのチヅルの体が徐々に傾いていき――やがて倒れた。

「んあっ？…朝かぁ」

チヅルが眠たそうに起きる。大きな欠伸。装備からしてまるでイャンガルルガの欠伸だとジュンキは思った。

「チヅル…」

「…ジュンキ！？」

ジュンキがチヅルを呼ぶと、チヅルの眠気は一気に吹き飛んだようでジュンキの枕元に飛んできた。チヅルの黒い瞳は驚きに見開いていたが、すぐに優しい眼差しに変わった。

「良かった…もう死んじゃうかと思ったんだよ…？」

涙で目を潤わせながら震える声で言う。

「…どれくらい寝てた？」

「もう丸三日目だよ。死んじゃったみたいに動かないからほんと心配したんだよ？」
「ごめん、心配かけて。みんなは？」
「みんなは今頃、この村の集会場で朝御飯だと思うよ。呼んでくるっ」
チヅルはそう言うと、ジュンキの家を飛び出していった。その様子を見て、ジュンキは安堵する。
「…またショウヘイに殴られるかな」

チヅルに呼ばれたメンバー達はすぐにやって来た。みんな口々に安堵の声を漏らす。
「いや～しっかしよく生きてたな～。俺は死んじまうと思ったぞ」
と笑い飛ばすカズキ。
「出会っていきなり死なないでよかった～」
嬉しそうに言うクレハ。そんな中、ジュンキはゆっくりと口を開いた。
「ショウヘイ」
「ん？」
先程から、何も言わずにただ微笑んでいるだけのショウヘイを呼ぶ。
「…殴らないのか？」
「殴って欲しいか？」
「…遠慮したい」
「…ま、ジュンキにしてはジュンキらしくない行動だったな。今も昔も」
「昔はただ無謀なだけだったさ。…今もか？」
ジュンキが尋ねると、ショウヘイは呆れ気味に頷いた。この二人の会話で、他の４人の会話が止まる。
「ん？」
ジュンキとショウヘイが不思議そうな顔をすると、クレハの口が開いた。

「何？殴るって…」
クレハの言葉にジュンキとショウヘイとユウキが顔を見合わせ、互いに苦笑いした。
「あ～隠し事？」
「昔の話だよ。な？」
とユウキ。ジュンキとショウヘイは頷く。
「教えて欲しいな～」
とチヅル。カズキやクレハまでもが興味があるらしい。
「…昔話だぞ？」
ユウキがジュンキとショウヘイをひっぱる形で、三人の昔話が始まった。

「リオレウス！？リオレウスってあの…？」
「うむ、そうじゃ。あのリオレウスじゃ…」
ジュンキの青い瞳が見開き、この村の村長は難しい顔で答える。
「リオレウスを俺1人で倒せって！？」
「…すまぬ。緊急の依頼なんじゃ」
村長は頭を下げた。こんなことは初めてだ。
「わしが無理なお願いをしておるのも分かっておる。じゃが、今この村におるハンターはおぬしだけなんじゃ…」
そう言われて、ジュンキは辺りを見渡す。村人達が心配そうにこちらを見てはいるが、ハンターの姿はない。
「頼む…無理なら帰ってきてもよいのじゃ。狩りに出た、その記録だけでもいいんじゃ…」
「…分かったよ」
了解の意を伝えると、村長はようやく頭を上げた。
「すまぬ…」
「はい、契約金」

ジュンキは契約金を支払うと、この村の裏にある狩り場――森と丘へ向かった。

「よいしょ…」

キャンプに着くなり背中の大剣バスターブレイドを下ろし、納品ボックスに立て掛ける。支給品を確認するために、支給品ボックスを開いた。

「え…」

驚いた。応急薬や携帯食料等が普段の2倍入っていたのだ。村長のはからいだろう。

「村長…」

全部は持てないので、半分だけアイテムポーチに入れる。

「装備はと…」

全身をくまなく見る。体を守るランポスシリーズに、異常は見られなかった。

「…よし、行くか」

バスターブレイドを背負い直すと、ジュンキは一人ベースキャンプを出発した。

「…？」

すぐ異変に気がついた。いつもならのんびり若草を食んでいるアプトノス達が1匹もいないのだ。

「どうしたんだろう…」

ふと、歩みを止めて耳を澄ました。

「…静かだな」

今日の森はやけに静かだった。鳥の鳴き声が聞こえないのだ。不安でたまらなくなったが立ち止まり続けるのも仕方がないので、とりあえず奥へと進むことにした。小さな坂を上り、小高い丘に出る。いつもならランポス達が4～5匹くらいいたりするのだが、今日はランポスでさえ1匹もいなかった。

「やっぱりリオレウスに警戒してるのかな…」
不安と恐怖が膨らむばかりだった。
「本当に誰もいないみたいだ…」
ここにいても仕方がないので、隣の丘へ続く小道に入った。ランポス1匹通れない細い道を通り抜けると、開けた草原地帯に出た。
「！」
その草原のほぼ中央に、赤い巨体が立ち尽くしていた。そう、これが――
「空の王者、リオレウス…」
正直驚いた。ランポスとは比べ物にならないほど大きいとは聞いていたが、まさかここまでとは思わなかったのだ。そのリオレウスは今、こちらに尾を向けた状態で空を見上げていた。
「…？」
ちょっと意外なところもあった。空の王者と呼ばれているからには狂暴かと思っていたが、こんなにものどかな姿を見せているからだ。だが、今回の獲物もこのリオレウス…。覚悟を決めて、バスターブレイドの柄を右手で握った。ここからは狩りの時間だ。
「はあああああっ！」
リオレウスに気づかれる前に一気に駆け寄り、右脚を斬りつけようとした。したのだが…ジュンキの振るったバスターブレイドは鈍い音をたてて弾かれた。
「なっ！？」
リオレウスは奇襲に驚いたのか、巨大な尻尾を振り回してきた。それが大剣を弾かれた衝撃で隙だらけの腹に打ち込まれる。
「がはっ！？」
ジュンキの体が「く」の字に曲がって吹き飛ぶ。地面を二転三転し、ようやく止まる。
「ぐ…」
顔を上げると、リオレウスがこちらに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えた。ふらつく脚でゆっくり立ち上がると、再びリオレウ

ス目掛けて走り出した。
「やあああああっ！」
リオレウスが口を大きく開けて飲み込もうとしたところをすれすれで避け、リオレウスの腹の下に潜り込み、すれ違いにバスターブレイドで腹を切り裂いた。リオレウスの腹がバックリと裂け、真っ赤な血液が噴き出す。
「よしっ！」
リオレウスはゆっくりとこちらを振り向いたが、何も攻撃せずに飛び去っていった。
「え？ええっ！？」
これには本当に驚いた。飛竜が縄張りを侵した人間に対して何もせずに逃げていくなんて聞いたことがなかった。しかし…そのリオレウスは逃げ去っていったのだ。
「…意外と臆病なのかな…とにかく探さないと。どこ行ったんだろう…」
ジュンキはバスターソードを背中に戻すと、とりあえず北の森――地図上でエリア１０と書かれている場所へと行ってみることにした。
「ペイントするの忘れた…」

「痛っ…」
思わず顔をしかめる。先程のリオレウスの尻尾…相当応えたらしい。鈍い痛みが走る。
「早く終わらせないとな…！」
突然右側の草むらがガサッと動いたので、思わず身構えてしまう。
「ブヒ…」
「…モス」
モスと呼ばれる小型の豚だったので、思わず気が抜けてしまう。気を取り直して進むと、少し開けた場所に出た。隅には小さな池があり、近くに大きな足跡が見られた。

「ここにも来てるのか…」
一応辺りを見回してみるが、特におかしなものは見当たらなかった。
「…ここじゃないか」
ジュンキは小さなため息を吐くと、来た道を戻ることにした。この先は本当に狭い場所しかない。リオレウスが降りるのは無理だろう。

先程の草原地帯に戻ると、再びリオレウスが尾を向けて立っていた。アイテムポーチからペイントボールを取り出し、投げると同時に素早く背中のバスターブレイドに手を伸ばして走り出した。
「やあああああっ！」
目の前に降りている尻尾に向かって斬りかかる。だが目の前で尻尾は右に逃げた。ペイントボールも外れる。リオレウスが気付いたのだ。
「なっ！？」
勢いがありすぎたのが災いした。バスターブレイドが地面に突き刺さったのだ。リオレウスは尻尾を回した勢いで一回転し、そのままジュンキの左脇腹に直撃した。
「がッ！」
体が簡単に吹き飛び、近くの岩壁に激突した。衝撃で岩壁にヒビが入る。
「――――ッ！！！」
口から唾液が飛び出す。視界が少しずつ暗くなっていく中で、リオレウスが自分を覗き込んでいることだけが分かっていた。

「ん…」
気が付くと、目の前にはテントの天井が広がっていた。
「大丈夫かニャ？」
突然視界に広がる猫の顔。
「うわっ！」
「傷付くニャ…。せっかく運んであげたのニャに…」

「あ…ごめん…」
小さく謝ると、猫――――アイルーは機嫌をなんとか取り直してくれた。
「ま、いいニャ。ともかく、おミャーさんは倒れたのニャ。だから、報酬金の3割カットなのニャ」
その言葉を聞いて、気が引き締まる。村長によると、ハンターは一度の依頼で3回倒れ運ばれると、これ以上の期待を持てないということで契約が破棄されてしまうらしいのだ。
「ま、がんばるニャ！」
アイルーはそう言い残して地面に穴をバリバリと掘り、そのまま地面の中に消えてしまった。
「…ふう」
思わずため息を吐く。自分は1回負けたのだ。しかし、どうしてあのリオレウスは倒れた自分を喰わなかったのだろうか。
「…考えていても仕方ないか」
ふと体を見るとインナーの下に包帯が所々に巻かれ、防具はきれいに脱がされ、テントの隅に固められて置いてあった。ベットから立ち上がり、防具を着始める。グリーヴに足を通し、メイルを着ようとして異変に気付いた。
「あ…」
ランポスメイルの鉄鉱石で作られた胴甲が凹んでいるのだ。
「…帰ったら直さないとな」
装備を整えると、バスターブレイドを砥ぐ。
「どこにいるかな…リオレウス…」
砥石を置くと、バスターブレイドを担いだ。
「巣に行ってみようかな…」
ジュンキは独り言を漏らすと、ベースキャンプを出発した。
小高い山の中腹に横穴が一つ、ポッカリと空いている。この山の中は大きな洞窟になっていて、飛竜達の巣になっているのだ。誰もい

ない静かな丘を一人横切り、この横穴を覗く。
「こんにちは～…」
風が通り抜ける音に、僅かながら「音」が聞こえる。
「いるみたいだな…」
この先にリオレウスがいる。怖いが気を引き締め、ゆっくりと洞窟の中へと入った。
「お邪魔しま～す…」
明るい丘から急に暗い洞窟に入ったので真っ暗に見えるが、まばたきを繰り返して目を慣らす。すると、洞窟の中の様子がよく分かってきた。
「…！」
辺り一面骨、骨、骨。その中央で、リオレウスはいびきをかいて眠っていた。このリオレウスの姿を見て、正直いらっときた。
「俺じゃ相手にならないってか」
前回もすこし戦っただけで逃げられてしまい、いざ追ってみれば寝ている。よほど自信があるのだろうか。
「…」
足音を立てないように、そっとリオレウスに近付き始めた。一面を埋め尽くす骨は意外に頑丈で、踏み進んでいても折れたりはしなかった。だが中には風化しているものもあったらしく、踏みしめた瞬間足元の骨が折れ、乾いた音が洞窟に響いた。
「しまっ…！」
まずいと思った瞬間、リオレウスの蒼い瞳が開き、重い音を立てて立ち上がった。ゆっくりと体を回し、眼と目が合うと、頭の中が真っ白になった。
「ご、ごめんなさい…」
やっとのことで出た言葉が通じる訳がなく、返事の代わりに咆哮を送られた。
「ぐっ…！」
爆音に等しい咆哮に思わず両耳を塞いで屈みこむ。突然強風が吹い

たと思うと、目の前からリオレウスが消えた。
「なっ…！」
すぐ気付いたが、僅かに遅かった。既にリオレウスは天井近くまで飛び上っていたのだ。
「くそっ…」
呆然と立ち尽くしているとリオレウスが両足を前に突き出し、引っ掻くようにして急降下してきた。降下速度が速く自分の反応が遅れ、リオレウスの巨大で鋭利な足の爪でランポスメイルごと胸を左肩の付け根から右脇腹までを斜めに裂かれた。
「ぐあああああッ！！！」
裂かれた胸から鮮血が噴き出す。鋭利なリオレウスの爪の前では、ランポスの鱗や鉄鉱石などは紙と同然だった。
「ぐっ…あぁっ…！」
突然めまい、吐き気、寒気が襲ってきた。リオレウスの爪の猛毒だ。
「ど…毒か…っ！」
歯を食い縛りながら飛んでいるリオレウスを見る。すると、リオレウスはブレスを吐いてきた。
「ぐっ…駄目か…」
避けようとはしたが体が言うことを聞かず、ブレスは目の前に落ちて爆発した。
「ぐは…ッ！」
爆風が胸の裂かれた肉を焼く。簡単に体が吹き飛び、背中から洞窟の岩壁に激突した。
「あぐッ…！」
そのまま抵抗なく、地面に落下した。
「ぐっ…ギッ…！がはッ！！！」
喉が焼けるように熱くなってきたかと思った瞬間、真っ赤な血液が唾液とともに口から飛び出した。同時に視界も霞む。リオレウスは着地するとこちらの様子を見て、ゆっくりと近寄ってきた。
（くそ…ここまで、なのか…？）

力を振り絞ってゆっくり顔を持ち上げると、丁度目の前までやって来ていたリオレウスの蒼い瞳と目が合った。出来る限り憎しみを込めた目で見返す。

（喰われるなら…喰われるまで睨み返してやるっ…！）

どれくらい時間が過ぎただろうか。リオレウスはくんくんと臭いを嗅ぐと反対の方を向いて、遠ざかり始めた。

「なっ…！くそっ…くそっ！」

自分はあのリオレウスに生かされた。それがたまらなく悔しかった。

「覚えてろよ！次に会った時こそ、お前を、殺してやるからな！」

リオレウスは立ち止まり振り返ったがすぐに飛び上がり、天井にポッカリ空いている穴から飛び去って行った。

「覚え…てろよ…っ」

視界が真っ黒になったかと思うとそのまま意識を失い、自分の血の池に顔を落とした。

あまりにも衝撃的な昔話に部屋は凍りついていたが、ユウキは話を続けた。もちろんこの話にはまだ続きがあるからだ。

MH1st　第2章　竜人の足跡　02

「大変だニャー！」
アイルーの慌てた声を聞いて、ショウヘイやユウキの不安は一気に増加した。ショウヘイとユウキがそれぞれの遠い狩場から帰ってくるとほぼ時を同じくして、ジュンキが単身リオレウス狩りに出たというのだ。もしかして、ジュンキが重傷を負って運ばれてきたのではないか――ショウヘイとユウキの予感は的中することとなる。
「…ッ！」
先頭を走ってきたアイルーの後ろに、数匹のアイルー達が押しているハンター搬送用の木造リアカーが見えた。そこに寝かされているのは、血まみれのジュンキだった。ランポスヘルムを紛失したのか装備しておらず、おかげで顔の右半分と薄い茶色の髪が真っ赤に染まっているのがはっきりと分かる。胴装備のランポスメイルは左肩から右脇腹にかけて大きく裂け、中の肉やら骨やらが見えていた。ランポスシリーズ自体も深紅に染まり、焦げている。――ジュンキはピクリとも動かずに村の診療所へと運ばれていった。
「…ショウヘイ」
後ろからユウキに声をかけられて、ショウヘイは我に帰った。
「俺達も…診療所に行こう？」
「ああ…」
ショウヘイはゆっくりと、とてもゆっくりと診療所へと歩み始めた。

目が覚めた。ここは何処だろう。
「あぐッ…！」
体を動かそうとして胸に走った激痛に、思わず呻き声を上げてしまう。息苦しい。体が熱い。視界がぼやける。呼吸が早い。
「目が覚めたか？ジュンキ」
声が聞こえた方を見ると、渋い顔をしているショウヘイと嬉しそう

なユウキがこちらを覗いていた。
「ショウヘイ…ユウキ…」
「ジュンキ、すまない――」

「一発殴らせろ」

鈍い音。突然視界が右に流れる。頬に走る痛み。殴られたのだ――
―ショウヘイに。
「ショウヘイ！」
ユウキが驚きの声を上げるが、ショウヘイはそれを左手で制す。
「…どうして一人でリオレウスを狩りに行った！どうして俺達に相談しなかった！どうして…危険だと判断して戻って来なかった！」
普段のショウヘイからは考えられない程息を荒らげている。ジュンキの青い瞳から涙が流れ落ちた。
「殴るなら儂を殴れ、ショウヘイ…」
病室の入り口から声が聞こえて、ショウヘイとユウキは振り向く。
そこにはこの村の村長が佇んでいた。
「儂は判断を誤った。儂のせいじゃ。殴るなら儂を殴ってくれ…」
長い沈黙が辺りを包む。
「村長…」
ジュンキの掠れた声が聞こえて、三人がジュンキを振り向く。
「村長は、悪くない…。俺の…判断ミスです…」
再び長い沈黙。
「…ジュンキが目を覚ました。今はそれでいいんじゃないか？」
「すまなかった、ジュンキ。どうか再び、ハンターに復帰してくれ…」
村長はそう言い残し、病室を出て行った。
「俺達も行こう？」
「ああ…。ジュンキ」
「…？」

ジュンキは黙って振り向く。
「ごめん」
ショウヘイは頭を下げた。
「自業自得だよ…。ショウヘイは…悪くない…」
「…ごめん」
「早く復帰しろよ?俺達は狩りを続けるけど、帰るたびに必ず顔を出すからな?…死ぬんじゃないぞ」
そう言って、ショウヘイとユウキも病室を出て行った。

「そんなことがあったんだ…」
ジュンキやショウヘイ、ユウキの昔話に区切りが付いたところで、クレハが声を上げた。
「その胸の傷はあの時のなのか…」
カズキが納得したように何度も大きく頷く。
「それから、ジュンキはどうなったの?まあ、今もこうして生きてるからしぶといのは分かってるけど…」
チヅルの心配してくれているようで心配していないような言葉に、ジュンキは小さく笑った。
「あれから、ジュンキは大変だったよな?」
「ああ…もう二度と経験したくない闘病生活だ」
ユウキに聞かれて、ジュンキは顔をしかめながら答える。
「見ているこっちまで苦しかったからな」
ショウヘイはそう言って、昔話の続きを始めた。

MH1st　第2章　竜人の足跡　03

「はあっ…はあっ…はあっ…――――ッ！」

熱い。体が焼けるように熱い。リオレウスのブレスに包まれればこんな感じかもしれない。呼吸は不規則で、息を吸うと喉元を流れる熱い血潮を冷やしてくれるが、息を吐くと体温のせいで喉が焼ける。全身から吹き出す汗でベッドはずぶ濡れになり、シーツから滴り落ちた汗が床に水たまりならぬ汗だまりをつくっている。脊髄に走る、生きたままハンターナイフで剥ぎ取られるかのような痛み。思わず体が仰け反り、そのせいで胸の傷口が開いて出血し、包帯を赤く染める。もう三日三晩何も食べていないし、飲んでもいない。食べるとすぐ吐き下してしまうのだ。この症状、実はジュンキがリオレウスに胸を引き裂かれた時にリオレウスの爪に仕込まれた猛毒が体内に入ってしまったのだ。すぐに解毒薬等を飲めばほとんど問題無いのだが、ジュンキの場合は発病するまで毒に侵されていることに誰も気付けなかった。

「…」

その様子を、ショウヘイとユウキは黙って見守ることしか出来なかった。ショウヘイがジュンキを殴った後、ショウヘイとユウキは簡単な討伐依頼を受けて村を出て、三日後に帰ってきたらこうなっていた。

「…！」

ジュンキの青い瞳がゆっくりと開き、ショウヘイとユウキを見る。そしてゆっくり頷いた。

「…ちょっと、いいかな？」

この診療所の医者が呼んだので、ショウヘイとユウキは一旦ジュンキの病室を出た。

「死ぬかもしれない…！？」

ユウキは思わず声に出してしまう。
「…ええ、危険な状態です。仮に生きたとしても、ハンター生活には恐らく戻れないでしょう」
こう言われることは分かっていたので、ショウヘイはゆっくりと頷いた。医者はそのまま何も言わずに診療所の奥へと消えた。細くて狭くて薄暗くがたついた廊下に、ショウヘイとユウキは取り残された。

だがこのあと、ジュンキの容体は次第に良くなっていった。体温は下がり、呼吸も落ち着いていった。胸の傷も跡を残して塞がり、体内の毒素も消え去っていった。そしてジュンキは瀕死の状態で運び込まれてからまだ一月しか経っていないのに完治し、ハンター生活へと復帰することとなる。

「うへ～。ジュンキって人間じゃないの？」
クレハの冗談が飛びみんなは笑ったが、ジュンキだけは真剣な眼差しで天井を見つめた。
（人間じゃない…そう、俺は竜人…）
今ならどうしてあの傷を負って生き残れたのか、そして今回は全身の骨を砕かれても生きているのか分かる。それは自分がただの人間ではなく、竜人と呼ばれた種族だからだ。竜の持ち合わせている精神力と回復力を持っている、竜と人のハーフの生き残り。
「ジュンキ？」
チヅルに声をかけられて、ジュンキは我に帰った。
「大丈夫？やっぱり寝ていたほうがいいんじゃ…？」
「大丈夫。俺は不死身だからさ」
ジュンキがそう言うと、チヅルは安心の笑みを浮かべた。
「さてと、次はいつの話をしようかな？」

ユウキが横目でショウヘイを見ながら言う。
「リオレウス戦だろ?ジュンキが復帰して半年後くらいの」
ショウヘイは横目でジュンキを見ながら言う。
「またリオレウスに挑んだのか?」
カズキが呆れた声を出す。
「勿論、一筋縄ではいかなかったさ」
ユウキはそう答えて、天井を見上げた。
「今思えばありゃ無謀だったなぁ…」

ＭＨ１ｓｔ　第２章　竜人の足跡　０４（前書き）

今回は長いです（汗）

MH1st　第2章　竜人の足跡　04

「覚悟は出来ておるんじゃな？」
村長はゆっくりと言った。ジュンキ、ショウヘイ、ユウキはそれにゆっくりと頷いて応える。しばらくの沈黙の後、村長はふうとため息を吐いた。
「分かった。ハンターの行動を、年寄りが止めるものではないな…ただし！」
突然村長が声を荒らげたので、ジュンキ、ショウヘイ、ユウキは体を固くした。
「先日ジュンキが受けた傷への…恨みを動機にリオレウスを相手しようと思ってはいないな！？」
「はい。リオレウスはハンターを続けていく上でいつかは立ちはだかるモンスターです。その時が、俺達に来ただけです」
ジュンキが慎重に言葉を選んで言うと、村長は微笑んだ。
「ま、そうかもしれん。…じゃが実際は恨みも少しはあるのじゃろう？」
「…はい」
ジュンキが恥ずかしそうに言うと、ショウヘイとユウキは声に出さずに笑い、村長も笑った。
「ま、それくらいが丁度いいかもしれんな。だがこれだけは約束して欲しい。必ず生きて戻ってくることじゃ。命あっての物種じゃぞ」
「大丈夫です」
ショウヘイが軽やかに答える。
「正直、十六歳のハンター三人をリオレウス狩りに出すこと自体間違っておる。じゃがおぬしら三人は、三人揃えば強い。それは儂が一番良く知っておる。必ず生きて帰ってこい…！」
村長の言葉背中を押されたジュンキ、ショウヘイ、ユウキは村を後にした。

いつもと変わらない姿の森と丘。先日ジュンキが戦ったリオレウスかどうかは分からないが、この森と丘に再びリオレウスが住み着いたらしい。その影響だろう、今日の森と丘は不気味に静かだった。
「さてと、まずは作戦会議だな」
ベースキャンプに到着するなりショウヘイが口を開いた。
「今度は一人じゃないんだから、俺達を頼れよ？」
「分かってるよ」
ユウキが肘でつついてきたので、ジュンキは苦笑いしながら返事を返す。
「んで、今日持ってきたのは？」
「大タル爆弾４つ、閃光玉を出来る限り、捕獲用麻酔玉も出来る限り、あと落とし穴を予備も入れて２つだ」
最近はシビレ罠というものがあるらしいがジュンキ達は使い方どころかまだ現物を見たことがなく効果も知らないので今回は見送った。
「リオレウスがよく現れるのはエリア３だと村長から聞いている。ジュンキが初めてリオレウスと遭遇したのもエリア３だった」
ジュンキは頷く。
「戦闘隊形としてはいつも通り、俺が前衛、ジュンキが遊撃、ユウキが後衛でいいよな？」
「後ろは任せろ！」
「ああ…」
「…ジュンキ？」
「え…？ああ、いや、大丈夫。元気だよ？」
ジュンキの様子がおかしい。ショウヘイとユウキは互いに顔を見合わせると首を傾げた。

「――――爆弾はリオレウスが眠ってから使うことにする。以上」
簡単な会議は終わり、各自の装備点検に入る。
「装備に異常はないかな…？」

あのリオレウスとの戦いから半年、ジュンキの武器は大剣ブレイズブレイドに、防具は毒を防ぐ効果があるイーオスシリーズになっていた。ショウヘイは片手剣ドスバイトダガー改にクックシリーズ装備、ユウキはライトボウガンのショットボウガン紅にゲネポスシリーズ装備だ。

「よし…行こう」

ジュンキがゆっくり言葉を噛み締めるように言うと、ショウヘイとユウキはしっかりと頷いた。

ベースキャンプの外に出ると、そこはいつもの森と丘ではなかった。静か過ぎる。

「アプトノスがいないな…」

ベースキャンプを出てすぐのこのエリア1は普段草食竜アプトノスが野草を食んでいるのだが、今日は一匹もいない。

「リオレウスに警戒しているんだろう」

ショウヘイの返事にユウキは「だな…」と不安気に答える。

「…」

ジュンキは無口のまま、ここよりも高い場所に位置するエリア2に向けて歩き出した。

「なあ、ジュンキ」

「…」

「…ジュンキ?」

「え…?あ、ごめん、何?」

ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ以外誰もいないエリア2を横切っている時に、ユウキはジュンキを呼んだ。だがジュンキは何かを考え込んでいたようで、返事が遅れてしまう。

「ジュンキは一度リオレウスと戦っただろ?今のうちに弱点になりそうなところでも聞いておきたいなって思ってさ」

「弱点…」

ジュンキは歩みを止めずに青空を見上げ、「弱点は無い」と素っ気無く返した。
「弱点無しって…マジかよ…」
「隙はあったか?」
ユウキが頭を抱える中、ショウヘイが別の質問を出す。
「隙か…。ほとんどなかったよ。さすが天空の王者と呼ばれるリオレウスだけはあるよ」
ジュンキはショウヘイやユウキを脅さないように笑顔を作って答えたつもりだったが、ジュンキの青い瞳は生気が無かった。そして苦も無く通過しようとしたエリア2の出口で、ジュンキはショウヘイに右肩を掴まれて歩みを止めた。
「ショウヘイ?」
「ジュンキ、どうした?狩場に着いてから元気が無いぞ?」
「…」
「何があった?話してみろ?」
「…」
ふぅとショウヘイが小さい溜息を吐く。
「ジュンキ、相手は天空の王者リオレウス。ジュンキが半年前に戦って大敗したモンスターだ。俺達三人の中で誰か一人でも欠けたら一気に狩れる確率が下がる。…ジュンキ、今のお前ではまともにブレイズブレイドを振れないぞ」
「…ぃ」
「え…?」
「…怖いんだ。すごく。ものすごく」
ジュンキの言葉に、さすがのショウヘイも言葉を失う。ユウキは完全に聞きに撤している。
「また、体を引き裂かれるんじゃないかって思うと…怖いんだ」
「…」
「…」
「…ジュンキ、よく聞け」

ジュンキが顔を上げると、そこには自信に溢れたショウヘイの顔と、その後ろに温かい笑みを浮かべたユウキがいた。
「ジュンキが怖がるのももっともだ。だけど今回は俺達がついてる」
「そうだぜ。ジュンキは一人じゃない。俺達を信じてくれるよな？」
「ショウヘイ…ユウキ…」
ジュンキは顔を落としかけるが、力強く頷く。
「そうだね…今回は一人じゃない。ショウヘイと、ユウキがいる」
ショウヘイが見たジュンキの瞳――そこには不安恐怖の文字は無かった。

リオレウスがよく現れると言われるエリア3。今回もリオレウスはそこにいた。幸いにも、リオレウスはこちらに尻尾を向けている。
「ユウキ」
「おうよ」
ユウキがペイント弾を撃つ。リオレウスに着弾し特異臭を放ち始めると、リオレウスはこちらを向いた。
「行くぞ！」
ジュンキの掛け声とリオレウスの咆哮は同時に発せられた。人間と比べれば巨大なリオレウスの体が突進してくる。ジュンキとショウヘイは余裕を持って避けて自分の武器を抜き、ユウキは離れた場所で撃つ。
「はあッ！」
すぐさまリオレウスに近寄ったショウヘイのドスバイトダガー改がリオレウスに一閃――しかし深紅の鱗に弾かれてしまう。
「チッ…！」
横目でジュンキを見ると、あの大剣ブレイズブレイドでもリオレウスの鱗や甲殻の前では歯が立たないようだった。リオレウスが立ち上がったのでジュンキとショウヘイは急いで遠ざかる。背中を向けるジュンキに向かって、リオレウスがブレスを吐く。
「ジュンキッ！」

ユウキが叫ぶとジュンキは飛んで避ける。
「俺のことを忘れるなよ」
ユウキのショットボウガン紅が火を噴く。
「はッ！」
ショウヘイがリオレウスに気付かれないように背後へと回り、右脚の筋を斬りつける。ここは鱗で守られていないので真っ赤な血が噴き出した。リオレウスはショウヘイの存在に気付き、尻尾を振り回す。
「お…」
ショウヘイは屈んで避ける。
「はあッ！」
ショウヘイが再び右脚の筋を斬りつけると、リオレウスは突然走り出した。ショウヘイは条件反射で防ぐことが出来たが吹き飛ばされてしまう。
「たあああああ！！！」
リオレウスが倒れ込んだところにジュンキがバスターブレイドを振り下ろす。先程と同じ場所を狙ったためか、今度はリオレウスに出血を強いることに成功した。
「グルルルル…」
リオレウスがゆっくりと起き上がる。――突然リオレウスの頭で小さな爆発が起きた。リオレウスは驚きのけ反る。何事かと思いジュンキは辺りを見渡したが、ガッツポーズをしているユウキを見つけて理解する。ショウヘイも戻ってきたが、そこにタイミングを合わせるようにリオレウスがブレスを3発放つ。
「なっ…！」
重い大剣を背負っているジュンキは避けるより防ぐことを選び、ショウヘイとユウキは飛んだ。三発の爆発。辺りに漂う黒煙を振り払いながらリオレウスは大空へと羽ばたき、このエリアを出ていった。
徐々に煙が晴れていく。
「…ふう。大丈夫か？ジュンキ」

座り込んでいるジュンキを見つけて、ショウヘイは声をかけた。ジュンキは大剣を放り出して空を見上げている。
「お～いジュンキ～ショウヘイ～。無事かぁ～？」
ユウキも煙の向こうから出てくる。
「んぁ？ジュンキ、どうした？」
「ん…？いや、何でも無いよ。ただリオレウスの強さに脱力しちゃって…」
ジュンキはそう言って立ち上がる。
「ほら、見て。俺の大剣がリオレウスのブレスで炭化しちゃった」
ジュンキがショウヘイとユウキにみせた大剣ブレイズブレイドは、普段なら鋼鉄の銀色を放っているが今は黒くすすけてしまっている。
「でも諦めるわけじゃないんだろ？」
「もちろん。むしろやる気が出てきたぐらいだよ」
ジュンキはガッツポーズする。
「…さてと、これからどうする？」
「今はまだ追おう。もちろん無理しないで。で、夜になってリオレウスが寝付いたらそこを襲おう。…俺はハンターとしてモンスターに対しては夜襲とか、そんな卑怯なことはしたくないけど…今の俺じゃそうでもしないとリオレウスには勝てないから」
ジュンキは話し終えると、ショウヘイとユウキが顔を見合わせて笑っていることに気がついた。
「ちょっと、聞いてたの？」
「ああ、もちろん」
「悪い悪い。いつものジュンキに戻ったかな～って思ってさ」
「もう…行くよ」
ジュンキはちょっと恥ずかしくなったので、ショウヘイとユウキを置いてさっさとペイントの臭気がする森の方へ進みだした。

夜。ジュンキ達の姿はこの森と丘の中心にある小高い山の中にある、エリア番号５――通称竜の巣の入り口にあった。ジュンキとショ

ウヘイとユウキはこの後も日が暮れるまでリオレウスを追い掛け回し、少しずつ疲弊させていった。そして今はこの奥で寝ているはずだ。

「何かジュンキ変わったよな～」

「え？」

突然ユウキがそんなことを言ったのでジュンキは思わず気の抜けた返事を返してしまう。

「リオレウスと戦い始めてからか？どんどん動きにキレが出てきてさ。さっきなんて、リオレウスとすれ違いざまに翼膜を切り裂いたし」

「…」

ジュンキは目をパチパチさせている。

「俺もそう思う。何かいいきっかけでもあったのか？」

ショウヘイは直接ジュンキに尋ねた。それに対してジュンキは少し顔を赤らめて口を開く。

「…なんて言うかさ、リオレウスって空の王者って呼ばれてるだろ？相手はこの自然の王者。それに挑んでいる俺達。…想像するだけで胸が高鳴るっていうかさ。そのせいかな？…それにリオレウスってかっこいいしさ…」

いつの間にか下を向いていた顔を上げると、ユウキが必死に笑いを堪えているのが見えた。

「ユウキ。ジュンキに悪いじゃないか」

「ごめんごめん…ッ！ジュンキくさい台詞ッ！」

ユウキに言われてジュンキの顔が赤くなる。

「…さて、巣に入ろうか」

ショウヘイがそう言うと、ジュンキとユウキも気合を入れ直す。月明かりの中、ジュンキから先に巣の中へと入っていった。

中は月明かりが天井の大穴から差し込み、ほんのりと明るい。

「ここはモンスターの骨が散らばっているから気をつけて。音が響

くとリオレウスが目を覚まして、俺みたいになるから」
瀕死状態のジュンキの姿を思い浮かべ、ショウヘイとユウキはしっかりと頷いた。二人は大タル爆弾を抱えている。足元に十分気をつけながら、リオレウスの周りに大タル爆弾を設置する。
「撃つぞ」
十分距離を置いてから、ユウキが通常弾を大タル爆弾に撃ち込んだ。刹那、大タル爆弾が爆発し、洞窟内が一時明るくなる。爆音と爆風が入り混じる中、三人は煙の中のリオレウスに注視する。
（…やったかな？）
淡い期待を抱いたジュンキだったが、空の王者リオレウスはそう簡単には倒れなかった。
「グオアアアアッ！！！」
突然怒りの咆哮が洞窟内に響き、全身から血を流しているリオレウスが煙の中から現れたのだ。
「一筋縄じゃあいかないか」
「来るぞ。気をつけろ」
ユウキの愚痴に、ショウヘイが忠告で答える。リオレウスはそんな二人に突撃するが、ショウヘイとユウキは左右に飛び、これを回避する。リオレウスは突進の勢いを殺せず、地面に倒れる――はずだった。それがハンター達の間の通説だが、このリオレウスは違った。なんと倒れることなく止まってみせたのだ。そして灼熱のブレスを、完全に油断していたユウキの背中に放つ。
「やべっ…死…っ！」
ユウキは思わず目を閉じる。直後、爆発音が響いたが、自分には何の影響もない。
「ユウキ、大丈夫か？」
聞きなれたジュンキの声。目を開くと、そこには大剣ブレイズブレイドを盾にしてブレスから自分を守ってくれたジュンキの背中があった。直後、洞窟内に響く角笛の音。リオレウスは遠くのショウヘイに向かって走り出した。しかしその行程の半分くらいのところで

突然リオレウスの下半身が沈んだ。落とし穴だ。
「ショウヘイ、準備がいいな」
ジュンキは嬉しさ半分呆れ半分の表情で呟きながら大剣ブレイズブレイドを背中に戻して駆け出した。
「俺のブレスを食らえぇい！」
ユウキの反撃が始まる。ジュンキは走りながらペイントボールを投げておき、ショウヘイと一緒にリオレウスを斬る。
「ん…？」
ジュンキの攻撃の手が止んだ。そしてショウヘイの視界の端に大剣ブレイズブレイドを大上段に構えたジュンキの姿が写った。あの技は――――。
「うらあああああッ！」
大剣の重さと、使用者の全身の筋肉を使った大技――――溜め斬りだ。
「グギャアアアッ！！！」
悲鳴。そう悲鳴だ。リオレウスから聞き取れた、今回の狩り初めての悲鳴。ジュンキの溜め斬りはリオレウスの腹を深々と斬り裂いていた。真っ赤な血液が噴き出し、ジュンキを赤く染める。そしてとうとう落とし穴の効力が切れてしまい、リオレウスは飛び上がった。だがリオレウスは着地せず、そのまま夜空へと消えていった。
「…ふう」
ユウキがショットボウガン紅を背中に戻し、ジュンキとショウヘイがそれぞれの武器を砥いでいる洞窟の中央に向かう。
「…今夜はここまでかな」
「俺もそう思う。ユウキは？」
「同感。だけどリオレウスは大丈夫か？」
ユウキが当然の心配を口にする。リオレウス等の飛竜は眠ることによって致命傷ではない傷ならばいとも簡単に治してしまうのだ。
「ペイントしたから、一晩くらいは持つと思うよ」
「ああ。それと俺達はリオレウスの寝ている間に奇襲した。いくらリオレウスでも、今夜は眠れないはずさ」

「…だな。よし、キャンプに戻ろう」
ユウキはジュンキとショウヘイの意見に大いに納得したようだった。
既に夜に入ってからけっこう時間が経ってしまっている。このまま狩りを続けてもいいのだが、流石に仮眠を取りたくなってきていた三人は一旦ベースキャンプに戻ることにした。狩りは疲れる。仮眠は重要だ。

翌朝、まだあまり陽が昇っていない早朝に三人はベースキャンプを出発した。
「朝の丘もいいもんだな～」
と、呑気なユウキである。
「一応ここは狩場なんだけど」
ジュンキはとりあえずつっこんでおいた。今はエリア2を北へ向かっている。この先のエリア3は、リオレウスと初めて出会ったエリアである。
「いるかな…？」
果たして、リオレウスはいた。だが初めて出会った時よりも違和感を感じる。そう、リオレウスも疲れているのだ。全身の傷が癒えていないところを見ると、どうやら一睡もしていないようである。
「始めますか」
ユウキはそう言ってショットボウガン紅を肩から下ろす。
「俺がまず行くよ」
ジュンキはそう言って右手で大剣ブレイズブレイドの柄を握る。今回もリオレウスはこちらに尾を向けていた。ジュンキがまずはゆっくり近付き、距離が縮まったら一気に駆ける。そして巨大なハンマーにも見える尻尾を一撃。ワンテンポ遅れて、ユウキが撃ったペイント弾がリオレウスの左脚に付着する。――二日目の戦いが始まった。
「はあっ！」
「おりゃっ！」

「たあああああ！」
ショウヘイの一閃。ユウキの一撃。ジュンキの一斬。だがリオレウス。ここで尻尾を振り回す。しかし昨日の戦闘でリオレウスの動きを幾分か読めるようになってきたジュンキとショウヘイはその場でしゃがんで避ける。リオレウスは飛び上がった。そして空中で両足を前に突き出し、引っ掻くような動作をする。
「――――！！！」
ジュンキの脳裏に、半年前の光景が蘇る。斬り裂かれる胸。噴き出す真っ赤な自分の血。砕ける肋骨の音。――――このリオレウスもジュンキ目掛けて急降下してきた。だが今回のジュンキは違った。
「もうあんな経験は御免だよ…」
人知れず呟いたジュンキは大剣ブレイズブレイドの腹でこれを防ぎきった。リオレウスが空中に戻っていったその時、ジュンキの背後で眩い光が弾けた。閃光玉だ。リオレウスが視界を奪われ地面に落下、激突する。
「これでどうだっ！」
ユウキの撃った通常弾がリオレウスの頭部に当たると、リオレウスは怒りの咆哮を放った。しかし未だ視界を取り戻せないリオレウスは長い尻尾をブンブン振り回しはじめる。これではジュンキとショウヘイは近づけない。しかしユウキにとってみれば絶好の機会だ。何の遠慮もなく、リオレウスに撃ち込んでいく。
「グアアァァ…！」
視界を取り戻したリオレウスは飛び上がり、そのまま森のほうへと消えていった。
「リオレウスの体力って底無しだな」
ユウキがそういうが、ジュンキは確信していた。リオレウスは確実に弱ってきていると。
「さて、これからどうする？」
「もちろん、追いかけるさ」
ショウヘイの問いかけにしっかりと頷いて答えると、ジュンキはリ

オレウスが消えた方角の森へ向けて走り出した。

二日目の夜が来た、と言っても陽が沈んでからかなり時間が経ってしまっている。夕焼けに染まる森と丘で、ついにリオレウスが脚を引き摺り逃げ出したのだ。そしてリオレウスの巣であるエリア５の入り口でリオレウスが戻ってくるのを待っているのだが、何度か上空に現れるものの、そのまま通過してしまうのだ。夜襲を警戒しているのだろう。

「…まだかよ。もう話題無いぞ、俺」

「寝たらお終いだぞ。筋肉が硬直して、リオレウスの最後の抵抗に体が耐えられなくなる」

「ふぁ…ねむぃ…」

徹夜だ。交代で寝ればよいのだが、一旦寝てしまうと筋肉が固まってしまう。それは狩場ではとても危険なことだと三人は分かっていた。しかし、もう何時間待っているか分からなくなってしまってもいた。

「…来た」

「どうせまた通り過ぎるんだろ？」

ショウヘイが夜空の向こうに、リオレウスの姿を見つけた。ユウキが文句を言ったが今回はリオレウスが洞窟の中へと入っていった。

「やっとか…ん？」

ユウキが振り向くと、そこではジュンキが俯いて寝ていた。

「起きろっ」

「んぁ？…おはよう」

「…おはよう、じゃないだろ。リオレウスが巣に戻ったんだぞ」

「え…！」

ユウキからそう言われると、ジュンキの意識は一気に覚醒した。

「今回もこれだな」

ショウヘイはそう言って、ここまで運んできた大タル爆弾を指差した。昨夜と同じ作戦を取るのだ。

「行こう」
今回はジュンキも大タル爆弾を持つ。昨夜と同じく、中は月明かりが天井の大穴から差し込んでほんのりと明るい。リオレウスは洞窟の奥で眠っていた。急いで大タル爆弾を三人分設置すると、ショウヘイが洞窟の中央部、天井の大穴の真下に落とし穴を仕掛けた。リオレウスが飛んで脱出しないようにするための保険だ。ユウキが大タル爆弾を撃つ。――激しい爆音と爆風が洞窟内で響き合い、煙でリオレウスの姿が見えなくなった。さすがにもう立てないだろう――。三人ともそう思っていた。
「――ッ！」
しかし、煙の向こうから脚を引き摺り、口から真っ赤な血液を滴らせながらリオレウスが現れた。
「グア…アアア…ッ！」
逃げるのに必死で、こちらの姿が見えていないようだ。
「悪いけど、逃がさないよっ！」
ジュンキは走り出した。目の前に揺れるリオレウスの尻尾――そこに一撃。
「ギャアアアッ！！！」
リオレウスの尻尾は切断され、宙を舞った。同時にリオレウスが先程ショウヘイによって仕掛けられた落とし穴に落ちる。
「おらっ！」
「それっ！」
「…」
三人はアイテムポーチから捕獲用麻酔玉を取り出すと、暴れるリオレウスに投げつけた。リオレウスの動きが止まり、やがて倒れこむ。そのまま眠ってしまった。
「…やったのか？」
「…みたい、だな」
ユウキとショウヘイが顔を見合わせる。ユウキは不安気な顔をしているが、ショウヘイが頷くと笑顔に変わった。

「おっしゃあああああ！！！」
喜びのあまり叫びまくるユウキを置いて、ショウヘイはジュンキの姿を探した。ジュンキは――――リオレウスの頭に抱きついていた。

「ありがとう、リオレウス…」
ジュンキはショウヘイが近づいてくるのに気づくと慌ててリオレウスから手を離した。
「ジュンキ…？」
「ああ、いや、お礼をしなきゃって思ってさ」
ジュンキは恥ずかしそうに言ったが、ショウヘイは真剣な表情で頷いた。

こうしてリオレウス討伐依頼は、対象捕獲ということで完遂された。

パチパチパチと、チヅルが拍手した。
「すご～い…。リオレウス、しかも捕獲出来たなんて…」
「確かに、よく倒せたもんだな」
「リオレウスを抱いたジュンキの気持ち、分かるなぁ…」
カズキは半分呆れ、クレハは感傷に浸っている。
「じゃ、こんなもんでいいか？」
「ちょっと、まだあるでしょ？」
ユウキが話し疲れたという顔で言ったのに、チヅルは文句有りだった。
「まだって…？」
ユウキが分からないという顔をしたので、チヅルは胸を張って口を開いた。
「私とカズキが出会った時のことだよ」
「あ～あ～あれか…」

チヅルは是非語って欲しい顔をしているが、ジュンキとユウキは苦い顔をしている。ショウヘイとカズキは懐かしい昔の思い出に旅立っているが、クレハだけは頬を膨らませた。
「ん～。ずるいよ～。みんなだけの思い出なんて～」
「分かった分かった、話せばいいんだろ?だけどチヅルとカズキが出てくるまではまだ時間があるんだよ」
「そうだったね。その時はショウヘイ、怪我してたし」
「え…?」
ユウキとチヅルの会話を聞いて、クレハは驚きの表情でショウヘイを見た。
「まあ、聞いてくれ」
ショウヘイはそう言うと、目を伏せた。

MH1st　第2章　竜人の足跡　05

狩りから帰って手続きを済ませると家に帰れると思いきや村を上げての宴会が真っ昼間から行われ、ようやく自宅に戻って簡単に体を洗った後にベッドにダイブした時は確か夕方だったはずだが、目を覚ましたら気持ちのいい朝日が差していた。

「う～ん…」

「ジュンキ～。起きてるか～？」

家の外から聞こえた声に玄関へ目を向けると、そこには私服姿のユウキがいた。

「起きてるな。朝食の前に村長のところに行くぞ」

「ん…分かった…」

眠たい身体を起こして簡単な私服を着ると、ジュンキは自宅を出た。外ではユウキが待っていてくれていた。

「よし、じゃあ行こう」

そう言ってユウキは歩き出した。

村長の所には既にショウヘイが待っていた。ジュンキとユウキの登場に軽く右手を挙げて挨拶する。

「そろったようじゃの」

三人は村長の前に並んだ。こんなに嬉しそうな村長の顔を見るのは久しぶりである。

「さて、まずは報酬金じゃな」

そう言って村長は報酬金の入った革袋を三人に渡した。さすがリオレウス討伐依頼。結構重い。

「あと、報酬素材はこれじゃ」

村長が自分の後ろに積み上げられた簡素な木箱を持っている杖でつつく。

「うわ…」

木箱の中には昨日まで戦っていたリオレウスの素材が入っていた。鱗。甲殻。翼膜。爪。取り扱いが難しいが火炎袋。三分割されていても結構な量だ。一人一箱受け取る。

「さて、最後にこの老いぼれの言葉を聞いておくれ。お主達は天空の王者リオレウスを捕獲した。もう儂から教えられる事はない。ハンターの街…ミナガルデへ行くがよい」

「いいのですか?この村からハンターが三人も減ってしまって」

ショウヘイがつかさず質問する。ハンターの居なくなった村はモンスターに襲われる可能性が高くなってしまうからだ。しかし、村長は笑って頷いた。

「大丈夫じゃ。この村のハンターはお主達だけではないことはよく知っておろう?…話は以上じゃ。今はゆっくり休むとええ」

村長に一度頭を下げて、ジュンキ達は帰路に着いた。

「ハンターの街、ミナガルデか…。俺は行ったことないけど、二人はある?」

朝食を村の集会場で終えて、村の武具工房の前を通過する辺りでジュンキはショウヘイとユウキに声を掛けたが、返事がない。歩みを止めて振り返ると、ショウヘイとユウキがにこにこ笑って足を止めていた。

「…?」

ジュンキの頭の上に疑問符が浮かぶ。

「ジュンキ、誕生日、おめでとう」

「え?…あっ!」

ショウヘイに言われて今気がついた。今日は自分の17歳の誕生日であることに。

「プレゼントも用意してあるんだぜ~」

ユウキはわざとらしく体をくねくねさせている。

「これだよ」

ショウヘイの声に合わせて二人が差し出したもの。それはつい先程

村長から受け取ったリオレウスの素材が入った木箱だった。
「え、これ？悪いよそんなの。これは二人の大切な素材じゃないか」
ジュンキは受け取れないと意思表示したが、ショウヘイの笑顔は消えない。
「ジュンキの、捕獲して眠ったリオレウスを抱いていた姿を見て思ったんだ。これは、今はジュンキに渡すべきだろうって」
「そんで、作ってこいよ。リオレウスの装備」
ショウヘイとユウキはそう言って、目の前にあるこの村唯一の武具工房を差した。
「ただし！そろそろ俺も装備の強化をしたいかな～って思ってるんだけど？」
「同じく、だな」
「ははは…」
なるほど。今はリオレウスの素材を渡してくれるが、後々別の形で何らかの素材を提供してもらう魂胆らしい。
「ま、リオレウスぐらいの防具ならジュンキの怪我も少しは減るんじゃないか？」
ユウキの皮肉にジュンキの顔が歪む。
「ま、さっさと行こうぜ」
ユウキに引っ張られる形で三人は武具工房へと入った。

「どうですか？素材、足りそうですか？」
真剣な眼差しでリオレウスの素材を数える武具職人を見て、ジュンキは思わず心配になってしまい声を掛けた。
「…うむ。ぎりぎり足りておる」
ジュンキはその言葉を聞いて胸を撫で下ろす。
「お代は武器と防具を合わせてこれくらいだが…」
「…！」
高い。とてつもなく高い。
「…お願いします」

ジュンキがそう言うと、武具職人はカッカッカッと高笑いした。
「おっし、任しとけ！まずは寸法を測るから、奥に入ってくれ」
「俺達は先に戻ってるからな」
ユウキはそう言い残し、ショウヘイと共に武具工房を後にした。

「しかし何だ。初めて見たときはなんて小さなハンターかと思ったが…もうリオレウスにまで手を出すとはな」
身体の寸法を測りながら、武具職人はそう話し掛けてきた。
「俺だけの力じゃないですよ。…あの二人がいるから、安心して背中を気にしないんです」
「そうかそうか…はっはっはっ」
武具職人は明日の朝には何とか間に合わせると言い、今日はジュンキを帰した。

翌朝、武具工房の中にはインナー姿のジュンキ。ショウヘイ。ユウキがいた。
「それじゃあ、少し待っててね」
ジュンキはそう言うと、目の前の簡単な更衣室へと入り入り口のカーテンを閉めた。中では武具職人が待っていて、その前には白い布が掛けられている大きな木箱と同じく白い布で包まれた大剣があった。
「おう。さっそくめくってくれや」
ジュンキは無言でしっかり頷き、大きな木箱に掛けられた白い布を取り外した。
「うわ…！」
ジュンキの青い瞳が見開く。中にあったのは深紅の、攻撃的な印象を受けるリオレウスの防具一式。通称レウスシリーズが綺麗に入っていた。
「き…着てもいいですか…？」
ジュンキが震えた声で言うと、武具職人は高笑いした。

「何を言っておるんや。これはお前さんの物やぞ」
ジュンキはまずレウスグリーヴを取り出し、脚を通してから腰、膝の裏、踵のベルトでしっかりと固定する。その上からリオレウスの甲殻を丸々使ったレウスフォールドを腰に固定し、腿とベルトで固定する。
「う…結構重たい…」
「まだレウスシリーズは軽い方だぞ」
少し文句が出てしまうと武具職人からは呆れた声が漏れた。次にレウスメイルに胴体を通し、一対のレウスアームをレウスメイルと固定してから前腕のベルトで調整する。
「重い…」
「まあすぐに慣れる慣れる」
最後にレウスヘルムを被ろうとして、ジュンキの動きが止まった。
「どうしたんでぃ…何か不具合でもあったか？」
「ううん、そうじゃなくて…。何か、布切れないですか？」
「ん？まあこれくらいならあるが…？」
そう言って、近くの棚から黒い正方形の布を取り出した。ジュンキはそれを受け取り、髪を纏める。レウスヘルムは完全に頭を覆うタイプなので、髪が邪魔になるのではとジュンキは思ったのだ。そしてレウスヘルムを被る。次に白い布に包まれた大剣を手に取り、布を取り払う。
「…」
思わず声を失った。今まで鉄鉱石やマカライト鉱石で作られていた大剣ブレイズブレイドは、リオレウスの素材が追加されたことによって深紅に彩られていた。銘はアッパーブレイズ。これを背中に固定する。
「どうだい？おかしなところとか無いか？」
「ええ、大丈夫です」
ジュンキはレウスヘルムの面頬を上げながら言うと、更衣室のカーテンを開けた。目の前にいたショウヘイとユウキの目が見開く。ヒ

ユウ――とユウキの口笛。
「…どうかな？」
「似合ってる似合ってる！」
ユウキは大絶賛。ショウヘイは笑って頷いた。
「おっし、このままミナガルデの街まで一気に行こう！」
ユウキの提案に、ジュンキとショウヘイは力強く頷いた。

「…」
「うわ…」
「でっけ～…」
今まで見たことのないハンターの数。大きな建物。リオレウスの捕獲から五日後、三人はシュレイド地方最大のハンターの街、ミナガルデに到着していた。だが今までに見たことのない光景に、ただ立ち尽くすばかりである。この街は急な斜面の岩肌に造られており、右を見れば岩山だが左を見れば広大な森と青空が広がっている。
「…とにかく、酒場に行こう」
そう言ってショウヘイが歩き出したので、ジュンキとユウキは慌ててショウヘイを追いかける。
「え～っと、確かこの村長が書いてくれた紹介状を酒場で提出すればいいんだよね」
ジュンキがそう言って先日新調したばかりのレウスフォールドのアイテムポーチから三人分の羊皮紙を取り出す。ココット村を出るときに村長が書いてくれたものだ。今までの狩りの成績が載っていて、これを提出すればそれ相応の対応をしてくれるらしい。
「酒場酒場酒場…ここだな」
街の広場の岩肌にポッカリと開いた穴。入り口に酒場を示しているのだろう酒瓶をかたどった看板が掲げられている。
「う…」
「どうした？ユウキ」
いきなりユウキが入り口で立ち止まった。

「…酒臭い」
「酒場だからな。すぐに慣れるさ」
そういってショウヘイが先に入っていく。ジュンキも後を追い、ユウキはわざとらしく鼻をつまんで入っていった。酒場の中は薄暗く、そして狭かった。村の集会場のと同じような長テーブルには大小様々なハンターが座り、ビールを飲んだり大声で笑ったりしている。こんな雰囲気に、三人は思わず圧倒されてしまう
「…あ」
幸い、カウンターと思わしきところで手を振っている受付嬢が目に入ったので、とりあえずそこに向かった。
「いらっしゃい。街は初めてかしら？私はベッキー。この酒場の給仕長をしているからよろしくね。ご用件は何かしら？ハンター登録？」
「あの、これをお願いします」
ジュンキが紹介状を提出するとベッキーと名乗ったこの女性は目を通し、それ相応のハンターランク――と言っても三人とも同じだったが――を発行した。これで正式にこの街のハンターになったことになる。
「宿泊はゲストハウスを使ってね。それじゃあ、何か狩りに行くときは私に話しかけてね」
ゲストハウスというのは言わばハンターの家だ。自分のハンターとしての技量を表すハンターランクによって入れる部屋のランクが決まる、そういうシステムになっているらしい。今日はそれぞれの部屋に引き上げ、明日の朝に酒場で集合することにした。明日から街での狩猟生活が始まる。そう思うと、三人の心中は期待と不安に満たされていた。
「まだチヅルちゃんとカズキが出てこないね」

「この後さらに半年後さ」
クレハの疑問にショウヘイが答える。
「それにショウヘイが怪我したって…」
「ああ、それならショウヘイが怪我をした狩りの話からした方がいいな」
ユウキがショウヘイの顔を覗きながら言ったが、ショウヘイの顔には珍しく恥ずかしさが浮かんでいた。
「いいよな、ショウヘイ？」
「…ああ。事実だから仕方ない。変な話にならないように、口を挟むからな」
ショウヘイの諦めた感漂う返事にユウキは笑顔で答えると、話を続けた。

MH1st　第2章　竜人の足跡　06

ミナガルデに狩りの拠点を移してから半年が経過した頃。緑が深い密林の中を流れる川の前に、ジュンキとショウヘイとユウキは並んで川を覗いていた。

「いないな～」

ユウキのつまらなそうな声が漏れる。

「初ガノトトスだからな。魚竜と言われるくらいだから川にでもいるかと思ったが…」

ショウヘイは何だか申し訳なさそうな声を出す。

「仕方ないよ。ハンターはそう簡単に情報を回したりしないから」

と半分諦めているジュンキ。ハンターは基本的に狩りに関する情報を他のハンターに教えようとはしない。相手も同じ同業者であり、手の内を晒すのは自ら自滅していることに等しいからだ。よってジュンキ、ショウヘイ、ユウキはガノトトスに関してほとんど分かっていないのだ。

「しっかしいないもんだな～…お？」

「何か見つけたか？」

ユウキが指差す方を見ると、川の向こうから巨大な背ビレがこちらに近づいてきていた。この川は濁っているので本体の姿は確認出来ないが、相当な大きさを持っていると思われた。

「まずはペイント。ユウキ、よろしく」

「おう」

ユウキはペイント弾をリロードすると、水面から出ている背ビレに向かって撃った。ペイント弾が破裂し独特の臭気が辺りに立ち込めると同時に、大きな背ビレは勢い良く水面を移動し始めた。

「音爆弾いくよ！」

ミナガルデでガノトトスについての情報を集めているときに得た数少ない情報の一つ、ガノトトスが水中にいる時は音爆弾で刺激でき

る、をジュンキは実行した。投げられた音爆弾は放物線を描き、大きな背ビレの上で破裂、甲高い音を出した。直後、ガノトトスはジュンキの頭上遥か上を飛び越え、陸に上がった。

「で、でけぇ…」

「…」

ユウキは思わず声を漏らし、ショウヘイは黙って目を見開いた。その大きさは巨大な魚で、リオレウスよりも一回りも二回りも大きかった。

「ユウキ、サポートよろしく！ショウヘイ、行こう！」

「任せろ！」

ジュンキの声にユウキは頷き、ショウヘイも声に出さなかったが頷き、腰から片手剣バーンエッジを引き抜いた。ユウキが狙撃し、ガノトトスの気を引く。

「らあああああ！」

ジュンキの大剣アッパーブレイズによる一撃。縦斬りから横切り、そのまま斬り上げに繋げる。

「はっ！」

ショウヘイの使用する片手剣は大剣程の威力は無いにせよ、手数の多さで攻める。

「おらおらおら！」

ユウキの貫通弾による攻撃。ガノトトスはユウキに向かって身体を反らせ、口を大きく開けた。ユウキは本能的にガノトトスの直線上から飛び退いた。直後、ユウキのいた場所にガノトトスの口から出た水が直撃した。その場に生えていた下草は綺麗に刈り取られ、腐葉土の地面にはこれまた綺麗に穴が空いていた。まさしく、水のナイフ。

「やべぇ！この水は危険だっ！」

ユウキはガノトトスの足元で武器を振り回しているジュンキとショウヘイに向かって叫んだ。二人の返事を確認せず、ユウキは狙撃ポイントを探す。すると突然、ガノトトスが身体をくねらせた。

「？」
ジュンキとショウヘイの動きが止まる。直後、ガノトトスは自身の巨大さを存分に使ってジュンキとショウヘイに体当たりした。
「が…っ！」
「…ッ！」
ジュンキとショウヘイが放物線を描いて飛んでいく。そのまま腐葉土の大地に激突した。
「ジュンキ！ショウヘイ！」
ユウキが叫ぶ。ショウヘイはゆっくりと立ち上がったが、ジュンキは動かない。ガノトトスは動きの鈍いジュンキとショウヘイに向かって身体を反らせ、口を大きく開く。
「まずい…っ！」
ユウキが叫ぼうとして、ガノトトスの口から高速高圧の水ブレスが噴き出すのがやけにゆっくり見えた。
「なっ…！」
ショウヘイもガノトトスが何をしようとしているのか気づき、傍で倒れて動かないジュンキをガノトトスの直線上から動かそうとした。ガノトトスが吐き出した水ブレスはジュンキには当たらなかったが、ショウヘイの左腕に当たってしまった。
「ぐあああああッ！！！」
ショウヘイの悲痛な叫び声が響く。ショウヘイの身体を守っていたキザミシリーズ防具の左腕装備をガノトトスの水ブレスが貫き、反対側から赤い液体になって噴き出していた。
「チッ…！」
ユウキはガノトトスの気を引こうとガノトトスを撃つ。するとガノトトスは追撃することなく川へと戻り、このエリアを出ていってしまった。
「ショウヘイ！」
ジュンキの声に振り向くと、ショウヘイはジュンキによって抱き抱えられていた。ユウキも慌てて駆け寄る。

「ぐ…あぁ…ッ！」
ショウヘイの左腕からは真っ赤な血液がドクドクと流れ出ている。
ユウキはショウヘイの左腕防具を外した。ショウヘイの腕は上腕部分を水ブレスが掠めたらしく、肉が一部弾け飛んでいた。
「大丈夫だ…骨は砕けてない」
ユウキはアイテムポーチから包帯を取り出し、薬草と一緒にショウヘイの腕に巻きつけた。止血の意味も含めてきつく縛り上げる。
「ッ！」
「もう大丈夫だ…。だけど、もう片手剣は振れないな…」
ユウキの言葉に、ショウヘイは苦々しく頷いた。
「どうする？ジュンキ…」
「…リタイアしよう。初めてのガノトトスに、経験のない二人じゃ勝てないと思う」
ジュンキの意見はもっともで、ショウヘイとユウキは頷くしかなかった。

MH1st　第2章　竜人の足跡　07

ミナガルデの街に戻ると、ショウヘイはすぐにハンター専用の病院に運ばれていった。残されたジュンキとユウキは重い足を引き摺り、酒場への両扉を開いてカウンターにいるベッキーに今回の狩りの報告をする。

「おかえりなさい。聞いたわ。ショウヘイが怪我をしたって」

「…ごめん、リタイアした」

ユウキが顔を落としたまま言うと、ベッキーは仕方が無いわと言ってジュンキから依頼書を受け取り、失敗の印を押した。

「また受けに来てね」

ベッキーの言葉を背に受けながら、ジュンキとユウキはショウヘイの運ばれたハンター専用の病院へと向かった。

「幸い傷は浅く、応急処置も早かったので、ハンターを続けても問題はないでしょう」

ショウヘイの診察にあたった初老の医者の診断を聞いて、ジュンキとユウキは胸を撫で下ろす。

「しかし…」

「…しかし？」

「…弾けた肉は戻らない可能性が高いです。ハンターを続ける上では問題ないかと思いますが、深い傷痕が残るでしょう」

医者はここで口を閉じた。気まずい沈黙が診察室を包み込む。

「…何とかなりませんか」

ジュンキが低い声で言うと、医者は腕を組んで考え始めた。

「そうだね…新鮮なフルフルのアルビノエキスでもあれば完治する可能性は高くなるが…」

「フルフルですか…。ありがとうございました」

「ショウヘイさんの病室は１０３号室ですから」

医者に礼を言い、ジュンキとユウキは診察室を出た。長い廊下をショウヘイが収容された１０３号室を目指して歩き出す。
「フルフルか…」
「まだ狩ったことないからなぁ…」
ジュンキとユウキはこの街に来てからまだフルフルを狩った事はない。
「でも、俺は行きたい。ショウヘイが怪我したのは、俺が気を失っていたからだし…」
落ち込むジュンキの肩に、ユウキは手を置いた。
「確かにジュンキは気を失っていたかもしれないが、それを責めるのは理不尽だぞ。仕方がなかったじゃないか」
「うん…。でも、どうしても責任を感じるよ…」
「だったらフルフル狩ってアルビノエキスを持って帰ってこないとな！俺も行くぞ！」
ユウキは大声を出して１０３号室の扉を開いた。この部屋は個室で、ショウヘイがいつもと変わらない様子でベッドに寝ていた。
「腕の傷口が塞がるまでは絶対安静らしい」
ショウヘイは落ち着いた様子でそう言ったが、ジュンキの気持ちは晴れない。
「ショウヘイ。俺とユウキはフルフルを狩りに行くことになったよ」
「…どうして？」
ショウヘイの眉間に皺が寄る。
「フルフルから取れるアルビノエキスっていうものが怪我によく効くらしいんだ」
「そうか…済まないな、二人に無理をさせて。無事帰ってこいよ」
「おう。死ぬ気はさらさら無いから安心して待ってろよ」
ユウキは言い終わると病室の出口へと向かうが、ジュンキはショウヘイの前から動かなかった。
「ジュンキは行かないのか？」
「…ごめん、ショウヘイ。俺がドジ踏んだからショウヘイが怪我し

ちゃって…」
ジュンキの言葉に、ショウヘイは目を瞬かせると小さく笑った。
「気にするな、お互い様だ。ユウキだけじゃ心配だ、ジュンキも行ってきて」
「…うん」
ジュンキは頷くと、１０３号室を後にした。

二日後、準備を終えたジュンキとユウキは酒場でフルフルの依頼を受けようとしたのだが、ベッキーがそれに難色を示していた。
「ジュンキ君ユウキ君共にフルフル狩りの経験無しか…。正直、やめておいたほうがいいんじゃない？」
「だけどベッキー。ショウヘイの為なんだ」
「けどそのためにジュンキやユウキが怪我をしたり…最悪死んだりしたらショウヘイは悲しむと思うわよ？」
ユウキの説得にもベッキーは首を縦に振らなかった。
「だけど――」
「たった二人しかいない上に大剣とボウガンだと小回りが効かないわね」
痛いところと突かれた。たった二人しかいない上に小回りが効かず、その上戦闘経験も無い。これでは狩りどころではない。――にが虫を噛み潰したような顔をするジュンキとユウキの背後から声がしたのはこの時である。
「ベッキー、フルフルって言わなかった？」
ジュンキとユウキが振り返る。そこには一人の女性ハンターが立っていた。ピンク色がかわいい防具は怪鳥イャンクックの素材から作られるクックシリーズ。武器は双剣だ。
「ええ、今この二人がフルフル狩りに行こうとしているのを説得しようとしているの」
「どうして？ハンターの意思、妨げたらだめでしょ？」
「最終決定はこの二人に任せるけど、どう考えても危険過ぎると思

うのよ。たった二人しかいない上に小回りが効かない武器、そして戦闘経験ゼロ」
「ふう～ん…」
このハンターは何かを考えたが、すぐに結論が出たらしく笑顔で口を開いた。
「じゃ、私が付いていけばいいじゃない」
このハンターの言ったことにジュンキとユウキ、それにベッキーは固まった。
「あ、もう一人連れがいるけどね。カズキ～！」
この女性ハンターが名前を呼ぶと酒場の席から一人の男が出てきた。大きなランスを背負っている。
「ね、ベッキー。私は小回りが効く双剣だし、人数はこれで四人だし、経験は…無いけどこれで大丈夫でしょ？」
「そうね～…。まあこれならいいかしらね」
「ちょ、ちょっと待って――」
ここでジュンキが制止に入る。このままではこちらの意見が出る前に狩りの契約をしてしまう。
「あ、自己紹介がまだだったね。私はチヅル。よろしく」
「あ、よろしく――じゃなくって！」
チヅルが手を差し出したのでジュンキは危うく握りかけてしまう。
「どうしてフルフル狩りを手伝ってくれるの？見ず知らずの俺達二人に付き合ってまで…」
「今丁度フルフルでも狩ってみたいな～って話をカズキとしてたのよ」
カズキ…と呼ばれている男はうんうんと頷いた。
「詳しい話は目的地へ向かう竜車の中でいいよね？じゃ、レッツゴー」
結局、ジュンキとユウキはチヅルというハンターに引き摺られる形でフルフル狩りへと向かうことになった。

MH1st　第2章　竜人の足跡　08

「さてと、何から話せばいいのかな」
四人を乗せた竜車がミナガルデの街を出発すると、すぐにチヅルの口が開いた。
「まずは自己紹介だろ。俺の名前はユウキ。見ての通り、ガンナーだよ」
ユウキはそう言いながらライトボウガン・クックアンガーを抱いた。
「さ、次次」
ユウキがジュンキを肘で突く。
「ああ、俺の名前はジュンキ。大剣を使ってる」
ジュンキはそう言いながら後ろに立て掛けてあるアッパーブレイズを裏拳で叩く。
「私はチヅル。武器は双剣です」
チヅルはそう言いながらすぐ横に並べてあるインセクトオーダーを手に取った。
「あ、一応言っておくけど、私の装備はクックだけど実力はそこそこあるからね」
チヅルの言いたいことは分かった。あえて実力に合わない防具を装備しているらしい。理由は分からないが、フルフル討伐に許可が出る時点でそれだけのハンターランクを持っているのだから実力はありそうだ。
「さ、カズキ」
「んぁ？ん～俺はカズキ。ま、見ての通りのランサーだ」
そう言ってカズキは荷車の天井に当たらないように斜めに立て掛けてあるロングタスクを見つめる。
「カズキはお調子者だからユウキと気が合うかもね」
「お？」
「お？」

チヅルが言うと同時に、ユウキとカズキは向き合った。そのままグヒヒと笑う。
「チヅルとカズキはどういう関係で？」
ジュンキが尋ねると、チヅルが振り向いた。
「私とカズキ？お互いにソロだよ。気ままにパーティに入って狩りをするタイプのハンター」
ハンターは多人数で狩りを行う場合、大抵の場合は永続するパーティを組むのだが、どうやらチヅルやカズキはソロで動いているらしい。
「で、ドスイーオス狩りから戻ってきてパーティが解散になったんだけど、行く当てもなくて同じパーティにいたカズキと酒場にいたってだけだよ」
「そっか…」
「ジュンキとユウキの関係は？」
「俺とユウキ？」
ジュンキは腕を組む。
「本当はもう一人、ショウヘイっていう片手剣使いがいるんだけど、怪我しちゃってね。それで怪我に良く効くアルビノエキスを取りに行くために、こうやってフルフルを狩りに行こうとしてるんだ」
「なるほど。だからさっき酒場で深刻な顔してたんだ…」
チヅルは前屈みになっていた身体を起こす。
「仲間思いなんだね」
「当然だよ。…ユウキ、何してるの？」
「ん～？」
横を見ると、ユウキとカズキがにらめっこをしていた。理由が分からない。
「…ぷっ」
「ははは…」
チヅルが吹き出し、ジュンキが呆れたように笑う。狩場である沼地に向かう竜車の荷車の中は一気に和やかになった。

沼地では雨がしとしとと降っていた。地面はぬかるみ、足を滑らす可能性が高い狩場だが、今回の狩猟対象であるフルフルは主に洞窟の中にいるため、地面のぬかるみよりも寒さ対策の方が重要だった。
「ホットドリンク持ってきてるよね？」
「もちろん」
「あるぞ～」
「俺もある」
「…さてと、一応パーティリーダー決めとく？」
「そうだな。じゃ、ジュンキよろしく」
「…え？」
いきなりユウキに押し付けられて、ジュンキは反応が遅れる。
「そうだね。じゃあジュンキ、よろしく」
「俺も異議な～し」
「ちょ、ちょっと。よく話し合おうよ」
チヅルとカズキにも薦められてしまい、ジュンキは困惑した。どうして即席のパーティでいきなり全会一致で自分なのだろうか。
「だって俺はジュンキによく任せてたし」
とユウキ。
「ジュンキは仲間思いだし」
とチヅル。
「食事の配分、きちんとしてくれてたしな」
とカズキ。ジュンキは折れるしかなかった。

洞窟の入口でホットドリンクを全員が飲んだことを確認して、四人は中へと入った。
「うぅ…寒っ…」
吐く息が白くなるほど洞窟の中は寒い。そのせいか誰も口をきかず、一列になり進んでいく。
「フルフルは全員初めてだったよね？」

先頭を歩くジュンキが振り返って言った。チヅルとカズキは無いと答えた。ユウキは同じパーティだからもちろんジュンキは戦闘経験が無いことを知っている。

「まあ分かってると思うけど、いきなり戦闘はしないで様子を見てね。どんな動きをするか分からないし」

ジュンキは三人が何らかの意思表示をするのを見届けると、再び前を向いた。

二つ目の洞窟に差し掛かったところで、先頭を歩いていたジュンキが止まった。

「…どうしたの？」

チヅルが尋ねると、ジュンキが手招きした。ユウキ、チヅル、カズキがジュンキの隣に出てくる。

「うわ…何？あれ…」

白い塊が蠢いていた。翼が生えているところを見ると飛竜なのだろうが、鱗や甲殻といったものはなく、ぬめぬめした分厚そうな白い皮膚が身体を包んでいた。

「うえ～…」

チヅルが生理的嫌悪を催した。この飛竜には頭が無いのだ。斬り落とされた首に直接口を付けたらこうなるかもしれない。

「多分、これがフルフルだね」

「だな」

ジュンキの元気がない言葉にユウキが相槌を打つ。

「まずは様子見。散って」

ジュンキの言葉を合図に、四人は距離を置いてフルフルと対峙した。フルフルはすぐにこちらの気配に気づき、鼻（？）をひくつかせている。

「ペイントボール！」

カズキの大声が洞窟に響いた後、独特の臭気が洞窟内に立ち込めた。ペイントボールを当てたカズキに向かって、フルフルが跳ぶ。

「おっと…」
カズキは難なくそれを避けた。
「撃ってみるぞ～」
ユウキのクックアンガーが火を噴く。今度はユウキに向かってフルフルが跳んだ。ユウキは軽く避ける。
「目が見えてないみたいだね」
「まあ目が無いからな」
「閃光玉は効かないか…」
チヅルが近づいてきたので、ジュンキはフルフルに警戒しながら答える。
「攻撃してみるぞ～」
カズキはロングタスクを抜くと、フルフルに一刺し二刺し攻撃を加える。フルフルは短い尻尾を振り回すがカズキはロングタスクと一対の大きな盾でこれを防ぐ。
「いっくよ～！」
ここでチヅルがフルフルの腹の下に入り、双剣を振り回した。
「俺も一撃いくか…」
ジュンキはカズキとは反対側に回り、重い一撃を与えて離脱する。
「グオオッ！」
フルフルが呻き声を上げると、突然全身が発光し始めた。
「！？」
チヅルは慌ててフルフルの足元から離脱し、カズキは盾を構える。
次の瞬間にはフルフルがバチバチと音を立てて光り輝き、薄暗い洞窟が青白い光に包まれた。
「な、何だ！？」
ユウキも驚きの声を上げる。
「うわあっ！」
この時カズキはフルフルの発する青白い光を盾で受けていた。
「何か…ビリビリするぞっ！」
「ビリビリ？」

チヅルの頭に疑問符が浮かぶがジュンキは聞いたことがあった。これは電気というフルフル特有の攻撃だったはずだ。
「その光に触れるな！それはフルフルの攻撃だ！」
「了解っ！」
チヅルが元気に返事をすると、光の収まったフルフルに向かって駆け出した。ジュンキも後を追う。
「うりゃあああ！」
カズキが渾身の突きを入れた。フルフルが怯む。
「行くよ！鬼人化！」
チヅルは双剣の奥義、鬼人化を発動させてフルフルの足元で踊り始めた。
「らあああああ！」
ジュンキもフルフルに肉薄する。その時だった。突然フルフルが叫び声を上げたのだ。フルフルの近くにいたジュンキ、チヅル、カズキどころか離れているユウキでさえ両耳を抑えてしまう。
「ぐぅ…！」
「な、何だよ…っ！」
「…！」
この時、ジュンキはフルフルの口元に先程の青白い光が集まっていくのを見た。フルフルの向いている方には――耳を塞いで動けないユウキ。
「ユウキっ！」
ジュンキが叫んだのと、フルフルが電気のブレスを放ったのは同時だった。フルフルの放った電気のブレスは地面を這い、ユウキに肉薄する。
「ぐあああああああああああッ！！！」
電気と呼ばれる青白い光がユウキを包むと、ユウキは全身を痙攣させながらその場に倒れた。直後、再びフルフルの身体が青白く光りだす。
「まずい…っ！」

気づいた時にはもう遅く、今度はジュンキ、チヅル、カズキが青白い光に包まれる。
「ぐあああああッ！」
「きゃあああああッ！」
「うがあああああッ！」
それぞれが悲鳴を上げて弾き飛ばされる。一瞬にして形勢が逆転した。今や立っているのはフルフルだけだ。
「ぐ…くそっ…！」
全身が痙攣を起こして言う事を聞かない中で、ジュンキは顔だけを持ち上げフルフルを見つめた。するとフルフルはジュンキに向き直った。そして大きな口をグバッと開く。
「な…あ…あぁ…！」
全身から冷や汗がどっと噴き出す。まさかと思ったジュンキだがそのまさかであった。フルフルはジュンキに頭からかぶりついたのだ。
「あ…い…嫌ぁ…！」
チヅルが悲鳴を上げる。その間にもフルフルはジュンキの上半身を飲み込んでいる。
「動け…動けぇ…！」
チヅルの身体は徐々に麻痺が解けていっていた。
「早く…早く…！」
そしてようやく立ち上がった時、ジュンキはもう片脚しか見えていなかった。フルフルの白い皮膚の向こうに、ジュンキの深紅のレウスシリーズが見て取れる。
「あ…！」
ここでチヅルは気づいた。ジュンキの深紅のレウスシリーズの色が見えるくらい、皮膚が薄いのだ――フルフルの首は。チヅルはインセクトオーダーを構える。
「ジュンキ、今助けるよ！」
チヅルはフルフル目掛けて飛び出した。そしてフルフルがジュンキの片脚を完全に飲み込むと同時に、チヅルはフルフルの首を一閃し

た。フルフルのブヨブヨとした白い皮膚が斬り裂かれ、血が噴き出す。チヅルはその中に手を入れた。そしてジュンキの手を掴む。

「あ…！」

しかしフルフルの唾液か何かで滑り、ジュンキは胃袋の方へと落ちてしまった。

「うりゃあああ！」

ここでようやく回復したカズキがフルフルを突く。ユウキの銃声も聞こえ始めた。

「食らえやあああああ！」

カズキが押し込むと、フルフルの巨体が倒れ込んだ。つかさずチヅルがフルフルの腹を切り裂き、鼓動する臓器を斬りつけた。

「ジュンキ…っ！」

息絶えたフルフルの心臓から噴き出す血液を浴びながらも、チヅルはフルフルの胃袋を剥ぎ取りナイフで割いた。胃液がドボドボ流れでてくるのも構わず中に手を入れ、ジュンキを引きずり出す。

「ジュンキーーー！」

「生きてるか！」

ユウキとカズキも慌てて駆け寄る。

「――生きてるよ」

ジュンキは上半身を起こすと、レウスヘルムを取った。フルフルのやけに粘つく胃液が滴り落ちる。

「ジュンキっ！」

「チヅル…わっ！」

突然チヅルがジュンキに抱きついた。ジュンキの顔が赤くなるが、チヅルは泣いていた。

「よかった…死んじゃうかと思ったんだよ…」

ジュンキはこういう時にどうすれば良いのか分からず――とりあえずそっと抱き返した。やがてチヅルの嗚咽が収まっていくのを悟り、ジュンキはチヅルを開放した。

「さ、剥ぎ取って街に戻ろう？」

チヅルは涙を拭うと立ち上がり、剥ぎ取りナイフを構えた。

「ふへ～。ジュンキってフルフルに食べられたことあるんだ」

クレハの青い瞳が驚きに見開かれていた。当のジュンキは複雑な表情で天井を見上げていたが、ショウヘイやユウキ、チヅルにカズキは懐かしむように笑っていた。ここでクレハはあることに気付き、左隣に座っているチヅルの腕を突付く。そしてチヅルの耳元で囁いた。

「なんだ、ちゃんとやってるんじゃん」

「え？」

「ジュンキと抱き合ったりしてさ」

触れてもいないのに熱気を感じるくらいにチヅルの顔が赤くなった。

「ちょ…っ！クレハちゃん！あれは、その、ジュンキが生きててよかったな～っていうただそれだけで…！」

ここでチヅルはとてつもなく大きな声を出していたことに気付いた。全員の目が自分に向けられている。

「チヅル…？」

ジュンキに心配されてしまい、チヅルの顔がさらに赤くなる。

「つ、次の話！ほら、ショウヘイが治ってドンドルマに行ったあの話！」

チヅルはそう言うと慌てて昔話の続きを始めてしまった。

MH1st　第2章　竜人の足跡　09

ミナガルデの街に戻ったジュンキ、ユウキ、チヅル、カズキの四人は酒場のカウンターでベッキーのチェックを受け報酬金を受け取ると、その足でショウヘイが入院しているハンター専用の病院へと向かった。先に診察室でフルフルのアルビノエキスをショウヘイの担当医に渡した後、四人はショウヘイの病室を訪れた。知らないハンターが二人もいたせいか、ショウヘイの黒い瞳が見開く。

「あちらの二人は…？」

「ああ、チヅルと、それからカズキ。一緒にフルフル狩りを手伝ってもらったんだ」

ユウキがチヅルとカズキを紹介するとチヅルは小さく礼をし、カズキはショウヘイの手を握るとブンブンと上下に振った。そして他愛のない会話が続き、やがてチヅルとカズキが名残り惜しそうにショウヘイの病室を出ようとした時、ジュンキが二人を呼び止めた。

「何？」

「これからも、一緒に狩りにいきませんか？」

ジュンキの発した言葉にユウキ、チヅル、カズキ、もちろんショウヘイも驚いた。

「…駄目かな」

「…俺は構わない」

ショウヘイが微笑みながら言う。

「…実は俺もそれ言おうかと思ったんだよな」

とユウキ。

「…いいのかな？こんな私だけど」

と内心すごく嬉しいチヅル。

「俺は最初からそのつもりだったぜ！」

と笑うカズキ。全員の意見が一致した。

「と言っても、まだ回復には時間がかかるんだろ？ショウヘイ？」

「…ああ。もう2，3週間はかかるそうだ。その間は四人で狩りに行ってくれ」
ショウヘイは残念そうに言った。
「じゃあ早速…俺今ちょっと素材が必要なモンスターがいるんだけど」
と遠慮無くカズキが言ったので、病室が笑い声に包まれた。

ショウヘイの病室からの帰り道。ゲストハウスへ向かう途中の道で、チヅルはいろいろなことを考えていた。これからの固定パーティとしての活動。気さくなユウキに冷静なショウヘイ。だが何より、ジュンキと一緒に居られる。そう思うと胸が高鳴る自分に気が付いて、チヅルは赤面した。
「やだ…私、何考えてるんだろう…」
これはもしかしたら恋というやつなのかもしれない。一体ジュンキの何処に惹かれたのだろうか。
「チヅル？」
「ふえっ！？」
隣を歩くジュンキに声を掛けられて、チヅルは飛び上がった。
「どうかした？顔真っ赤にして。もしかして風邪とか…？」
「ううん！何でもないの！今日はいい天気で暑いくらいだからかな～？」
チヅルはそう言って雲ひとつ無い青空を仰いだ。

ショウヘイの怪我は思ったより早く治り、今は五人で酒場のテーブルに座っている。これから、今後の狩りについて話し合うのだ。
「五人か…不吉な数字だな」
カズキが険しい顔をして言った。ハンターの間では五人というのは縁起が悪いとされている。
「そもそも支給品は四人を前提として用意されてるんだよな」
とユウキ。

「…仕方ない。これからはローテーションで一人は留守番にしよう」
ジュンキが意見を出すと、ユウキとチヅルは頷いた。カズキはためらっていたが、やがて頷く。しかしショウヘイは頷かなかった。
「…ショウヘイ？」
「…よし、決めた」
ジュンキがショウヘイの顔を覗くと同時に、ショウヘイは考えるために閉じていた瞳を開いた。
「俺はパーティを抜けることにするよ」
「…え？」
ショウヘイの言ったことを理解するまでに、ジュンキは数秒かかった。
「パーティを抜ける？どうして？」
ジュンキが問いただすと、ショウヘイはいつもの静かな笑みを浮かべた。
「もう少し自分を鍛えたいんだ。もう怪我はしたくないし」
「…分かった」
ショウヘイの回答にジュンキは完全に納得出来たわけではないが、誰にもハンターの意思を否定することは出来ない。
「それで、何処に行くんだ？ココットに戻るのか？」
ユウキが尋ねると、ショウヘイは首を横に振った。
「前にベッキーから聞いたんだけど、ハンターズギルドの総本山、ドンドルマに行こうと思う」
「ドンドルマか～」
ここでカズキが口を開いた。
「俺も行くかな～」
「カズキが？どうして？」
今度はチヅルが尋ねた。カズキは恥ずかしそうに鼻を擦る。
「好奇心だよ」
カズキのあまりにも単純な動機に、他の四人は小さく笑った。

翌朝、荷物をまとめたショウヘイとカズキはミナガルデの街を出発した。再び合流するまでに、わずか半年もかからないことを知らずに。

「ここまでかな」
ユウキはそう言って口を閉じた。
「この後半年間は適当な狩りをしていたんだけど…。シュレイド王国の軍隊がやってきてジュンキを拉致しようとしたからドンドルマに逃げて、ショウヘイやカズキと合流して今に至るの」
「なるほど～。うんうん、よく分かったよ。ありがとう」
昔話を聞き終えて、クレハは嬉しそうに礼を述べた。
「そういえばクレハちゃんは？」
「へ？」
「クレハちゃんにも昔話ってあるでしょ？聞かせてほしいな～」
チヅルの言葉にジュンキやショウヘイ、ユウキにカズキも賛同したようで、クレハが語り出すのを待っている。しかし、クレハは難しい顔をした。
「う～ん…私の昔話か…。母さんが死んだところから始まるんだよね…」
クレハの言葉を最後に、部屋は静まり返った。
「と、ところでジュンキはどうして茶髪の竜人って呼ばれてるの？」
チヅルが慌てて話題を逸らす。
「そういえばそうだな。どうしてだ？ジュンキ」
「あ～俺も気になる」
チヅルの質問にユウキとカズキが乗っかる。ジュンキは眉間に皺を寄せていたが、やがて口を開いた。
「…多分だけど、リオレウスばっかり狩ってたからじゃないかな？」
「ジュンキはあのリオレウスを探していたからな」

ショウヘイが付け加える。あのリオレウスとはもちろんジュンキが初めて戦ったリオレウスのことである。
「雄火竜リオレウスばかり狩っている茶髪の人間。これが縮まって茶髪の竜人になったんじゃないかな――」
ここでジュンキの言葉が途切れた。
「…みんな、いいかな？」
突然ジュンキが真剣な声を出したので、ショウヘイ達にも緊張が走った。
「ああ。全員聞いてる」
ショウヘイの言葉にジュンキは一旦瞳を閉じ、そしてゆっくりと開いた。
「…今から話すことは、とても信じられるものじゃないけど、最後まで聞いて欲しいんだ」
「…言ってみてくれ」
長い沈黙。そしてジュンキは口を開いた。
「…まず、俺は人間じゃない」
誰も返事をしなかった。頷いたり、驚いたりもしていない。
「…三日前に戦ったリオレウス。俺はあいつと会話した。そして言われたよ。お前は人間ではなく、竜人という太古の種族の末裔だって」
「…続けて」
「…確かにそう考えた方が辻褄が合うんだよ。二年前に俺を殺さなかった理由。絶対に死ぬと思われた怪我からの復帰の理由。…今もこうして生きてる理由。竜の強靭な精神力と回復力と筋力を持ち合わせている竜人ならではだよ」
「…続けて」
「皮肉だよな。勝手に名付けられた茶髪の竜人っていう二つ名。まさか本当に竜人だったなんてさ」
ジュンキは小さなため息を吐いてショウヘイ達の方を向いた。全員が難しい顔をしている。

「…にわかには信じられねぇよな」
とユウキ。
「そうだよな。俺は信じられないな」
と首を振るカズキ。
「…ジュンキ。頭、強く打ったの？」
残念そうな顔をするチヅル。ジュンキは目を伏せた。
「…信じろって言う方が無理だってことは分かってる。だけど、一応言おうと思ってね」
「俺は信じるぞ」
ショウヘイの言葉に、ジュンキの青い瞳が見開いた。それを見たショウヘイが微笑む。
「ジュンキはこれまで嘘を吐いたことがない。…仮に嘘をついてもジュンキならすぐ分かる。それに世界は広い。人の言葉を理解するリオレウスが一匹くらいいても不思議じゃないだろう」
「いや、ショウヘイ…」
ここでジュンキが止めに入った。
「リオレウスが人の言葉を理解したんじゃなくて、俺が竜の言葉を理解したんだ…」
「…この世界は広い。竜の言葉を理解するハンターが一人くらいいても不思議じゃないだろう」
ショウヘイが言い直したので、ジュンキは思わず吹き出した。
「私はそんなことどうでもいいけどな～」
クレハの能天気な声に、全員の視線が集まる。
「だって人間でも竜人でもジュンキはジュンキでしょ？だったらそれでいいじゃない」
「そうだよな。ジュンキはジュンキだな」
カズキはうんうんと大きく頷いた。
「これからみんなはどうするんだ？」
「ジュンキが回復するまで、この村の依頼を受けているよ」
ジュンキの質問にショウヘイは笑みを浮かべながら答えた。

「…ぼちぼちお昼だな。昼飯でも食いに行くか」
「わ～い♪」
ユウキの提案にクレハが勢い良く立ち上がる。
「ジュンキ。早く治ってね」
「俺は竜人だからすぐ治るよ」
ジュンキはそう返事を返すと、チヅルは微笑んだ。

果たしてジュンキはこの後わずか二十日で完全回復してしまい、ショウヘイ達を驚かせることになる。

ＭＨ１ｓｔ　第２章　竜人の足跡　０９（後書き）

第２章はここで終了です。まだまだ続きます。これからもよろしくお願いします。

ＭＨ１ｓｔ　第３章　龍からの世界観　０１（前書き）

第三章突入です！ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　１ｓｔ　Ｓｔｏｒｙもいよいよ大詰めとなります。ぜひ最後までお付き合い下さい！

MH1st　第3章　龍からの世界観　01

ジュンキの怪我が治ると、六人は出来る限り急いでドンドルマの街へと戻ることにした。ココット村の集会場内にあるハンターズギルドの出張所を経由してドンドルマのユーリに通知を出しておいたから問題は無いと思っているが、早く帰ることに越したことはない。しかしそのドンドルマへ入ってみると、ひと月前とは打って変わって物々しい雰囲気になっていた。

「一体何があったんだ…？」

「分からない。とりあえず、今はユーリのところへ行こう」

ショウヘイの提案に従って、六人はひとまず大衆酒場へと向かった。酒場の中は相変わらず騒がしかったが今ひとつ活気が無いように見受けられた。カウンターに向かうとそこにはいつものユーリの姿があった。

「ただいま」

「遅かったわね～。どうして特産キノコの納品依頼で一ヶ月もかかるのかな～？」

「う…」

ジュンキは言葉に詰まる。だがユーリは事情を知っているはずだ。

「ま、どうしてかはちゃんと手紙を受け取っているので知ってますけどね。無茶はいけませんよ？」

「…はい」

ユーリの忠告に、ジュンキは素直に頷くしかなかった。

「ユーリ。一体何があったんだ？」

ショウヘイの質問に、ユーリの顔が曇る。

「…実はね、あなた達がこの街を離れている間に――」

「――古龍がここに向かってきているのよ」

ユーリの背後から聞き慣れた声が聞こえて、ジュンキ達は驚いた。ユーリの背後から出てきた人物。それはミナガルデの酒場で仕事を

しているはずのベッキーだったのだ。
「ベッキー！」
チヅルとクレハが声を合わせて驚きの声を上げる。
「久しぶりね。みんな元気そうで安心したわ」
「どうしてここに…？」
「緊急事態でね。ミナガルデの代表として召喚されたのよ」
ベッキーは少し俯いてジュンキの問い掛けに答えた。
「…古龍って言ったな。説明してもらえるか？」
ショウヘイの真剣な声に、ベッキーは頷いた。
「今、このドンドルマに向かって古龍ラオシャンロンが向かってきているの」
「ラオ…シャン…ロン…？」
カズキが首を傾げたが、それは他の五人も同じだった。ラオシャンロン。聞いたことがない名前だった。
「歩く山とも言われた巨大な古龍よ」
ユーリが付け加える。
「だったら早く避難しないと。酒場を経営してる場合じゃないんじゃないか？」
ユウキがそう言うと、ベッキーは微笑んだ。
「大丈夫よ。この街は対古龍設備が整っているから。ラオシャンロンはこの街の南方にある砦で防ぐことになっているわ」
街の雰囲気が暗いのはどうやら古龍がこの街に迫ってきているからのようだ。確かに落ち着けたものではないだろう。
「そこでお願いなんだけど…」
「古龍撃退に協力して欲しい。でしょ？」
チヅルが笑顔で答えると、ベッキーとユーリが「そうなのよ」と頷いた。
「みんな、いいよな？」
「もちろん」
「あったりまえさ！」

「頑張らなくちゃね！」
「俺に任せとけ！」
「わくわくする～！」
ジュンキは全員の肯定を確認すると、古龍撃退依頼に参加することを決めた。
「だけど一つのパーティは最大四人までなんだけど…どうするの？」
「…少し時間をくれないか？みんなと話し合いたい」
「砦への出発は二日後だから、それまでに決めておいてね」
「今すぐ決めるよ」
そう言って、ジュンキ達は丁度空いていた長テーブルに座った。
「さて、どうする？」
「やはりここはバランスだな」
ジュンキが発言を促すと、真っ先にショウヘイが意見を出した。
「バランス…俺は大剣だけど」
とジュンキ。
「俺は太刀だ」
とショウヘイ。
「ライトボウガン」
とユウキ。
「双剣」
とチヅル。
「ランス」
とカズキ。
「双剣で～す」
とクレハ。
「…大剣、双剣、ライトボウガン？」
「…太刀、双剣、ランス？」
「大剣と太刀は似てるから被るのは良くないだろ」
「それに太刀、双剣、ライトボウガンだとガード出来る武器がないしね」

「…じゃあこれでいこう」
ジュンキが意見をまとめていくが、ここで一つ問題が出てきた。それは双剣使いのチヅルとクレハがどちらに入るかだ。
「どうする？二人で話しあって決めてくれるかな？」
ジュンキにそう言われて、チヅルとクレハは向かい合った。チヅルの目が懇願するように輝いているのを見て、クレハは笑顔で頷いた。
「じゃあ私はショウヘイとカズキの方に行くね」
「チヅルは俺とユウキの方になるけど…いい？」
「うん！頑張るよ！」
チヅルがとても嬉しそうに言った。こうして古龍撃退戦はジュンキ、チヅル、ユウキのパーティとショウヘイ、クレハ、カズキのパーティの二つに別れて参加する事になった。ユーリにこのことを伝えると、長旅の疲れもある上に古龍撃退戦の準備もしなければならないので、六人パーティは解散となった。

ＭＨ１ｓｔ　第３章　龍からの世界観　０２（前書き）

今回は長いですよ。

MH1st　第3章　龍からの世界観　02

二日後、ジュンキ達六人の姿は砦の中にあった。この砦は元々台地だった場所を龍が通れるくらいまで掘り下げて作られたものでとても深い。しかしこのような乱開発を行ったためか山肌は荒れてしまい、木が一本も生えていない。地面はぬかるんでおり、時折深い霧に包まれてしまうのは自然の人間に対する怒りか。この龍の通り道の終点には巨大な門があり、いつもはここを通る通行人のために開け放たれているのだが今はしっかりと閉じられている。ここを突破されてしまえばドンドルマの街は瓦礫の山と化してしまう可能性が非常に高くなる。それを防ぐために、この砦には数多のハンターが集まっていた。数は百人を超えるだろう。

「しっかしよくこんなに集まったもんだよな～」

このような状況下でもユウキは声色一つ変えない。

「街を失いたくないからな。当たり前だろう」

ショウヘイが呆れながらも言う。

「俺は一人だったら逃げ出しちゃうな～」

とカズキ。

「でも、今は私達がいるからね」

とカズキを肘で突きながら言うクレハ。一人のハンターがラオシャンロンの接近を知らせてきたのはこの時だった。

「ガンナーはエリア1の高台から狙撃してくれ！」

誰かが叫ぶと、ガンナー達が移動を始めた。

「お、じゃあ俺も行ってくるかな」

ユウキも例外ではなく、クロオビボウガンを担ぐ。

「先にエリア2で待ってるからな！」

ジュンキが走り去るユウキの背中に向かって言うと、ユウキは左手を挙げて答えた。

「俺達も行こう」

ジュンキの言葉に全員が頷き、エリア２へと移動を始めた。この砦は狩場と同じくエリア番号が振られており、高台となっていてガンナーのみ攻撃ができるエリア１。古龍を攻撃するためのエリア２からエリア４。中間地点であるエリア３には木造の砦が道を塞いでいる。そして最終防衛ラインのエリア５。このエリアの巨大な門を突破されればお終いである。ジュンキ達がエリア２に入ると、そこには既に多くのハンター達が待機していた。

「パーティは二つに分けたけど、基本近くにいよう」

「ああ。そのほうがいいだろうな」

ジュンキの提案に、ショウヘイが乗ってくれた。

「ユウキ、大丈夫かなぁ」

「大丈夫だと思うけどな～」

心配するチヅルとは打って変わって、全く心配していないクレハであった。

一方のユウキは足の裏から伝わる振動を感じていた。

「来るな…」

徐々に振動が大きくなっていくと、ガンナー達は霧の向こうに意識を傾けた。そして、ついにその姿が現れる。

「おお…」

「なんて大きさだ…」

ガンナー達の口から率直な感想が漏れる。

「歩く山ね。あながち間違ってないな、こりゃ」

ユウキは苦笑いしながらペイント弾を撃った。脇腹で弾けて独特の臭気を漂わせる。これでジュンキ達にも接近を知らせられるだろう。

ユウキが撃ったペイント弾を皮切りに、ガンナー達が弾や矢を撃つ放つ。しかしラオシャンロンは振り向きもせず、ただ黙々と進行を続けた。

「勝てる気がしないなぁ…」

ユウキは愚痴をこぼしながらも、少しでも勝率を上げるためにクロ

オビボウガンのスコープを覗いた。

「ペイントの臭いだ」

「あ、本当だ」

カズキがいち早くペイントボール、もしくはペイント弾の臭いを嗅ぎつけた。

「いよいよだな」

「ああ。正直自信無いけどね」

ショウヘイの声に軽く答えるジュンキ。そこにクレハが近づいてくる。

「ねえジュンキ。リオレウスと話が出来たのならラオシャンロンとも話が出来ないの？」

「え？どうして？」

「だってジュンキが、進路を変えて下さ～い、って言って通じたら即解決でしょ？」

言われてみればそうである。竜人であるジュンキがラオシャンロンを説得すればよいのだ。しかし、ジュンキは苦笑いするだけでクレハの意見を肯定しなかった。

「いや、リオレウスとは話せてもラオシャンロンと話せる自信は無いよ。…というより信じてないでしょ？俺が竜人だってこと」

ジュンキがそう言うと、クレハは難しい顔をした。

「う～ん。信じたいけど、どうしてもこの目で見ないと信じきれないんだよね～。ダメ元でいいからラオシャンロンに話しかけてみてよ」

「まあ余裕があったらね」

「臭いがきつくなってきた。そろそろ来るぞ」

ショウヘイの声に、ジュンキとクレハはラオシャンロンが来る方向を向いた。今は深い霧で見えないが、ペイントの臭気は一段と強くなってきていた。そしてガンナー達がエリア２へと戻ってくる。その中にユウキの姿もあった。

「ただいま～！」
「ユウキ、どうだった？」
チヅルが尋ねると、ユウキは首を横に振った。
「でかいね。確かにあれは歩く山だ。これだけのガンナーで攻撃したのに、まったく反応を返さなかったよ」
ユウキの感想の前に押し黙るジュンキ達の雰囲気を吹き飛ばすように、突然ラオシャンロンの到着を知らせる声が響いた。
「今は全力で当たるしかない。行こう」
ジュンキがそう言うと、他の五人はしっかりと頷いた。

ジュンキ、ユウキ、チヅルの三人はラオシャンロンの進行方向向かって右側に向かった。
「俺は後ろで撃ってるからな！」
ユウキはそう叫んでラオシャンロンから距離を取ると狙撃を始めた。
「しっかしおっきいね」
「確かに歩く山だよ」
チヅルに声を掛けられて、ジュンキは苦笑いしながら答えた。
「じゃ、頑張ろう！」
「おう！」
チヅルはインセクトオーダー改を抜き放ち、ジュンキはアッパーブレイズを構えた。

一方のショウヘイ、カズキ、クレハはジュンキ達三人とは反対側へと向かった。
「各自、怪我だけはしないようにな」
「おう！任せとけ！」
「こんな動きの鈍い奴、大丈夫だよ！」
ショウヘイの忠告を聞きながら各々の武器を抜くとラオシャンロン目掛けて走り出した。
「はあっ！」

「おりゃっ！」
「たあっ！」
ショウヘイの斬破刀が、カズキのブロスホーンが、クレハのツインハイフレイムが、ラオシャンロンの甲殻を斬りつけるはずだった。しかしラオシャンロンの甲殻の硬さに、全員の武器が弾かれる。
「な、なんて硬さだ…」
「諦めるな。相手は同じ生物。絶対どこかに弱点があるはずだ」
弱音を吐くカズキを激励するショウヘイ。しかし他のハンター達もラオシャンロンの甲殻の硬さには悲鳴を上げていた。

今回このラオシャンロン撃退戦に参加したハンターは百人を超えていたが、それでもラオシャンロンを止めることは出来ず、エリア２を突破されてしまった。エリア間は直接移動することは出来ないので、エリア３へと移動するには一度砦の中を通ることになる。一度に百人が通るように計算されていない砦の通路なので渋滞してしまい、ジュンキ達がエリア３に入った時には既にラオシャンロンも到着していた。
「まだまだ元気だなぁ」
「そうだね～」
「ダメージは蓄積しているはずだ。行くぞ」
愚痴をこぼすカズキとクレハを連れて、ショウヘイは飛び出して行った。
「私達も頑張ろう！」
「おう！」
「もちろん」
チヅルの励ましに答えるユウキとジュンキ。このエリア３でも、ジュンキ、ユウキ、チヅルとショウヘイ、カズキ、クレハはラオシャンロンを囲むように陣取った。その他百人を越すハンター達がラオシャンロンを止めようと武器を振るい、あるいは弾や矢を撃ち放っているが、ラオシャンロンは黙々と歩み続けている。だがここでよ

うやく、ラオシャンロンの歩みが止まった。ラオシャンロンの通っているこの通路を塞ぐ形で造られた木造の砦に差し掛かったからだ。ハンター達からは歓声が上がる。

「今だー！」

「やれー！」

ハンター達の攻撃を一身に受けても微動だにしないラオシャンロンだったが、ここで進行方向右側へと巨大な身体をくねらせた。

「あれは…！」

ジュンキはこのラオシャンロンの動きを見たことがあった。まるで体当たりをするガノトトスのようである――そう思ってハンター達に警告を発しようと思ったときには遅かった。ラオシャンロンはガノトトスの如く木造の砦に体当たりしたのだ。ハンター達からは悲鳴があがり、木造の砦は半壊する。そしてラオシャンロンは再び体当たりし、木造の砦を木っ端微塵に破壊した。そのまま、何事も無かったかのように歩みを再開する。その後姿を、誰一人動かずに見つめていた。

木造の砦の中には誰も居なかったようで死者は出なかったが、それでもハンター達の士気を打ち砕くには十分効果があった。そのせいかエリア４での戦いはハンター達には勢いがなく、エリア２の時よりも早くラオシャンロンの通過を許してしまった。そして運命のエリア５。ドンドルマへと通じる巨大な門の上の足場に、ジュンキの姿はあった。じっとラオシャンロンのやってくる霧深き通路を見つめている。

「ジュンキ…」

「あ…何？チヅル」

チヅルに声を掛けられて、ジュンキは我に返った。

「ここを突破されたら、ドンドルマの街は消えちゃうんだよね…」

「…大丈夫。あれだけの攻撃を与えたんだから、きっとラオシャンロンも諦めて帰ってくれるよ」

ジュンキはラオシャンロンが来る通路とは別に設けられた、退却用通路を見つめながら答えた。
「ところでユウキは？」
「ユウキなら、ほら、あそこ」
そう言ってチヅルが指差した先には、ガンナー、特にライトボウガン使いが横に一列に並んでいて、その中に真剣な表情のユウキもいた。
「ショウヘイとカズキとクレハちゃんは下だよ」
先ほど緊急に行われた会議で、ジュンキとチヅルは門の上に備え付けられたバリスタや大砲を任されていた。ユウキはガンナーとして、ショウヘイとカズキとクレハは続けて直接攻撃を担当している。――ラオシャンロンの咆哮が響いたのはこの時である。この場にいるハンター全員に緊張が走った。
「じゃ、私はバリスタを打つからね」
「気をつけて」
「ジュンキもね」
チヅルはそう言い、ジュンキから離れる。エリア５での、最終決戦が幕を開けた。直接攻撃を担当しているハンター達が、ラオシャンロンに襲いかかる。あの中に、ショウヘイとカズキとクレハもいるはずだ。しかしハンター達の応戦虚しく、ラオシャンロンは進行を続ける。
「ガンナー構え！撃てっ！」
ラオシャンロンがガンナーの射程に入ると、ガンナー達が一斉に弾や矢を撃ち放つ。ジュンキもチヅルとは別のバリスタ台に向かう。自分の身長を越すバリスタの槍をセットし、放つ。しかしラオシャンロンの硬い甲殻に弾かれているのがここからでも見えた。
「効果は薄いか…」
それでも、やめる訳にはいかない。ジュンキは黙々と撃ち続けた。
ラオシャンロンの歩みは止まらず、ついに門の手前まで到達した。

先程の木造の砦を破壊した時のように、体当たりをする。頑丈な石造りの砦のはずなのに、たった一撃で大きな亀裂が何本も走る。この砦が破られるのも時間の問題だった。

「チッ…！」

ジュンキは思わず舌打ちする。このままでは突破される。何とかしなければ。そう思っている間にも、ラオシャンロンの体当たりが来る。

「うわっ！」

ジュンキのすぐ横にあった石造りの壁が崩れた。門を見ると、少し歪んでいる。

「くそ…。どうにもならないのか…！」

ジュンキは何とか希望を探すが、それを打ち砕くようにラオシャンロンは後ろ脚で立ち上がった。砦の上のハンター達から悲鳴が上がる。ラオシャンロンは全身を使って体当たりをする気なのだ。ジュンキは慌てて背中のアッパーブレイズを盾にする。だがラオシャンロンの体当たりはジュンキの身体を簡単に弾き飛ばした。ジュンキは真横に吹き飛び、岩壁に背中から激突する。

「がは…っ！」

レウスヘルムが吹き飛び、口から唾液が飛び出した。視界に映るのは四散する大剣アッパーブレイス。ジュンキはそのまま床に崩れ落ちた。横を見ると、同じような状態のハンターが何十人と床に転がっている。

「チヅル…！ユウキ…！」

チヅルとユウキの姿も見つけてしまう。砦の方を見ると、無残にも半壊していた。壁は崩れ、床には穴が開いているところもある。そしてラオシャンロンを見ると、再び体当たりをしようと身構えるところだった。ジュンキは全身を襲う痛みに耐えて立ち上がると、ラオシャンロンの正面に立った。ラオシャンロンの体当たりが目の前に迫る。後ろでチヅルの声が聞こえた気がしたが、振り向くわけにはいかなかった。

「止まれえええええええええええッ！！！！！」
ジュンキは力の限り叫んだ。目と鼻の先に迫ったラオシャンロンの身体は止まり、ジュンキと向きあう位置まで後退する。そして、ジュンキにのみ聞こえる声が響いた。
「…竜人か？…なんと懐かしい。…もう数百年も姿を見なかったものだ」
「…ラオシャンロン。お願いだ。この先には人の暮らす街がある。どうか進路を変えてくれないか？」
ジュンキの言葉に、ラオシャンロンはすぐには答えなかった。やや時間を置いて、ラオシャンロンの口が開く。
「…それは、すまないことをした。私は身に降りかかる災いから逃れることのみを考えた故に、危うく意味も無く人の恨みを買うところであった。竜人よ、感謝する」
ラオシャンロンに礼を言われたことよりも、ジュンキは引っかかるところあった。
「…災い？災いって何だ？」
「…竜人よ、気をつけるがよい。ヌシの存在意義が問われようとしている」
ラオシャンロンはそう言うと身体を倒し、前脚を地面に着けた。そしてゆっくりと進路を変え、ラオシャンロンが歩んできた通路とは別に設けられた退却用通路から、深い霧の中へと消えて行った。ジュンキは小さくため息を吐くと、糸が切れた人形のようにその場に倒れた。

ＭＨ１ｓｔ　第３章　龍からの世界観　０３（前書き）

ものすごく長いですよ。

MH1st　第3章　龍からの世界観　03

ジュンキが目を覚ますと、そこは揺れる竜車の中だった。身体を起こすと、すぐ仲間の姿が目に入った。
「ジュンキ、もう起きて大丈夫なの？」
「ああ、何とかね」
もっとも近くにいたチヅルに支えられる。
「ここは…？」
「ドンドルマへ戻る竜車の中だ」
少し疲労感が伺えるカズキが答える。
「ジュンキ、どこか怪我とかしていないか？」
ショウヘイの問い掛けに、ジュンキは大丈夫と首を振る。
「どうやら大怪我は誰もいない様だな」
ユウキは嬉しそうに頷いた。同じく嬉しそうに微笑んでいるクレハの口が開く。
「聞いたよ～。ジュンキがラオシャンロンを追い返したって」
「ああ、正しくはラオシャンロンと話をして説得したんだけどね」
ジュンキの言葉に、ショウヘイ、ユウキ、カズキ、クレハは驚きの表情を隠さなかった。
「私、見てたよ。ジュンキがラオシャンロンと話をしていたところ」
驚き、そして少々の疑いが見て取れる表情をしている四人を説得するように、チヅルが言葉を繋ぐ。
「ジュンキ、明らかに人間の言葉じゃない言葉を使ってた」
チヅルの言葉を最後に、誰も口を開かなかった。竜車の車輪がゴトゴトと立てる音がやけに大きく聞こえる。
「…それでも」
突然クレハが言葉を発したので、全員がクレハの方を向いた。
「ジュンキはジュンキ。でしょ？」
クレハの言葉にユウキとカズキは大きく頷き、ショウヘイとチヅル

は小さく頷いた。当の本人は微笑むだけだった。微笑んだが…すぐに困った顔をした。

「どうしたの？」

「あ、いや…俺の武器が壊れてしまったなって思って…」

先のラオシャンロン撃退戦の時に大剣アッパーブレイズがラオシャンロンの体当たりを受けて砕け散ったのをジュンキは見ていた。

「ああ、それなんだけど…」

ユウキはそう言うと、背中から大きな麻袋を取り出した。重そうにジュンキへと投げる。それはジュンキの目の前に派手な金属音を立てて落ちた。

「出来る限り集めたんだけど…」

「…ありがとう」

ジュンキは中身を見なくても何が入っているか分かった。粉々に砕けた大剣アッパーブレイズだ。

「武器が無いことにはハンターは務まらないぜ。どうする気だ？」

カズキのもっともな質問に、ジュンキは腕を組んで考えた。ふと、ある思いが浮かんでついショウヘイを見てしまう。ショウヘイは首を少し傾げた。

「どうした？」

「あ、いや…太刀を使ってみるのもいいかなって思って」

「太刀を？」

ショウヘイの問い掛けに、ジュンキは頷いて答えた。

「…元々太刀は大剣から派生した武器だから、大剣使いのジュンキでもきっと扱えるはずだ」

「そう？なら街に戻ったら一本作ってみようかな」

「しかし、慣れない武器で狩りに出るのは危険だと思うぞ」

「もちろんそれは分かってるよ。そこはショウヘイ先生に教えてもらうつもりだから」

ジュンキの言葉に、ショウヘイは小さく笑った。

ドンドルマの街はお祭り騒ぎだった。ラオシャンロンの撃退成功を祝って大衆酒場では宴会が開かれ、ベッキーやユーリは大忙しだった。並行してラオシャンロン撃退戦の報酬が配られたので、大衆酒場の中は歩くのにも困難な程人が集まっていた。そこにジュンキ達が到着すると、火に油を注いだようにさらに盛り上がった。無数の――ほとんどがむさ苦しい男だが――ハンター達にジュンキは大衆酒場の中央へと引き摺るように連れて行かれてしまい、胴上げ三回が行われた後、頭からビールを何杯も掛けられていた。その光景を見て、ショウヘイ達は絶句していた。

「ははは…」

「まあ、事実ジュンキが一人でラオシャンロンを追い返したんだ。こうなるわな」

「俺達は静かに乾杯といこう」

ショウヘイの提案に乗って、五人は酒場の隅に席を取り、おとなしく乾杯した。やがてビールまみれのジュンキが戻ってくると、しばらくの間狩りは休みという事にして今日は解散になった。

翌日、まだお祭りムードが抜けないドンドルマの街中を、チヅルは一人武具工房の方へと向かっていた。昨日ラオシャンロン戦の報酬金と報酬素材が配られたのだが、その中に飛竜の卵程の大きさの塊が含まれていた。俗に言うところの「太古の塊」である。長い年月を経て出来上がった神秘的なこの塊は、大量の大地の結晶を使って研磨することにより元の形を復元できる。武具工房の職人は一晩で出来ると言っていたので今から受け取りに行くのだ。

「一体何が出るのかな～」

わくわくしながら武具工房の中へと入る。そこはまるで火山のように暑い場所だ。チヅルの額に小さな汗が浮き出る。

「こんにちは」

まだお祭りムードが抜けきっていないせいか、いつもは並ぶカウンターには誰もいなかった。

「お、来たね！出来上がってるよ！」
威勢のいい武具職人はカウンターの下から一対の剣を取り出した。
「うわ…！」
「正直俺も驚いたね。初めて見るよ、これは」
武具職人は双剣のカタログを開きながら言った。チヅルの前に出されたのは双剣だった。だがこれはチヅルも見たことがない。
「え～っと…あった。これだよ、これ」
武具職人はそういってカタログの中の一対の双剣を指差す。
「銘は封龍剣・超絶一門。太古の武器だよ。ラッキーだね、あんた」
チヅルは恐る恐る両手に握る。恐ろしく軽い。
「ありがとう。大事に使います」
「はっはっは、太古の武器は絶対に刃こぼれしないよ！」
武具職人の言葉を聞き終わらないまま、チヅルは武具工房を後にした。その表情には満面の笑みが広がっていた。

チヅルと入れ違いになる形で、今度はジュンキとショウヘイが武具工房を訪れていた。ジュンキの太刀を作るためと、大剣を修理するためである。カウンターに着くなり、ジュンキはまず大剣の修理をお願いした。しかし武具職人の顔は険しいものだった。
「これは派手にやらかしたな～。修理は無理だ。作り直すしかないなぁこりゃ」
「うそ…」
「ジュンキ、大剣の方は時間をかけて1から作り直すしかない。今は太刀の方を考えよう？」
「…そうだな」
大剣アッパーブレイズの方はとりあえず置いておいて、ジュンキはショウヘイと一緒に太刀のカタログを開いた。大剣もかなりの種類があったが、太刀もかなりの種類がある。
「うわ…」
「さ、どれにする？やっぱりリオレウス系がいいか？」

「…そうだね」
「だとすると…これかこれかな」
ショウヘイは二本の太刀を指差した。名前は「飛竜刀・朱」と「ラスティクレイモア」とある。
「…こっちだな」
ジュンキは即座にラスティクレイモアを選んだ。飛竜刀・朱の方が安く作れたが火属性を帯びているため使い回しが効きにくい。高価だが無属性武器であるラスティクレイモアの方が良い。ジュンキはそう考えた。早速注文を取る。
「毎度！明日には仕上がってるよ！」
ジュンキとショウヘイは武具職人の言葉を背中に工房を後にした。
街中へと出たところでショウヘイが口を開く。
「明日から練習だな」
「よろしくお願いしますショウヘイ先生」

翌日にはジュンキが注文した太刀ラスティクレイモアが出来上がり、さっそく練習がてら簡単な狩りの依頼を受けて出発した。

ラオシャンロン撃退戦から数日が経ち、ジュンキの太刀も慣れてきたのでそろそろ狩りに出ようかということで昼食時に六人が大衆酒場で集まった時、突然街の広場から大勢の悲鳴が聞こえてきた。
「何だ！？」
「行くぞ！」
カズキがアプトノスのミルク入りグラスを落としそうになっていたが、それには構わずショウヘイが先陣を切って飛び出した。ジュンキやユウキも後を追う。広場に出ると、六人は絶句した。広場の中央に、一匹のリオレウスがいたからだ。それを取り囲むようにハンター達が円陣を敷いている。
「な、何でこんなところにリオレウスがいるの？」
「私にも分かんないよ…」

クレハの質問にチヅルは回答に困る。そのリオレウスは何かを探すように首を左右に振っていた。その目線の先にいるハンターはその度に身を固くする。やがてリオレウスがジュンキ達の方を向いたところで動きが止まった。人知れず、ジュンキの目が見開く。

「まさか…」

「まさかって…ええっ！」

ユウキも驚きの声を上げた。声には出さないが、他の四人もこの状況を察していた。先日ジュンキが戦ったリオレウスが、ジュンキを迎えに来たのではないのかと。

「…行ってきてもいい？」

ジュンキは小声で尋ねたが、返事を聞く前に歩き出す。ジュンキはハンター達の合間を縫って前に進み、リオレウスを囲んでいる円陣の最前列まで出て、そこからはゆっくりとリオレウスに歩み寄っていく。ハンター達からは悲鳴が上がったが、今は無視するしかない。やがてリオレウスの目の前に――リオレウスが噛み付こうとすればジュンキが避ける間もなく噛み付かれる距離まで近づくと、ジュンキは歩みを止めた。長い間お互いに見つめ合ったが、やがてゆっくりとリオレウスの口が開いた。

「ここにいたのか。探したぞ」

「そっちから来るなんて、何があったんだ？」

「…ここでは長話は出来そうにないな」

「ハンターの巣窟へ自分から入ってきて何言ってるんだよ…」

「脱出して外で話したいが、簡単には出れそうにないな…」

「…」

「何か、いい方法はないか？」

「…ひとつだけ、あるにはある」

ジュンキは複雑な表情で言った。

「ねえ、どうなってると思う？」

「う～ん…」

クレハが横目で尋ねてきたので、チヅルは視線をジュンキとリオレウスから落として考える。
「多分、説得してるんじゃないかな」
「街中で暴れ回らないでって？」
「さ、さあ…？」
チヅルの答えに不満なのか、クレハは鼻息を荒くした。
「…動いた」
ショウヘイが静かに言ったので、チヅルは視線をジュンキとリオレウスに戻した。ここからだとすこし離れていて細部までは見えないが、どうやらジュンキが両腕を広げているようだ。
「…？」
チヅルは思わず眉をひそめた。ジュンキは何をしているのだろうか。あれではまるで、リオレウスを抱こうとしているようにしか見えない。――ここでチヅルは先日聞いたジュンキとショウヘイとユウキの昔話を思い出した。たしかその中に、ジュンキが捕獲したリオレウスを抱いたという話があったはずだ。つまりジュンキはリオレウスと仲が良いことをハンター達に見せつけ、安全であるとアピールしたいのではないか。――チヅルの考えは当たっていた。
「こんなところまでどうしたんだ！」
突然ジュンキの大きな声がドンドルマの広場に響いた。
「寂しくなって追いかけて来たのか？」
ジュンキがリオレウスに歩み寄っていくと、リオレウスもジュンキへと歩み寄る。そしてジュンキはリオレウスの頭部に抱きついた。リオレウスは嬉しそうにジュンキに頬擦りし、大きな舌でジュンキの顔を舐める。
「ははは、くすぐったいよ～」
散々舐められたジュンキがリオレウスから少し離れると、ハンター達を見回しながら口を開いた。
「このリオレウスは俺が小さい頃から一緒に育った幼馴染だ！人に害を与えたりしないから安心してくれ！」

ジュンキは言い終わるなり、すぐリオレウスと向き合う。
「さあ、いつまでもこんなところにいたら危ないよ。森に帰ろう」
ジュンキはそう言うとリオレウスの右足に登り、太い脚に腕を回した。それを合図にリオレウスは大きく羽ばたき、ジュンキを乗せたまま旋回を始めるとやがて南の方へと飛んで行ってしまった。広場に残されたハンター達はしばらくの間誰一人その場を動かずに、ジュンキを乗せたリオレウスが飛び去った方を見つめていた。

「やれやれ、誰が幼馴染だ」
「こういう状況を作ったお前が言うなよ」
ドンドルマの街を脱出するなり、ジュンキはリオレウスに文句を言われた。あの状況から脱出するには、ジュンキはこれしか思いつかなかったのだ。この話をいつまでも続ける訳にはいかないので、ジュンキは早々に話題を切り替えることにした。
「それで?話って何?」
「うむ…。すぐ近くに小さな湖がある。話はそこでしよう」
その小さな池は、すぐにジュンキの目にも飛び込んできた。

ジュンキは着地したリオレウスの右足の上から降りると、近くにあった岩の上に座った。
「で、話って?」
ジュンキが何度目かになる言葉を口にすると、リオレウスは少しうなだれてしまった。だがすぐに顔を上げて口を開く。
「単刀直入に言おう。人の世界が危ない」
「え…?」
人の世界が危ない。どういうことだろうか。ジュンキは考えてみたが何一つ浮かび上がらなかった。
「…続けて」
「話は長くなるぞ。まず、人の世界には王と呼ばれる存在がいるだろう?」

「ああ、いるよ。ハンターにはあまり関係ないけど」
この大陸…シュレイド王国には文字通りシュレイド王たる者が存在する。ふと、ジュンキはシュレイド王国軍に拉致されそうになった時のことを思い出した。つまりあれは、シュレイド王が自分を捕えようとしたのだろうか。しかし今はリオレウスの話を聞くのが目的なので、今は考えるのを止めた。
「信じられないかもしれぬが、我々竜の世界にも王たる者が存在するのだ」
「へぇ～…」
意外だったが、まあ人の世界に王がいるなら竜の世界にいてもおかしくはないだろうと受け流す。
「その王は三兄弟でな。常に三匹で話し合い、物事を決めているのだ」
「名前は？」
「長男、祖龍、ミラルーツ。次男、紅龍、ミラバルカン。三男、黒龍、ミラボレアスだ」
最後の黒龍という単語に、ジュンキは目を見開いた。昔、黒龍ミラボレアスと戦ったことがあると、ショウヘイが言っていたのだ。だがこれはこちらの事情なので、今は黙っていることにした。
「その三匹の王が、人を滅ぼすと決めたそうだ」
「な…っ！」
人を…滅ぼす…？
「そ、そんな…どうして？」
「儂にも分からん。直接会って話を聞いてみぬことにはな」
「…どこにいるの？その三匹の王は」
「…実は今、三男のミラボレアスが旧シュレイド城、と人が呼んでいる場所にいる」
「旧シュレイド城…。俺を、連れて行ってくれないか？」
「…すまない。儂も話を聞いただけで、詳しい場所を知らんのだ」
「そっか…。とにかく、俺は街に戻るよ。何か情報が入っているか

もしれないし」
「そうか…。儂もミラボレアスと話をしたいと思っている。しばらくはこの近くで、ヌシが旧シュレイド城へと向かう時を待とう」
リオレウスの言葉が終わると、ジュンキは座っていた岩から立ち上がった。
「じゃ、また」
「ああ」
ジュンキはリオレウスに背を向けドンドルマの街へと歩き出したが、数歩歩いたところで立ち止まり、リオレウスの方を振り向いた。
「なあ、竜が人を滅ぼすことになったら…お前も俺達を殺すのか？」
「儂は、人は世界に必要だと思っている。確かに人と竜は互いに殺し合っているが、それが自然なのだ。わざわざ不自然な状態にしようとは思わない。だからこそ、王達が何を考えているのか知りたいのだがな。…安心したか？」
「まあね。…それじゃ」
ジュンキは今度こそ振り向かず、ドンドルマの街へと歩き出した。

ドンドルマの街の正面入り口の巨大な門の前に仁王立ちしているユーリを見つけて、ジュンキは一人苦笑いした。その間にも距離が縮まり、ついにユーリの前に立つ。
「やあ、ユーリ」
「私が何を言いたいのか、分かってるわよね～？」
「…はい」
「詳しく聞かせてもらいましょうか。大衆酒場で」
ユーリはそう言うとくるっとジュンキに背を向け、スタスタと大衆酒場へ歩いて行ってしまった。

ジュンキが大衆酒場の中に入ると、ハンター達のざわめきが徐々に消えていった。内心ため息を吐きながら、ジュンキはユーリを追いかける。ユーリはカウンターの奥へと入っていったので、ジュンキ

は見失わないように急ぎ足でカウンターの奥へと入った。

そこは小さな会議室といったところだ。十人掛けのテーブルが一つだけ部屋の中央に置いてあり、今はそこにショウヘイ、ユウキ、チヅル、カズキ、クレハ、ベッキーが座っている。ユーリも座ったので、ジュンキも座ることにした。すぐにユーリの口が開く。

「さて、大体のことは街のハンター達から聞いていますが、より詳しくお話を聞かせてもらいます」

普段のユーリからは考えられない真剣な眼差しでそう言った。

「…あのリオレウスのこと？」

「そうよ」

「それなら幼馴染だって――――」

「嘘ね」

突然ベッキーが口を挟む。

「どうして――――」

「ジュンキ君の顔に書いてあるわ」

「…」

流石はハンターズギルド、ミナガルデ支部の給仕長である。ベッキーは笑顔で言葉を繋げる。

「大丈夫。外部には漏らさないし、ハンター達にも教えないから」

ジュンキは視線を机に落として考え込んだが、やがてゆっくりと口を開いた。

「…信じられないかもしれないけど、最後まで聞いてね」

ジュンキは自分が竜人という太古の種族の生き残りであること。会話しようとすれば竜と話ができるということ。ラオシャンロン撃退戦の時はラオシャンロンを説得したこと。あのリオレウスとは最近知り合ったことを話した。その間、ベッキーとユーリは黙って聞いていてくれた。ジュンキが話し終わると前屈みになっていたベッキーは上半身を起こし、ユーリは腕を組んだ。

「そうだったの…。にわかには信じ難いけど、辻褄は合うわね」

「茶髪の竜人の二つ名は伊達じゃなかったのね」
ベッキーとユーリは一応納得してくれたようなので、ジュンキは胸を撫で下ろした。
「ま、とにかくこれからはあのリオレウスが街に入ってこないように言っておいてね。またパニックになるし」
ユーリはそう言って退席しようとしたが、ジュンキがそれを制した。
「ちょっと、聞きたいことがあるんだけど…」
「何？」
「旧シュレイド城ってどこにあるか教えて欲しいんだけど…」
「…どうして？」
再びユーリの顔が真剣になる。
「黒龍ミラボレアス。今、そこにいるらしい」
ジュンキの言葉に、この場にいる全員が驚かされた。
「俺はそいつと話がしたいんだ。場所を教えてくれ」
「…どうして知ってるの？ハンターズギルド内でもまだあまり知られていないのに」
「リオレウスから教えてもらったんだ」
ジュンキが自信あり気に答えると、ユーリは小さくため息を吐いた。
「…近々正式に討伐依頼が出るから、それを受けて」
「討伐…分かった」
「ちょっと待ってよ」
ジュンキとユーリの会話に、今まで黙って聞いていたチヅルが口を挟んだ。
「ジュンキ、一体どうしたの？私達がいるのに相談もしないで勝手に決めて…」
チヅルの意見はもっともであり、ジュンキは言葉に詰まった。あのことを言うべきなのだろうか迷ったが、丁度ここにはベッキーとユーリもいるので言う事にした。
「今、竜達が人間を皆殺しにしようとしているらしいんだ」
ジュンキの言葉は、再びこの場にいる全員を驚かすことになった。

ジュンキは続けて、先程街外れの湖のほとりでリオレウスから聞いた話を伝えた。

「…ハンターズギルドとしては、事が起きてからじゃなければ動けないわ」

ベッキーはため息を一つ吐いてから言った。

「とにかく、今はその黒龍ミラボレアスにジュンキを会わせて事の真偽を確かめないと」

チヅルはそう言って立ち上がった。

「私はジュンキの言ったこと、信じてるよ」

「そりゃ俺だって信じてるさ」

「俺も俺も」

「俺は元からだけどな」

「私もだよ」

チヅルに続いてユウキ、カズキ、ショウヘイ、クレハも立ち上がる。

「みんな…」

「だって目の前でリオレウスに乗って飛んでいったんだよ?もう信じるしかないよ」

チヅルの言葉に、ジュンキは深く頷いた。

「ありがとう…。じゃあさっそくなんだけど、黒龍ミラボレアスに会いに行こうと思うんだ。いいかな?」

ジュンキの意見に、誰一人として反対しなかった。

「じゃあハンターズギルドから正式な依頼が出るまで、各自で狩りの準備をしておいてね。最悪、ミラボレアスと戦うことになるから」

ジュンキのこの言葉を最後に、小さな会議は幕を閉じた。

翌日から、ジュンキ達は黒龍ミラボレアスの説得に失敗した場合を考えての狩りの準備を始めた。幸いショウヘイは一度戦闘経験があるので、準備は着々と進んだ。小さな会議から一日が経ち、日が傾きかけた頃、大衆酒場でのんびりとオレンジジュースを一人で飲ん

でいたチヅルの席の前に突然クレハが座ったので、チヅルは口元からオレンジジュースを放して机の上に置いた。
「どうしたの？クレハちゃん」
「気になることが二つあってさ。まず一つ目。その双剣、何処で手に入れたの？」
クレハはチヅルの背中の双剣を肩越しに指差した。
「ああ、これ？ラオシャンロン撃退戦の報酬の中にあった太古の塊を研磨してもらったら出てきたの」
「ええ～っ！じゃあそれって…！」
「うん。太古の武器。名前は封龍剣・超絶一門」
「いいな～…」
クレハは羨ましそうな目をして机に突っ伏した。武器を褒められたハンターとしてはとても嬉しいことであり、チヅルは少し顔を赤くした。
「ありがと。でも…」
「…でも？」
「うん…でもね…」
チヅルの声が弱々しくなる。これが意味するところは一つであると、クレハは知っていた。
「ジュンキのこと？」
「うん。分かる？」
「まあね。ジュンキの何？」
「ジュンキ、まだ私の双剣が変わったことに気づいてないみたいなんだよね…」
「…うわ～」
何と鈍い男だと、クレハは呆れた。
「気になる事の二つ目がジュンキについてだったんだけどさ、ジュンキのどこがいいの？」
「ん～…。秘密」
「ひどいなぁ。本当にいいの？かなり鈍いみたいだけど」

「それがジュンキらしいところだと思うけど」
「そんなものなのかな～」
クレハは身体を起こす。
「ねえ、チヅルちゃん」
「何？」
「まだ告白しないの？」
クレハのこの言葉に、チヅルの顔は真っ赤になった。
「こ、告白って、まだ、早いと、思うな～あはは。私は、その、今の関係で、結構満足してるしさ…」
「私の気が変わらないうちに早くした方がいいよ～」
クレハのこの言葉に、チヅルの顔は一気にハンターのものへと変わった。
「え…もしかして、とうとうクレハちゃんもジュンキに惹かれたの？」
真剣な目で見てきたので、苦笑いしながらクレハは右手を振った。
「まだ惹かれてないよ。前にも言ったけど、ハンターとしてならいいハンターだと思うけどね」
「そう、よかった…」
「何か言った？」
「ううん！何でもないよ！」
「そう？じゃあ私は買い物の続きに戻るね」
クレハはそう言って立ち上がった。
「じゃ、また後でね」
「じゃあね～」
チヅルはクレハを見送ると、再びオレンジジュースを口につけた。
「告白かぁ…」
今まで考えたことは無かった。いつかはしたいと思うが、今じゃなくてもいい。それに今の関係で満足しているのも本当だ。
「クレハちゃんの気が変わらない内にするべきなのかなぁ…」
飲み干したオレンジジュースのグラスに反射する自分を覗きながら、

チヅルは自問自答した。

翌朝、ハンターズギルドから正式に黒龍出現と討伐依頼が発表され、大衆酒場の中は騒然となっていた。

「とうとう出たな」

ユウキが緊急依頼掲示板を睨みながら言った。

「みんな、本当にいいんだな？」

ジュンキが確認をとると、五人全員がしっかりと頷いた。

「ユーリ」

ジュンキに呼ばれて、ユーリは半分呆れた顔で頷いた。既にベッキーはミナガルデの街へと戻ってしまったらしく、ユーリの隣にはいなかった。

「さっそくね。分かってるわよ、行くんでしょ？もちろんパーティは四人までよ」

「ラオシャンロンの時と同じでいいよな？」

ジュンキは代表して黒龍討伐依頼をジュンキ、ユウキ、チヅルの三人とショウヘイ、カズキ、クレハの三人の２パーティで契約した。

「ま、気をつけてね」

ユーリに見送られながら、ジュンキ達六人は他のハンター達に悟られないように静かに街を出ることにした。

「なあショウヘイ。聞かせてくれないか？黒龍のことについて」

竜車が街を出るなり、カズキがショウヘイに尋ねた。

「あれ？カズキはショウヘイと一緒に黒龍と戦わなかったの？」

「いや～丁度素材集めの為に密林へ一人で行ってた時に現れたらしくって戦ってないんだ」

クレハの質問に、カズキは申し訳なさそうに頭を掻きながら答えた。

「ミラボレアスについてか？そうだな…。特に気をつけることといえば長い尻尾だな」

「長い尻尾か。ま、俺にはあまり関係ないかな？」

とユウキは肩をすくめる。
「他には？」
「ブレスが強力だ。当たると即死しかねない」
チヅルの問い掛けにショウヘイは真剣な顔で答える。
「…ま、こんなところかな。後は実際に見たほうが早い」
ショウヘイはここで言葉を切った。間を置かず、クレハの口が開く。
「ねえジュンキ。黒龍は竜の世界での王様の一人なんでしょ？どうしてそんな王様が人の目に付くような場所に現れたのかな？」
「俺にも分からないよ」
ジュンキは苦笑いする。
「確かにショウヘイの時も今回も…。何か目的があるとかな」
ユウキが憶測で述べたが、誰にも否定出来なかった。

街から少し遠ざかったところで、竜車を引いているアプトノスが突然暴れだした。御者のアイルーも悲鳴を上げる。
「ニャーっ！ど、どうしたんだニャーっ！」
「おい、大丈夫か？」
カズキが御者席を覗く。
「お、落ち着くニャ！…はっ！もしかして…」
御者アイルーは竜車を停めると御者席から降りて少し遠ざかり、そして顔を青くして戻ってきた。
「ニャーっ！リ、リオレウスが出たニャーっ！」
御者アイルーが自分の荷物だけを持って逃げ出そうとしたところを見て、ジュンキは慌てて竜車の荷台から降りると御者アイルーを捕まえた。
「は、放すニャ！ボクは長い都会生活のせいで野生の勘が鈍ってるんだニャ！」
「お、落ち着け！あのリオレウスは襲ってきたりしないから！」
「…ホントかニャ？」
御者アイルーは恐る恐る空を見上げた。リオレウスは竜車の上を旋

回しているが、確かに襲ってくる気配は無い。
「ど、どうしてニャ?竜車を引いているアプトノスは、リオレウスの大好物のはずだニャ…」
「あのリオレウスは友達なんだ」
ジュンキが説明すると、御者アイルーはただでさえ丸くて愛嬌のある瞳をさらに丸くした。
「ニャんと…リオレウスと友達になったハンターは初めて見たニャ…」
御者アイルーはそういうことならと竜車の御者席に戻り、暴れていたアプトノス達もリオレウスが襲ってこないと分かったのか落ち着きを取り戻していた。ジュンキが乗り込むと、竜車は再び動き出した。
「どうしたの?」
「ん、まああのリオレウスが追いかけて来てるからアプトノスが驚いたらしくって」
クレハが心配そうに聞いてきたので、ジュンキは肩を竦めながら答えた。
「え!?あのリオレウスが!?」
ユウキは天幕から顔を出して空を見上げた。
「うわ~。物好きなリオレウスだな、ほんと」
ユウキの言葉にジュンキは苦笑いした。

ＭＨ１ｓｔ　第３章　龍からの世界観　０４（前書き）

長めです。

MH1st　第3章　龍からの世界観　04

旧シュレイド城に到着した時には既に二日が経ってしまっていた。
ジュンキ達が竜車を降りると、リオレウスも近くに着地した。
「ここが旧シュレイド城か…」
ユウキが目の前の人工的に積み上げられた岩壁を見上げて言った。
放棄されてからかなりの時間が経ってしまっているため、損傷が激しい。正面に竜車もくぐれそうな大きさの入り口がポッカリと開いているのでそこから中へと入ることにした。
「儂は空から入るとしよう」
リオレウスはジュンキにだけ聞こえる声を出して飛び上がった。あっという間にジュンキ達を抜いて城内へと入っていってしまう。
「何か、不思議な気分だよ」
「どうして？」
「私達の狩猟対象であるはずのリオレウスと一緒に行動してるなんてさ…」
チヅルの言いたいこともっともだと他の五人も感慨に耽った。そうしているうちに旧シュレイド城の入り口にたどり着く。
「何か…不気味…」
「みんないるから大丈夫だよ」
「うん。それは分かってるけど、ちょっとね…」
先頭を行くショウヘイのい続いて、少し怖がっているクレハやチヅル、ジュンキと続く。
「ランスは長いからな～」
カズキは身体を前に倒して城内へと入った。中は一本道ですぐに開けた場所に出た。
「うわ…」
「…！」
「どうし…おおっ…」

開けた場所といってもとても広く、狩り場の1エリアくらいはありそうだ。空は生憎の曇天で、誰もいない不気味な廃城にさらに気味悪るさを助長している。その下、この開けた場所の中央に、その姿はあった。細長い身体に大きな一対の翼。全身漆黒で、見た目はよくありそうな姿形をしているが、どこかに威厳も感じられた。黒龍ミラボレアス。今はリオレウスと向い合っているがこちらに気付いたのか突然振り向いた。全員が身構える。

「大丈夫だ。危害を加えるつもりはない」

リオレウスがそう言ったのをジュンキが伝えて、ゆっくりと歩み寄った。ミラボレアスの正面にジュンキ達が横一列に並び、リオレウスが両者の間の斜め前に挟まれた形になる。先に口を開いたのはミラボレアスの方だった。

「竜人よ。お初にお目にかかる。我が名はミラボレアス。姿を見せてはくれぬか」

「俺だ。名前はジュンキ」

ジュンキは名乗ってから一歩前に出た。

「おお…何百年ぶりか…。まだ血は絶えてはいなかった…！感謝する」

ミラボレアスはリオレウスに向かって礼を言った。

「私はただ連れて来ただけです。お気になさらず」

リオレウスは頭を垂れた。

「ミラボレアス。聞きたいことがある」

「何かな？もっとも、検討はつくが…竜の世界についてか？」

「そうだ。聞かせて欲しい。どうしてそんなことをする？」

「…まず私の立場を示しておこう。私は竜の世界などという考えは持っていない。それを提唱したのは我が兄達だ」

ここでミラボレアスは瞳を閉じた。

「私と兄二人は三王などと呼ばれてはいるが、実質は長兄であるミラルーツが全てを仕切っている。その長兄がついに動いたのだ」

「どうして…？」

「長兄の…愛した相手が人間によって殺されたのだ」
「…！」
「今までにも肉親。旧友。恩師など、あまたの親近者を殺されてきているが、ついに長兄の怒りは限界を超えたのだ。私は止めたのだ。一方の種族のみが繁栄出来る世界など存在しない。全ては共生だ、と。しかし長兄は聞き入れなかった。次兄は長兄に心酔していてな、もちろん賛成した。私は力尽くで従わられそうになったので、今はそうして逃げてきた身だ」
ミラボレアスが言ったことを、ジュンキはショウヘイ達に通訳した。
「そんな…！だからってそんなこと…！」
チヅルは信じられないといった顔で悲痛な声を上げた。
「今はまだ準備の段階だろうが、いずれ大きな動きがある。竜人よ、頼む。世界を、人と竜が共に生きるこの世界を、守ってはくれまいか…！」
ジュンキはゆっくりと顔を上げた。
「…もちろんそうしたいさ。でも、俺一人の力じゃ…」
「それなら大丈夫だ」
「…？」
「竜人は他にもいる。今ここに、ヌシを除いて三人もな」
自分を除いて三人。この言葉の意味を理解したジュンキは後ろを振り向いた。ショウヘイ、ユウキ、チヅル、カズキ、クレハはどうしたのかといった顔をしている。
「この中に…三人も…？」
「ジュンキ、どうしたの？」
クレハが頭に疑問符を浮かべているので、ジュンキが説明した。もちろん五人は驚いた。
「うそ…」
「俺達の中の三人は竜人だと！？」
「…誰が竜人なのか、分かるのか？」
「聞いてみる」

ジュンキはミラボレアスに誰が竜人かを尋ねた。
「…私なら微かな血の匂いで嗅ぎ分けられるだろう。失礼する」
ミラボレアスはそう言って身を乗り出し、まずはショウヘイを嗅いだ。
「…ほう。何と…」
「ジュンキ、なんて言ってる?」
ショウヘイが尋ねたが、ジュンキは右手を挙げて制止した。
「…私と同じ血が流れている。私の血を引く、まさしくミラボレアスの竜人か…!」
ミラボレアスの言葉を聞いて、ジュンキはゆっくりとショウヘイを振り向いた。
「ショウヘイ…」
「…なんて言ってた?」
「ショウヘイ、お前は竜人だ」
「…!」
ショウヘイの黒い瞳が大きく見開いた。
「ミラボレアスの血を引いているそうだ」
ショウヘイは硬直していたが、やがて小さく頷くと一歩後退した。
「さて…」
次にミラボレアスはユウキを嗅いだ。
「違う。人間だ」
「ユウキは人間だってさ」
「そっか。まあ俺に世界は大き過ぎるよ」
ユウキは残念がるかとジュンキは思ったが、案外そうでもなかったので安心した。
「次は…」
ミラボレアスはチヅルを嗅ぐ。
「…竜人。イャンガルルガか?この臭いは…」
「…!」
「え…?」

ジュンキが突然振り向いたので、チヅルは思わず声を漏らした。
「まさか…」
チヅルの問い掛けに、ジュンキは首を縦に振って答えた。
「イャンガルルガの血を引く、竜人だってさ…」
「そう…。私、竜人なんだ…」
チヅルは複雑な表情をして俯いた。
「ヌシは…？」
次にカズキを嗅ぐミラボレアス。
「…人間だ」
「カズキは人間…じゃあ…！」
カズキはとても悔しがっていたが、クレハは穏やかな表情を浮かべていた。
「そっか…私も竜人なんだ…」
「失礼する」
ミラボレアスは念のためにクレハを嗅ぐ。
「…やはり竜人だ。リオレイアの血を引いている」
「ジュンキ、私は何の血を引いてるの？」
「クレハはリオレイアだってさ」
「そう…。ジュンキは…？」
「あ、お、俺？」
ジュンキはミラボレアスに向き合った。
「ミラボレアス、俺は何の血を引いているのか分かるか？」
「嗅がなくても漂ってくるわ…ヌシはリオレウスの血を引いておる」
「リオレウス…！」
ジュンキの青い瞳が見開く。
「だからヌシにも嗅ぎ分けられたのかもしれんな？」
「…そうですな」
ミラボレアスがリオレウスを振り向いて言うと、リオレウスは納得したように頷いた。
「さて、竜人達よ…。ヌシ達は竜人として目覚めることを望むか…

？」

ジュンキはミラボレアスの提案をそのままショウヘイ、チヅル、クレハに、もちろんユウキやカズキにも聞こえるように伝えた。

「俺達の世界が危ないんだろう？なら言うまでもないさ」

「私もショウヘイと同じ考えだよ」

「私に出来ることなら手伝うよ」

ショウヘイとチヅルとクレハは自分が竜人の末裔であることを受け入れ、竜人として目覚めることを欲した。そのことをジュンキがミラボレアスに伝えると、ミラボレアスは安堵の表情を浮かべた。

「そうか。ありがとう。…しかし、長い年月を経て竜の血は薄まっている。少々強引な手を使うしかないな」

「どんな手だ？」

「私の血を飲むがいい。竜の中でも王家の血だ。きっと身体が反応するだろう」

「…どうやって血を抜く？」

「私の尻尾の先を斬りつけるといい。なに、すぐに治る」

ジュンキはミラボレアスの血を飲む必要があるとショウヘイとチヅルとクレハに伝えると、三人は渋々頷いた。

「カズキ、何か容器ない？」

「各自のカップでいいよな？取ってくるぞ」

カズキはそう言い残して一度竜車の方へと戻っていった。竜車の中には各々の食器が積まれており、カズキはその中のカップを使うことにしたのだろう。カズキの姿が小さくなっていくなかで、クレハの口が開いた。

「ジュンキはどうやって竜人として目覚めたの？」

「ん～…。これは推測だけど、俺は時間が出来たらあいつを探すためによくリオレウス狩りに出ていたからかな。狩りの最中はどうしても返り血を浴びるし。そのせいかな？」

「ふ～ん…」

ジュンキがリオレウスを指差したのでリオレウスは何事かと首を傾

げていたが、クレハはとりあえず納得したようだった。

カズキが手にショウヘイとチヅルとクレハのカップを持って戻ってくると、ジュンキは腰から剥ぎ取りナイフを抜いた。そしてミラボレアスの尻尾に近づき、鋭く尖った先端を手に持った。

「…いくぞ」

「ああ」

ジュンキはミラボレアスの尻尾の先端を一閃した。どす黒い血液が流れ出る。ジュンキはカズキから空のカップを受け取り、それを汲んだカップをユウキに渡す。三杯汲み終わったところで、丁度出血も止まった。ミラボレアスの血液がショウヘイとチヅルとクレハの手に配られると、チヅルとクレハは顔をしかめた。

「うえ…」

ジュンキ、ユウキ、カズキ、リオレウス、ミラボレアスの三人二匹が見守る中、ショウヘイとチヅルとクレハは一気に中身をあおった。ショウヘイは一息に飲み干したがクレハは途中からペースが落ちてしまい、今はチビチビと飲んでいる。チヅルは半分くらいのところでカップを手から滑り落とし、激しく噎せ返った。

「ゲホッ！ゲホッ！ううっ…！」

チヅルはその場にしゃがみ込んでしまう。それはショウヘイやクレハも同じで、苦しそうに肩で呼吸している。

「…」

今は見守るしかない。ジュンキは苦い顔をしながらミラボレアスに向かって口を開いた。

「大丈夫なのか？」

「直接血液を混ぜているわけではないからな」

そういうミラボレアスの顔も真剣だった。突然チヅルが顔を上げたのがこの時である。

「…聞こえた」

「え…？」

「ジュンキ…私、聞こえたよ…ミラボレアスの声」
「儂にも聞こえるぞ、チヅルとやらの声が」
リオレウスが相槌を打つ。
「おお…私の声が届いたか…！」
「私にも聞こえる…！」
「俺にも聞こえるぞ…！」
チヅルに続けてクレハとショウヘイも顔を上げた。
「私、本当に竜人だったんだ…」
クレハは立ち上がり、その場で飛び上がったり双剣を振り回したりする。
「でもあんまり変わってないような…」
「まだ完全に竜人として蘇った訳ではないからな。今はまだでも、徐々に竜の力性が身についてくるはずだ」
ショウヘイとチヅルも立ち上がると、ジュンキ達六人は先程と同じように横一列に並んだ。
「さて、無事に竜人として三人が目覚めた。先程も話した通り、今はまだ準備の段階だろう。しかしいずれ大きな動きがあるだろう。その時は竜人達よ、頼む。その時が来たら、私も共に戦うと約束する」
「儂もいるからな」
ミラボレアスの言葉に続いて、リオレウスも協力を約束してくれた。
「さてと…私はそろそろ移動することにするよ」
「え…どうして…？」
「この場所ではすぐ人に見つかる。再びハンターなどを呼ばれれば、私は自分の身を守るためとはいえ戦わねばならんからな。それに――」
ミラボレアスはここで一度言葉を切った。
「――恐らく、次兄が私を追いかけてきているだろうからな」
「次兄…紅龍ミラバルカン…？」
「そうだ。今会うと面倒極まりない。私は時が来るまで姿を隠すと

しよう」
ミラボレアスはそう言って漆黒の翼を広げた。
「では、失礼させてもらう。竜人達よ、また会おう」
ミラボレアスはそう言い残して旧シュレイド城から飛び去っていった。
「…街に戻ろう？」
クレハの一声で、ジュンキ達はこの場所に入ってきた入り口へと歩き出した。途中でリオレウスに空から抜かれてしまうが、旧シュレイド城から出るとリオレウスは竜車の横で待っていた。
「今日はありがとう」
ジュンキが礼を言うと、リオレウスは首を傾げた。
「はて、儂はただ付いてきただけだ。礼を言われるいわれはないぞ」
リオレウスの素っ気ない返事に、ジュンキは微笑を返した。
「リオレウス…さん…？」
「ん？」
クレハがジュンキの横に並んで、リオレウスに話し掛けた。
「あの～…一応自己紹介をと思って。クレハです。よろしく」
「あ、私はチヅルです」
「ショウヘイだ」
「ああ、よろしく…」
リオレウスは会話することにあまり慣れていないようで、声が少しうわずっていた。
ジュンキ達は竜車に乗り込むと旧シュレイド城を出発した。行きと同じく、リオレウスは空から付いてきていた。

MH1st　第3章　龍からの世界観　05

ドンドルマの街の手前で、ジュンキは一人竜車を降りた。リオレウスと話をするためである。竜車が遠ざかっていくと、リオレウスはジュンキの前に降り立った。
「一つ聞きたいことがあるんだけど」
「何だ？」
「紅龍ミラバルカン…。一体どんな奴か分かるか？」
「すまぬ。儂も会ったことはない」
「そっか…」
「…ヌシは、紅龍ミラバルカンが現れたら、会いに行こうと考えておるな？」
「あ、分かる？」
「…今はやめておけ」
「…でも、もしかしたら説得出来るかもしれない」
しばらくの間、ジュンキとリオレウスは互いの主張を曲げずに見つめ合っていたが、やがてリオレウスは小さくため息を吐いた。
「…やれやれ、仕方ない。儂も付いていくぞ」
「…ありがとう」
「乗っていくか？」
「別にいいよ。歩くから」
ジュンキが背を向けて歩き出すと、リオレウスは無言で飛び去った。

ショウヘイ達はドンドルマの大衆酒場でジュンキの帰りを待っていてくれた。ユーリに帰還の報告をし、テーブルに着く。
「今回は騒がれてないんだな」
「ユーリが黒龍はどこかに行ってしまったってことにしたらしいよ」
「ま、その方が気が楽でいいけどな」
ジュンキの質問にチヅルが答え、カズキが頷く。

「じゃあこれからのことを話すけど…」
ジュンキは一度言葉を切って全員の顔を見回した。
「俺の推測でしかないけど、近々紅龍ミラバルカンが現れると思うんだ。俺は説得に行きたいんだけど。みんなの意見は？」
ジュンキが尋ねると、まずはじめにチヅルの口が開いた。
「私は賛成だよ。このまま放っておいたらまずい気がする」
「私も同じだよ」
チヅルの意見をクレハが支持する。
「それに、それが私達竜人の生まれた意味って気がするし」
クレハはここで口を閉じた。ショウヘイが続く。
「竜人としてというのも全くない訳じゃないが、俺は一人の人間――いや、人間だった者としては放っておけないな」
「俺達も忘れるなよ？」
ここでユウキが口を挟む。
「俺達は竜人じゃない。だけど、人の世界を守りたい、その気持ちは一緒のはずさ。な？」
ユウキが隣のカズキに向かって少々大袈裟に振り向くと、カズキは目を閉じてウンウンと頷いた。
「じゃあ紅龍ミラバルカンが現れたその時は説得に行くということで今日は解散――ショウヘイ？」
ジュンキが解散を告げようとしたところで、ショウヘイが静かに手を上げた。
「今思い立ったんだが…俺達、本来人と竜の中間、つまり中立の立場のはずの竜人が人の世界を守ろうと動くということは――」
ここでショウヘイは言葉を切った。ショウヘイが何を言いたいのか、他の五人は既に気付いていたが、クレハはそれを言葉に出していた。
「――紅龍ミラバルカンと、戦う可能性があるってことだよね…」
ジュンキは目を閉じてそのことを考えていたが、一つの結論に至り目をゆっくりと開いた。
「狩りの準備をしていこう。説得に応じなかったら、きっと生かし

て帰してはくれないだろうから」
ジュンキが何を言うか分かっていたショウヘイ達だが、実際にその言葉を言われて押し黙ってしまった。相手は紅龍ミラバルカン。まだ戦うと決まった訳ではないが、いままで見たことも聞いたこともなかった古龍モンスターに勝てるのだろうか――。
「じゃあ、今日は解散。各自で狩りの準備をよろしく」
ジュンキの言葉を最後に、六人はバラバラに散っていった。

「は～い」
部屋のドアがノックされたので、チヅルはドアに向かって大きな声で答えた。直後にドアが開いて、まだ装備を解いていないクレハが部屋に入ってきた。
「チヅルちゃん」
「どうしたの？クレハちゃん…」
「ん～。女だけの話」
チヅルが席を薦めると、クレハは遠慮無く座った。チヅルがお茶を出すと、クレハはありがとうと言って受け取った。チヅルも小さな木製のテーブルを挟んで椅子に座ると口を開いた。
「何？女だけの話って…」
「ん、ジュンキについてだよ」
「えっ…！」
チヅルの顔がうっすらと赤くなったのでクレハは内心笑っていたが、顔はあくまで真剣だ。
「チヅルちゃん、まだ告白してないでしょ」
「うん…。でも、それはまだいいって前に酒場で話したよ？」
「でもいつ来るか分からない紅龍ミラバルカンが現れる前に言った方がいいよ？」
「え、どうして？」
チヅルの質問にクレハは少し目を伏せて答えた。
「死ぬかもしれないから。ジュンキ、もしくはチヅルちゃんが」

「えっ…」
チヅルは言葉に詰まった。しかし理由を聞かなければいけないので、何とか声を出す。
「ど…どうして…？」
「もし戦うことになれば相手は未知の古龍、しかも竜の世界では王様三兄弟の次男。今まで戦ってきたモンスターより格段に死ぬ可能性が高いと思うよ」
「…」
チヅルは俯いてしまった。しばらく考えた後、出来る限りの笑顔でクレハと向かい合う。
「でもきっとジュンキは死なないし、私が死んだらジュンキの事が好きだってことは分からなくなると思うから…やっぱりまだいいよ」
「…ま、チヅルちゃんがそれで納得しているのならいいんだけどね」
クレハはそう言ってチヅルが淹れたお茶を手に取り口にあてる。ここでチヅルは黒龍ミラボレアスから竜人だと言われた時から気にしていることをクレハに聞いてみることにした。
「…ねえクレハちゃん」
「ん～？」
クレハはお茶を淹れたカップを口元から離さずに視線を向けてきた。
「…本当はクレハちゃんもジュンキのこと好きなんでしょ？」
クレハは思いっ切りチヅルの淹れたお茶を吹き出し、噎せ返る。
「ゲホッ！ゲホッ！な、何でそんなこと聞くかなぁ…」
「だって…私にはジュンキとクレハちゃんならお似合いだと思うけどな～…」
「…チヅルちゃん。それだとチヅルちゃんは自分で自分の好きな相手の敵を作ってることになるんだよ？」
「う～…だって～…ジュンキとクレハちゃんには運命的なものを感じるんだもん…」
「…例えば？」
「ジュンキの防具は何？」

「そりゃあリオレウスだよ」
「クレハちゃんの防具は？」
「リオレイア…」
クレハそう答えながら今自分が装備している深緑の防具に目を落とした。この防具は陸の女王とも呼ばれている雌火竜リオレイアから作られた、火耐性に優れた防具である。雌火竜と呼ばれるということは当然雄火竜もいるわけで、それが天空の王者と呼ばれているリオレウスである。リオレウスとリオレイアは「夫婦の象徴」とされ――夫婦？とんでもない結論に至り、クレハは顔が熱くなるのを感じた。
「いや、でもこれは偶然でしょ偶然…！」
「クレハちゃんは竜人として何の血を引いているって言われたっけ」
「え～っと、リオレイアの血だけど…」
「ジュンキは？」
「リオレウス…」
「…」
「…」
「…偶然だってば」
その青色の瞳や青色の髪までも染まるのではと思うくらい顔を赤くしたクレハの様子を見て、チヅルは大きなため息を吐いた。
「ね」
「ね、じゃないでしょ！もーっ！どうしてチヅルちゃんはそんなに弱気なのよ！」
「…」
「もうっ、知らない！私がジュンキを好きになっても知らないからね！」
クレハは大声で喚き散らすと大股で部屋の扉へと向かい、蹴り飛ばす勢いで開けるとチヅルの部屋を出ていってしまった。この様子を見て、実はチヅルは内心笑っていた。

「…ふふふ、クレハちゃんの本音が出たかな。私みたいな気持ちの弱いハンターより、はっきりしているクレハちゃんの方が似合ってると思うんだけどな。…遠慮なんてしなくていいんだよ？クレハちゃん…」

チヅルはクレハが先程まで使っていたカップを見つめながら、一人本音を漏らした。

「もうっ…どうしてくよくよするかなぁ…！」

クレハは怒っていた。好きなら好きとはっきり言えばいい。だがチヅルという人物はどうしても一歩が踏み出せないでいる。最終的にはクレハに原因があると言わんばかりだ。

「私の気持ちも知らないで…！」

「クレハ…？」

突然後ろから声を掛けられた。無意識に睨めつけてしまうがすぐに目を見開いて顔を赤くしてしまう。

「ジュンキ…！」

「チヅルの部屋から大きな声が聞こえたから何かあったのかなって思って…」

ジュンキもまだ装備を解いていなかった。ヘルムは外しているが、首から下はレウスシリーズのままである。

ジュンキの防具はレウスシリーズ。

レウス――。

自分の防具はレイア――。

ジュンキはリオレウスの血を引く竜人――。

自分はリオレイアの血を引く竜人――。

リオレウスとリオレイアは夫婦の象徴――。

――夫婦？

「…クレハ？」

ジュンキの声に、クレハは我に返った。
「大丈夫？顔が赤いけど…？」
「あ、あ…！」
差し伸べられたジュンキの右手に思わず一歩退いてしまう。
「な、何でもない…！」
そのままクレハはジュンキに背中を向けて走り出し、自室の扉を壊さんとする勢いで開くと急いで閉じて、ドアに背を預けてその場に座り込んだ。
「ん～！チヅルちゃんのばぁか～！！！」
クレハは自分の震える両手を見つめた後、天井目掛けて叫んだ。

ＭＨ１ｓｔ　第３章　龍からの世界観　０６

紅龍ミラバルカンが旧シュレイド城に現れたという知らせはユーリから直接ジュンキ達に知らされた。秘密裏にドンドルマの街を出発したジュンキ達だったが前回来た時とは打って変わって、禍々しい空模様だった。そのせいか、ただでさえ不気味な旧シュレイド城がさらに気味悪く見えてしまう。

「何か…不気味だな…」

「怖いのか？」

珍しくカズキが弱音を吐いたので、ユウキが面白そうにつついた。

それに対してカズキは胸を反らせてふんっと鼻息を荒くした。

「これくらいで怖気づくカズキ様じゃあないんだな！」

「お、言ったな！」

元気なユウキとカズキを置いて、ジュンキ、ショウヘイ、チヅル、クレハの竜人四人は今回も付いてきたリオレウスの近くに集まっていた。

「さて、申し訳ないが、今回儂は外で待つことにする」

「え、どうして？」

ジュンキが尋ねると、リオレウスの表情が曇った。

「…紅龍ミラバルカンは人の世を滅ぼそうとしている。そこへ人との共生を望む儂が入ればミラバルカンを怒らせるだけだ」

「そうか…」

口を閉ざしたジュンキの代わりにチヅルが口を開いた。

「すぐ戻ってくるから待っててね」

「…儂はヌシ達のペットではないのだぞ。無用な心配だ」

迷惑そうな顔をするリオレウスを差し置いて、チヅルはにっこり笑った。

「さあ、行こう？」

ショウヘイの合図で、ジュンキ達六人は旧シュレイド城へと入って

いった。
「…説得。上手くいくとは思えんな…」
ジュンキ達が入っていった旧シュレイド城の暗い入り口を見つめながら、リオレウスは一人――いや、一匹呟いた。

「やれやれ、ハンターのお出ましかな」
先日黒龍ミラボレアスと会話した広場に入るなり、ジュンキ、ショウヘイ、チヅル、クレハにのみ聞こえる声が響いた。広場の中央にはもちろん黒龍ミラボレアスの姿は無く、代わりにミラボレアスにとてもよく似た龍が一匹鎮座していた。姿形こそミラボレアスと同じだが、体色だけは違った。黒龍ミラボレアスは全てを飲み込むような漆黒の身体だったが、目の前の龍は生き物の生き血のような深紅色だ。
「ハンター…。人間…。哀れな…。もうすぐ粛清が行われるというのに、それを見届ける前に今私の手によって殺される哀れな人間…」
「誰が哀れな人間だ！」
ジュンキの声に、目の前の龍は驚きに目を見開いた。
「何と…！竜人か…？この時代にまだ生き残りがいたとは驚きだ」
目の前の龍が感想を素直に述べている間に、ジュンキ達はその龍の目前まで迫った。
「我が名は紅龍ミラバルカン。お初にお目にかかる」
「俺はジュンキ」
「ショウヘイだ」
「チヅルです」
「クレハで～す。こっちの二人は竜人じゃないけど、ユウキとカズキっていいます」
「ども」
「よっ」
自己紹介を終えると、ミラバルカンは再び驚きに目を見開いていた。
「竜人が四人も…！人間二人は邪魔だが致し方あるまい…」

仲間を邪魔呼ばわりされた竜人四人は揃って眉間に皺を寄せたが文句は言わず、ジュンキが話を続ける。
「ミラバルカン。話がある」
「何かな？竜人から話を持ち掛けられるとは光栄の極みだ」
「俺達の耳にはそちらが人の世界を滅ぼそうとしていると聞いている。一体どういう事か説明してもらいたい」
ジュンキがはっきりと大声で言うと、一瞬だけミラバルカンの顔が苛立ちに歪んだ。だがすぐに温和な状態に戻る。
「一体どこからそのような話をお聞きなさったのかな？」
「お前の弟からだ」
今度こそミラバルカンの顔が苛立ちと憎しみに歪んだ。
「ミラボレアスめ…竜人を味方に着けたか…面倒なことを…」
「何か言ったか？」
「…包み隠さずお話ししましょう。人は我々竜を殺してきました。もう限界なのです。我々は耐えられない。だから滅ぼすのです」
「人が滅びた後の世界の均衡。それを考えた上での発言か？」
「それは竜の問題です。人間には関係ないことかと」
ショウヘイの質問を、ミラバルカンはいとも簡単にかわした。
「そんなことを聞いて、黙っている私達竜人じゃないってことを知ってるわよね？」
チヅルの発言に、ミラバルカンはにやりと笑った。
「どうですか？人のいない世界は。竜人は我々竜にとっても貴重な存在。あなた方を殺したりはしませんよ。あ、こういうのはどうでしょう？人を滅ぼすのは止めて、人を竜の奴隷として扱うのです。あなた方竜人は人と竜の言葉を使える。我々竜の言葉を人間に伝え、人の上に立ち、我々竜と共に暮らすというのは。兄上には私から――」
「くだらないわね、そんな話」
クレハがミラバルカンの提案を切り捨てると、ミラバルカンの表情が一変して憎悪に満ちていった。

「そうですか…あなた方はあくまで人間の味方をすると？」
「違う。そうじゃない。お前達が世界の均衡を乱そうとしている。それだけだ」
「くだらない」
ジュンキの言葉に、ミラボレアスは怒りをあらわにした。
「そういうお考えなら仕方有りませんな。我々の計画を邪魔させるわけにはいきません。…竜人の血が絶えるのは悲しいですが、ここで死んでもらいましょうか」
ミラボレアスはそう言うと天高く咆哮した。
「散れっ！」
「結局こうなるのかよ！」
ジュンキの声に、六人は一斉に散らばった。
「せめて痛みが伴わないよう一瞬にして殺して差し上げます！」
ミラバルカンは身体を大きく反らし、手近なチヅル目掛けてブレスを吐いた。チヅルはいとも簡単に避けてみせたが、ミラバルカンの吐いたブレスはとてつもなく大きかった。チヅルの身長の二倍はある。
「なんて大きさだっ！」
ユウキが悪態を吐きながらもクロオビボウガンを構えて撃つ。弾の中でも値が張る貫通弾を使用したが、ミラバルカンの甲殻の前に弾かれてしまう。
「たああっ！」
ユウキがミラバルカンの注意を引いた隙にカズキがブロスホーンで突き上げるがこちらも弾かれてしまう。
「チッ…！」
視界の端に太刀を構えたショウヘイが走り込んでくるのが見えて、カズキは一旦退く。
「はあっ！」
ショウヘイが斬破刀を一閃。ミラバルカンの脇腹、鱗に覆われていないところを狙ったため、わずかに出血させる事が出来た。ミラバ

ルカンが振り向く。
「小癪な！」
ミラバルカンがショウヘイに噛み付こうと口を開けて迫るが、これをカズキがブロスホーンの対なる大きな盾でこれを防ぐ。
「助かった！」
「礼はいらんぞ！」
カズキは盾を引くと同時にミラバルカンの腔内を突いた。これにはミラバルカンもたまらず小さな悲鳴を上げる。この時、ミラバルカンを挟んで反対側では鬼人化したチヅルとクレハが一気にミラバルカンの腹の下で踊りだしたところだった。
「うあああああああ！」
「てやあああああああ！」
二人の猛攻に、ミラバルカンは翼を広げて一気に後退した。悟られないように静かに、しかし確実に尻尾へと攻撃を加えていたジュンキが踏まれそうになる。
「うわっ！」
風圧でジュンキは尻餅を着いた。そこへミラバルカンの口が迫る。しかしその口がジュンキへと辿り着く前に、顔の右半分が爆発した。ユウキが徹甲榴弾を撃ち込んだのだ。つかさずジュンキが脱出する。
「くう…やるではないか…。だがそちらの体力がどれだけ持つかな!?」
ミラバルカンの言いたいことはジュンキ、ショウヘイ、チヅル、クレハにはよく分かった。そもそもの体力が違うのだ。いくら竜の力性を備えた竜人でも、まだ完全に目覚めた訳ではない。持久戦に持ち込まれればそれだけこちら側の勝率が下がってしまう。
「ジュンキ…！」
「ああ！
ショウヘイはジュンキと目を合わせただけで意思を伝えた。ジュンキとショウヘイの四年に及ぶ狩りの中で、これが意味するところは一つだ。――すなわち、特攻。もちろんやたら無闇に突っ込む訳

ではなく、相手の隙を見つけたらだが。しかし隙は作るものである。
ミラボレアスがブレスを吐こうと身体を反らせたところでジュンキはミラボレアスに向かって左に、ショウヘイは右へと回った。ブレスは丁度二人の間を通り抜け、虚空で消える。後に残ったのはブレスを吐いた直後で動きが鈍い、隙だらけのミラバルカンだ。
「はあああああ――――！」
ジュンキとショウヘイの声が重なり、鏡に移したように左右対称になって太刀を振り回す。タイミングを完全に合わせた、気刃斬りだ。それは硬いミラバルカンの鱗を斬り裂く。
「――――あああああ！！！」
気刃斬りの動作を終えるとジュンキとショウヘイは太刀を大きく横に振り、その勢いで後退した。その瞬間を待っていたユウキ、カズキ、チヅル、クレハが猛攻を加える。
「ぐうぅ…！おのれぇ…！」
ミラバルカンの苦言が漏れ聞こえる。ショウヘイが正面に立ち、ジュンキは再び尻尾へと向かった。
「はああっ！」
ジュンキのラスティクレイモアがミラバルカンの尻尾を一閃。先端が斬り裂かれて出血する。正面に立つショウヘイや側面から絶え間なく攻撃を加えるユウキやカズキ、チヅルやクレハに気を取られているうちに出来るだけ攻撃をとジュンキは一度ラスティクレイモアを構え大きく横に薙いだが、それは直前で避けられてしまう。
「なっ…！」
太刀に身体を持っていかれる中で、ジュンキはこちらを振り向いて不気味な笑みを浮かべているミラバルカンを見てしまった。――――読まれていた。太刀は大剣ほど重くはないが、その分長い。そして防御が出来ない。隙だらけのジュンキに向かって、ミラバルカンは鋭い尻尾の先端を振り下ろした。それはいとも簡単にジュンキの身体を守るリオレウスの防具を貫き、左肩口に突き刺さった。
「ぐあああああああああッ！！！」

ジュンキの左肩口から血飛沫が飛び散る。脚の力が抜け、その場に膝をついてしまう。突き刺さったミラバルカンの尻尾――先程ジュンキが斬りつけた傷から、ミラバルカンの血液がジュンキの体内に直接流れ込んでくる。

「ジュンキッ！」

悲痛な声が聞こえた。それと同時にチヅルがジュンキの視界に現れ、直後にミラバルカンが悲鳴を上げながら尻尾をジュンキの左肩口から引き抜いた。恐らくショウヘイか誰かがミラバルカンに有効な攻撃を加えたのだろう。

「しっかりして！」

チヅルは今にも泣き出しそうな顔をしていた。倒れていたジュンキを抱え、膝の上に寝かせる。

「チヅル…」

「しゃべっちゃ駄目！」

「大丈夫だから」

ジュンキの声にチヅルは必死に自分のアイテムポーチから何か出そうとしていたのを止めて、ジュンキを見つめた。ジュンキの傷口は塞がっていた。

「え…？」

「ありがとう、チヅル。もう大丈夫だから、少し離れてて」

「あ…」

ジュンキはそう言うと何事もなかったかのように立ち上がり、チヅルからすこし距離を置いて再びしゃがみ込んだ。いや、あれはしゃがみ込んだというより、「構えた」の方が正解だとチヅルは思い直した。

今自分の身に何が起きようとしているのか、それはジュンキ自身が分かっていた。

「さあ…来いよ…」

自分の考えが当たっているのならば、恐らく自分はこれから「竜化」

するはずだ。身体に直接流し込まれた、ミラバルカンの血によって。
「ぐっ…！」
身体の芯から何かが這いでてくるような圧迫感を感じる。そしてすぐに変化は起きた。
「ぐ…うおおぁあああっ…！」
ジュンキが感じたのは全身の筋肉が膨張する激しい痛みと、背中に焼けるような熱さと共に「生えてくる」感覚だった。

「う…あぁ…！」
チヅルは言葉を失った。ジュンキの防具、レウスシリーズの胴装備であるレウスメイルの背中が弾け飛び、中から深紅の翼――まさしくリオレウスの翼が生えてきたのだ。翼の成長が止まると、ジュンキはゆっくりとした動作で立ち上がり、レウスヘルムと取ると傍らに投げ捨てた。
「…！」
再びチヅルは絶句した。思わず両手で口を塞いでしまう。ジュンキの瞳がまさしくリオレウスの様に深い蒼色に染まり、瞳孔が不気味に縦に割れているのだ。そのジュンキはラスティクレイモアを拾うと、ゆっくりとミラバルカンへと歩み寄っていった。
「な…！ば…馬鹿な…！完全なる竜人の復活だと…！」
ミラバルカンの明らかな焦りの声が聞こえたのがこの時である。チヅルは周りを見回すと、ショウヘイやクレハ、ユウキとカズキも手を止めて事の成り行きを見つめている。
「ええい！焼き殺してくれるわ！」
ミラバルカンは悲鳴に近い声を上げてブレスをジュンキ目掛けて放った。ジュンキは避けようともせず、ラスティクレイモアを構えた。
「ジュンキっ！」
チヅルの悲鳴が上がったが、ジュンキは動じなかった。そして、ブレスで何も見えなくなる――。
「ははははっ！いくら竜人でも慣れない身体ではどうしようも――」

異変が生じたのはこの時だった。突然ミラバルカンの放った巨大なブレスが縦に裂けて二方向へと別れたのだ。その中心には振り切ったラスティクレイモアを構えるジュンキ。そして何事もなかったかのように再び歩き出す。

「ブレスを…斬った…？」

かろうじてチヅルが口にした言葉。それが聞こえたのかどうかは分からないが、ミラバルカンの顔は明らかに恐怖に歪んだ。

「死ねえええええ！」

ミラバルカンがジュンキ目掛けて大きな口を開いて噛み付こうとした。しかしジュンキはそれを紙一重避け、有り得ない高さまで跳躍するとラスティクレイモアを一閃した。ミラバルカンは凍ったように動きを止め、その背後にジュンキは降り立った。

「嫌だ…！死にたくない…！死にたく――――」

ジュンキが血糊を振り払うようにラスティクレイモアを一振りすると、盛大な血飛沫をあげてミラバルカンの首が落ちた。

長い間、誰一人としてその場を動かなかった。いや、動けなかった。しかしチヅルは自分自身に渾身の活を入れて立ち上がり、いまだにこちら側に背を向けて微動だにしない、完全なる竜人として降臨したジュンキへと歩み寄った。

「…ジュンキ」

チヅルがそっと名前を呼ぶと、ジュンキはゆっくり振り向いた。その表情は暗い。チヅルがそっと右手を差し伸べたが、ジュンキはそれを恐れるように一歩退いた。何かを言おうとジュンキは口を開きかけて、すぐ閉じてしまう。

「…ジュンキは、どんな姿になってもジュンキだよ」

そう言ってチヅルが一歩進み出たと同時に、ジュンキはその場にうずくまった。

「ジュンキっ！？」

チヅルは慌ててうつむくジュンキの顔を覗く。

「大丈夫…。元に戻るだけだから…っ」
ジュンキの言葉が終わるやいなや、背中から生えているリオレウスの翼が一気にジュンキの背中へと縮まっていった。
「ふう…」
ジュンキは小さくため息を吐くとチヅルの顔を見た。既に竜の瞳も元の人間のものへと戻っていた。
「ちょっと…無理し過ぎたかな…」
ジュンキはその言葉を最後にその場で崩れた。
「ジュンキっ!?」
「大丈夫か!?」
ショウヘイやクレハ、ユウキにカズキが駆け寄ってくる。
「大丈夫。気を失っただけみたいだから…」
チヅルの言葉に安堵の空気が流れる。
「…紅龍は死んだな」
「そうだね。そしてジュンキは竜人になった。完全にね」
ショウヘイの言葉にクレハが続いた。自分たちもいつかは…と考えてしまう。
「ま、話は剥ぎ取ってからでも遅くないんじゃないか?」
カズキはそう言って腰から剥ぎ取りナイフを抜いた。
「…そうだね。帰りの竜車の中とか、街に戻ってからでも遅くないと思うよ」
チヅルの意見に後押しされてか、カズキは早速紅龍の死骸へと足を運んでいった。

「…ジュンキは、まあいいとして…これからどうなるのかな…」
「…恐らく、ミラボレアスが言っていた長兄のミラルーツを説得か何かをしないと、全ては終わらないだろうな」
ミラバルカンの死骸に剥ぎ取りナイフを滑らせながらのクレハの質問に、ショウヘイは憶測を述べた。
「ジュンキが気がついたらまた話し合おう」

「そうだね…」
クレハは頷いた。ふとある考えが思いついて、クレハはショウヘイに聞いてみることにした。
「ジュンキの防具、直しておいた方がいいかな？」
「ジュンキはきっと喜ぶぞ」
ショウヘイの言葉に、クレハは微笑んで頷いた。

旧シュレイド城の外で待っていたリオレウスに全てを話すと、もうこれ以上この場に居たくないというようにそそくさとドンドルマの街へ出発した。結局、ジュンキは街に着いても目を覚まさなかった。

ＭＨ１ｓｔ　第３章　龍からの世界観　０６（後書き）

次回、ついにエピローグ！お楽しみに！

MH1st エピローグ

目を覚ますと、そこは見慣れた天井だった。どうやら自分は気を失った後目を覚ますことはなく、自分の部屋に寝かされていたらしい。窓の外がぼんやりと明るくなってきているところを見ると、まだ日の出前らしい。ジュンキは上半身をベッドから起こすと、左手を額に当てて考え始めた。そして意を決したように立ち上がると、装備を整え始めた。そこで先日のミラバルカン戦で壊れたはずのレウスメイルが直っていることに気がついた。

「…」

つい先程の決意が揺らいでしまうが何とか押し殺して準備を続け、そして物音を立てないよう静かに部屋を後にした。

「ニャー…」

その様子を、物陰からこっそり覗かれていることを知らずに。

いくら大陸最大の街ドンドルマといえども、日の出前の薄明かりの中を歩くハンターや商人はいなかった。しかし広場の中央に見慣れた竜が一匹いるのを確認して、ジュンキは苦笑いした。

「おはよう。どうした？」

「まずは礼を言いたい。ありがとう」

「礼を言われる筋合いはないよ。――これから逃げ出すんだから」

「…訳ありだな。話してはくれぬか？」

「…俺のあの力は自分で制御出来ていない。また、いつ、どんな時に俺の中の竜が目を覚ますかも分からない。それが自分で制御出来るまでは…パーティを離れようと思う」

ジュンキの言葉に、リオレウスは何一つ言わず黙って聞いていた。

「そうか。ヌシがそう思うのも無理はない。儂に出来ることは少ないが…ヌシを運ぶことくらいなら出来るぞ」

「…じゃあお願いするよ」

「行き先はどこだ？」
「大陸の最北端。そこには小さな村があって、今ハンターを募集しているって話らしいんだ。身を隠すには丁度いいでしょ？」
ジュンキはそう言ってリオレウスの右足の上に乗った。
「ジュンキ」
突然後ろから声を掛けられて、ジュンキは驚いて振り向いた。
「クレハ…！どうして…？」
「ジュンキの部屋のアイルー君が教えてくれたよ。…どこに行く気なの？」
「…聞いてたよね？大陸の最北端だよ。時間はかかるかもしれない…でも、必ず戻ってくるよ」
「…早く戻ってきてよ」
クレハの寂しそうな表情にジュンキはしっかりと頷くと、リオレウスに飛べと言った。一気に飛び上がり、ドンドルマの街から北へと向かう。
「こっちの気も知らないで…ばか…」
クレハは小さくなっていくジュンキとリオレウスに向かって小さな声で言った。

「良かったのか？これで」
ドンドルマの街が粒になってしまった頃になって、リオレウスが口を開いた。
「ああ。それよりも気になることがあるんだけど」
「何だ？」
「お前にも名前ってあるのか？リオレウスっていったら俺達だと人間、みたいな呼び方だろ？」
「…ザラムレッドだ」
「ザラムレッド…か。いい名前だな。これからもよろしくな、ザラムレッド」
ジュンキの言葉に、ザラムレッドは照れくさそうに「ああ」と言っ

た。

眩しい朝日を浴びながら、一匹の竜と一人の竜人は北へ北へと向かい飛び続けた。

（ＭＨ１ｓｔ　おわり）

ＭＨ１ｓｔ　エピローグ（後書き）

こんばんは。こんにちはかな?秋夜空です。男です。
今日はモンスターハンターの二次創作、ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　１ｓｔ　Ｓｔｏｒｙを最後まで読んで頂きありがとうございました。作者の稚拙な文章を最後まで読んでいただいてとても嬉しいです。この物語、勿論ここで終わるわけではありません。ＭＨ１ｓｔというタイトルの通り、これはまだ一番目の物語です。文庫本でいうところの第一巻が終わったぐらいでしょうか。
この物語は作者だけでなく、多くの友人達の力を得て作り上げています。キャラクターの名前が日本人っぽいのも、作者の友人達のキャラクターネームをそのまま使わせてもらっているからです。
この小説は作者が中学生時代にノートに書いていたものです。今作者は大学生なので５～６年物の作品となります（汗）。構想五年――そういうことです。はい。
この物語は壮大です（自分で言った!）。どうか最後の最後までお付き合い頂けることを願って、作者の言葉とします。

２０１１．０３．１４　秋夜空

ＭＨ１ｓｔ　外章　クレハの昔話　０１（前書き）

こんばんは?こんにちは?秋夜空です。男です。
今回はメインキャラクターの一人、クレハの昔のお話をお送りします。
はじまりはじまり…。

MH1st　外章　クレハの昔話　01

クレハはドンドルマの街にあるハンター専用の宿舎――通称マイハウスの自室の扉を壊さんとする勢いで開くと急いで閉じて、ドアに背を預けてその場に座り込んだ。
「ん～！チヅルちゃんのばぁか～！！！」
クレハは自分の震える両手を見つめた後、天井目掛けて叫んだ。
「ど、どうしたんですかニャ旦那さん！」
「な、何でもないの！何でも…！そ、それよりお風呂入るから沸かしてきてくれない？」
「はニャ？そうですかニャ？分かりましたニャ」
部屋付きアイルーがクレハの大声を聞きつけて飛んできたので、クレハは慌てて適当な理由をつけて部屋付きアイルーを追い返してしまった。
「…ふう」
クレハは何度も大きく深呼吸して心を落ち着けると、ゆっくりと立ち上がった。
「私…何動揺してるんだろ…」
胸に手を当ててみると、まだ心臓が早鐘のように打っている。クレハは再び大きく深呼吸するとアイテムボックスの前に立った。そこでクレハは背中から双剣ツインハイフレイムを外し、アイテムボックスの横に立て掛けた。ふと視線を上げると、壁に飾られた双剣――の片方を見つめた。
「…師匠」
思わず口にしてしまった。この一本の双剣はクレハの師匠ジークが自分の前から姿を消す直前にくれたのだ。
「旦那さん、お風呂がぼちぼち沸いてきたニャ」
「あ、ありがとう」
部屋付きアイルーの声に、クレハは我に返った。まだ風呂には早い

時間だが、こちらの都合で沸かせてしまったのに入らないのはあまりにも申し訳ないので入ることにした。まず結っていた青色の髪を解くとレイアヘルムを外した。結っている時は背中の中ほどまでしかない髪が腰の下まで伸びる。

「ふう…」

レイアヘルムに押し込まれていたちょっと自慢のストレートヘアーの開放感に、クレハは思わずため息を吐いた。このままレイアメイル、アーム、フォールド、グリーヴを除装し、インナー姿になった。脱いだ防具はアイテムボックスに整頓して収納し、替えのインナーを持つと脱衣所へと向かう。脱衣所と自室を繋ぐ曇りガラス扉を閉めるとインナーを脱いだ。洗い物用のカゴに入れておくと洗ってくれるので面倒臭がりのクレハにはありがたい。脱衣所には既に浴室タオルとバスタオルが用意されているので、クレハは浴室タオルを手に取ると浴室に入った。――説明が遅れたが、このようにマイハウスにはハンター専用大浴場の他にこうして個室にも風呂があるのだ。

浴槽の中は四分の三程が湯に満たされていたので、クレハは浴室タオルをタオルラックに掛けると給湯栓を閉め、手桶で一度体を洗い流してから入浴した。

「ふう…」

物音ひとつしない、静かな空間。どうしても、先程のチヅルとの会話が思い出されてしまう。

「…チヅルちゃんのばか」

先程、クレハはチヅルから変なことを言われてしまった。簡潔にまとめると、ジュンキとクレハはお似合いだということらしい。

「何でそうなるのかなぁ…。私がチヅルちゃんとジュンキが上手くいくようにアドバイスしてるのに…。大体、私とジュンキをリオレイアとリオレウスに例えなくても――」

ここでクレハは言葉を切った。いや、切れた。

「リオレイア…か」

リオレイア――学問上は竜盤目獣脚亜目甲殻竜下目飛竜上科リオス科に属する飛竜であり、リオレウスと番となることでハンター達の間では有名である。だがクレハにとってリオレイアという飛竜にはとても思い入れがあった。

「…母さん」

クレハは目を伏せると、記憶の彼方へと意識を飛ばした。

MH1st　外章　クレハの昔話　02

あの事件が起きたのは、私がまだ十二歳の時だった。私の生まれ育った村は交通の便も悪く、村を守るハンター、つまり村に居座るハンターは私の母一人のみだった。母は女手ひとつで私を育ててくれていた。なので、母のもとに狩りの依頼がくると私は一人でお留守番だった。私は一緒に行きたいと言ったものだが、母は首を縦には振らなかった。

ある日、いつものように母のところに狩りの依頼がやってきた。いつも快く引き受ける母だったが、この日ばかりは表情が険しかったのを覚えている。そして母はいつもより重装備で家を出ようとしていた。

「お母さん…」

「…大丈夫。かならず戻ってくるから」

「私も…一緒に…」

母は装備を点検する手を止めて、私の両肩に手を置いた。

「クレハがもっと大きくなったら、一緒に狩りに行く約束でしょう？それまでは我慢してね」

「…」

「…返事は？」

「…はい」

「いい子ね」

母は満面の笑顔で私を優しく抱きしめた。

「それじゃあ行ってくるから。お留守番よろしくね」

「行ってらっしゃ～い…」

母は笑顔で手を振ると、後ろ手で家の扉を閉めた。足音が遠ざかると、クレハは裏口から飛び出した。今回の狩りはいつもと違う。どうしても、気になった。村の家の陰や木の陰に隠れながら母の後を

追うと、村長と何か打ち合わせていた。あんな真剣な母の顔を、クレハは今まで見たことが無かった。そして母が大きくしっかり頷くと、村の裏の出口へと向かって歩き出した。クレハも慌てて追いかける。母はこの村唯一のハンターなのでこの村から出たりはしない。狩場はいつも村の裏の山だった。そしてここは村人ならば誰もが地理を知っている。もちろん、クレハもだ。

クレハがヘトヘトになってしまい、そろそろ母を追いかけるのを諦めようと思ったその時、今まで疲れを微塵も見せなかった母の歩みが止まった。クレハは慌てて木陰に隠れる。母の声が聞こえた。

「ごめんなさい。あなたには悪いのだけれど、ここを立ち去ってもらえないかしら。この近くに、私達の集落がある。このままここに営巣すれば、あなたも、あなたの子供も危ないわ」

誰に向かって言っているのだろうか。クレハは目を凝らした。しかし母の前には何もいない。一面、緑の森――いや、何か、巨大なものが動いた！

「駄目…よね。出来れば私もあなたを攻撃したくはないのだけれど…仕方ないわ。私の方が強いと判断してくれたら、その時は素直に身を引いてね。そうすれば、私もそれ以上の危害を加えないから」

母はそう言って背中の双剣を抜いた。それと同時に辺りに響いた爆音――今ならそれは飛竜の咆哮だと分かるのだけれど――にクレハは両手で耳を塞いだ。ようやく辺りを確認できる程になると、その時には母と飛竜の戦いは始まっていた。今まで母の前には何もいなかったと思っていたがそれは間違いで、周りの森の緑に溶け込むような深い緑色の飛竜がいたのだった。

母と飛竜の戦いは凄まじいものだった。飛竜は母に対し容赦なく巨体をいかした突進をしたり、灼熱のブレスを吐いたりしていた。一方の母はそれらの攻撃を避け、少しずつ、しかし確実に攻撃を加えていった。そして飛竜が大きく翼を開いて後退すると、両者そのま

ま動かなくなった。母も飛竜も真剣な表情を崩さない。
「わぁ…」
クレハは母と飛竜との戦いに魅入ってしまっていた。そのせいだろう、クレハがもっとよく見えるような場所に移動しようとして何の警戒もなく一歩を踏み出した時、枯れ枝をパキッと折ってしまった。
「あっ…」
「クレハっ!?」
急に名前を呼ばれたので顔を上げると、そこには驚きの表情を露にした母とこちらを睨みつける飛竜の姿があった。
「早く逃げなさい!」
「えっ…あ…」
クレハは母に言われた通りにすぐ村へ走り帰ろうと思ったが、飛竜に睨まれて腰を抜かしてしまっていた。脚に力が入らない。
「逃げてっ!」
母の悲鳴。前を見ると、飛竜がこちらに向かって炎のブレスを吐いていた。迫り来る死のブレス。クレハには迫ってくる炎のブレスがやけにゆっくりと見えた。視界の端にこちらに向かって駆けてくる母の姿が見えたのがこの時で、次の瞬間にはクレハは母に抱かれていた。衝撃。爆発音。灼熱。何度も地面を転がった。
「うっ…お母さん…?」
「クレハ…無事…なのね…?」
母の声が弱々しかった。母は仰向けになっていたが、背中から真っ赤な液体が流れ出ていた。
「お母さんっ!?」
「クレハ…早く…逃げなさい…!」
「あ…あぁ…!」
クレハは混乱した。だが非情にも、飛竜の勝ち誇ったような咆哮が森に響いた。それを聞いたクレハはすぐ傍に落ちていた母の双剣の片方を両手で持つと、飛竜目掛けて我武者羅に駆け出した。
「うわあああああああっ!!!」

両目から溢れる涙。あまりにも小さき人の非力な突撃に、飛竜は微動だにしなかった。しかしクレハの突撃は何者かに両肩を捕まれ、阻止されてしまう。

「っ！？」

誰かと振り向こうとしたその時、視界いっぱいに光が弾けた。

「逃げるぞ！」

男の声だった。その男はクレハを抱えると倒れ動けない母の傍まで駆け寄り、そこで降ろした。

「俺が君のお母さんを運ぶから、君は走れ。いいね？」

「あ、はい…」

クレハの返事を聞く前に、母を抱え上げた男は村のある方へと駆け出した。クレハは一度飛竜の方を振り向いた。飛竜は混乱しているようで、巨大な尻尾をブンブン振り回していた。クレハはその姿をしっかり目に焼き付けると、急いで母を抱えた男を追った。

男はすぐに見つかった。母はその場に寝かされていて、先程の男が介抱している。

「お母さん！」

「クレハ…」

クレハは母の前に座り、顔を覗き込んだ。穏やかな、いつもの母の顔がそこにあった。

「クレハ…これから言う事をよくお聞き…。お母さんは、ハンターとして死にます…。これは、仕方のない事なの。私は今までたくさんの命を頂いてきたわ…。今度は、私が命を捧げる番なのよ…」

「お母さん、何を言ってるのかクレハには分かんないよ！」

「クレハ…あの飛竜を…リオレイアを…恨んでは駄目よ…」

「え…？」

「クレハが大きくなったら一緒に狩りに行こうって言ったのに…約束、守れなかったわね…。ごめんね、クレハ…」

「そんな！お母さん！死んじゃやだよ！」

「しっかりと…生きるのよ……――――――」
「お母さん！」
「…」
「お母さあああああんっ！！！」
「…」
「うわあああああああああっ！！！」

村まで、クレハを助けた男――本人はジークと名乗った――が母を運んでくれた。ジークもハンターで、母とクレハが村を出た後にやってきた。そしてクレハがいないことに村人が気付き、村長がジークにクレハの救出と母の援護を頼んだと、母の葬儀の準備の間に村長自ら話してくれた。そして母はハンターとして死んだので、装備は解かずにそのまま埋められることになった。クレハは深緑の防具に包まれた母が埋没するまで、脇目もふらずに見つめ続けた。

翌日、クレハは村長のもとへと向かった。村長は慰めてくれたが、クレハは大丈夫です、と気丈に振舞った。
「村長、私、ハンターになる」
「母と同じ道を歩むか…」
村長はジークにクレハの面倒を見てくれないかとお願いした。ジークはひとつの村や街に活動拠点を持たないハンターなので最初は断ったが、クレハの強い意思に折れ、クレハが一人前になるまでと条件付きで村に留まることになった。

それから三年が経ち、クレハは単独でゲリョス討伐に成功していた。武器は母や師匠ジークと同じ双剣である。そして再び、飛竜が村の裏の山に営巣しようとしていた。どんな運命の巡り合わせか、それは母が戦った飛竜と同じ、リオレイアであった。
「師匠！私に行かせて下さい！」
「駄目だ」

朝から何度目かのお願いを、ジークは言葉ひとつで退けた。
「危険だと感じたらすぐ村に戻りますから！」
「お前はリオレイアを引き連れて村へと戻ってくるつもりか？」
「それは…」
「大体何をそんなに焦っている？…もしや母の敵討ちではないだろうな？」
「ち、違います！私は母が戦ったリオレイアと戦ってみたい、それだけです！」
「そんな好奇心だけで倒せる相手ではない」
「…」
「安心しろ。見学はさせてやると朝から言ってるだろう？明日の朝に出発だから、準備をしておけよ」
ジークはそう言うと、自宅のある方へと歩いて行ってしまった。
「…」
クレハはジークの姿が家屋の陰に隠れて見えなくなるまでその背中を見つめ続けたが、やがて自分の家へと戻り、ベッドの上に腰掛け、考えた。
「…よし」
熟考の末、クレハは決意をひとつに立ち上がった。即ち、ジークに黙って狩りに行く。もちろんクレハも自分の実力はリオレイアに――母に遠く及ばないことは分かっている。だから無理はしない。危険を感じたらすぐ離脱する。クレハはいつも通りに装備を整え、自宅を出た。村長にはジークに依頼書を取ってこいと言われたと言えばすぐにリオレイア討伐の依頼受注書を発行してくれた。
「無理はしちゃダメ。生きて帰るのよ、クレハ」
クレハは自分に言い聞かせると、一人村を後にした。
肝心のリオレイアはすぐに見つかった。リオレイアはクレハに尻尾を向け、川の水を飲んでいた。奇襲するなら絶好の機会だったが、クレハにはためらわれた。それはやはり母の影響だった。母はあの

時、正面から挑んだ。さすがにクレハはリオレイアに語りかけることは出来なかったが、リオレイアがこちらに気づいてから攻撃することにしていた。リオレイアは水を飲み終えるとクレハのいる方を振り向き――クレハと視線が交わって動きを止めた。長い沈黙が二者の間を覆った。

「…あなたには何の恨みもない。当時の私は母の言った意味が分からずすごく恨んでいたけれど、今は違う。わたしはあなたに、復讐者ではなく、一人のハンターとして挑みます」

自分の口から言葉が流れ出てきたことにクレハ自身も驚いた。リオレイアはクレハの言葉が終わるまで黙って聞いていたが、クレハが双剣を抜くとリオレイアは咆哮した。クレハは素早くアイテムポーチに手を入れると桃色の球体を取り出し、リオレイアに投げつけた。それはリオレイアの右翼に当たり弾け、独特の臭気を放った。狩猟の初めはペイントボール。ジークに教わった通りに、手順を踏む。そして相手の――今回はリオレイアの動きを見て、隙を見つけて攻撃――。リオレイアは首をもたげると、クレハに向かって炎の――母を殺したブレスを放つ。

（今は余計なことを考えちゃダメ！）

ブレスを放った後の隙に、クレハは双剣をリオレイアの右翼に一閃――しかし。

「なっ…！」

弾かれた。飛竜の中では比較的斬りやすい翼膜に、クレハは傷ひとつ付けることが出来なかった。

（そんな…これじゃ勝てない…！）

今の自分ではリオレイアには絶対に勝てないと、クレハは悟った。勝てないと分かったならばとる行動はひとつ。逃げるのだ。だが相手はリオレイア。いきなり背を向けてはブレスやその巨体を生かした突進攻撃等でやられてしまうだろう。引き際を見極める必要があった。しかしリオレイアはクレハを生きて返すつもりは毛頭なさそうであった。リオレイアが自身を軸に回転し、横から迫る尻尾の一

撃を、クレハは屈んで紙一重で避けた。
「くっ…！」
リオレイアは翼を開き、宙を舞ってクレハと距離を取った。そしてブレス。ブレスは直線――しかもブレスを吐いた後には隙が出来る。その間に逃げようかと思ったクレハだったが、クレハはまだ知らなかった。リオレイアはブレスを同時に三発放てることを。
「うそ…っ！」
クレハは慌てて身を硬くするしかなかった。だが幸いにもブレスはクレハの前後を通り抜け、後方の木々にぶつかって爆発した。
「あ…あぁ…」
クレハの心を、リオレイアのブレスはいとも簡単に砕いてみせた。そしてリオレイアはクレハに向かって突進した。だがクレハはこれを本能的に避けた。リオレイアの巨体が木々を薙ぎ倒す様を見て、今自分がリオレイアの突進を避けきれなかったらと思うと背筋が凍った。クレハは唾を飲み込むと、アイテムポーチに入れたはずの閃光玉を探し始めた。これでリオレイアの視界を奪えば、逃げ切れるはずだ。
「あれ…？」
だが初めてリオレイアと対峙した緊張と恐怖もあるせいか、なかなか取り出せない。その間にリオレイアは体勢を整え、クレハに向かって咆哮した。怒りを露にしたわけではなくただの威嚇だったのだが今のクレハには効果覿面であり、クレハは思わず尻餅を着いてしまっていた。
「あ…うあ…あ…」
リオレイアがゆっくりと歩み寄ってくる。それに対してクレハは立ち上がれず、尻を引きずって後退る。そして巨木に背中側を遮られ、クレハは逃げれなくなった。
「あっ！」
正面を向くと、目と鼻の先にリオレイアの顔があった。
「ひっ…！」

クレハの顔が引きつる。リオレイアの口がゆっくりと開き、喉の奥が見えた。
「あ…！い、嫌ぁ…っ！」
――――気を失う直前、クレハはジークの後ろ姿を見た気がした。

気がつくと、クレハは大きな葉を敷き詰めた地面に寝かされていた。
「気がついたか？」
ジークの声がして、クレハは上半身を起こした。
「師匠…」
ジークはクレハに左半身を向けるように座っていた。
「大丈夫か…？怪我は…なさそうだな…」
「――――ッ！？」
クレハは思わず口を両手で覆った。こちらを振り向いたジークの右腕が肩から消え失せていたのだ。
「これか…。大丈夫、止血はしてある。まあ愛弟子の命を救えたんだ、安い安い」
「そんな…師匠…。私が、私が一人でリオレイアに挑まなければこんなことには…っ！」
クレハの言葉を聞いて、ジークはふうとため息を吐いた。
「…リオレイアは諦めるのか？」
ジークの言葉に、クレハは首を横に振った。
「…諦めたくはありません。師匠に大変な怪我を負わせた以上は…退けません…！」
涙声になっているクレハの頭の上に、ジークは左手を置いた。
「いいか、クレハ。復讐心を抱いて狩りをしてはいけない。それは狩りではなく殺しだ。分かってるな？」
クレハは小刻みに震えて頷いた。
「よし。あと無理はするな。何日かかってもいい。確実に狩れ」
「でも…狩猟の時間制限が…」
「そんなもの俺が村長に掛け合う。心配するな」

「…」
「…今日は引き上げるか？」
「…いいえ。でも――」
「そうこなくちゃな。俺の知っているクレハは、いつも元気で明るいハンターだ」
「でも…私の双剣じゃ刃が入りませんでした…」
「だったら俺のを使うといい」
「えっ…！」
ジークはそう言うと地面に転がしておいた双剣を左手で持ち上げ、クレハに差し出した。
「…生きて帰ってこいよ。無理はするな」
「…はい」
「声が小さいぞ」
「はいっ！」
クレハはジークに一礼すると、森の奥へと駆け出していった。

クレハとリオレイアの戦いは九日に及んだ。その間クレハは決して無理はせず、日が暮れるまでには村に戻った。この狩りにはジークも同行していたが、余程の危険がクレハに迫るまではリオレイアに感づかれないように身を潜め、有事の際はクレハを助けた。

クレハがリオレイアを討伐した翌朝、ジークはいきなりクレハに別れを告げた。
「ど、どうしてですか！？私はまだまだ師匠に教えを請いたいです！」
「お前はリオレイアを討伐した。本当はリオレウスを討伐してこそ一人前と言われるのだが…まあこの際細かい事は気にしないでおこう」
「そんな…私はまだ自分の力量を把握しきれていない未熟者です！リオレイアを討伐出来たのも、師匠が危ないときは助けてくれると

分かっていたからです！」
「途中経過はどうであれ、お前はリオレイアを討伐した。その事実は変わらない。俺の役目はここまでだ」
ジークはそう言うと荷物を担ぎ、家を出た。すぐにクレハが追いかける。そうしているうちに村の入口に着くと、突然ジークは歩みを止めた。
「あ～もうしょうがない弟子だな！」
ジークは荷物を下ろすと背中から右手用の双剣を抜くとクレハに向かって放った。それをクレハは慌ててキャッチする。
「し、師匠？」
「お前を一人前だとして独り立ちさせるつもりだったが仕方ない。お前にその剣を預ける。自分が納得出来たら、俺のところへ返しに来い」
ぽかんとしているクレハをよそに、ジークは再び荷物を担ぐと歩き出した。
「師匠！必ず！必ず返しにいきますからー！」
クレハの言葉に、ジークは左手を上げて答えた。

MH1st　外章　クレハの昔話　03

「――――そして二年が経った十七歳の時に村を出て、ミナガルデの街に行ったんだっけ。母さんと同じ、リオレイアの防具を身に着けて…。そしてジュンキに出会った…。あの時のジュンキは…今でもだけどリオレウスの防具で、ベッキーは私とジュンキを夫婦みたいってからかったっけ…。そして…私にはリオレイアの血が流れてる、か…。母の防具、私の防具、母の死因、私の血…。私とリオレイアは、切っても切れない縁があるのかな…」

クレハはふうと小さなため息を吐くと、顔を目の下まで湯船に沈めた。

「旦那さん！生きてますかニャ！？」

部屋付きアイルーに脱衣所から叫ばれて、クレハは我に返った。どうやら相当長い時間湯船に浸かっていたらしい。

「大丈夫！生きてるよー！」

「はニャ？そうですかニャ」

部屋付きアイルーはそう言い残して脱衣所を出ていった。

「…そろそろ上がろう」

クレハは勢い良く湯船から上がるとタオルケットに掛けておいた浴室タオルに手を伸ばして――――異変に気付いた。視界がぼやけ、全身の感覚が薄れていく――――。

「しまっ…た…」

のぼせたと理解した時には、既にクレハは浴室に倒れていた。

「う～ん…？」

目を開けると、そこには脱衣所の天井があった。

「気がついたか…。大丈夫か？クレハ…」

「え…？」

声が聞こえた方を向くと、そこには心配そうにこちらを覗く私服姿

のジュンキがいた。
「私――――」
「のぼせたな」
そう、自分はのぼせたのだ。しかし浴室の床に叩きつけられたのは痛かった。なにせ自分は裸で――――裸？
「あ…や…いやーーーっ！！！」
クレハは右手で拳をつくると覗き込むジュンキの顔面目掛けて殴りつけた。それをジュンキは寸前で手首を掴んで阻止する。
「お、落ち着けっ！」
「このっ！」
今度は左手で殴りつけるが、これも手首を掴まれてしまう。
「み、見ないでーーーっ！」
「み、見てない！見てないし見えないから落ち着けってば！」
クレハはジュンキにそう言われると、恐る恐る胸元を見た。そこにはバスタオルが掛けられ、確かに見えていない。
「あ…その…えっと…き、着替えるから…その…」
「え…？ああっ、その、ごめんっ！」
ジュンキは顔を赤くして脱衣所から飛び出していった。
「ま、待って！」
クレハが呼び止めると、ジュンキの足音が止まった。
「その…お礼が言いたいの。椅子にでも座って待っててくれないかな…？」
「ああ、うん、分かった…」
ジュンキの返事を聞くとクレハは立ち上がり、身体を拭いてからインナーだけを身に着けて脱衣所を出た。こちらの姿を見たジュンキは慌てて顔を逸らしたが、その様子にクレハは微笑んだ。簡単なシャツを一枚着ると、ジュンキの座っているテーブルの正面に座った。
「えっと…まずは助けてくれてありがとう…」
「いや、まあ、その…俺も不謹慎だったよ…」
「どうして私がのぼせて倒れたことが分かったの？」

「クレハの部屋付きアイルーが廊下で叫んでたからさ…何かあったのかと思って…」
「そう…」
長い沈黙が二人を包んだ。互いに顔が少し赤いが、互いに気づいていない。
「その…」
結局、クレハが先に口を開いた。
「本当にありがとう…」
「え、まあ仲間だから当然のことをしたまでで…」
再び長い沈黙。
「そ、それじゃあ俺は部屋に戻るよ…」
そう言ってジュンキは立ち上がり、部屋の出口へと歩き出した。
「あ、ちょっと待って」
呼び止められ、ジュンキはその場でこちらを振り向いた。
「その…夜ご飯、まだだよね？」
「え？ああ、これからだけど…」
「じゃあ私が一本おごってあげる。今日のお礼」
「え？いいよ、そんな…」
「いいの！もう決めたの！」
クレハはそう言うと立ち上がり、アイテムボックスからレイアグリーヴを取り出すと素早く履いた。ちなみにジュンキも上半身は簡単な黒シャツ、下半身はレウスグリーヴ、頭に黒バンダナという出で立ちである。
「さ、行こっ」
「え、ああ…」
クレハはジュンキを引き摺るように大衆酒場へと連れていった。
――――今回の事件で、ほんの少しチヅルがジュンキのことを好く理由が分かった気がしたクレハだった。

（おわり）

MH1st　外章　ザラムレッド

「もうすぐ暗くなる。今日の飛行はここまでだな」
沈みゆく太陽を左手に見ながら、ザラムレッドと名乗った言葉を話すリオレウスが言った。いや、正確にはザラムレッドが人の言葉を話しているのではなくてこちらが竜の言葉を理解しているのだが。
「そうだな…。適当な場所を探して野宿だな」
ザラムレッドの右足の甲の上に乗り、日が登ってから沈むまで飛行を続けたジュンキはザラムレッドの提案に乗ることにした。足元は深い森が延々と続いているが、どうにか降りれそうな場所を見つけるとザラムレッドは降下した。
「ん～」
ジュンキはザラムレッドから降りるとまず背伸びをした。いくら自分が強靭な肉体を持つ竜人でも半日同じ姿勢を続ければ肩ぐらい凝る。
「んん～っ！ふう～…さてと、まずは火を起こさないと。薪になりそうな枝を探してくるから待ってて」
ジュンキはザラムレッドにそう言うと一人森の中へと足を踏み入れた。所々に落ちていた枝を拾い集めて戻ると、そこにはザラムレッドの姿はなかった。
「あれ…？」
ジュンキは両手で抱えている枝を足元に降ろすと辺りを見渡した。するとこちらに向かってズシズシと歩いて来るザラムレッドの姿を見つけた。口に何か咥えている。
「あ…」
それはジュンキが集めたものとほぼ同じ長さ太さの枝だった。ただ量がとても多い。ザラムレッドはジュンキが集めた枝の上に被せるように口に咥えた枝を乗せた。
「ありがとう…」

「ヌシに任せていては辺りが真っ暗になってしまうからな」
「あ、そ…」

ジュンキはアイテムポーチから砥石を二つ取り出すと枝の山の近くで打ちつけた。小さな火花が飛んだが、着火する程の火力はない。
「何をしている？」
「何って火打石の代わりだよ」
ジュンキはそう言って何度も何度も砥石を打ちつけ合ったが火花が出るだけで着火しなかった。
「…どけ。儂が着ける」
「着けるってどうやって――」
ジュンキの言葉が終わらないうちにザラムレッドは大きく息を吸い込んだ。この動作にジュンキは思い当たる節があり、慌てて距離を取ろうとしたがザラムレッドの方が僅かに早かった。ザラムレッドは着火のためにブレスを吐いたのだが威力が強すぎ、爆発、炎上した。
「うわっ！」
ジュンキは爆風に吹き飛ばされる形で尻餅をついた。
「な、何するんだよ！？」
「すまん、強すぎた」

ジュンキは背中から太刀ラスティクレイモアを外しレウスヘルムを取ると持ってきた生肉を肉焼きセットで火にかけた。
「～♪」
リオレウスも腰（？）を下ろし、地面に寝転んでいる。
「よし、焼けた。…お前も食うか？」
「貰おう。儂は生でいい」
ジュンキは予備の生肉をザラムレッドの目の前に置くと、ザラムレッドは立ち上がってムシャムシャと食べた。食べ終わり残った骨を焚き火に放り込むと、ジュンキとザラムレッドは焚き火を挟んで向

かい合う形で座った。
「明日には着くかな？」
「遠くに雪山が見えた。明日の夕暮れには着くだろう」
「そっか…。なあザラムレッド」
「何だ？」
「これから…俺はどうすればいい？」
「…どう、とは？」
「俺は竜人だ。それはいい。俺は自分が竜人であることを受け入れたよ。だけどこれから…俺は竜人として何をすればいいのか分からないんだ」
ジュンキの問いかけにザラムレッドは夜空を見上げて考える素振りを見せたが、やがてジュンキの方を向いて口を開いた。
「恐らくミラルーツが出てくるだろう」
「ミラルーツ？ああ、ミラボレアス、ミラバルカンの兄か」
「そうだ。全力で人間を潰しにかかってくるだろう」
「…そこで俺達竜人か」
ジュンキは目線をザラムレッドから焚き火に移したが、ザラムレッドは話を続けた。
「世界はバランスを取ろうとする。だからヌシのような竜の血を引く者が目覚める」
「だけどミラルーツがどこにいるかなんて分からないよ？」
「何もこちらから攻める必要はない。出てくるのを待つだけだ」
「…分かった。今は自分の竜を制御することを優先するよ」
「その為に仲間のもとを離れたのだろう？」
「うるさいな。…そろそろ寝ようか」
「ああ、そうだな…しかし」
「？」
「寒くはないか？」
「…まあ寒いけど大丈夫。ホットドリンクも飲むし」
「儂の翼の下に入れ。幾分かマシだろう」

「え…いいの？」
「ヌシに万が一でも死なれては困る。それが凍死ならば笑い話にもならんぞ」
「ははは…ありがとう。そうさせてもらうよ」
ジュンキは立ち上がるとザラムレッドの左翼と脚の間に入った。
「お前結構温かいんだな」
「火竜だからな」
「それじゃ、おやすみ」
「ああ」
ジュンキは最初こそ夢まで見たリオレウスとの共寝に緊張していたが、やがてザラムレッドの呼吸音が子守唄に聞こえてきてしまい、やがて静かに眠った。

翌朝、簡単な朝食を済ませるとジュンキとザラムレッドは飛び立った。目指すは大陸の最北端。今日の夕刻には到着予定である。

ＭＨ２ｎｄ　プロローグ（前書き）

こんにちは、秋夜空です。本日より新シリーズのスタートです！その名もＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　２ｎｄ　Ｓｔｏｒｙです。そのままです。今回もどうか最後までお付き合い願いたいと思います。挨拶はこれくらいにしておいて、新たなる物語のスタートです！

MH2nd プロローグ

辺り一面の銀世界。雲ひとつない青空を突き刺すように尖った先端をもつ雪山と雪山の間を抜けるように、一匹の竜が北へ北へと飛んでいた。その右足の上には俺が乗っている。火竜リオレウスと呼ばれるこの竜にとってはこの寒さくらいどうといったことないのかもしれないが、乗っている身としてはホットドリンク無しでは到底耐えられない寒さである。

「まだ着かないのか？」

「もうそろそろだ」

俺は今、このリオレウスと会話している。この状態を他のハンター達に見られたら大変な騒ぎになるだろう。

「街を出てからもう三日経ったよね？」

「大陸の最北端だからな。アプトノスに引かれていては二週間くらいかかっただろう」

「ほんと、お前には感謝してるよ」

「感謝しているのはこっちだ。おヌシはミラバルカンの攻撃を未然に防いでくれたのだぞ。この礼はおヌシを運ぶことだけでは返しきれないと考えているくらいだ」

「そんなに気を使わなくてもいいよ」

「そう言ってもらえると助かる。――ほら、見えてきたぞ」

リオレウスの言葉を聞いて前を見た。谷間に小さな集落が見える。あれが――。

「ポッケ村…」

「村の中に入ると厄介だからな。近くで降ろすぞ」

リオレウスはそう言うと徐々に高度を落とし始めた。

雪原に足を下ろすと、俺はリオレウスと向かい合った。

「ここまでありがとう」

「先程も言ったが、礼を言うのはこちらだ」
「…また何かあったら呼びに来てね。力になるから」
「すまない。その時はよろしく頼む」
「じゃ、元気で。ザラムレッド」
「ああ」
先日ザラムレッドと名前を教えてくれたリオレウスは飛び上がり、南へと飛び去った。それを見届けてから、村の入り口へと歩みを進める。
「寒っ…」
この寒さに慣れるまで外出時はホットドリンクが不可欠だなぁと考えながら村の入り口の門をくぐる。村人は突然現れたハンターに驚いていたが、村長の居場所を尋ねると丁寧に教えてくれた。その村長は村の奥で焚き火の前に立っていた。背はとても低く、ついココット村の村長を思い出してしまう。
「すみません」
「おや、どうしたのかね?…ん?この村の者ではないね。ハンターさんが大陸最北端の村に何の御用かな?」
「短い期間かもしれませんが…ここに身を置きたいのです」
「ふむ…訳ありのようだね。訳は後から聞くとして、ヌシの名前は?」
「ジュンキです」
「うむ。ではジュンキ殿。この村にもハンターはいるのだがたった一人でしかも『おなご』じゃ。短い期間でも、村のためによろしく頼みますよ」
「ありがとうございます」
ジュンキは深々と一礼した。
案内された空き家に入ると、ジュンキはまず近くの椅子に座った。
「ふう…」
ため息をひとつ吐くと、部屋を見渡した。

「一人か…」
自分は今、大陸最北端のポッケ村にいる。もちろん遊びに来たわけではない。この村に来た最大の理由…それは自分の中の『竜』を制御することである。先日紅龍ミラバルカンと戦った時に自分の中の『竜』が完全に目を覚まし、自分は完全な竜人となった。しかしあの時、自分の中の『竜』は暴れていた。危うく『人』を忘れるところであった。もし自分が『竜』に完全に飲み込まれていたらどうなっていたか。…恐らく『人』の持つ知性と理性を失い『竜』が持つ力性と本能が暴走し――その場に居合わせた大切な仲間たちを斬り殺していたかもしれない。
「早く街に戻らないとな…」
みんなには内緒で――既に一人にはバレてしまっているが――パーティを抜け出してしまったのだ。早く自分の中の『竜』を制御し、みんなのところに戻りたい。
「でもその前に…まずは部屋の掃除からだな」
ジュンキは一人呟くと、長年空き家だったのか埃だらけの自室を掃除するために、ザラムレッドに揺られての長距離飛行でヘトヘトの体を起こした。
「しかし…広い家だな」
このくらいの広さなら窮屈かもしれないが押し込めば六人で住めるかもしれないと、ジュンキは街に残してきた仲間たちに思いを馳せた。

MH2nd　第1章　心の整理　01

ドンドルマの街は朝から賑わっている。人口が多いので当たり前といえば当たり前なのだが、今日もそれが鬱陶しく感じてしまう。行き交う街人やハンター達は表情明るく、今日はこれからどうしようかという期待が見て取れる。だが今の自分はどうだろう。とてもじゃないがそんな気分にはなれそうにもない。先日、何の別れも告げずにパーティメンバーの一人が出ていってしまったのだから。そしてそれが今、自分が最も気になる相手となると尚更である。

「ふう…」

小さくため息を吐くと、チヅルはそっと瞼を閉じた。

「あ～いたいたチヅルちゃん」

自分の名前を呼ばれたので目を開けると、目の前に一人のハンターが立っていた。深緑の防具に身を包んだ青髪青瞳の少女――パーティメンバーの一人であるクレハだ。

「おはよう、クレハちゃん」

クレハに挨拶すると、クレハは隣に座るよと言ってチヅルの横に座った。

「また朝からこんなところにいる」

「む～。いいでしょ？ここにいたい気分なんだから」

「またジュンキのこと考えてるんでしょ？」

「…」

チヅルは思わずクレハから目を逸らした。すぐにクレハが立ち上がり、チヅルの目線の先に立つ。

「ジュンキは帰ってくるって言ってたんだし、大丈夫だって」

「…どうして止めてくれなかったの？」

「ジュンキが街を出ていこうとした時のこと？あんな目をされたら止められないよ」

「どんな目？」

「覚悟を決めた目」
チヅルは目を伏せたが何かに気がついたように顔を上げた。
「ねえクレハちゃん、ジュンキがどこに行ったか知らない？」
「え？し、知らないなぁ…」
「そう…？」
クレハはジュンキがこのシュレイド大陸の最北端にある小さな村に行ったことを知っている。だがそれを言うわけにはいかなかった。その代わりに、クレハはジュンキが戻るまでチヅルを支えようと決めている。
「大丈夫。必ず帰ってくるよ」
「うん…そうだよね…」
「そうそう！さ、朝ご飯まだだよね？一緒に行こう？」
「うん」
クレハの誘いにチヅルは頷くと立ち上がり、大衆酒場を目指した。

大衆酒場は朝からひどい混雑だったが、パーティメンバーが席を取っておいてくれていたので難なく座ることができた。
「揃ったな。ユーリーっ！」
「はーい！」
パーティメンバーの一人であるランス使いのカズキが大声で呼ぶと、この大衆酒場の給仕であるユーリが飛んでやってきた。チヅル、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキがそれぞれの朝食を注文する。ユーリが来た時と同じように飛んでカウンターへと戻るとすぐに注文された朝食が運ばれてきた。五人はさっそくナイフやフォークを持ったが、すぐに太刀使いのショウヘイが声を上げた。
「食べながらでいいから、今日のこれからを話し合おう」
「そろそろ狩りに行きたいな」
ガンナーのユウキが一番に意見を述べた。
「ジュンキが抜けてからもう三日が経ってる。そろそろみんなも落ち着いてきた頃だと思うんだけど？」

ユウキは言いながらショウヘイの方を向き、ショウヘイは頷いた。
「同じだ」
ユウキの意見にカズキも賛同した。
「私も」
クレハも賛同するが、チヅルは肯定も否定もせずに朝食のサラダに目を落としていた。
「チヅルちゃん？」
クレハは心配になってチヅルに声をかけた。すると、チヅルはゆっくり顔を上げて口を開いた。
「みんなは…ジュンキのこと、心配じゃないの？」
チヅルの質問に一同困った顔をした。このなかで最初に口を開いたのはショウヘイだった。
「もちろん全く心配していない訳じゃない。だけどジュンキは何の考えもなしに飛び出していくような奴じゃないからな」
「うんうん」
「そうそう」
ユウキとカズキも頷く。クレハの方を向くと、クレハは「ね？」とウインクしてみせた。
「…そうだね。ごめん。弱気だったのは私だけだったんだね。私もジュンキを信じてみる」
「よし、そうと決まったらあとは何を狩りにいくかだな」
「ディアブロスとかいいんじゃないか？」
とユウキ。
「最近はグラビモスを狩りにいっていないな」
とショウヘイ。
「やっぱりリオレイアでしょ」
とクレハ。
「初心に帰ってイャンクックとかどう？」
とチヅル。
「男は黙ってガノトトスだろ！」

とカズキ。
「な、何それ～っ！」
カズキの言葉にクレハは腹を抱えて笑った。ショウヘイとユウキは苦笑いし、チヅルも自然と笑みがこぼれた。
「よし、じゃあ今回はガノトトスだな」
ショウヘイが話をまとめると、他の四人は頷いた。
「さて、問題は人数なのだが…」
ショウヘイが目配せすると、ユウキがおもむろに拳を突き出した。
「これだな？」
「ああ」
ショウヘイがユウキの行動を認めると、五人全員が身構えた。
「せーのっ！」
「最初はランポス！じゃんけん――――！」

「俺か…」
じゃんけんの結果、今回はショウヘイがお休みとなった。
「丁度いい。斬破刀のメンテナンスでもしておくか」
「出発は今日の昼で。それじゃあ朝食を終えたら各自解散っ」
カズキが宣言すると、五人は朝食に戻った。

朝食の後にガノトトス狩りの準備を終えたチヅルは朝に座っていた街角のベンチに再び座って時間を潰そうと考えていたのだが、そこには先客がいた。
「やっほーチヅルちゃん」
「クレハちゃん？どうしてここに？」
「ん～何となくかな？でもここいい場所だねー」
「でしょ？私のお気に入りポイントなの。隣、座るね」
チヅルは一言断ってからクレハの横に座った。
「ねえ、クレハちゃん」
「何？」

「ジュンキ、今頃何してるかな？」
「さあ？分かんないよ、そんなこと」
「だよね…。クレハちゃんはジュンキのこと気にならないの？」
チヅルの問いかけにクレハは青空を見上げてん～と考えていたが、やがて「気にしても仕方ないよ」と答えた。
「気にならないってこと？」
「気になるけど気にしても仕方ないってこと。チヅルちゃんは気にしすぎだよ」
「クレハちゃんは気にしなさすぎだよ」
「どうして？」
「クレハちゃん、ジュンキのこと好きでしょ？」
「またその話…」
チヅルの言葉にクレハは頭を抱えた。
「好きな人のことって気になるものじゃないの？」
「あ～の～ねぇ、いい仲間だとは思ってるけどまだ好きっていう感情はないって言ってるでしょ！」
「まだ？じゃあいずれは好きになるの？」
「…」
「あ、やっぱりもう好きになってる？」
「…知らないっ！」
クレハは飛ぶように立ち上がると早足で街の中央へと消えていった。
この様子を見て、チヅルは微笑んだ。
「あんなに顔を赤くして…。クレハちゃんも正直じゃないなぁ」
そう言っておきながらそういう自分はどうなのだと思うと、チヅルは一人苦笑いした。

MH2nd　第1章　心の整理　02

今回のガノトトスは砂漠の地下の地底湖に現れたらしい。その地底湖と岩場の遊水地が水面下で繋がっているらしく、このままではこの地を通る商隊の休憩場所として使えなくなってしまうというのが今回の狩猟依頼が出た主な理由である。といっても、実際そんなことを気にするハンターは少ない。ほとんどのハンターはモンスターを狩猟して生活費を得ることができたらそれでいいのだからいちいち狩猟の理由など気にしていないのだ。もちろんそれはチヅル達も例外ではない。

「しっかし砂漠は暑いな～」

ベースキャンプの設営が終わるとユウキは額の汗を拭いながら言った。

「だけど地底湖は息が白くなるほど寒いぜ」

とホットドリンクを右手にやれやれと首を振るカズキが言う。

「さ、早いとこ終わらせて街に戻ろう？」

クレハの調子はいつもと変わらない様子だった。この三人のように気楽で前向きになれたらいいのにとチヅルは思う。

「チヅルちゃん？」

「え…わあっ！」

我に返るとクレハの顔が視界を覆っていたのでチヅルは思わず情けない声を上げてしまった。

「だ、大丈夫大丈夫！準備万端だよ！」

「そう？じゃあ出発！」

「オ～ッ！」

クレハの掛け声にユウキとカズキが続き、チヅルも小さく「うん」と言ってからベースキャンプを出発した。ベースキャンプから地底湖へは一旦砂漠を横切らなければならず、四人はすぐにクーラードリンクを飲んだ。灼熱の砂漠は歩くだけでも体力を消耗してしまう

ため、地底湖の入り口に着くまで誰一人口をきかなかった。
「寒…っ」
地底湖に入ると先程の砂漠とは打って変わってとても寒く、チヅルは思わず声に出してしまった。すぐに四人はホットドリンクを飲む。
「さてと…ガノトトスちゃんはいるのかな?」
カズキはそう言うと薄暗い地底湖の奥へと歩みを進めた。
「カズキ〜。どうだ〜?」
「ガノトトスはいないな。地下で繋がってるっていう…岩場の方か?」
カズキの返事を聞いて、チヅル、クレハ、ユウキも地底湖の奥地——水際まで移動した。
「どうする?岩場に行くか?」
「…ここで待ち伏せしない?幸い小型モンスターもいないし」
カズキの問いかけにクレハが答えると、カズキとユウキは頷いて了承した。
「チヅルちゃんは?」
「え、あ、うん。そうしよう」
全員一致したところで、簡単な作戦会議を開いた。ガノトトスは音に弱く、音爆弾で水中から引き摺り出すことができる。そしてガノトトスが着地すると思われる場所に落とし穴やシビレ罠を設置しておき、一気に攻撃することにした。
「落とし穴はここらへんでいいかな?」
「そこならどこから飛び出しても大丈夫だろ」
ユウキはカズキのアドバイスを聞きながら落とし穴を設置した。
「さて、ガノトトスはいつ現れるか…」
ユウキが地底湖を睨みながら言うと、チヅルが水際に立った。
「私が見張ってるよ」
「疲れたら言ってね。すぐ交代するから」
「うん」
クレハの言葉に頷くと、チヅルは地底湖の方を向いた。水面に動き

がないか警戒する。
「異常なし…か…」
ボソリと呟くと、チヅルは肩の力を抜いた。それと同時に雑念も頭に入ってくる。
「ジュンキ…」
やはりどうしても気になってしまう。あのジュンキだから死ぬことはないと思うが、今何をしているのかと小さな不安が積もってしまう。あれだけクレハに対してジュンキについていろいろと言ってきているのに、そして自分はジュンキのことを諦めているはずなのに、どうしてこんなに気になってしまうのだろうか。やはり自分は心のどこかで諦めきれていないのだろう。
「やっぱり好きなのかなぁ…」
だったらいっそクレハに対して徹底抗戦を構えたらどうだろうかと考えてみるが――クレハの方が狩りの腕前は恐らく上だし、積極的だし――背は高いし、髪は長いし――大きいし――。
「か…勝てない…」
やはり、自分ではクレハに勝てないのだ。唯一勝てそうなものは――気持ち？…既に自分は諦めかけているではないか。
「ああ、もうだめかも…」
とうとう自己嫌悪に陥ってしまったチヅルは、地底湖の水面に音もなく現れた巨大な背ビレに気がつかなかった。それは静かにチヅルへと近づき――。
「チヅルちゃん！」
クレハの叫び声を聞いて、チヅルは本能的に回避行動を取った。チヅルの耳には轟音と何かが砕ける音が聞こえ、目を向けると先程まで自分が立っていた場所に大きな穴が空いていた。
「あ…！」
地底湖の方を見ると、そこには全身の半分を水面から出したガノトトスの姿があった。
「行くぜー！」

「おらあああ！」
カズキがガノトトスの顔面にブロスホーンで突きを入れる。ユウキは落とし穴の後方よりクロオビボウガンで狙い撃ちしていた。
「チヅルちゃん！大丈夫！？」
「あ、うん、大丈夫。行こう！」
クレハが心配そうな顔で駆け寄ってきたので、チヅルは出来る限り真剣な表情で答えて背中の封龍剣・超絶一門を抜いた。
（今は…狩りに集中するんだ…！）
チヅルとクレハが駆け出すと同時にガノトトスは水中に潜ってしまった。しかし次の瞬間には地底湖に高周波の破裂音が響き、ガノトトスは飛び上がった。カズキが投げた音爆弾である。ガノトトス一度水中に潜ったが、すぐに水中から飛び出してきた。だが着地と同時にその巨体の半分が地面に沈んでしまう。先ほど仕掛けた落とし穴が発動したのだ。
「今だ！」
「いくよー！」
「私も！」
ユウキの合図にチヅルとクレハは鬼人化した。
「！」
チヅルとクレハはすぐ異変に気がついた。双剣の重さを感じなくなったのだ。いや、自分の体重すら感じなくなったというべきか。身体が恐ろしく軽いのだ。
「これは…！」
「すごい…！」
異変はもう一つ起きていた。普通双剣使いは鬼人化を連発しない。それは、鬼人化は身体能力を一時的に向上させるもののその分反動が大きいからだ。下手に鬼人化を使うとそれが解けたときに気絶してしまうハンターがいるほどである。ある程度疲弊してきたら鬼人化を解いて後退するのが双剣使いのセオリーだ。しかし今のチヅルとクレハは疲れを感じることはなかった。それどころか一種の快楽

さえ感じられる。これらが意味するところはひとつ――。
「私達は…」
「竜人だから…？」
そうとしか思えなかった。竜人は竜の力性と人の知性を合わせ持つ者だからだ。体重を感じなくなったり疲れなくなったのは竜の力性が目覚め始めてきているのだろう。
「…！」
ガノトトスが落とし穴から脱出すると同時に、チヅルとクレハも距離を取った。ガノトトスはその巨体を活かして尾ビレを振り回した。
「うわっ！」
「危なっ！」
ユウキとカズキは慌てて距離を取るも、チヅルとクレハはその場を動かなかった。
「避けろっ！」
ユウキの声が地底湖に響く。いくらチヅルのガルルガシリーズ防具とクレハのレイアシリーズ防具をもってしてもあの巨大な尾ビレに弾き飛ばされれば無傷では済まない。
「くそっ！」
間に合わないと分かっていても、カズキはチヅルとクレハを助けようと駆け出す。だが無常にもガノトトスの尾ビレはチヅルとクレハを吹き飛ばす――はずだった。しかし、ユウキとカズキの視界からチヅルとクレハが消えた。
「なっ…！」
「え…？」
次の瞬間にチヅルとクレハはガノトトスの足元に現れ、チヅルは右脚を、クレハは左脚を斬りつけて先程の場所から丁度反対側に駆け抜けた。それと同時にガノトトスはバランスを崩してその場に倒れる。しかしガノトトスも飛竜。大量の血液を流しながらも地底湖に飛び込み、水底へと姿を消した。
「…ふう」

「はあ～」
チヅルとクレハはそれぞれ短いため息を吐くと、ゆっくりと立ち上がった。
「だ…大丈夫か…？」
「うん。怪我はないよ」
駆け寄ってきたユウキに対してチヅルは何事もなかったかのように答えた。
「な、何が起きたんだよ…」
「竜の力…って言えばいいのかな。ほら、私とチヅルちゃんは竜人だから…」
驚きを隠さないカズキに、クレハは難しい顔をして言った。
「今のが竜人としての力なのか？」
「ううん、これはまだほんの一端だと思う。完全に目覚めると、多分先日のジュンキみたいになると思う…」
ユウキの質問にクレハはチヅルの方を見ながら答えた。
「先日の…ああ、あれか…」
カズキもそれがどんなものかを理解した。
「あの時、ジュンキには翼が生えてた…」
チヅルの言葉を最後に沈黙が地底湖を包んだ。
「――――はいっ！」
突然カズキが手を打ち鳴らした。
「この話はここまで！さっさとガノトトスを狩ろうぜ！」
カズキの言葉に、チヅルとクレハとユウキは笑顔を取り戻した。しかしここでユウキがあることに気が付き再び落ち込んでしまう。
「ペイントするの忘れた…」
「あ、大丈夫だよ」
「へ…？」
クレハの言葉にユウキは顔を上げた。
「ガノトトスがどこにいるのか分かるよ」
「ほ、ほんとか？クレハいつの間に自動マーキングのスキルを…？」

「ううん、そうじゃなくて…何て言えばいいかなぁ…感じるっていうのかなぁ…」
「…？」
ユウキとカズキは首を傾げたが、クレハの横ではチヅルがうんうんと頷いていた。
「クレハちゃん、これは竜人じゃないと理解してもらえないよ」
「だね～」
「あ～ずりーぞ」
チヅルとクレハの様子にカズキは嫉妬の目を向けた。
「ま、ついてきて。こっちだから」
そう言ってクレハを先頭に歩き出した。
（もしかして…）
ここでチヅルはジュンキの気配も感じ取れるのではないかと思い意識を集中してみるも、全く感じ取ることは出来なかった。

MH2nd　第1章　心の整理　03

雪山はとても寒く、ホットドリンク無しではまともに動き回れない気候である。そのためこの雪山に生息するモンスター達は寒さにも負けない強靭な肉体を持ち、常にポッケ村の村人達をおびやかしている。そんな危険地帯にぽつんと一人のハンターが岩の上に座っていた。

「ふう…」

深紅の防具を纏ったハンター――――ジュンキはゆっくり目を閉じると、意識を体の中心に集中させた。

「…」

そして目を開くと近くを流れている小川に近寄り、自分の顔を覗いた。そこには自分の顔があったが、唯一瞳だけは違っていた。瞳孔が不気味に縦に割れた、深蒼の瞳。リオレウスの瞳だ。

「…」

ジュンキは体を起こすと背中から太刀ラスティクレイモアを鞘ごと外し、体の前に構えた。そしてゆっくりと引き抜き、両手で持つ。

――――刹那。

「！」

突然体の奥底から強烈な殺人衝動がはい出てきた。腕が、脚が、勝手に動こうとする。

「ぐ…っ！」

それを意志の力で何とか抑えようとするジュンキ。しかし、暴れる竜の力の方が僅かに強かった。一歩一歩、ゆっくりとポッケ村の方へと歩き出す。

「くそ…っ！止まれ…！止まれぇっ！」

歯軋り。荒い呼吸。このままでは殺人鬼になってしまう。一瞬歩みが止まったその瞬間を逃さず、ジュンキは一気に隣の森へと駆け出した。

「うおおおおおあああああっ！！！」
人でもモンスターでもいい、何でもいいから殺したいという衝動をジュンキは一本の大木にぶつけた。ジュンキのラスティクレイモアが大木を一閃――大木の幹は綺麗に輪切りされ、轟音と共に倒れた。
「はあ…はあ…はあ…」
もう殺人衝動はない。ジュンキはその場に座り込み、曇天の空を見上げた。
「…まだ駄目か」
一人呟くと、ジュンキは先程投げ出したラスティクレイモアの鞘を拾うためにゆっくり立ち上がった。

「ただいま、村長。ギアノス１５匹の討伐を終えたよ」
「おお、おかえり」
ジュンキは雪山から戻ると初めに村長へ狩りの報告をした。この村に来た一番の理由は竜の力の制御のためだが、村に滞在する以上はハンターとして活動しなければならない。働かざるもの食うべからず、である。
「いつもありがとうね。これが今回の報酬金だよ」
ジュンキは報酬金が入った革袋を受け取ると帰路についたが、村唯一の雑貨店兼青果店の前にいたポッケ村ただ一人の専属ハンターに声を掛けられた。
「ジュンキさん、狩りからお戻りですか？」
明るい赤色の髪を肩まで伸ばし、髪と同じ明るい赤色の瞳のハンター、リサである。今は村の中なのでポッケ村の民族衣装でもあるマフモフを着ているが、狩場ではハンマーと狩猟笛を使うハンターである。
「ああ、今日はギアノスを１５匹」
「いつもありがとうございます。私だけでは手がなかなか回らなくて…」

リサはそう言うと頭を下げた。
「いや、頭まで下げなくても…」
「あ、すみません」
リサは慌てて顔を上げた。
「あ、また今度一緒に狩りに出て頂けませんか?私一人では困難な依頼が来たので…」
「ああ、いいよ。困ったときはお互い様だしね」
「ではよろしくお願いしますね」
ジュンキは簡単な会話を済ませるとリサと別れて自宅へと戻った。
「ふう…」
ジュンキは家の扉を閉めると背中からラスティクレイモアを抜き、レウスヘルムを取るとそのままベッドに腰掛けた。
「早く街に戻らないとな…」
ジュンキは右手を正面にもってくると、力強く握りしめた。

MH2nd　第1章　心の整理　04

ガノトトス狩りから戻ってきた四人の姿を見て、丁度ドンドルマの街の大衆酒場で昼食をとっていたショウヘイは何事かと心配になってしまった。ガノトトス討伐は成功したということはユウキとカズキの喜びに満ちた顔を見ればすぐにわかるが、チヅルはドンドルマの街を出発した時よりさらに元気がないように見えるし、クレハは少しいらついているように見える。そこでショウヘイの第一声はこうなった。

「…何があった？」

「チヅルちゃんが絶不調だったのよ」

次々と席に着いた四人にショウヘイが尋ねると、クレハが今回の狩りでのチヅルの失態を説明した。初っ端から水ブレスで風穴を開けられそうになるわ、音爆弾と閃光玉を間違えて投げてパーティメンバー全員の視界が潰れるわ、昼間の砂漠でホットドリンクを飲んでぶっ倒れるわで大変だった、と。チヅルは小さな声で「ごめんなさい」と言う。

「で、でもガノトトス自体は何とかなったんだから、な？」

「そうそう！怪我人も出なかったんだし！」

ユウキとカズキがチヅルをフォローするが、チヅル本人はさらに落ち込んでしまう。

「ねえショウヘイ」

「どうした？クレハ」

「提案なんだけど、少し休みを貰えない？」

「そうだな…黒龍ミラボレアスと会って、紅龍ミラバルカンと戦って、ジュンキが失踪して…いろいろなことがあったからな」

「チヅルちゃんの心の整理のためにも、ね？」

「え？悪いよそんなの――」

「チヅルちゃんは黙ってて」

「はい…」
チヅルの反論はクレハに押し潰されてしまった。
「ユウキとカズキもそれでいいか？」
「おう」
「いいぜ」
「ではしばらくの間狩りは休みとしよう。期間は…一週間。では解散」
ショウヘイの言葉でこのパーティは一週間の活動を停止することとなった。

「ふう…」
部屋に戻ったチヅルは武器防具を外さないまま椅子に座った。
「明日からどうしようかな…」
一人でもいいのでジュンキの居場所につながる手がかりを探そうか。いや、恐らく何も出てこないだろう。あの大衆酒場の給仕であるユーリでさえ居場所を知らないのだから。
「…一度私の原点に戻ってみようかな」
チヅルはそう言うと簡単な荷造りを始めた。

チヅルは自分の原点――――自分が生まれ育ち、そしてハンターとなるきっかけになった場所へ一度帰ることにした。その場所はここドンドルマから距離があり、一週間では行って帰ってぎりぎりである。なのでチヅルは日が暮れる前にドンドルマを出発した。竜車に揺られて乗り換えて、再び揺られて乗り換えて…。自分がハンターになってから一度も帰ったことのない場所なのに道には迷わなかった。
そしてドンドルマを出てから三日目の午前に、チヅルは村と村の間で竜車から降りた。
「こんなところでいいのかニャ？」

御者のアイルーが首を傾げる。ここは村と村を結ぶ街道である。辺り一面広葉樹の林で、他には何も無い。
「うん。次はいつここを通るの？」
「ニャー…。次の村で折り返しだから、多分二時間後くらいだと思うニャ」
「分かった。ありがとう」
チヅルはここまでの運賃を支払うと、竜車はゆっくりと遠ざかっていった。
「ん～！」
竜車が完全に見えなくなると、チヅルは背伸びした。さすがに武器防具を装備したまま三日も竜車に揺られていては伸びのひとつもしたくなる。チヅルは伸ばした腕を降ろすと上を向いた。青い空、白い雲。いい天気である。次に下を向いた。この道は主要街道ではないので石畳ではないが雑草が生えない程度に整備されている。
「どこかな…」
チヅルはぐるりと一周見渡した。そしてある場所だけ雑草の高さが違うところを見つけた。この場所だけ他の場所より雑草の高さが低いのだ。チヅルはその場所に近づくとあるものを探した。そしてそれはすぐに見つかった。
「あった…」
それは一枚の木の板であった。雨風に晒されひどく傷んでいたが、それには文字が刻まれていた。「リーン」と書かれている。
「…」
チヅルはしばらく黙ってその文字を見つめ続けたが、やがて元あった場所に戻すとその奥へと歩み始めた。
「昔はここも整備されてたのに、今じゃ雑草だらけか…」
長い木々のトンネルを抜けると開けた場所に出た。一面雑草の草原になっているが、その中にいくつか廃屋が横たわっている。
「リーン…。私の故郷…」
チヅルは膝の高さまである雑草をかき分けながら廃村の中へと入っ

ていった。そしてひとつの廃屋の前に立つ。
「…ただいま」
そう。チヅルは自分の原点、自分の生まれ育った村へと帰ってきたのだ。

今から五年ほど前――チヅルが１２歳の時にこの村は地図から消えた。今なら分かるが、飛竜のリオレイアにこの村は襲われたのだ。５０人に満たない小さな村の村人達の半数は死に、生き残った者は他の村へ移住した。チヅルの両親もこの時に死んでいる。こんな小さな村だがハンターも数人いた。しかし小さな村にやってくる依頼は小さなものしかなく、飛竜との戦いに慣れていなかったハンター達はリオレイアに太刀打ち出来ずに死んだ。しかしそのハンターのおかげでリオレイアはこの村を去った――左脚に大きな傷を残して。

チヅルは閉じていた瞼を開いた。
「…じゃあ、もう行くね」
チヅルは昔自分が両親と共に住んでいた廃屋に語りかけると来た道を戻り始めた。
「…来てよかった」
チヅルとしてはリーンの村に戻ってきてよかったと思えた。両親は死んでしまったが、ジュンキは生きているのだ。必ず、また会える。
「早く帰ってこないかな…ジュンキ…」
チヅルは迷いが吹っ切れたことを早くみんなに伝えたくて、帰りの竜車が通りかかるまでまだ時間があるのに街道へ向かって走り出した。

チヅルが失った故郷へ向かった一方で、ショウヘイとユウキはココ

ット村を訪れていた。行方をくらましたジュンキの手がかりを探すためである。二人はまず村のことは何でもお見通しのはずである村長を尋ねることにした。

「お久しぶりです」

「久しぶりだな、村長」

「おおっ、ショウヘイにユウキか。久しぶりじゃのう。前回会った時はジュンキが大怪我を負った時じゃったの」

村長の言葉にショウヘイとユウキは顔を見合わせて苦笑いした。

「実は今回もジュンキについてなんです」

「ほお…何事かな？」

「ジュンキが行方をくらましたんだよ。村長は何か知らないか？」

「うむ…儂は知らんのぉ…」

村長は考える素振りを見せたがすぐに首を横に振った。

「そうですか…」

「なんじゃ？それだけのことで戻ってきおったのか？」

「ええ、まあ…」

ショウヘイは苦い顔をしたが、逆に村長は優しい笑みを浮かべた。

「そうか。ジュンキは頼りにされとるんじゃな。しかしの、この村には戻ってきておらんよ」

「分かりました」

「ありがとう、村長」

「うむ。…ところでヌシ達は今時間があるのかの？」

踵を返してドンドルマの街へ戻ろうとしたショウヘイとユウキは村長に呼び止められて振り向いた。

「…と言いますと？」

「うむ…実はこの村の裏山、通称森と丘では今ランポス達が大量発生しているのじゃ。時間があるのならば数を減らしてほしい。このままでは草食竜達が食べられ、その後にはこの村を襲うじゃろう」

「…手伝いたいのは山々なのですが」

「村長、今俺達はパーティを解散させての休暇中なんだ。だからす

ぐ街に戻らないといけないんだ」
「うむ。無理はせんでもよい。この村にもハンターはおる。もし大事になれば、ハンターズギルドに助けを求めるだけじゃて」
「村長、大丈夫」
ユウキはショウヘイと目を合わせてから言葉を続けた。
「仲間と合流したらすぐ飛んでくるからさ。四、五日くらい待ってくれないか？」
「すまぬの。こっちのことは忘れてもらって構わんというのに」
「では村長、すぐ戻りますので」
ショウヘイとユウキは村長に一礼すると、急いでドンドルマの街へと戻ることにした。

MH2nd　第1章　心の整理　05

ショウヘイとユウキがドンドルマの街に戻ると、既にチヅルが戻っていた。クレハとカズキもいたが、二人はこの七日間街の外に出ずただのんびりと過ごしたらしい。もちろん、ジュンキの行方については聞き込みをしてくれてはいたが。

「で、各自、ジュンキの行方は掴めたか？」

五人揃って大衆酒場のテーブルに着くとショウヘイが言った。

「…」

「…」

「…」

「…」

「…駄目か。まあ仕方ない。ところでひとつ提案があるんだ」

「何？」

クレハが聞き返すとショウヘイは一度小さく頷いてから口を開いた。

「先日ジュンキがリオレウス…ザラムレッドだったか？に負けて大怪我を負った時に世話になったココット村を覚えているか？」

ショウヘイの問いかけにそれぞれが知っている、覚えていると答える。

「そのココット村でランポスが大量発生しているらしいんだ。だから次の狩りは――」

「ランポス？」

クレハが尋ねると、ショウヘイは無言で頷いた。

「ま、たまにはいいと思うな。私はいいよ」

「私も」

「初心忘るべからず、ってか？俺もいいぜ」

チヅルとカズキも賛同したので、ショウヘイとユウキは目を合わせて頷いた。

「で、問題は人数だな」

ユウキがわざとらしくにやけて言うと、他の四人の目付きが変わった。そして同時に拳を突き出す。
「せーのっ。最初はランポス！ジャンケン――！」

「うっ、私だ…」
クレハは握り締められた拳を見つめながら呟いた。
「今回はクレハだな」
ユウキが笑いながら言うと、クレハは出来る限り意志の強い瞳をつくってユウキを振り向いた。
「お願い！ココット村までは連れてって！」
「えっ…」
ユウキが困った顔でショウヘイの方を向くと、ショウヘイはやれやれと頷いた。
「ありがとう！安心したらお腹空いちゃった」
「そういえばそろそろお昼か。食べていかねぇか？」
カズキの提案に他の四人はもちろんと頷いた。そのタイミングに合わせるかのようにこの大衆酒場で給仕をしているユーリが現れ、注文を各自取った。そのあと今回のランポス狩りに何が必要か、どんな作戦で狩りをするかを話しあっているうちに料理が運ばれてきたのでこの話を中断した。
「ねえ、クレハちゃん」
「何？チヅルちゃん」
隣に座っていたチヅルから声を掛けられたので、クレハは料理と格闘していたのを一時中断してチヅルの方を向いた。
「どうしてあんなことを言ったの？」
「あんなこと…？ああ、村まで付いて行きたいってこと？」
「うん」
「街にいても一人じゃ暇だし、それに――！あっ…ふふっ…気になるしねぇ～」
「…へ？」

話の途中でクレハの口調が変わったのでチヅルは思わず首を傾げた。
「な、何が気になるの…？」
「だってぇ…ジュンキが昔住んでた村だからねぇ～」
ジュンキ、という言葉を発した直後、チヅルの黒い瞳が見開いたのをクレハは見逃さなかった。
「え、あ、そう、だね～。あはは…」
クレハはチヅルに少し意地悪をしてみようと思ってこんな言動をしてみたのだが以外にも効果は抜群でチヅルはかなりショックを受けているように見える。
「なんてね。冗談だよ、冗談」
「そ、そうだよ…ね…」
チヅルの引きつった笑顔を見て少しやり過ぎたかなと反省したクレハだった。

ココット村はミナガルデの街を経由して最低でも二日、普通は三日くらいはかかる場所なのでということで明日の朝一晩に出発するということだけを決めて今日は解散した。

MH2nd　第1章　心の整理　06

「ん～着いたぁ～！」
長い間アプトノスに引かれた荷台に乗っていたせいで固くなった身体を伸ばすために、一番最初に竜車から飛び降りた後背伸びをしながらクレハは青空に向かって叫んだ。
「もう、クレハちゃんはお留守番なんだよ？なのに狩りの準備までして…」
チヅルは呆れるように言った。今回のランポス狩りはクレハがお休みの番なのだが、当のクレハは双剣ツインハイフレイムにリオレイアシリーズ防具といういつもと変わらないスタイルだ。
「ま、一応ね。一応」
クレハの言葉を聞いて、チヅルは小さな笑顔でため息を吐いた。
「まずは村長に挨拶をしに行こう」
「だな」
ショウヘイとユウキが先行したので、チヅルとクレハとカズキが二人を追う形になる。
「そういえばショウヘイとユウキもこの村の出身なんだよね？」
「そうだよ。俺とショウヘイとジュンキはこの村で育ったんだ」
クレハの問いかけにユウキは振り向いて答えたが、ショウヘイは微笑んで頷くだけで済ませた。やがて先行するショウヘイとユウキが村の中心に建つ大きな家の前で立ち止まった。
「こんにちは、村長」
「おお、ショウヘイ、ユウキ、あとは…え～っと…？」
「チヅルです」
「クレハです」
「カズキだ」
「おお、すまぬすまぬ。まだ一度しか、しかもジュンキが大怪我するという大事の時に会っただけじゃったので忘れてしもうた。すま

ぬの」
「いえ、お気遣いなく…」
チヅルが慌てて返事をすると、村長は「うむ」と頷いて本題を持ち出した。
「さて、ランポスの件じゃが…どうやらリーダーがおるらしい」
「リーダー。ドスランポスですね？」
ショウヘイが一応確認を取る。
「そうじゃ。しかも三匹いるらしい」
「三匹も…？」
「ヌシらも不思議に思うじゃろう？これは儂の推測なんじゃが…三つのグループが縄張り争いをしておるんじゃと思う」
「なるほど」
カズキが頷きながら言った。
「…して、ヌシらは五人で向かうのか？」
「あ、私が留守番です」
クレハが右手を上げて一歩前に出ると、村長はゆっくりと頷いた。
「そうか。では他の者が帰り着くまでのんびり過ごすがよい。ま、何も無い村じゃけどの…ほっほっほ」
村長は笑いながら一枚の羊皮紙をショウヘイに渡した。依頼書だ。
「では、行ってきます」
「留守番頼むな」
「ま、すぐ戻るからな」
「クレハちゃん、行ってくるね」
ショウヘイ達はクレハに一声かけると、この村の裏山にある森と丘フィールドを目指して村を出発した。
「行っちゃった…」
ショウヘイ達が見えなくなってから、クレハは一言漏らした。
「さてと、ヌシ、腹は減っとるかの？」
「あ、はい」
「ほっほっほ…元気があってよいの。この儂の家は集会場も兼ねて

おる。中でゆっくり食事としようかの」
「はい！」
クレハは村長に連れられて集会場の中へと足を踏み入れた。

MH2nd　第1章　心の整理　07

「ドスランポス、どう狩る？」
森と丘のペースキャンプに到着すると、四人は簡単な話し合いの場を設けた。
「グラビモスやディアブロスを相手に互角に戦い、つい先日ラオシャンロンやミラバルカンと戦ったハンターが四人もいるんだぜ？二人一組で動けば問題無いと思うが…」
「あの～…」
カズキの自信満々の言葉に、チヅルがゆっくりと右手を上げた。
「ん？どうした？チヅル」
「私はまだイャンガルルガ止まりなんですけど…」
チヅルはそう言って自分の防具であるイャンガルルガシリーズを見せるように両腕を開いた。
「…」
「…」
「…なあ、イャンガルルガのレベルって？」
「ゲリョス以上リオレイア以下ぐらいだよ…」
カズキが小さな声でユウキに尋ねると、ユウキはカズキに耳打ちした。
「ま、でも、ほら、ユウキの装備もフルフルシリーズだしさ、な！」
「ガンナーと一緒にされても…」
「そ、それにだ！ショウヘイと俺に合流する前とかにリオソウルとかディアブロスとかを狩りに行っていたんだろう？」
「ま、まあ、ね。ごめん、さっき言ったのは自信を持って言えるのはここまでってことだからあんまり気にしないで…」
チヅルが苦笑いしながら言うと、ユウキが口を開いた。
「チヅルはミラバルカンとも戦ったんだから、自信持てよ」
続けてショウヘイも口を開く。

「チヅル、今回はランポスだ。チヅルはリオレイア以上のモンスターに対しては自信を持てないかもしれないが、今回は関係ない。そうだろう？」
「…うん。そうだね。ありがと、ユウキ、ショウヘイ」
「よし、じゃあチームを分けようか」
「どう決める？」
ユウキの問いかけに、カズキは無言で拳を突き出した。
「これ、だろ？」
カズキの提案に、三人は同時に頷いた。
「せーのっ！最初はランポス――――！」

ジャンケンの結果、ショウヘイ、チヅルペアとユウキ、カズキペアが出来た。
「じゃあ出発しようか」
ショウヘイの一言で今回の狩りが始まった。このベースキャンプの出入口になっている短い洞窟を抜けるとそこは近くを川が流れる広場になっていた。いつもはこの場所に野生の草食竜アプトノスがいるのだが今日は一匹もいなかった。こういう場合はこの森と丘に異常が起きていることを表している。今回はランポスだ。
この広場を川沿いに北へと進めば丘陵地帯になっており、西へと進めば森林地帯となっている。ユウキは森を指差した。
「んじゃ、俺達は森に入ろうかな。いいよな、カズキ」
「ああ、いいぞ」
ユウキとカズキはショウヘイとチヅルに手を振りながら森の中へと消えた。
「私達も行こっか」
「そうだな」
チヅルとショウヘイは頷き合うと丘陵地帯目指して歩き出した。

「ふう…もういないか」

カズキは自分の武器であるランスのブロスホーンに付着したランポスの血液を振って落とすと背中に戻した。
「ここにはドスランポスはいないようだな」
ユウキもそう言って銃口を下ろす。
「なあユウキ、ひとつ提案なんだけど」
「ん？」
カズキが近づきながら言ってきたのでユウキは弾をリロードする手を止めた。
「この先は分かれ道になってる。二手に分かれないか？」
このエリア番号は８番。ここには出入口が主に三つある。先程入ってきたエリア番号１からの道と、向かって左のエリア番号１０への道と右のエリア番号９への道だ。地図上ではどちらを通っても丘陵地帯のひとつであるエリア３で合流するはずである。
「そうだな…俺達の実力なら大丈夫だろうし。そうしよう」
「俺は左の道を行くぜ」
「じゃあ俺は右で」
カズキは左の開けた道を進み、ユウキは右の狭い通路のような道へと進んだ。

「まいったなぁ…」
「いち、に、さん…全部で六匹か」
一方で丘陵地帯を進むことになったチヅルとショウヘイはエリア２の入り口で足止めを食らっていた。エリア内のランポスの数が多いせいである。
「どうにかならないかな…」
「そうだな…」
ここでふと、ショウヘイがあることに気づいた。
「チヅル、ランポスをよく見ろ。二人一組…いや、二匹一組か？そんな形で手前に二匹、中央に二匹、奥に二匹のように見えないか？」
「…確かに！」

チヅルもショウヘイと同じ意見だ。
「これならいけそうだな」
チヅルはそうだねと頷いてから言葉を続けた。
「手前、中央、奥の順番に、私とショウヘイで一匹ずつ倒せば何とかなるかも」
「ああ。…手前の二匹が俺達と反対を向いたら一気にエリアを縦断するぞ」
ショウヘイはそう言いながら背中から太刀「斬破刀」を抜いた。
「うん」
チヅルも双剣「封龍剣・超絶一門」を抜く。そして手前の二匹のランポスの気がそれた瞬間、チヅルとショウヘイは掛け声も無しに飛び出した。チヅルとショウヘイの登場に手前のランポス二匹が気づくがその時には既にチヅルとショウヘイの間合いに入っていた。ショウヘイが斬破刀を一閃、チヅルが封龍剣・超絶一門を右手と左手で二回、斬りつける。――ショウヘイが斬りつけたランポスは斜めに真っ二つになり、チヅルが斬りつけたランポスは頭部と胴体と脚部とに分かれてしまった。
「！」
「！」
二人はすぐ異常に気がついたが勢いを止める訳にはいかなかった。続いて中央にいた二匹のランポス、そして奥にいた二匹のランポスも同じような運命を辿った。
「ショウヘイ――――！」
「チヅル――――！」
二人は顔を見合わせ、そのまま凍りついた。
「ショウヘイ…ひ、瞳が…！」
「ち、チヅルも…瞳…！」
「…私もショウヘイみたいになってるの？どんな色？」
「…まるでイャンガルルガのような、赤みのかかった黄色だ。俺はどうなってる？」

「私はっきり覚えてる。黒龍ミラボレアスと同じ、明るい黄色だよ」
チヅルの言葉を最後に互いが互いを見つめ合っていたが、瞬きを繰り返すうちにチヅルは元の黒色の瞳に、ショウヘイも黒色の瞳に戻った。
「あっ…」
「…戻ったようだな」
「私達、竜人だったんだね。つい忘れちゃうよ」
「この異常なまでの攻撃力も竜の力のせいなのか？」
「多分…いや、そうとしか考えられないよ」
「まいったな。これじゃあ素材を剥ぎ取れない」
ショウヘイの軽い冗談にチヅルは小さく笑うと、背中に封龍剣・超絶一門を戻した。
「歩きながら話そう？」
「ああ」
ショウヘイも背中に斬破刀を戻すと、チヅルと並んで隣のエリア３へと続く道へ進んだ。すぐにチヅルの口が開く。
「ショウヘイは…自分が竜人だってことをどう思う？」
「どうって言われても困るな。俺は特に気にしていないし」
「気にしてないって…」
「まあそうだな…。竜人はこの世界の均衡を保つ存在…だったか？俺も世界が壊れるのを望んでいるわけじゃないから、自分に出来ることなら何でもするつもりだ。まあこれは竜人としてではなく、一個人としてだけどな」
「なるほど…」
「もういいか？向こうさんは待ってくれないと思うぞ」
「え？」
ショウヘイに言われて前を見ると、そこには大きなトサカが目立つドスランポスの姿があった。
「行くぞ？」
「うん！」

チヅルは大きく頷くと背中の封龍剣・超絶一門を抜いた。

MH2nd　第1章　心の整理　08

状況は一転して最悪に陥った。今思えばドスランポスがいるのに護衛のランポスが一匹もいないことに疑問を持つべきだったのだ。丘陵地帯のエリア3。その中央に馬鹿みたいにつっ立っているドスランポス。チヅルとショウヘイは好機と飛び出していったのだが、次の瞬間には背後のエリア2への道から別のドスランポス一匹とランポス八匹が現れ、目の前のドスランポスの周囲にもランポスが8匹現れたのだ。

「なっ…!?」

「罠か!」

ショウヘイとチヅルは背中合わせの体勢を取りランポス達と向かい合ったが、片方のドスランポスの一声で包囲網を徐々に狭めてくる。

「まずいよね、これ…」

「ああ…最悪だ」

ランポス達が徐々に円形の包囲網を狭めてくるなか、一匹が耐え切れなくなったのか飛び掛ってきた。それをショウヘイが一太刀で真っ二つにする。それでもまだドスランポスが二匹にランポス十五匹。

「あれは…!」

ふと、ショウヘイの視界に見慣れたランスとディアブロシリーズ装備のハンターが奥の森から出てくるのが見えた。

「どうしたの?」

「カズキだ!」

「よかった…!」

「いや…よくないぞ、これは…」

「え…?」

チヅルは目の前のランポス達に隙を与えないために一瞬だけ背後――ショウヘイが見ている方を振り返った。そして驚愕する。カズキの背後からドスランポスが一匹とランポスが六匹も出てきたのだ。

カズキがチヅルとショウヘイの近くまで逃げてくるとランポス達は一時的に包囲網を解除してカズキをチヅルとショウヘイに合流させた。

「カズキ…」

「す、すまねぇショウヘイ、チヅル…。ランポス二匹が限界だった…」

「これでドスランポスが三匹にランポスが二十一匹…！」

チヅルは唇を噛んだ。これまで培ってきたハンターとして対策を練るが、本能が無理だと悲鳴を上げている。

「村長…誤算でしたね」

ショウヘイがそう呟いたが、チヅルにも意味が分かった。ドスランポスが三匹いるのは縄張り争いをしているからではなく、協力するためだったのだ。

「閃光玉、誰か持ってない？」

「…」

「…」

「じゃあモドリ玉は？」

「…」

「…」

チヅルはさらに強く唇を噛んだ。

「ユウキ…」

今のチヅルに出来ること、それはこの狩り場にいるもう一人のハンター、ユウキの登場を願うことだけであった。

「いないな…」

一方のユウキは細長い通路のようなエリア9を警戒しながらゆっくりエリア3方向へと歩いていた。

「静かすぎる…」

ユウキはハンターとしての勘が危険を知らせていることに気づいている。そう、このエリアには何かいるのだ。

「何が…うわっ！」
突然腰の辺りを触られる感覚がしてユウキは慌てて振り返った。そこにはハンター達からアイテムを盗むことで知られているメラルーの姿があった。しかもユウキが持ち込んだ弾丸を右手に持っている。
「あ！お前っ！」
「ニャニャニャ！」
メラルーは踵を返して数歩退くと急いで脱出用の穴を掘り始めた。
「この野郎！」
「ニャーッ！」
間一髪のところでユウキはメラルーを穴から引っこ抜き、弾丸を回収した。メラルーは悔しそうに一鳴きすると穴の中へと消えた。
「やれやれ、俺の勘はメラルーに反応したのかな？」
ユウキは一人呟きながら弾丸をアイテムポーチに戻した。そしてエリア３へ向かおうとして異変に気づいた。
「あれ…？」
先程と比べて周りが暗くなっているのだ。しかもこのエリア全体ではなく、ユウキの周囲だけがである。
「…！」
突然、ユウキの後頭部に生暖かい空気が触れた。くんくんと臭いを嗅ぐ音も聞こえてくる。
「…どうしよう」
ユウキは目を閉じて必死に頭を動かしたがそもそも何者なのかが分からなければ対応のしようがないので仕方なく、ゆっくりと後ろを振り向いた。
「リ…リオ…！」

チヅル、ショウヘイ、カズキを取り囲んだランポス達の包囲網はチヅルが手を伸ばせばランポスの頭に触れることが出来るくらいにまで狭まってきていた。
「ら、ランポスとは会話出来ないかな…？」

「ザラムレッドやミラボレアスと違って頭良さそうには見えないけどな」

「もうっ…。ユウキ…早く…！」

チヅルが唯一まだこの包囲網の中にいないユウキのことを願ったその時、三匹のドスランポスが一斉に鳴いた。それに応呼して二十一匹のランポスもけたたましく鳴き声を上げる。

「俺は死にたくねぇよぉ！」

「うわあああああああああ！！！」

カズキが弱音を吐いたと時を同じくして、ユウキの悲鳴がこのエリアに響き渡った。そしてユウキ本人が森の中から転げ出てくると思いっ切りすっ転んだ。

「ユウキ！助けて…ってええっ！？」

チヅルは思わずユウキの名前を読んだがユウキの後を追うように森の中から出てきた巨体に素っ頓狂な声を上げてしまった。森の中から出てきたのは深緑の鱗で身を包んだ飛竜、雄火竜リオレウスと対をなす雌火竜リオレイアだったのだ。あまりの出来事にランポス達でさえ口をぽかんと開けて静止してしまっている。

「逃げろおおお！！！」

ユウキがこちらに向かって逃げてくるので必然とリオレイアもこちらを向いた。リオレイアに睨まれ、チヅルは思わず一歩退いてしまう。しかし今自分はランポス達に囲まれていることを思い出してすぐ元の位置に戻った。ユウキがチヅル達と合流すると同時に三匹のドスランポスのうちの一匹がリオレイアとランポス達との間に立ちリオレイアを威嚇した。まるで俺達の獲物だと言わんばかりに。しかしリオレイアは前に出たドスランポスの頭に噛み付くと首から上を食いちぎってしまった。それを見たランポス達がチヅル達への包囲網を忘れて一歩一歩退き始める。

「お、俺達も退こうぜ…」

カズキの提案にショウヘイとユウキは従ったが、チヅルはその場に留まった。

「ち、チヅル…！」
「みんな、よく聞いて」
チヅルは後ろを振り向かずに、リオレイアを見つめながら言葉を続けた。
「閃光玉すらない今の装備じゃキャンプに着く前に追いつかれる。武器の中で一番機動性がある私がしばらくの間リオレイアの気を引くから、そのうちに逃げて」
「ば、馬鹿言ってるんじゃねぇぞ！」
カズキの言葉が飛んできたが、チヅルは振り向かなかった。
「…チヅル。必ず戻れよ」
ショウヘイの言葉を最後に遠ざかる足音を聞きながら、チヅルは背中から封龍剣・超絶一門を抜いた。ここまでの一連の動作を、リオレイアは黙って見続けていた。しかしランポス達は黙っていなかった。獲物だった四人が一人に減ってしまったことに腹を立てたのかチヅルの背後で騒ぎ出し、一匹のドスランポスがチヅルに飛びかかった。それと同時にチヅルの腕が動き、飛びかかったドスランポスが粉々に砕け散ってしまった。
「邪魔しないでくれる？」
チヅルが竜の瞳でランポス達を睨むと、ランポス達はその場に凍りついた。
「グガアアアアアッ！！！」
リオレイアが咆哮すると、ランポス達は最後の一匹となったドスランポスに率いられてエリアを脱していった。
「…静かになったね」
チヅルは誰に言うでもなく呟くとリオレイアに向かい合った。
「いくよ」
チヅルは再び双剣を構えた。

MH2nd　第1章　心の整理　09

「待って」
「だ、誰!?」
突然女性の声が聞こえたので、チヅルは目の前にリオレイアがいるにもかかわらず周りを見渡した。しかしこのエリアにいるのはチヅル本人と目の前のリオレイアのみである。
「ま…まさか…」
チヅルは思わず双剣の構えを解いた。
「構えを解いてくれたということは、私の声が聞こえているのね」
「リオレイア…あなたなの?」
「ええ。初めまして、竜人さん。竜人が復活したと聞いたけど、まさかこうして会えるとは思わなかったわ」
チヅルはリオレイアの緑の瞳から殺気が消えていることを確認してから両手の双剣を背中に戻し、ガルルガヘルムを取って地面に置いた。薄い茶色の短い髪が風に舞う。
「は、初めまして…私、チヅルっていいます」
「チヅルちゃん、ね。私の名前はセイフレム。よろしく、と言いたいけれど…」
「ど…?」
セイフレムが語尾を濁したので、チヅルは続けて尋ねた。セイフレムの口が開く。
「私はあなたと仲良くなれそうにないわ」
「…どうして?」
「それは…恐らく、私は昔あなたに会ったことがある。…焼き尽くした村の中心で」
「え…?」
チヅルは最初何のことか分からなかったが、それは自分の生まれ育ったリーンの村のことだとすぐに分かった。

「…左脚を見せてくれる？」
チヅルのお願いをセイフレムは黙って頷くことで答えた。チヅルはセイフレムの左脚側に廻り、そして見つけた。踵から膝までの、大きな切り創を。
「…」
チヅルは黙って再びセイフレムの前に立った。
「…聞いてもいい？」
「何？」
「どうして私の村を襲ったの？」
セイフレムは一瞬目を閉じたがすぐに開き、しっかりとチヅルを見据えて答えた。
「あの時の私は巣作りをしていて、とても気が立っていたの。そんな時に私の巣にハンターが現れて…。そのハンターはすぐに逃げていったけど私は執拗に追いかけた」
「そして私の村を見つけた…？」
チヅルの言葉をセイフレムは頷いて肯定した。
「このままでは人間たちが私の巣に押し寄せてくると思った私は村を襲った。そして気がついたら村の中央に幼い人間がひとりだけになっていたわ」
「それ、私だよ」
セイフレムは黙って頷き、話を続けた。
「そこで私は気づいた。私はなんということをしたのかと…」
「そうだったんだ…」
チヅルの言葉を最後に沈黙が二人を包んだが、それはチヅルの言葉で破られた。
「…ありがとう、話してくれて」
チヅルの言葉を聞いて、セイフレムは驚いた。どうして礼を言われたのだろうか。
「私、あなたがどうして私の村を襲ったのかずっと知りたかった。すごく恨んだ時期もあったけど…でも、これですっきりしたよ」

「すっきりって…私のことを恨んでいたんじゃないの？」
「私もハンターになって、たくさんの命をもらって今日まで生きてきた。ちょっと悔しいような、悲しいような気持ちはあるけど、私はあなたを恨んでないよ」
チヅルの言葉を聞いて、セイフレムは目頭が熱くなるのを感じていた。
「でもね、心の整理はつけたいの」
チヅルはそう言うと背中の双剣を抜いた。セイフレムは驚いて臨戦態勢をとる。
「私はあなたを狩りたい。個人的な恨みではなく、一人のハンターとして。…私、次のステップに上がるためのモンスター、リオレイアなんだ」
チヅルはそう言うと穏やかな笑みを浮かべた。
「私はあなたを狩りたい。狩りたいけど…今の装備だと勝てないと思うの」
チヅルは今度は苦笑いを浮かべた。
「だから次に会うことがあったら、私と手合わせして欲しいの」
チヅルはそこまで言うと双剣を背中に戻した。
「…分かったわ。私もまだ死にたくないから戦います」
「…ありがとう」
チヅルはそう言うとガルルガヘルムを取り上げ被った。
「それじゃあ、また」
チヅルはそう言い残し、踵を返してベースキャンプへと戻っていった。

「チヅルちゃん…」
小さくなる後ろ姿を見ながら、セイフレムは呟いた。
「私も負けるわけにはいかないわ。私はまだ死ねないもの…。次に会った時、私はあなたを殺します…」
セイフレムはそう言いながら、傾きかけた太陽が眩しい青い空を見

上げた。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　01

チヅルがベースキャンプに戻るとユウキは簡易ベッドに寝かされ、ショウヘイに手当てを受けていた。
「無事だったか！」
テントの前で座っていてたカズキがいち早くチヅルの帰還に気づき、大きな声でチヅルを迎えた。そんなカズキにチヅルは小さく笑ってから口を開いた。
「ただいま。…ユウキがどうかしたの？」
「ああ…足を思いっ切り捻っちまったみたいなんだ」
チヅルがテントの中に入ると、ショウヘイは穏やかな表情を見せた。しかしユウキはフルフルレギンスの上から包帯と木の板で応急処置を施されている。
「ありがとう、チヅル」
ショウヘイが礼を述べたが、チヅルはユウキのことで頭がいっぱいになっていた。
「ううん。それよりユウキは…？」
「俺なら大丈夫だ。足を捻って歩けないだけだし…」
ユウキはそう言うと身体を起こした。
「いてて…」
「ココット村で診てもらった方がいいんじゃない？」
「いや、大丈夫。街まで我慢するさ」
チヅルはショウヘイに提案したが、ユウキがそれを拒否した。
「それより俺としては村長から受けたランポス駆除依頼失敗の方が痛いよ…」
「あ、それなら大丈夫だよ」
チヅルはそう言うとアイテムポーチからドスランポスの爪を三本取り出した」
「リオレイアが食べた一匹の分と、私が狩ってきた二匹の分だよ」

「いつの間に…」
ショウヘイとユウキとカズキが驚く中、チヅルは微笑んだ。
「ボスがいなくなればランポスたちも散り散りになるはずだよね？さ、まずはココット村に戻ろう？クレハちゃんを待たせているし」
「そうだな。ユウキ、肩を貸そう」
「ああ、俺も」
ショウヘイとカズキがそれぞれユウキの肩を持つとかけ声をかけて立ち上がった。
「私はユウキのボウガンを持つよ」
チヅルはそう言うとユウキが寝かされていた簡易ベッドに立てかけられているクロオビボウガンを持った。
「すまない、みんな…」
チヅル、ショウヘイ、カズキはユウキのペースに合わせてココット村への帰路についた。

ココット村へ戻ると、いつもの場所に村長はいなかった。
「いつもここで村人の往来を見てるんだけどな…」
ショウヘイとカズキに支えられたユウキが不思議そうに言うと、近くを通りかかった村人が村長は集会場に入ったきり出てこないことを教えてくれた。
「めずらしいな」
ショウヘイも少し首を傾げる。
「集会場の中にいるんでしょ？だったら入ろうよ」
「だな」
チヅルの言葉にカズキが頷いて、四人は集会場の中へと足を踏み入れた。昼食には早過ぎる時間帯なので客はほとんどいなかったが、村長は隅のテーブルにクレハと一緒に座っていた。
「あ、クレハちゃんもいる」
チヅルはショウヘイたちを差し置いて先にテーブルへと向かった。
こちらを向くように座っている村長が先に気づき、続いてクレハも

振り向いた。しかしクレハの顔はほんのりと赤くなっており、右手にはグラスに入ったビールを持っていた。
「あ～お帰り。どうだった？」
「クレハちゃん、昼間からお酒飲んでるの？」
チヅルが呆れていると、クレハはちょっと申し訳なさそうな顔をして口を開いた。
「村長に勧められちゃって…」
「儂が勧めたんじゃ。すまぬの」
「村長、程々にお願いしますよ」
チヅルを追って集会場の奥へと入ってきたショウヘイがそう言ったが、村長は少しも悪びれる様子もなくほっほっほと笑った。
「…しかしユウキ。何があった？」
「ユウキ！怪我したの？」
「ああ。けど大丈夫。足を捻っただけだから」
村長とクレハがユウキの心配をするが、ユウキは笑顔を作って無事を表現した。ここでショウヘイとカズキがユウキをクレハの横に座らせる。
「…村長さん、報告です」
チヅルはそう言うとアイテムポーチからドスランポスの爪三本を村長に見せた。
「そうか、ドスランポスが三匹もおったのか。今回は助かったわい。しかしドスランポス三匹分には割りに合わない報酬じゃの」
村長はそう言いながらテーブルの下から報酬金の入った革袋をチヅルに渡した。
「いえ、そんな…。気にしないで下さい」
チヅルはそう言いながら村長から受け取った。
「それじゃあそろそろおいとましよっか」
クレハはそう言ってその場に立ち上がった。
「では、またお会いするまでお元気で」
「村長、また」

「また世話になる時があったらよろしく頼むぜ！」
「クレハちゃんをありがとうございました」
「村長さん、ご馳走さまでした」
五人は各自で礼を述べると、集会場の出口へと歩みを進めた。
「ほっほっほ。元気での」
村長の言葉を背に五人は集会場から出ると、ミナガルデの街経由ドンドルマ行の竜車の到着を村の外の乗り場で待った。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　02

「ねぇクレハちゃん」
乗り込んだドンドルマ行の竜車の中で、チヅルは誰よりも先に口を開いた。
「な～に？チヅルちゃん」
クレハはまだ酒に酔っているのか顔がまだほんのりと赤く、口調も普段と違って軽くなっていた。でも頭は正常に機能しているようで、クレハの青い瞳はしっかりとチヅルを見返した。
「私たちの帰りを待っている間にココット村の村長さんと何をしてたの？」
「何をって…ご飯食べてたんだよ」
「村長はハンターが来ると決まって食事に誘うんだ」
クレハの説明にユウキのフォローが入った。
「何かジュンキに関する手がかりを得られなかった？」
チヅルが真剣な表情でクレハに尋ねると、クレハはにやりと笑った。
「んふ～。やっぱり気になる～？」
「クレハちゃん、ふざけないでよ。もう…」
やっぱりまだ酒に酔っているのかとチヅルは思ったが、クレハはすぐに普段の顔に戻ったので――やはりまだ顔がほんのりと赤いが――ただふざけただけのようだ。
「駄目。ココット村の村長はもちろん、集会場にいたハンターやメイド、村人にも聞いたけど誰も知らなかったよ」
「そう…」
チヅルはクレハの言葉を聞いて小さくため息を吐いた。しかしジュンキは生きているはずなのだ。必ず、近いうちに会えるはず。そう自分に言い聞かせていると、今度はクレハがチヅルに訪ねてきた。
「そういうランポス狩りの方はどうだったの？ユウキは怪我してるし…」

「ああ、もちろん説明するよ」
ショウヘイが答え、クレハに今回の狩りで起きたことを四人でクレハに説明した。クレハは最後まで聞いてから口を開いた。
「リオレイアの登場か…。大変だったね」
「大変だったのはチヅルだ」
「そうだよな～。チヅルはたった一人でリオレイアの追撃を防いだんだからな」
ユウキの言葉にカズキが追い打ちをかける。当のチヅルは一度目を伏せたが、その後ゆっくり目と口を開いた。
「あのね…実は私…あのリオレイアと話をしたの」
「えっ…！」
「な…っ！」
「うそ…！」
「…！」
ユウキ、カズキ、クレハは声に出して驚き、ショウヘイは声に出さなかったが黒い瞳を見開いた。
「うん…。セイフレムって名乗ったよ、あのリオレイア」
「セイフレム…」
クレハがその名前を噛み締めるように呟いた。
「そして、あのリオレイア…セイフレムは、私がハンターになったきっかけでもあったよ」
「え…？」
男三人は黙って聞いているが、クレハは思わず声が出た。チヅルは前にクレハ本人から聞いたことがあったが、クレハがハンターになったきっかけもリオレイアなのだ。そのせいか今でもリオレイアに対して特別な感情を抱いているらしく、今もチヅルの言葉を待っているクレハの青い瞳は動揺しているように見える。
「私の村…リーンっていうんだけど、リオレイアに襲われて消えちゃった。そのリオレイアが、あのセイフレムだったの」
「チヅルちゃん…」

クレハのか細い声だけがゴトゴトと揺れる竜車の中に響く。
「でも私は恨みとかそんな感情を持ってないよ?だから安心して…？」
チヅルの言葉を最後に会話は途切れてしまい、竜車のゴトゴトと揺れる音だけが異様に大きく聞こえ続けた。

ドンドルマの街に戻ると、ユウキはすぐにハンターズギルドが運営するハンター専用の病院へ向かい検査を受けた。結果はしばらくの間は安静と診断され、ユウキは当面ハンターを休業するとともに念のため入院することになってしまった。ユウキと別れたショウヘイ達四人は病院からの帰りに大衆酒場へ立ち寄り、今後の事について話し合うことにした。今は午前なのでハンターの数は少なく、四人は難なくテーブルに着くことができた。
「さて、今後のことだが…何か狩りに行きたいモンスターとかいるかな?」
ショウヘイがチヅル、クレハ、カズキに尋ねるが、誰も今は特に狩りたいモンスターはいないようだった。
「はーい!狩りたいモンスター…というより狩ってほしいモンスターがいまーす!」
突然聞き覚えのある声が聞こえたので四人が驚いて振り向くと、そこには一枚の依頼書を手に持ったユーリが立っていた。
「ユーリ!どうしたの?」
クレハが尋ねると、ユーリは手に持った依頼書をショウヘイたち全員に見えるようにテーブルの上に置いた。
「今砂漠地帯の方で大暴れしていてね~。早く何とかしないと砂漠地帯の品物がこの街に届かなくなって物価が上がってしまうのよ」
ユーリが笑顔で差し出してきた依頼書に記載されていたモンスターとは――。
「黒ディアブロス…!」
チヅルは思わず口にその名前を出してからユーリを見上げた。

「緊急依頼なんだけどハードルが高くてなかなか受注してくれるハンターがいないのよ。あなた達の実力はよく知ってるからお願いしているんだけど…？」
「…みんな、いいか？」
ユーリの言葉を受けてショウヘイがチヅル、クレハ、カズキに尋ねた。もちろん、と三人は頷き返す。
「ありがとう。報酬金、サービスしておくね。緊急依頼だから、出発は遅くても今日中にお願いね」
ユーリはそう言うとカウンターへと戻っていった。
「早速準備して、全員が揃い次第出発しよう？」
「そうだな」
「そうしようぜ」
「賛成」
チヅルの意見にショウヘイ、クレハ、カズキが賛同すると、四人はすぐ準備に取り掛かった。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　03

雪がちらつく雪山のふもとに一人で立ち、ジュンキは今日こそと意気込んでいた。最近は殺人衝動に駆られることもなく太刀を抜けるようになってきていて、これからラスティクレイモアを抜いて何事もなければ三日に一便しかないドンドルマ行の竜車に乗るつもりである。

「ふう…」

ジュンキは一息つくとラスティクレイモアを抜き放った。甲高い金属音と共に両刃の刀身が現れる。ジュンキは両手でしっかりと柄を握り構えると何も無い空間に斬りかかった。

「はあっ！はっ！ふんっ！やっ！」

縦斬り、縦斬り、突き、斬り上げ…ショウヘイに教えてもらった太刀の基本動作の後、ジュンキは太刀の奥義である気刃斬りへと踏み込む。それと同時に竜の力を解き放つ。

「せいっ！やあっ！たああっ！」

右からの横斬り、すぐに手を返して左からの横斬り、そして全身を使って渾身の縦斬り。

「はあっ…はあっ…」

ジュンキは肩で息をしながらラスティクレイモアを背中へと戻した。そして他に誰もいないのに満足気に笑った。

「…出来た」

ジュンキは右手を目の前で握り締めると、村への帰路についた。

ジュンキはポッケ村に入ると一直線に村長のもとへと向かった。村長は今日も村の奥の開けた場所で焚き火にあたっていた。

「村長」

ジュンキが声を掛けると、村長はいつもの温和な表情でこちらを振り向いた。

「おや、お帰り。今回はどうだった？」
「無事に終わりましたよ」
ジュンキは今回も採取依頼をこなし、村長に報告した。
「うん、今日もありがとうね。納品の無事も担当のアイルーから聞いているしの。ほれ、今回の報酬金じゃ」
村長はジュンキに報酬金の入った革袋を渡した。
「村長、お話があります」
「うん？どうしたんだい？」
「…自分の目的を、果たすことが出来ました」
「…それで？」
「今日で、この村を出ます。お世話になりました」
ジュンキの言葉に一拍置いてから村長は口を開いた
「そうか、目的を果たせたか…。ひと月という短い期間じゃったが、ヌシのような強いハンターに来てもらえただけで嬉しかったよ」
「そんな…俺は自分の目的のためにこの村に滞在しただけです」
「しかし、その滞在中に多くの依頼をこなしてくれた。感謝するよ、ありがとう。…さ、早く準備をしないと竜車が来てしまうよ？」
「はい。…村長、お元気で」
「ああ、またいつでもおいで」
ジュンキは村長に一礼すると、自宅代わりに住んでいた家へ急いで戻った。玄関を開けると中へ飛び込み、この村に持ってきた道具を麻袋に次々詰め込んでいく。
「もう行ってしまうのですね」
突然背後から飛んできた言葉に驚いて、ジュンキは家の玄関を振り向いた。
「リサ…」
そこにはマフモフ装備姿のリサが立っていた。ジュンキは道具を詰め終えた麻袋を肩に掛けると立ち上がり、リサの前に立った。
「リサにも前に話していたよね？俺はある目的のためにこの村に来たってこと」

「ええ、覚えています。それが何か…ジュンキさんは教えてくれませんでしたが、達成出来たのですね」
「ああ」
「そうですか。…いけませんよね、ここは喜ぶべきところなのに」
リサは寂しそうな笑顔で言った。
「リサにも世話になったな。ありがとう」
「いえ、こちらこそありがとうございました。おかげで助かりました」
「また遊びに来るから。…仲間を連れて」
「はい。楽しみに待っています」
リサはそう言うとジュンキが通るために道を譲った。ジュンキは玄関をくぐるとすぐにリサを振り向いた。
「じゃあ、また」
「ええ、お元気で」
リサはそう言うと一礼し、右手を振った。ジュンキは返事に右手を振ると、村の出口近くにある竜車の停留所へと歩みを進めた。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　04

ジュンキがポッケ村を出発した頃と時を同じくして、チヅル達はユーリから緊急の依頼を受けて過酷な狩り場のひとつである砂漠に足を踏み入れていた。今回の狩る相手はディアブロス亜種。通称黒ディアブロスと呼ばれ、ハンター達から恐れられている飛竜だ。

「ふう…」

そんなモンスターとこれから戦うのだというプレッシャーとこの砂漠という過酷な環境のせいで、四人の間の会話も少なくなっていた。思わずチヅルはため息を吐き、他のメンバーを見渡した。ショウヘイはテントの横で太刀「斬破刀」を砥いでいて、カズキは持ってきたアイテムを確認している。

「ため息吐いてどうしたの？チヅルちゃん」

そしてクレハはチヅルの横で水を飲んでいたが、チヅルがため息を吐いたのを気にして声をかけてきた。チヅルは元気のない笑みで返す。

「ううん、何でもないよ」

「そう？相当なプレッシャー感じてるみたいだけど？」

ここでチヅルの笑顔に一瞬曇りが差したのを、クレハは見逃さなかった。

「話してみて？」

クレハはそう言ってチヅルに対して正面を向いて木箱の上に座った。

「…多分、緊張してるんだと思う。黒ディアブロスは初めてだから」

「うんうん」

クレハは相槌を打つ。

「それに暑いから余計に気が滅入ってるんだろうね、きっと」

「そっか…」

「あ、でも大丈夫。狩り場に出たらいつもの私だから」

「…頼りにしてるよ、チヅルちゃん」

「任せてよ！」
チヅルの言葉にクレハが笑うと、チヅルもつられて笑った。
「そろそろ作戦会議をするから集まってくれ」
ショウヘイの声を聞いて、チヅル、クレハ、カズキがショウヘイの周囲に集まる。するとショウヘイは狩り場の地図を乾いた砂地の上に広げた。
「まず、休息すると思われる水場はここだ」
ショウヘイは水場があるエリアを指差す。
「戦うなら広いところがいいよね。となると主に砂漠地帯…？」
「開けた岩場でも十分戦えるよね」
クレハとチヅルもそれぞれの意見を述べる。
「カズキは？」
ショウヘイが尋ねると、カズキは苦笑いして後頭部を掻いた。
「俺は昔から考えるのが苦手だ。作戦は任せるわ」
カズキのハンターらしからぬ言葉に、チヅル、ショウヘイ、クレハは苦笑いした。
「砂漠は広い。それに今回は緊急依頼で時間が無いからこれを使おう」
ショウヘイはそう言うとアイテムポーチから茶色の小瓶を取り出した。大型モンスターの位置を少しの時間だけ感じ取ることができる、千里眼の薬だ。ショウヘイは一気に飲み干すと瞳を閉じた。
「…隣の砂漠にいる」
「じゃあ行くか」
カズキの一声で、四人はベースキャンプを出発した。

黒ディアブロスはすぐに見つけることができた。通常ディアブロスは砂漠と同じ薄黄色の体色をしているのだが、黒ディアブロスはその名の通り全身真っ黒で、それは砂漠ではあまりに目立っていた。
「深追い厳禁ね」
クレハの言葉を聞いて、チヅルは一度深呼吸した。砂漠の熱い風が

肺に運ばれて胸を焼く。しかし今のチヅルには丁度良い刺激だった。
黒ディアブロスはこちらに背を向けていたが、近付いてくる足音に気付いたのかゆっくり振り向いた。チヅル達も歩みを止める。少し間をおいて四人がそれぞれ武器を抜くと、黒ディアブロスは高々と咆哮した。
「行くぞっ！」
「死ぬなよっ！」
「行こう！チヅルちゃん！」
「うん！」
チヅルは迷うことなく駆け出した。先を走るクレハを追う形で黒ディアブロスの右翼に回り込み、事前に打ち合せしたとおりにペイントボールを投げつける。ショウヘイは左翼側から尻尾へ向かい、カズキはランスの大きな楯を掲げて黒ディアブロスと正面に向き合った。
「さぁかかってこいやあああ！」
カズキの声に反応したのか、黒ディアブロスはカズキに突進した。カズキは迫り来る巨大な二本角を「ブロスホーン」の楯で防ぎ、すれ違い様に尻尾に一突き入れた。熱い砂の大地に赤い液体が迸る。
「はあっ！」
「たあっ！」
チヅルとクレハは黒ディアブロスがカズキに向かって再び突進する前に追いついてチヅルが左脚を斬りつけ、クレハが右脚斬りつける。黒ディアブロスが突進するとカズキが一突き。突進が止まる丁度手前に立っていたショウヘイが黒ディアブロスの二本角を一閃した。
（いける…！）
チヅルは「封龍剣・超絶一門」を強く握り締めると一気に駆け出した。クレハとカズキを追い抜き、黒ディアブロスの腹の下に潜り込む――――。
「危ないっ！」
クレハの叫び声を聞いてチヅルは本能的に横へ飛んだ。直後に身体

の横をハンマーのような黒ディアブロスの尻尾が薙ぎ払われる。
「あちちっ！」
チヅルは防具の隙間に入り込んだ砂漠の砂の熱さに驚き、慌てて立ち上がった。
「大丈夫だった？チヅルちゃん」
クレハが心配そうに駆け寄ってきたので、チヅルは慌てて笑顔を作った。
「うん、大丈夫。助かったよ、クレハちゃん」
チヅルはそう言うと「封龍剣・超絶一門」を拾い上げてすぐクレハと共に駆け出した。ショウヘイが黒ディアブロスの噛み付き攻撃を紙一重で避け、カズキが左右に大きく揺れる尻尾を器用に突いているところにチヅルとクレハが腹の下に潜り込む。
「「鬼人化っ！」」
チヅルとクレハは双剣の奥義、鬼人化を発動させた。そこに竜の力を乗せると黒ディアブロスの堅い甲殻がスパスパと斬り刻まれていく。黒ディアブロスは苦し紛れに全身を使って回転攻撃をしてきたがチヅルとクレハには当たらない。そして黒ディアブロスが灼熱の砂の中に身を沈めようとしたところでチヅルとクレハは離脱した。
「やるなあ！」
カズキの声援にチヅルとクレハは手を上げて返事を返す。黒ディアブロスが尻尾まで砂の中に潜ったところでショウヘイが音爆弾を投げた。破裂し独特の音が辺りに響いたところで黒ディアブロスが上半身だけを砂の上に出し、苦しそうにもがき始める。
「やあああっ！」
「はあああっ！」
「うおあああっ！」
「おりゃあああっ！」
この隙を逃さず、四人は黒ディアブロスに総攻撃をかけた。この黒ディアブロスが砂の大地から飛び出し着地すると同時にショウヘイが頭部を一閃した。すると立派な漆黒の二本角のうちの右片方が砂

の大地に横たわった。黒ディアブロスの悲鳴にも似た叫び声が辺りに響く。

「やるぅ！」

カズキがガッツポーズした。黒ディアブロスは一度砂の大地を踏みつけると黒い煙を吐きながらうなり声を上げた。

「怒ってる…！」

チヅルは本能的に身の危険を感じた。あの紅龍ミラバルカン程ではないが、凄まじい殺気を感じる。横を見るとクレハも同じのようで、顔から余裕が消えていた。黒ディアブロスはハンター四人を順に睨むと砂の大地に潜り、戦線離脱してしまった。この砂漠エリア全体を包んだ凄まじい殺気が消え去ったと同時に、チヅルは膝から崩れ落ちた。

「はあっ…はあっ…」

ガルルガヘルムを取ると傍らに置き、肩で呼吸する。

「チヅル、大丈夫か？」

ショウヘイがこちらに向かって歩きながら声をかけてきたので、チヅルは頷いて答えた。

「立てるか？」

ショウヘイがチヅルに手を差し伸べると、チヅルはそれを支えに立ち上がった。腰に括りつけている水筒を手に取り水を一口飲むと「封龍剣・超絶一門」を砥いでガルルガヘルムを被った。

「ショウヘイは強いね」

「ん？」

チヅルの言葉に、ショウヘイは少し首を傾げた。

「私なんて黒ディアブロスがいなくなった途端に脱力しちゃったよ」

チヅルの言葉にショウヘイは小さく笑ってから口を開いた。

「普通はそういうものさ。気にすることじゃない」

「私もそう思うよ？」

突然クレハがチヅルとショウヘイの間に入ってきて言った。

「私も脱力しそうだったし…。まあ何とか堪えたけど」

クレハの言葉を聞いてチヅルが微笑んだその時、カズキの嬉しそうな声が辺りに響き渡った。

「うおー！黒ディアブロスの角！おっしゃあああ！」

カズキのあまりのテンションの高さに、チヅルとクレハとショウヘイは笑うしかなかった。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　05

ペイントボールの臭いを追って黒ディアブロスを探すと、それは岩場エリアの奥地にいた。エリアに入るなりすぐに突進してきたため、四人は一斉に散った。黒ディアブロスは勢いを止められずにこのエリアの端まで移動してしまう。その隙に四人はこのエリアの中央に集まった。

「まだ怒ってるのかな…？」

チヅルは思わず言葉に出してしまったが、他の三人も同じことを考えていた。そして振り向いた黒ディアブロスの口から黒い煙が出ていないことを確認すると、四人は胸を撫で下ろした。

「じゃあ、作戦通りに…」

「うん」

「了解」

「おう」

ショウヘイの言葉にチヅル、クレハ、カズキは頷くと、黒ディアブロスを囲むように移動した。チヅルは右翼側、クレハは左翼側、カズキはやはり正面である。黒ディアブロスは接近を許すまじと全身を使って回転するが、チヅルとクレハはこれを難なく避け、カズキは「ブロスホーン」の楯で受け流す。そして黒ディアブロスがショウヘイとカズキがいる方向を向いたその瞬間を狙ってショウヘイが閃光玉を炸裂させた。黒ディアブロスは視界を一時的にだが奪われ、その場で暴れる。

「暴れるんじゃねぇよ！」

手当たり次第に攻撃を加える黒ディアブロスの残されたもう片方の角を狙いながらカズキは言った。そのカズキの両側では隙を見てチヅルとクレハが攻撃を加えている。

「いいぞ！」

ショウヘイの声を聞いて、三人はショウヘイのもとへと集まった。

「こっちだよー！」
黒ディアブロスが視力を取り戻すと同時に、クレハが大きな声で黒ディアブロスを呼んだ。黒ディアブロスは一度姿勢を低くし、つっ立っている四人のハンター目掛けて突進する。そして四人のハンターは吹き飛ばされる――はずだった。しかし黒ディアブロスは四人のハンターの手前で急停止し、身体を痙攣させた。
「シビレ罠作戦成功！」
「行くぞ！」
「うん！」
「ああ！」
四人はこの機会を生かすべくそれぞれの武器を抜いた。カズキがもう一本の角を折るべく正確な攻撃を行い、チヅルとクレハは腹の下で鬼人化乱舞した。そしてシビレ罠が壊れる直前に、ショウヘイの斬破刀による一閃で黒ディアブロスの尻尾が宙を舞った。
「ナイス、ショウヘイ！」
カズキの声にショウヘイは右手で答える。尻尾を斬り飛ばされた黒ディアブロスは怒りの咆哮を上げた。あまりの大音量に四人は思わず耳を塞ぎしゃがみ込んでしまう。そこに渾身の突進攻撃。標的は――チヅル。
「…！」
目を開くとそこにはこちらに向かって突進してくる黒ディアブロスの姿があってチヅルは絶句し、頭の中が空になった。迫り来る絶対的かつはっきりとした死が、チヅル思考を麻痺させる。――突然、視界が横にスライドした。次の瞬間には背中に痛みが走り、地面を何度も転がっていた。そして回転が止まった時に目を開けるとそこにはクレハの姿があった。
「クレハちゃん…！」
「チヅルちゃん、大丈夫？」
「うん…。私を助けるために…？」
「飛びかかっちゃったよ」

クレハはそこまで言うと立ち上がり、クレハの手を借りてチヅルは立ち上がった。
「まだ終わってないよ」
チヅルが口を開きかけたその時、クレハが言った。確かに、まだ黒ディアブロスはいる。そしてショウヘイとカズキは戦闘中だ。
「行こう?」
「…うん!」
クレハの言葉に頷くと、チヅルは駆け出した。しかしチヅルとクレハが黒ディアブロスに近づく前に、黒ディアブロスは地面に潜ってこのエリアを脱してしまった。
「あ…」
「残念」
チヅルは一言漏らし、クレハは一言呟いた。そしてショウヘイとカズキに合流する。
「怪我してねぇか?チヅル」
「あ、うん、大丈夫。クレハちゃんのお陰でね」
「ううん。チヅルちゃんが無事で良かった」
チヅルが怪我をしていないと知って、ショウヘイとカズキは安堵した。
「次はどこに行ったか分かる?」
「ペイントの臭いからすると岩場エリアであるってことは分かるが…おそらく水場だと思う」
「確かに、私も黒ディアブロスは疲れてきていると思う」
クレハの問い掛けに、ショウヘイとチヅルは同意見を述べた。
「じゃあ体力を回復させる前に倒そう?準備が終わったらすぐ出発しないとね」
「ああ」
「うん」
クレハの意見にショウヘイとチヅルは賛成したが、カズキの声が聞こえない。

「カズキ～？」
「うおー！こんな立派な尻尾は初めてだー！」
カズキを探すと、彼は先程ショウヘイが斬り落とした尻尾に抱き着いていた。
「あはは」
「もー！カズキ！早く準備しなさいよー！」
その様子にショウヘイは苦笑い。チヅルは声に出して笑い、クレハは大きな声で怒鳴った。

地図で地形を確認しながら岩場エリアを奥へと進んでいくと、水場があるエリアに出た。同時に黒ディアブロスの姿も見つける。しかし――――。
「寝てるね」
黒ディアブロスは水場の横で眠っていた。
「ショウヘイの重たい一撃、よろしく」
「分かった」
クレハの提案をショウヘイは飲んだ。黒ディアブロスの前に立ち、「斬破刀」を構える。
「いけー！」
「角を斬り落とせー！」
クレハとカズキが声を上げる。
「はああっ！」
ショウヘイは意識を集中させて残された角目掛け渾身の一撃を叩きつけた。しかし角は折れず、大きなヒビが入っただけだった。
「ちっ…！」
ショウヘイは思わず舌打ちする。当然黒ディアブロスは起き上がってしまった。
「ショウヘイ！離れろ！」
カズキの声を聞き、ショウヘイは一度退いた。
「あっ！煙噴いてる！」

チヅルは黒ディアブロスが黒い煙を吐いていることに気づいた。そう、怒り状態である。
「でも、すぐ怒るのならあと少しってことだよ！頑張ろう！」
クレハの言葉に、チヅル、ショウヘイ、カズキはしっかり頷いた。
「来るよ！」
黒ディアブロスはまず突進してきた。
「くっ…！」
「早いっ！？」
四人はそれぞれ紙一重で避ける。しかし四人が体勢を整える前に黒ディアブロスが咆哮した。
「うっ…！」
「くそっ…！」
黒ディアブロスは四人の方を振り向くと、ショウヘイ目掛けて突進した。
「危ないっ！」
「避けてっ！」
チヅルとクレハがショウヘイに注意を促すが、黒ディアブロスの突進は恐ろしく速かった。ショウヘイが黒ディアブロスの突進に気づいた時にはもう目の前まで迫ってきていた。
「ちっ…！」
ショウヘイは舌打ちすると「斬破刀」を握り締めた。そして竜の力に意識を傾ける。
「無茶だ！ショウヘイ！」
カズキの声が聞こえたが、もうこれしかない。ショウヘイは残された角が一番脅威であると考え、「斬破刀」を一閃した。残された角は見事に本体から切り離され宙を舞った。そして「斬破刀」は急所である黒ディアブロスの頭部を斬り裂いた。しかし突進の勢いを殺すことは出来ず、ショウヘイは身体を「つ」の字に曲げて吹き飛んだ。
「がはッ！」

ブラックヘルムが吹き飛び口から真っ赤な血液が飛び出したショウヘイは放物線を描いて水場の中に落ち、意識を失った。

「ショウヘイ！」
「しっかり！」
「大丈夫か！」
チヅル、クレハ、カズキは慌てて水場に飛び込んだ。幸い腰の高さまでしかなく、ショウヘイをすぐに引き上げることができた。
「ぐっ…！ゴホ…ッ！が…っ！」
ショウヘイの口から飲み込んだ水と共に真っ赤な血液が勢い良く飛び出す。
「早くキャンプに！」
「あ、ああ。ショウヘイ、俺の背中に乗れ」
ショウヘイはカズキに担がれると、ベースキャンプへと運ばれていった。残されたチヅルとクレハは無言のままショウヘイとカズキが消えていった方を見つめていた。
「…チヅルちゃん、お願いがあるんだけど」
「な、何…？」
突然クレハが口を開いたので、チヅルはちょっと驚いてしまった。
「黒ディアブロスから甲殻を一枚剥ぎ取っておいてくれない？討伐完了の証拠になるからさ。私はカズキのランスを預かってて両手が塞がってるんだ」
「あ、うん。分かった」
チヅルはクレハのお願いを聞き入れると黒ディアブロスの亡骸に近づきながら剥ぎ取りナイフを抜いた。そして甲殻の隙間に刃を入れ、一枚剥ぎ取った。
「…これからどうなるんだろう」
思わずチヅルは口にした。ジュンキは不在。ユウキは検査入院。そして今回、ショウヘイが大怪我を負ってしまった。
「…ジュンキ」

チヅルは一度ぎゅっと目を閉じてからクレハと共にベースキャンプへと戻っていった。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　06

ドンドルマの街にあるハンター専用の病院で、ショウヘイは緊急入院することになってしまった。幸いユウキの隣のベッドが空いていたので、ショウヘイはユウキと並ぶことが出来た。
「ユウキ、まだ治らないの？」
「ん～俺は大丈夫って言ってるんだけどなぁ…」
クレハの呆れた口調の言葉に、ユウキは小首を傾げることしか出来なかった。
「ショウヘイは大丈夫？」
「ああ、症状は落ち着いている。黒ディアブロスに突進された時に角を切り落とせてよかった」
「危うく腹に穴が開くところだったからなぁ」
ショウヘイの答えにカズキが付け加えた。
「それに…」
ショウヘイは一度目を閉じるとそう言った。
「それに？」
クレハが小首を傾げる。ショウヘイは目を開けると小さく笑ってから口を開いた。
「俺は竜人だからな。ジュンキみたいにすぐ元気になるさ」
「でも治るのは早いに越したことはないだろ？元気な俺たち三人で何とかできないかなぁ」
カズキがそんなことを言ったので、チヅルとクレハはカズキの方を向いた。
「いやさ、例えばよく効く薬を探してくるとかさ」
「例えば？」
「…いにしえの秘薬？」
カズキの回答に、チヅル達四人は絶句した。いにしえの秘薬といえば治療剤の中では最高級品で、素材も簡単には見つからないものだ

からだ。
「いにしえの秘薬かぁ…。確か活力剤とケルビの角…だったかな？」
「活力剤はマンドラゴラっていうキノコと増強剤の調合だったよね…」
「増強剤ならハチミツとにが虫の調合だ」
「成功確率を考えるとある程度の数はあった方がいいよね…」
チヅルの言葉を最後に、会話が途切れてしまった。
「でもここはハンターが集まる最大の街、ドンドルマだぜ？難しいかもしれないが、何とか集まるんじゃないか？」
「…そうだね。やってみるだけやってみよう。ね、チヅルちゃん？」
「…うん。やる前から諦めたくないもんね」
「よーし、そうと決まれば役割分担だ！俺は頑張ってマンドラゴラっていうキノコを探してくる！」
とカズキは病室を飛び出していった。
「じゃあ私はケルビの角を探すね」
チヅルもそう言うと病室を出た。
「う～ん、私はハチミツとにが虫かぁ。簡単な分、二つ用意しないとね」
クレハは一人そう言うと、病室の出口へ向かって歩き出した。そして病室を出る直前にショウヘイとユウキに呼び止められた。
「なに？ショウヘイ、ユウキ」
「…済まない。迷惑をかけて」
「ありがとう。よろしく頼むな」
ショウヘイとユウキの言葉にクレハは笑顔で頷くと、病室を後にした。

「ふう…」
チヅルは大衆酒場の中を歩きながらため息を吐いた。ショウヘイとユウキの病室を出てから既に2時間。市場の半分を歩き回ったがまだケルビの角は見つかっていない。この大衆酒場で働くユーリにも

聞いたのだがユーリでも売り場までは知らなかった。もちろんパーティメンバーに持っていないか聞いたが、自分を含めて誰も持っていなかった。

「あぁ…こんなことならこの前アイテムボックスを整頓したときに売らなきゃよかった…」

チヅルは一人ぶつぶつ言いながらハンターへの依頼が掲示されているクエストボードの前に立った。

「狩りに行ったほうが早いかな…」

チヅルは冗談半分でケルビ討伐の依頼を探してみた。しかしそれもない。

「ん～もう！」

クエストボードには何枚も重ねて依頼書が貼られている。チヅルは下の方も一応探してみた。

「出てこい出てこい出てこ～い！――――あっ」

チヅルの目に一枚の依頼書が目に入った。それはリオレイア狩猟の依頼書なのだが――――。

「エリア番号Ｇ－８３５６って…私がセイフレムと会ったココット村の裏山じゃ…」

チヅルはゆっくりと目を閉じ、一度深呼吸してから目を開くと同時にこの依頼書をクエストボードから引き剥がした。

カズキは街の市場のほとんどを回り、ようやくマンドラゴラを入手することができた。そして意気揚々とショウヘイとユウキの病室に戻ってくると、既にクレハが椅子に座っていた。

「お、早いなクレハ」

「私は簡単だったから。で、カズキはどう？」

「ふふふ…ジャジャーン！」

カズキはアイテムポーチからマンドラゴラを三本、テーブルの上に置いた。

「三本も。お疲れカズキ。これで材料は揃ったよ」

「ん？チヅルは？」
「チヅルはクレハが来る前にケルビの角を五本テーブルの上に置いてどこかに行っちまったよ」
カズキの質問にクレハが答える代わりにベッドで寝ているユウキが答えた。
「どこに？」
「さあ…」
「きっと疲れて寝てるんだよ。さ、調合しよう？カズキ」
クレハはそう言うと調合するための道具を全部カズキに手渡した。
「クレハはやらないのか？」
「私は手先が器用じゃないから…」
「？」
カズキは大袈裟に首を傾げてみせた。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　07

いにしえの秘薬の調合は失敗したもののもあったが、何とか完成までこぎつけることが出来た。いにしえの秘薬の効果は抜群で、翌日クレハとカズキがショウヘイとユウキを訪ねると二人は外出許可を貰っていた。ユウキはそもそも検査のために入院していただけであり、ショウヘイは竜人で元々治癒能力が高かったのだが、そこにいにしえの秘薬はショウヘイの治癒能力をさらに高めたようである。食事の自由も許可されていたので、四人はとりあえず食事をすることにして大衆酒場に入った。しかしそこには思わぬ人物が長テーブルのひとつに座っていた。太刀「ラスティクレイモア」にリオレウスシリーズの防具。そして薄茶色の髪を包んでいる黒バンダナ姿のハンター。

「ジュンキ!?」

誰よりも早く見つけたクレハはとても大きな声を出してしまい、大衆酒場にいたハンターの半分くらいはこちらを振り向いてしまった。もちろんジュンキも驚いてクレハの方を振り向き、そして穏やかな笑みを浮かべた。

「…相変わらずか。でもみんな元気そうでよかった」

「どうしてここに!?いつ帰ってきたの?」

「ついさっきだよ。今から食事してみんなに会いに行こうとしていたんだけど…見つかっちゃったな」

ショウヘイ達四人はとりあえずジュンキの回りに座った。初めに口を開いたのはジュンキだった。

「まずはごめん。突然行方をくらまして」

「どうして行方をくらましたんだ?」

ショウヘイの質問に、ジュンキは一拍置いてから答えた。

「紅龍ミラバルカンと戦った時、俺の中の竜が暴走していたんだ。このまま放っておいたらいつ、また暴走して…みんなを殺してしま

うかもしれない。そう思って、自分の竜を制御出来るまではみんなのところから離れることにしたんだ」
「相談してくれよなぁ。心配したんだぞ？」
「次はそうするよ」
ユウキの言葉にジュンキは笑って答えたが、すぐ表情を引き締めた。
「ショウヘイ、どうしたんだ？包帯なんて巻いて…。ユウキも私服なんて珍しい…」
「ああ、これか…」
ショウヘイはユウキが検査入院していること。自身は黒ディアブロスの突進を受けて怪我したことを説明した。
「俺がいない間にそんなことが…」
ジュンキの言葉を最後に沈黙が五人を覆ったが、ここでチヅルがいないことに気がついたジュンキは声を上げた。
「…あれ？チヅルは？」
そう言ってクレハを見ると、クレハは首を横に振った。
「チヅルちゃん、部屋のドアを叩いても出なくて…」
「まだ寝てるんじゃないのか～？」
「そうかなぁ…」
クレハとカズキの意見を聞いて、ジュンキは少しがっかりした。久しぶりに全員と顔を合わせられたのに、チヅルだけいないとは。ジュンキが残念がっていると、横から注文した料理がやってきた。
「はーい、お待ち遠さま。…ってあれ？」
ジュンキの料理を運んできたのはこの大衆酒場で給仕をしているユーリだったが、ショウヘイ達の姿を見て首を傾げた。
「どうしたの？ユーリ」
クレハが尋ねると、ユーリは眉間にシワを寄せて口を開いた。
「どうして狩りに出てないの？」
「へ…？」
「どういう…？」
ジュンキ達の反応を見て、ユーリは背筋を伸ばしてから口を開いた。

「クレハちゃんとカズキでリオレイア狩りに出るからってチヅルちゃんが依頼書を取りに来たはずなんだけど…」
「…！」
「それってどういう…」
ユーリが言ったのはどういうことなのだろうか。ジュンキやショウヘイはユーリの次の言葉を待ったが、そのなかでクレハがゆっくり口を開いた。
「…もしかしてチヅルちゃん、一人でリオレイア狩りに行ったのかな」
「…どうしてそう思う？」
「…チヅルちゃん、自分の村をリオレイア――セイフレムだっけ、に焼かれたって話をしてくれたよね。チヅルちゃんは偶然セイフレムに関する依頼書を見つけて一人で狩りに行ったとか…」
ショウヘイの質問にクレハは続けて言った。ここでジュンキが小首を傾げていたので、セイフレムのことについて説明するとジュンキも驚いた。
「チヅルがリオレイアと会話した…」
「確かチヅルちゃんが受けた依頼のリオレイアは森と丘フィールドだったわよ。エリア番号は確かＧ－８３５６だったかなぁ…」
「ココット村の裏山…」
ユーリが述べたエリア番号にジュンキが反応した。
「チヅルが一人でリオレイア狩りに出たのはほぼ確実か…」
ショウヘイが結論づけると、続けてクレハが口を開いた。
「ねえ、ユーリ」
「なに？」
「森と丘フィールドの…エリア番号Ｇ－８３５６に行ってもいい？チヅルちゃんを助けないと…！」
クレハのお願いを、ユーリは首を横に振った。
「同じエリア番号内に二つのパーティを入れることは出来ないの。お互いの狩猟目標の影響を与えるといろいろ面倒だから…」

「チヅルちゃんは一人なんだよ!?」
「狩り場では一人でもひとつのパーティとしてカウントされるの」
クレハの必死の訴えを、いつも笑顔のユーリは冷静な顔で退けた。
「そんな…！」
クレハは絶望した。これではチヅルちゃんを助ける方法が無いではないか。
「でもね」
ここでいつものユーリの声が聞こえたので、クレハは顔を上げた。
「それは狩りをする場合で、そうだね…例えば散歩しにいくことに関してはマニュアルに何も記載されていないの」
「俺達が独自で動くには問題ないってことか」
カズキが話をまとめると、ユーリは頷いた。しかしすぐその口が開く。
「あ、でも…五人で行くの？」
「ああ、俺とユウキは麓のココット村で待機する。一応病気持ちだからな」
「俺は経過観察なんだが…」
ユウキが小さく呟いたがそれを無視したショウヘイの返事に、今度こそユーリは納得した。
「よし、チヅルを追いかけよう」
ジュンキがそう言うと、他の四人は頷いた。
「すぐ出発しないとな。各自すぐ準備してこの大衆酒場に集合だ」
ユウキが言い終わるか終わらないかというタイミングで、ジュンキ以外は立ち上がった。
「ジュンキ？」
クレハがジュンキの行動に気がついて声を掛けた。ジュンキはユーリが運んできた簡単な食事を食べ始めていたのだ。
「ああ、俺は帰ったばかりで準備万端だから」
ジュンキの言葉にクレハは微笑みながら小さく頷くと、自分の部屋であるマイハウスに向かって走りだした。

マイハウスの自室の部屋の扉を吹き飛ばす勢いで開くと、中にいた部屋付きアイルーが驚いて飛び上がった。
「ニャニャ！どうしたんですかニャ旦那さん！？」
「ごめん、今急いでるの！」
クレハはアイテムボックスを勢いよく開くと中からレイアシリーズの防具を取り出して床に並べた。すぐに私服を脱いでインナーを纏い、レイアシリーズを装備する。壁に立て掛けてある双剣「ツインハイフレイム」を手に取るとこれも装備する。そして再びアイテムボックスの前に立つと狩猟の基本的な道具を次々アイテムポーチに放り込んだ。
「ニャ～…」
「…私の大切な仲間の一人が単身リオレイア狩りに出てね。今から助けに行くの」
部屋付きアイルーが心配そうな声を上げたので、クレハは急いで説明した。アイテムを詰め終えてアイテムボックスの蓋を閉めたところで、壁に飾ってあるジーク師匠の双剣の片方が視界に入った。
「…師匠。チヅルちゃんを、守ってください…」
クレハはジーク師匠の双剣の片方に向かって呟くと壁から取り外し、腰に差している剥ぎ取りナイフと交換した。
「行ってくるね」
「お気をつけてニャー」
クレハは部屋付きアイルーに見送られて自分の部屋を出た。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　08

クレハが大衆酒場に戻ると、その中心付近で騒ぎが起きていた。大衆酒場にいたハンター達が囲んで騒動の中心は見えない。
「なんだろ。こんな時に…」
騒動の中心に近づくにつれて「竜人」や「王国」という単語が聞こえてきた。
「…？」
そしてクレハが騒動の中心にたどり着くと、そこには苦い顔をしているジュンキ、ショウヘイの姿と怒り顔のユウキ、カズキの姿があった。向い合っている相手はクレハが知らない男だった。派手な格好に立派な髭からすると貴族か何かだろうか。
「ジュンキ、何があったの？」
「クレハ…」
ジュンキがクレハの名を出すと、派手な格好の男が一歩前に出て口を開いた。
「おお、あなたがクレハ殿ですか」
「ク、クレハ殿…？」
大層な敬称を使われて、クレハは思わずジュンキの方へ一歩だけ歩み寄った。
「ジュンキ殿、ショウヘイ殿、クレハ殿、と。あとチヅル殿は？」
「今留守だよ」
「ふむ…。まあいいでしょう」
カズキが投げやりに答える。しかしこの男はカズキに対して見向きもせずにそう答えた。
「ねぇ、こいつ誰？」
「シュレイド王国の使いだ。俺とジュンキとチヅルがこの街に逃げる原因になった奴だよ」
クレハが小声で尋ねると、ユウキが小声で返してくれた。

「お初にお目にかかります。私はシュレイド王国宰相直属の使者で御座います」
「…名乗らないのか？」
「私の名など覚えていただく必要は御座いませんので。使者とでもお呼び下さい」
ユウキの質問にもユウキの方を向いて答えず、瞼を閉じて頭を下げるに留まった。
「それで、シュレイドの使者殿は俺達に何の御用で？」
ショウヘイが尋ねると、シュレイドからの使者は顔を上げて答えた。
「ジュンキ殿とショウヘイ殿、そしてクレハ殿を迎えに上がりました」
ショウヘイとクレハの目が驚きに見開かれた。しかしジュンキは驚きもせずにシュレイドからの使者に質問した。
「その件なら先日もあった。ミナガルデの街でね」
「あの時は部下共がご無礼を致しました」
「まだ諦めてなかったのかよ」
ユウキが会話に割り込むがシュレイドからの使者は相手にしたくないようで、ユウキの方を向かずに言葉を続けた。
「今回はより丁重に扱うようにと命令を受けております。どうぞ、私の後を付いて来て下さい。街の外に馬車をご用意しております」
「その前に聞きたいことがある。シュレイド王国は俺達竜人を集めて何をする気だ？」
「申し訳ございませんが、私は皆様を連れてくるまでが仕事。皆様をお連れする理由は存じません」
ジュンキの質問に、シュレイドからの使者は頭を下げて答えた。
「悪いが俺達は目的も分からないシュレイド王国に従う訳にはいかない」
「それは困ります。断るようなら無理にでも連れてこいとの命令です。多少手荒な方法を取ることにもなります」
シュレイドの使者が発した言葉を聞いて、大衆酒場にいた全てのハ

ンター達が身構えた。それはつまり、武力行使に他ならない。張り詰める街のハンター達と一人のシュレイドからの使者の間の空気。

「ちょっと待ったー！」

「ユーリ！？」

突然この大衆酒場でよく耳にする元気な声を聞いて、クレハは思わず声に出して驚いた。ユーリはもはや野次馬と化しているハンター達の間を縫ってジュンキ達とシュレイドからの使者の間に立った。その手には分厚い書物を持っている。表紙からしてハンターズギルドのマニュアルのようだ。

「なんだね、君は」

「ハンターズギルドの者でーす。ちょっといいですかー？」

シュレイドからの使者は驚きを隠さなかったが、ユーリはそんなことを気にせずマイペースにマニュアルを開いた。

「はい！ハンターズギルドに所属するハンターの行動は常に自由であると共にそれ相応の責任を有するものとする！ハンターズギルドに所属するハンターである以上、行動の自由を侵害することは何人にも出来ません！」

ユーリの主張に、シュレイドからの使者は咳払いをひとつしてから口を開いた。

「ハンターズギルドは我らがシュレイド王国内部に存在する王国非公認の組織。当然王国の指示に従って頂く」

「はーい！ハンターズギルドは独立した組織であり、外部からの一方的な命令、指示、指図、またそれらに準ずるものを認めない！シュレイド王国でもハンターズギルドに対して指図は受けませーん！」

「き、貴様ぁ…！」

ユーリの物言いに、流石のシュレイドの使者も頭にきたようだ。顔を真っ赤にして声を張り上げる。

「そこまで仰るなら仕方ありませんな！我々も王国憲章に則って軍を動かすまでですぞ！」

「はいはーい！ハンターズギルドに所属するハンターは人間に対す

る武力の行使を認めない。ただし、自己防衛の為ならばその限りではない！」

ユーリはそこまで言うとマニュアルを音を立てて閉じた。

「武力行使するならば、こちらにもそれ相応の準備が出来ているけど？」

ユーリはそこまで言うと周りを囲んでいるハンター達を見渡した。

それと同時にハンター達の雄叫びが上がる。それを確認すると、ユーリはジュンキ達の方を振り向いた。

「さ、早く出発して！」

「ま、待て！逃がさん！」

シュレイドからの使者は両手を高く上げて二度叩いた。ジュンキ達はその行動を横目で見ながらユーリを先頭にハンター達の輪を抜け、クエスト出発口へと駆け抜けた。途中で大人数の足音が響いてきたので振り向くと、先程クレハが通ってきた街の中心へ通じる出入口からシュレイド王国軍の兵士達が大衆酒場の中へ流れ込んでくるところだった。

「何としても竜人を捕らえるのだ！」

シュレイドからの使者の声が大衆酒場に響く。ジュンキ達はその声を背にクエスト出発口を越え、用意してあった竜車に飛び乗った。

「待って。これを…」

ユーリはそう言うと懐から一枚の封筒をジュンキに差し出した。

「これは？」

「ハンターズギルドの紹介状。あなた達の履歴書も入ってる。身を隠してもこれがあれば大丈夫だから」

「ユーリは大丈夫なの？」

「私はこのドンドルマの街――即ちハンターズギルドの総本山で働いているのよ？大丈夫。私に何かあった時、それはハンターズギルドが潰れた時だから。…さ、もう行って」

クレハはユーリのことを気にして声を掛けたが、ユーリはいつもと変わらない笑顔で答えてくれた。ショウヘイが御者のアイルーに出

してくれと言うと、ジュンキ達を乗せた竜車はゆっくりと進みだした。そして竜車が車庫を出ると、ユーリは壁にぶら下がっている赤色の綱を引いた。すると天井に止めてある丸太で作られた巨大な柵が下に落ち、車庫の入り口を塞いだ。当然ユーリの姿も見えなくなった。

「ユーリ…」

クレハのか細い声は竜車の進む音にかき消された。やがて竜車がドンドルマの街から出ると、たった今出てきた竜車用の出入口もハンターズギルドの警備兵――通称ガーディアンによって閉じられてしまった。

「これからどうなるんだろう…」

ジュンキ達は長い間言葉を交わさなかったが、ついにクレハの口が開いた。

「…ミナガルデの街から逃げてきたけど、とうとうドンドルマの街まで来やがったか」

ユウキが低い声で言った。

「今はチヅルを助けるのが最優先だ。チヅルと合流してから六人でこれからのことを考えよう」

ショウヘイの提案を、他の四人は頷いて答えた。

「チヅルちゃん…」

クレハは思わずチヅルの名前を口に出してしまった。チヅルの実力を疑っている訳ではないが、それでもリオレイアは危険なモンスターだ。クレハとしてはチヅルの乗った竜車が故障でもして立ち往生し、道中で合流出来ることを願うことしかできなかった。

しかしジュンキ達がココット村に入るまでに、チヅルと合流することはなかった。

ＭＨ２ｎｄ　第２章　チヅルの戦い　０９

昼と夜とでは狩り場はこんなにも姿を変えてしまうのかと、チヅルは空に浮かぶ満月を仰ぎながら思った。ガルルガシリーズの防具の隙間から入り込む夜風が心地いい。みんなに黙って街を出てきてしまったと後悔する気持ちを洗い流してくれるようだ。今のチヅルに、迷いは無かった。

「ふう…」

チヅルは深く深呼吸すると、セイフレムがいるであろう森と丘の巣穴の入り口を見つめた。今チヅルが立っているのが地図上でエリア４という番号を振られている高台の草原地帯だ。巣穴はエリア番号５が振られており、この巣穴へはエリア４番から入るかエリア６番の高い崖を登ることで入ることができる。

「よいしょ…」

チヅルは巣穴に入るためにちょっとした段差を登ると、静かに中へと入った。

巣穴の中は月の光が差し込んで暗くはなかった。そしてエリアの中心に、夜空を見上げている一匹のリオレイア――セイフレムがいた。

「こんばんは」

セイフレムの方から話しかけてきたので、チヅルは驚いて歩みを止めてしまった。セイフレムはゆっくり顔を下ろすとチヅルと正面向き合い口を開いた。

「とうとうこの時が来たのね…」

「…」

チヅルは黙って背中の双剣「封龍剣・超絶一門」を抜いて構えた。

「私はあなたを恨みで、憎しみで狩る訳じゃない。でも私は心の整理をつけたいの。…よろしく。セイフレム」

チヅルの言葉を聞いてセイフレムはすぐに返事をせず、言葉を選ぶように少し顔を背けた。

「…私は自分が犯した罪を知っている。けれど、私はここで死ぬわけにはいかないの。私の命は私だけのものではなくなっているから。だから私は、あなたを私の命を狙う敵として…いいえ、一人のハンターとして戦います」

「ありがとう、セイフレム。…いくよっ！」

チヅルは自分の心に整理をつける為に、セイフレムは純粋に自分の命を守るために、月の光に照らされし乾いた大地を蹴った。

チヅルとセイフレムの距離が縮まっていく。しかし質量差からいって、このまま激突すればチヅルが負ける。もちろんチヅルもそうなることを理解しており、チヅルは衝突する直前に身体を捻らせてセイフレムの脇を抜け、走り去る間際に左脚を一閃した。斬りつけたセイフレムの左脚から真っ赤な血が噴き出す。

（まずは一撃…）

チヅルは右脚でブレーキをかけ、セイフレムを見つめた。普通のリオレイアならば突進した勢いで前のめりに倒れこみ、まだ起き上がろうとしている頃である。しかし、セイフレムは既にチヅルの方を向いていた。

「…！」

「甘いわよ！」

セイフレムはチヅルに向かって言い放つと炎のブレスを放った。その数三発。チヅルは正面、右、左の順番に飛んで来る炎のブレスを紙一重で避ける。通り過ぎた炎のブレスがチヅルの背後で爆発、炎上した。打ち所が悪ければ即死である。

「私を普通のリオレイアと思わない方がいいわよ」

セイフレムの言った言葉に、チヅルは下唇を噛み締めた。普通のリオレイアではない――つまり、普通のリオレイアよりも戦闘経験があるということだろうか。セイフレムが言った言葉の意味がもし

そうならば、それは通常の個体よりも経験豊富で、より強い。つまり――。

「G級レベルか…参ったなぁ…」

チヅルは口元が自然と笑うのを感じた。

「でも…負けるわけにはいかないっ！」

チヅルは再び「封龍剣・超絶一門」を構えると、セイフレムに向かって走り出した。セイフレムは走り来るチヅルに向かって再び炎のブレスを放つ。チヅルはそれを避けるようにしてセイフレムの右翼側に回り込もうとする。しかしそれに気づいたセイフレムは自身を回転させて尻尾を振り回す。チヅルは迫り来る尻尾をスライディングすることで避けるとセイフレムの腹の下で立ち上がり、鬼人化した。同時に竜人としての力も開放される。

「はあああああっ！」

チヅルはセイフレムの腹の下で文字通り舞った。次々とセイフレムの身体に傷が入っていく。

「くっ…！」

セイフレムは苦しそうな声を上げるとチヅルから逃げるように走り出した。すぐにチヅルも追いかける。セイフレムはこの巣穴の壁際まで走るとすぐに振り向き、チヅル目掛けて突進した。

「ッ！」

チヅルは慌てて右に緊急回避した。しかし僅かに遅く、チヅルの左脚にセイフレムの左翼が直撃してしまった。そのせいでチヅルはバランスを崩し、受身を取るはずが背中から着地してしまう。

「ぐっ…！」

左脚と背中に走る鈍い痛みを我慢して立ち上がるとセイフレムを探した。モンスターとの戦闘中に相手を見失うことは死に直結するからだ。そのセイフレムは両脚を器用に使ってブレーキをかけ、転ばずに止まってみせた。

「転ばないリオレイアなんて…」

聞いたことが無かった。セイフレムがすぐ炎のブレスを放ってきた

のでチヅルはすぐに飛び退く。直後にチヅルがいた場所が吹き飛ぶ。チヅルはセイフレムがこちらを向く前にアイテムポーチに手を突っ込み、中から黄色の球体を取り出した。それをセイフレムが振り向くと同時に投げ、チヅルは顔を両腕でかばった。直後に巣穴を強烈な光が覆った。ハンターが使う狩猟道具の一つ、閃光玉だ。これを使えばモンスターの視界をしばらくの間奪うことが出来る。それはリオレイアも同じで、チヅルは確認のために顔を上げて――驚愕した。

「なっ…！？」

セイフレムはチヅルに向かって突進してきていたのだ。気づいたときにはもう遅く、セイフレムの顔がチヅルの腹にめり込んだ。

「ぐふっ…！」

セイフレムはチヅルを顔の先端につけたまま、巣穴の岩壁に突っ込んだ。

「が…はぁ…っ！」

チヅルの口から唾液が飛び出したが、ガルルガヘルムを被っていたのでセイフレムにかかることはなかった。チヅルの骨が何本か砕け、チヅル自身も砕けた音を聞いていた。セイフレムはチヅルがぐったりと自分に体重を預けてきたのを感じると、岩壁から数歩後ずさった。するとチヅルはその場に力なく崩れ落ちた。

「…私の勝ちね」

セイフレムが悲しそうに言ったその時、突然チヅルの周囲に白い煙が発生した。

「！？」

セイフレムは慌てて飛び上がって後退した。しかしセイフレムが着地する前に煙の中から「封龍剣・超絶一門」を構えたチヅルが飛び出してきた。その瞳は赤みのかかった黄色の竜の瞳。

「はあああああああっ！！！」

チヅルは雄叫びを上げて宙を浮くセイフレムに斬りかかった。空中で鬼人化し、無防備なセイフレムの胸元で乱舞する。チヅルはセイ

フレムが着地する直前にセイフレムの胸元を蹴って後方へ飛び、何度か宙返りした後にセイフレムから距離をおいて着地した。セイフレムが着地した時には美しい緑色の鱗や甲殻が赤い血に染まっていた。

「けむり玉…。まさかここで役に立つとは思わなかったなぁ…」

チヅルはひとり呟くと、ゆっくり立ち上がった。

「まだ…負けてないよ！」

チヅルは竜の瞳でセイフレムを見据えると「封龍剣・超絶一門」を構えた。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　10

「やあああああああああっ！！！」
チヅルは鬼人化するとセイフレムに向かって駆け出した。
（すごい…！これが竜人の能力なの…！？）
チヅルは周囲の時間がゆっくり流れているように感じていた。セイフレムの動きはもちろん、自分が踏みしめた大地から飛び出した砂のひと粒ひと粒までが鮮明に認識できる。チヅルはセイフレムが追いつけない程の速さで攻撃を始めた。
（身体が…軽い…）
双剣の奥義である鬼人化とチヅルの竜人としての能力が、チヅルの力を極限にまで高めていた。

「くっ…！」
セイフレムは思わず歯軋りした。今のチヅルにこちらの攻撃を当てることは無理だろう。だがセイフレムも数多のハンターとの戦いで培ってきた経験と知識と勘がある。そのなかで両手に剣を持つタイプのハンターの弱点もセイフレムは知っていた。
（今は急所に攻撃されないように身を固めるしかないわね…）
セイフレムはそう思うとチヅルの攻撃から急所である頭部と胸部を守るように立ち回った。

（動きが変わった…？）
チヅルもセイフレムの動きが変わったことに気がついた。しかしそれはこちらの猛攻撃を耐抜くための防御姿勢だと思い、もう一息だとチヅルはさらに攻撃の手を強めた。双剣と自分が繋がっているかのような感覚に、チヅルは一種の快感を感じていた。――そのせいか、チヅルは双剣使いが起こす代表的なミスを犯してしまっていた。それは即ち、鬼人化の多用に対するスタミナ切れである。

「あ…っ！」
急に視界が狭くなった。あんなに軽かった身体が一気に重くなり、呼吸が途切れる。
（そんな…！竜の力を開放していれば大丈夫のはずなのに…！）
ここでチヅルは竜の力を以てすれば永久的に鬼人化し続けることができるという考えは間違っていることを理解した。チヅルは己の竜の力を過信しすぎたのだ。そしてセイフレムはチヅルが自ら生んだ大きな隙を逃すわけもなく、数歩後退るとリオレイアの持つ必殺技、サマーソルトの体勢に入った。セイフレムは飛び上がる瞬間にチヅルの絶望した顔が視界に入ったが、気持ちを押し殺して宙返りした。
――――尻尾に、確かにチヅルの体重を感じた。

セイフレムの尻尾はチヅルの腹に直撃した。
「――――ッ！！！」
チヅルは声も出さずに放物線を描いて吹き飛び、受身も取らずに地面に叩きつけられた。衝撃でガルルガヘルムがチヅルの頭から外れ、地面を転がった。
「…」
セイフレムは黙って動かないチヅルを見つめ続けた。そして声をかけようと口を開こうとしたその時、チヅルがゆっくりと上半身を起こし始めた。
「うっ…くっ…あぁ…っ！」
悲痛なうめき声が巣穴に響く。チヅルは起こした上半身を両腕で支えていた。肩で呼吸し、瞳は未だに竜のそれであったが覇気がなかった。
「ぐっ…やっぱり、強いなぁ…あなたは…」
チヅルは途切れ途切れに言葉を発した。
「でも…でもね…。くっ…！私にも…まだ死ねない…理由があるの…」
チヅルの言葉を、セイフレムは黙って聞いている。

「私の帰りを待ってる…みんながいる…。だから…！」
チヅルはここまで言うと、立ち上がろうとして四つん這いになった。しかし下半身の力が抜けてしまい、正座する形になってしまう。
「だから…私はあなたを倒して…みんなの…ところに――――ッ！？」
突然、チヅルの口から真っ赤な血液が飛び出した。
「え…？」
チヅルは自分の血で汚れた大地を見つめた後、ゆっくりと視線を自分の身体へと向けた。そして――――。
「あ…う…嘘…！」
チヅルは自分の脇腹に刺さっている、自分の腕くらいの太さのものを見つけた。それはリオレイアの尻尾に生えている棘で、それはチヅルのガルルガメイルを貫いて背中から飛び出ていた。チヅルの身体を貫通しているのである。
「あ…あぁ…うッ！？」
チヅルはこみ上げる吐き気に慌てて口元を両手で塞いだ。
「がはッ！！！」
チヅルは再び大量の血を吐いた。指の隙間から噴き出した血液は放射状に飛び散り、辺り一面に赤い花を咲かせた。
「はあっ…はあっ…でも…でもね…」
チヅルの言葉は続いた。
「それでも…私は…みんなのところに…帰るの…！帰るのよ…！」
チヅルは隣に転がっていた「封龍剣・超絶一門」を手に取った。
（すごい…！）
セイフレムはチヅルの状況を見て、本能的に危険を感じた。
（竜人の体力は底なしなの…！？）
セイフレムは一気に決着を着けることを決めた。チヅルが立ち上がる前に、トドメを刺すのだ。セイフレムはチヅル目掛けて走り出した。そして蹴り飛ばす直前に、セイフレムはチヅルの顔を見てしまった。チヅルは――――全てを悟ったような、穏やかな笑顔を浮かべていた。

「…！」

セイフレムが「しまった」と思った時にはチヅルを蹴り飛ばしていた。チヅルは双剣をその場に残し、自身は何度も地面に身体を打ちつけながら隣のエリアのひとつ、高い崖があるエリア６番の出口まで転がっていった。そして崖の手前で止まったかと思いセイフレムがチヅルのもとへ近づいたが、あと五、六歩というところでチヅルは崖の下へ姿を消した。

「…」

セイフレムは黙って目を閉じ、チヅルが崖下に落ちる音に耳を澄ませた。しかし、その音はなかなか聞こえてこない。不思議に思ったセイフレムはチヅルが落ちた場所まで歩みを進めて崖下を覗いて目を見開いた。チヅルは右手だけで崖の淵に掴まっていた。宙吊りのチヅルはセイフレムの顔を覗いて笑顔で言った。

――――あ、り、が、と、う。

チヅルは笑顔を作ると、崖下へと落ちていった。

（ごめんね…みんな…）

落下する間に、チヅルはパーティメンバーのことを思い浮かべた。

（ごめんね…クレハちゃん…）

最後まで気にかけてくれたクレハに、申し訳ない。

（ごめんね…ジュンキ…）
結局、最後まで思いを伝えることはできなかった。
（父さん…母さん…今、会いに――）

――ゴシャッ！！！

チヅルは背中から崖下の地面に叩きつけられた。衝撃で身体が反り返り、再び宙に浮く。全身の骨が砕け散り、チヅルの身体を守ってくれていたガルルガシリーズの防具も粉々に四散した。
「ゴハッ！！！」
チヅルの口から真っ赤な血液が大量に飛び出す。――これでも、チヅルはまだ死ななかった。チヅルは竜人の強靭な生命力と精神力をこの時ばかりは恨んだ。
「う…ッ！うあぁ…ッ！！！」
全身を襲う、まるで火炙りにでもされているかのような灼熱の激痛に、チヅルはうめき声を上げるしかなかった。しかし次の瞬間にはチヅルはまだ生きていたことを喜ぶことになる。
「チヅル！」
隣のエリアから走ってくる人影に、チヅルは出来る限りの笑顔を浮かべた。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　11

ジュンキはエリア6番に入った瞬間に、チヅルが空から落ちてきたところを見つけてしまった。地面に叩きつけられるチヅルを見て、ジュンキはチヅルの名前を呼んでチヅルに駆け寄った。

「チヅル！」

ジュンキはチヅルの側に座るとチヅルを抱き上げた。

「今手当てをしてやるからな！」

「ジュンキ…あ…」

チヅルは骨が砕けている痛みを堪えてそっと両手を脇腹に刺さっているセイフレムの棘に手を伸ばした。

「チヅル…？」

ジュンキが心配する中で、チヅルはその棘を引き抜こうとした。途端に全身の力が抜けるくらいに激痛が走る。

「うあぁッ！！！」

「駄目だチヅル！それを抜いたら出血が…！」

止めようとしたジュンキの右手を、チヅルは必死に掴んだ。

「やだ…最後にこんな…姿を見せる…なんて…」

「…！」

手当てをすると言っても、ジュンキは分かっていた。チヅルはもう助からない。それはチヅル自身も分かっているようで、最後の瞬間に身体に棘が刺さっているのはどうしても嫌なのだろう。

「…分かった」

ジュンキはチヅルの代わりにリオレイアの棘を両手で掴んだ。

「うッ！」

チヅルがうめき声を上げる。

「…抜くぞ？」

ジュンキの問い掛けに、チヅルは頷いた。ジュンキはリオレイアの棘を一気に引き抜いた。

「あああああああああッ！！！！！」
チヅルが絶叫し、身体を限界まで反らし、そして再びぐったりとジュンキの膝の上に崩れた。リオレイアの棘が刺さっていた場所からはチヅルの真っ赤な血液がドクドクと流れ出し、ジュンキはチヅルの腹と背を両手で押さえた。
「チヅル！？」
「はあっ…はあっ…だい…じょう…ぶ…」
「くっ…！」
ジュンキは必死にチヅルの傷口を抑えるが、チヅルの命の液体はどんどん流れ出ていく。
「ジュン…キ…」
「喋るな！」
「聞いて…」
チヅルが必死に、でも穏やかな表情で言ったので、ジュンキはチヅルの口元に耳を寄せた。
「私…ジュンキのこと…好き…だったよ…」
「え…？」
ジュンキはチヅルの言った言葉に驚きの表情を隠さなかった。チヅルはそれにいたずらっぽい笑みを浮かべる。
「やっと…言えた…」
「…っ」
ジュンキはチヅルを見ていられず、目を固く閉じてしまう。そんなジュンキを見て、チヅルは言葉を続けた。
「でもね…ジュンキには…私なんかより…もっと似合う人が…いるはずだよ…」
チヅルの言葉が続き、ジュンキは再び目を開いてチヅルの顔を見た。
「あんまり…私に…こだわったら…駄目だからね…？」
「…」
「ジュンキは…ジュンキの好きな人と…幸せになってね…」
「…」

ジュンキの青い瞳から涙がこぼれ落ち、チヅルの頬に落ちた。
「最後に…ジュンキが好きかどうかは…分からないけど…」

「クレハちゃんを…よろしく…ね……」

チヅルの目が静かに閉じ、全身の力が抜けた。
「チヅル…？」
ジュンキは心配になり、チヅルの名前を呼ぶ。しかし、チヅルは目を開かない。
「チヅル…嘘だろ…？嘘だと言ってくれ…！」
ジュンキはチヅルの身体を揺するが、チヅルは反応しない。
「チヅル…！チヅ――」
ここでジュンキはチヅルのリオレイアの棘が刺さっていた脇腹と背中からの出血が止まっていることに気がついた。止血できたわけではない。チヅルの身体を流れる血液が無くなったのだ。

――チヅルが、死んだ…？

「くっ…うぁ…あああ…っ！チヅルーーーーーッ！！！！！」
ジュンキは夜空に向かって絶叫した。
「どうして一人で行った！？どうして相談しなかった！？どうして…どうして一人で戦った！！！」
返事をしないチヅルの亡骸に、ジュンキは叫び続けた。
「目を…目を開けてくれよチヅル…！ああっ…！うあああああああああッ！！！！！」
他に誰もいない森と丘フィールドのエリア６番で、ジュンキはチヅルの亡骸と共に声が枯れるまで泣き叫び続けた。

どれくらいの時間が経っただろうか。飛竜の羽ばたく音が聞こえてきて、それがどんどん大きくなって、やがてジュンキの背後に降り立った。
「死んでしまったのね、チヅルちゃん…」
ジュンキは今までに聞いたことのない声だった。恐らくセイフレムという名のリオレイアの声なのだろう。
「…あなたも竜人ね。完全な。…もしかしてチヅルちゃんのお仲間さん？」
セイフレムに話し掛けられても、ジュンキはチヅルの亡骸を抱きしめながら動かない。セイフレムは話を続けた。
「これからどうするの？…私を殺す？」
セイフレムの言葉を聞き終えると、ジュンキはチヅルをそっと寝かせてゆっくり立ち上がった。セイフレムに背を向けたまま、ピクリとも動かない。
「…？」
セイフレムが声を掛けようとしたその時、ジュンキは背中の太刀「

ラスティクレイモア」を右手で抜いた。
「うあああああ！！！」
ジュンキはセイフレムを振り向くと「ラスティクレイモア」を構えて斬りかかった。それをセイフレムは避けようとせず、静かに目を閉じた。

（完全なる竜人に、私では勝てない。ましてやチヅルちゃんとの戦いの後では…）
セイフレムは静かにチヅルの仲間に殺される時を待った。しかし首筋に鋭い殺気を感じたものの、その時は訪れなかった。そして武器がしまわれる音と、立ち去る足音。
「どうして…」
セイフレムは目を開き、チヅルの仲間のハンターを見据えた。
「どうして殺さないの？私はあなたの大切な仲間を殺したのよ？」
チヅルの仲間のハンターは無言でチヅルの側まで近寄ると片膝立ちになった。
「チヅルは…きっとお前を殺して欲しくないと思ってる」
「それでも私は…！」
「それに、お前はたった今俺に殺された。一度死んだ奴をもう一度殺す道理はない」
チヅルの仲間のハンターはそう言うとチヅルをそっと持ち上げた。
「チヅルは連れて帰る。じゃあな…」
チヅルの仲間のハンターはそう言うと、この場所を立ち去っていった。残されたセイフレムは一人、夜が明けそうな空を見上げて泣いた。
「チヅルちゃん…あなたは素敵な仲間を持っていたのね…」
セイフレムの目からこぼれ落ちた涙は成分が空気中で固まり、竜のなみだとなって大地に転がった。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　12

ジュンキはショウヘイ達が待っているだろうココット村へ帰る途中、チヅルの顔を覗いた。チヅルの顔は血に塗れていたが、穏やかな表情を浮かべていた。

「…最後にこうして二人きりで歩いたのはいつだったかな」

ジュンキはチヅルに話し掛けるが、チヅルは返事を返さなかった。

「ジュンキー！」

突然前から元気な声が聞こえてきたので顔を上げると、前から小さなリオレイア――に見えるレイアシリーズ防具を装備したクレハが右手を振ってこちらに向かって歩いてきていた。

「チヅルちゃん見つかったんだねー！」

クレハがだんだん近づいてくる中、突然月が雲に隠れてしまった。辺り一面真っ暗になってしまい、クレハの姿も黒一色のシルエットに近くなってしまう。そしてクレハはジュンキの前に立った。

「あ～、チヅルちゃんお姫様抱っこされてる。リオレイアとの戦いに疲れちゃったのかな？」

「クレハ…」

「ま、チヅルちゃんも無事だったみたいだし、早く村に戻ろう？ショウヘイ達が待ってるよ」

クレハはそう言うとジュンキに背を向けて歩き出そうとした。慌ててジュンキがクレハを呼び止める。

「クレハ、その…」

「ん？」

クレハがジュンキを振り向くのと、月にかかっていた雲が晴れたのは同時だった。

「――ッ！？」

クレハの青い瞳が見開き、両手で口元を押さえた。

「そんな…！チヅルちゃん…生きてるよね？ただ疲れて…眠ってる

だけだよね！？ジュンキ！？」
クレハの言葉に、ジュンキは黙って首を横に振った。クレハはジュンキの答えに数歩後ずさるとその場に崩れ落ちた。
「そんな…チヅルちゃん…」
「…クレハ。チヅルのことを、村のみんなに話してきてほしいんだ」
「…うん」
クレハはゆっくり立ち上がると、チヅルの姿を見たくないと言わんばかりにココット村の方へと走っていった。
「…行こうか、チヅル」
クレハの姿が見えなくなってから、ジュンキはゆっくりとココット村に向かって歩き出した。東の空が、徐々に明るくなり始めていた。

東の空の大部分が明るくなってきた頃にココット村に着くと、ショウヘイ達はもちろん、村長や村人達も朝早くなのにジュンキとチヅルを迎え入れてくれた。ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ、カズキ、そして村の男達はチヅルのための墓穴を村の共同墓地の隣にあるハンター専用の墓地に掘り、保管されている墓石を運び出した。クレハと村の女達はチヅルの身体を綺麗に洗った。そしてチヅルはボロボロになったガルルガシリーズの防具を着せられ、棺桶には入れずに墓穴へそのまま寝かされた。ハンターは自然と生きる存在のため、死亡しかつ遺体がある場合は棺桶などには入れずに生身のままで装備を身につけたまま葬られるのが普通なのだ。だがチヅルの双剣だけは見当たらなかった。ジュンキ達、村長、村人の順でココット村の花である桜の花を一輪ずつチヅルの寝かされた墓穴に入れると、ジュンキとショウヘイの手によってチヅルは埋葬された。村長や村人達が一人、また一人と家路に着いた頃には日が登り始めていた。

全員がチヅルの墓の前から立ち去っても、ジュンキは墓石の前に立っていた。風が吹き落ち葉が舞っても、ジュンキは微動だにしない。
「…ジュンキ」

背後から声を掛けられて、ジュンキはゆっくりと振り向いた。そこにはまだレイアヘルム以外の装備を解いていないクレハの姿があった。

「まだ…ここにいたんだね…」

「…どうしても、離れられなくてな」

ジュンキの言葉に、クレハは少し俯いてしまった。

「…ねえ、ジュンキ。気づいてた?チヅルちゃん、ジュンキのことが好きだったんだよ…?」

「…聞いたよ。チヅルが死ぬ直前に言ってくれた」

「え…」

ジュンキの言葉を聞いてクレハは顔を上げ、小さな、でも元気のない笑みを浮かべた。

「そっか…。チヅルちゃん、最後に言えたんだ…」

「ああ。でも…」

「…?」

「チヅルは、私にこだわるなって…。俺が好きになった人と幸せになれってさ…」

ジュンキの言葉を聞いて、クレハは再び元気のない笑みを浮かべた。

「そう…。チヅルちゃんらしいね。そんなこと言うなんて」

クレハはそこまで言うと真っ直ぐにジュンキを見つめて笑った。

「さ、元気出していこう?チヅルちゃんはいつまでも落ち込んでいるジュンキを好きじゃないと思うけど?」

「…そうだな」

ジュンキは歩き出そうとしてあることを思い出し、既にココット村の方へ歩き出しているクレハの背中に向かって声を掛けた。

「クレハ」

「なに?」

クレハは立ち止まり、ジュンキを振り返った。

「チヅルから…お願いされたんだ。その…」

「…?」

「クレハを…よろしくって…」
「え…？」
ジュンキの言葉を聞いて、クレハは驚きの表情を浮かべた後に顔が見えないくらいまで俯いた。
「…ばか。チヅルちゃんは…ばかだよ。ほんと…」
クレハの口から漏れる言葉を、ジュンキは黙って聞いている。
「どうして…もっと自分に自信を持たないのよ…！それじゃあ告白したって同じじゃない…！」
「…クレハ？」
クレハの顎から地面に涙が流れ落ちたのに気がついて、ジュンキは声を掛けた。クレハは涙を拭うと無理に笑顔を作って口を開いた。
「駄目だよね、私…。チヅルちゃんの分も笑って、しっかり生きていこうって決めたのに…」
「クレハ…」
「なに…？」
「泣いても…いいんだよ？泣きたい時は、いっぱい泣いて…」
ジュンキの言葉を聞いて、クレハの青い瞳から再び涙が流れ出した。クレハは涙を堪えようと瞼をきつく閉じたが涙は流れ続け、そのままジュンキの胸元に飛びつき、泣いた。
「どうして…！どうしてチヅルちゃんは死ななきゃいけなかったの…！？ねえ、どうして…！？」
自身の胸元ですすり泣くクレハを、ジュンキはそっと抱きしめた。するとクレハはさらに大きな声を上げて泣き出し、ジュンキはクレハが泣き止むまで抱きしめ続けた。
クレハは泣き止んでからもしばらくの間ずっとジュンキに抱きついていたが、やがて静かにジュンキの胸元を離れた。
「ごめんね…。もう大丈夫だから…」
クレハはそこまで言うと、いつものように笑顔を浮かべた。
「さ、行こう。みんなが待ってるし」

「…そうだな」
ジュンキは穏やかな笑みを浮かべて返事を返すと、クレハと並んでココット村へと戻っていった。

MH2nd　第2章　チヅルの戦い　13

共同墓地から戻ると、ショウヘイ達は村の集会場に集まっていた。
ジュンキとクレハが並んで席に着くとショウヘイが口を開いた。
「…これからのことだが」
ショウヘイの声を聞いてジュンキ、ユウキ、カズキ、クレハが顔を上げてショウヘイの方を向いた。ショウヘイはそれを確認してから言葉を続けた。
「ドンドルマの街には戻れないだろうと思う」
「そうだな…王国軍が見張っているかもしれないからな」
ショウヘイに続いてユウキが言った言葉に、ジュンキ、カズキ、クレハは黙って頷いた。
「…ミナガルデの街もだろうな」
ジュンキの独り言のような意見を最後に沈黙がテーブルを覆った。
「この村を拠点にしたらどうだ？」
「…恐らくすぐに嗅ぎつけられてしまうと思う。この村はミナガルデの街から近いから」
カズキの意見をジュンキは否定した。それはショウヘイ、ユウキ、クレハも同じのようで、カズキはため息を吐きながら乗り出した身体を引いた。
「…ねえ」
クレハが声を上げたので、他の四人の視線がクレハに集中した。
「ジュンキが竜の力を制御するために身を隠した場所じゃ駄目かな？」
「ポッケ村…」
「ポッケ村…？聞いたことのない村だな」
ジュンキの口から漏れた言葉を、ショウヘイは聞き逃さなかった。
「このシュレイド大陸最北端の村だ。確かにあの村ならハンターを続けながら身を隠すことはできるかも…」

「…決まりだな」
カズキがそう言って立ち上がろうとしたが、ジュンキが右手を伸ばして静止した。
「あの村に行くにはドンドルマの街を経由する必要がある。しかも三日に一便しかない」
「その間に王国軍に見つかったら終わりか…」
ショウヘイの言葉を最後に再び沈黙がテーブルを包んだ。
「…ひとつだけ、考えがないこともないけど」
「…？」
ジュンキの出した考えは他の四人をとても驚かせた。

午後になると、ジュンキは一人で森と丘を訪れていた。目的はザラムレッドに会うためである。そのザラムレッドは小高い丘の上で再会することができた。
「久しぶりだな」
「ああ。この前は運んでくれてありがとう」
「礼には及ばん。今日はどうした？」
「実はな…」
ジュンキはザラムレッドに現在人間のある組織に追われていること、再びポッケ村まで運んで欲しいこと、そしてチヅルが死んでしまったことを説明した。
「…なるほど。人間を五人運ぶことに関しては問題ない。大人のアプトノスの重さは人間五人よりも重いからな。気にかかるのはおヌシ達が人間達から追われていることだ。心当たりはあるか？」
「いや、無い。相手が勝手にやってきて俺達を連れ去ろうとするんだ」
「だから身を隠すのか。確かにあの村なら大丈夫だろう。しかし…」
「どうした？」
ここでザラムレッドが言葉を濁したので、ジュンキは尋ね返した。
「竜人チヅルの件は残念だったな…」

「ああ…。でも、チヅルはハンターとして死んだんだ。きっと、満足してたはずさ…」
「我が妻に変わって謝ろう」
「もういいってば…――――え？」
ジュンキは耳を疑った。ザラムレッドは今「妻」と言わなかっただろうか？
「ザラムレッド…」
「何だ？」
「今、妻って言わなかったか？」
「…まだ言ってなかったか。彼女、セイフレムは我が妻だ」
「…！」
ザラムレッドの言葉にジュンキは青色の瞳を見開いて驚いた。
「お前…結婚してたのか…！」
「…ああ」
ザラムレッドは照れているのか顔をジュンキから背けて小さな声で答えた。

「あら…」
突然声が上から聞こえてきたのでジュンキは空を見上げると、そこには先程出会い、チヅルを殺し、ジュンキ自身の手で殺されそうになったリオレイア――――セイフレムの姿があった。セイフレムはザラムレッドの隣に着地するとジュンキと目が合うのを恐れてか顔を背けた。
「…もういいからさ。こっちを向いてくれよ」
ジュンキの言葉を聞いて、セイフレムはゆっくりとジュンキの方を向いた。
「どうした？今はジュンキに会うのがつらいと言っていたではないか？」
ザラムレッドの声を聞いて、セイフレムはようやく口を開いた。
「生まれたわよ、あなた…」

「そうか…！」
「う、生まれた…！？」
セイフレムの言葉にザラムレッドは嬉しそうに驚き、ジュンキは大声を上げて驚いたが、飛竜は卵生であることを思い出して納得した。つまりザラムレッドとセイフレムの雛が孵ったということだ。
「ヌシも見ていくか？」
「い、いいのか？俺はハンターなんだぞ？」
「ハンターは幼い竜は狩らないと聞いたことがあるが？」
ザラムレッドはそこまで言うと右脚を差し伸ばして乗れと言った。
そしてジュンキは久々に空を飛んだ。

ザラムレッドとセイフレムの巣に入ると元気な雛の声が聞こえてきた。ジュンキは近づいてもいいのかと右手の指だけでザラムレッドとセイフレムに尋ねると二人は頷いたので、ジュンキは二人の巣に近づいた。後ろからザラムレッドとセイフレムも続く。
「…！」
「ピィー！ピィー！ピグゥ！」
雛は雄が二匹に雌が二匹だった。四匹は元気に鳴き声をあげ、ジュンキに向かって小さな嘴をパクパクさせている。
「新しい命の誕生か…」
「ヌシよ」
ジュンキが感傷に浸っていると、ザラムレッドが声を掛けてきた。
「いつ頃出発するのだ？」
「ああ、今日この後を予定していたんだけど…」
ジュンキが申し訳なさそうにセイフレムを見つめると、セイフレムは静かに頷いた。
「いってらっしゃい、あなた」
「…すぐ戻るからな」
ザラムレッドとセイフレムは向かい合うと、お互いの頬を摺り合わせた。そしてザラムレッドはジュンキを右脚に乗せるとココット村

へと向かい空を飛んだ。

ココット村の姿が見えてから、ザラムレッドが声を上げた。
「どこに降りるのだ？村の中では人間達が混乱するだろう？」
「俺もできれば村のみんなにはお前と…竜と一緒にいるところを見られたくない。説明が面倒だからな。だけど仕方ないよ。どう見てもお前の姿を隠せるような場所がない」
ザラムレッドはジュンキにそう言われて確かにそうだと思った。山々の中の開けた平原のほぼ中央にあの村はある。村の周囲には数本の樹が生えているくらいで、２０メートルを超すザラムレッドの身体を隠す場所がない。
「確かにそうだが…いいのか？」
「仕方ないよ。だからこの前の街の時みたいにさ――――」
「…分かった」
ザラムレッドは溜め息混じりで答えると高度を落とし始めた。村が近づくにつれて村人達の姿も肉眼で確認できるようになってきたが、同時に村の警鐘も聞こえてきた。
「警戒されているな」
「…」
村人達が慌てふためき、微かに悲鳴も聞こえてくる。それでもジュンキとザラムレッドは村に接近し、ついに村の広場に降り立った。そこでは村に残っていた数人のハンター達がそれぞれの武器を構え、ザラムレッドを見据えていた。しかしザラムレッドの右足の上からジュンキが降りると、村のハンター達は目を丸くして驚きの表情を浮かべた。
「よーし、ありがとう」
ジュンキはできるだけ自然に大きな声でそう言うと、ザラムレッドの頭を抱いて撫でた。ザラムレッドの目は決して笑っていなかったが…。
「ジュンキよ…」

背後から名前を呼ばれてジュンキは振り向いた。そこには村長を中心にショウヘイ、ユウキ、カズキ、クレハの姿があった。４人は呆れだったり笑っていたりと様々な表情を浮かべているが、村長の表情は恐怖だった。当たり前だ。天空の王者と称されて人々から畏れられているリオレウスが村の中へ入っていきたのだから。村長が言葉を続ける。

「ヌシは…どうして…リオレウスと…？」

「村長」

ジュンキは動揺している村長や、遠巻きに見つめている村人達を安心させようと笑顔を作ってから口を開いた。

「このリオレウスは俺の友達だよ。な？」

ジュンキはそう言ってザラムレッドを振り向いた。しかしザラムレッドと目が合った瞬間、ザラムレッドは大きな欠伸をしてその場で身体を倒して眠ってしまった。ザラムレッドが演技をしてくれているのだろうと勝手に解釈し、ジュンキは村長に向き直る。

「そ、そうか…。しかし、リオレウスと仲良くなるハンターなんぞ前代未聞じゃわい。ギルドが動かなければよいがの…」

「大丈夫です。ギルド公認ですから」

ジュンキは苦笑いしながら答えた。もちろん正式に認められている訳ではない。しかし前に一度ザラムレッドがドンドルマの街に乗り込んできた事があり、その際に街のハンターやハンターズギルドのユーリにも見られている。それで何も起きていないのだから認めてくれているのだろう。承認ではなく、黙認だろうが。

「や、やめなさいっ！」

ザラムレッドの方から悲鳴が聞こえたのでジュンキは振り向いた。そこにはザラムレッドの尻尾を撫でる村の子供と、遠くで顔を真っ青にしている女性がいた。あの子供の母親だろう。ザラムレッドはどう反応するだろうとジュンキは内心ヒヤリとしたが、ザラムレッドは触られた尻尾を村の子供から遠ざけただけだった。しかし村の子供はそれが面白かったのかザラムレッドの尻尾を追いかけて思い

っ切り抱きついてみせた。
「っ…」
ジュンキもこれはマズイかもと思ったが、ザラムレッドは尻尾だけを動かして村の子供を持ち上げ、自身の背中に乗せた。
「あはは…」
ジュンキは引きつった笑みしか浮かべられなかった。

「では村長、またしばらく村を離れます」
「うむ。気をつけてな」
ジュンキが村長に挨拶を済ませると、既に準備を終えているショウヘイ達がザラムレッドの背中や脚の上に乗り、ジュンキ達は大陸最北端の村であるポッケ村へ向けてココット村を後にした。

MH2nd　エピローグ

ザラムレッドに乗った人数が多かったせいか時間はかかってしまったが、ジュンキ達五人は無事にポッケ村に着くことができた。もちろん村の中にザラムレッドを連れて入る訳にはいかないので村の外でジュンキ達はザラムレッドから降りた。

「ありがとう、ザラムレッド」

「また何かあったらヌシを尋ねるだろう」

「分かった。待ってる」

「また会おう」

ザラムレッドはそう言うと大きな翼を広げ、南へ向けて飛び去った。

「よおーし！行くか！」

「新生活の始まりだー！」

ユウキとカズキが元気にポッケ村の入り口の門をくぐっていった。

「ここなら安心だな」

「知り合いのハンターもいるから、後から紹介するよ」

ショウヘイとジュンキもこれからのことを話しながらポッケ村へと入った。しかしクレハはポッケ村と外界の境目で立ち止まり、雪雲で曇っている空を見上げた。

――チヅルちゃん。

――私、チヅルちゃんの分も頑張って生きていくよ。

――私、チヅルちゃんの分も笑うよ。

――私、チヅルちゃんの分もご飯食べるよ。

――私、チヅルちゃんの分も…恋をするよ。

クレハはここまで思って一人恥ずかしそうに笑った。

――――あのね、チヅルちゃん。チヅルちゃんが言ったこと、本当のことになっちゃった。

――――私ね、ジュンキのこと、どうやら…。

「クレハ？」

「…！」

突然声を掛けられてクレハは我に返った。前を見るとジュンキが一人立っていた。

「…行くぞ？」

「うん！」

クレハは笑顔で答えるとジュンキと並んでポッケ村へと足を踏み入れた。

ＭＨ２ｎｄ　エピローグ（後書き）

こんにちは、秋夜空です。
今回はＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　２ｎｄ　Ｓｔｏｒｙを最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました。

最後まで読んで頂いた読者のみなさんはもうお分かりだと思いますが、メインキャラクターの一人であるチヅルが死亡しました。
チヅルファンのみなさんには残念な結末となってしまい、申し訳ないです。
しかし、チヅルが死亡することはこの物語を考え始めた５年も前に決まっていたことなのです。
ここでチヅルが生きていると後の話に矛盾が発生してしまいます。
私個人としてはチヅルには生き残って欲しかったのですが、ここは心を鬼にして５年前の設定をそのまま使用しました。
読者のみなさん、どうかこんな作者をお許しください。

ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　２ｎｄ　Ｓｔｏｒｙはチヅルが死亡し、ジュンキ達がシュレイド王国軍から逃げる形で物語を終えています。
そしてある一人のハンターがポッケ村に現れるところから、ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　３ｒｄ　Ｓｔｏｒｙが始まります。
ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ　３ｒｄ　Ｓｔｏｒｙでは、ジュンキ達が竜人として目覚めた原因ともいえる世界の均衡が崩壊する原因が登場し、それを中心としたお話になります。

どうかお楽しみに。作者的には３日に一度の更新はなかなかハードなものなのですが、読者のみなさんのアクセス数を糧に、頑張っていきます。もしかしたら力尽きて、途中から週一更新に戻るかもし

れませんが・・・。

さて、ここからはお礼のコーナーです。
この小説を書き直すにあたって詳細な設定を一緒に考えてくれた古い友人であるT君にありがとう。とても感謝しています。
そしてここまで読んで下さった読者のみなさん、どうかこれからも応援よろしくお願いします。

２０１１．０６．２２　自宅にて　秋夜空

ＭＨ２ｎｄ　外章　少女と竜人　０１（前書き）

こんにちは、秋夜空です。
今回も外章をひとつ載せることにしました。
このお話はジュンキ達のその後と、本編にちょっとだけ出てきた少女ハンターのお話です。
後日談的な話なので、クオリティは少々低いかもしれませんが・・・。

MH2nd　外章　少女と竜人　01

「こんにちは」
よく晴れたポッケ村の昼下がり、リサは夕食の食材を村唯一の雑貨屋へ買いに来ていた。
「今夜は何を作ろうかな…」
リサは様々な食材を手に取り、見比べて考える。悩んだ挙げ句に野菜鍋にでもしようと山菜をいくつか購入して、リサは店を後にした。
「よお、リサちゃん！狩猟笛のメンテナンスが終わったよ！後で取りに来てくれ！」
「はーい！」
帰り道で鍛冶屋に呼びかけられ、リサは大きくはないがよく通る声で返事を返した。リサはハンターだ。武器のメンテナンスは大切である。
「荷物を置いたら取りに行きます！」
「あいよー！」
リサは鍛冶屋にそう伝えると、急ぎ足で自宅へ戻った。玄関の扉を背中で押して開けて家の中に入り、買ってきた山菜を机の上に乱雑に置くとすぐに鍛冶屋へと向かう。
「あれ…？」
家の前の通りに出たところで、リサは右手側から近づいてくる見覚えのある人影を見て立ち止まった。向こうも気づいたようで、リサに向かって右手を上げた。忘れるわけがない。つい最近までこの村に滞在していたハンター。
「ジュンキさん…？」
こちらに近づいてくるハンターは5人。それぞれが装備している防具はリオレウス、リオレイア…これは女性だ。そして見た目はリオレウスのそれと同じだが真っ黒な防具、ディアブロス、フルフル。かなりの手練だ。

「やあ、久しぶり」
リオレウス装備のハンターはそう言うとレウスヘルムを外した。やっぱりジュンキさんだ、とリサは笑みをこぼした。ジュンキはリサの手前で歩みを止めた。
「お久しぶりです、ジュンキさん。早かったですね」
「いろいろと事情があってね。仲間を全員連れて来たよ」
ジュンキはそう言うとリサの前から半歩下がり、リサの知らない４人のハンターを紹介した。
「初めまして、クレハです」
「ショウヘイだ。よろしく頼む」
「ユウキだ。よろしくな」
「俺はカズキだ。よろしく」
「私はリサです。よろしくお願いします」
リサは自己紹介を終えると、ひとりひとり握手を交わした。
「リサ、村長はいるかい？」
「はい、いつもの焚き火の前にいらっしゃるかと。案内しますか？」
「お願いするよ」
リサを先頭に、ジュンキ達６人は歩き出した。
「この村には小さいですが温泉が湧き出しているんですよ」
「へえ～！」
リサの紹介に、クレハは青色の瞳を輝かせた。
「ジュンキさんはもう入られましたよね？」
「ああ、何度も入ったよ」
他愛のない会話を続けながら、６人は村長のもとへと歩みを進めた。
そしてこのポッケ村の村長は笑顔でジュンキ達を迎えてくれた。
「おやおや、ジュンキ殿。元気そうで何より」
「村長も相変わらず」
「ふぉっふぉっふぉっ…。今日はお仲間さんを連れて、観光ですかな？」
「…村長、これを」

村長の言葉ひとつでジュンキ達5人の空気が重くなったのを、リサは感じとった。一体この短い間に、何があったのだろうかとリサは心配する。ジュンキはアイテムポーチから一通の封筒を取り出すと、村長に差し出した。村長はそれを受け取ると丁寧に封を切り、中の羊皮紙を読んだ。そして一言「大変だったねぇ…」と言うと封筒に先程取り出した羊皮紙を戻し、封筒ごとジュンキに返した。

「私は構わないよ。住むところは以前使っていた空き家を使っておくれ。一人では広いが、5人では狭いかもしれんの」

村長の言葉を聞いて、リサは驚いた。

「えっ、ジュンキさん、またこの村に留まるんですか？」

「ああ。またよろしく頼む」

「それは、私も嬉しいですけど…。一体何があったんですか？」

「…リサにも説明したい。集会場で話そう？」

「ええ…」

リサは寂しそうなジュンキの横顔に、ただ頷くことしかできなかった。

集会場に入ると、リサやジュンキ達5人はテーブルを囲むように座った。沈黙の後に、ジュンキは口を開いた。

ジュンキの口から話されたことはリサをとても驚かせた。シュレイド王国軍に追われていること。仲間の一人が亡くなったこと。そして何よりリサを驚かせたのは――。

「竜人…ですか？」

「聞いたことは？」

「無いです。竜人族ならあるのですが…」

竜人族――それは人間と共存している種族の名前だが、竜人は根本的に違う、とジュンキやショウヘイ、クレハはリサに説明した。

「ジュンキさん、ショウヘイさん、クレハさんは竜人で、竜と会話ができたり、人間ではあり得ない力が出る、ということですか？」

「そうなるかな」

「…」
突然そんな事を言われて混乱してしまい、リサは黙り込んでしまった。
「信じてくれっていうのは無理だと俺も思う。こんな突拍子も無い話を――」
「――いえ」
リサは明るい赤色の瞳を開くとジュンキを正面から見据えた。そして口を開く。
「確かに信じがたい話です。けど…ジュンキさんは嘘を言っていないと思います。ショウヘイさんや、クレハさん。ユウキさんに、カズキさんも」
「…ありがとう」
「これからどうするんですか？」
リサからの質問に、ジュンキはショウヘイ達に「これからどうする？」とリサからの質問を横流しした。
「今日は移動に移動を続けて疲れているから、具体的に動くのは明日からだな」
「だなぁ。あー疲れた！俺は温泉に入りたいぞー！」
ユウキとカズキの言っていることはもっともで、ジュンキ達5人は疲労困憊だった。
「では、明日になったら早速狩りに出ませんか？」
「リサは積極的だな」
ジュンキは褒めたつもりで言ったのだが、リサは苦笑いした。
「実は先日、雪山にドドブランゴが現れたのです。私ひとりではどうにもならなくて…」
「なるほど…」
ジュンキは一度頷いてからショウヘイ達の方を振り向いた。
「いいか？」
「ああ」
「うん！」

「任せろ！」
「腕が鳴るぜ！」
全員の了解を得て、ジュンキは視線をリサの方へ戻した。
「明日までにメンバーを決めておくよ」
「はい。ありがとうございます」
リサは笑顔で頷いた。

この後、リサの案内でポッケ村を周り、夜にはリサお手製の山菜鍋をご馳走になったジュンキ達だった。

MH2nd　外章　少女と竜人　02

翌日、リサは装備を整えて自宅を出た。武器はハンマーの「アイアンストライク改」防具はフルフル。
集会場の中に入ったが、まだジュンキ達は来ていなかった。受ける依頼はドドブランゴの討伐と決まっているので、リサは仲の良い受付嬢と世間話をしながらドドブブランゴの討伐依頼を受ける。リサが依頼書を受け取るとほぼ時を同じくしてジュンキ、ユウキ、カズキが集会場に入ってきた。ジュンキは太刀、ユウキはライトボウガン、カズキはランスのようだ。
「くじ引きをして決まったよ」
「はい。今日はよろしくお願いします」
リサはそう言うとジュンキ、ユウキ、カズキに頭を下げた。

「ジュンキさんは竜人なんですよね？」
今回の狩り場である雪山へ向かう途中で、リサが口を開いた。
「そうだけど？」
「具体的にどんな事象が発生するのでしょうか？」
「事象って…」
「むちゃくちゃ強くなるな」
ジュンキが右手を顎に当てて考え出すと、カズキが横から入ってきた。
「むちゃくちゃ強い、ですか…」
「カズキ、ここは具体的に。一言で言えば攻撃威力の増加かな」
「攻撃威力の増加、ですか…」
カズキの抽象的な表現を補うユウキの言葉も抽象的だった。ここでジュンキがやれやれと首を振りながら口を開いた。
「具体的に言うと、筋力が増加することかな。場合によるけど、モンスターはもちろん、太い樹の幹を両断することもできたりするよ」

「そんなことが…！」
ジュンキの言葉を聞いて、リサは明るい赤色の瞳を見開いて驚いた。
樹の幹を一刀両断。恐ろしい筋力である。
「まあ、機会があったら見せてあげるよ」
ジュンキはそう言って視線を前に戻した。ここでリサはひとつ疑問が浮かぶ。
「あの、普段の狩りから竜人として動かないんですか？その方が効率がいいと思うのですが」
リサの質問は至極全くなものだった。確かに初めから竜人として狩りに出ればあっという間に終わるだろう。だがジュンキやショウヘイ、クレハがそうしないのにはある共通の意識があった。
「確かにね。でも俺達竜人はハンターだ。人間だ竜人だ以前に、ひとりのハンターなんだよ。そしてモンスターとの戦いは命の奪い合いだ。そこで竜人として戦うのはフェアじゃないよ」
リサはジュンキの答えを聞いて衝撃を受けた。それと同時に、自分の考えがいかに愚かだったかも知った。
「…そうですね。私が浅はかでした」
「いや、いいよ。それに、まだ竜人としての力…俺達は竜の力って呼んでるけど、制御しきれないことがあるからおいそれとは使えないんだ。前回ポッケ村に来たのは、俺の中の竜の力を制御するためだったんだよ」
「そうだったんですか…」
リサが頷くのを見ると、ジュンキは顔を前に戻した。リサは次に歩行速度を落とすと、カズキとユウキの横に並んだ。
「あの、カズキさん、ユウキさん」
「カズキでいいよ」
「俺もユウキでいいから」
「はい、カズキさん、ユウキさん」
リサは笑顔で答え、ユウキとカズキは何を言っても無駄だと苦笑いした。

「で、なんだい？」
「その…」
カズキが尋ねると、急にリサは言葉を濁した。これは聞くべきなのだろうか、と。だがここまで来て聞かないわけにもいかない。
「あの、カズキさんとユウキさんは、ジュンキさんやショウヘイさん、クレハさんを、どう思ってますか？」
「どう…？」
ユウキとカズキは顔を見合わせて首を傾げたが、やがて2人は同じ答えを出した。
「仲間、かな」
「仲間、だな」
「そうではなくて、その…」
ここでユウキは、リサが何について聞きたいのかを悟った。
「…なるほど、あの3人は竜人だから、か？」
「…はい」
「そうだな。一時は驚きもしたが、今は何とも思っていないよ。竜人としての能力はちょっと羨ましいのもあるけどな…」
「あるけど、竜人としての使命を背負う責任感、俺達には無いからなぁ」
「ああ」
ユウキとカズキはお互いに頷きあった。
「使命…？」
「ああ、昨日話してなかったな。竜人は世界の均衡が崩れそうな時に目覚める存在らしいんだ」
「その世界の均衡を崩そうとしている存在は何か分からないけどな」
「そうですか…」
やはり自分は浅はかだとリサは思った。それと同時に、ジュンキ達5人の結束は強固な物であると理解したリサだった。
ベースキャンプに着くと支給品を分配し、早速狩り場へと出発した。

「失礼ですが、ドドブランゴとの戦闘経験は？」
「大丈夫。全員あるよ」
ジュンキが代表して答えると、リサは分かりましたと頷いた。山中の洞窟を抜け、雪山の中腹に出る。するとそこでユウキがあるものを見つけた。
「見ろ。モンスターの足跡だ」
そこには中型モンスターの足跡がひとつと、その周りに小型モンスターの足跡が複数あった。
「ドドブランゴだな。今日は晴れてて良かった」
カズキは空を仰ぎながら言った。今日の雪山の天候は晴れ。絶好の狩り日和である。
「足跡はまだ新しいし、この方向からすると隣のエリアだな」
ユウキはそう言うと立ち上がった。
「ユウキはモンスターの痕跡を辿るのが得意だからな」
「ガンナーだから索敵能力が高いのさ」
ジュンキに褒められても、ユウキは照れることなく微笑んで答えた。
「よーし、ドドブランゴを見失う前にさっさと行こうぜ」
カズキはそう言うと、率先して隣のエリアへと向かって歩みを進めた。

「ドドブランゴを肉眼で確認」
先頭を進むカズキの声を聞いて、リサ、ジュンキ、ユウキは歩みを止めた。
「ユウキ」
「任せろ」
ユウキはジュンキに言われる前に既に準備を終えていて、すぐにペイント弾を発射した。それはドドブランゴの背中で弾け、白い体毛が桃色に染まる。
「おし！行くぞー！」
カズキは雄叫びをあげるとランス「ブロスホーン」を構え、ドドブ

ランゴ目掛けて突進して行った。
「リサは右側を」
「はい！」
続いてジュンキとリサが飛び出す。ユウキは遠巻きからドドブランゴを狙うことになっている。
（落ち着いて、大丈夫…）
リサは自分に言い聞かせると、先行したカズキに気を取られているドドブランゴの横腹をハンマーのアイアンストライク改に自身の体重を乗せて叩きつけた。

MH2nd　外章　少女と竜人　03

ドドブランゴは突然4人のハンターに囲まれてしまい、いささか混乱しているようだった。リサがハンマーの「アイアンストライク改」で殴り、ジュンキが太刀「ラスティクレイモア」で斬りつける。油断すればカズキのランス「ブロスホーンで突かれ、一旦距離を取るとユウキに狙い撃ちされる。

「一気に叩くぞ！」

「はいっ！」

「まかせろっ！」

リサがドドブランゴの右後ろ足を殴りつけ、カズキが左肩口を刺す。ドドブランゴはカズキを殴りつけるが、カズキは強固な盾でそれを防ぎきる。その間にジュンキがドドブランゴの背中を斬りつけ、噴き出した血液が雪の大地を赤く染める。痛みにドドブランゴが振り向くと、そこを狙ってリサがアイアンストライク改を顔面に打ち込む。ドドブランゴは怯んで後ずさりするが、間髪入れずにカズキはジュンキが斬りつけた場所にブロスホーンを突き刺す。ここで突然、ドドブランゴが悲鳴なような咆哮を上げた。すると、雪の大地が揺れた。

「な、何だ…？」

「足元に何かいるぞ！？」

ジュンキとカズキは慌てたが、雪山生活の長いリサはこれが何を意味するのか知っていた。知っていたので、思わず下唇を噛む。

「…ブランゴ」

リサが呟いた途端に、雪の大地からブランゴが4匹飛び出した。

「なっ！」

「ちぃっ！」

ブランゴはボスであるドドブランゴを守るように行動を開始した。4匹は2匹ずつに別れてジュンキとドドブランゴ、カズキとドドブ

ランゴの間に入る。そしてドドブランゴはリサと向き合った。
「リサっ！」
「大丈夫です！ここは耐えます！」
ジュンキの心配する声がドドブランゴの背後から聞こえてきたが、リサはジュンキとカズキがブランゴ４匹を倒すまでドドブランゴの攻撃を耐え抜くことを決めた。リサのハンマーの柄を握る両手に力が入る。
（大丈夫。私はひとりじゃない）
リサが動き出すと、ドドブランゴも動き出した。ドドブランゴのタックルを避けて、背中に一撃叩き込む。ドドブランゴはリサを振り向き口から雪のブレスを吐きかけるが、リサはこれも余裕を持って避け、脇腹に一撃叩き込む。深追いせず、一撃一撃確実に。しかし相手はブランゴのリーダー、ドドブランゴ。体格の差はもちろん、体力の差も歴然としている。
「はぁ…！はぁ…！」
リサの呼吸は次第に荒くなってきていた。ドドブランゴは好機と見たのか、攻勢を強めてくる。
（右か、左か…）
ドドブランゴは右腕を上げた。
（左っ…！）
リサはドドブランゴの拳を避けるために、左へ跳んだ。しかし、リサの視界にドドブランゴの拳が迫る。
（フェイント…！？）
リサは思わず目を閉じた。しかしドドブランゴの拳は届かず、代わりに爆風がリサの頬を撫でた。リサは一瞬だけ背中を振り向いた。そこには距離を置いてライトボウガンを構えているユウキがいて、右手にＶサインを作っていた。
「リサっ！」
声を掛けられてリサが正面を向くと、ブランゴを倒したジュンキとカズキがドドブランゴへ駆け寄ってきているところだった。ドドブ

ランゴは劣勢とみたのか戦闘を離脱し、このエリアを出ていってしまった。
「ふう…」
リサは背中のアイアンストライクを外すと砥石で磨いた。そこにジュンキ、ユウキ、カズキが歩み寄る。
「大丈夫かぁ？」
「はい。怪我はありません」
カズキの問い掛けに、リサは笑顔で答え、そのままユウキの方を向くと頭を下げた。
「ユウキさん、先程はありがとうございました」
「いやいや、無事ならいいんだ」
ユウキは照れ臭そうに笑う。
「ささ、そんなことより、早いところ追いかけようか」
「そうですね」
「だな」
ユウキの提案はもっともでリサとカズキは返事を返し、ジュンキは黙って頷いた。

ペイント弾の臭いを辿り、リサ達は隣のエリアへと移った。果たして、ドドブランゴはブランゴと一緒にそこにいた。
「ちっ…」
カズキが舌打ちした。ブランゴの数は5匹。
「多いですね…」
「慕われているところを見ると、いいボスなのかもな」
「いいボスでも、狩らなきゃならんのだ、これが」
ユウキはそう言うとクロオビボウガンを構えた。それに呼応するようにジュンキはラスティクレイモアを抜き、カズキがブロスホーンを抜いた。
「ジュンキさん…？」
「ああ、リサも武器を構えていてね」

リサはジュンキに促されるまま背中のアイアンストライク改を構えた。これから何が起こるのだろうか。リサが疑問に思ったその時、ユウキが一発の弾丸を発射した。それは吸い込まれるように一番手前のブランゴへ近づき、頭部を貫いた。

「…！」

「いくぞ」

リサが驚いているとジュンキの声がかかり、ユウキ以外の3人はドドブランゴ目掛けて走り出した。ドドブランゴは異常にすぐ気が付き、残った4匹のブランゴに激を飛ばした。しかしブランゴ達が気づくまでに時間がかかり、その間にジュンキとカズキによってさらに2匹が倒されてしまう。残るはブランゴ2匹にドドブランゴ。

「ブランゴは私が引きつけます！」

「分かった！」

「頼んだぜ！」

リサはそう言うと速度を落とし、ドドブランゴと戦うジュンキとカズキ、そしてこれから相手をするブランゴ2匹との間にリサが入った。

「…？」

リサはドドブランゴに背中を向けたので、リサからはユウキの姿を確認できる。そのユウキはリサから見て左のブランゴを指差していた。リサはユウキの指示に従い、まず左のブランゴを相手にする。するとユウキは左のブランゴを狙い撃った。ブランゴの気が一瞬だけユウキの方へ逸れる。

「はあっ！」

リサはその隙を逃さなかった。アイアンストライク改の重い一撃がブランゴの頭部を捉える。リサの攻撃が当たったブランゴはグシャリと音をたてて動かなくなった。

「ふぅ…――――あっ」

リサの視界が横にスライドし、脇腹に衝撃を感じた。雪の大地を転がり、慌てて起き上がる。もう一匹のブランゴが迫ってきていた。

ブランゴはリサに跳びかかる。リサにはそれがとてもゆっくりに見えていて、ボウガンの弾がブランゴの頭を貫いたのもはっきりと見えた。ブランゴの両目が裏返り、リサの手前に墜落するとリサの時間間隔も元に戻った。

「大丈夫かー？」

「だ、大丈夫です！」

ユウキが駆け寄ってきたので、リサは慌てて立ち上がった。ここは狩り場。いつまでも呆けていては危険だ。

「ドドブランゴは何とかなりそうだぞ」

「え…？」

ユウキにそう言われてドドブランゴを見ると、リサは明るい赤色の瞳を見開いて驚いた。ブランゴ２匹を相手にしているだけの僅かな時間で、ドドブランゴは目に見えて弱っていた。動きにキレがなく、瞳には恐れが見える。

「すごい…！すごいです…！」

「俺はガンナーだから直接戦ってるわけじゃないけど照れ臭いなぁ」

「私も頑張らないと！」

リサはフルフルキャップの上から頭を掻いているユウキに見向きもせずにドドブランゴへと駆け寄った。しかしリサのアイアンストライク改がドドブランゴを捉える前に、ドドブランゴは空高く跳躍してエリアを脱してしまった。

「あっ…」

「大丈夫。もう巣に戻る頃だろうから捕獲するか」

ジュンキはそう言うとアイテムポーチから捕獲用麻酔玉を取り出した。

「ユウキ。罠は？」

「シビレ罠をひとつ持ってきてるぞ」

近くに来ていたユウキも背中のアイテムポーチから円筒管を取り出した。

「よし、じゃあ行こう。リサ、大丈夫か？」

「はい！」
リサは大きな声で返事をしてジュンキを驚かせた。
リサは嬉しかった。強いハンターと共に狩りに出られるというのはどんなハンターでも嬉しいことなのだ。リサは消えかかっているペイントの臭いを嗅ぎ分け、率先して歩みを進めた。

MH2nd　外章　少女と竜人　04

雪山の中の洞窟の入り組んだ先に、ドドブランゴのねぐらはあった。
周囲にブランゴ等のモンスターはおらず、ドドブランゴは枯れ草のベッドの上で眠っていた。
「罠を仕掛けるから、発動したら投げてくれないか？」
「分かりました」
リサはジュンキから捕獲用麻酔玉を受け取った。そしてジュンキはユウキからシビレ罠を受け取ると眠っているドドブランゴのすぐ側まで静かに近づき、シビレ罠を設置した。シビレ罠はすぐ発動し、ドドブランゴが尋常ではない叫び声をあげながら全身を痙攣させた。そこへリサが捕獲用麻酔玉を投げつける。二発投げつけたところで、ドドブランゴはその場に倒れ込んだ。
「捕獲完了だな」
カズキは嬉しそうに言いながらディアブロヘルムを外した。
「後はギルドの方が処理してくれるだろうから、俺達は村に戻ろう。お疲れ、リサ」
「はい。ありがとうございました」
レウスヘルムを外しながら言ったジュンキにリサはそう言って頭を下げた。直後、背後に殺気を感じて振り返る。
「っ！？」
そこには洞窟の天井付近からリサ目掛けて飛び掛ってくるブランゴの姿があった。ドドブランゴをシビレ罠にかけた際の叫び声に呼ばれたのだろうか。ブランゴはリサが振り返った時には既に空中へ飛び出しており、リサはあまりに咄嗟のことで避けることができない。
（駄目だ、当たる…！）
リサが思ったその時、すぐ側を通り抜ける赤い人影があった。
（ジュンキさん！？）
ジュンキは目にも留まらぬ速さで背中のラスティクレイモアを抜く

とブランゴを一閃した。するとブランゴの身体は上半身と下半身に分離され、リサに直撃することは避けられた。

「…」

リサは絶句していた。ドドブランゴを一刀両断するなんて聞いたことがない。

「大丈夫か?リサ…」

「…!」

振り向いたジュンキの瞳を見て、リサは今日何度目かの驚きを見せた。ジュンキの青色の瞳が、まるで竜のそれに変わっていたのだ。

「…瞳、変わってる?」

「はい…」

「そっか…」

ジュンキは何度か瞬きした。そして普段の、人の瞳に戻る。

「ジュンキさん、今のが…?」

「竜の力…のひとつかな」

「…」

リサは何を言えばいいのか分からなかったが、そこはユウキとカズキがフォローに入ってくれた。

「これが竜人さ。世界の調和を整える者…だったか?」

「でもジュンキはジュンキ、そうだろう?まあちょっと怖いかもしれないけど」

「怖いは余計だ」

3人の会話を聞いて、リサは笑みを浮かべることができた。竜人という存在はちょっと怖いけど、それ以上に大変な使命を負っていて、そしてそれ以前にハンターなんだとリサは思った。

ポッケ村に戻ると集会場にはショウヘイとクレハがいて、これからお昼だから一緒にと誘われたので、リサは5人に混ざって食事をとることにした。食事の席ではジュンキ達5人の昔話や笑い話、これからの予定や他愛のない会話が繰り広げられ、リサの顔にも自然と

笑みが浮かんでいた。
リサとしてはとても楽しみだった。これからはひとりではなく、６人で行動することになる。すると狩りひとつでも選択肢がかなり広がり、狩りにも多様性が生まれてくる。そして何より一緒に笑い、一緒に悩み、一緒に泣き、一緒に喜べる仲間ができた。リサにはそれが何より幸せだった。今でもユウキとカズキがお酒に酔って爆笑しているし、ショウヘイはその様子を見て静かに笑っている。クレハはジュンキに小さなソーセージを食べさせようとしていて、ジュンキは恥ずかしそうに顔を赤らめている。
（ああ、これが私のパーティなんだ）
リサはひとり穏やかな笑みを浮かべると、そっとあたたかいスープに口をつけた。

（おわり）

ＭＨ２ｎｄ　外章　少女と竜人　０４（後書き）

このリサというキャラクターは後のお話で重要な人物です。
後の活躍をお楽しみに。
ではまた、次のお話でお会いしましょう。

キャラクター紹介（ネタバレ注意）

登場キャラクター紹介

ジュンキ…18歳、竜人（リオレウス）
使用武器：大剣、太刀
使用防具：レウスシリーズ
髪の色：薄茶
瞳の色：青
明るく前向きなハンター。過去にリオレウスと戦い、負けたのにもかかわらず生かされたことを悔やんでいる。かといって、リオレウスを恨んでいる訳ではない。リオレウスの装備を愛用しているが、それは単にリオレウスという竜が好きなだけ。パーティの中の立ち位置はリーダーだが、本人には自覚なし。ザラムレッドとの再会後、竜人として成すべきことをしようと動く。
チヅルとセイフレムの戦いに間に合わず、チヅルを助けられなかったことに深い負い目を感じてしまうが、クレハの涙を受け止めて平常を取り戻した。
頭に巻いている黒一色のバンダナがトレードマーク。比較的寝起きが悪いのが球にキズか。

チヅル…17歳、竜人（イャンガルルガ）
使用武器：双剣
使用防具：クックシリーズ→ガルルガシリーズ
髪の色：薄茶
瞳の色：黒
自分にはっきりとした自信を持てないハンター。幼い頃に村をリオ

レイアに焼かれ、家族を失った過去を持つ。おとなしい性格だが、ひとたび狩り場に出ればハンターとしての才覚を発揮し、ハンターとしての力量は十分。ジュンキのことを気にかけているが、クレハの登場により動揺してしまう。しかしクレハには他意が無いことが分かると以降は一緒に行動することもあった。竜人としての運命を受け入れた後、人の世を脅かさんとするミラバルカンを撃破、一気に名を挙げる。

ジュンキがパーティを離れた後、過去の因縁であるセイフレムが現れ、以後はセイフレムとの戦いに執着してしまう。セイフレムを倒し、自分の過去にケリをつけようと単身挑むも敗北してしまう。最期はジュンキに抱えられながら、静かに息を引き取った。

ユウキ…18歳、人間
使用武器：ライトボウガン
使用防具：フルフルシリーズ
髪の色：銀
瞳の色：空

パーティ唯一のガンナー。幼少期はジュンキ、ショウヘイと共にハンターとして過ごす。ガンナーとしての腕前は一流で、遠距離からの射撃でパーティ全体を援護する。しかし回復弾を撃つことは少ない。

明るく前向きで陽気なキャラだと自覚しているが、頭を使うのは苦手なのでパーティの指揮などはジュンキに丸投げしている。

出番が少ない気がするが、それはガンナーという遠距離攻撃武器のために遠ざかっているからである。

ショウヘイ…18歳、竜人（ミラボレアス）
使用武器：太刀

使用防具：ドラゴンシリーズ
髪の色：金
瞳の色：黒
落ち着いた物腰で、いつもパーティ全体の事を考えているハンター。ジュンキとユウキとは幼少期からの仲間で、常に冷静に物事を判断しているが、怒りをあらわにすると手を出すこともある。パーティ全体で何か行動を起こす際はよくジュンキと相談している姿が確認でき、時には自ら決定しパーティを動かすこともある。実際ジュンキがパーティを抜けた際、彼が中心となってパーティを動かしていた。
ハンターとしての腕前は一流中の一流で、太刀筋は見えないくらいに速い。的確に急所を狙い、素早く狩りを終わらせるスタイルを好む。
途中でジュンキやユウキとは別行動をとったが、半年で合流し今に至る。

カズキ…18歳、人間
使用武器：ランス
使用防具：ディアブロシリーズ
髪の色：濃い茶
瞳の色：黒
「元気」という言葉がこれ以上似合う人物はいないだろうというくらいにいつも笑顔を振りまいているハンター。パーティ一番の力持ちでムードメーカーだが、パーティメンバーからうるさいと叩かれている。

クレハ…17歳、竜人（リオレイア）
使用武器：双剣

使用防具：レイアシリーズ
髪の色：青
瞳の色：青
明るく前向き、その上元気で仲間想いなハンター。ベッキーからの紹介を受けて、ジュンキ達のパーティに入る。最初はチヅルから敵意を向けられていたがすぐに和解し、それ以降はチヅルのジュンキに対する想いを手伝い始めるが、クレハ自身も少しづつジュンキに好意を持っていく。
芯が強く、ちょっとやそっとじゃ折れない強い心を持っているが、チヅルが死んだ直後は大泣きしてしまうなど感情の起伏が激しい一面も持っている。
竜人としての運命を抵抗なく受け止め、竜人となっても普通にハンターを続けている。

キャラクター紹介（ネタバレ注意）（後書き）

後々追加していきます。

ＭＨ３ｒｄ　プロローグ（前書き）

みなさん、こんにちは。作者の秋夜空です。
約一ヶ月ぶりに、連載再開です！
今回からモンスターハンター「人と竜と竜人と」も３ｒｄストーリーに入ります。
頑張って書いていくので、これからもよろしくお願いします！

MH3rd プロローグ

「行ってきまーす！」
靴紐を結ぶのももどかしく、決して立派ではない自宅を飛び出した。
今日は週に一度の隣街へのお使いの日なのだ。いつも村の農作業を手伝っていて村からほとんど出られない身なのでこれが待ち遠しくてたまらない。それが10歳の男の子ならば尚更だ。
「ちょっと待ちなさい。ちゃんとお金と籠は持ったの？」
「今持ったよー！」
背後からの母の声に慌てて右手にかけなしのお金を持ち、左手に農作業用の籠を携える。
「お昼までには戻ってくるのよ」
「うん！大丈夫！もう道も慣れたし！」
「気をつけてね」
「はーい！」
いつも優しい母に見送られて家の敷地を飛び出す。畑のあぜ道を駆け抜けて村の大通り――と言っても竜車2台がやっとすれ違えるくらいの広さだが――を左折し、畑の間を村の出入り口に向かって駆け抜ける。
「お兄ちゃーん！」
右手から呼ぶ声が聞こえたので足を止めて振り向くと、畑の中に小さな人影が3つ。その中のひとつが手を振っていた。妹だ。
「街に行くのー？」
「そうだよー！」
「お土産買ってきてねー！」
「ああ！」
こちらも手を振り替えし、再び駆け出す。村の門をくぐって街道に出たところで農作業から戻ってきた父と出会った。
「おっ！街までお使いか」

「うん！行ってきます！」
「気をつけるんだぞ」
「はーい！」
優しくて強い父に手を振り、街道を隣街へ向けて走る。子供の足で片道1時間くらいの距離があるが、それ以上に街に行けるのが楽しみで、ついつい駆け足になってしまう。村にはないものが、街にはたくさんある。お使いも好きだが、なにより街に行くこと自体が楽しみだった。

燃える、家。
焼き尽くされた、畑。
薙ぎ倒された、木々。

どうして燃えてるの？
どうして焼けてるの？
どうして倒れてるの？

「え…？」
変わり果てた村の姿に、立ち尽くすことしかできなかった。お使いで隣の街まで行って帰ってきただけなのに、どうして村がこんな姿に？
「嘘だ…」
これは夢だ。そう思い頭を強く叩いてみたが、夢からは醒めない。
これは、現実だ。
「父さん…。母さん…。ミナ…」
思わず口から漏れる家族の名前。体は無意識に、廃墟と化した村の

中へと歩み出していた。いつも村中を駆け回っている同年代の友達や農作業をする大人たちの姿はない。

「…！」

何か柔らかいものを踏んだので、反射的に足元を見た。そこには誰かの、二の腕から指先までの腕。

「うあぁ…！」

恐怖に脚が竦み、尻餅。そして、見えた。

「あれは…」

破壊され炎上している自分の家の前に立ち、こちらに後ろ姿を見せている1匹の竜。

「リオ…レウス…？」

独り言の呟きが聞こえたのか、その竜はこちらを振り向いた。その凶悪な牙が並んだ口に咥えているのは――。

「父さん…？母さん…？」

ここで、目が覚めた。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　01

「――――ッ！！？」

悪夢から醒めた。嫌な汗を全身にかき、肩で呼吸する。

「…」

ここはどこだろうか。見たことのない家の中である。天井、壁、床、全てが木造で、石造りなのは囲炉裏くらいだ。

「…ッ！」

起き上がろうとして、全身に走った痛みに顔をしかめる。よく見ると、自分は包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「…！」

ここで自分の身に何が起きたのかを思い出す。ドンドルマの街で討伐依頼を受け、雪山へと向かったのだ。討伐依頼対象であるドドブランゴを倒し、帰ろうとしたその時に――――。

「くそっ…！」

今まで見たことのない竜に襲われたのだ。谷底へ転落し、そこで記憶が途切れている。

「…」

今一度室内を見渡すと、玄関の石畳の上に自分の装備が綺麗に並べてあった。ハンターが商売道具である武器防具を失えば、当然仕事が出来なくなってしまう。安堵していると、装備が並べてある玄関の扉が何の前触れもなく開いたので少し驚く。

「気が付きましたか？」

家の中に入ってきたのは一人の女性だった。白い皮をメインに作られた防具を纏い、その華奢な身体に似合わないハンマーを背中に装備しているところから彼女もハンターであると認識する。明るい赤色の瞳に同じく明るい赤色の髪。そのハンターは背中のハンマーを外すと玄関の壁に立て掛けて室内に入り、ヘルムを外すと部屋の中央にあるテーブルの上に置いてから枕元に立った。

「まだ怪我が完治していません。今は休んで下さい」
「…ここは？」
「ここはポッケ村。シュレイド大陸最北端の小さな村です」
彼女はそう言うと静かに微笑んだ。
「…あんたは？」
「名前を尋ねるときは、まず自分からですよ」
注意を受けたので、思わず眉間にシワが寄ってしまう。
「…リヴァルだ」
「リサです」
リサ、と彼女は名乗った。
「…俺は、どうしてここに？」
「あなたは私が見つけました。雪山からの帰り道、崖の下で。水を持ってきますね」
リサはそう言うとリヴァルの枕元から離れ、隣の部屋へと入っていった。すぐに水が入ったコップを手に持って戻ってくる。
「痛みが引くまでここで寝泊りして下さい。…では、私は外出しますので」
リサはそう言うと家から出ていこうとしたので、リヴァルは驚きの声を上げた。
「お、おい！ここはお前の家だろ？」
リヴァルの声を聞いて、リサは微笑みながら振り返って口を開いた。
「大丈夫です。仲間がいるので、そこに泊めてもらいますから」
リサはリヴァルの返事を待たずに家を出て、後ろ手に扉を閉めた。

リヴァルの怪我はたいしたことはなく、三日目の朝には痛みも引いた。その間ほとんど動けなかったリヴァルのために、リサは朝、昼、夕の一日三回、毎日ほぼ同じ時間にリヴァルへ食事を運んできてくれた。
リヴァルはベッドから立ち上がると包帯をほどき、固くなった身体をほぐすために屈伸、背伸びした。そして自分の装備を手に取り、

身に着けていく。着込むのはリオレウスの亜種であるリオソウルの素材から作られるリオソウルシリーズ。リオレウスの深紅とは違い、こちらは深蒼色をしている。武器は大剣「オベリオン」。これもリオソウルの素材から作られた深蒼色の大剣だ。これらはリヴァルにとって深い意味が存在している。リオソウルヘルムを手にした時に、ふとリサのであろう全身鏡が目に入った。深紅の長髪に深紅の瞳。それに反発するかのような大剣「オベリオン」とリオソウルシリーズの深い蒼色。

「…ひでぇ顔してる」

リヴァルはひとりそう言うとリサの家を出た。

（うっ…）

外の眩しさに、リヴァルは深紅の瞳を狭めた。リサに名前を教えてもらったこの村――ポッケ村は雪山の麓に作られた小さな村で、リヴァルが見たところ店と言えるものが小さな武具工房と青果店兼雑貨店の2軒しか見当たらない。その青果店兼雑貨店の軒先にリサの姿があって、リヴァルに気づくと麻で作られた買い物袋を両腕に抱えて歩きてきた。

「リヴァルさん、もう大丈夫なのですか?」

「ああ。助かった」

「お礼はいいですよ。困ったときはお互い様ですから」

リサは「荷物置いてきますね」と言うと一度自宅に入り、買い物袋の代わりにハンマーを背負って出てきた。

「では村長のところにいきましょう。挨拶をしないと」

「…ああ」

リヴァルの返事を聞くと、リサが先行して村の中を進んだ。そして周りの民家より一回り大きな建物の手前で焚き火をしている小柄な老婆の前でリサの歩みが止まった。

「村長、リヴァルさんを連れてきましたよ」

「おや。そうかい」

村長は顔を上げるとリヴァルに向き合った。

「無事で何よりだ。私がこのポッケ村の村長さ」
「リヴァルだ」
「うん、よろしくね。さて、ヌシはこれからどうするね？」
「街へ戻るつもりだ。俺が達成すべき依頼は完遂されているからな」
リヴァルがこの雪山へやってきたのはブランゴと呼ばれる小型モンスターを狩ることで、その依頼自体は達成されている。そしてその帰り道に、例の、謎のモンスターに襲われたのだ。
村長はリヴァルの言葉を聞くと、複雑な表情を浮かべた。
「そうか。…残念だが、それは無理じゃ」
村長の言葉を聞いて、リヴァルは眉間にシワを寄せた。
「どういうことだ…？」
「この村と下界の街を繋ぐ唯一の山道で大規模な雪崩が発生したんじゃ。雪が除去されるか、温暖期が訪れるまで誰一人村から出れず、また入れないんじゃよ」
「な…！」
リヴァルも流石に驚いた。これではリヴァルが現在活動拠点としているドンドルマの街に戻れない。あまりに長期間ドンドルマの街へ戻れずに依頼完遂の報告ができないと、最悪の場合死亡扱いにされてしまう。
「何とかならないか？」
「村の男達が一生懸命に雪を除去する作業をしている。今しばらく待たれよ」
「くそっ…」
リヴァルは思わず舌打ちした。
「ただ待つのは苦しいじゃろう。そこでヌシにいくつかやってもらいたい依頼があるんじゃ」
「なぜ俺が…」
「雪山のモンスター達の数を減らして欲しいんじゃ。そうすれば雪の除去作業もはかどり、ヌシも早く街へ戻れるだろう」
確かに、ただ待つのはリヴァルの性分に合わない。村長からの依頼

を達成させれば雪の除去作業ははかどり、そして自分には報酬金が支払われるだろう。悪い話ではなかった。

「…分かった。いいだろう」

「ありがとね。それと、雪崩が発生する前に街へ手紙を出してある。ヌシは怪我していて動けずにおるとな。じゃから安心するがいいさ」

村長の言葉を聞いて、リヴァルはとりあえず安堵することができた。最悪の状況は回避できたのだ。

「話は変わるが、ヌシはどうして雪山で倒れていたのかの？」

「…見たことのない竜に襲われたんだ」

「見たことのない竜…？」

リサが首を傾げた。村長も難しい顔をしている。

「どんな竜じゃった？」

「…地面を這っていたな。体色は黄色を基調としていた。それくらいしか思い出せない」

「…やはりの」

村長の言葉を、リサは聞き逃さなかった。

「村長は何かご存知なのですか？」

リサが尋ねると、村長は口を重々しく開いた。

「…轟竜ティガレックス」

「ティガレックス…？」

リヴァルも聞いたことが無かった。

「うむ。最近になって見つかった竜じゃ。気をつけたほうがよいぞ」

「轟竜ティガレックス…」

リヴァルはその名前を噛み締めるように繰り返し呟いた。

「さて、私からの話はこれで終わりじゃ。リヴァル殿、頼みますよ」

「ああ…」

リヴァルが生返事を返すと、横からリサが一歩歩み寄った。

「ではリヴァルさん、早速ですがひとつ依頼を受けましょう？依頼は集会場の中で受けることができますよ」

リサはそう言うと再び先行して民家より一回り大きい建物の中へと

入っていった。それにリヴァルも続く。集会場の中はドンドルマの大衆酒場を小さくしたもののようでほとんどの設備は街と同じだった。ただ違う点を挙げれば、寒さ対策に大きな暖炉が設置されているくらいだろうか。

「ここはハンターズギルドの出張所も兼ねているんですよ」

リサはそう言うと受付嬢から今届いている依頼書の束を受け取り、内容を一枚一枚確認し始めた。しかしリヴァルは一言で依頼を受付嬢に告げた。

「轟竜ティガレックスの討伐依頼はあるか？」

リヴァルの発した言葉に、集会場にいた数人の村人、受付嬢、そしてリサも言葉を失った。

「轟竜…ティガレックスの…討伐依頼ですか…？」

「ああ、そうだ」

リヴァルがそう伝えると、受付嬢は引きつった顔で依頼書の束を確認し始めた。

「リヴァルさん…！」

リサも驚きを隠さなかった。リヴァルを制止しようと声を上げる。しかしリヴァルはそんなリサを気にもとめず、言葉を続けた。

「リサ、お前の装備は？」

「えっ…武器はアイアンストライク改で、防具は見ての通りフルフルですけど…」

「なかなかの装備だな。大丈夫だ」

リヴァルの言葉が終わると同時に、一枚の依頼書が提示された。内容はもちろん、ティガレックス討伐依頼。

「二名で受注してよろしいですか…？」

「――――待った」

受付嬢の言葉を了解しようとしたその時、リヴァルの背後から制止の声が上がった。

「！？」

リヴァルは驚いて背後を振り向いた。いくつものテーブルが並んだ

集会場内に、ひとり座ってこちらを見つめ続けているものがいた。
「…！」
それはリヴァルが見たくない、会いたくないものだった。

隅のテーブルに、一人のリオレウスが座っていた。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　02

「何だ…あんた…」
リヴァルが自分を落ち着けるようにゆっくり言ったが、リオレウス装備のハンターは言葉を続けた。
「まだ詳しいことが分かっていないモンスターだ。調査しに行くならまだしも、いきなり討伐は危険だと思うぞ」
リヴァルは大股でそのハンターに近づくと、そのハンターが座っているテーブルを右手で力強く叩いた。そのハンターのであろうグラスが倒れ、水がテーブル上にこぼれ広がる。
「どんな依頼を受けるかは依頼を受けるハンターの意思が最優先される。あんたにあれこれ言われる筋合いはない」
リヴァルとしては脅しを掛けたつもりだったが、リオレウスのヘルムの中から聞こえてくる声は至って冷静だった。
「確かにそうだ。だが忠告だけはしたぞ。お前が勝手に死のうと俺には関係ないからな。せいぜい犬死だけはしないようにな」
「き…貴様ぁ…！」
リヴァルは右腕が背中の大剣オベリオンに向かって動くのを止められなかった。
「いけません！リヴァルさん！」
リサの声が集会場に響くが、リヴァルは左手に持っていたリオソウルヘルムを投げると大剣オベリオンを両手に持った。
「死ねえええええッ！！！」
リヴァルは大剣オベリオンをリオレウス装備のハンターに向かって振り下ろした。このままリオレウス装備のハンターは大剣オベリオンの餌食になるはずだった。しかしリオレウス装備のハンターは席を立たずに腰をずらすことによって紙一重でリヴァルの攻撃を避けてみせた。リヴァルの大剣オベリオンはリオレウス装備のハンターではなく椅子を破壊した。

「なっ…！」
流石にリヴァルは驚いた。しかしリオレウス装備のハンターはため息をひとつ吐くと立ち上がり、リヴァルの前に立った。
「力づくで勝負したいなら、受けて立つけど？」
リオレウス装備のハンターはそう言うと、背中の太刀を抜いた。
「ちっ…！くそおおおッ！！！」
リヴァルは大剣オベリオンを持ち上げるとリオレウス装備のハンター目掛けて斬りかかった。しかしリオレウス装備のハンターはリヴァルの攻撃をまたも紙一重で避け、リヴァルの喉元に太刀の先端を突きつけた。
「…！」
「勝負あったな」
リオレウス装備のハンターはそう言うとリヴァルの喉元から太刀を引いた。するとリヴァルは気が抜け、その場に尻餅をついた。
駆け寄ってくる足音を聞いてリヴァルが顔を上げると、走ってくるリサの姿が見えた。しかしリサはリヴァルではなく、目の前で太刀を背中に納めたリオレウス装備のハンターのもとへ向かった。
「やりすぎですよ、ジュンキさん」
「ごめんごめん」
リオレウス装備のハンターはそう言うと、被っていたリオレウスのヘルムを取った。中から出てきたのは薄い茶色の髪を黒いバンダナでまとめた、青色の瞳の男だった。

「なんの騒ぎじゃ？」
騒ぎを聞きつけて、村長が集会場へと入ってきた。村長はリヴァル、リサ、リサがジュンキと呼んだハンターの順に見渡すと、ジュンキのもとへ歩み寄って話を始めた。リヴァルは立ち上がったが、歩み寄ってきたリサに声を掛けられた。
「どうしていきなり斬りかかったんですか？」
「…」

「ハンターは人に武器を向けてはならず。リヴァルさんもハンターなら――」
「分かってる！」
「…リヴァルさん」
リサが残念そうな顔をして一歩下がる。すると村長が呼んだので、リヴァルとリサもジュンキと並んで村長の前に並んだ。
「話を聞く限り、ヌシは武器を抜いたらしいの」
リヴァルは声を出さないことで肯定した。村長は話を続ける。
「感情だけで武器を抜くようでは危険じゃの。そこでヌシにはしばらくこのジュンキ殿についてもらうことにする」
「なっ…！」
リヴァルは驚いてジュンキを見たが、ジュンキは村長の方を向いていてリヴァルの顔を見さえしなかった。
「ふ、ふざけるな！どうして俺がこんな奴なんかと！」
「…ヌシの行いからして当然じゃ」
リヴァルの反論を村長は退けた。ここでジュンキが右手を小さく上げたので、村長が「どうした？」と尋ねた。
「具体的に、俺は何をすれば？」
「そうじゃの…。依頼を受けて村を出る時に同行してくだされ。もちろん、報酬も支払うよ。それから――」
村長とジュンキの会話を、リヴァルはにが虫を噛み潰したような顔で聞き続けるしかなかった。

「さて、まずは自己紹介からだな」
村長が集会場を出て行った後、リヴァルとリサはジュンキに促されてテーブルのひとつに着いた。
「俺はジュンキ。よろしく」
「リサです。でもお二人は既に知っていますよね」
「リヴァルだ。ご指導よろしくお願いしまーす」
リヴァルはとても面倒臭そうに、嫌味を込めてジュンキに言った。

「まあ、指導って言ってもあれこれ言わないから。装備を見る限り、リヴァルはなかなかの腕前を持つハンターみたいだからな」
「そーだぜ。俺の装備はリオレウスの亜種、リオソウルから作られているんだ。あんたのは通常種だな、ジュンキさん。これってもしかして俺の方が狩りの実力は上なのかな？」
リヴァルの言葉を、ジュンキは苦笑いしながら聞いていた。リヴァルが勝ち誇ったように鼻を鳴らすと、横に座っているリサが肘でつついてきたので、仕方なく耳を傾けた。
「リヴァルさん、ジュンキさんの防具をよく見てください。防具の所々に、白い布が巻かれていませんか？」
「ん…？」
リヴァルはリサに言われたことを一応確認してみた。確かに目の前に座っているジュンキが装備しているリオレウスの防具には腕や首元などに不思議な模様が刺繍された白い布が巻かれている。
「それにですね、リヴァルさん。防具のデザインが異なっていることにも気がついていますか？」
「…」
それはリヴァルも気づいていた。目の前のジュンキが装備しているリオレウスの防具は一般的なレウスシリーズとはデザインが異なっているのだ。リオレウスが翼を広げている状態をイメージして作られているのだろうか。
「…！」
「気づきましたか？リヴァルさん」
ここでリヴァルは気づいた。防具に巻かれる白い布には、その防具が通常より強いモンスターの素材から作られたことを意味している。つまり、目の前に座っているジュンキが装備している防具は――――。
「レウスS…」
リヴァルは目の前の男の真の実力を知って、リヴァルはただ拳を強く握り締めることしかできなかった。

「――さてと、挨拶も済んだから、今日は解散。また明日」
ジュンキがそう言うとリヴァルは即座に立ち上がり、集会場の出口に向かって歩き出した。
「り、リヴァルさん！」
リサの制止の声も聞かずにリヴァルは集会場を出ようとする。しかし――。
「ジュンキー！ただいまー！」
突然背後から聞こえた大きな声にはリヴァルの足も止まってしまい、何事かと集会場の中を振り返る。そこにいたのは狩りから戻ってきた４人組のパーティだった。男が３人、女がひとり。その女がジュンキの目の前で止まり、親しそうに話を始める。
「ちっ…」
「あっ、り、リヴァルさん！」
リヴァルは舌打ちをひとつだけすると、何も言わずに集会場を出た。
リヴァルがリオレウスの次に嫌いなものが現れたからだ。リオレウスの番である、リオレイアだ。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　03

翌日、リヴァルは仕方なく装備を整えて自宅を出た。いつまでもリサの家を借りるわけにもいかないので村長にお願いし、小さな空き家をひとつ借りている。集会場に入ると、準備万端のリサとジュンキが待っていた。

「で、何を狩りに行くんだ？」

「これだ」

そう言ってジュンキが差し出した依頼書を読んで、リヴァルは驚いた。

「なんでドスファンゴなんだよ！？」

「除雪作業へ出る村人達の障害になっているからな」

「ふざけるな！もっとマシなモンスターを選べよ！」

リヴァルの反論を、ジュンキはまずため息で返してから説明した。

「今はこの村から出ることができないんだ。つまり、依頼は雪山のみになってる。そしてドスファンゴを討伐することが、除雪作業をする村人達の作業効率を上げることになるんだ」

ジュンキの説明を受けて、リヴァルは承諾するしかなかった。雪山から出られない以上、これ以上ジュンキを責めても仕方ない。

「分かった。とっととドスファンゴを狩りにいこうぜ」

リヴァルは投げやりにそう言うと、リサとジュンキを置いて出発しようとした――その時。

「待ってー！私も行くー！」

集会場内に響いた大きな声に、リヴァルは反射的に振り向いた。そこには昨日見た女が慌てて集会場に入ってきたところだった。

「クレハ！？いいのか？ショウヘイ達は？」

「大丈夫！俺達のことは気にしないで行ってこい。だってさ」

ジュンキがクレハと呼んだリオレイア装備の女性ハンターは、ジュンキの問い掛けに笑顔で答えた。

「おはよう、リサちゃん」
「おはようございます、クレハさん」
「リヴァル、仲間をひとり加えてもいいか？」
「…勝手にしろ」
クレハと呼ばれたハンターはリサとの挨拶の後、リヴァルの方を向いた。
「初めましてだね。ジュンキから話は聞いてるよ。私はクレハ。よろしくね」
差し出されたクレハの手をリヴァルは握らず背中を向けて、ひとりクエスト用出入口をくぐった。

「武器は双剣リュウノツガイで、防具は見ての通りリオレイアで～す！」
クレハは先を行くリヴァルに聞こえるように大きな声で言った。あのクレハとかいう女ハンターのリオレイア装備も不思議な白い布が巻かれているので、Ｓシリーズの防具だろう。ヘルムは被らず、腰まで届く青色の髪をポニーテールでまとめている。
雪山フィールドのベースキャンプまではポッケ村から歩いて移動できる距離なので、普通は竜車を使わない。今回もそうなのだが、そのせいかリヴァルとジュンキの間に距離ができていた。リヴァルがひとり先行し、距離をおいてジュンキが続く。ジュンキの隣にクレハがいて、リサはリヴァルとジュンキ、クレハの中間を歩いていた。
そのリサがリヴァルに近寄ると、リヴァルはつかさず口を開いた。
「おい」
「はい」
「お前はあの男や女と知り合いか？」
「ジュンキさんとクレハさんのことですか？知り合いというより、仲間ですね。ジュンキさんとは以前から付き合いがあるのですが、クレハさんとは最近です」
「…他にもいるのか？」

「ええ、います。ショウヘイさんに、ユウキさんに、カズキさんがいます」
「ちっ…」
「あ、リヴァルさん！」
リヴァルは舌打ちをすると歩く速度を上げた。リサもつかさず追いかける。
「どうしてジュンキさんを気嫌いするのですか？」
「お前に答える義理はない」
リヴァルは、話はここまでと言わんばかりにさらに歩く速度を上げ、リサはリヴァルに尋ねることを諦めた。

雪山のベースキャンプに着くと簡単に準備を済ませ、４人は狩り場へと出発した。雪山のほとりの湖を横目に、草食獣ポポの間を抜ける。しばらく無言の４人だったが、ここでクレハが口を開いた。
「ねえ、ジュンキ」
「ん？どうした？」
「あのさ…今、何食べたい？」
「え？」
突然そんなことを聞かれて、ジュンキは少し戸惑ってしまった。よく考えた後、答えを口にする。
「今は…サンドウィッチかな？アプトノスの肉をパンで挟んだやつ。最近雪山に篭もりっきりで、食べてないからなぁ」
「サンドウィッチ…アプトノスの肉かぁ」
「突然どうしたんだ？クレハが作ってくれるのか？」
「ん～、秘密」
クレハは笑顔で答えると駈け出し、リサと何か話を始めてしまった。

雪山の洞窟を抜けて山頂近くまで登ると、開けた場所にドスファンゴはいた。
「よし。各自、怪我しないように」

ジュンキの言葉が終わる前に、リヴァルはドスファンゴ目掛けて走り出した。

（どうして…俺はリオレウスなんかと…）

リヴァルの頭の中は混乱しているに近かった。もちろんあの男はリオレウスなんかじゃない。レウスSシリーズを装備しているからそれっぽく見えるが、中身は人間だ。同族だ。しかし、どうしてもリオレウスに命令されているような気がしてならないのだ。それがリヴァルを精神的に苦しめる。

（俺は…誓ったはずだ…）

リヴァルはリオレウスが大嫌いだ。それ以上に憎んでいる。そのせいかリヴァルはリオレウスの体色と同じ深い赤色も嫌いだ。自分の深い赤色の髪や深い赤色の瞳も嫌いだし、ましてやリオレウスの素材からつくられた武器防具はもっと嫌いだ。――故に、ジュンキというハンターは精神的に苦手な相手なのだろう。

（この世界から…リオレウスを消し去ると…）

リヴァルの武器防具はリオレウスの亜種であるリオソウルの素材を使って作られている。亜種とは環境の変化に適応した原種の進化系で、原種の代わりとして生きてゆく。つまりリヴァルがリオソウルの武器防具を使っているのは、リオソウルの原種であるリオレウスが絶滅することを願ってのものなのだ。

（――死ね、消え去れ、リオレウス）

ドスファンゴは接近するリヴァル達に気づいたが、その時には既にリヴァルの大剣オベリオンの間合いに入っていた。リヴァルは背中から大剣オベリオンを抜き、構える。

「うおおおあああああッ！」

リヴァルは大剣オベリオンをドスファンゴ目掛けて振り下ろした。

――ドスファンゴは見事に一刀両断された。

「…！」

リサはアイアンストライク改を構えたまま硬直してしまっていた。いかに大剣が重たい武器であるとしても、モンスターを一刀両断するなんてリサは聞いたことが無かった。――いや、ひとりだけそんなことをやってのける人物を知っているが、それは特別な理由があるのだ。リサはこの時、本能からリヴァルを怖いと思った。

ジュンキは手を出さないつもりでいたので後方から見守っているだけだったが、リヴァルの攻撃を見てある種の力を感じていた。

「ジュンキ、感じた？」

「ああ。感じた」

隣にいるクレハも感じ取ることができたようで、ジュンキは確信を持った。

「リヴァルも竜人か」

MH３rd　第1章　重なる想いずれる思い　０４

ポッケ村への帰り道、４人は誰ひとりとして口を開かなかった。村の集会場に戻ると、そこにはショウヘイ達の姿があった。
「お疲れ。早かったな」
「ああ、リヴァルの活躍でな。…そういえばまだ紹介していなかったな。リヴァル」
ジュンキはリヴァルを呼ぶと、ショウヘイ達の紹介を始めた。
「俺はショウヘイ。武器は太刀の鬼神斬破刀。防具はナルガSだ」
「俺はユウキ。パーティ唯一のガンナーさ。武器はライトボウガンのグレネードボウガン改。防具は見ての通り、バサルSだ」
「俺はカズキ。ランス使いだ。武器はブラックテンペスト。防具はディアブロのUだ」
ショウヘイ達三人の自己紹介を受けたリヴァルだが、リヴァルは一言「リヴァルだ」と言うと集会場を出ていってしまった。リサはそんな無愛想なリヴァルを見て「失礼します」と言って、集会場を出ていった。ジュンキとクレハがテーブルに着くと、リヴァルの話を持ち出した。
「みんなに聞いて欲しいことがあるんだ」
「どうしたんだ?改まって」
ショウヘイ達が心配そうな顔をする。話を持ちかけたのはジュンキだが、口を開いたのはクレハだった。
「リヴァル君。彼は竜人だと思うの」
クレハの言葉を聞いて、ショウヘイ、ユウキ、カズキは驚いた。
「…根拠は?」
いつも冷静なショウヘイが尋ねてきたので、ジュンキが答える。
「俺とクレハがリヴァルの竜を感じ取ったんだ。同時に」
ジュンキの言葉にクレハは頷いて肯定する。
「本人は気づいているのか?」

「いや、どうだろう…。恐らく気づいてないと思う」
ユウキの質問に、ジュンキは大まかにしか返事を返せなかった。
「だけどなぁ…」
カズキが難しそうな顔をしたのを、この場の全員が理解していた。
代表してジュンキが口を開く。
「竜人としての使命を、リヴァルは背負えるのか…」
「竜人とは世界の均衡を保つ者。世界の均衡が崩れた時、竜人は目を覚ます、だったな」
ショウヘイがジュンキの言葉に続く。
「しかし、今になってか？」
ユウキが頭に疑問符を浮かべる。
「たぶん…チヅルちゃんの分を補うためじゃないかな…」
クレハの言葉を最後に、ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ、カズキは押し黙った。今から3ヶ月ほど前に、仲間の一人が狩りの最中に死んだのだ。
「…リヴァル本人には話すべきなのか？」
「時が来たら、その時でいいだろうと思う」
ジュンキの問に、ショウヘイが答えた。
「その、時、というのは…？」
「それは監督者であるジュンキが判断しないとな」
ショウヘイの言葉に、ジュンキは苦笑いするしかなかった。

リヴァルは自宅に戻ると大剣オベリオンを壁に立て掛け、防具を外していく。その過程で、首から下げている一対の指輪が目に入った。
両親の婚約指輪である。
「父さん…母さん…ミナ…」
それを右手で強く握り締め、瞼を閉じる。
「リヴァルさん…？」
リヴァルが振り向くと、そこには心配そうな顔をしているリサの姿があった。

「泣いているんですか…？」
リヴァルはリサに指摘されると、いつの間にか流れ出ていた涙を拭った。
「何の用だ…？」
「どうかしたんですか？」
「触るな！」
リサが手を伸ばすと、リヴァルはそのリサの手を弾いた。パシッという音が静かに響く。
「…何があったんですか？」
「うるさい…」
「話してみてください」
「うるさい！」
「悲しいことだったのでしょう？」
「うるさいっつってんだろアマァ！」
リヴァルはリサのフルフルメイルの肩ベルトを掴むと壁に押し付けた。リサは背中を強く打ち付け、息を詰まらせる。明るい赤色の瞳を涙で滲ませ、リサはゆっくり言葉を紡いだ。
「…あなたは」
「…」
「さぞかし、孤独な日々を送ってきたのでしょうね」
リサはリヴァルの手を振りほどくとリヴァルの家から駆け足で出ていった。リヴァルはこの後、思いっ切り壁を殴った。

その夜、リヴァルは夕食のために集会場へ足を運んだ。食事はひとりで食べたいリヴァルはリサやジュンキ達と会わないようにするために遅めに食べるようにしている。しかし、なぜか今夜に限ってジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキの姿が集会場にあり、リヴァルの機嫌を損ねた。リヴァルは話し掛けられたくないので隅の席に座り、注文を取った。
「飯が不味くなる…」

遠巻きに、特にジュンキを睨みつけ、ひとり愚痴った。
突然、集会場内に拍手が巻き起こった。何事かとリヴァルも正面を向くと、そこには見慣れた女性が立っていた。
「リサ…」
そこには普段通りの、フルフルの防具を着たリサの姿があった。リサは明るい赤色の瞳を静かに閉じると、歌い出した。
「…」
普段見られないリサの姿を、リヴァルは黙って見つめ続けることしかできなかった。

リサの歌を聞き終えた村人達やジュンキ達はリヴァルに気づくことなく集会所を後にしていったがリサだけは気づいていたようで、歩み寄ってきてリヴァルの斜め向かいに座った。
「先程はすみませんでした」
リサは謝った。先程、リヴァルの家でのことだろう。
「いや…俺も悪かった…」
「…教えて頂けませんか」
「…何をだ?」
「あなたがジュンキさんやクレハさんを気嫌いすることです」
リサの質問にリヴァルは少し俯いたが、やがて口を開いた。
「…俺の両親はリオレウスに殺されたんだ」
「…!」
リサが驚いた顔をしたが、リヴァルは話を続けた。
「俺はリオレウスが大嫌いだ。そう、この世界から消してしまいたいくらいにな。その番であるリオレイアもだ。だからリオレウスやリオレイアの武器防具を愛用しているジュンキやクレハも嫌いなだけだ。見ているだけで殺したくなるんだよ」
「…そうですか。話してくれてありがとうございます」
「いや…いいさ…」
今まで誰にも話したことのない自分の過去を、初めて他人に話した

リヴァルだった。
「明日は雪山にドスギアノスを狩りに行くそうですよ。頑張りましょうね」
「ドスギアノスか。またそんなモンスター、俺が一撃で殺してやるよ」
「期待してます」
リサはそう言うと立ち上がり、集会場の奥へと消えた。リヴァルは冷めてしまった夕食を食べると明日に備え、早めに床に付いた。

「ふふふ…」
深夜のポッケ村に響く不気味な笑い声。それはジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキが5人で借りている大きな家のキッチンルームから聞こえてきていた。声の主はクレハ、ただひとり。他の4人は既に寝ているが、クレハはキッチンルームで刃渡り20センチは越えるだろう巨大な包丁を握っていた。
「んふふ…明日が楽しみだなぁ…」
クレハはニヤリと笑うとまな板の上の肉塊目掛けて包丁を振り下ろし、肉塊は両断された。

ＭＨ３ｒｄ　第１章　重なる想いずれる思い　０５

翌日、リヴァルが集会場に入るとやはり準備万端のリサとジュンキの姿があった。
「おはようございます、リヴァルさん」
「ああ。ドスギアノスだろ？さっさと行こうぜ」
「いや、まだだ」
「あ？」
ジュンキが止めたので、リヴァルは習慣的に声を上げた。
「クレハがまだだ」
「置いていけばいいじゃねぇか」
「そうもいかないんだよ…」
てっきりリヴァルはジュンキが怒るものだと思っていたが、ジュンキは情けない笑みを浮かべるだけで怒ったりはしなかった。
やがてクレハが合流し、４人は雪山に向けてポッケ村を出発した。

「ねえ、ジュンキ。ちょっといい？」
「ん？どうした？クレハ」
ベースキャンプで各自がアイテムポーチの中身を確認したり武器の点検をしている時に、ジュンキはクレハに呼ばれた。
「ちょっと、こっち来て。リヴァルくん、リサちゃん、ちょっと待っててね」
クレハはそう言ってリサに向かってウインクした。リサはこれが何を意味するのか分かったらしく、「待ちましょう、リヴァルさん」とリヴァルを足止めしてくれた。ジュンキは頭に疑問符を浮かべながらも、クレハの後を追ってベースキャンプの隣のエリア１へと向かった。

「どうしたんだ？クレハ」

隣のエリア1に出ると、先に走って行ってしまったクレハが湖のほとりの倒木の上に座っているのを見つけて、ジュンキは歩み寄りながらクレハに尋ねた。
「いーから、ここに座って座って」
ジュンキは促されるままクレハの左隣に座った。クレハの顔が少しだけ赤い気がするが、気のせいだろうか。
「じゃーん」
クレハはそう言うとジュンキからは見えない右隣からバスケットを取り出し、ジュンキとクレハの間に置いた。被せてある白と赤のチェック模様のバンダナを取ると、中にはサンドウィッチがひとつ入っていた。それをクレハは取り上げ、ジュンキに渡した。
「作ってみました」
「これ、クレハが作ったのか？上手だな」
「さ、食べて食べて」
「ありがとう。頂きます」
クレハに見つめられながらだととても緊張するが、ジュンキはそっと口に含んだ。そして味わうように咀嚼する。――そしてジュンキは固まった。
「…どう？不味い？」
クレハの言葉を聞いてジュンキは咀嚼を再開し、そして飲み込むと口を開いた。
「どうして不味いって聞くんだ？ここは普通、美味しい？って聞くところじゃないのか？」
ジュンキの正論に、クレハは恥ずかしそうに顔を俯かせた。
「…私ね、すっごく料理が下手なんだ。だから自信がなくて…」
クレハはここまで言うと顔を上げてジュンキを正面から見据えた。
「お願い！正直な感想を聞かせて！正直に言ってもらわないと、直しようがないからさ…」
クレハの真剣なお願いにジュンキは悩みながらも、ここはクレハの願い通り、素直に言うことにした。

「その…味、だけど…何て言うか…うん…」
ジュンキは何度も口を開いては閉じを繰り返していたが、クレハのきらきらさせた青色の瞳に顔を覗かれ、ジュンキは感想を口にした。
「苦い…かな。にが虫を…噛み潰したような味…だったよ」
ジュンキが申し訳なさそうに言うと、クレハは腕を組んで考え始めた。
「う〜ん、苦いか…。苦いってことは甘くすればいいのかな…。うん、ありがと」
クレハはそう言うと、食べかけのサンドウィッチをジュンキの手から奪い取ろうとした。
「お、おいっ、クレハっ」
「もういいのっ！ジュンキがお腹を壊したら大変でしょ！」
「勿体無いだろ！」
「いいったらいいのっ！」
ジュンキは抵抗を試みたが、とうとうクレハに食べかけのサンドウィッチを奪われてしまった。クレハはその食べかけのサンドウィッチを乱暴にバスケットへ放り投げ、バスケットもクレハ自身の右隣に戻した。
「…」
「…」
ここでふたりの間を沈黙が包んだ。お互い、何を言えばいいのか分からないのだ。ジュンキもクレハも何か言わなければと思い考えを巡らし、互いに正面にそびえ立つ雪山の方を向いて顔を赤らめている。
「その…」
ジュンキが先に声を上げたので、クレハはそっとジュンキの方を向いた。
「あ…ありがとな。その…作ってくれて…サンドウィッチ…」
「…ううん。私が作りたかっただけだから…」
「…」

「…」

クレハの言葉を最後に、再び沈黙するふたり。しかしクレハはそっとジュンキとの距離を縮めると、体重を少しだけジュンキの右肩に乗せた。ジュンキの身体が少しだけ強張ったのを感じて、クレハは微笑んだ。そっとジュンキの顔を見るとジュンキは努力してクレハの方を見ないようにしているようで、視線があちらこちらへと泳いでいた。そしてクレハと目線が合うと、今度はクレハの方が恥ずかしくなって目線を逸らせた。

そんな事を繰り返しているうちにベースキャンプの方から近づいてくる足音が聞こえてきたので、ジュンキとクレハは最後に頷き合ってから立ち上がった。

「ドスギアノス、手分けして探したほうが早いんじゃないのか？」

「確かにそうだが、俺はお前を監視しなくちゃいけないんだ」

リヴァルの提案を、ジュンキは拒否した。もちろんそのせいで、リヴァルの機嫌は悪くなってしまう。

「あっそ。じゃあとっとと殺して戻りますかねぇ」

リヴァルはそう言うとリサ、ジュンキ、クレハを置いて先に行ってしまった。

「すみません…」

「リサちゃんが謝ることじゃないよ。行こう？本当に置いて行かれちゃう」

クレハに促されて、リサとジュンキも歩き出した。リヴァルが進んだ道は足跡が残っているので簡単に追いつけるだろう。

「あの…二人に話しておきたいことがあります」

先行するリサが歩きながら振り向いて言ったので、ジュンキとクレハは顔を上げた。

「リヴァルさんの両親…リオレウスに殺されたそうです…」

「…！」

リサの言葉に、ジュンキとクレハの青い瞳が見開いた。そして二人

の表情が曇る。リサは言葉を続けた。
「リヴァルさん…リオレウスの鱗や甲殻といった素材を見るのも嫌だそうです。だから…」
「だからリオレウスの太刀や防具を好んで使用している俺が嫌いなわけか…」
「それと…」
申し訳なさそうにジュンキを見ながら語り掛けていたリサはクレハに顔を向けた。
「リオレウスの番であるリオレイアも…その…」
「そうだったんだ…。でも、よかった。リヴァル君、私を嫌っていたんじゃなくて、装備が気に入らなかっただけだったんだ」
ジュンキとクレハはなぜリヴァルがあそこまで自分たちを拒絶するのか分からなかったが、リサのお陰で理解することができた。しかしハンターにとって生命線である武器や防具をそう簡単に変えるわけにはいかない。
「話してくれてありがとう。でも、この装備を変えるわけにはいかないなぁ」
「分かっています。ただ、リヴァルさんの気持ちを理解して頂きたくて…」
「もう十分理解したよ。だから安心して？」
「…はい」
クレハの言葉に、リサは微笑んだ。

リヴァルの大剣オベリオンによる強力な一撃で、ドスギアノスはリヴァルに対して一切の傷を与えることなく首を弾き飛ばされた。ドスギアノスの首が宙を舞うことによって、雪山の白い雪の大地に赤い花が咲いたように見える。リヴァルは大剣オベリオンを振って血糊を払うと背中に戻した。
「ふん…くだらない…」
リヴァルはドスギアノスの生首を持ち上げると来た道を戻るために

踵を返し、歩き出した。

下山しようと山中の洞窟へ差し掛かったところで、リヴァルはジュンキ達と合流した。

「どうだった?ドスギアノスは」

「…いい加減にしないか?こんなこと」

リヴァルは低い声でそう言うとジュンキ目掛けてドスギアノスの頭を投げつけた。リサとクレハは驚いて一歩退いたが、ジュンキは至極冷静にドスギアノスの頭を受け取った。

「…一体何の目的があってこんな雑魚を俺に狩らせる?」

「目的?何度言えば分かるんだ。山道の除雪作業の障害になるモンスターを狩ることだろう」

「…そうでした。そうでしたね」

リヴァルはこれ以上話をしたくないという口ぶりでリサ、ジュンキ、クレハの間を抜けると一人で先行して歩き出した。

「…最大の障害はティガレックスと知っているくせに」

リヴァルはひとり呟くと、怒りを抑えるように両拳を強く握り締めた。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　06

翌朝、リヴァルは村長を訪ねていた。雪崩によって通れなくなった山道の除雪作業の進み具合を聞くためである。しかし村長の表情は暗かった。

「…何があった？」

リヴァルが眉間にシワを寄せながら村長に尋ねると、村長はため息をひとつ吐いてから口を開いた。

「すまんの、リヴァル殿。除雪作業は遅れておる」

「何があった？村唯一の登山道なんだろう？村人も必死に除雪作業しているだろうに」

「…ティガレックスじゃよ」

「…」

村長の口から「ティガレックス」という言葉が出て、リヴァルは少し驚いた。だがここは無闇に声を上げず、村長の言葉を待つ。

「山道の除雪作業に当たっていた村人が危うくティガレックスに襲われそうになったのじゃ。幸い怪我人はいなかったが…」

「…よく怪我人が出なかったな」

「ハンター殿に護衛してもらっておるからの」

「そのハンターっていうのはもしかして…」

リヴァルはもしやと思い村長に尋ねた。

「ショウヘイ殿、ユウキ殿、カズキ殿が毎日見張っていて下さる」

やはり、とリヴァルは思った。ジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキの5人はパーティを組んでいる。ジュンキとクレハの2人がこっちにいる以上、あとの3人は何をしているのかと思っていたが、除雪作業をしている村人の護衛をしていたとは思わなかった。

「…すまぬの、リヴァル殿。やはりティガレックスが雪山を出ない限り、除雪作業を続けることはできないよ…」

「そうか…」
リヴァルはそう言うと踵を返し、集会場へ向かう。
「リヴァル殿」
背後から村長に話し掛けられ、リヴァルはその場で立ち止まって首だけを廻らせた。
「くれぐれも、ひとりで行こうとしないよう」
「…分かってる」
リヴァルはそう言うと、ひとり集会場へと入る。今日は運良く、リサやジュンキ達は集会場内にいなかった。リヴァルはカウンターへ直進した。
「おはようございます。今日はどのようなクエストを受注しますか？」
「ティガレックスを頼む」
「…分かりました」
先日この集会場でティガレックス討伐依頼を受注しようとした時と同じ受付嬢だったので、特に驚かれることもなくリヴァルはティガレックス討伐依頼を受注した。
「あの…お一人ですか…？」
「そうだ」
受付嬢が恐る恐る尋ねてきたので、リヴァルはなるべく棘を出さずに答えた。
「流石にお一人では危険なのでは…」
「…他の誰にも言うなよ」
リヴァルは受付嬢を睨むとそう言い、一旦集会場を出た。幸いリサ達に会うことはなく自宅へたどり着くことができたので、リヴァルは狩りの準備をすると集会場に戻り、そのまま一人で雪山へと出発した。
久々の一人での狩り。リヴァルの機嫌は良かった。この村に来てからというもの、散々な目に遭った。一人でのベースキャンプは少し

寂しくもあるが、それ以上に今自分は自由であるという気持ちの方が優っていた。指図してくる奴もいない。

「…」

しかし、何故か孤独感だけは拭えなかった。今までもずっとひとりで狩りをしてきたはずなのに、今自分は寂しいと感じている。

「ちっ…」

リヴァルはそんな自分が嫌になり、舌打ちすると支給品ボックスを開けた。中には4人分の応急薬、携帯食料などが入っており、自分が持ち込んだ分のアイテムも考えるとこれで事足りるだろう。リヴァルは背中の大剣オベリオンの斬れ味を確かめるとベースキャンプを出発した。

リヴァルは、ティガレックスを一人で狩ることに大きな意味を見出していた。それは一人でティガレックスを狩ることにより、自分の真の実力をあの男――ジュンキに見せつける事である。そうすれば自分のことを見直し、うまくいけば監視対象から外れるかもしれない。ティガレックスを狩ることによりポッケ村に恩を売ることもできる。そして山道の除雪作業が進めばドンドルマの街へ帰ることもできる。まさにいいこと尽くめである。

リヴァルは地図上でエリア番号1と振られた雪山の麓から山中の洞窟へ入り、中を抜けて雪山の中腹へと出た。今日の天気は吹雪。洞窟から出ると横殴りの吹雪のせいでリオソウルシリーズの防具が白く染まってしまう。ホットドリンクを飲まなければ凍死は確実だろう。

「…いないな」

どうやらこのエリアにティガレックスはいないようだ。ここからなら山頂へ登るルートと、今いるエリアと似たような中腹へ移動できる。リヴァルは一度隣の中腹エリアへ行ってみることにした。

隣のエリアにも、ティガレックスの姿はなかった。しかしそこには

草食獣であるポポが一頭倒れていた。
「…」
ポポは何者かに捕食されたようで、血を流して死んでいた。恐らくティガレックスの仕業だろう。
「近いか…」
リヴァルは改めて周囲を見渡すが、ティガレックスの姿はない。このエリアでもないようだ。
「残すは山頂か…」
リヴァルは新雪を踏み締め、山頂へと続く山道を登った。

山頂の天候は最悪だった。吹雪で足元すら見えない状況である。突風で身体ごと持って行かれそうになる。
「ちっ…」
リヴァルは舌打ちをしつつもゆっくりと前へ進み、この山頂エリアの中央であろうと思われる場所で立ち止まった。その場でしゃがみ、足元を確認する。そこには大型モンスターの足跡があった。この猛吹雪の中でまだ足跡が残っているということは、かなり近くにいるはずである。
「…」
リヴァルは立ち上がると耳を澄ませた。猛烈な吹雪の中で、リヴァル自信は音を立てずに意識を集中する。頭を動かずに、深い赤色の瞳だけを使って周囲を警戒する。

そして、聞こえた。

リヴァルは何者かの息遣いと石が転がり落ちる音が聞こえた方を振り向くと、そこには山頂の崖にしがみつき、こちらを狙っていた大型モンスターがいた。大型モンスターは気付かれたと思ったのかリヴァルに飛びかかったが、リヴァルは余裕を持ってそれを回避した。そのモンスターはこの猛吹雪の中でもはっきりと見える黄色の体色。

「轟竜ティガレックス…」
リヴァルは唇の端が持ち上がるのを感じながらも右手を背中の大剣
オベリオンへと持っていった。
「さあ、狩りの時間だ」
リヴァルはそう呟くと、ティガレックス目掛けて駆け出した。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　07

リヴァルは飛び出した。それと同時にティガレックスもリヴァルに跳びかかる。リヴァルは避けたりせずにティガレックスの懐をくぐり抜け、ティガレックスが通過する勢いを利用して一閃。鮮血が飛び散る。リヴァルは雪原を転がりながら起き上がり、ティガレックスを見据える。ティガレックスもすぐにリヴァルの方を振り向き、口を大きく開けて突進。リヴァルはこれも避けようとせず、大剣オベリオンを構える。徐々に迫るティガレックスの口。リヴァルはタイミングを合わせて大剣オベリオンを後ろに引き、ティガレックスの下顎目掛けて振り上げた。大剣オベリオンはティガレックスの下顎に直撃し、ティガレックスの突進は止まった。リヴァルはすぐに大剣オベリオンを横に一振りし、さらにダメージを与える。しかしティガレックスもただ攻撃を受けるだけではない。ティガレックスが四肢に力を入れたことにリヴァルは気付き、大剣オベリオンに重心を乗せてティガレックスから離れた。次の瞬間にティガレックスはその場で回転した。リヴァルの目と鼻の先をティガレックスの強固な尻尾が通り過ぎ、リヴァルは息を飲んだ。ティガレックスが後方に飛び下がり、リヴァルとティガレックスの間に距離ができる。

「…」

リヴァルはティガレックスの意図が分からず駆け出す。するとティガレックスは右半身を後ろに引き、右翼を使って降り積もった雪を突き飛ばした。

「…！」

リヴァルの身長くらいの雪玉が3つ、リヴァル目掛けて飛んでくる。リヴァルはスライディングして雪玉の下をくぐり抜け、ティガレックスに肉薄する。

「…死ね」

リヴァルはティガレックスの頭部に大剣オベリオンを振り下ろした。

ティガレックスは悲痛な叫び声を上げて数歩後ずさった。リヴァルの顔がリオソウルヘルムの下でにやける。ティガレックスは四肢に力を込めると一気に飛び上がり、翼を広げて山頂エリアを脱していった。

「…無駄なことを」

リヴァルはひとり呟くとその場にしゃがみ、アイテムポーチから砥石を取り出して大剣オベリオンを砥いだ。使い終わった砥石は投げ捨てて立ち上がり、リオソウルシリーズに故障がないか確認した後、リヴァルはティガレックスを追うために山を下った。ペイントボールを使ってマーキングするのを忘れてしまったが、雪原に残された血痕を追いかけるとすぐ見つけることができた。今回は隣のエリアだったので良かったが、この猛吹雪では血痕もすぐ雪に埋もれてしまうだろう。リヴァルはアイテムポーチからペイントボールを取り出すと向こうを向いているティガレックスに臭いが届かないよう風下から近づき、ペイントボールを投げると当時に駆け出した。猛吹雪がリヴァルの足音を掻き消してくれていて、ティガレックスはペイントボールが右翼に当たって弾けるまでリヴァルの接近に気付かなかった。ティガレックスが振り向いたと同時にリヴァルは再び頭部を斬りつけた。奇襲に驚き、ティガレックスは数歩後ずさり、そして大きく後ろに飛んだ。リヴァルは再び雪玉を投げてくるのだろうかと思ったが、ティガレックスは口を大きく開けて突進してきた。

「芸のない奴め」

リヴァルは腰のアイテムポーチに左手を突っ込むと閃光玉を取り出し、ティガレックスと自分の中間で破裂させた。ティガレックスは驚き、その場で停止した。その間にリヴァルはティガレックスに駆け寄る。そして背中の大剣オベリオンを構えて頭部に攻撃しようとした。しかしティガレックスはその場で回転し、リヴァルはその場で倒れることによってティガレックスの回転攻撃を避けた。

「ちっ…」

リヴァルは仕方なくティガレックスから距離を取る。様子を見ると、

ティガレックスはその場で無闇に自身を回転させたり、咆哮していた。

「閃光玉は使いにくいか…」

リヴァルは呟くと右手をアイテムポーチに突っ込み、小さな円筒管を取り出した。それをこのエリアのほぼ中央に半分埋めるとティガレックスを見据えた。ティガレックスは視界が回復したようで、頭を振った後にリヴァルを探し見つけた。リヴァルは円筒管の上に大剣オベリオンも構えずに立った。ティガレックスは最初警戒していたが好機と見たらしく、リヴァルに飛びかかった。リヴァルはティガレックスと激突する寸前まで待ってから横に飛んだ。先程までリヴァルが立っていた円筒管の上にティガレックスが乗った。するとティガレックスは身体を痙攣させ、呻き声を上げた。

「どうだ？シビレ罠の味は。死にゆく気分は」

リヴァルは起き上がるとティガレックスの正面に立ち、大剣オベリオンを上段に構えた。そして全身の筋肉を使い、一気にティガレックスの頭部に振り下ろした。ティガレックスの頭部はリヴァルの攻撃によって雪原に半分ほど埋まり、割れた甲殻から出血を始めた。リヴァルはさらに頭部へ攻撃を加えようと再び大剣オベリオンを上段に構え、振り下ろす。

「死ね」

しかしティガレックスはリヴァルの攻撃が当たる直前に頭を引いた。

「なっ…！」

慌ててリヴァルは顔を上げてティガレックスを確認した。シビレ罠の効果は切れたらしく、ティガレックスは身体を持ち上げていた。

（まずいっ！逃げ――）

リヴァルはティガレックスと距離を取ろうとして、誤ってティガレックスと目を合わせてしまった。蛇に睨まれた蛙の如く、リヴァルは硬直してしまう。ティガレックスの純粋な怒りがリヴァルの本能的な恐怖を呼び起こし、リヴァルは呼吸すら忘れていた。全身から嫌な汗が吹き出し、心拍数が急上昇する。猛吹雪の音は消え、爆発

しそうな心臓の鼓動のみがリヴァルの頭に響いていた。
（動け…！動けよ、俺の身体…っ！）
必死に呼び掛けても、リヴァルの身体は言うことを聞かなかった。
その間にティガレックスは大きく息を吸うと、至近距離のリヴァルに対して咆哮した。
「ぐあああああああああッ！！！」
目の前でティガレックスに咆哮され、リヴァルはその場に両手で耳を塞いでしゃがみ込むしかなかった。リオソウルシリーズの防具は飛竜の咆哮をある程度防ぐことができるのだが、ティガレックスの咆哮はそれ以上の威力があったようで、リヴァルを行動不能に陥れた。もしリオソウルシリーズの防具を装備していなければ、リヴァルは気を失っていたかもしれない。そしてティガレックスは無力なリヴァルの左肩に噛み付いた。
「ぐっ…！」
そのままティガレックスは身体を持ち上げる。するとリヴァルは足が地面に付かなくなってしまった。
「何をする気だ…」
リヴァルがティガレックスを睨みながら言葉を発した次の瞬間、ティガレックスは顎に力を入れ始めた。
「なっ…！ぐ…ッ！」
リオソウルメイルが悲鳴を上げて砕かれ、牙がリヴァルの素肌に突き刺さる。
「殺すなら…一思いに殺しやがれぇ…ッ！ぐあ…ッ！」
ティガレックスは今までの恨みでも晴らそうとでもいうのか、じわりじわりとリヴァルを殺すことに決めたようだ。徐々に徐々に力を加えていく。
「殺せ…ッ！殺せぇえええええッ！！！」
リヴァルが叫んだ次の瞬間、ティガレックスは一気にリヴァルの左肩を噛み砕いた。リヴァルの左肩の肉が弾け、飛び散る。
「があああああああああああああッ！！！！！」

リヴァルは身体を反らせて絶叫した。声が裏返り、全身が痙攣する。

「眼を閉じろ」

突然声が聞こえ、リヴァルは本能的に目を閉じた。次の瞬間爆発的な光が瞼を通して感じられ、落下する感覚の後に地面に叩きつけられる感覚。

「立てるか？逃げるぞ」

右肩を支えられ歩き出す。リヴァルが目を開けると、その男には見覚えがあった。確か――――。

「ショウヘイ…！」

「話は後だ」

ショウヘイに身体を支えられながら逃げる中、リヴァルは後ろを振り向いた。そこには視界を奪われて暴れているティガレックスの姿があった。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　08

リヴァルとショウヘイはベースキャンプまで戻ることができた。ショウヘイはリヴァルを座らせると、ベースキャンプの中に備えられている緊急治療セットを取り出してきた。そしてリヴァルのリオソウルヘルムを取り、リヴァルの右隣に置いた。

「ショウヘイ…」

「今は話すな。…防具、脱げるか？」

「…無理だ」

「だろうな」

リヴァルの答えはショウヘイも予測できていた。この左肩の状態ではリオソウルメイルとリオソウルアームを脱がすことはできない。リオソウルの甲殻は非常に硬く、人の手で切り裂くことはとても困難で、防具を破壊することもできない。

「このままの状態で手当てするぞ」

「…ああ」

ショウヘイは仕方なく、このままの状態で応急手当てをすることにした。まず防具の上からリヴァルの左肩口をロープで縛り、出血量を減らす。次に傷口を確認するが、傷はとても深い。左肩の肉は半分無くなっており、骨が見え隠れしている。

「…まずは骨を取り除くか。リヴァル、これを咥えていろ」

ショウヘイはそう言ってリヴァルに適当な太さの枝を与えた。リヴァルも黙ってそれを咥える。

「いいか？いくぞ」

ショウヘイは緊急治療セットの中から大型のピンセットを取り出すと、リヴァルの左肩の中の砕けた骨を取り除き始めた。

「ううーッ！ぐうーッ！」

「辛抱しろ。痛いのは生きている証だ」

時間をかけて、ショウヘイは目立つ砕けた骨を取り除いた。

「次は止血だな…。リヴァル、激痛で気を失うかもしれないからな」
ショウヘイはそう言うと焚き火の中から熱せられた焼け石を火鋏で摘まみ上げた。
「行くぞ」
ショウヘイはリヴァルを一度見てから傷口に焼け石を当てた。
「んぐううううあああああああッ！！！！！」
今までに体験したことのない激痛がリヴァルの左肩を襲った。リヴァルの口内でショウヘイが渡した枝が噛み砕かれる。
「暴れるな。我慢しろ。もうすぐ終わる」
やがて止血を終えると次にショウヘイはアイテムポーチから薬草を取り出して水洗いした
「包帯を巻くぞ。薬草を挟んでおくからな」
ショウヘイの提案を、リヴァルは頷くことで返事した。ショウヘイは水で洗った薬草をリヴァルの傷口に当て、きつく包帯を防具の上から締める。
「…よし、とりあえずこれで大丈夫だろう。よく耐えたな」
ショウヘイが安堵してリヴァルの顔を見ると、リヴァルは眉間にシワを寄せて口の中の枝の欠片をぺっと吐いたところだった。
「食べながらでも話そう。時間はたくさんある」
ショウヘイはそう言うと立ち上がり、焚き火の上のこんがり焼けた肉を取り上げた。
「テントのベッドに腰掛けながらでも食べようか」
そう言ってショウヘイがテントの中の簡易ベッドに腰掛けるとリヴァルは無言で立ち上がり、ショウヘイの隣に微妙な距離を置いて座った。
「…ありがとう。助かった」
「危なかったな。危うくティガレックスのディナーになるところだった」
「ふん…」
リヴァルが不機嫌そうにショウヘイから目を逸らすと、ショウヘイ

は小さくため息を吐いてからリヴァルにこんがり焼けた肉を差し出した。
「ホットミートだ。食べると温まる」
リヴァルはショウヘイとホットミートを見比べた後、渋々受け取ってかぶりついた。意外に美味しく、さらに一口二口と食が進む。すべて食べ終わるまでショウヘイは何も話さず待っていた。
「…ありがとう」
「どういたしまして、だな。さて…」
ショウヘイは真剣な顔になるとリヴァルに尋ねた。
「どうしてリヴァルは一人で狩りに出ていたんだ？確かジュンキがついているんじゃなかったか？」
ショウヘイに痛い所を突かれて、リヴァルは押し黙ってしまった。しかしショウヘイなら話しても大丈夫な気がして、リヴァルは簡単に経緯を説明した。
「…なるほど。ジュンキを驚かせ、村人から感謝され、街にも戻れる。確かに一石三鳥だな」
「…」
「でもお陰で危ない目に遭った」
「どうしてあんたがここにいるんだ？まさかジュンキに遣わされたとか」
リヴァルの言葉に、ショウヘイは小さく笑った。
「いや、違うよ。薬草を探しにきたのさ」
「薬草？」
「ああ。パーティメンバーの一人にカズキという奴がいてな。そいつが酒に酔って外で寝たらしく、風邪を引いたんだ。今では熱も下がったけど、一応ね」
「そうか…。前から気になっていたんだが」
「何だい？」
「お前たちはいつからあの村にいるんだ？あの村の出身じゃないんだろ？」

「…どこから話せばいいかな」
ショウヘイはしばらく考えた後、シュレイド王国軍から追われ、ドンドルマの街を出たところからリヴァルに話した。
「そうか…。じゃあチヅルというのは？俺は見たことないが…今はソロで活動中か？」
「…」
ショウヘイはドンドルマの街を出た時の話に、チヅルの名前を出してしまっていた。そしてチヅルはもういない。ショウヘイは事実をリヴァルに伝えることにした。
「…死んだんだよ。俺達が追いつく前に、一人でリオレイアと戦ってね」

ショウヘイはジュンキから聞いたというチヅルの最期を話してくれた。
「そうだったのか…。すまない、こんなことを聞いて」
「いや、いいさ。チヅルはハンターとして誇り高く死んだんだよ。本人も満足してたってジュンキは言ってたし」
「…」
「…さて、そろそろ俺は村に戻るよ。リヴァルも戻るか？普通なら動けない怪我だ。戻るのが妥当だと思うが？」
ショウヘイはそう言って立ち上がった。
「…すまない、ショウヘイ。俺は、何としてもあいつを狩りたい」
リヴァルの答えに、ショウヘイは小さくため息を吐いた。
「その腕は使い物にならないだろう。右腕だけであの重い大剣を振り回す気か？」
「そのつもりだ」
リヴァルの答えを聞いてショウヘイは目を閉じ考え、目を開くと同時に口も開いた。
「ふたつだけ言わせてくれ。ひとつ、絶対に死なないこと。これ以上葬儀に出たくないからな。ふたつ、俺もついて行く」

ショウヘイの言葉を聞いて、リヴァルは眉間に皺を寄せた。
「…あいつは俺が狩る」
「邪魔はしないさ。遠くから見ているよ」
「…勝手にしろ」
リヴァルはそう言うと立ち上がり、狩りの準備をした。傷口は今も痛むが、この際仕方ない。もしこれで腕が動かなくなりハンターを引退することになってもそれでいい。リヴァルは準備を終えると、ショウヘイを伴ってベースキャンプを後にした。

ＭＨ３ｒｄ　第１章　重なる想いずれる思い　０９（前書き）

本文中に問題箇所を見つけて、修正するのに時間がかかってしまい、投稿が遅れてしまいました。

ＭＨ３ｒｄ　第１章　重なる想いずれる思い　０９

相変わらず山頂付近の天候は最悪で、猛吹雪で何も見えなかった。しかし微かに臭うペイントボールが、ティガレックスが近くにいることを教えてくれている。吹雪の音に混じって聞こえてくる荒い息づかい。確かに、いる。ショウヘイもこのエリアにいるはずだが完全に気配を消していてリヴァルは感じ取れない。リヴァルが感じ取れるのは必死に生きようとする生命の本能と、明らかな殺意だけ。そしてそれは見えた。猛吹雪の中でも見分けられる黄色の体色。しかし今は所々に赤い筋が入っている。そう、リヴァルがつけた傷から出血しているのだ。一歩一歩新雪を踏み締めてリヴァルが近づくと、ティガレックスも気づいてリヴァルを振り向いた。両者の間を沈黙が包み込む。

「…苦しいだろう？」

リヴァルはティガレックスに聞こえるように言った。

「辛いだろう？痛いだろう？もうすぐ終わる…」

リヴァルは背中の大剣オベリオンを抜いた。それを右腕だけで持つが、流石に構えることは出来ずに雪の上に擦らす。

「さあ…来いっ！」

リヴァルがそう言うと、ティガレックスは雪山全土に響くであろう咆哮を上げた。命の奪い合いが、再び始まった。

ティガレックスは正面にいるリヴァルに向かって突進した。これをリヴァルはギリギリで避けてティガレックスの右翼を一閃した。右腕だけの力ではたかが知れているが、ティガレックスが突進してくる力も利用したため攻撃力に遜色はなく、ティガレックスの翼膜を斬り裂く。ティガレックスはリヴァルが避けたことにすぐ気が付き方向転換し、再びリヴァルに突進する。しかしこれもリヴァルはギリギリで避けて今度は左翼を一閃、翼膜を斬り裂く。ティガレック

スは転ぶ形で突進の勢いを殺し、リヴァルを振り向いた。
「これで遠くへは逃げられないな」
リヴァルはひとり呟くとティガレックス目掛けて走り出した。ティガレックスは前脚を使って雪玉を飛ばしてきたが、リヴァルはこれを余裕を持って避けてティガレックスに肉薄する。そして隙だらけのティガレックスの頭部に大剣オベリオンの重い一撃を入れようとして、リヴァルは深い赤色の瞳を見開いた。ティガレックスが凶悪な口を開いてリヴァルに噛み付こうとしてきたのだ。リヴァルは上半身を捻ってこれを紙一重で避けたが、体勢を崩してしまう。そこにティガレックスの前脚が襲いかかるがリヴァルはこれを転がって回避。しかし大剣オベリオンをティガレックスの足元に置き忘れてしまう。
「ちっ…！」
リヴァルはどうしようかと考える間に、ティガレックスはリヴァルの大剣オベリオンを咥えると後方に放り投げた。
「なっ…！」
今のティガレックスは笑っているように見えるのは幻覚か。リヴァルは全身に嫌な汗が噴き出すのを感じていた。武器のないハンターなんて草食竜と同じだ。だが人間には知恵がある。リヴァルはあえてティガレックスに突撃した。これにはティガレックスも予想外だったのか動きが一瞬止まる。その隙にリヴァルは腰から剥ぎ取りナイフを抜き、ティガレックスに投げた。それは見事ティガレックスの右目に刺さり、ティガレックスの視力を半分奪った。ティガレックスは痛みにのたうち回る。その隙にリヴァルは大剣オベリオンの回収に急ぐ。
（急げ…！急げ…！）
背後でティガレックスが暴れている。リヴァルは心臓が弾けそうに鼓動しているのを耳で、身体で感じながらも走る。そして新雪に突き刺さって直立している大剣オベリオンに手を伸ばす。
（届けぇ…っ！）

リヴァルの右手が大剣オベリオンの柄を掴む直前、リヴァルはティガレックスによる雪玉攻撃を背中に受けて弾き飛ばされてしまった。
「がは…ッ！」
リオソウルヘルムが吹き飛び、口から唾液が飛び出す。リヴァルは放物線を描いて宙を舞い、新雪の中に墜落した。
「…ッ！」
起き上がろうとして視界に突進してくるティガレックスの姿が写り、リヴァルはすぐにその場を飛び退いた。ティガレックスの突進攻撃はリヴァルに当たらず、勢いのままにリヴァルから遠ざかってしまう。その隙にリヴァルは雪の上に放り投げられたままの大剣オベリオンを回収し、右手に添える。
「…殺す」
突進の勢いを殺して停止し、振り向いたティガレックスを睨みつける。リヴァルの中で、純粋な殺意が膨れ上がっていく。
「…殺してやる。…俺をコケにしやがって…なぁ？」
リヴァルの声を聞いたのかどうか分からないが、ティガレックスは凶悪な口を大きく開いてリヴァルへ突進してきた。しかしリヴァルはその場を動かない。
「…死をもって償え」
ティガレックスがリヴァルに噛み付く直前、リヴァルは右腕だけで大剣オベリオンを振り回し、ティガレックスの左翼を根本から斬り飛ばした。ティガレックスは体勢を崩し、その場で悲痛な叫び声を上げる。
「ははっ…情けないよなぁ…。飛竜が翼を失ったらただのトカゲだもんなぁ？」
リヴァルはゆっくりとティガレックスの右翼側にまわる。そして、一撃。ティガレックスの右翼は胴体から切り離される。ティガレックスの悲鳴。
「あはっ。愉快だねぇ。愉快なまま死ね」
リヴァルはそう言うと大剣オベリオンを構える。狙うは、首。

「リヴァル！やめろ！」
エリアの端で見守っていたショウヘイが駆け寄ってくるが、リヴァルは何のためらいもなく大剣オベリオンを振り下ろした。リヴァルがティガレックスの最期に見たものは、恐怖に怯える瞳だった。

ショウヘイが駆け寄ると、そこには右翼、左翼、そして頭部が胴体から切断されたティガレックスがリヴァルの隣に横たわっていた。
「…リヴァル」
ショウヘイがリヴァルを呼ぶと、リヴァルはゆっくりとショウヘイを振り向いた。
「…！」
ショウヘイは驚きのあまり絶句してしまった。リヴァルの両方の瞳が、竜のそれになっていたのだ。色はジュンキのそれに似ている深い蒼色。
「…討伐完了」
リヴァルはそう言うとティガレックスから鱗を一枚剥ぎ取り、アイテムポーチに納めた。そしてショウヘイを振り向く。
「…なんだ？言いたいことがあるなら言えよ」
振り向いたリヴァルの瞳はいつもの深い赤色に戻っていた。ショウヘイはゆっくりと口を開く。
「どうしてこんなことを？」
「どうして？変なことを聞くんだな。ティガレックスは俺達をああやって喰うぜ？」
「…お前、楽しんで殺しただろ」
「さあな」
リヴァルは大剣オベリオンをティガレックスの首元から抜くと、血糊も拭かずに背中へ戻した。
「…お前はそれでも竜人か！」
ショウヘイの言葉を聞いて、リヴァルは首を傾げた。
「竜人？なんだ、それ」

「…お前、まだジュンキから聞いていないのか」
「…ああ。何だ?竜人って」
ショウヘイはジュンキがリヴァルに竜人のことを既に話したと思っていたが、ジュンキはまだリヴァルに話していないようだ。ショウヘイとしてはジュンキがリヴァルに説明するのを待っていようと思ったが、このままリヴァルを誤魔化せそうにはなかった。仕方なく、ショウヘイはリヴァルに竜人について説明することにした。
「村への帰り道で話す」
「じゃあ帰りましょうかねぇ」
リヴァルはそう言うとリオソウルヘルムを拾い上げ、このエリアの出口へ一直線に歩き出した。ショウヘイはそのリヴァルの背中を見た後に惨殺されたティガレックスを振り向き、深く一礼した。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　10

雪山からの帰り道。ショウヘイはリヴァルに竜人について説明することにした。
「リヴァル」
「なんだ？」
「まず先に言っておくが、お前は竜人だ」
「だから竜人って何なんだ？俺は人間だ。竜人族じゃない」
「竜人族と竜人は根本的に違う。竜人族は太古の昔から人間と同じく基本的に同種族間で生まれるものだが、竜人は人と竜の間の子なんだ」
「な…！？」
リヴァルは深い赤色の瞳を見開いて驚く。ショウヘイは一拍置いてから説明を続けた。
「驚くのも無理はない。俺かって信じきれてないからな。人と竜の間に生まれたのが竜人。お前はその末裔だ」
「…どうしてそう言える？」
「…説明が難しいな。お前、ティガレックスを…倒した瞬間、何か感じなかったか？」
「…抑えきれない殺意に、不思議なくらいの高揚感があった。あと、こう…何かが、内側から這い出てくるような、そんな感覚があった」
ショウヘイが頷く。
「お前はまだ竜人として完全に目覚めていない。あと少し、何かキッカケがあれば目覚めるはずだ」
リヴァルとしてはショウヘイが言っていることを信じることができなかった。話が飛躍しすぎている。しかしここでショウヘイの話を頭から否定すれば会話が続かなくなってしまうので、リヴァルは自分が知りたいことだけを尋ねることにした。
「それはそうとして…俺が竜人だとどうなるんだ？」

「…竜人は、世界の均衡が崩れそうになると、それを正すために目覚めるらしい。そしてお前が感じたその感覚、それはまさしく、お前の中の竜が目覚めようとしているからだ。そこで俺としては、お前の竜の力を貸して欲しい」
「力を貸す？何に対して？まさか世界を正すため、とか？」
「それは俺達にも分からないんだ。だが近々、何かが起こる。そんな気がしてな…」
「…次の質問いいか？俺が竜人だとして、俺に何か影響があるのか？」
「そうだな…影響は主に3つある。ひとつ、瞳だ」
「瞳…？」
「ああ。竜人になっている間…俺達は竜人化と呼んでいるが、その間は瞳が竜のそれになる。竜人である目安だな。さっきも、お前の瞳は竜のそれに変化していたぞ。自分じゃ気づかないが」
リヴァルは黙ったまま頷いた。
「ふたつ、筋力が増強され、回復力も上がる。竜人ということは、竜の強靭な筋力と体力、精神力と回復力を備えていることになる。だからその肩の怪我も恐らく完治するだろう」
「便利な身体だな」
「まあな。3つ、竜と会話が出来る」
「…！」
リヴァルは黙ったまま深い赤色の瞳を見開いた。
「竜にも言葉がある。人間に聞き取れないだけだ。だが竜人ならそれを聞き取れる」
「…馴れ合いはごめんだ。ところでひとつ聞いてもいいか？」
「何だ？」
「ショウヘイは「俺達」って言っていたな。ということは、ショウヘイも…？」
「ああ。俺も竜人だ。ミラボレアスの血を引いている」
「血…？」

「ああ、説明してなかったな。自分が何の竜の血を引いているか俺達は知っている。俺はミラボレアスだ」
「ミラボレアス…？聞いたことないな」
「人々の間では伝承と化しているからな。けど実在するのさ。俺はミラボレアスと人間の末裔さ」
「じゃあ、俺は…？」
「それは俺にも分からない。ミラボレアスに聞かないと」
「そのミラボレアスが知っているのか？」
「知っているというより、判別できるが正しいか。ミラボレアスは竜の王だからな」
「そうか…話を戻すが、ショウヘイは俺達は竜人って言ったよな。ということはショウヘイだけでなくて…？」
「ああ。俺以外にも竜人がいる」
「誰だ？」
「死んだチヅル」
「…」
「クレハ」
「あのリオレイア女か」
「そして…ジュンキ」
ショウヘイがジュンキの名前を出した瞬間、リヴァルは一瞬だがにが虫を噛み潰したような顔をした。
「…その3人は何の血を引いている？」
「…チヅルはイャンガルルガ。クレハはリオレイア。ジュンキはリオレウス――」
「がああッ！」
チヅル、クレハ、ジュンキと話を進めるごとにリヴァルの顔は凶悪になり、リオレウスの部分でリヴァルは野獣の如く吠えた。
「くそっ！何から何まで腹が立つ奴だ！」
リヴァルは小石を蹴り飛ばすと早歩きで先行してしまったので、ショウヘイの説明はここで終わってしまった。

ポッケ村の集会場に戻ったリヴァルが最初に見たものがリサ、ジュンキ、クレハ、ユウキ、カズキ、村長、受付嬢が集まって話をしているところだったので、リヴァルは帰還早々機嫌が悪くなった。狩りが終わった報告をしようとカウンターに近づいたどころで案の定ジュンキに声を掛けられたので、不機嫌な表情のままリヴァルはジュンキを睨んだ。

「…ティガレックス狩りに出たんだな？」

「…だから？」

ジュンキが何を言ってくるのか大体分かっていたので、リヴァルは面倒臭そうに答えた。

「どうしてひとりで行った？」

「俺ひとりで大丈夫だからだ」

「その怪我でよくそんな事が言えるな」

「フン。何が言いたい？」

「分からないのか？お前は自殺しに行ったようなものだ」

「俺の命は俺の勝手だ」

「お前な…知っているのか？こちらの受付嬢がどれだけお前を止めなかったことを後悔し、村長や俺が心配し、クレハ、ユウキ、カズキが怒り、ショウヘイに迷惑を掛けたことを――」

「あああッ！！！うるさいんだよお前はいちいちよお！！！えええっ！！！？生きて帰ったんだから別にいいだろうが！！！ティガレックスは死んだ！！！俺は村を出る！！！それでいいだろうがあ！！！」

リヴァルは大声で怒鳴り散らしたが、誰一人として反応しなかった。それがリヴァルをさらに苛立たせる。

「…リヴァル。ティガレックスの件はもういい。お前に話がある。突然で驚くだろうけど、お前は竜人――」

「ごちゃごちゃうるさいっつってんだろ！！！大体なぁ――――！！！」

「女ひとり守れなかった奴にあれこれ言われる筋合ねぇんだよ！！！」

リヴァルの言葉は、ジュンキの心の傷を深く抉った。ジュンキの青色の瞳が見開き、瞳孔が震え出す。ジュンキの脳裏に鮮明に思い出される、血の海に横たわるチヅル。徐々に冷たくなっていく身体。二度と開かない瞼、口。二度と聞けないその声。

「リヴァルッ！！！手前ぇぇぇッ！！！」

突然カズキがジュンキの前に出て、リヴァルに殴りかかった。カズキは怒りに任せてリヴァルを殴ろうと右腕を振り上げたが、誰かに右肩を掴まれたのでカズキは怒り顔のまま振り返った。そして驚く。カズキの右肩を掴んだのは他の誰でもない、ジュンキだった。ジュンキは俯いたまま、今にも消えてしまいそうな弱々しい声を出した。

「いいんだ、カズキ…。チヅルを助けられなかったのは…俺のせいなんだから…」

カズキは言葉に詰まったが、すぐリヴァルを睨みつけた。リヴァルはフンッと鼻息を荒げると集会場を出ていった。

「リヴァルさんっ！」

リサが慌ててリヴァルを追いかけて集会場を出て行くと、沈黙がジュンキ達を包んだ。

リヴァルは自宅のドアを思いっ切り蹴って開くと中に入り、壊れても不思議ではない勢いで閉めた。しかし、その扉はすぐリサの手によって開かれる。

「リヴァルさん！どうしてあんな事を言ったんですか！今すぐ、ジュンキさんに謝って下さい！」

「お前もいちいちうるせぇ女だな！ああっ！ティガレックスは死んだんだ！それで満足だろ！？山道が開通したらすぐにこんな村出ていってやるよ！」

「…」
「な、なんだよ…」
「…リヴァルさん、最低です」
リサは涙目でそれだけ言うと、リヴァルの家を出ていった。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　11

リヴァルがジュンキに暴言を吐いたその日の夜、クレハは村唯一の青果店兼雑貨店を覗いていた。最近のクレハは狩りに出ない日にこっそり料理の練習をしているので青果店へよく顔を出すのだが、顔を出す度に商品の数が減っている。

「あ、霜降りトマトがない…」

「ごめんね、クレハちゃん。とうとう在庫が切れたんだよ」

「早く山道が開通するといいですね」

「そうじゃないと村人全員干からびちゃうよ」

クレハは青果店側を担当しているおばさんと他愛のない会話を済ますと、村人達のことも考えて自分が必要な分だけ野菜を買ってから帰路へついた。もう陽はとっくに沈み、ポッケ村は静寂に包まれている。この村は空気が冷たく澄んでいるからかドンドルマの街よりも星空が綺麗に見えて、クレハは好きだった。5人で寝泊りしている家の玄関を開き、中に入る。

「ただいまー」

「お、おかえり」

冷たい石の床に座布団を敷いて暖炉の前に座っているユウキが振り向いて言った。ショウヘイは自分のベッドの上で太刀「鬼神斬破刀」を丁寧に拭いており、カズキはビール片手におつまみを食べている。

「…あれ?ジュンキは?」

「風呂だよ。ひとりにして欲しいってさ。…リヴァルの言葉、結構効いたらしい」

「ふ～ん…」

クレハは右手の人差指を顎に当てて青色の瞳をパチパチさせると、とりあえず買ってきた野菜をクレハ以外使わないキッチンルームの野菜籠に入れ、再び5人が寝ている大部屋に戻る。そして自分のベッドに腰掛け、機会を伺う。ユウキがトイレに立ち、ショウヘイが

アイテムボックスの整頓を始め、カズキがキッチンルームへおかわりを取りに行った瞬間を狙って、クレハはこっそり家を出た。

その頃、ジュンキはひとりで湯船に浸かっていた。ポッケ村には温泉があり、村人達が自由に使える公衆浴場となっているのだ。その公衆浴場でジュンキはひとりで入っていた。湯船を囲んでいる岩のひとつにジュンキは両腕を乗せ、その上に顎を乗せて月を見上げている。今夜は満月で、申し訳程度しか明かりがない公衆浴場内を照らしてくれている。

「……チヅル」

ジュンキが誰にでもなく呟き、静かに目を閉じた。その時、公衆浴場の木の扉が開く重い音がジュンキの右側から響いた。右側、ということは当然左側もある。ジュンキはこちら側から入ってきた。そう、この公衆浴場は混浴なのだ。ただでさえ小さい湯船を二分することは出来ないと村長は考えているらしい。当然入ってきた女性を見るわけにいかず、ジュンキはそのままの体勢を維持しようとした。これなら入ってきた女性に背中を向けていることになるからだ。ヒタヒタと冷たい石畳の上を歩く音が近づき、湯船に足を入れる音が静かに響く。湯船に入ってきた女性はゆっくりとジュンキの背後に迫り、真後ろで止まった。

「…？」

何故湯船に浸からず、自分の背後で立っているのだろうか。ジュンキが疑問に思っていると、背後の女性が声を掛けてきた。

「…ジュンキ」

突然名前を呼ばれて、ジュンキはその場で目を開いた。まさか！そんな馬鹿な！とジュンキは耳を疑った。どうしてここに！？だがそんなはずはない！だって…あいつは女だぞ！とジュンキは混乱してしまい、誤って（？）振り返ってしまった。そこにはもちろんひとりの女性。バスタオルを胴に巻いていて全貌は明らかになっていないが、決して筋肉質ではないけど引き締まった腕と脚、そしてその

表面に所々見える古傷が、彼女がハンターであることを証明している。腰の上まで伸ばされた長い青色の髪は湯気を吸って少し先端が広がっている。そして髪と同じ色の瞳を持つ顔は、恥ずかしそうにほんのりと朱色に染まっていた。他の誰でもない、クレハだ。クレハが風呂に入ってきた。

「ク…クレハ…！？」

ジュンキが驚きの声を上げると、クレハは目をそらせてから口を開いた。

「来ちゃった…」

「な…っ！あ…っ！――――…っ！！！」

ジュンキは目のやり場に困り視線を泳がせていたが、クレハの、バスタオルの上から見て取れる胸のふたつのふくらみを見つけてしまい、慌ててクレハに背を向けた。

「…どうして背中を向けるの？」

「お、俺かって…男だ…っ」

「ちゃんとタオル巻いてるよ？」

「……っ！」

「ふふっ…」

クレハは微笑むと湯船に浸かり、ジュンキの背中に自身の背中を預けた。クレハの背中がジュンキの背中に触れた瞬間、ジュンキの身体が強張る。その反応を背中で感じて、クレハは再び微笑んだ。しばらくの沈黙の後、ジュンキが先に口を開いた。

「ど…どうして入ってきたんだ…？」

「ここ、混浴だよ？」

「そ、そうじゃなくてだなぁ…！」

「…ねえ、ジュンキ。また、チヅルちゃんのこと、考えてたでしょ」

クレハの言葉を聞いて、ジュンキは黙った。クレハがため息を吐いたことを背中で感じる。

「…確かに、リヴァル君にひどい事言われたね」

「…ああ」

「でも…チヅルちゃんは落ち込んでいるジュンキのこと、好きじゃないと思うな」
「…」
「元気出して？ね？」
「…ありがとう。少しだけど、元気出たよ」
「ならよかった」
クレハの言葉を最後に、2人は沈黙した。2人の顔が赤いのは、温泉に浸かっているからだけではないだろう。やがて偶然に2人の手が触れたその瞬間、クレハは湯船から立ち上がった。
「そ、そろそろ上がるね。また倒れたら大変だし…」
「あ、ああ…」
ジュンキは振り返る訳にもいかず、クレハに背中を向けたまま答えた。クレハが言った「また」というのは、以前ドンドルマの街を拠点に活動していた時にクレハが自室の浴室でのぼせて倒れ、ジュンキに介抱された時のことを指すのだろう。この公衆浴場から出るまでジュンキは身動きできず、クレハがいなくなってからようやく肩の力を抜いた。
「クレハ…意外と…大きいんだな…」

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　12

ジュンキが公衆浴場から出ると、クレハは雪が降り積もる中、公衆浴場の軒先で待っていてくれた。
「寒くなかったか？」
「ううん、へーき」
ジュンキはクレハと並んで歩き、5人で住んでいる家へと戻った。

その夜、クレハは眠れなかった。眠ろうとしても手や足の指先、両肩から冷えがクレハを襲い、寝付けない。ポッケ村は1年間の殆どが雪に埋もれる場所なので家の造りから布団まで防寒対策が施されているのだが、クレハの冷えには効果がなかった。敷き布団と掛け布団の間にガウシカやポポの毛皮で作られた毛布を挟み、その中でクレハは寝ているのだが、胴体の部分は暖かくても指先や肩は冷えたままだ。少しでも指先や肩に暖を取らせようとクレハは布団の中で丸くなっているのだが、それでも寝付けない。他の4人はどうだろうと思いクレハは布団から顔だけを出すと、月明かりでぼんやりと明るい室内を見渡した。
ショウヘイは寝相がいいようで、真っ直ぐ天井を向いたまま寝ている。それに比べてカズキはひどいもので、掛け布団や毛布がベッドから落ちているが、カズキは起きる気配がない。カズキのそういうところが羨ましいと思いつつ、クレハはさらに視線を巡らせた。ユウキは掛け布団や毛布を蹴り飛ばしていないが、「ランポスの串焼き…」などと訳の分からない寝言を呟いている。そしてジュンキも布団に異常は見られず寝言も言っていないが、顔だけがクレハと反対の方を向いていた。
「…」
クレハはもう一度寝てみようと布団の中に潜り込んだ。目を閉じ、意識を暗闇に委ねる。しかし、やはり冷えがクレハを寝付かせてく

れない。クレハは布団の中で目を開けると、もう一度布団から顔だけを出した。そしてジュンキの様子を伺う。ジュンキは先程と同じく、クレハに後頭部を向けたまま眠っている。

「…よし」

クレハはある決心をすると、布団から飛び出した。一気に室内の冷気がクレハを襲う。実はクレハは寝巻きでも、ましてや防寒着を着ているわけでもない。普段の、防具の下に着ているインナーだけ着用しているのだ。当然露出度は高く、腕や脚、腹部は丸出しである。何故か。それは寝巻きなどという物を着て寝るというのは貴族がするもので、「寝る時に寒いなら何か着る」という発想がクレハに、それ以前にハンター達には無いからなのである。

「ううっ…寒ぃ…」

息が白くなる。クレハは氷のような床板を、音を立てないように歩いてジュンキの枕元に立った。

寝ているベッドが上下に揺れ、冷気が一瞬背中を掠めたことにより、ジュンキは目が覚めてしまった。目が覚めてしまったものは仕方ない、もう一度寝よう。ということで姿勢を正すべくジュンキが反対側を振り向いたところで、枕元に何かあることに気がついた。それは流れる川のように枕元から始まり、ジュンキの布団の中へと伸びていた。

「…？」

寝ぼけている頭が考えることを拒否し、ジュンキは考察よりも行動を先におこした。掛け布団を、毛布と一緒に持ち上げる。

「な…っ！？」

眠気など一気に吹き飛んだ。布団の中に、誰かいる。誰だと考える前に、ジュンキは誰か知っていた。ただ信じたくないだけだった。

「ク…クレ…ハ…？」

ジュンキが恐る恐る声を上げると、布団の中のクレハはゆっくりと、恥ずかしさのあまり朱色に染まっている顔を上げた。

「ジュンキぃ…」
「…っ！」
クレハにゆっくりと、ねだられるような声で名前を呼ばれて、ジュンキは顔があっと熱くなるのを感じていた。
「寒くて…眠れないの…。一緒に…寝かせて…」
クレハはそこまで言うと、顔を布団の中に埋めてしまった。ジュンキは何度か瞬きを繰り返した後、そっとクレハの両肩に手を添えた。クレハが顔を上げてジュンキの瞳を覗く。
「…冷え切ってるじゃないか。もしかして、俺が温泉から出てくるのを待っていて…？」
「ホットドリンク、ケチらずに飲めば良かったなぁ…」
クレハは目線を反らせてからそう答えた。ここでジュンキはあるひとつの考えが浮かんだが、それをやってはいけない、クレハに殴られてしまう、とその考えを否定する。しかしこれしかクレハを温める方法が思いつかないジュンキは、殴られる覚悟で行動に移した。
「その…クレハ…」
「なぁに？……ぁ」
ジュンキはクレハの背中に両腕をまわすと、そっと抱き締めた。クレハの身体が強張り、緊張の糸が張っているのがジュンキにも分かる。
「嫌なら…嫌って言ってくれ…。すぐに放すから…」
ジュンキの言葉を聞いて、クレハは「ううん」と言って額をジュンキの肩口に預けた。
「ジュンキって…あったかいんだね…」
クレハは今インナーしか着ていない。それはジュンキも同じで、クレハはジュンキと直に触れる場所からジュンキの暖かさを享受することができた。ここでクレハもジュンキを抱き返し、さらにクレハは自身の脚をジュンキに絡ませた。これにはジュンキも驚いたようで、今度はジュンキが身体を強張らせる方だった。

目が覚めると、いつもの天井が目に入った。
「朝か…」
普段通りの朝。どうやら昨日の夜の出来事は――――。
「夢…だったか…」
ジュンキはそう呟くと、安堵の溜め息を吐いた。いくら狩りの現場で命を預け合う仲間同士でも、同じベッドで眠るのはどうしても抵抗がある。ましてやクレハは女性だ。いくらなんでもこれはマズいだろう。確かに、クレハは最近ジュンキに好意を抱いてくれているようだし、ジュンキ自身もクレハに対しては好意がある。しかし好意だけで同じベッドで寝るのは流石に…行き過ぎだろう。これは夢で良かったのだと自分に言い聞かせて起き上がろうとして、ジュンキは固まった。左腕を、掴まれている。
「…」
ジュンキはそっと掛け布団を開けると、そこにはすーすー眠っているクレハがいた。

夢では、なかった…！

ジュンキは顔が熱くなるのを感じながらも、クレハを起こさないようにするために起床するのを諦めた。再び横になる。ちらっとクレハの寝顔を覗くと――――。
（可愛い…）
素直に、そう思った。整った顔立ちに、長すぎず、短すぎないまつ毛。綺麗な形の鼻に、薄紅色の唇。そこに掛かる青色の髪。
「…」
ジュンキはクレハが起きないように、そっと青色の髪を右手で梳いた。すると、クレハのまつ毛がぴくっと動いた。起こしてしまったらしい。
「う、う～ん…」
小さく声を上げて、クレハの目が開いた。いつもは活気に溢れる青

色の瞳が、今は眠たそうにとろ～んとしている。
「おはよう、クレハ」
「…」
クレハは何も言わずにぽけ～っとジュンキの顔を見つめていたが、徐々に真顔になり、やがて顔を赤らめていった。
「あっ…。う、うあああああっ！？」
クレハは素っ頓狂な声を上げると、ジュンキから遠ざかろうとしてベッドから落ちた。
「お、おい、クレハ！？」
ジュンキが手を差し出したが、クレハは顔を真っ赤にしてその場で悶えていた。
「あっ！そっ！そのっ！ジュンキ！その…。えっと…！うぅ～っ！！！」
「…あはは」
混乱するクレハを見て、ジュンキは苦笑いを浮かべるしかなかった。だがこのまま放っておいたら何をするか分からないので、ジュンキはクレハを説得してみることにした。
「また、寒かったら来ればいいよ」
「…うん」
クレハはとても、とても恥ずかしそうに頷いた。

ジュンキとクレハが起きた時、ショウヘイ達の姿は家の中にはなかった。朝食を食べるために、先に集会場に行ってしまったのだろうとジュンキとクレハは考え、急いで集会場へと向かった。果たして、集会場の中にショウヘイ達の姿があった。ジュンキとクレハは並んで、ショウヘイ、ユウキ、カズキの向かいに座った。
「おはよう」
「おはよー」
ジュンキとクレハが挨拶をしたのだが、目の前の3人からの返事は無かった。ユウキとカズキはニヤニヤしているし、ショウヘイに至

っては静かに目を閉じて口元だけに笑みを浮べている。ジュンキとクレハは顔を見合わせ、頭の上に疑問符を浮かべた。
「ねえ、何笑ってるの？」
クレハがユウキとカズキに尋ねたが、２人の返事は「まあ、な」「なー」という曖昧なものだった。再びジュンキとクレハは顔を見合わせる。
「ちょっと、はっきり言ってよ」
クレハがやや怒り気味に言うと、ユウキとカズキは「お前が言えよ」「やだよ」というやり取りの後、カズキが身を乗り出して言った。
「いや～、昨日の夜さ。俺達がすぐ隣で寝ているのに、まあ堂々と…やったんだろ？」
「なっ！！！？」
「はああっ！！！？」
カズキの一言で、ジュンキとクレハの顔は一気に真っ赤になった。
「「やってないっ！！！！！」」
ジュンキとクレハは声を揃えて反論したのだった。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　13

集会場でジュンキとクレハがカズキ達に散々なことを言われている頃に、リヴァルは窓の隙間から差し込む朝日に目を覚ました。決して爽快な朝ではなく、どちらかと言えば憂鬱だ。身体を腹筋だけを使って起こすが、ベッドから降りる気力が湧かない。憂鬱の原因は嫌なくらい自分で分かっている。昨日、ティガレックスを狩って帰ってきたところでジュンキと口論になったことだ。あの時リヴァルは、しつこく注意してくるジュンキに対して暴言を吐いてしまった。しかしそれはジュンキがうるさく注意してくるのが原因で、自分は悪くない。リヴァルはそう思う。そう思ってさっさと忘れてしまいたいが、今回ばかりは心のどこかで悪いことをしたのでは?と思っていて、そんなことを考えている自分が腹立たしくもある。

（なんで…あいつのことなんか…）

罪悪感が、リヴァルにのしかかる。いままでそんな事はなかったのに。ベッドの上で考えていても仕方ないので、リヴァルはとりあえず普段着に着替えて朝食を摂ることにした。朝は特に寒い室内で着替えて、昨日用意しておいた簡単な朝食を隣のキッチンルームに取りに行こうとしたところで、玄関のドアが2回ノックされた。

「誰だ?こんな朝から…」

リヴァルは面倒ながらもドアを開けようと取っ手を握ったところで、もしかしてジュンキでは?と思ってしまった。もしジュンキなら朝から何を言われたものか分かったものではない。ここはまだ寝ているフリをするべきだろうか――。そう考えた時、ドアの向こうから聞こえた声は女性のものだった。

「おはようございます、リヴァルさん。起きてますか?」

「…リサ?」

リヴァルは驚きつつもドアを開けた。そこに立っていたのはきっちりと武器防具を装備したリサだった。

「…何だ？こんな朝早くから…」
「リヴァルさんに…謝りたくて…」
「謝る…？」
「はい…」
リサはそこまで言うと俯いてしまう。リヴァルはどうしたものかと混乱したが、とりあえず家の中に入れることにした。
「と、とりあえず入れよ。話はそれからだ」
リヴァルが招き入れると、リサは黙ってリヴァルの家に入った。
「そこの、椅子にでも、座って…」
リヴァルが玄関のドアを閉めると、リサが腰掛けた音に、背中のハンマー「アイアンストライク改」を床に置いた音が聞こえた。この家には椅子がひとつしかないので、リヴァルはベッドに腰掛けた。
「…」
「…」
「…あの」
しばらくの沈黙の後、リサが口を開いた。
「昨日は…すみませんでした…」
「え…？」
リヴァルが何のことか分からないという顔をすると、リサは顔を上げてリヴァルに向き合った。
「昨日、私はリヴァルさんに…その…最低です、と言ってしまいました…」
「…」
「本当に…すみませんでした…」
リサはそう言うと頭を下げた。
「いや、いいんだ。俺が悪いんだからさ…」
リヴァルの返事を聞いたリサは顔を上げて、信じられないというような顔をしてリヴァルを見つめた。
「リサ…？」
「リヴァルさん…今、私に謝りましたよね…？」

「ん？ああ…。それがどうかしたか？」
「いえ…ただリヴァルさんが誰かに謝るなんてところを初めて見ましたから、ちょっと驚いただけです」
リサに言われてから気がついた。確かにリヴァル自身、誰かに謝ったことはほとんどない。
「何かあったんですか？」
「…実は俺も、昨日ジュンキに悪いこと言ったなって思ってるんだ…」
「そうですか…」
「俺も、両親や妹が死んでるのにな…。人の死を馬鹿にするなんて…」
「…だったら、ジュンキさんのところへ謝りに行きませんか？」
「え…？」
いつの間にか俯いていた顔を上げると、リサは微笑んでいた。
「悪いことをしたと思うのなら、謝らないと。その方が気持ちも落ち着きますし。私も一緒に行きますから、ね？」
「…ああ、すまない。着替えてくるから、少し待っててくれ」
リヴァルはそう言うとベッドから立ち上がり、アイテムボックスの前で簡単な外着に着替える。
「リヴァルさん、肩は大丈夫ですか？」
リサに声を掛けられて振り向くと、リサは既に玄関の前で待っていた。
「ああ、痛みはだいぶ引いたよ。まだ自由に動かせないが」
リヴァルはそう言って怪我をした左肩をリサに見せる。
「この調子だと、ハンター引退かな」
リヴァルが自虐的に笑いながら言ったが、リサはそれに対して屈託の無い笑みを返した。
「大丈夫ですよ、リヴァルさん。すぐに治りますから」
「え…？」
それは一体どういうことなのかリヴァルはリサに聞こうとしたが、

リサは既に玄関の外に出てしまっていた。

外に出ると、リサが先行する形で2人は集会場へと歩き出した。ジュンキ達は朝、昼、夕食は全て集会場で食べることをリヴァルもリサも知っている。

「リサ――」

「リヴァルさん、ひとつお聞きしていいですか?」

リヴァルが口を開ききる寸前に、逆にリサがリヴァルに話しかけてきた。リヴァルは一瞬眉間に皺を寄せてしまうが、とりあえずリサの質問を聞いてみることにした。

「…何だ?」

「リヴァルさんは、山道の除雪作業が終わったら街に戻るんですよね?」

「そのつもりだ」

「街に残した用事があるとかですか?」

「特に無いな。街に戻っても、知り合いがいるわけでもないし。…どうしてそんな事を聞く?」

「…リヴァルさん、この村に留まってもらえませんか?」

リサの問い掛けに、リヴァルはその場で歩みを止めた。それと同時にリサの歩みも止まり、リサはリヴァルを振り向いた。

「何故?どうして俺がこの村に留まる必要がある?」

リヴァルの問い掛けに、リサは言葉を選んでゆっくりと理由を語り始めた。

「…この村は、見ての通りとても小さな村です。…街から遠く、ハンターの数も少ない。ジュンキさん達やリヴァルさんが来るまで、ハンターは私ひとりだけでしたし…。ジュンキさん達はある理由のためにこの村に滞在しているのですが、いつの日かきっと、この村を出て行ってしまいます。…だから、リヴァルさん。あなたの力が、この村に必要なんです」

リサはここまで言うと、リヴァルの返事を待つ。リヴァルとしては

この村に居座っても何の問題もない。むしろ何だかんだ言ってリヴァルはこの村のことを少しは気に入っている。街とは違い、この村は人と人が近く、温かみがある。何より自分が必要とされているのは嬉しい。しかし、どうしても反りが合わないジュンキというハンターが、この村にいる。そこでリヴァルが出した答えは、先送りだった。

「…考えておく」

「ありがとうございますっ！」

問題を先送りしただけなのに、リサは笑顔を作って深く頭を下げた。

集会場に入ると、そこには予想通りにジュンキ達5人が朝食を食べていた。リヴァルとリサが入ってくるなりジュンキ達は食事を中断し、顔を上げた。ジュンキは活力のない顔をし、ユウキとカズキは睨んできた。ショウヘイとクレハはほぼ無表情で、何を考えているのか分からない。リヴァルはジュンキの横に立つと、ジュンキが口を開く前に頭を下げた。

「…昨日は、すまなかった。あんなこと言って…」

しばらくの沈黙。そしてジュンキが立ち上がる気配。トントンと右肩を叩かれたので顔を上げると、そこには穏やかな笑みを浮かべたジュンキの姿があった。

「…いや、いいんだ。チヅルを守れなかったのは、確かに俺が原因なんだから。でも謝りに来てくれて、ありがとう」

「…」

リヴァルは言葉を失い、呆然とジュンキを見つめることしかできなかった。そのジュンキから右手が差し伸べられる。仲直りの握手だろう。リヴァルも右手を差し出そうとして思い留まり、自分の右手の手の平を見つめる。そして握り拳を作ると、リヴァルはジュンキから遠ざかってリサの横に並んだ。

「ふんっ、確かに俺はあんたに謝ったが、あんたと馴れ合うつもりはない。何度でも言うが俺はあんたが嫌いだし、それ以上にリオレ

ウスが嫌いだ」
リヴァルの反応を見てジュンキは呆然としたが、すぐに苦笑いを浮かべた。
「まあ、俺を気に入れなんて言わないよ」
「当たり前だ」
ジュンキとリヴァルの言葉を聞いて、リヴァルもリサも、ジュンキやクレハ、ショウヘイ達も、一同に苦笑いを浮かべたのだった。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　14

リヴァルがジュンキに謝って数日後、ついにポッケ村と外界を結ぶ唯一の山道の除雪作業が完了し、それと同時にリヴァルの怪我も完治した。リヴァルにとって山道の開通は村を出ることと同義だったはずだが、今ではその考えはない。リサに「この村に留まって欲しい」とお願いされてしまったからだ。リヴァルとしては、街に戻っても何らかの予定があるわけでもないし、帰りを待っている仲間もいない。だからこの村に留まっても問題ないのだが、この村に留まる上で最大の懸念がジュンキというハンターの存在だった。先日仲直り（？）したので関係は決して悪くないのだが、リヴァルの中でのリオレウスの位置づけが変わるほどではなかった。話は変わるがリヴァルの怪我がすぐ治ることを予測したリサ。どうして予測できたのかリヴァルはリサに尋ねたが、リサは「何となくです」と抽象的な答えしか示さなかった。そして山道が開通した翌日、リヴァルとリサは装備を整えて集会場に向かった。集会場の中ではジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキといつもの5人が揃っていた。

「んで、今日はどうするんですか？ジュンキ先輩？」

リヴァルは今回も嫌味を込めてジュンキに尋ねた。ジュンキは苦笑いしながらも、今から調べると言って座っていた長テーブルから立ち上がり、依頼書が貼りつけてある掲示板に向かった。リヴァルも今どんな依頼が届いているのか気になり、ジュンキの隣に立って掲示板を覗く。

「さてと、今日はどうするかな…」

ジュンキはとりあえず右上から順番に目を通していく。

（ドスファンゴ、ドスランポス、イャンクック、ゲリョス…）

再びドスファンゴなんて依頼を受けてしまうと、リヴァルが背中の大剣オベリオンで斬りかかってくるだろうなぁと苦笑いしながら、ジュンキは依頼書に目を通し続ける。

（ガノトトス、バサルモス…リオレウスとリオレイアかぁ）
ここでジュンキはリオレウスとリオレイアの討伐依頼書を見つけた。
リヴァルがリオレウスとリオレイアに強烈な殺意を抱いていることはリサから聞いているので、これは避けようとして…狩りの指定場所を見てしまった。
「なっ…！」
狩りの指定場所、そこはココット村の裏山だった。そう、この討伐依頼のリオレウスとリオレイアというのはザラムレッドとセイフレムのことを指しているのだ。ジュンキはついリヴァルの方を向いてしまい、リヴァルと目が合う。
「何だ？」
「い、いや、何でもない」
ジュンキは至極冷静に、そして自然にリオレウスとリオレイア…もといザラムレッドとセイフレムの討伐依頼書から手を離した――瞬間、隣からリヴァルの腕が伸びてきて、ジュンキが今さっき手放した依頼書を掲示板から剥がし取った。リヴァルの口元がにやける。
「これでいいな…？」
「…ああ」
ここでは何を言っても無駄だと考え、ジュンキは頷くしかなかった。

リヴァルは機嫌がよかった。何といっても、今回は久々にリオレウスとリオレイアを狩れるのだから。そのせいか、ポッケ村から一週間近くかけてココット村に着き、隣でリサやクレハが「お尻痛いー」と言っていても、リヴァルは何一つ文句を言わなかった。時刻は夕方。地平線の先の小さく見える山に陽が沈む直前に、リヴァル、リサ、ジュンキ、クレハの４人はジュンキの故郷でもあるココット村に降り立ったのだった。
「まずは村長に挨拶したいんだけど」
「どーぞ」
ジュンキは一応リヴァルの了承を得ると、この村の中心にある大き

い建物を目指して歩き出した。この村の集会場である。その集会場の入口の前に、村長はぽけーっと立っていた。

「村長」

ジュンキが声を掛けると、村長は驚きの表情を浮かべた後に笑みを浮かべた。

「おぉ、ジュンキか。元気にしておったかの」

「村長もお元気そうで」

「クレハも元気そうじゃな」

「はい、お陰さまで」

「して、後ろの2人は…？」

「初めまして、リサ、と申します」

「リヴァルだ」

ジュンキが村長にリヴァルとリサの紹介を終えると、４人は集会場を後にした。しかし、歩き出してすぐにジュンキが立ち止まった。

「ちょっと用事があるんだ。すぐ戻るから、しばらく村の中を散策していてくれないか」

「私も用事があるの」

そう言って、ジュンキとクレハはリヴァルとリサから離れて行ってしまった。残されたリヴァルとリサは互いに顔を見合わせる。

「まったく、こんな小さな村に一体何の用事があるんだよ…」

「リヴァルさん、あの…」

リサが小さく言葉を発したので、リヴァルは遠ざかるジュンキとクレハの後ろ姿からリサへ視線を移動させた。

「何だ？」

「もしかして、ジュンキさんとクレハさんは、チヅルさんのお墓に向かったのではないでしょうか…」

「…！」

リヴァルは思わず深い赤色の瞳を見開いた。そしてジュンキとクレハの姿を探す。丁度、ジュンキとクレハは細い裏道へと消える直前だった。

「り、リヴァルさんっ！？」
リヴァルはいつの間にか、ジュンキとクレハを追い駆けていた。
狭い裏道を抜けた先に、墓地があった。たくさんの墓石が並ぶ中のひとつ、その前にジュンキとクレハは並んで祈りを捧げていた。
「り、リヴァルさん…置いて行かないで下さい…」
後ろから追いかけてきたリサもこの光景を見て黙り込む。
静かな時間が過ぎる。
リヴァルは静かに、チヅルというハンターの墓石に向かって歩き出した。リサもついてくるのが足音で分かる。リヴァルはジュンキとクレハの後ろに立つと、静かに祈った。

「ありがとう。チヅルも喜んでいると思う」
墓地を出て村に戻ると、リヴァルはジュンキにお礼を言われた。
「ハンターとして敬意を払ったまでだ」
「それでも、ありがとう」
「…今日は狩り場のベースキャンプで一泊して、明日の朝に狩るんだろ？もう陽が沈んだし、早く行こうぜ」
リヴァルはそう言うと、リサやジュンキ、クレハを置いて先行した。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　15

その日の夜、リヴァルはココット村の裏山の狩り場…通称森と丘のベースキャンプで目を覚ました。朝だからというわけではない。その証拠にテントの中は薄暗く、月の光が差し込んでいる。リヴァルが起きたのは隣のフィールド、エリア1から物音が聞こえたからだ。横を見るとリサは眠っているが、ジュンキとクレハの姿がない。疑問に思っていると再び物音…これは、金属がぶつかり合う音？リヴァルは簡易ベッドから起き上がると、テントの外に出た。月の光だけが、このベースキャンプの中を照らしている。――再び金属音、今度ははっきりと聞こえた。リヴァルは念の為に、寝る前に4人全員で武器を立て掛けた岩壁に向かい大剣オベリオンを手に取る。もちろんリサの武器であるハンマー、アイアンストライク改は置いてあるが、ジュンキの武器である太刀、エクディシスと、クレハの武器である双剣、リュウノツガイは無い。リヴァルは大剣オベリオンを背中に装着すると、ベースキャンプを出た。もちろん防具も装備している。ハンターは狩り場で寝る際、万が一を考えて装備を解かないのが基本なのだ。

夜の森と丘は月明かりのみが大地を照らす、幻想的な空間だった。聞こえてくるのは虫の音と、川の流れ。そこに響く、何度目かの金属音。

「…」

リヴァルは岩壁に沿って進み、そっとエリアの中央を覗いた。そこにいたのはお互いに武器を構えたジュンキとクレハの姿だった。

（何やってるんだ…!?ハンターが人に武器を向けるなんて…!喧嘩か…？）

リヴァルはその場で、とりあえず様子を伺うことにした。

「はあっ！」
ジュンキが構えた太刀を横に一閃。これをクレハはバックステップで紙一重に避ける。飛び退くクレハは着地と同時に両脚で勢いを殺し、そのままバネのようにジュンキに飛びかかる。もちろん両手には双剣。
「たあああっ！」
クレハの左右からの攻撃。ジュンキは右からの攻撃は太刀で弾き、左からの攻撃は屈んで避ける。そのままジュンキはクレハに足払いを仕掛けるが、これをクレハは両脚で飛び避ける。クレハが着地する前にジュンキは飛び退き、クレハも着地の勢いを活かして飛び退く。

「…！」
この状況を、リヴァルは黙って見続けることしかできなかった。ジュンキもクレハも恐ろしいくらいに運動神経がいい。いや、もはや人間の域を超えている。
「覗き見ですか？リヴァルさん」
突然後ろから声を掛けられて、リヴァルは声を上げそうになった。いつの間にか、リサがすぐ後ろに立っていた。
「ジュンキさんとクレハさんの組合を見ていたんですか？」
「組合…？喧嘩じゃなくて？」
リヴァルの言葉に、リサはリヴァルを小馬鹿にするように、でもどこか穏やかに笑った。
「ジュンキさんとクレハさんが喧嘩するはず無いじゃないですか。ジュンキさんとクレハさん、時々ショウヘイさんが交じることがありますが、時々組合をしているんですよ」
「どうして…？」
「私も全てを知っている訳ではないのですが…。ジュンキさん達はどうやら、何者かに追われて逃げてきたみたいなんです。それで身を守るために、対人戦に慣れようとしているのではないかと私は思

います」
「対人戦…物騒だな」
リヴァルが視線をリサからジュンキとクレハに戻すと、あの2人は何か話しているようだった。

「…そろそろ本気でいくか？」
「そうだね。私も慣れておきたいし」
ジュンキとクレハはお互いにそう言うと静かに目を閉じ、同じタイミングで目を開いた。

「…！？」
リヴァルは驚いた。ジュンキの瞳が普段の、比較的明るい青色ではなくて深い蒼色となり、クレハの方も瞳の色が青から緑になっている。これでは、まるで――――。
「リオレウスと…リオレイア…」
そう、忘れるはずもない。あのカラーリングは、リオレウスとリオレイアのものだ。その上ジュンキはレウスSの防具を、クレハはレイアSの防具を装備しているので、もはやリオレウスとリオレイアが睨み合っているようにしか見えない。
「リヴァルさん、竜人ってご存知ですか…？」
リサがリヴァルの横に出てきた。リヴァルが返事をする前に、リサは言葉を続ける。
「竜人として、竜の力を使う…。すると、瞳が竜のものになってしまうそうです。ジュンキさんが教えてくれました」
「リサ…？」
リヴァルがリサの方を向いたが、リサは言葉を続けた。
「ジュンキさんはリオレウスの血族の末裔…。クレハさんはリオレイアの血族の末裔…。今ここにはいませんが、ショウヘイさんはミラボレアスという龍の末裔…だそうです。そしてリヴァルさん」
ここで一旦言葉を切って、リサはリヴァルの、深い赤色の瞳を見つ

めた。
「あなたはどんな竜の血族の末裔なのでしょうか…」
「知っていたのか？俺が竜人だってことを」
「…初めてリヴァルさんと一緒に狩りに出た時のことを憶えていますか？リヴァルさん、ドスファンゴを一刀両断しましたよね…？」
「…ああ、したな」
「あの時、私は直感的に感じました。リヴァルさんも、もしかしたら竜人なのでは？と。後からジュンキさんに、リヴァルさんは竜人だと聞かされたのもあるんですねどね」
「…だから先日、俺の怪我は早く治るって言ったのか」
「その通りです。さあ、ジュンキさんとクレハさんの組合が始まりますよ」
リサに促されてジュンキとクレハを見ると、以前と変わらない体勢を維持していた。この時、森の方から突風が吹き、一枚の若葉が空を舞った。それは風に流されてジュンキとクレハの間に入り、そこで真下に落下する――。
若葉が落下した瞬間にジュンキとクレハはリヴァルには捉えられない速さで飛び出し、若葉が粉々に散った。後に響くのは激しい金属のぶつかり合う音。見て取れるのは、速すぎて輪郭がぼやけるジュンキとクレハ。
「…！」
「凄いですよね。まさしく竜そのものです。…リヴァルさんの中にも、そんな力が眠っているんですよね」
リサはここまで言うと、静かにベースキャンプへと戻っていった。
リヴァルはジュンキとクレハの組合が終わるまで、その場を動くことはなかった。

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　16

翌日、リヴァル達4人は昨夜に何もなかったかのようにベースキャンプを後にした。いつも通り、リヴァル、リサ組とジュンキ、クレハ組に分かれ、リヴァル、リサ組が先行する形でエリアを移動していく。リヴァルがリサと会話している隙に、ジュンキはクレハに今回の狩りで危惧していることを伝えた。

「クレハ、薄々気づいていると思うけど…」

「分かってるよ。今回の狩る対象…ザラムレッドとセイフレムでしょ？」

「ああ、もちろん狩らない。な？」

「当たり前でしょ？ま、リヴァル君相手じゃ、ザラムレッドやセイフレムには勝てないだろうけどね」

「ははは…」

確かにクレハの言う通りで、ジュンキは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「でも、ザラムレッドやセイフレムが怪我をするのは嫌だから…」

クレハはそこまで言うと、アイテムポーチの中から「あるもの」を取り出した。

「リヴァル君には黙ってもらおっか」

クレハが笑顔でそんな事を言うので、ジュンキは本当に苦笑いしか浮かべられなかった。

幸いにして小型モンスターは現れず、一行はエリアを1，2，3と移動し、巣の手前に当たるエリア4へと足を踏み入れた。

「！…いやがった」

高台に位置するエリア4。この中央に、リオレウスとリオレイアが佇んでいた。2匹は周囲を警戒しておらず、並んで青空を見つめている。リヴァルは自分の中に、強烈な殺人衝動が沸き上がってくる

のを感じていた。
「リヴァル君、ちょっといい？」
「何だよ」
突然背後からクレハに呼ばれたので、リヴァルは舌打ちしつつも振り向いた。見るとクレハが手招きしている。作戦会議だろうか。面倒な事をするつもりなら切り捨てようと心に決めて、リヴァルはクレハの前に立った――次の瞬間、クレハは正確にリヴァルのリオソウルヘルムの隙間に右手を突っ込み、リヴァルの首筋を斬りつけた。
「ぐあっ！手前ぇ何するっ…！？」
リヴァルがクレハに殴りかかるが、その拳がクレハに届く前にリヴァルは地面に倒れ込んだ。
「リヴァルさん！？クレハさん、リヴァルさんに何を…！？」
「ちょっと動けなくしただけ」
クレハはそう言って、リサにリヴァルを斬りつけたナイフを差し出した。
「これって、麻痺投げナイフじゃないですか！？こんな強烈な麻痺毒を、人間に使うなんて…！」
「大丈夫。ちゃんと調整して薄味になってるから。ごめんね」
クレハはここまで言うと、苦笑いを浮かべているジュンキと合流してリオレウスの方へと歩き出した。
「まさか…」
リサはこの時になって、クレハの取った行動の意味を理解した。ジュンキとクレハは、あのリオレウスと会話をする気なのだということを。そして殺しに掛かるであろうリヴァルの動きを止めた理由を。リサもジュンキ達から、ザラムレッドとセイフレムというリオレウスとリオレイアの知り合い（？）がいることを聞いていた。そして今回の狩りでは、ジュンキとクレハがベースキャンプを出た辺りから動きが怪しいことから、今回の狩猟目標がそのザラムレッドとセイフレムなのではないか――そしてリサの予感は的中したのだっ

た。
「ぐ…あ…！」
リヴァルの苦しそうな声が聞こえる。リサはせめて、リヴァルの側にいようと決めた。

「久しいな」
「お久しぶり。元気だった？」
ジュンキとクレハが近づくと、ザラムレッドとセイフレムはそう言ってゆっくりと振り向いた。
「私達はみんな元気だよ。ザラムレッドとセイフレムはどう？」
「ああ、儂もセイフレムも息災だ」
「ジュンキ君とクレハちゃんも元気そうね」
「ああ。子供たちは？」
「みんなすくすく育っているわよ。今はお昼寝してるわ」
「…さて、ジュンキよ。今日は儂に何の用かな？」
「用事があったというより、あいつに連れてこられたんだよ」
ジュンキは苦笑いしながらそう言うと、後ろで倒れているリヴァルを指差した。
「…何か訳ありだな。聞こう」
ジュンキとクレハはザラムレッドとセイフレムに、この場所へ来た経緯を説明した。全て話し終えると、ザラムレッドとセイフレムは難しい顔をした。
「状況は分かった。しかし我々に討伐依頼が出ているとは…」
「人々には迷惑をかけないように生活してきたのだけど…」
「まあ、その件についてはこちらが考えるべきだろう。それより、あのリヴァルという男…本当に竜人なのか？」
「ああ」
リヴァルの問い掛けに、ジュンキははっきりと答えた。
「まだ完全に目覚めてはいないけど、兆候が見られた。ミラボレアスの血液があれば、目覚められると思う」

「ミラボレアスか…。奴は今姿を隠しておる」
ザラムレッドの答えに、ジュンキとクレハは驚いてお互いの顔を見合わせた。クレハが口を開く。
「姿を隠してる？何で？」
「それはね、これから龍たちの進撃が始まるからしいの」
「龍たちの進撃？どういうことだ？」
「それは――」
ザラムレッドがジュンキとクレハに説明しようとしたその時、大地が、揺れた。
「な、何だ！？」
「地震！？」
ジュンキとクレハがその場に屈む。突然、空が光った。ジュンキとクレハ、ザラムレッドとセイフレム、そしてリヴァルとリサも、光った空を見上げる。そこには何処かから放たれたと思われる巨大な炎のブレスが、天高く放たれていた。そして再び地震。
「始まったか…」
ザラムレッドはそう言うと、ジュンキを振り向いた。
「ジュンキよ、とうとう始まったのだ。古龍たちの、人間駆逐作戦が」

MH3rd　第1章　重なる想いずれる思い　17

「人間、駆逐、作戦…？」
「ああ。我々竜の世界の王3兄弟。その長兄であるミラルーツが、大陸から人間たちを排除するために動き出したのだ」
「なんだって…」
ジュンキは大地の揺れる中、大空に放たれた炎のブレスをもう一度見上げた。その時、視界の端に、動く山が見えた。
「何だ？あれは…」
見た目はダイミョウザザミと呼ばれるモンスターに似ているが、大きさが桁違いにデカい。小さな山くらいある。その巨大モンスターがゆっくりと移動していく。
「あの方角…あの先には、ミナガルデの街がある！」
クレハはジュンキの隣で悲鳴に似た声を上げた。
「大陸の各地で、ミラルーツの考えに賛同した竜たちが行動を起こしているはずだ。…ジュンキ、いや、竜人よ」
ジュンキは突然ザラムレッドに呼ばれて顔を上げた。そこには真剣な表情のザラムレッド。
「竜人よ、どうか、人と竜が共存しているこの世界を、守ってはくれぬか」
「…もちろん」
「…当たり前だよ」
ザラムレッドの要請に、ジュンキとクレハはしっかりと頷いた。
「セイフレム、儂はこれから子供たちを避難させた後、ミラボレアスを探しに行く。お前はジュンキ達竜人と、行動を共にするのだ」
「ええ。気をつけてね、あなた…」
ザラムレッドはセイフレムと頬を擦り合わせると飛び上がり、巣の方へと飛び去った。見送ると、セイフレムはジュンキとクレハの方を振り向いた。

「さあ、これからどうするの？」
「…一度全員で集まろうと思う。今ここにいる４人を乗せて、大陸最北端の村へ飛べるか？」
「私は飛竜リオレイア。それくらいお茶の子さいさいだわ」
「ありがとう、セイフレム」
ジュンキとクレハはセイフレムにひとつお礼を言うと、リヴァルとリサの元へ駆け寄った。リヴァルはリサに抱えられて、起き上がったところだった。
「あ、ジュンキさん、クレハさん。一体何が起きてるんですか？」
「リサちゃん、ごめんね。一旦全員で集まって、それから説明するから」
クレハにそう言われて、リサは頷いた。
「リヴァル、立てるか？一緒にポッケ村へ戻って欲しい。そこで詳しく説明する――」
「…ふざけるな」
リヴァルはジュンキの言葉を遮るとリサの手を振りほどき、ジュンキの前に立った。
「何が起きてるなんて知ったこっちゃないね。俺はリオレウスと、そこのリオレイアを殺す。それだけだ」
「…リヴァル君、今、この大陸では多くの人が竜によって殺されそうなの。私達に、手を貸してくれない？」
クレハの説明も聞かず、リヴァルはゆっくりと目の前のリオレイア――セイフレムに向かって歩き出した。
「知ったこっちゃないねぇ、何人死のうと、俺には関係ないからなぁ…」
「リヴァル！それは、お前の本心か？」
ジュンキの声がリヴァルに背後から響く。しかしリヴァルは、口元が緩むのを感じていた。
「…ああ」
答えた瞬間、リヴァルは右頬に衝撃を感じて吹き飛ばされた。殴ら

れたと理解したのは、大地に伏せてからだった。
「ふざけるなよ…！」
殴られた痛みを堪えて顔を上げると、そこには握り拳を作って怒りの表情を作っているジュンキの姿があった。
「人の死を目の当たりにしてきたお前が、この状況下で出した答えがそれか！」
ジュンキはそこまで言うと、リサとクレハの方を振り向いた。
「リヴァルは置いていく。リサは一緒に付いて来てくれるか？」
ジュンキからの誘いに、リサはそっと首を横に振った。
「…ごめんなさい、ジュンキさん。私は、リヴァルさんとゆっくり話がしたいです。後から必ず追いつきますから…」
「…そうか、分かった。クレハ、行こう」
「うん」
ジュンキはクレハと一緒にリオレイアの脚の上に乗ると、飛び去ってしまった。
「すごい…」
リサはこれまで何度もジュンキやクレハ達の信じられない場面を見てきたが、今回も驚かされた。竜に乗るハンターなんて、聞いたことも見たこともない。しかしいつまでも感傷に浸っている場合ではない。リサは倒れているリヴァルに駆け寄ると、リヴァルのリオソウルヘルムを取り外した。
「…！」
そこには、涙を流すリヴァルの姿があった。

ベースキャンプまで戻ると、リヴァルとリサはテントの簡易ベッドに腰掛けた。
「…」
「…」
沈黙。リヴァルもリサも、何から話せばいいのか分からなかった。
「…なあ、リサ」

「…はい」
「俺は…何がしたいんだろうな」
「…」
「父さんと母さんと妹の敵を取りたいがためにハンターになった。復讐さ」
「…」
「俺は、復讐したい。けど、何なんだろうな、この気持ち」
「…？」
「どうして俺は今、ジュンキなんかの言葉を真に受けて、人を、命を助けなきゃって思ってるんだろうな…」
「…」
「俺は復讐者で、ハンターで、命を、奪う方なのにな…」
「…それは」
ここでリサが言葉を発したので、リヴァルはリサの方を向いた。リサは穏やかな笑みでリヴァルを見つめていた。
「それは、リヴァルさんの本心です」
「本心…？」
「はい。リヴァルさんは、本当は優しい人です。リヴァルさんに、復讐者なんて似合いません」
「…」
「本心に、素直に身を委ねてみてはどうですか？リヴァルさんは、もう少し正直になった方がいいですよ」
「正直に…？」
「…リヴァルさんも気づいているはずです。例えこの世界からリオレウスを消し去っても、何も変わらないことを」
「…！」
「死んだ人間が生き返る訳がない。…そうでしょう？」
「それ以上――」
「言います。はっきり言います。リヴァルさん、リオレウスをこの世界から消すなんて考え方はやめましょう」

「!?」
「はっきり言って無駄です。…過去に縛られて、未来を失うのはあまりに悲惨です。過去の事は過去のことにして、これからのことを考えませんか?」
「…」
「私も、両親と、兄を失っています」
「えっ…」
「だから、リヴァルさんの気持ちも分かります。だからこそ、リヴァルさんには今を生きて欲しい。過去と、現在と未来を切り離して」
「…リサは、強いな」
「…強くないですよ」
「ありがとう、リサ…。ほんの少し、落ち着いた」
「…」
「本心に従え、か…。確かに今は、考えて行動したくない気分だ…」
「…リヴァルさん」
「…リオレウスのことは、憎い。この気持ちは変わらない。けど今は、本心に従うことにするよ」
「それでは…!」
「…これ以上、俺みたいな復讐者が増えるもの気味が悪いからな」
リヴァルはここまで言うと立ち上がり、胸元から首飾りを外した。
リヴァルの両親の、婚約指輪である。
「リサ、これを預かっていて欲しい」
リヴァルはそう言うと、リサに差し出した。リサの手の平の上に落とす。
「俺の父さんと、母さんの婚約指輪だ」
「…!」
リヴァルに手渡された一組の指輪を見て、リサは呼吸を忘れるくらいの衝撃に襲われた。この一組の指輪を、リサは知っている…!
「どうかしたか?」
「い、いえ…」

リサは受け取った右手が震えないように細心の注意を払いながら、アイテムポーチの中にしまった。
「さてと…これからどうするかだが…」
「今、私達に出来ることをやりましょう」
「俺達に出来ること…。あの、巨大なダイミョウザザミみたいな奴を狩ることとかな」
「そうですね。クレハさんが、確かミナガルデの街に向かっているって言ってました」
「じゃあ先回りしよう。そのミナガルデの街で、ジュンキとかと合流できるはずだし」
「はい」
リヴァルとリサは各々の装備を確認すると、ミナガルデの街を巨大なモンスターから守るために、まずはココット村へ向かって第一歩を踏み出した。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　01

沈みゆく夕日を左手に、ジュンキとクレハ、そしてセイフレムは北へと飛んでいた。リヴァルやリサと別れた森と丘から飛び立って一日と少しが経ち、ポッケ村まであと少しというところまで来ていた。飛び立った直後はいろいろと話をしたものだが、今はクレハもセイフレムも一言も口をきかない。ジュンキも黙って、状況を整理しようと記憶を遡っていた。

「なあ、人間駆逐作戦って何だ？」

ジュンキはクレハと共にセイフレムの脚の上に乗って飛び立った直後、セイフレムに尋ねた。セイフレムは考え込んでいるのか遠くを見つめていたが、やがてゆっくりとした口調で説明してくれた。

「…私も詳しくは知らないけれど、名前の通り、この大陸…いいえ、世界から、人間達を排除する計画らしいわ」

「…！」

「そんな…！」

ジュンキは言葉を失い、クレハは悲鳴に近い声を上げた。

「どうして？どうして人間を滅ぼそうとしているの？」

「それは私にも、夫ザラムレッドにも分からないわ。直接ミラルーツに聞かないと…」

この言葉を最後に、セイフレムは黙り込んだ。代わりにクレハが口を開く。

「…人が、ハンターが、竜を狩っているから？」

「だとしたら、もっと早くから人間を滅ぼそうとするんじゃないか？」

ジュンキの言葉を聞いて、クレハは「うん、そうだね…」と考え直す。

「ミラルーツも無意味に人間を殺したりはしないはず。きっと何か

理由があるのよ…」
セイフレムの意見も頭に入れ、ジュンキとクレハは考え込む。
「…いいかしら」
ここでセイフレムに言葉をかけられ、ジュンキとクレハは顔を上げた。
「人間駆逐作戦について、もうひとつ、伝えられることがあるの」
「教えて…」
クレハがお願いすると、セイフレムは一度頷いた。
「森丘、雪山、砂漠、沼地、火山…我が計画に賛同する同胞は、即座に集まれ。…ミラルーツの言葉よ」
「どういう意味だろう…？」
クレハが小首を傾げる。
「それに森丘って、さっきまで私たちがいた場所じゃない」
「…その場所には何かありそうだな。憶えておこう」
「うん。今はミナガルデの街を守らなきゃ。そのために、まずはショウヘイ達と合流だね」
「あの巨大なダイミョウザザミみたいなモンスター。幸い足は早くない。間に合うといいが…」
「そうだね。セイフレム、よろしく！」
「任せて」
セイフレムは頷くと、飛行速度を上げた。
「しかし、一体何故だ…？どうして人間を滅ぼそうとする…？」
ジュンキの呟きは、流れる風に掻き消されていった。

ジュンキとクレハはポッケ村に着くなり、セイフレムの脚の上から飛び出した。
「すぐ戻ってくるから！」
クレハは走りながら振り返り、セイフレムに向かって大きな声を出した。
「行こう」

「うん」
ジュンキとクレハは並んで走り、同時にポッケ村の門をくぐり抜ける。村人達や村長に声を掛けられても「ごめん」と謝り、集会場に飛び込む。そこには深刻な表情を浮かべたショウヘイ、ユウキ、カズキの姿があった。
「みんな！」
ジュンキが声を上げるとショウヘイ達の顔がこちらを向き、目に見えて一気に明るくなった。
「ジュンキ！無事か！」
「大変な事になったな」
ジュンキとクレハが空いている席につく間に、ユウキとカズキが口々にそう言う。そしてジュンキとクレハが席についてから、ショウヘイが口を開いた。
「ジュンキとクレハも見たか？空に打ち上げられた巨大なブレスを」
ショウヘイの質問に、ジュンキとクレハは首を縦に振って答える。
「今、何が起きているのか…それともこれから何が起きるのか…二人は何か情報を持ってないか？」
「…そのことについてだが」
ジュンキは一度クレハと目を合わせてから、セイフレムに説明された人間駆逐作戦についての全てをショウヘイ達に話した。
「そんな事が…」
「マジかよ…」
「人間を駆逐、か…」
ショウヘイ達が黙るのを待ってから、ジュンキは巨大なダイミョウザザミみたいなモンスターがミナガルデの街を襲おうとしていることを伝えた。
「何だって…！？」
これには流石のショウヘイも驚きを隠せなかった。
「急がないと、ミナガルデの街が崩壊しかねない。一緒にミナガルデの街へ行って欲しい」

「そりゃあ勿論そうするさ。ただここからだとかなり距離があるぞ。間に合うのか…？」
カズキの気持ちも分かる。だが今回はセイフレムが運んでくれるということを伝えると、カズキを含めショウヘイやユウキも納得してくれた。
「俺達は準備をしてくるから、ジュンキとクレハは先に村の入口で待っていてくれ。俺達は準備ができ次第、村の入口へ」
ユウキの言葉に全員が頷くと、全員が駆け足で集会場を飛び出していった。

「ジュンキ殿…！」
集会場を出たところで、ジュンキはこのポッケ村の村長に呼び止められた。ジュンキは村長に駆け寄り、遅れてクレハが隣に並ぶ。
「一体、何が起ころうとしておるのじゃろうか…。空に放たれた龍のブレス…不吉なものを感じるわい…。ジュンキ殿は、何か知っておるのじゃろう？都合の良いところだけでいいから、このオババに教えてくれないかの？」
「…村長」
ジュンキとクレハは交互に、人間駆逐作戦を省いてミナガルデの街の危機のことだけを伝えた。その間村長は顔色ひとつ変えず黙って聞いていたが、全てを話し終えた後に村長は小さくため息を吐いた後にゆっくり口を開いた。
「…なるほどのぉ。状況は分かったよ。…リサを連れていってやっての」
「リサちゃんを…？」
クレハが小首を傾げると、村長は微笑んだ。
「今はひとりでも多くのハンターが必要じゃろう。この村のことはいいから、と伝えてやって下さいな」
「…分かりました」
「気をつけて行ってくるんだよ。そして、元気で帰ってくるんだよ」

ジュンキとクレハは村長に深く頭を下げると、村の入り口に向かって駆け出した。

ジュンキとクレハはそれぞれの脚の上、ショウヘイ、ユウキ、カズキは背中に乗ると、セイフレムは一気に大空へと飛び上がった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　02

リヴァルとリサはココット村に戻るとミナガルデ行きの竜車を待って出発し、ジュンキ達よりも早くミナガルデの街へ足を踏み入れた。ミナガルデの街はドンドルマの街をハンター達の首都と考えるならば副首都と位置づけられる重要な場所である。ドンドルマの街は三方向を山に囲まれた要塞都市――これはモンスターの侵入を防ぐため――だが、ミナガルデの街は見晴らしのいい岩山の上に造られている。巨大なダイミョウザザミのようなモンスターが接近してくるのがよく見えるだろうな、とリヴァルは思った。

「見晴らしのいい街ですね。これなら、例のモンスターが接近してくるのが一目で分かります」

リサも同じ事を考えているようで、リヴァルは「ああ」と返事をするのに留めておいた。

「私は街に出るのが初めてなのでいろいろ見て回りたいですが…今はそんな雰囲気ではないですね」

リサは街に出たことが殆ど無い。だからいろいろと見て回りたかったのだが、街の雰囲気がとてもピリピリしていて到底観光気分を味わえるものではなかった。巨大なモンスターがこの街に接近しているのだから当然だ。街を行き交うハンター達は男も女も怖い顔をしているし、ハンターではない住人や商人達は不安そうな顔をしている。

「取り敢えず、酒場に行こう。情報はそこに集中するからな」

「そうですね」

リヴァルとリサは一度顔を見合わせると、並んで酒場を目指して歩き出した。街のハンター達にはリヴァルとリサがよそ者だということが分かるのか警戒と分別の目を向けてくるが、話し掛けてきたりはしなかった。街の広場の一角に酒場への入り口を見つけると、リヴァルを先頭に中へと入った。途端にタバコと酒の臭いが鼻を突く。

「う…」
リサが背後で小さく声を上げる。酒場の中はハンター達でごった返していて、隣のリサと会話するのも一苦労だろうとリヴァルは内心ため息を吐いた。
「リ、リヴァルさん、とりあえずカウンターに行きましょう…」
「そうだな…」
再びリヴァルを先頭に、カウンターへ向かって歩き出す。やはり街のハンター達は値踏みするような目を向けてくるが、中には憐れみの眼差しを向けてくる者もいた。これからこの街が巨大なモンスターに襲われることを知ってのことだろう。リヴァルとリサは何とかカウンターにたどり着くと、リヴァルは一応リオソウルヘルムを外した。
「いらっしゃい。この街は初めてね」
「分かりますか？」
リサの言葉に、受付嬢は笑顔を返す。
「この街に勤めて幾星霜、ハンターなら一発で分かるわよ。ご用件は？ハンター登録、なわけないわよね。その装備だと二人は手練れのようだし」
「…この街の状況を知りたい」
リヴァルが要件を伝えると、受付嬢の表情が少し固くなったのをリヴァルは見逃さなかった。
「…この街には今、シュンガオレン、という名のモンスターが接近しているの」
どうやらあの巨大なダイミョウザザミみたいなモンスターの名前はシュンガオレンと呼ぶらしい。
「この街のハンター達は徹底抗戦を構えるつもりだけど…強制ではないわ。あなた達には来たばっかりなのに申し訳ないけど、逃げたほうが得策かもよ？」
「…いえ。私達は街を守るために来ました」
「そうなの…ありがとう。私の名前はベッキー。よろしくね」

ベッキー、と受付嬢は名乗った。
「俺はリヴァルだ」
「私はリサです」
「リヴァル君に、リサちゃんね。他に仲間とかはいないの？」
「あと5人、後から来ます」
「頼もしいわね。一応名前を聞いておいていいかしら？」
勝手に名前を出して良いものか一瞬迷ったが、合流したら恐らくジュンキ達もこのベッキーという受付嬢に名前を明かすはずだから別にいいだろうと結論づけ、リヴァルは口を開いた。
「名前はジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキだ」
リヴァルが名前を読み上げた直後、ベッキーが右手で持っているメモを取るための羽ペンが止まり、酒場の喧騒が波が引くように静まっていった。
「…？」
酒場の反応に、リヴァルとリサは思わず顔を見合わせてしまう。何かまずいことを言ってしまったのだろうか。
「今、ジュンキって言った？」
「ああ、言ったが…」
リヴァルの返事を聞くと、ベッキーはカウンターから身を乗り出した。リヴァルは思わず一歩下がる。
「ジュンキってあのジュンキ？全身リオレウス尽くめの、あのジュンキ？」
リオレウス、という言葉を聞いてリヴァルはイラッときたが、表情には出さずに「そうだが…」と答える。すると、ベッキーは満面の笑みを浮かべた。
「そう…。あのジュンキ君がこの街に駆けつけてくれるのね…」
ベッキーはどこか遠くを見つめて言うと、急にリヴァルとリサを振り返った。
「あなた達二人はジュンキ君の知り合い、ということでいいのね？」
「まあ、そうなるかな…」

「なら大歓迎よ。シュンガオレンが来るまでまだ日数があるから、ジュンキ君達が到着したら作戦会議を開くわよ。それまでゆっくりしていってね。あ、宿代はギルドが受け持つから心配しないでね～」
ベッキーは矢継ぎ早にそう言うと、カウンターの奥へと消えて行ってしまった。とりあえずリヴァルとリサは酒場を出ることにしたが、背中に突き刺さるハンター達の視線がとても痛かった。

夜になると眠ってしまったように外出する人がいなくなるポッケ村と違って、ミナガルデの街は眠らない。リヴァルとリサは夜の街を見物して回り、最終的に噴水広場――と言っても水は出ていない――の前に落ち着いた。リサと並んで、街の外に目を向ける。そこは広葉樹林の森が広がっていて、遠くに山々が微かに見える。
「シュンガオレンの到着予測は、明後日でしたね」
「そうだったな。足が遅いモンスターで良かったよ」
「ジュンキさん達…早く到着してほしいですね」
「…だな。どうやらあいつ、この街では結構有名らしいし」
「そうみたいですね。何でも伝説級のモンスター、ミラバルカンを討伐して世界を守ったとか…」
「半分以上美化されてると思うけどな」
リヴァルの言葉に、リサは「ふふっ」と笑った。そして一呼吸置いて言葉を続ける。
「今夜はありがとうございました。一緒に付いて来て頂いて…」
「夜の街はいろいろと危ないからな。それに俺も見ておきたかったし」
リサはリヴァルの言葉が終わる前に、そっと目を閉じた。そして吹き抜ける風を感じて心を落ち着かせ、目を開く。
「…リヴァルさん、ひとついいですか？」
リサは意を決して、リヴァルの方を振り向いてそう言った。
「ん？」
リヴァルもリサの真剣な声に押されて振り向く。

「大変失礼ですが…亡くなられた妹さんの名前…教えて頂けませんか？」
リサがそう言った直後に風が通り抜け、リヴァルの深い赤色の髪を、リサの明るい赤色の髪を揺らす。
「突然どうしてだ？聞いてどうする？」
「…」
「…？」
「…ごめんなさい。やっぱりいいです。失礼しました」
リサはそう言うとリヴァルに背を向けて駆け出す。後ろからリヴァルの声が聞こえたが、リサは振り向かなかった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　03

部屋のドアが叩かれる音を聞いて、リヴァルは目を覚ました。窓の外を見ると曇っているが、それでも十分明るい。朝が来たようだ。
「リヴァルさん、朝食を食べに行きましょう？」
ドアの向こうからリサの声。リヴァルはベッドから起き上がると、すぐ装備に着替え始める。
「今起きたところだから、先に行っててくれないか？」
ドアの向こうのリサに向かってそう言ったが、リサは「待ちます」と返事を返した。待たせては悪いと、リヴァルは急いで防具を着込んでドアを開けた。
「おはようございます」
そこにはリヴァルと同じく装備を整えたリサの姿があった。
「ああ、おはよう。リサは起きるのが早いな」
「村での生活が身体に染み付いてしまっていますから」
リサの言葉を聞きながらリヴァルは部屋のドアを施錠すると、二人は並んで歩き出した。廊下の突き当たりの階段を二階分降りてフロントを通り、外に出る。ミナガルデの街の朝はドンドルマの街程ではないにしろ、既に多くの人が行き交っている。その表情には、やはり緊張と恐怖が見て取れるが。リヴァルとリサは不穏な空気に満たされている街の広場を横切り、酒場の入り口をくぐった。中は相変わらず酒と煙草の臭いがきつかったがこればかりは仕方がない。ドンドルマの街の大衆酒場のように天井が高いわけでもなく、また岩盤を繰り抜いた洞窟の中にあるので通気性も悪い。勿論窓も無く、明かりといえば松明か蝋燭だ。リサが早めにリヴァルを起こしてくれたおかげで、待たずに席に着くことができた。リヴァルとリサが向い合って座ると、すぐに給仕が注文を取りに来た。
「おはよう、お二人さん。よく眠れたかしら？」
聞き覚えのある声に顔を上げると、注文を取りに来たのはベッキー

だった。リヴァルは驚いて目を瞬かせてから口を開いた。
「ああ、よく眠れたよ」
「あんな立派な部屋を無料で貸して頂いて、ありがとうございました」
リサはそう言うと深く頭を下げ、そしてリヴァルをチラッと見た。
「ほら、リヴァルさんもお礼を言って下さい」
「あ、ああ。どうも…」
「ううん、気にしないで。立派な部屋って言ったけど、あれで並クラスだからね。ささ、注文は？」
リヴァルとリサは簡単な朝食をお願いする。ベッキーは「少し待っててね」と言うと、カウンターへと下がっていった。
「あいつら…」
「…はい？」
リヴァルが何か言ったので、リサは促すように尋ねた。リヴァルは落としていた顔を上げる。
「あいつら…ジュンキ…達は、いつこの街に到着するんだろうな」
「そうですね、来ましたね」
「へ？」
リサの目線を追いかけると、そこには酒場の入り口があって、ジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキの五人が酒場に入ってきたところだった。ジュンキ達はテーブルの合間を縫って、カウンターのベッキーの元へ向かった。ジュンキ達には悪いが、リヴァルとリサは話を横で聞くことにした。
「久しぶり。元気そうね」
「ベッキーも元気そうだな」
「久しぶりだね、ベッキー」
「久々だな」
「相変わらずだな」
「よっ！」
口々に挨拶を交わす六人。しかし、ここでベッキーの表情が曇った。

「チヅルちゃんのことは…聞いたわ。残念だったわね…」
「…」
一気に空気が重くなった。ジュンキ達やベッキーだけでなく、リヴァルやリサの表情も暗くなる。話題を切り替えるためか、ベッキーはリヴァルとリサのことを話し始めた。
「そうそう。ジュンキ、あなたの知り合いが来てるわよ」
「知り合い…？」
ジュンキが首を傾げる。
「リヴァル君とリサちゃん」
「…！」
ジュンキの青色の瞳が見開かれたのが、リヴァルからでも見て取れた。
「い、今、二人はどこに…？」
ジュンキの驚きと動揺に満ちた問い掛けに、ベッキーは微笑みながらリヴァルとリサが座っているテーブルを指差した。
「そこにいるけど？」
ジュンキ達はベッキーの指差した方を振り向き、リヴァルやリサと目を合わせる。ここでリヴァルとリサは一瞬顔を合わせた後に立ち上がり、ジュンキ達やベッキーの前に立った。
「…」
「…」
「…来てくれたんだな」
沈黙の後、ジュンキが穏やかな表情を浮かべて言った。
「…俺が今出来ることをやりたい。…手伝わせてくれ」
「助かるよ」
ジュンキはそう言って、リヴァルに右手を差し出した。リヴァルはその手を握ろうとして――寸前で手を引いた。
「俺は自分が今出来ることをするだけだ。お前と握手するためじゃない」
リヴァルの反応を見て、ジュンキ達やリサ、ベッキーが笑う。

「さてと。ジュンキ君も来たことだし、みんなの朝食が終わったら作戦会議を開くわよ」
ベッキーはそう言い残し、準備があると言ってカウンターの奥へと消えてしまった。

酒場の中で食事を摂っているハンターがいなくなったことを確認してから、ベッキーは酒場の本来の機能を停止させてミナガルデ防衛戦の作戦本部とした。酒場の中に所狭しと並べられている長テーブルは整列させられ、カウンターの方を向くようになっている。その長テーブルに座るのは、この街のハンター達。席が足りず、立っている者や、床に直接座っている者もいる。そして今でもハンターの数は増えているようで、酒場に入ってくる足音が途切れることはない。
「まずは現状を報告します」
ベッキーは正面に相当するカウンターに立って資料を広げ、現在のシュンガオレンの場所、移動距離、到達予測を述べた。ベッキーが提出した資料の通りになれば、到着は明日の朝らしい。
「次に、作戦内容です」
ベッキーの提示した作戦とは、まずありったけの大タル爆弾を使って先制を仕掛ける。街に到着するまでは剣士系のハンター達に地道に攻撃してもらい、街に着いたらガンナー系ハンターも加わる。後はシュンガオレンが倒れるか、街が陥落するかの持久戦となる、というものだった。
「作戦というより、体当たりだな」
「そうですね…。あまりに突然だったので、準備ができていないんでしょう」
リヴァルとリサは思わず不安を言葉にしてしまう。それはベッキーも感じているようで、こんな場当たり的な作戦で申し訳ないと頭を下げた。
「先程もお伝えしたように決戦は明日です。各自で準備を。…では、

解散」
ベッキーはそう言い残し、やはりカウンターの奥へと消えた。

街のハンター全員で行った先程の合同会議の後、リヴァル達7人は作戦本部となっている酒場の中で話し合いを続けることにした。
「作戦会議って言っても、明日にならないと分かんねぇぞ？」
カズキの言葉に何人かズッコケそうになる。確かにその通りではあるのだが…。
「ま、まあ明日の役割を全員で把握だけでもしておこうと思ってさ」
ジュンキが苦笑いを浮かべながら話し始める。
「剣士系…つまり、ガンナーのユウキ以外は街の外で戦うことになるだろう」
「そうなるな。街の外での戦いは、みんなに任せた」
ショウヘイの言葉に、ユウキは頷いて答えた。
「多くのハンターは剣士系です。いくら相手が大型モンスターでも、ハンター全員が飛び掛ったら同士討ちするかもしれません」
「それはあるかもしれないね。7人が一斉に飛び出るのは避けたほうがいいかもしれないよ」
リサとクレハの意見はもっともである。それに関してはまずジュンキ、ショウヘイ、クレハの竜人3人が前に出て、疲れたり怪我をしてしまったらリヴァルやリサやカズキと交代する、というローテーション式を採ることにした。リヴァルはまだ竜人として目覚めていないため、今回は先陣を避けてもらった。
「…後の事は明日にならないと分からないか」
「だな。明日に備えて、今日はもう解散しよう」
ショウヘイの言葉を最後に、リヴァル達はそれぞれ明日の準備に取り掛かっていった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　04

翌朝、ミナガルデの街は殺伐としていた。昨日まであんなに活気づいていた市場は全ての露天が店を閉め、武具工房の火は落とされている。街の噴水広場には、様々な武器防具を装備したハンター達がひしめき合っていた。その一角に、リヴァル達の姿もあった。

「ドンドルマの街にいた時の、ラオシャンロン戦を思い出すよなぁ…」

ユウキの言葉に、リヴァルとリサを除く4人が小さく頷く。

「ジュンキさん達は、このような経験があるのですか？」

「ドンドルマの街にいた頃、一度ね。その時も巨大なモンスターが街に侵攻してきたの」

リサの質問に、クレハがいつになく緊張している声で答えた。

「そういえば、セイフレムは大丈夫かな…」

「きっと街を離れているよ」

クレハの不安そうな声を聞いて、ジュンキが答えた。

「大タル爆弾、上手くいくのか…？」

「それだけで帰ってくれるような相手じゃないだろ」

リヴァルの独り言にカズキが答え、ジュンキの眉間に皺が寄る。この頃から、この場にいるハンター達の何人かが「揺れている」と騒ぎ始めた。シュンガオレンが侵攻する際の大地の揺れを感じ取ったのだろう。

「あ、揺れてる…」

クレハも感じ取ったようで、真剣な眼差しで他の6人を見渡した。

ショウヘイが口を開く。

「そろそろ街の外に移動するか…。ユウキ、頑張れよ」

「おう！」

ショウヘイ以外の5人もユウキに一言ずつ言葉を送り、他の移動するハンター達に混じってミナガルデの街の外へ移動した。

ミナガルデは森の中の岩山を削って造られた街である。近くに街道が通っていて、その街道と街を繋ぐ枝道くらいしかハンター達が武器を振り回せる空間がない。そこでハンターズギルドはシュンガオレンが街に接近していることを知ってからすぐに周囲の木々を切り倒し、広い空間を作り上げていた。

「ハンターズギルドも本気だな」

「街を捨てるという選択肢もあっただろうに」

「この街はドンドルマの街に次ぐ第二の都市だから、そう簡単に捨てられないよ」

ジュンキとショウヘイとクレハの言葉である。この三人とカズキはリヴァルが見たところ、とても落ち着いている。一方のリヴァルは、どうしても恐怖心が拭えない。それが表情に出てしまっていたのか、リサが心配そうに声を掛けてきた。

「大丈夫ですか？リヴァルさん」

リヴァルは小さく頷くだけの返事とした。

「…怖いですか？」

「…怖いな。ああ、怖いよ。あんな大きなモンスターと戦うなんて」

リヴァルは今まで多くの大型飛竜を倒してきた。リオレウスはもちろん、ガノトトスやグラビモスとも戦ったことがある。しかし今回のシュンガオレンはそれをはるかに上回る巨大さだ。

「初めてですね、リヴァルさんが弱音を吐くのは」

「…」

リヴァルはいつもの癖でリサを睨んでしまう。しかしリサは微笑を絶やさずに口を開く。

「私も怖いです。今まで戦ったことのない相手ですから…。恐らく、この場のハンターほぼ全員がそうだと思います。怖いのは、リヴァルさんだけではないんですよ」

リサにそう言われて辺りを見渡すと、確かにどのハンターも不安げな顔をしている。緊張したり、不安に思うのは自分だけではないと

思うと、少し心が穏やかになった。
「ありがとう、リサ。俺はいつもリサに助けられっぱなしだな」
「そんなことないですよ…ふふっ」
突然、リサは右手を口元に当てて笑った。
「なんだ?急に笑って」
「いえ、リヴァルさん、急に優しくなったと思いまして」
「っ!?んなわけねぇだろっ!」
リサの言葉を聞いてリヴァルは顔が熱くなるのを感じ、リヴァルはリサに背を向けた。
「一体何がリヴァルさんを変えたんでしょうか」
背中を向けても、リサはいらずらっぽく話し掛けてきたが、リヴァルは黙り込むことを決めた。口を開かず、リサの言葉を聞き流す。するとリサは「すみません…」と言って黙り込んでしまった。悪いことをしてしまったのではと少し心配になってしまい、リヴァルが口を開こうとしたその時、尋常ではない爆発音と火柱、そして黒煙がハンター達の正面で上がった。用意された大タル爆弾が爆発したのだ。
「始まったか…」
「いよいよですね…」
周囲のハンター達の囁きは、いつになく不安げだ。それはリヴァルも同じで、正直勝てる気がしない。しかし、今はやらなければならない。あの街を失うわけにはいかないのだ。ふと、リヴァルはジュンキ達の方を振り向く。ジュンキとカズキはそれぞれの頭部装備を被り、リサとクレハとショウヘイはそれぞれの武器を抜いたところだった。リヴァルも左手のリオソウルヘルムをしっかりと被ってから正面を見据えた。そこには黒煙を掻き分けて進行する、巨大な蟹。うおおおおっ!というハンター達の雄叫びが上がった。リヴァル達も揃って声を上げる。
「深追いするなよ!」
ジュンキの言葉を最後に、ミナガルデの街のハンター達による防衛

戦が始まった。リヴァルはリサ、カズキと共に後方――街の方へと移動して待機する。一度に大勢が動くと危険であると考えたのは他のハンター達も同じ様で、多くのハンター達がリヴァルの周りで待機していた。今シュンガオレンと戦っているのは全体の三分の一くらいだろう。それでも百人近くいるはずだ。

「…」

リヴァルは黙って戦局を見守る。シュンガオレンの巨大さは、戦っているハンター達と比べるとどれ程のものか実感する。あれ程巨大なモンスターを、人の手で止められるのだろうか…。

「あっ…！」

リサが小さく悲鳴を上げた。シュンガオレンの巨大な鋏…それが縦に振られ、ハンターが何人か弾き飛ばされたのだ。幸い全員生きているようだが、中には仲間に引きずられて戦線離脱する者も何人かいるようだ。シュンガオレンはそんなハンター達には目もくれず、ただひたすらにミナガルデの街を目指して進行する。時折前方をなぎ払うように一対の鋏を振るい、その度に負傷者が増える。

「う、うおおおあああっ！」

感情を堪え切れなかったハンターがひとり、またひとりとリヴァル達のいる待機場所からシュンガオレンのもとへと駆けていく。リヴァルも行こうかと思ったが、カズキに制止させられた。いつもなら噛み付いていたであろうリヴァルも、今はそんな気持ちは一切無い。刻々と近づいてくるシュンガオレン。その度に大地が揺れる。この防衛戦に参加しているハンターの多くは剣士で、ジュンキ、クレハ、ショウヘイの様に先陣を切ってシュンガオレンに挑んでいるか、リヴァル、リサ、カズキの様に交代要員として待機しているかだが、リヴァル達の頭上ミナガルデの街の広場にはガンナー達が集結し、ボウガンや弓の射程距離内に入れば蜂の巣にする予定で待機している。パーティメンバーの一人、ユウキもそこにいるはずだ。

「あっ」

一本の矢がミナガルデの街中から放たれた。リサが小さな声を上げ

たが、リヴァルやカズキは黙って放たれた矢を見守る。その矢はもちろんシュンガオレンを狙っており、４本ある脚のうち一番街に近いものに当たって弾かれた。

「当たった…」

「凄い精度ですね…」

「恐らく有効射程距離を測ったんだろう。まだ効果的な距離じゃないな」

リヴァルとリサがあの矢を放ったであろうハンターの腕前に驚いているなか、カズキが説明してくれた。ガンナー達にそれ以上の動きはなく、やはり射程距離外と判断したのだろう。リヴァルは顔をミナガルデの街からシュンガオレンの方へ戻すと、シュンガオレンの姿が先程より少し大きくなっていると感じた。シュンガオレンはゆっくりと確実に接近してきている。リヴァルは拳を握った。リオソウルアームのグローブの中が嫌な汗でぐちゃぐちゃになっている。こんなに不安と焦燥に駆られるのは久々だった。リオレウスやリオレイアならば当たり前。先日狩ったティガレックスでも何とか勝てるだろうと思っていたが今回は違う。シュンガオレンは何とかならない…リヴァルのハンターとしての勘と経験がそう言っている。

「…っ」

リヴァルは大きく唾液を飲み込んだ。今焦っても仕方がない、落ち着け、と自分に言い聞かせる。

「あっ、ジュンキさん達が見えました」

リサはそう言って指でジュンキ達がいる場所を指し示し、リヴァルもその先を見つめる。そこではジュンキとクレハ、ショウヘイ達が３人掛かりで一本の脚を狙って攻撃していた。その成果かどうかは分からないが、３人が攻撃している脚の先が赤色に染まっている。

「危ないっ…」

リヴァルは思わず叫んだ。危うくジュンキがシュンガオレンの鋏の餌食になるところだったのだ。ジュンキはそれを寸前で回避してみせたが、どうも動きにキレがない。

「流石の竜人も疲れがきてるか。行くぞ」
カズキはそう言うと駆け出した。リヴァルもリサと共にジュンキ、クレハ、ショウヘイのいるところを目指して駆け出す。近づけば近づく程、シュンガオレンは巨大だと改めて思い知らされるリヴァルだった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　05

「シュンガオレン！お願いだ！止まってくれ！」
「我は…破壊…する…」
ジュンキやクレハ、ショウヘイの耳にはシュンガオレンの声が聞こえていた。そしてジュンキは戦闘が始まると同時にシュンガオレンを説得しようと話し掛け続けているが、聞く耳を持ってくれない。
「危ないっ！」
クレハの声を聞いてジュンキは反射的にその場を離れる。直後にシュンガオレンの鋏が振り下ろされた。
「ジュンキ！説得は無理だ！諦めろ！」
ショウヘイの声を聞いて、ジュンキは下唇を噛んだ。仕方なく説得は中止し、目の前のシュンガオレンの巨大な脚へ意識を集中させる。
「大丈夫か！」
聞き覚えのある声が聞こえたので振り向くと、こちらに駆けてくるリヴァル、リサ、カズキの姿があった。
「交代だ！」
「すまない！」
ジュンキ、クレハ、ショウヘイはリヴァル、リサ、カズキと入れ替わると、一旦戦線を離脱した。シュンガオレンから距離を取り、回復薬を飲んで無理やり疲労感を拭う。
「全然止まらないね…」
「俺達の攻撃が効いているのかすら分からないな…」
クレハとジュンキが思わず心境を吐露してしまうが、ショウヘイはシュンガオレンの方を無言で見つめていた。そして静かに口を開く。
「…シュンガオレンの脚が変色している」
「確かにそうだよね」
ショウヘイの言葉にクレハが賛同の声を上げた。先程からハンター達が攻撃を加えている4本の脚。その中でもジュンキ、ショウヘイ、

クレハが攻撃を加えていた先端が赤く染まっている。
「何か意味があるのか…？」
ジュンキが疑問を口にするとほぼ同時に、ジュンキ達が攻撃を加えていたものとは違う脚が赤色に染まった。それと同時にシュンガオレンの巨体が揺らぎ、傾く。シュンガオレンの足元で戦っているハンター達、ジュンキ、クレハ、ショウヘイのように一時前線を離れているハンター達、そしてミナガルデの街の中で待機しているガンナー達から歓声が上がった。
「効いてる…！」
クレハの嬉しそうな声を聞いて、ジュンキは人知れず穏やかな笑みを浮かべた。このまま攻撃を加え続ければ討伐することができるかもしれない、そう思えた。しかしその考えは次の瞬間に打ち砕かれてしまう。
「なんだ…？」
ショウヘイは声に出したが、ジュンキもクレハも同じことを思っていた。シュンガオレンが突然歩みを止めたのだ。
「どうしたんだろ…」
クレハも心配そうに声を上げる。シュンガオレンの足元で戦っているハンター達も突然の出来事に驚いたのか、攻撃が止まっていた。一旦沈黙が辺りを支配する。そして次の瞬間に、ボキボキッと小気味良い音を立ててシュンガオレンの巨体が立ち上がり始めた。
「なっ…！」
「立つの…！？」
「…！」
シュンガオレンは4本の脚を伸ばし、立ち上がった。その高さはミナガルデの街がある岩山の中腹とほぼ同じである。
「そんな…！」
クレハが悲鳴に近い声を上げた。シュンガオレンはその高さを維持したまま、再び侵攻を開始する。足元で戦っているハンター達も慌てた様子で攻撃を再開していった。

「…そろそろリヴァル達と交代しよう。疲れてきていると思うし」
ジュンキの言葉にクレハとショウヘイは頷くと、3人揃って駆け出した。シュンガオレンの足元で戦っているであろうリヴァル、リサ、カズキのもとへと急ぐ最中に、ジュンキが口を開いた。
「クレハ、ショウヘイ」
「何？」
「どうした？」
「…竜の力を使おう」
ジュンキは一呼吸置いてから言った。クレハとショウヘイから返事がないので、ジュンキは言葉を続ける。
「あまり目立ちたくないけど、シュンガオレンがミナガルデの街に到達するのも時間の問題になってきてる。だから…」
「また王国軍がやってくるかもしれないけど、仕方ないね」
「シュレイド王国軍のことを気にしている状況じゃないからな」
3人は一度顔を見合わせるとそれぞれのタイミングで目を閉じ、竜になった。

「何て硬さだ…っ！」
リヴァルはシュンガオレンの硬さに驚いていた。何とか大剣オベリオンの刃は通るが、ほとんど弾かれるに近い感覚がリヴァルに伝わってくる。それはランス使いのカズキも同じようだったが、リサはハンマー使いなので気にならないようだった。
「はあっ！」
リサの重い一撃。それでもシュンガオレンはビクともしない。
「このおっ！」
さらにもう一撃を与えるが、やはりビクともしない。体勢を整えるために、リサは一度シュンガオレンの脚から離れた。リサの武器であるハンマー「アイアンストライク改」を握り直して再び殴りかかる。ハンマーを一度後ろに引き、勢いに乗せて叩きつける――――はずだった。

「っあぁ！？」
リサのハンマーがシュンガオレンの脚を捉える直前に、シュンガオレンの脚がミナガルデの街の方へと動いたのだ。リサはハンマーで地面を叩いてしまい、その衝撃を浴びてしまった。両腕が痺れ、ハンマーを持ち上げられなくなってしまう。
「リサ！大丈夫か？」
聞きなれた声に顔を上げると、リヴァルが手を差し出してくれていた。
「大丈夫です。怪我をした訳ではないですから」
リサは無理に笑顔を作って、リヴァルに心配をかけまいとした。幸いリヴァルは「無理するなよ」とだけ言ってシュンガオレンの脚を追いかけて行ったので、リサもまだ痺れる腕でハンマーを持ち上げてリヴァルの後を追う。そのリヴァルがシュンガオレンの脚の目の前で立ち止まったので、リサはリヴァルの横に並ぶとどうしたのか尋ねた。
「止まった…」
「え…？」
最初リヴァルが何を言っているのか分からなかったが、周囲のハンター達も立ち止まっているのですぐに状況を把握できた。シュンガオレンの歩みが止まったのだ。
「ど、どうして…？」
リサの言葉に対して「分からない」と答えようとリヴァルが口を開く直前に、シュンガオレンの４本の脚からボキボキッと小気味良い音が聞こえてきた。
「あっ…！」
そしてシュンガオレンの本体が徐々に上へと昇っていく。シュンガオレンは４本の脚を伸ばして立ち上がったのだ。シュンガオレンは侵攻を再開し、ハンター達も攻撃を再開する。
「くそっ…！」
リヴァルは悪態を吐くと、目の前にあるシュンガオレンの脚へ向か

って駆け出した。大剣オベリオンを上段に構え、一気に振り下ろす。
そのまま背後に誰もいないことを気配で感じ取って斬り上げ、横振りと続ける。
「リヴァル！ジュンキ達が来たぞ！」
カズキの声を聞いて視線を向けると、こちらに駆けてくるジュンキ、クレハ、ショウヘイの姿があった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　06

「リヴァル、交代しよう」
「リサちゃん、交代だよ」
「カズキ、交代だ」
ジュンキ、クレハ、ショウヘイと入れ替わり、リヴァル、リサ、カズキはシュンガオレンの下から抜け出した。ある程度の距離を取ってから各自の回復薬を飲む。
「もうあんなに接近してる…」
リサの心情はリヴァルもカズキも同じだった。気がつけばシュンガオレンはミナガルデの街の目と鼻の先にまで迫っていた。
「そろそろガンナー達の出番…。始まったか」
カズキの声を聞いて、リヴァルとリサはミナガルデの街へと視線を移した。ミナガルデの街からは無数の黒点が放たれ、シュンガオレンに当たって爆発したりしている。
「ガンナーの射程距離内まで接近されているんですね…」
「おいおい、マジかよ…！」
リサが不安気に声を上げたが、カズキの声を聞いたリヴァルはシュンガオレンの方を向いた。そこにはミナガルデの街の手前で動きを止め、巨大な一対の鋏を高々と掲げるシュンガオレンの姿があった。あの鋏が振り下ろされればミナガルデの街に甚大な被害が出るだろうことは想像に難くなかった。ガンナー達の攻撃が止まっているのは、あの鋏から逃れようと退避したからだろう。しかし幸いなことに、その鋏が振り下ろされることはなかった。シュンガオレンの本体を支えている4本の脚で、その中の1本が赤色に変色したのだ。そしてシュンガオレンは体勢を崩し、高々と振り上げられた鋏はそのまま下へと降ろされた。
「危ねぇな…」
カズキの漏らした言葉はリヴァルの心境と同じだった。あんな巨大

な鋏を振り下ろされたら、街が二分されかねない。シュンガオレンは４本の脚をボキボキッと鳴らして再び姿勢を低くした。そしてその場で旋回すると、ミナガルデの街に背を向ける体勢をとる。

「何をする気だ…？」

シュンガオレンは一対の鋏を地面に突き刺すと、背中の甲羅の口を開いた。シュンガオレンに限らず、ダイミョウザザミやショウグンギザミ等の甲殻種は背中にヤドを背負っている。ダイミョウザザミはモノブロス、ショウグンギザミはグラビモスの頭蓋骨というのが一般的だが、目の前のシュンガオレンは巨大な竜の頭蓋骨を背負っている。その口が開くと、中から黄色の霧が溢れ出した。何かを吐き出そうとしているのだろう。

「まずい…！」

リヴァルのハンターとしての勘が危険を感じていた。シュンガオレンの巨体が震え、力を込めているように見える。ミナガルデの街の方からは悲鳴が聞こえ、ガンナー達が混乱しているのが想像できる。そしてついに、シュンガオレンの背中の頭蓋骨の口から黄色い液体が発射された。それは放物線を描いてミナガルデの街へ飛んでいき、衝撃でリヴァル達が立っている場所まで揺れた。

「…」

リヴァルもリサもカズキも声が出なかった。それはこの場にいる全てのハンターも同じで、リヴァル達の近くで待機しているハンター達も絶望したように黙り込み、シュンガオレンの足元で戦っているハンター達は戦うことをやめてしまっている。

「街を…守れなかった…？」

リヴァルは膝の力が抜けてしまい、その場に座り込んでしまう。リサもリヴァルに続いてその場に崩れるように座った。

「くそっ…。くそっ…！」

カズキはシュンガオレンを睨み、罵る言葉を吐く。リヴァルは自分の両手を見つめると、きつく瞼を閉じた。ミナガルデ防衛戦は終わったのだ。ハンターの負けで。

「リヴァルさん…」
リサが声を掛けてくれたが、目を開けることすらためらわれた。目を開ければ、見たくない現実を見てしまう。それでも再度リサに名前を呼ばれて目を開けたその時、リヴァルはシュンガオレンが悲鳴を上げたのを聞き逃さなかった。慌てて顔を上げると、そこには脚を4本とも赤く染め上げ、その場に崩れ落ちるシュンガオレンの姿があった。シュンガオレンの足元で戦っていたハンター達が慌てて退避する様子がここからでも見て取れる。しかしその場を動かないハンターが3人。ジュンキとクレハとショウヘイだ。その3人はシュンガオレンの巨体に潰される直前、人間ではあり得ない跳躍力でその場を飛び退き紙一重で回避してみせた。そのまま同時に膝関節を巧みに使って着地すると、バネのようにシュンガオレンの元へと跳んで戻る。その先はまさに芸術だった。右にジュンキ、左にショウヘイ。中央にクレハがいて、一寸の狂いもなくタイミングを合わせてシュンガオレンの本体に攻撃を加えていく。それを見たハンター達が次々と攻撃に加わり、シュンガオレンを囲んでいく。
「…！」
突然右肩を掴まれたので振り返ると、カズキが一度頷いてシュンガオレンを指差した。
「俺達も行くぞ」
「はい！」
リサがそう言って立ち上がったので、リヴァルも負けていられないと立ち上がる。
「…行こう」
リヴァルは自分にそう言い聞かせると、先陣を切って走り出した。

ジュンキ、クレハ、ショウヘイはシュンガオレンに攻撃を仕掛ける際、一切言葉を交わしていなかった。一心不乱でそれぞれが己の武器を振り回しているのに、タイミングが一致する。呼吸が合う。そしてジュンキがクレハとショウヘイに目配せすると、まるでこうな

ることが分かっていたかのようにクレハとショウヘイも目を合わせて頷いた。
「はあああああっ！」
「やあああああっ！」
「たあああああっ！」
ジュンキとショウヘイがそれぞれの太刀を振るい、クレハが鬼人化して2人の間で舞う。そしてジュンキとショウヘイが太刀を、クレハが双剣をシュンガオレンに突き立てた。シュンガオレンがビクビクッと痙攣し、脱力してその場に崩れる。ハンター達からは歓声が上がったが、ジュンキ、クレハ、ショウヘイの3人は黙ったままシュンガオレンの顔の前に立った。
「流石は竜人…。竜人に本気を出されると敵わん…」
シュンガオレンが口元から泡を噴き出しながら、竜人にしか聞き取れない声を上げた。
「しかし、私を止めたところで計画は終わらない…。せいぜい頑張ることだな…」
これが、シュンガオレンの最後の言葉だった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　07

ジュンキ、クレハ、ショウヘイはシュンガオレン討伐に歓声を上げているハンター達に気付かれないよう静かにその場を離れ、リヴァル達と合流することにした。

「また噂になっちゃうね」

クレハの言葉にジュンキが苦笑いを浮かべ、ショウヘイは小さく笑って小さくため息を吐いた。ハンター達の口は軽い。ジュンキ、クレハ、ショウヘイが人間業とは思えない勢いでシュンガオレンを倒したことなどすぐに広まってしまうだろう。そしてその噂を聞きつけたシュレイド王国が、また軍隊等を仕向けてくるかもしれない。

「まあ、まずはこれからの事を話し合おう。ユウキとも合流しないと」

ショウヘイがそう言って前を指差す。そこには軽く手を振るカズキと、その後ろに並んで歩くリヴァルとリサがこちらに向かって歩いて来るところだった。

「ジュンキー、クレハー、ショウヘーイ、無事かー？」

先行するカズキに、リヴァルとリサは黙って付いていった。昔からジュンキやクレハ、ショウヘイの竜人としての能力を間近で見てきたカズキには今回の件もいつものことなのかもしれないが、リヴァルやリサにはあまりに衝撃的だった。ジュンキ、クレハ、ショウヘイは並んで歩み寄ってきて、6人は合流した。

「いろいろ話があると思うけど、ユウキと合流してからにしよう」

ジュンキの提案を受け入れ、リヴァル達6人はミナガルデの街に足を踏み入れた。街の中はひどい有様だった。綺麗な石畳は砕け、家屋は倒壊しているものもある。そして何よりもシュンガオレンの放った液体が当たった岩の表面がただれている。強い酸なのだろう。シュンガオレンの放った液体の衝撃によって市場が半壊し、噴水広

場と酒場の壁には穴が空いているのが見て取れた。このシュンガオレンが与えた噴水広場の穴は深くて広く、飛び越えることはできそうにない。今は応急的に丈夫な木の板が橋として架けられていて、その橋を渡って噴水広場に辿り着くと手分けしてユウキを探した。多くのガンナーは退避していたので怪我は少ないようだが、所々にガンナーの遺体が転がっている。あのシュンガオレンの放った液体に触れたのか、液体の圧力に押し潰されたのか、液体に溺れたのか…。地獄絵図のような噴水広場の一角に、うずくまっているユウキの姿を見つけた時はリヴァル達全員が安堵したのだった。

「ユウキ、大丈夫か？」

「ん？ああ…」

ジュンキが声を掛けると、ユウキはゆっくりと顔を上げた。

「みんな無事か？」

「この通り、全員無事だ。怪我人もいない」

ショウヘイの言葉に、ユウキはいつもの笑みを浮かべた。

「そっか。よかった」

ユウキはそれだけ言うと立ち上がった。

「それで、これからどうするんだ？」

「酒場に行こう。ベッキーから話があるだろうと思うから」

ユウキの質問にジュンキはそう答えると歩き出し、他の5人も一緒に歩き出した。

「ひどい有様ですね…」

リサはジュンキ達に聞こえないよう、小さな声でリヴァルに言った。

リサの言葉を聞いて、リヴァルは視線を落とす。

「そうだな…。早く元通りになることを祈ろう」

リヴァルはそれだけ言うと後は黙ってジュンキ達に続き、酒場の入り口をくぐった。酒場の中は半分が瓦礫で埋まっていて、ベッキーがいつも待機しているカウンターも瓦礫の下だ。幸いベッキーは怪我をしている様子はなく、カウンターに一番近いテーブルの席で報告書のようなものにペンを走られていた。今は話し掛けないでおこ

うということになり、リヴァル達はとりあえず空いている席に座ってこれからのことを話し合うことにした。
「…人間駆逐作戦」
初めに口を開いたのはジュンキだった。
「その名の通り、人間をこのシュレイド大陸から、もしかしたらこの世界から消そうという計画…」
「シュンガオレンがこのミナガルデの街を襲ったのもその計画の一部だろう」
ジュンキの独り言のような言葉にショウヘイが推論を乗せる。
「森丘、雪山、砂漠、沼地、火山…我が計画に賛同する同胞は、即座に集まれ。」
クレハはセイフレムから聞いたミラルーツの言葉を口にした。
「ミラルーツがねぇ。その場所…森丘、雪山、砂漠、沼地、あと火山か？そこに集まれ、か」
カズキが天井を見上げながら言った。
「つまり、人間を駆逐することに賛同してくれる竜はそこに集まって下さいってことですよね」
「そして森丘にシュンガオレンが現れ、そのままミナガルデの街を襲った。つまり、残りの雪山、砂漠、沼地、火山にも凶暴なモンスターがいるってことじゃないか？」
リサとリヴァルの意見を聞くと、ジュンキ達は各々頷いてリサとリヴァルの考えを受け入れてくれた。
「森丘のシュンガオレンは倒せたからいいとして、あと４箇所のモンスターを何とかしないといけないってことか」
ユウキが結論を出すと同時にベッキーが声を上げたので、リヴァル達は話を止めてベッキーに注視した。
「まず、残念ながら死んでいった者たちに黙祷を」
ベッキーの一声で、今回の防衛戦で亡くなったハンター達に黙祷が捧げられた。
「では、ミナガルデ防衛戦の報告を始めます――」

ベッキーはよく通る声で街の損壊状況、ハンター達に支払われる報酬金や報酬素材等の話を進め、最後に「以上、解散。本当にありがとう」という言葉を残してハンター達の前から移動し、リヴァル達の方へと寄ってきた。

「重要な話があるの。今夜ジュンキ君の部屋に行くから、みんな集まっていてね」

「えっ…？」

名指しされたジュンキは驚きの声を上げたが、ベッキーはそれだけ言い残して酒場の奥へと消えた。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　08

「お待たせ」
夜になり、酒場で夕食を済ませたリヴァル達がジュンキの部屋へと集まったところでベッキーが姿を現した。酒場から直行したらしく、ギルドの制服のままだ。
「テーブル借りるわね」
ベッキーは部屋主であるジュンキの返事を待たずに右腕に抱えていた古びた地図を広げた。
「シュレイド大陸図…？」
リサが呟くと、ベッキーは無言で小さく頷いた。そして地図の上にチェスのポーンを置いていく。その数5つ。
「先程、ドンドルマの街から連絡が入ってね、この場所に凶暴化したモンスターが集結しているらしいの」
ベッキーの言葉に、リヴァル達はシュレイド大陸図に身を乗り出した。ベッキーがポーンを置いた場所。そこは森丘、雪山、砂漠、沼地、火山だった。
「やっぱり…」
「やっぱりっていうことは、あなた達は何か知っているのね？」
クレハが漏らした言葉を、ベッキーは聞き逃さなかった。クレハの代わりに、ショウヘイがベッキーの前に出た。
「森丘、雪山、砂漠、沼地、火山…。この5ヶ所に強大な力を持つモンスターが現れると聞いている」
「…」
「森と丘のモンスターはシュンガオレンだった。けど、それは倒された」
ユウキはそう言うとシュレイド大陸図の森と丘の上に置かれているポーンを横にした。
「残すは4ヶ所だな」

ユウキがベッキーを見上げて言うと、ベッキーは頷いた。
「まだ街や人に被害が出てはいないけれど、下手をすればこのミナガルデの二の舞になる場所が出てもおかしくないわ。まだドンドルマの街にはミナガルデの惨状は伝わっていないだろうけど、ハンターズギルドのミナガルデ支部は先手を打つことに決めたわ」
「先手…？」
リヴァルが漏らした言葉にベッキーは一度頷いてから口を開いた。
「今はこの４ヶ所に集まっているモンスターを調査中らしいけど、どんなモンスターなのか特定できれば討伐依頼が下されるわ。そしてその依頼をあなた達に受けてもらい、完遂して欲しいの」
ベッキーの言葉にリヴァル達は驚きのあまり言葉を失った。
「これは私個人のお願いじゃなくて、ハンターズギルドミナガルデ支部からのお願いなの。明日にはドンドルマの街に向かって出発よ」
「ちょ、ちょっと待って…」
ベッキーが話を進めてしまうので、クレハが慌てて止めに入った。
「まだ私たちの結論が出てないの。私たちで話し合う時間くらい貰えないかな…？」
「…そうね、ごめんなさい。私はここで待つから、話し合って」
ベッキーはそう言うと数歩下がり、部屋の壁に寄り掛かった。
「え～っと…」
「クレハ」
クレハがこれからどうしようか悩んでいるようだったので、その役目をジュンキが買って出た。
「まず、この４ヶ所のモンスターについて。どうする？討伐に行くか？」
「できれば説得したいものだが、無理だろうな。討伐は仕方ないだろう」
「だよね。シュンガオレンは聞く耳を持たなかったし」
「俺もいいぞ。ミナガルデの二の舞はごめんだ」
「俺も」

「こんな私でも、少しの足しにでもなれば…」
「…俺も」
ジュンキの問い掛けにショウヘイ、クレハ、ユウキ、カズキ、リサが答え、リヴァルも遅れて返事を返した。
「話はまとまったようね。ありがとう」
ベッキーは再びシュレイド大陸図の前に立った。
「ドンドルマの街への移動も問題ないわね？」
ベッキーの問い掛けに、リヴァル達は頷いて返事とした。
「じゃあ明日の朝、酒場に来てね。あ、そうそう、私も同行するからよろしく」
ベッキーはそう言うとシュレイド大陸図とポーンをしまい、おやすみと言ってジュンキの部屋を出ていった。
「…俺達も明日の準備だな」
カズキはそう言って、ベッキーに続いてジュンキの部屋を後にした。
その後もリヴァル達は口々に挨拶して、ジュンキの部屋を後にしていく。
「リヴァル」
最後にジュンキの部屋を出ようとしていたリヴァルに、ジュンキは声を掛けた。リヴァルは部屋から半歩出た状態でジュンキを振り向く。
「今日はありがとう」
ジュンキの感謝の言葉を聞くとリヴァルは深い赤色の瞳を一瞬見開き、そして俯いた後に「俺に出来ることをしただけだ」と言って部屋を出ていった。一人残されたジュンキはベッドに背中から飛び込むと穏やかな笑みを浮かべた。
「リヴァルの奴、少しだけど雰囲気変わったな。何が原因だろう…」
ジュンキは目を閉じると、そのまま眠りに落ちていった。

「ジュンキー。朝だよー」
横で誰かに呼ばれて、ジュンキは目を覚ました。

「やっと起きた…。早くしないとジュンキの朝ご飯の時間無くなるよ？」

「え…？あれ…？クレハ…？」

そこにはいつものレイアS装備姿のクレハが立っていた。ちゃんと背中に双剣もある。

「クレハ？じゃないでしょ。早く着替える着替える」

ジュンキは瞼を何度かパチパチさせた後、クレハが立っている場所とは反対側にベッドから降りて装備品が置いてあるアイテムボックスへと向かう。

「どうやってこの部屋に入ったんだ？」

「鍵かかってなかったよ」

右から左へ、ベッドから部屋の扉へと移動していくクレハの声を聞いて、ジュンキは自分に対してため息を吐いた。

「外で待ってるね」

「先に行っててていいんだぞ？」

「ううん、待ってる」

クレハはそう言うと部屋から出た。長い間待たせる訳にはいかないので、急いで武器防具を装備して部屋を出る。

「お待たせ」

「じゃ、行こっか」

クレハはそう言うとジュンキと並んで歩き出した。突き当たりの階段を降りてカウンターでチェックアウトの受付をしてから外にでる。半壊したミナガルデの街では通行の邪魔になる瓦礫は撤去されたものの、市場や酒場はまだ正常な機能を果たしていない。

「…早く元通りになるといいね」

「そうだな…」

昨日の戦いの事を思い出しながら酒場の中へと入った。酒場の中は昨日の戦いの影響で壁が崩れ、その瓦礫を撤去していないまま営業している。この酒場全体が崩落するのではと心配になりながらもジュンキとクレハはリヴァル達が座っているテーブルに着き、ベッキ

ーに朝食を頼む。
「おはよう。ミナガルデの街を出る前にセイフレムと話をしておきたいんだけどいいかな？」
このジュンキの提案は誰からも拒否されずに通った。ベッキーに街を出るのを少し待って欲しいと伝え、リヴァル達は酒場を後にした。まだ所々に瓦礫が散乱しているミナガルデの街中を横切り、街の外へと移動する。街の外は今回の防衛戦のために森を切り開いたため、少し殺風景になっていた。昨日の戦いで使われたのだろう砥石や回復薬が入っていた瓶、ボウガンの弾に矢などが辺り一面に散らばっている。その中でも特に目立つのがシュンガオレンの死骸だ。あまりに巨大で重たいため、ミナガルデの街が復興するまで手を付けないと決まった、とベッキーからリヴァル達は聞いている。そのシュンガオレンの隣に伏せている深緑の竜、リオレイア。セイフレムだ。リヴァル達が近づくとセイフレムは身体を起こした。そのセイフレムの前に竜人であるジュンキ、クレハ、ショウヘイが立ち、まだ竜人として目覚めていないリヴァルと竜人ではないリサ、ユウキ、カズキが後ろで見守る。
「本当に竜と話ができるんですね…」
リサが不思議な目でジュンキ、クレハ、ショウヘイを見ながら言ったので、リヴァルは短く「ああ」と答えておいた。その後リサから話し掛けられることはなく、そのままセイフレムが飛び去るまで口を聞かなかった。
「ココット村の裏山に帰したのか？」
「ああ。俺達はこれからミラルーツの計画を止めるためにいろいろ動くということを伝えて、ありがとうって言っておいたよ」
「じゃあ街に戻ろうぜ。ベッキーは待たせると怖いからな」
カズキの言葉には全員が笑ったが事実でもあるので、リヴァル達は寄り道せずに街へと戻ることにした。街の噴水広場の前でベッキーと合流したリヴァル達は、ドンドルマの街を目指して竜車に乗り込んだのだった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　09

ドンドルマの街に着くと、ベッキーを先頭に竜車の乗降場から街の広場へと出た。リヴァルにとってはポッケ村に活動拠点を移した――ティガレックスによる負傷とその後のいざこざで活動拠点を移さざるをえなかった――のでそれ以来のドンドルマで、ジュンキ、クレハ、ショウヘイ、ユウキ、カズキにとっては街から逃げた約4ヶ月ぶりのドンドルマである。リサにとってはこれが初めてのドンドルマの街だ。

「大きな街ですね」

「ハンターズギルドの本部があるからな」

リサが物珍しそうに視線を泳がしているので、リヴァルは一応ハンターズギルドの本部がこの街にあることを伝えておいた。

「久しぶりだな、この街…」

「そうだね。街を出るキッカケが、逃亡だったから…」

リサがドンドルマの街に思いを馳せる一方で、ジュンキ達は街を出た時、それはシュレイド王国軍に追われて逃亡した時だった。

「初めて見る街に思いを馳せるのも、昔を思い出すのもいいけど、そろそろ大衆酒場に着くわよ」

ベッキーはそう言って大衆酒場の中へと入っていった。リヴァル達も続く。今は昼間なので苦労せずにカウンターに辿り着くと、リヴァルやジュンキ達には聞き慣れた声がカウンターの奥から聞こえてきた。

「ベッキー先輩！みんな！来てくれたんですね！」

声の主はユーリだった。ドンドルマの街で受付嬢を仕事としている快活な少女は、ジュンキ達がドンドルマの街から逃亡する際に手助けしてくれたのを最後に会っていなかったが、こうして元気そうな姿を見ることができてジュンキ達は内心安堵していた。

「あっ、リヴァル君？」
「ん？そうだが」
「よかった。ポッケ村の村長さんから通知を受けていました。怪我をして動けない、と。でも無事みたいでよかったです」
「ああ、どうも…」
ユーリの明るい振る舞いはリヴァルが苦手とする人柄のひとつだ。どう対応したらいいのか分からず、押され負けしてしまう。
「みんなと元気な姿で再会できたのは嬉しいけど、今はそう喜んでいられる状況じゃないみたいなんだよね…」
「大陸各地のモンスター、だな」
ショウヘイの言葉に、ユーリは真剣な表情で頷いた。
「どの場所にどんなモンスターが現れているのかはハンターズギルドで既に把握しているのだけど、正式な発表は明日なの。だから今日はゆっくり休息を取って」
「分かった」
ジュンキがユーリに返事をすると、ベッキーがリヴァル達から離れてカウンターの中へと入った。
「私はミナガルデの街の報告があるから、先に休んでて」
ベッキーはそう言うと、カウンターの奥へと消えてしまった。
「俺達は明日まで自由行動か？」
「そうだな。そうしようか」
「よし、じゃあまた明日――」
「ちょっと待って」
カズキの問い掛けにジュンキが全体を見渡してから答えると、カズキが走りだす前にユーリが声を上げた。そのユーリの手には6本の鍵。
「みんなの部屋、まだ残ってるわよ。もちろんチヅルちゃんの部屋も…。あと、リヴァルくんと、そちらの…」
「初めまして。リサ、といいます」
「リサちゃんね。二人の鍵はこれ」

ユーリはそう言ってリヴァル達7人全員に部屋の鍵を渡した。チヅルの部屋の鍵はジュンキが代表して受け取った。
「悪いな、部屋を残しておいて貰って」
「いいのいいの。部屋代はちゃんとこれからの依頼達成時の報酬金から減額されるから」
「うげっ…」
わざとらしく声を上げたのはカズキだろうか。リヴァル達はユーリに礼を言ってから、まずはチヅルの部屋へ向かうことにした。

リヴァル達は各自の部屋を確認した後、チヅルの部屋の前に集まった。パーティメンバー7人全員が揃ったことを確認すると、ジュンキはチヅルの部屋の鍵を開けた。部屋の中は想像以上に綺麗で、ユーリがしっかり管理してくれていたことを伺わせた。リヴァル達は誰も口を開かず、静かに部屋の中へ足を踏み入れる。その中でクレハはアイテムボックスに近づくと蓋を開き、こちらを振り返った。
「ねえ…チヅルちゃんの道具や素材、どうする？」
「ユーリにお願いして、ハンター専用の火葬場で燃やして貰おうと考えてるけど…」
「うん…そうだね…」
クレハはそう言うと、静かにアイテムボックスの蓋を閉じた。
「…明日からまた忙しくなる。そろそろ出よう」
ショウヘイの言葉に促されて、リヴァル達はチヅルの部屋を出た。最後に部屋を出たジュンキが鍵を掛けると、ひとり、またひとりとドンドルマの街へと歩き出した。
「ジュンキ…」
「…鍵は俺がユーリに返しておくよ」
クレハが心配そうな声を上げたので、ジュンキは出来るだけ笑顔でそう答えたのだった。

MH3rd　第2章　ミナガルデ防衛戦　10

翌日、リヴァルはハンター専用の宿泊施設――――通称マイハウスの前でリサと合流してから大衆酒場へと足を踏み入れた。まだ朝ということもあって夜ほど混んではいなかったが、真昼ほどの閑散ぶりでもない。綺麗に敷き詰められた石畳の上に並べられた長テーブルのひとつにジュンキ達の姿を見つけて、リヴァルとリサはジュンキ達の隣に――――リヴァルはショウヘイの隣に、リサはクレハの隣に座った。

「おはよう、リサちゃん」

「おはようございます、クレハさん」

「おはよう、リヴァル」

「…ああ」

リヴァル問とリサが挨拶を済ませると、その時を狙ったかのようにユーリが現れて注文を取り始めた。各々朝食を注文し終えたその時を見計らい、ショウヘイがユーリを呼んだ。

「ユーリ、火山や沼地に出現したモンスターについて何か分かったか？」

ショウヘイの問い掛けに、ユーリはいつになく真剣な表情で口を開く。

「各場所に現れたモンスターが何なのか分かったわ。雪山にクシャルダオラ。砂漠にテオ・テスカトル。沼地にキリン。火山にラージャンよ」

ユーリが淡々と述べたモンスターの名前を聞いてリヴァルとリサは驚いたが、ジュンキ達は冷静にユーリの話を聞き、驚愕よりは納得しているようだった。どのモンスターも古龍か、古龍に等しいくらいの危険なモンスターなのにである。ユーリがカウンターの方へ戻っていくと、リヴァル達はジュンキを中心に今後の作戦を練り始めた。

「相手は古龍級のモンスターばかりだが、みんな一度は狩猟経験があるだろう？変に気負う必要はない」
ショウヘイの言葉にジュンキ、クレハ、ユウキ、カズキが頷いたので、リヴァルとリサは驚き絶句してしまった。リヴァルとリサはポッケ村での生活を通してジュンキ達の実力をある程度把握しているつもりだったが、ジュンキ達5人の実力はその更に上をいっているようだった。
「あ、リヴァルとリサはまだ狩猟経験は無いか？すまない」
「いえ…」
ショウヘイが謝ってきたので、リサは「気にしないで下さい」と申し訳なさそうに微笑んだ。
「…さ、どうやって狩る？」
「いくら緊急事態でも、7人で狩りに出ることは出来ないだろうな。4人で出て、3人は留守番か…？」
「それだと非効率だ。3人で狩りに出られないか？」
「3人は危険だろう。ミラルーツが送り込んだモンスターだ、そう簡単に狩れるとは思えないな」
「あの…」
ジュンキ、ショウヘイ、ユウキ、カズキが考え込んでいるその時、リサが口を開いた。
「3人の方に、竜人を2人置いたらどうですか？」
「あ～なるほどね。確かにそれなら安心かな…？」
とユウキが天井を見上げながら言った。
「だとすると、ジュンキとクレハが3人の方だな」
「だなー」
「なー」
「えっ？」
「へっ？」
突然ショウヘイが言ったことにユウキとカズキがいきなり賛同したので、ジュンキとクレハは驚いて言葉に詰まってしまった。

「クレハはジュンキから離れたくないんだろ？」
「えっ、まあ、そう…かな…」
カズキに直球で聞かれたので、クレハは顔をジュンキから隠すようにして肯定の意思を出した。
「わ、私はリヴァルさんと一緒がいいです…」
「えっ？」
突然リサがリヴァルと行動したいと言ったので、リヴァルは驚いて言葉に詰まってしまった。
「おお～っ！熱いのが二組も。ヒュー！」
「そ、そんなんじゃないですっ！」
カズキがはやし立てる中、リサが全面否定する。しかしジュンキとクレハは互いに顔を赤らめているものの、否定はしないのだった。
「…閑話休題。ジュンキ、クレハは3人側。リヴァルとリサ、そして俺は4人側だが…。ユウキとカズキはどちらに入るんだ？」
「俺はガンナーだから、メンバーが多ければ多いほど俺の気配を隠せる。俺は4人側で行きたい」
ショウヘイの問い掛けに、ユウキは持論を言った。それに対してカズキは「それでいい」と答え、リヴァル達7人はリヴァル、リサ、ショウヘイ、ユウキの4人とジュンキ、クレハ、カズキの3人という2つのパーティに分割された。
「後はどの場所へ赴くかだな」
「適当でいいか？クシャルダオラとラージャン」
ジュンキが適当に狩猟対象を選択したが、これに関しては誰も異議を唱えなかった。
「じゃあテオ・テスカトルとキリンだな」
「よし、それでいこう。みんなもそれでいいか？」
ジュンキが話をまとめると、丁度その時を見計らっていたかのように朝食が運ばれてきたので、リヴァル達は早速食事を始めたのだった。

ジュンキ、クレハ、カズキの3人は、朝食を済ませ次第ドンドルマの街を出発した。まず最初の狩猟対象はクシャルダオラと3人で話し合って決め、雪山へと向かう竜車に乗り込んだ。今はザラムレッドやセイフレムに頼むわけにもいかないので、雪山の麓のポッケ村に到着した頃には5日が経ってしまっていた。

「かなり時間がかかっちまったな」

「陸路で行くのは大変な村だからな」

「う〜、お尻が…」

カズキとジュンキは颯爽と竜車から降りたが、クレハは尻を撫でながらゆっくりと竜車を降りた。

「パッと見、異変は無さそうだけどな」

「中に入ってみないと分からないだろ」

カズキが腰に手を当てて前向きな事を言うので、ジュンキは一応釘を刺す。

「ま、入ろうぜ」

カズキが先陣を切って歩き出し、その後ろにジュンキとクレハが続く。3人揃ってポッケ村の門をくぐり村の中を見渡すが、これといった異常は見受けられない。

「クシャルダオラによる直接的な被害はまだ無しか」

ジュンキが安堵する中で、クレハが心配そうに口を開いた。

「村長さんの話を聞こう?目に見えない被害があるかもしれないし」

「ああ、そうだな」

クレハの意見はもっともで、ジュンキとカズキは頷いた。クレハも一度小さく頷いてから、いつもの場所で焚き火にあたっている村長に駆け寄った。

「村長さん!」

クレハに呼ばれた村長は一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐにいつもの温和な笑みに変わった。

「おや、クレハ殿ではないか。ジュンキ殿にカズキ殿も。他のみなさんはどうしたのかの?」

ここでジュンキは村長に、これまでの経緯を簡単に説明した。
「…なるほどの。空に放たれた炎のブレス、突然現れた雪山のクシャルダオラ…。これで納得ができたよ」
村長は「ふう…」とため息を吐いてから言葉を続けた。
「今、この雪山にクシャルダオラと呼ばれる古龍がいる。あまりに危険なので、村人は雪山への立ち入りを禁じているところだよ」
「今のところの被害はどうですか？」
「幸い、誰一人として怪我してないよ。村もまだ襲われていない」
「そうですか…」
村長の言葉を聞いて、ジュンキ、クレハ、カズキは互いの顔を見合わせて頷き合った。
「なあ、村長。そのクシャルダオラと戦わせてくれないか？」
カズキの持ち出した話に、村長は驚きの表情を隠さなかった。
「あまりに危険じゃ。許可はできないよ、と言いたいが…そのためだけにわざわざこの村まで戻ってきたんだよね。それに、竜人…だったかの？その力を信じてみようかね」
村長はそこまで言うと、懐から一枚の羊皮紙を取り出し、ジュンキ達に差し出す。それはクシャルダオラの討伐依頼書だった。隅に雪山立ち入り許可の旨も記されている。
「支給品はちゃんと届けさせるからね。気をつけるんだよ」
「ありがとう、村長」
クレハの感謝の言葉に、村長は「無理はしないんだよ～」と暖かく見送ってくれたのだった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　01

ジュンキ、クレハ、カズキの3人はポッケ村で少し休憩を取った後、その日のうちに雪山のベースキャンプへと移動した。その頃には陽が暮れかかり、厚い雲の隙間から差す夕日が雪山を赤く染めていた。3人はベースキャンプに入ると、まずは支給品の確認をする。支給品ボックスの中には4人分の応急薬、携帯食料、携帯砥石、そしてボウガンの弾。個数に問題がないことを確認すると、3人はそれぞれの武器を背中から外して近くの岩壁に立て掛けた。

「もう日が暮れる。クシャルダオラと戦うのは明日にしないか？」

「そうだね。夜の雪山は危険だし」

「だな。それにクシャルダオラは逃げないだろうし」

「その間に村が襲われなければいいけど…」

ジュンキはポッケ村が襲われることを危惧していたが、それでも狩りは明日にすることにした。無理に夜の雪山でクシャルダオラと交戦して、足を滑らせて谷底へ落ちたら話にならない。

「もう日が暮れるよ。火を焚かないとね。私、薪を取ってくる」

クレハはそう言って、テントの裏に積み上げられている薪を取りに行ってしまった。

「んじゃ、俺達は簡単な飯でも作りますか」

「そうだな」

クレハが薪に火を点けて簡単な「かまど」を作る間に、ジュンキとカズキはポッケ村で買っておいた食材をポイポイとベースキャンプに備え付けられている鍋に放り込む。水で満たし、そこにポッケ村では価値が高い、ドンドルマの街から持ってきた塩を適量振り掛け、クレハが作った「かまど」の上に乗せた。

「かまど、ありがとう」

「ううん。私じゃ料理できないから…」

「これは料理って言わないと思うけど…」

クレハの返事に、ジュンキは苦笑いする。食材が煮詰まるその間に、ジュンキ、クレハ、カズキの3人はそれぞれ肉焼きセットを取り出して生肉を焼くことにした。流石のクレハも、肉焼きセットを使用して生肉を焼くことはできる。そして鍋も煮詰まり、簡単な夕食の時間が始まった。

「3人だけで食う夕飯ってのは今まであんまり経験ないよなー」

「確かにね～。特にジュンキとカズキと私の組み合わせは初めてかも」

カズキとクレハは時々話を加えながら食事を進める。ジュンキは食事に集中していて、クレハとカズキの会話を聞きながらも自ら言葉を発することは食事中なかった。

簡単な作戦会議を終えて「かまど」の火を落とすと、ジュンキ、クレハ、カズキの3人はテントに入って出入り口を閉じた。

「3人だとベッドが広く感じるなぁ！」

カズキが背中から簡易ベッドに飛び込む。ジュンキとクレハも横になった。ジュンキが中央、ジュンキの右隣にカズキ、左隣にクレハである。

「明日のクシャルダオラ…大丈夫かな…」

「心配か？」

クレハの声が聞こえたので、ジュンキが耳を傾ける。

「うん…。昔、戦ったことはあるけど、今回は…」

「…ミラルーツの意思に賛同したモンスターだからな。格段に強いかもしれない」

クレハが小さくため息を吐いた音がジュンキの耳に届いた。

「…大丈夫。クレハはひとりじゃないだろ？」

「えっ…？」

「へっ…？」

ジュンキとクレハは互いの顔を見合わせ、同時に頬を赤らめる。

「仲いいな、ほんと」

突然カズキが声を上げたので、ジュンキとクレハは驚いて飛び起きてしまった。そしてそのカズキは頭の下で手を組み、眼を閉じている。その瞳の片方が開いて――カズキはとんでもないことを言ってのけた。

「結婚しちゃえば？」

「は…！？」

「な、な、な…っ！」

ジュンキとクレハは真っ赤になり、口をパクパクさせてしまう。その様子が面白いのか、カズキは言葉を続けた。

「だって一緒に寝るくらいの仲だろ？ハンター同士の結婚も珍しいことじゃないし」

カズキはここまで言って目を閉じた。

「ば…っ！」

「…？」

クレハの低く殺意のこもった声が聞こえてカズキは片目を開き、そして目の前の光景に両目を見開いた。

「ばかあああああっ！！！」

クレハの平手打ちがカズキの頬に炸裂したのだった。

翌朝、簡単な食事を終えてベースキャンプを出発したジュンキ、クレハ、カズキは雪山の山頂を目指して歩いていた。

「痛ってぇ…」

「ははは…」

カズキが頬を撫でながら歩く姿を見て、ジュンキは苦笑いするしかなかった。一方のクレハはというと、朝から頬を朱色に染めて一言も口を聞いてくれない。昨日の夜のことを恥ずかしがって会話しづらいのだろうと思い、ジュンキは静かにしておくことにしている。ベースキャンプの近くにある、山の中を貫いている洞窟を通り、吹

雪が強い山頂付近に出た。ここからもう一度登り、山頂に出る。
「クシャルダオラが山頂にいるって保証は無いと思うけど…」
今日のクレハの第一声である。
「偉そうな奴は高い所が好きなんだよ」
「…？」
カズキのよく分からない理論に、クレハは小首を傾げた。

雪山の山頂は、これまでのエリアよりさらに吹雪いていた。強風に煽られ、気をつけて歩かないと吹き飛ばされそうになる。
「くそっ…！」
ジュンキは思わず悪態を吐いた。猛吹雪のせいで、前を歩いているカズキの背中が霞んでしまっている。自分の姿を見ると、防具に雪が積もってしまっていて真っ白だ。
「一旦山を降りた方がいいんじゃない！？」
クレハの大きな声も猛吹雪により掻き消されてしまっている。
「クシャルダオラは風を操る古龍だ！風が強いこのエリアにいるはずだ！」
カズキの返事があってから、クレハの「うえ～」という声が返ってきた。
「大丈夫か…！？」
ジュンキは振り向いて右手を差し出すと、クレハは両手でそれを掴み返した。
「吹き飛ばされそうだよ…っ！」
「カズキ！やっぱり危険だ！一旦このエリアを――」
ジュンキがカズキに一度山を降りようと言おうとしたその時、今まで猛吹雪だった山頂が一気に静まり返った。
「…カズキ？」
少し前を進んでいたカズキをジュンキは小声で呼んだ。カズキは振り向かずに同じく小声で返事を返してきた。
「来たぞ…。クシャルダオラのお出ましだ」

ジュンキとクレハはすぐにカズキの隣に並んだ。そして岩陰の向こうから雪を踏み締める音が連続して聞こえ、やがて鋼色の古龍が現れた。クシャルダオラである。
「お前達は…竜人か…？」
ザラムレッドより少しキーが高い声が、ジュンキとクレハに聞こえた。
「喋った…」
「俺には聞こえないけどな」
カズキは竜人ではないのでクシャルダオラの声は聞き取れない。ジュンキとクレハはクシャルダオラの声をカズキに伝えながら話を進めることにした。
「竜人とお会いすることができるとはこの上ない幸せだ…。さて、何か私に御用かな？」
「人間駆逐作戦、知ってるな？」
ジュンキは一歩前に出てから口を開いた。
「ええ、もちろん。私はその責任者の一人ですからね。あなた方竜人の事も聞いていますよ。竜人として賛同しかねていると」
「話が早くて助かる。今すぐその計画を中止してくれ」
「それは出来ませんね」
クシャルダオラは即答した。
「どうしてもか？」
「止めたければ、私を殺すしかない」
クシャルダオラはそう言うと鋼鉄の翼を広げ、いつでも走り出せるようにと姿勢を低くした。
「ジュンキ…戦うしかないよ…」
クレハの声が背後から聞こえて、ジュンキは黙ったまま背中の太刀を抜いた。クシャルダオラもこれ以上話すことはなく、天高く咆哮を上げるとジュンキ達目掛けて駆け出したのだった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　02

クシャルダオラの巨体が雪を踏みしめる音と共に突っ込んできたので、ジュンキとクレハはクシャルダオラの右翼側、カズキは左翼側に避ける。クシャルダオラは余裕のある動作で突進する身体を止めるとカズキの方を振り向いた。カズキはクシャルダオラがこちらを向くと予想してランス「ブラックテンペスト」を構えていたため、クシャルダオラが振り向くと同時に頭部を一撃。頭部がカズキなら反対の尻尾はジュンキとクレハのいる方を向く。つかさずジュンキとクレハが尻尾を斬りつけた。しかしクシャルダオラはそのくらいの攻撃ではびくともせず、カズキに殴りかかる。カズキはランスの槍と対になっている大きな盾でこれを防ぎ、隙を見てもう一撃与えた。ジュンキとクレハも攻撃の手を休めない。クシャルダオラは形勢不利と見たのか、一度大きく羽ばたくと地面から少しだけ浮くホバリング状態になった。このままでは攻撃できる箇所が尻尾と後脚だけとなり、効率が悪くなってしまう。おまけにクシャルダオラは別名風翔龍とも呼ばれるくらいの風使いで、宙に浮いているこの状態はジュンキ達にとってかなり不利である。

「ジュンキ！カズキ！私に任せて！」

クレハは背中に双剣「インセクトスライサー」を戻すとアイテムポーチから円筒形の物を取り出した。ジュンキとカズキはそれが閃光玉であることを瞬時に理解し、クシャルダオラの攻撃がクレハに当たらないように立ち回る。

「吹き飛ばしてくれる！」

クシャルダオラがジュンキとクレハにしか聞こえない声を上げると風のブレスの塊をジュンキ目掛けて吹きつけた。それをジュンキは余裕をもって回避し、クシャルダオラの真下に入った。ここでジュンキは太刀「エクディシス」を振るい、無用心に垂れ下がる尻尾と後脚を斬りつける。しかし流石はクシャルダオラ、なかなか刃が通

らない。この時視界の端にカズキの姿が入ったので、ジュンキは大きく太刀「エクディシス」を振りかぶった後にカズキとタイミングを合わせてクシャルダオラの脚の下から出た。

「小賢しい奴め！」

この時クシャルダオラが悪態を吐き、脚の下のカズキ目掛けて噛み付こうと首を動かした。カズキにクシャルダオラの凶悪な牙が迫るが、カズキはこの攻撃もランスの盾で防いでみせる。それと同時にクシャルダオラの胴体を一撃、しかし槍の穂先は通らない。

「ジュンキ！」

背後からクレハに呼ばれて、ジュンキはクレハが何をして欲しいのかをすぐ理解した。ジュンキは太刀「エクディシス」を背中に戻すとアイテムポーチからペイントボールを取り出し、クシャルダオラに当てた。ペイントの実独特の臭気が辺りに充満し、クシャルダオラの気を一瞬だがこちらに引く。クシャルダオラの顔がジュンキの方を向いたのとジュンキの頭上で閃光玉が弾けたのはほぼ同時だった。クシャルダオラは一瞬にして視界を奪われ、その場に落下する。ジュンキとクレハは互いに頷き合うと、クシャルダオラ目掛けて駆け出した。

「カズキ！潰れてないか！？」

「潰れてねぇよ！」

カズキがクシャルダオラの下敷きになってしまっていないか少し心配になったジュンキは声を上げたが杞憂だったようで、カズキの元気な声が視界を奪われて暴れているクシャルダオラの向こうから聞こえた。

「私は尻尾を斬り落とすっ！」

クレハは叫ぶように言うと背中の双剣「インセクトスライサー」を抜き放ち、クシャルダオラの尻尾を斬りつける。ジュンキは腹部を、カズキは頭部を狙って攻撃を加える。

「許さん…！いくら竜人といえども、もう手加減はせぬ…！」

クシャルダオラは一気に身体を起こすと、その場で前脚を天高く掲

げて咆哮した。あの巨体がこうも早く立ち上がれるとは思っていなかったジュンキ、クレハ、カズキはクシャルダオラの咆哮にその場で動けなくなってしまい、次の瞬間にクシャルダオラを中心として発生した突風のせいで吹き飛ばされてしまう。

「まずは貴様だ…！」

クシャルダオラは口を開くと、クレハ目掛けて噛み付いた。クレハは思わず目を閉じてしまうが、襲ってきたのは肉を引き裂かれる痛みではなく何かが当たった衝撃と雪の上を転がる感覚だった。

「大丈夫か！？」

目を開けると、そこには自分に覆い被さるようにジュンキがいた。どうやら噛み付かれる直前に、ジュンキが助けてくれたらしい。

「あ…！」

何か言わなければと思ったが、クシャルダオラの悲鳴に似た声にそちらを向いてしまう。クシャルダオラはカズキの攻撃を受けて上空へ飛び上がり、遠ざかって行ってしまった。

「カズキ！どうした！？」

「翼を貫いてやったら驚いて逃げやがった！」

カズキは遠ざかるクシャルダオラを見つめ続けながら答えた。

「ジュンキっ…」

下から声が聞こえたのでそちらを向くと、クレハが仰向けに倒されたままだった。ジュンキは慌てて立ち上がり、クレハに手を差し出す。

「ごめん、クレハ。怪我はないか？――うわっ！」

クレハがジュンキの手を掴み、立ち上がると思いきやいきなりクレハがジュンキに抱き付き、そのまま押し倒されてしまった。

「ク、クレハっ！？」

「…助けてくれてありがと」

クレハはジュンキの胸元でそう言うと立ち上がり、ジュンキに手を差し出す。先程とは立場が逆になってしまい、ジュンキは苦笑いしながらクレハに起こされた。

「お～お～、やっぱり結婚しちまえよ」
いつの間にか近くまで来ていたカズキがそう言ったので、ジュンキとクレハは飛び上がって驚いた。
「い、今はクシャルダオラが先だろっ！」
「そ、そうそう！」
ジュンキとクレハは互いに無理矢理納得し、カズキを置いて歩き出す。そのカズキがグヒヒと笑う度に、ジュンキとクレハは顔を赤くするのだった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　03

「私の鋼鉄の翼に傷を付けるとはな…」
山頂エリアから山を下るように移動し隣のエリアに入ると、雪の大地に降り立っているクシャルダオラは静かに言った。
「今までそんなハンター、会ったこともなかったわ」
「だったら素直に投降してくれないか？このままだと俺達はお前を殺す事になるぞ」
「私が投降することは有り得ない。私達の、この竜の世界を守るために…！」
クシャルダオラが気になる言葉を発したが、ジュンキやクレハが考える前に突進してきたので頭を切り替えて回避行動を取る。ジュンキとクレハは突進してくるクシャルダオラに向かって左側に、カズキは右側に回避した。クシャルダオラは先程までジュンキ達がいた場所で立ち止まると素早く身を翻し、ジュンキとクレハに向かって風のブレスを吐いた。竜巻を横に倒したような強力なブレスは、周囲の物を軽々と吹き飛ばす。ジュンキとクレハはこれを余裕を持って回避した。
「ちぃ…！ちょこまかと…！」
「俺のことを忘れるなっ！」
ジュンキとクレハに気を取られていたクシャルダオラにカズキのランスが突き刺さる。ブラックテンペストの穂先はクシャルダオラの強固な甲殻によって阻まれるものの、何とか出血させることができた。
「この人間風情が！」
クシャルダオラが怒りの声を上げ、身体をしならせてカズキに前脚で殴りかかる。カズキはこれを避けようとせず、ブラックテンペストの盾で防いでみせた。そしてクシャルダオラの僅かな隙を狙い、ブラックテンペストでクシャルダオラの頭部を突く。

「ぐっ、おおおあああッ！」
クシャルダオラはカズキの攻撃を受けると、後脚二本で立ち上がって天高く咆哮した。爆音に等しい音量にジュンキ、クレハ、カズキがその場で両耳を塞ぎ身動きが取れなくなってしまう。さらにクシャルダオラが前脚を下ろすと龍風圧と呼ばれる特殊な暴風が吹き荒れ、ジュンキ、クレハ、カズキはそれぞれ雪の大地の上を吹き飛ばされてしまった。
「ぐっ…！」
ジュンキは雪の中に埋もれる直前に受け身を取り、右腕は背中の太刀の柄に添えたままで左腕と両脚でブレーキを掛けた。粉雪を舞い上げながらも止まることができると顔を上げる。そして絶句した。目の前にクシャルダオラが迫っていたのだ。どうやら龍風圧で吹き飛ばした後にすぐこちらに向かって突進してきたのだ、と頭の中で理解できたのはクシャルダオラの突進を全身に受けて吹き飛ばされ、宙を舞っている最中だった。
「がは…っ！」
口から唾液が飛び出す。そのまま雪の大地に墜落して埋もれてしまい、クレハやカズキからは見えなくなってしまった。
「ジュンキ！」
「クレハ待て！」
ジュンキが墜落した場所へ急行しようとしたクレハを、カズキが呼び止めた。クレハが「どうして！？」という表情を向けてくるが、カズキはあくまで冷静に言葉を発した。
「クシャルダオラは俺達3人を行動不能にしてから一人一人殺すはずだ。一人に集中して、残った二人に背中から安々と斬り付けられる程あいつも馬鹿じゃない。それにあのジュンキだ。信じろ」
最後は根拠のない言葉だったが、クレハは分かってくれた。ジュンキのところへ行こうとしていた身体をクシャルダオラの方へと向ける。クシャルダオラの方もジュンキを無視してクレハとカズキに向き直った。

「ほお…人間風情にも冷静な判断ができる者がいるか…」
「カズキ、ビンゴ」
クシャルダオラの言葉を聞けるクレハが顔だけカズキの方を向けてそう言うと、カズキは「だろ？」と言い返してきた。
「次はその人間風情だ！」
「カズキ！」
クシャルダオラが飛び出すのとクレハが叫んだのは同時だった。それでもカズキはブラッククテンペストの盾を構え、クシャルダオラの突進を受け止める。クレハはその隙にクシャルダオラの背後に回り、無用心に垂れ下がる尻尾を斬りつける。驚いたクシャルダオラはその場で素早く見を翻すと、クレハに向かって風のブレスを吐いた。クレハはこれを紙一重で避け、クシャルダオラの横顔を一閃する。
「後ろががら空きだぞ！」
カズキは先程ブラッククテンペストを突き立てたところと同じ場所を突いた。今度は深々とブラッククテンペストが突き刺さり、クシャルダオラの血で雪の大地に赤い花が咲く。
「ぐっ…！」
クシャルダオラが苦しそうな声を上げたのを、クレハは聞き逃さなかった。そのクシャルダオラは再びカズキの方を向き、そのまま突進した。カズキはそれをブラッククテンペストの盾で受け流す。クレハはそれを見届けると双剣インセクトスライサーを背中に戻すとアイテムポーチに手を入れ、閃光玉を取り出した。そしてできるだけクシャルダオラに駆け寄り、クシャルダオラがこちらを振り向いた瞬間に閃光玉を投げつけた。
「カズキ！目！」
クレハが叫んだ直後、閃光玉が破裂して辺りを爆発的な光が覆った。
「ぐうっ！こんな小細工にっ！」
クシャルダオラは視界を再び奪われ、混乱していた。この機を逃すまいと、クレハとカズキはクシャルダオラ目掛けて駆け出す。クレハは正面から、カズキは側面へと回る。しかし混乱したクシャルダ

オラが風のブレスを正面にいるクレハに向かって吐き出した。
「！」
突然の出来事に回避する間もなく、クレハは吹き飛ばされて宙を舞ってしまう。このまま地面に落下すればいくら雪の上とはいえ骨折くらいするかもしれない。そこでクレハは空中で竜人となった。瞳がリオレイアのものとなり、全身に人間では到底味わえない筋肉の躍動を感じる。
「…！」
そして雪の大地を見下ろすと、そこには立ち上がっているジュンキの姿があった。レウスSヘルムを被っているので表情は伺えないが、唯一露出している両目は穏やかだった。クレハは自分も微笑んでいると感じながら雪の大地に両手から入り、腕で衝撃を吸収するとバック転のように跳ねて両脚と左腕で着地し、粉雪を舞い上げながら雪の大地を滑り、ジュンキの隣で止まって身体を起こした。
「大丈夫か？」
クレハは顔を上げてジュンキを見ると、ジュンキの瞳もリオレウスのそれになっていた。
「ジュンキこそ」
クレハの言葉にジュンキは頷き、クレハも頷く。途端にジュンキの瞳が真剣なものになったので、クレハも頭を狩りへと切り替える。
「行くぞ」
「うん」
ジュンキとクレハはクシャルダオラ目掛けて駆け出した。クシャルダオラは既に視界を取り戻してしているようだったが、カズキが必死に食い止めてくれている。ジュンキとクレハはお互いの武器を背中から抜くと、クシャルダオラに肉薄した。
「上」
「下」
クレハが先に言うと、ジュンキも答えた。後は言葉を交わさなくてもお互い分かっている。

「ぐあああああっ！」
あと数歩でクシャルダオラに刃が届く、そんな時、カズキのブラッククテンペストがクシャルダオラの頭部から角をへし折ってみせた。
痛みで注意が散漫になってしまったクシャルダオラに、竜人二人の刃が光る。
「カズキ！上！」
クレハのこの言葉だけでカズキは何を意味しているのか瞬時に理解し、ブラッククテンペストの盾をクレハに向かって斜めに雪の大地へ突き立てた。クレハはその盾を足場にして飛び上がり、クシャルダオラの首筋を斬る。ジュンキは太刀エクディシスをクシャルダオラの胸に根元まで突き刺す。
沈黙。
風が止む。
クレハが雪の大地に降り立ち、ジュンキが太刀をクシャルダオラの胸元から抜くと、クシャルダオラは雪の大地に倒れた。ジュンキ、クレハ、カズキは警戒を解かずに、倒れたクシャルダオラの顔の前に立った。クシャルダオラの瞳が開き、口もゆっくりと開く。
「私の…負けか…」
クシャルダオラの最期の言葉を、３人は黙って聞く。
「己が信念に基づいて選んだ道…後悔は無い…。だが憶えておくがいい、竜人よ…。我々は…必要だったから人の世を滅ぼすのだ…」
「…！」
クシャルダオラの言葉を聞いて、ジュンキとクレハは目を見開いた。
「それってどういう事なの…！」
クレハはクシャルダオラに問い掛けたが、クシャルダオラはそれには答えず、瞳を閉じた。
「後は自分たちで…考えるのだな…。我らが偉大なる祖龍ミラルーツよ…お先に失礼…致します……――――」
クシャルダオラはそう言い残し、息を引き取った。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　04

ジュンキ、クレハ、カズキの3人はクシャルダオラから武器や防具に使えそうな素材を剥ぎ取ると雪山からの下山を始めた。誰一人として口を開かなかったが、クシャルダオラを倒した山の中腹エリアから麓まで繋がっている天然の洞窟に足を踏み入れたところでようやくクレハが口を開いた。

「…クシャルダオラのあの言葉」

クレハの声を聞いて、ジュンキとカズキの歩みが止まる。クレハは言葉を続けた。

「あのクシャルダオラ…気になることを言ってたよね」

「…そうだな」

「俺には聞こえないけどな」

「え～っとね、クシャルダオラが移動した後、再び再開した時に言ったのが、私達の世界を守るために、だったかな…？」

クレハは自信が無いようで小首を傾げたので、ジュンキは正解と小さく頷いてから口を開いた。

「あと、最期の瞬間に、必要だから人を滅ぼすとも言っていた…」

ジュンキとクレハからクシャルダオラの言葉を聞いたカズキは「う～ん」とわざとらしく右手を顎に当ててまで言葉の意味を考えていたが、結局「分からん」と投げ出して歩き出したので、ジュンキとクレハは苦笑いした後に歩きながら考えを話し合うことにした。

「守るために人の世を滅ぼす…。必要だから滅ぼす…？」

クレハは再び小首を傾げた。

「要するに、竜の世界を守るために人の世界を滅ぼす必要があった…？」

「そうなるのかな？でもどうして…？ハンターズギルドは過度の狩猟を行わないようにハンターへの依頼を調整しているはずだよ？」

「だよな…。ハンター以外に原因が…？」

「う～ん…」
ジュンキもクレハもこれ以上の考えが出ないまま、とうとう洞窟から山麓に出てしまった。このエリアを横切ればベースキャンプである。
「これ以上考えても仕方ないな。これからの事を考えよう？」
「うん、そうだね」
「じゃあポッケ村で祝杯だな！」
突然カズキが元気に声を上げたので、ジュンキとクレハはおおいに笑ったのだった。

※

夜の砂漠は驚くほどに寒い。昼は照りつける太陽が砂を熱し大気が揺らぐ程に気温が上昇するが、これは草や木が日光を遮ってくれないからである。反対に夜は熱をため込んでくれる草や木が生えていないために気温が下がる。そう、息が白くなるくらいに。
リヴァル、リサ、ショウヘイ、ユウキはドンドルマの街でテオ・テスカトルの討伐依頼を受けると、すぐに出発した。場所は砂漠。到着した時間帯は夜遅くだった。
「ホットドリンクとクーラードリンクが入っていますよ」
支給品ボックスを覗いたリサはそう言うと一度蓋を閉じてみんなのところへと戻る。リヴァル、ショウヘイ、ユウキの3人はテントの前で砂の大地の上にこの砂漠の地図を広げていた。そこにリサも合流し、作戦会議を始める。
「ギルドが確認した状況によると、テオ・テスカトルは主に砂漠エリアにいるらしい」
ショウヘイの言葉に一同頷く。
「問題は今から狩りに出るか、それとも朝を待つかだが…」
ショウヘイはここで言葉を切った。どちらかを選んで欲しいということだろうとリヴァル、リサ、ユウキは受け取り、各々の意見を述

べる。
「俺は夜の方がいい。暑いと狩りに集中できないからな」
「それに関しては同感だ。集中できないと、当てられる場面で当てられなくなる」
リヴァルの意見にユウキは賛同した。
「リサは？」
「私も夜の方がいいです。長い間ポッケ村にお世話になっていて、暑い場所に慣れていませんから…」
「リサはポッケ村出身じゃなかったのか？」
「…私の生まれた場所は、もうありません。ハンターになったのは生きるためでした」
リサの言葉にユウキは「すまない」と謝ったが、リサは「気にしないで下さい」と元気のない笑みを浮かべたのだった。
「じゃあ今すぐにでも出発しよう。放っておくと、ミナガルデの街のように集落が襲われるかもしれないからな」
ショウヘイの言葉はもっともで、リヴァル達４人はそれぞれの準備を終えるとホットドリンクを飲み、ベースキャンプを後にした。

ベースキャンプも寒かったが、風のある広い砂漠地帯の方がもっと寒かった。ホットドリンクを飲んでも、立ち止まっているとすぐに身体が震えてくる。そんな砂漠の中を、リヴァル達は一列に並んでテオ・テスカトルを探し始めた。大きな月の光のおかげで、砂漠は夜でも遠くまで見渡すことができる。
「ショウヘイさん、ユウキさん」
リサに声を掛けられて、先行しているショウヘイとユウキは歩きながらも上半身だけ振り向いた。
「どうした？」
「私やリヴァルさんはまだテオ・テスカトルを見たことがないので、どんなモンスターなのかを知りたいのですが…」
リサの言葉を聞いてショウヘイとユウキは一度顔を見合わせると、

まずはショウヘイが口を開いた。
「テオ・テスカトルは炎を自在に操る古龍だ。それと飛竜と違って脚が2本ではなく、ちゃんと4本ある」
「動きは速いし、隙も少ない。そして賢い」
ショウヘイに続いてユウキもテオ・テスカトルについての説明を始めた。
「攻撃パターンとしては突進がメインかな」
「あと炎のブレス！これは危ないからな」
「それと広範囲の爆発攻撃か」
「広範囲の爆発攻撃ですか…。ありがとうございます」
「後は実際に戦ってからだな」
ユウキはそう言うと正面を向き、ショウヘイも一度頷いてから正面を向いた。この後は特に誰も話さず、静かにテオ・テスカトル探しが続いた。やがてエリアを跨いで別の砂漠地帯に差し掛かった時、砂漠の中心に佇む一匹の龍が目に入った。
「あれが…？」
「テオ・テスカトルだ」
リヴァルの問い掛けにやや緊張したユウキの声が返ってきたので、リヴァル自身も緊張してしまう。先日のシュンガオレンのように、今回のテオ・テスカトルもリヴァルやリサにとっては初めてだ。やがてテオ・テスカトルの顔が見て取れるくらいにまで近づいたところでショウヘイが立ち止まったので、後続のユウキ、リサ、リヴァルもその場で立ち止まる。
「竜人が人間を連れてくるとはな…」
ショウヘイにしか聞こえない言葉を発して、テオ・テスカトルは笑ったのだった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　05

「竜人が人間を連れてくるとはな…。我への生贄か…？」
テオ・テスカトルの放った挑発とも受け取れる言葉をショウヘイは無視して一歩前に出た。
「テオ・テスカトル…」
「テオ・テスカトル？それは我の名前ではない…」
ショウヘイの言葉を、テオ・テスカトルはオウム返しにしてきた。
そして嘲笑いながらも言葉を続ける。
「テオ・テスカトルというのはお前たちに例えると人間や竜人と呼ぶことに等しい。我にも我固有の名がある」
「…あなたの名を教えて頂けないだろうか」
ショウヘイは言葉を選びながら相手を敬うように話す。しかしテオ・テスカトルは見下すように言い放った。
「お前たち人間に教える名前などない。我が勝てばお前たちは死に、我が負ければ我が死ぬ。そこに名前など意味はない」
「…どうしても戦うか？」
「人と竜が共存するための秩序を守るのが竜人の務め。その秩序を乱そうとしているのが我々、竜。だから竜人は人の味方をする…。現代に蘇りし竜人を殺すのは実に惜しいが、我々の世界を守るため、竜人、人間の味方をするのなら…殺す…！」
「我々の世界を守る…？一体どういうことだ？」
「人に育てられし竜人に、これ以上話すことはない。…いざ、それぞれの種族の命運を賭けて、参るっ！」
テオ・テスカトルはそう言って言葉を切ると天高く咆哮した。ショウヘイは前を向いたまま一歩下がり、リヴァル、リサ、ユウキと合流する。
「どうなったんだ！？」
「説得には応じてくれなかった。戦うぞ」

ユウキの焦った声を聞いてショウヘイはそう答えると、背中の太刀を抜いた。以前ナルガクルガ討伐を記念して製作した斬れ味優先の太刀「ヒドゥンサーベル」である。リヴァル、リサ、ユウキもそれぞれの武器に手を添えると、それを合図と見たのかテオ・テスカトルが突進してきた。リヴァル達はこれを余裕を持って回避し、テオ・テスカトルの死角へ回り込もうとする。

「ペイント弾！」

ユウキの大きな声と共に、テオ・テスカトルの右足にペイント弾が破裂する。それを不快と感じたのか、テオ・テスカトルはリヴァル、リサ、ショウヘイの刃や鎚が届く前にユウキ目掛けてまたも突進した。ユウキはこれをギリギリまで引きつけて回避、テオ・テスカトルは慌てて制動をかけ、急停止した。そして逃がしたユウキを振り向く。そのタイミングをリヴァルは逃さなかった。テオ・テスカトルが再びユウキを追い駆けて走り出す前に肉薄し、振り返ると同時に頭部へ大剣「オベリオン」を振り下ろした。いきなり頭部を攻撃されて、テオ・テスカトルはたじろいでしまう。その間にショウヘイとリサが接近、攻撃を加える。

「小賢しい…！」

テオ・テスカトルは自信の身体をその場で回転させ、硬い鱗で覆われた尻尾を振り回した。これをリヴァルは大剣の腹で防ぎ、ショウヘイはその場で姿勢を低くして回避した。リサは尻尾が迫るまで時間があったので、距離を置いて難なくこれを回避した。テオ・テスカトルは次に目の前にいるショウヘイへ殴りかかった。鋭い爪が生えている凶悪な前脚がショウヘイへ迫るが、ショウヘイはこれを紙一重で回避し、同時にその前脚を太刀で一閃、出血させた。

「はああっ！」

テオ・テスカトルがショウヘイに気を取られている間に、リヴァルは溜め込んだ力を大剣に乗せて一気に尻尾へ振り下ろした。この攻撃にはテオ・テスカトルも驚いたようで、一瞬だが怯んでしまう。

「たああっ！」

一瞬怯んだ隙を、リサは逃さない。脇腹に一撃、ハンマーを叩き込む。そして隙あらば、ユウキが遠くから精密に弾を放つ。

「ぐぅおおおあああ！！！」

テオ・テスカトルはリヴァル達の攻撃に怒りを爆発させ、後脚2本で立ち上がって天高く咆哮した。

「ショウヘイ！リヴァル！リサ！くそっ…！」

リヴァル、リサ、ショウヘイはその場にしゃがみ込み、身動きが取れなくなってしまう。それは狙撃するためテオ・テスカトルから距離を取っているユウキからははっきりと見て取れた。テオ・テスカトルが咆哮を終えて前脚を砂の大地に降ろすと、その場に突風が吹き荒れて前線で戦うリヴァル達を吹き飛ばしてしまった。

「龍風圧か…！」

その様子を見たユウキは、テオ・テスカトルの注意が今動けないリヴァル達へ向かないように発砲する事しかできなかった。幸いテオ・テスカトルは攻撃を続けるユウキに向かって突進し、リヴァル達は無事にテオ・テスカトルから離れることができた。突進するテオ・テスカトルをユウキも回避し、４人は一度集まった。

「助かった」

「いいってことよ。それよりテオ・テスカトルが炎を纏った」

ユウキはショウヘイの言葉を受け取った後、テオ・テスカトルを指さして言った。

「あれは…！」

リヴァルは驚きの声を上げてしまう。テオ・テスカトルの周囲に昼間の砂漠のような陽炎が発生してるのだ。

「テオ・テスカトルは今、炎の鎧を纏っている。うかつに近づくと火傷するぞ」

テオ・テスカトルが反転し突進してきたので、ショウヘイはそこまで言って駆け出した。リヴァルとリサもショウヘイに続き、ユウキもガンナーの最適距離へと移動する。

「はあっ！」

突進するテオ・テスカトルにショウヘイが太刀をすれ違い様に一閃、テオ・テスカトルの左前脚から真っ赤な血液が噴き出す。

「我が灼熱の炎で焼き尽くしてくれる！」

「危ない！止まれ！」

テオ・テスカトルの言葉を聞き取れるショウヘイが、接近するリヴァルとリサに言い放った。リヴァルとリサは慌てて立ち止まり、テオ・テスカトルの様子を伺う。するとテオ・テスカトルが一度体を反らせ、口から炎のブレスを吐いた。リオレウスのブレスのように炎の球ではなく、連続した炎を吐いている。リヴァルとリサは左右に分かれ、遠回りしてテオ・テスカトルへ接近する。その様子を見届けて、ショウヘイは炎を吐いていて背後への注意が届いていないテオ・テスカトルの尻尾を斬りつけた。

「ぐうっ…！」

テオ・テスカトルが苦しそうな声を上げてショウヘイを振り向き、右前脚で殴りかかる。ショウヘイはこれを砂の大地を転がることで避け、起き上がると同時にその右前脚を斬りつけた。右前脚同様、真っ赤な血液が噴き出す。

「らあああっ！」

「はあああっ！」

この時、左右からリヴァルとリサがテオ・テスカトルを斬りつけ、殴りつける。

「熱っ！」

リヴァルはテオ・テスカトルを包む炎の鎧に触れてしまい、思わず声を上げてしまった。長時間テオ・テスカトルの近くにいるのは危険と判断し、一度距離を開ける。すると、テオ・テスカトルが翼を広げて粉のようなものを辺りに振り撒き始めた。

「粉塵爆発攻撃だ！リサ！距離を置け！」

ショウヘイの怒鳴り声に近い大きな声がリヴァルの耳にも聞こえた。しかしリサはテオ・テスカトルを挟んで反対側にいるのでここからはその姿を確認できない。

――――吹き飛べ！

テオ・テスカトルの声が、聞こえた気がした。リヴァルがそう思った直後、テオ・テスカトルが自身の牙を打ち鳴らし、小さな火花を立てた。その小さな火種が一気に広まり、テオ・テスカトルの周囲で大きな爆発となってリヴァルを襲う。爆風で尻餅をついてしまうが、距離があったお陰かその程度で済んだリヴァルはすぐ立ち上がってリサの様子を確認しようと駆け出そうとして一歩を踏み出し、そこで思い留まった。リサのことはショウヘイが様子を見に行っているはずだ。だったら自分はテオ・テスカトルの気を反らす方が良い。リヴァルは一瞬でそう判断すると、狙撃で気を反らそうとしているユウキが狙うテオ・テスカトルへと駆け出す。しかしリヴァルが近づく前にテオ・テスカトルはリサがいる方へ駆け出してしまう。そして一瞬だが、ショウヘイに肩を預けて弱々しく歩いているリサの姿が目に入った。粉塵爆発攻撃に巻き込まれてしまったのだろうか。

「まずい…！」

このままではリサとショウヘイがテオ・テスカトルに踏み潰されてしまう。リヴァルは必死に走るが武器防具の重さと砂の大地がそれを邪魔する。リヴァルが諦めかけたその時、突然テオ・テスカトルの横顔が爆発した。ユウキの徹甲榴弾だ。テオ・テスカトルは突然のことで驚いたのかその場に倒れ、起き上がろうと必死にもがいている。

「喰らえぇぇぇえええ！！！」

リヴァルは走る勢いに身を委ね、テオ・テスカトルの顔面目掛けて大剣オベリオンを振り下ろした。しかしその攻撃はテオ・テスカトルの立派な角に邪魔されてしまい、角に小さなヒビを入れただけで弾かれてしまった。テオ・テスカトルはリヴァルの大きな隙を見逃さず、リヴァルの右腕に噛み付いた。指先から肩の近くまでテオ・

テスカトルの口の中に入れられてしまう。

――その腕を焼き落としてやろう！

再び、テオ・テスカトルの声が聞こえたような気がした。テオ・テスカトルはリヴァルの右腕を飲み込んだまま、炎のブレスを吐き出した。

「ぐあああああああああッ！！！」

リヴァルの右腕が炎に包まれ、焼かれてしまう。

「ああッ！！！ぐあああああッ！！！」

夜の砂漠に響く絶叫。それはユウキの投げた閃光玉によって終わりを告げた。閃光玉の光がテオ・テスカトルの視界を奪い、その隙にユウキはリヴァルの右腕をテオ・テスカトルの口の中から抜いた。リヴァルの右腕を守っているリオソウルアームは深い蒼色の甲殻まで真っ黒に炭化し、金属部分に至っては熱によって赤くなり、変形してしまっている。

「リヴァル！あの洞窟まで逃げるぞ！ショウヘイやリサもそこにいる！」

リヴァルは右腕の痛みと背後で暴れるテオ・テスカトルの恐怖に耐えながら、目の前にぽっかりと口を開けている洞窟へと足を踏み入れた。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　06

リヴァル達が退却した洞窟は地底湖になっていて、リヴァルは先に退避していたショウヘイやリサに脇目も振らずに地底湖へと向かい、テオ・テスカトルに焼かれた右腕を防具を着けたまま水の中へと入れた。

「ぐぅおおおぁぁぁ…！！！」

右腕を襲う痛みに全身が痙攣してしまう。右腕のリオソウルアームは水につけるとジュージューと音を立てた。

「リヴァルさん…。大丈夫…ですか…？」

隣にやってきたリサが恐る恐るリヴァルの状態を心配する。

「大丈夫だっ…。まだ、感覚がある…ぐっ！」

リヴァルはそこまで言うと水の中から焼かれた右腕を抜き、リサと共に休んでいるショウヘイやユウキの横に座った。そして無事な左手を使い、右腕のリオソウルアームを静かに外していく。その様子をリサ、ショウヘイ、ユウキは黙って見守った。

「…っ」

黒コゲのリオソウルアームから出てきたのは、真っ赤になった右腕だった。水膨れができているわけでも、ましてや皮膚の表面が炭化しているわけでもなかった。リヴァル達４人に安堵の空気が流れる。

「きっと、火耐性の強いリオソウルの防具だったからですよ。良かったですね、リヴァルさん」

「そうだな…」

リサがそう言いながら自身のアイテムポーチから回復薬グレートを取り出し、リヴァルの右腕にかけた。

「うっ…！」

リヴァルは走った痛みに一瞬顔をしかめたが、すぐ痛みは引いていった。

「まだ戦えるか？」

「…もちろん」
リヴァルはショウヘイの言葉にできる限りの力を込めて答え、ショウヘイもしっかりと頷き返した。
「リサは大丈夫なのか？」
見たところそこまで大きな怪我を負っているようには見えないリサだが、先程のテオ・テスカトルとの戦いの中でリサはショウヘイに支えられながら退却しようとしていた。もしかしたら今のリサはリヴァル達に心配をかけまいと無理をしているのではとリヴァルは心配になり、リサに声をかけた。そのリサは明るい赤色の瞳を一瞬驚きに見開いた後、すぐ笑顔を浮かべた。
「大丈夫ですよ。粉塵爆発の爆風に吹き飛ばされただけですから」
「でもお前、ショウヘイに肩を貸して貰っていたじゃないか」
「吹き飛ばされた影響か、まっすぐ立って歩けなかったので…。本当にそれだけです」
「…そうか。よかった」
「他人の心配より自分の心配をして下さい？リヴァルさん」
リサはそう言ってリヴァルの隣に座ったのだった。

リヴァル達はしばらく休憩をとった後、再び夜の砂漠へと足を踏み入れた。テオ・テスカトルは既に他のエリアへ移動していると思っていたリヴァル達だったが、テオ・テスカトルはエリアを動かずにリヴァル達が洞窟から出てくるのを待っていたようだった。リヴァル達が初めてテオ・テスカトルと会った時と同じように、歩いてテオ・テスカトルに接近する。テオ・テスカトルも動かない。やがて月の光でお互いの顔が見分けられる距離にまで近づいたところでリヴァル達は歩みを止めた。そしてショウヘイが一歩前に出て口を開く。
「俺達を待っていたのか？」
「無論だ」
テオ・テスカトルの短い返事を聞いてショウヘイが言葉を返そうと

したが、その前にテオ・テスカトルが言葉を発した。
「もはや言葉は不要だろう?」
「…そうだな」
ショウヘイはそれだけ言うと一歩下がり、リヴァル、リサ、ユウキに声をかける。
「始めるぞ」
「ああ」
「はい」
「任せろ」
ショウヘイがリヴァル、リサ、ユウキの返事を聞くのと、テオ・テスカトルが咆哮を上げたのは同時だった。

テオ・テスカトルは今まで以上の速度でリヴァル達に突進した。リヴァル、リサ、ショウヘイはテオ・テスカトルの背後に回りこむように動き、ユウキは距離を置く。テオ・テスカトルは急停止をかけると身体をショウヘイの方へと向け、突進する。ショウヘイは避けようとせず、姿勢を低くして太刀を構えた。そしてテオ・テスカトルと衝突する寸前に紙一重で回避し、テオ・テスカトルの突進の勢いを利用して斬りつけた。斬り裂かれた左翼から出血し、砂漠の砂に吸い込まれる。このままテオ・テスカトルが通り過ぎると思っていたショウヘイ。しかしテオ・テスカトル通り過ぎる前に油断していたショウヘイに向かって強靭な尻尾を振り回した。ショウヘイはこれを避けることができず、腹部に一撃を貰ってしまう。
「ぐふっ…!」
衝撃に息が詰まり、肺の中の空気を失う。ショウヘイは砂の大地を転がったが、すぐに起き上がることができた。「大丈夫かー?」と聞いてくるユウキに、右手を上げて返事を返す。
「今度こそ…!」
テオ・テスカトルはショウヘイが戦闘不能になっていないことに気づくと急停止し、三度ショウヘイのいる方へと身体を捻った。

「たあああああっ！」
そこにリサがハンマーの重い一撃を頭部に与える。
「あ…」
――バキッという乾いた音が夜の砂漠に響いた。
続けてテオ・テスカトルの悲鳴。
トスッと乾いた音が聞こえたので振り返ると、そこには一本の角が落ちていた。
「リサ！」
「…！」
リヴァルの声に我に帰ったリサはすぐにテオ・テスカトルの方を見た。そこには横倒しになり苦しそうに暴れているテオ・テスカトルと、この隙を逃さないと言わんばかりにショウヘイが太刀を振るい、ユウキがライトボウガンを撃っていた。リサは慌てて駆け出し、その横にリヴァルが並ぶ。
「よくやったな」
「えっ…？」
「角だよ、角」
「…はい！」
二人は短い会話を済ませるとリヴァルはテオ・テスカトルの頭部に、リサは腹部に向けて駆け出す。
「はあああああっ！」
「やあああああっ！」
リヴァルの大剣「オベリオン」とリサのハンマー「アイアンストライク改」が同時にテオ・テスカトルを捉える。リヴァルとリサはさらに攻撃を加えようと武器を握る手に力を込めたが、ここでテオ・テスカトルが体を起こしてしまったので断念し、距離を取ろうと背を向けた。
「ぐっ…！許さん…！」
ショウヘイにしか聞こえない声を出してテオ・テスカトルは起き上がると、距離を取ろうとするリヴァル、リサに向けて炎のブレスを

吐き出した。
「避けろ！」
ショウヘイの叫び声を聞いて、リヴァルとリサの二人は砂漠の砂に頭から突っ込むことも気にせず跳躍した。テオ・テスカトルの炎はギリギリ二人に届かず、空振りに終わる。
「ショウヘイ！離れろよ！」
背後からのユウキの声を聞いて、ショウヘイはテオ・テスカトルから距離を置いた。直後にテオ・テスカトルの周囲で爆発が起きる。粉塵爆発ではない。ユウキが撃った拡散弾である。
「ぐううおおおあああ！！！」
テオ・テスカトルは怒りの咆哮を発した。直後、翼を広げて粉末を辺りに振り撒く。粉塵爆発攻撃を仕掛ける気だろう。
「死ねぇぇえええええ！！！――――！？」
テオ・テスカトルが着火しようとした寸前で、ショウヘイが閃光玉を破裂させた。テオ・テスカトルは視界を奪われて混乱してしまい、粉塵爆発を起こせなかった。
「たあああああっ！」
その隙にショウヘイがテオ・テスカトルの尻尾を一閃――――尻尾は根元から切断されて宙を舞った。テオ・テスカトルは突然尻尾を失った影響かその場に転んでしまう。そこへショウヘイが駆けつけ、更に一太刀、二太刀浴びせる。
「ぐおッ！ぐうぁッ！がああああああああ！！！」
テオ・テスカトルは狂ったように、闇雲に駆け出した。
「はあっ！」
そんなテオ・テスカトルの左後脚にリサが一撃、骨まで砕く。
「らあああああっ！」
次にリヴァルがすれ違い様に右翼を一撃、本体から切り離した。それでもテオ・テスカトルは止まらず、ユウキ目掛けて突進する。
「…」
ユウキはテオ・テスカトルの突進を避けようとせず、静かに「グレ

ネードボウガン改」のスコープを覗く。そして一発。それはテオ・テスカトルの右目を撃ち抜き、後頭部を抜けていった。テオ・テスカトルは駆けたまま体勢を崩し倒れ、砂の大地を転がり、ユウキの手前で止まった。

「ふう、流石に冷や汗モノだな…」

ユウキは独り言を呟くとスコープから顔を上げた。

「ユウキ！無事か！？」

慌てて駆け寄ってくるショウヘイやリヴァル、そしてリサにユウキは右手を上げて無事を知らせる。最初にユウキのもとに着いたショウヘイは一度テオ・テスカトルを見てからユウキを振り向いた。

「…死んだのか？」

「ああ。死んだよ」

ユウキはそれだけ言うと立ち上がり「グレネードボウガン改」を背中に戻した。

「ユウキさん！大丈夫でしたか…！」

リヴァルとリサもユウキに駆け寄る。

「…終わったな」

「ああ。だが全てじゃない。ジュンキ達が上手くいっていても、あと2匹残っている」

ショウヘイがリヴァルの言葉にそう返すと、背中から剥ぎ取りナイフを抜いた。

「もうすぐ夜が明ける。昼間の砂漠は過酷だから、剥ぎ取ってキャンプに戻ろう」

ショウヘイはそう言って、剥ぎ取りナイフをテオ・テスカトルに突き立てた。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　07

ショウヘイ達がドンドルマの街に戻り、報告のために大衆酒場へ足を踏み入れると、そこにはジュンキ、クレハ、カズキの姿があった。見たところ怪我をした様子もないのでショウヘイ達は安堵し、ジュンキ達が座っているテーブルに向かった。

「お疲れ」

ショウヘイが声を上げると、ジュンキ、クレハ、カズキはそれぞれ料理と格闘する手を止めて振り向いた。

「ショウヘイ！ユウキにリヴァル、リサも…！」

クレハが驚きの声を上げたが、ショウヘイは軽く頷いてから言葉を続けた。

「偶然だな。落ち合う約束もしていないのに」

「偶然じゃないよ。ユーリに聞いたらまだ戻ってきてないって言うから、ショウヘイ達が戻ってくるのを待とうって話になったの」

クレハに説明を受けて、ショウヘイは一度頷いてから口を開いた。

「どれくらい待ったんだ？」

「2日くらいだよ」

「悪いな」

「気にすんなって」

カズキの言葉にショウヘイは静かに頷き、席に着いた。リヴァルやリサ、ユウキもジュンキ、クレハ、カズキと向かい合うよう席に着く。

「テオ・テスカトルはどうだった？」

ジュンキに促されたので、ショウヘイは先に話す事にした。

「無事討伐できた。だがリヴァルが腕に軽い火傷を負った」

「リヴァルが？」

ショウヘイの言葉にジュンキはリヴァルの方を向いた。リヴァルはそれを合図にテーブルの上に自身の右腕を置いた。リヴァルの腕を

守っているリオソウルアーム、それが炭化している。
「こりゃあ修理だな」
カズキの言葉に、リヴァルは無言で頷く。
「…大丈夫なのか？」
ジュンキに声をかけられ、リヴァルは深い赤色の瞳を見開いて絶句した。
「リヴァル…？」
ジュンキの声を聞いて、リヴァルは我に返った。
「お前…俺を心配してるのか…？」
「リヴァル、仲間を心配するのは当然だろ？」
「仲間…」
ジュンキは今「仲間」と言った。その言葉の意味を鵜呑みにすれば、ジュンキは自分を一人のハンターとして、それ以上に背中を預けられる人物として認めてくれたことになる。果たしてジュンキは本心からそう言ったのだろうか――リヴァルには分からなかった。
「まあ、大丈夫そうでよかった。じゃあ次はこっちだな」
カズキの声を聞いて、リヴァルはいつの間にか見つめていた自身の両手から顔を上げた。
「俺たちの担当したクシャルダオラも倒すことができた。目立った怪我もない。ただ…」
カズキはそう言ってジュンキに目配せした。それを受けてジュンキは頷き、口を開く。
「クシャルダオラが、気になることを言っていたんだ」
ジュンキの言葉にリヴァル、リサ、ショウヘイ、ユウキは各々小さく頷く。ジュンキは言葉を続けた。
「クシャルダオラとの戦闘中、奴が竜の世界を守るため、って言ったんだ」
「クシャルダオラが息絶える直前にも、必要だったから人の世を滅ぼすって言ったよ」
ジュンキの言葉にクレハが付け足す。

「そうか…。俺たちが担当したテオ・テスカトルも妙なことを言っていたな…」
「と、言うと？」
ジュンキが促すと、ショウヘイは一度頷いてから口を開いた。
「我々の世界を守る、だそうだ」
「我々の世界を守る…。一体どういうことなんだろう…？」
「そのままの意味なんだろうが…」
クレハの考え込むような声を聞いて、ユウキも腕を胸の前で組んで考え込む。そのまま静まり返ったテーブルに、ユーリの明るい声が響いた。
「みんなお帰り！大きな怪我もなく無事でよかった！」
ユーリはそう言ってリヴァル達のテーブルに皮袋を7っ放り投げた。クシャルダオラとテオ・テスカトル討伐の報酬金だ。
「さあ、何を食べる？じゃんじゃん注文してね！」
ユーリはそう言いながらエプロンの腰紐の間から注文用紙と鉛筆を取り出す。その姿につい笑みがこぼれてしまうリヴァル達だ。
「食事にしようか」
ジュンキの提案に、誰一人反論しなかった。

「ユーリ、ちょっといいか？」
食事を終えて空になった皿を下げに来たユーリをリヴァル達は呼び止めた。ユーリは持ち上げかけた皿をテーブルに戻してから口を開く。
「なぁに？追加オーダー？」
「キリンとラージャンのことを聞きたいんだけど」
クレハがそう言うとユーリの表情が引き締められた。ユーリは背後のテーブルから丸椅子をひとつ手に取り、リヴァル達のテーブルに座った。
「キリンとラージャンに関しては大丈夫。まだ人的被害は出ていないわ」

「そう、よかった…」
「でも経済的損失は大きいの。沼地のキノコが入ってこないから物価が高騰するし、火山の良質な鉱石も入らないからハンター達は開店休業状態だし…」
そう言ってユーリはわざとらしくため息を吐いた。そして横目でリヴァル達全員を見渡す。そして再びため息。
「ああ、誰か優秀なハンターが早く狩ってくれないかしら。沼地のキリンと、火山のラージャンを…」
ジュンキ、クレハ、ユウキ、カズキ、リサから苦笑いがこぼれる。
「分かったよ。できる限り早く出発するからさ」
リヴァル達全員の言葉としてジュンキがそう言うと、ユーリはにこっと笑ったのだった。

「俺たちはリヴァルの防具を修理してから出発することにする」
「えっ…！」
大衆酒場での食事と話し合いを終えて外に出たところで言ったショウヘイの言葉に、リヴァルは驚きの声を上げてしまった。
「どうした？」
「いや、俺なんかの為に全体の行動を遅らせるなんて…」
リヴァルはショウヘイやリサ、ユウキ。それにジュンキ達から目を逸らしてそう言った。
「確かに、今は急ぐべき時かもしれない。しかし急いては事を仕損じる。それに防具の不備のせいでリヴァルが深手を負ってしまったら何にもならないからな」
ショウヘイの言葉に、リヴァルは深い赤色の瞳を見開いて顔を上げた。そこには穏やかな笑みを浮かべるショウヘイと、その背後のジュンキとクレハ。満面の笑みのユウキに、背後のカズキ。そして静かに頷いたリサ。
「あ、ありが…とう…」
今度はジュンキ達が驚く番だった。あのリヴァルが「ありがとう」

と感謝を述べたのだ。ショウヘイは恥ずかしそうに顔を赤らめて下を向いているリヴァルの左肩に右手を乗せた。リヴァルが顔を上げるのを待って、しっかりと頷く。

「じゃあ俺たちも少し休むか」

「出発は明日中だから、明日の深夜でも問題ないはずだよね」

「だな」

ジュンキ達もリヴァルの防具の修理が終わるまで待つというらしい。

リヴァルは、嬉しかった。

リヴァルの目尻に滴が浮かんだのを、リサは見逃さなかったのだった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　08

「着いたニャ」
リヴァル達が乗っている竜車が止まると同時に、御者のアイルーが教えてくれた。荷台の出口に一番近い場所に座っていたリヴァルが腰を上げ、雨が入ってこないように天井から垂らしてある革張りの布の隙間から外へ出る。
「…」
足を降ろすと、長雨のせいでぬかるんだ地面に両足が少し沈み込んでしまった。リヴァルは心の中でため息を吐いてから空を見上げた。厚い雲に覆われた空は晴れそうにない。防具の隙間から入ってくる雨はモンスターとの戦闘で熱くなった身体を冷やすには丁度よいだろうが、今では少し寒いくらいだ。
「きゃ…っ」
ばしゃっ、と音を立ててリヴァルの横にリサが降り立った。そこは水たまりができていて、リサが着地する衝撃で泥水が弾けてリヴァルにかかってしまう。
「す、すみません…」
「いや、いいさ。もう濡れてるし」
リヴァルは気にするなという意味で言ったが、それでもリサは「すみません…」と小さく頭を下げた。
「荷物を運ぶから手伝ってくれ」
竜車の中からユウキの声が聞こえ、続けてショウヘイが竜車の中から今回の狩りで使う予定の様々な道具が入っている木箱をリヴァルとリサに差し出した。これは一人では持てない重さなので、リヴァルはリサと協力してベースキャンプ内に設営されているテントへと運ぶ。その間二人は口を開かなかったが、テントの中へ運び入れた木箱の上にリヴァルとリサが並んで座ったところでリサが口を開いた。

「リヴァルさん、あの…」
「ん…？」
リヴァルはリオソウルヘルムを被っているので、表情を伺うことはできない。唯一目を保護するバイザーが今は上げられていて、そこにある深紅の瞳は疑問の眼差しだった。リサは口を開きかけて、閉じてしまう。リサはリヴァルに対し、ある可能性を疑っていた。もしその可能性が、リサの考えが当たっていたら、それはリサにとって、そして恐らくリヴァルにとっても良い事だと思っている。しかしこれからキリンと呼ばれる古龍と戦うのに、この事をリヴァルに伝えてしまうとリヴァルは混乱し、最悪狩りに支障が出てしまうのではないか。リサはリヴァルから目を逸らし、話題を無理矢理切り替えた。
「今回の相手…キリンは、ショウヘイさんの説得に応じてくれるのでしょうか…」
「今までの流れからすると、無理だろうな」
リヴァルはそう言って立ち上がった。ショウヘイとユウキが４人分の武器を持ってきたからだ。リサは立ち上がったリヴァルの姿を見て、今はまだ話さなくてもいいだろうと思った。ハンターという仕事上いつ死ぬか分からないが、少なくともリヴァルが死ぬことはないと、何故かリサはそう思えるのだった。

リヴァル達は準備を終えると、ベースキャンプを後にした。この沼地の北部に枯れ草地帯があるらしく、まずはそこを目指すことになった。雨が降り続く沼地を４人は黙って歩き続ける。聞こえてくるのは雨音とリヴァル達の行進する音、装備同士が擦れる音くらいである。
（幻獣キリン…）
ショウヘイやユウキの話によると、キリンと呼ばれる今回のモンスターは見た目こそ巨大化した草食獣ケルビらしいが、その能力は古龍に分類されるだけあって強大だった。その身体に似合わず俊敏な

動きを見せ、遠距離からは雷を操って攻撃してくるらしい。皮膚は見た目とは裏腹に強靭で、なかなか刃が通らないらしい。

「雨っていうのは気力も洗い流してくれるのかねぇ…」

最後尾を歩くユウキが愚痴を漏らしたが、リヴァルを含め誰も返事を返さなかった。ユウキは寂しそうにため息を吐き、それ以上何も話さなかった。

やがて枯れ草が目立つようになり、地図の最北端へ着いた頃には一面枯れ草の原っぱだった。高さが腰の上くらいまであるので邪魔になるかと思ったがあっさり折れてくれるので、その心配はなさそうだった。

突然、先頭を歩くショウヘイが立ち止まった。リヴァルやリサ、ユウキも歩みを止める。そのまましばらくの後、右へ湾曲しているこのエリアの奥から白い光に包まれたモンスターが歩み寄ってきた。

「キリン…」

リヴァルは思わずその名前を口にしていた。確かに大きな白いケルビに見えなくもないが、威厳とプレッシャーが違いすぎる。身にまとう雰囲気は、まさに古龍だった。キリンはある程度の距離を置いて歩みを止める。それを合図に、ショウヘイは3歩ほど前に出た。先に口を開いたのはキリンだった。

「初めまして、竜人さん。お会いできて光栄です」

凛とした女性の声だった。ショウヘイは少し驚きながらも口を開いた。

「俺がここに来た理由を知っているんだろう?」

「もちろん、この計画を中断させるためでしょう?残念だけど、それはできないお願いです」

「どうして?俺達竜人は人と竜の間に生まれし者、種族間の仲介者だ。人間側に問題があるなら、俺が交渉人になってもいい」

ショウヘイの言葉を聞いたキリンは考え込むように小さな目を閉じていたが、やがて静かに目を開いた。

「その言葉はありがたく思います。しかし…我々竜の指導者である

祖龍ミラルーツ様の決定は絶対なのです」
「…！」
「祖龍ミラルーツ様は多くの反対意見を押し切って計画を実行なさいました。それを今から撤回することはできないのです。私もその祖龍ミラルーツ様のご意志に賛同した身…今から覆すことはありません」
「どうしても駄目か…？」
「…」
ショウヘイの問いかけは、キリンの真剣な眼差しによって返された。目の前のキリンは本気だった。
「ならばせめて、祖龍ミラルーツが人間を滅ぼそうとした理由を聞かせてくれないか？俺達竜人がその原因を解決できれば、お前たち竜の侵攻は止まるだろう？」
「竜人には何も教えるなと、祖龍ミラルーツ様から口止めされています。それに今回の件の知ったところで、竜人たちは何もできず、結果我々の侵攻は止まらない。と、祖龍ミラルーツ様の言葉です」
「…分かった。ならば俺達竜人は、全力でお前たちの計画を止めてみせる」
「もとより竜人が出てくるのは覚悟の上です。いざ…！」
キリンは言葉を切ると、前脚を掲げて天高く咆哮した。それに応呼するように周囲へ落雷が発生し、枯れ草に引火して炎を上げた。ショウヘイはキリンから目を離さないようにして後退り、リヴァル達と合流する。
「説得は無理だったか」
「ああ。…戦うぞ」
ショウヘイが背中の太刀を抜くのと、キリンが駆け出したのは同時だった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　09

キリンは天高く嘶くと固まっているリヴァル達目掛けて駆け出した。もちろんリヴァル達は余裕をもってその場を離れる。

「ペイントっ！」

リヴァルはキリンから目を離さずに右手をアイテムポーチに滑り込ませ、中からペイントボールを取り出して投げつけた。それは一直線に飛び、キリンの首筋で弾ける。キリンは様子見していて突進した後にその場を動いていなかったが、リヴァルのペイントボールを受けて一瞬視線をリヴァルに向けてしまう。その隙を逃すショウヘイではなかった。ショウヘイはその一瞬の隙にキリン目掛けて飛び出した。キリンは駆け寄るショウヘイの足音に振り向くが、その時には既にショウヘイの間合いだった。

「はああっ！」

ショウヘイは大上段からの一撃を放つ。しかしキリンはショウヘイの攻撃を、自ら走り出すことで回避してみせた。

「くっ…！」

走り出したキリンをショウヘイは目で追う。キリンはハンマー「アイアンストライク改」を構えるリサを狙っているようだった。一直線にリサへ向かうキリン。リサはキリンの攻撃を避けつつ、キリンが突進してくる勢いを利用してハンマーを叩きつけようと考えていた。

（落ち着いて、私…）

一直線に迫るキリンに、リサは動じない。

（3…2…1…今っ！）

リサは自分がハンマーを振る速度とキリンの速度からタイミングを算出し、「アイアンストライク改」を横から大きく殴りつけた。

（なっ…！？）

しかしキリンはリサの目の前で跳躍し、リサの頭上を超えて反対側

に降り立ってみせた。リサはハンマーが空振りしたことによってその場に転んでしまう。

「リサっ！」

リヴァルが駆け寄ろうとしたが、その前にユウキがボウガンでキリンを牽制してくれた。キリンの気がユウキに向いたその間にリサは立ち上がり、キリンから距離を取る。キリンは、今度はユウキ目掛けて駆け出した。一直線に走るキリンへユウキはさらに弾丸を一発撃ったが、キリンはこれを跳躍して回避した。

「嘘だろっ！？」

ユウキはボウガンを抱えて身を投げ出してキリンの突進を回避した。

「逃さねぇ！」

ユウキに回避されて立ち止まるキリンへリヴァルが駆け寄る。キリンが振り向く瞬間を狙って、リヴァルは大剣「オベリオン」の重い一撃をキリンの頭部へ与えた。キリンはリヴァルの攻撃に怯み、一歩退いてしまう。リヴァルは深追い無用と判断し、一旦キリンとの距離を取る。その直後にキリンが天高く嘶いた。するとキリンの周囲に落雷が発生し、雨に濡れている枯れ草を燃やす。

「危ねぇ…」

リヴァルは思わず言葉に出した。あの落雷に当たってしまえば大怪我は間違いないだろう。

落雷が収まると、キリンは掲げていた前脚を下ろした。その無防備な時間を狙って、キリンに肉薄する白と黒の影。リサとショウヘイだ。

「はああっ！」

リサの重い一撃はキリンの横腹を捉えた。元々体重が軽いのだろうキリンは悲鳴に近い呻き声を上げて吹き飛ばされ、ぬかるむ地面に横倒しになった。そこへショウヘイがたたみかける。ショウヘイは無言で太刀「ヒドゥンサーベル」を操り、キリンの首筋を斬りつけていく。さらにリヴァルが駆けつけ、キリンの胴体へ一撃を下す。

「っ！？」

しかしリヴァルの大剣は鈍い音を立てて弾かれてしまった。まるで岩を叩いたような感覚である。リヴァルは2撃3撃と攻撃を加えるがやはり手応えがない。それはリサも同じようで、苦い表情から心中が伺えた。

突然キリンが起き上がったのでリヴァル、リサ、ショウヘイは距離を取る。キリンは再び天高く嘶き、周囲へ雷を落とした。しかしその間はキリンは身動きがとれないので、ユウキの格好の的となる。

「リヴァル！リサ！」

ショウヘイに名前を呼ばれ、リヴァルとリサは駆け寄った。

「キリンの弱点は首から上だ。胴体は岩みたいに硬い」

「分かった」

「はい」

手短に話しを済ませ、リヴァルとリサはキリンを挟んで向かい合うように立ち、キリンの落雷攻撃が収まるのを待つ。

「ぐあああっ！」

突然視界の右端が青く光った直後に、右側から狙撃しているはずのユウキから悲鳴が上がって、リサはキリンから目を離してユウキの方を振り向いた。そこには煙を上げるボウガンに、横たわるユウキの姿。

「ユウキさん！」

リサはユウキのもとへ駆け寄り、ユウキの上半身を抱え起こした。

「ぐっ…」

ユウキの口から苦しそうな声が漏れる。

「何があったんですか？青い光が見えましたけど…」

「キリンが…ピンポイントで雷を落としやがった…！」

ユウキはそう言って足元で転がっている「グレネードボウガン改」に目をやった。リサもつられてそれを見ると、弾倉から煙が上がっていた。

「雷で火薬に引火したんだよ…。まだ撃てるかな？俺のボウガン…っ！」

「…今は退きましょう」
「…ああ」
リサはユウキに肩を貸そうとしたが、ユウキは「大丈夫。リヴァルのところへ戻れ」と言って「グレネードボウガン改」を持ち、ひとりでこのエリアを脱出した。
「リサっ！」
背後からショウヘイに呼ばれ、リサは振り向く。そこには全速力で駆けるキリンがいた。狙いはもちろんリサである。
（回避しても間に合わない…！）
一瞬でそう判断したリサ。もはや条件反射で目を閉じてしまう。リサは最悪死を覚悟したものの、キリンに踏まれ弾き飛ばされることはなかった。代わりに鈍い衝突音が聞こえただけ。
「大丈夫か！リサ！」
目を開けると、そこには大剣「オベリオン」の腹でキリンの突進を防いでくれたリヴァルの姿があった。キリンは突進をリヴァルに受け流されて今は遠ざかり、ショウヘイが気を引いてくれている。
「立てるか？」
「…もちろんです」
リサは差し出されたリヴァルの右手を、しっかり握って立ち上がった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　10

（素早い…！）

ショウヘイは駆け回るキリンに苦戦していた。キリンは先程からショウヘイの周囲を時計回りに駆け、隙を見つけられては突進してくる。ショウヘイはすれ違い様に一太刀浴びせているが、その多くは刃が通らない前脚や胴体に当たっている。

「ショウヘイ！」

駆け回るキリンの合間を縫って、リヴァルとリサはショウヘイと合流した。

「ユウキは？」

「大丈夫です」

手短にユウキの状態の確認をとり、すぐ意識をキリンへと向ける。キリンは3人が固まっているところへ突進してきていた。3人は余裕をもってこれを回避し、それぞれ散らばる。ショウヘイとリサは距離を置いたが、リヴァルは走り抜けるキリンを追いかけた。走る速さはキリンの方が早いので両者の距離は開いてしまうが、キリンは立ち止まると方向転換するためにその場で小さく回る。リヴァルはその隙を狙っていた。

（間に合うか…！？）

やがてエリアの端、岩の壁の手前でキリンの脚が止まった。キリンが振り向く。

「はあああああっ！」

キリンと目が合った。リヴァルは大剣「オベリオン」を振り下ろす。それはキリンの頭頂を正確に狙い、キリンは衝撃でその場に横倒しになった。

「いいぞリヴァル！」

いつの間にか接近していたショウヘイが、キリンの背中を斬りつける。

「リヴァルさん！さすがです！」
リサも加わり、ハンマーでキリンの脚を狙う。唯一刃が通る首から上は、リヴァルの担当だ。
「うおおおあああああっ！」
リヴァルはありったけの力を込めて、大上段からキリンの首へと大剣「オベリオン」を振り下ろした。キリンの首は断たれたり折れたりすることはなかったものの大量の血飛沫が飛び散り、ぬかるんだ地面にめり込んだ。さらにもう一発というところで、ショウヘイが声を上げた。
「一旦引くぞ」
「なっ！？どうして！？」
「大丈夫だ。安心しろ」
すでにリサはハンマーを背中に戻し、キリンから距離を取り始めている。リヴァルは仕方なく大剣「オベリオン」を背中に戻し、ショウヘイと共にキリンから距離を置く。すると突然横から何かが飛んできたと思った直後にキリンの周囲で爆発が起きた。あれは――。
「拡散弾…！」
リヴァルは弾が飛んできた方を見ると、そこには右手を大きく振っているユウキの姿があった。どうやら無事らしく、リヴァルは安堵することができた。そしてすぐに意識をキリンへと向ける。キリンのいた場所は黒煙で覆われ、姿を確認することはできない。
「やったか…？」
「いや…」
リヴァルは期待の声を上げたが、ショウヘイは小さく首を横に振った。横を見ると、リサがハンマー「アイアンストライク改」を構えてゆっくりキリンの方へと歩みだしていた。リヴァルが声を掛けようとしたその時、黒煙の向こうから爆発的な光が発せられ、満身創痍のキリンが飛び出した。
「っ！？」
キリンは怒り狂った様子で嘶き、落雷の如く駆け出した。その先に

は、リサ。
「リサ！危ない！」
リヴァルの声でリサは我に返った様子だったが、もう遅い。キリンは電気を纏わせながらリサへ突っ込んだ。リサの腹部に、キリンの角が突き刺さる。
「きゃあああああああっ！！！」
キリンは角をリサに刺したまま頭を持ち上げ、リサの身体を宙に浮かせる。そしてキリン自身の角を通してリサに電気を流し込ませた。リサの身体は電気の白い光包まれ、痙攣を起こす。
「リサあああああっ！！！」
リヴァルの悲痛な叫びが沼地に響く。キリンは自身の頭部を思い切り横に振り、リサを放り投げた。リサの身体は泥沼を何度も転がり、水たまりの中で止まった。キリンは残されたリヴァル達を無視し、脚を引き摺りながらもエリアを脱していった。
沈黙。聞こえるのは雨の音だけ。リヴァルは何も考えることができなくなってしまった。
「早くリサの手当てを」
「…ああ」
ショウヘイはそう言い、リサのもとへ駆け寄る。リヴァルは重い脚を引き摺るようにリサのもとへ歩き出した。その途中でユウキもリサのもとへ駆け寄る。そして大声を出した。
「リヴァル！リサは死んでないぞ！」
「えっ…！」
てっきり、リヴァルはリサが死んだものだと思っていた。慌ててリサのもとへと駆け寄る。そこにはショウヘイに抱えられたリサの姿。ぐったりと横たわり、左脇腹からは今も真っ赤な血液がドクドクと流れ出ている。リサを守っているフルフルの純白な防具は泥と血と電撃で汚れて今にも死んでしまいそうだったが、リサの明るい赤色の瞳からはまだ生きる活力を見出すことができた。
「リヴァ…ルさん…」

ここでリサは一度言葉を切り、再び口を開く。
「不覚でした…。不用意にモンスターへ近づくなんて…」
「今は何も話すな…！早く手当てをしないと…！」
「分かってる。今は応急手当をして一旦ベースキャンプに戻り、そこで治療する」
ショウヘイは冷静にそう言い、アイテムポーチから回復薬グレートと薬草と包帯を取り出した。ショウヘイは回復薬グレートをユウキに手渡し、自身は薬草を手に防具の上から包帯を巻き始めた。傷口を塞ぐ詰め物は持ち合わせていないため、薬草で代用するのだ。リヴァルは今自分にできることを考え、近くにモンスターがいないか警戒に当たることにした。血の臭いを嗅ぎつけて、イーオスのような小型肉食竜が出てくるかもしれないからだ。リサに背を向ける形で立ち、目を光らせ、耳を澄ませる。
「リサ、傷口に薬草を当てるぞ。痛むが我慢してくれ」
「はい…」
背後からリサの苦しむ声が聞こえ、リヴァルは下唇を噛んだ。焦る気持ちを必死に抑える。今、自分にできる最大限のことをするべき、それは見張りだ、と。
「よし、立てるか？」
ショウヘイの声を聞いて、リヴァルは振り向いた。リサはショウヘイに支えられて立ち上がり、ユウキから回復薬グレートを受け取るところだった。
「リヴァル、リサに肩を貸してやってくれないか？俺だと背の高さがあってリサが大変だ」
何となく嫌味に聞こえたが、今は気ならなかった。ショウヘイからリサを預かり、歩き出す。
「すみません…リヴァルさん…」
「気にするな。それより本当に歩けるのか？無理なら言えよ」
「…はい」
リサの言葉を聞いてリヴァルがショウヘイとユウキに頷くと、４人

はリサのペースに合わせて歩き出した。
「あ…」
リサがユウキから受け取った回復薬グレートを飲もうとしていたので、リヴァルはそれをリサから取り上げ、リヴァルが飲ませる。こぼしながらも飲み終えると、リサの顔色も少し良くなったように見えた。
「ありがとう…ございます…」
「気にするな」
この会話を最後に、４人はベースキャンプまで一言も口を開かなかった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　11

ベースキャンプにリサを置いて、リヴァル、ショウヘイ、ユウキの3人は再び狩場へ足を踏み入れていた。ペイントボールの臭気をたどり、雨の中を歩き続ける。

「リサは…大丈夫なのか？」

「俺には分からない。止血が早かったから失血死はないだろうが、傷口が膿化したら…」

ショウヘイはここで口を閉じた。この先は言わなくても分かるからだ。

「でもキリンの強烈な電撃を食らったのに意識があったんだぞ？大丈夫だよ」

確かに不思議ではあった。あれだけの電撃を受けて生きているなんて。ユウキの言葉にとりあえず納得して、リヴァルは歩み続けた。ペイントの臭気が強くなってきている。キリンは近い。

そのエリアの中央に、キリンは佇んでいた。初めて会った時と異なり、その身体は薄汚れ、首元からは出血の痕が見られる。出血自体が止まっているところを見ると、古龍の回復力の強さが理解できる。

「あなたたちは強い…。私では、勝てるかどうか自信がありません…」

ショウヘイにしか聞こえない声でキリンは言った。

「だったら降参するか？命までは取ったりしない」

ショウヘイの提案を、キリンは首を横に振ることで拒否の意思を示した。

「嬉しい提案ですが、お断りします…。私もひとり、あなた達の仲間を倒すことができました…。勝算は、まだあります…」

「そうか…」

ショウヘイがそう言って背中の太刀「ヒドゥンサーベル」を抜いた

ので、リヴァルも右手を背中の大剣「オベリオン」へと持っていく。
「いくぞ」
ショウヘイが静かにそう言って駆け出し、リヴァルもショウヘイの背中を追いかける。キリンはその場で天高く嘶いて雷雲を呼び寄せ、接近するショウヘイとリヴァルに向かって雷を落とした。ショウヘイとリヴァルは左右に分かれ、雷の雨を避ける。キリンは迫るリヴァルとショウヘイのうち、迷わずショウヘイを選んで駆け出した。ショウヘイはキリンをギリギリまで引き寄せ、すれ違い様に斬りつける。しかしキリンの胴体にショウヘイの太刀「ヒドゥンサーベル」の刃は通らない。キリンは減速することなくユウキに向かって駆ける。ユウキは接近するキリン目掛けて貫通能力に優れた貫通弾を撃ったが、キリンはそれを跳躍して避けてみせた。だがユウキも避けられることを頭に入れておいたので、キリンの突進は難なく回避できた。キリンはエリアの端まで駆け、そこで立ち止まってから振り向く。
「はあああああっ！」
そこへリヴァルが大剣「オベリオン」を振り下ろした。突然のことでキリンは怯んだものの、横倒しにはならなかった。しかしその僅かな隙をも逃さず、ショウヘイがリヴァルと入れ替わるように一太刀浴びせる。
「ぐうっ…！私は…負けられない…！私の信じた…ミラルーツ様のために…っ！」
ショウヘイにしか聞こえない声で、キリンは天高く嘶いた。直後に雷が降り注ぎ、周囲が明るく照らされる。リヴァルとショウヘイは雷の落ちる範囲から抜け出し、落雷が収まるのを待つ。しかしその落雷が止まる前に、キリンは猛烈な勢いでリヴァルに向かって突進してきた。そう、リサを戦闘不能に陥らせた時と同じように。
「くっ…！」
リヴァルは大剣「オベリオン」を盾にしてキリンの突進を受け止めた。キリンの勢いにリヴァルは吹き飛ばされ、キリンはリヴァルに

激突した衝撃で体勢を崩し、それぞれ泥沼の中を転がる。リヴァルは泥の水たまりの中で起き上がり、キリンは倒木に当たって起き上がる。リヴァルはまだ駆け出す力が残っているが、立ち上がったキリンの脚は震えていた。限界が近いのが誰にも理解できた。それでもキリンは首筋から血を流し続けながらも駆け出し、ショウヘイへ迫る。ショウヘイはその場を動かず太刀を構え、キリンが間合いに入ったその時を狙って太刀を振るう。しかしキリンはショウヘイの攻撃を跳躍することで回避した。

「あっ…！」

リヴァルは思わず声を上げてしまった。ショウヘイの攻撃を避けるために跳躍したキリン。宙に浮いているキリンを、ユウキが狙い打ったのだ。キリンの身体が強張り、着地に失敗して泥水を巻き上げる。そこへリヴァルが駆け寄った。

「ごめんな…っ！」

リヴァルは無意識にそう言って、大剣「オベリオン」を振り下ろした。

ぬかるんだ地面に横倒しになったキリンのもとへショウヘイとユウキが集まると、キリンはゆっくり目と口を開いた。

「やはり…敵いませんでしたか…」

キリンの言葉はショウヘイにしか聞こえない。ショウヘイはキリンが言葉を話す度にリヴァルとユウキに言って聞かせた。

「しかしこれは…私の信念に従った結果…。哀れみなど無用です…」

リヴァル達は口を開かず、黙ってキリンの最期を見届ける。

「ミラルーツ様…。申し訳ありません…、先に逝きます……――――」

キリンは最期にそう言い残し、静かに息を引き取った。リヴァル達はそれぞれ祈りを捧げた後、背中の剥ぎ取りナイフを手に素材を剥ぎ取り始めた。雨が降り続く中の、静かな作業。静寂を破ったのは、リヴァルだった。

「これ…」
リヴァルの声を聞いて、ショウヘイとユウキが振り向く。
「リサの分も剥ぎ取っていいかな？」
ハンターはモンスターから素材を剥ぎ取る際、その全てを持ち帰ることはない。大きすぎたり重すぎたりして持ち帰れないというのもあるが、感謝の意味も込めて、あまりたくさん持ち帰るのは美徳とされていない。だからリヴァルは一応ショウヘイとユウキに尋ねたのだが、二人は快く頷いてくれた。
「持っていってやれ」
「喜ぶぞ、リサちゃん」
リヴァルはしっかりと頷いてから、再び剥ぎ取りナイフを突き立てた。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　12

「暑い…」
灼熱の溶岩。ドロドロに溶けた岩は、陽の光が入らない洞窟の中を明るく照らしてくれる。おかげで歩くのに苦労はしないものの、洞窟ということもあって熱気が逃げず、サウナの中みたいになっている。
「暑い～…」
動植物はおろか、人間でさえ住み着かない過酷な環境、火山地帯。そこに生えるは水をほとんど必要としない乾燥植物のみ。そこに住まうは溶岩の熱気すらもろともしない進化した竜。そして、ハンターである。
「暑いよ～…」
先程から同じ事を繰り返し言うクレハに、ジュンキはとうとう歩みを止めて振り返った。
「クレハ、暑いのは俺もカズキも同じだ…。そんなに暑い暑い言わないでくれよ…」
「だって暑んだもん…」
「お～い！早くしろよ～！」
元気な声に振り向くと、そこには両手を振るカズキの姿。
「ねぇ、ジュンキ…。どうしてカズキはあんなに元気なの？」
「さあな…。俺が知りたいよ…」
そう言ってジュンキは再び歩き出す。クレハも「うえ～」とか言いながらも付いてくる。
「クーラードリンク、飲んだんだろ？」
「もちろん飲んだよ。飲んでも暑いのが砂漠と火山でしょ…？」
「まあな…」
クーラードリンクを飲んだからと言って、暑さを感じなくなる訳ではない。多少は和らぐものの、やはり暑いものは暑いのだ。

「ほら、行くぞー！」
先行するカズキが元気にそう言ったので、ジュンキとクレハは目を合わせてため息を吐いたのだった。

長くなだらかな坂を登り切ると、そこで洞窟は終わっていた。突然の開放感に、ジュンキは思いっ切り息を吐く。
「やっと出れたーっ！」
クレハも洞窟から出て、大きく背を伸ばす。
相変わらず溶岩の川は流れていてそこそこ暑いが、天井がない分開放的で涼しい。
「息抜きしているところ悪いけど、ラージャンはそこまで待ってくれないと思うぞ」
先に洞窟を抜けていたカズキがそう言ってある方向を指差す。そこには一見巨大な岩と見間違えそうな黒い塊が鎮座していた。よく見ると所々に金色の模様が入り、一対の角も生えている。あれが…。
「ラージャン…」
ジュンキは気持ちを引き締めて歩き出す。クレハとカズキも続いた。
「ラージャン、説得に応じてくれるかな…？」
「どうだろうな…」
クレハが心配そうな声の上げたが無理も無い、とジュンキは思う。先日のクシャルダオラは説得には応じず、ショウヘイやリヴァルに任せたテオ・テスカトルも駄目だった。キリンはどうか分からないが、ラージャンは果たしてどうだろうか。表情が伺えるくらいに近づいたところで、ラージャンは立ち上がった。のしのしと歩き、ジュンキ達の手前で立ち止まる。ジュンキとクレハは並んでカズキの前に立って口を開いたが、声を上げたのはラージャンの方が先だった。
「おまえ…りゅうじん…？」
「あ、ああ。竜人だ」
「人間駆逐作戦、知っているわね？あなたもその作戦の幹部でしょ

う？」
突然喋ったので驚いてしまい、ジュンキは返事に詰まってしまったが、クレハがフォローに入ってくれた。しかしラージャンはクレハの言葉に何も言わず、動かない。クレハはジュンキと目を合わせてからもう一度口を開こうとしたが、ラージャンが喋ったので口を閉じる。
「さくせん…？にんげん、ころす…？」
「ああ、そうだ。俺達竜人は――」
ジュンキはこれ以上言葉を紡ぐことができなかった。それくらいラージャンが発した言葉が衝撃的だったのだ。
「りゅうじん、オデをじゃましにくる…。みらるーつさま、りゅうじん、ころしていいって、いった…」
「おい、ラージャンは何て言ってるんだ？」
背後からカズキに声を掛けられ、クレハは小刻みに震えながら振り向いて言った。
「私達を…殺すって…！」
「へ？」
カズキは目を丸くして凍りつき、そしてすぐに驚きの声を上げた。
「嘘だろおいっ！」
「下がれっ！」
カズキの驚愕の声とジュンキの警戒の声。その直後に振り下ろされるラージャンの拳。溶岩が固まってできた岩の大地に穴が開いていた。
「りゅうじん、オデのじゃま、する…。りゅうじん、ころして、くう…！」
ラージャンはここまで言って雄叫びを上げた。そして一番近くにいたクレハに殴りかかる。あの拳に当たればひとたまりもないだろうが、クレハはギリギリまで引きつけてから回避した。ラージャンの拳が、岩の大地に沈み込む。
「はあああああっ！」

地面にめり込んだラージャンの拳にジュンキは一太刀入れた。手の甲が裂け、真っ赤な血液が流れ出た。

「結局こうなるのかよっ！」

ラージャンの気がクレハに向いている間に背後へと回ったカズキがランス「ブラックテンペスト」を突き刺す。するとラージャンは四肢を使って飛び退き、ジュンキ達から距離を置いた。そして凶悪な腕を振り回して接近してくる。この攻撃は3人とも余裕を持って回避し、ラージャンの背後に回って各々の武器を構える。

「やあああああっ！」

「はあああああっ！」

「らあああああっ！」

クレハの双剣、ジュンキの太刀、カズキのランス。それぞれが武器の長所を生かし、ラージャンの背中を斬りつける。ラージャンは短い悲鳴を上げると飛び退いた。

「逃がさねぇよ！」

カズキはそう言って「ブラックテンペスト」を構えると、ラージャン目掛けて一直線に駆け出した。突進するカズキに対し、ラージャンは殴りかかる。カズキは槍と対になっている盾でラージャンの攻撃を防いだ。

「ぐっ…！」

ラージャンの攻撃力はカズキの予想を上回っていた。重い一撃を受け止め、盾が嫌な音をたてる。

「カズキーっ！」

突然クレハの声が背後から聞こえたので、カズキはラージャンの脇に抜けて攻撃をかわした。横目でまだラージャンが自分を狙っていることを確認し、大きく円を描いてクレハと合流する。

「大丈夫？」

「ああ、あれくらいどうってことないさ」

クレハが心配してくれたので、カズキは元気にそう答えた。

「来るぞ」

クレハの後ろで待機していたジュンキが注意を促す。ラージャンは真っ直ぐ突進してきていた。ジュンキ達は動かない。ラージャンが迫る。

そしてジュンキ達に激突する直前で、突然ラージャンは全身を痙攣させて停止した。特定モンスターの動きを一定時間封じ込める狩猟用アイテムのひとつ、シビレ罠だ。

「ね、シビレ罠持ってきていて正解だったでしょ？」

「だな」

「よっし！一気に攻めるぞ！」

カズキが気合を入れて槍を構える。ジュンキとクレハもそれぞれの武器を抜き、ラージャンへ斬りかかる。一振り、一太刀、一突き入れる度に、真っ赤な血液が飛散する。

「よし、このままいければ――――！？」

カズキが声を上げたその時、ラージャンはシビレ罠から脱出して後退し、ジュンキ達と距離を置いた。

雄叫びを上げ、怒りをあらわにするラージャン。黒色の毛が金色に染まり、筋肉が目に見えて膨れ上がる。

「ころす…！ころして…たべる…！」

ラージャンは再度雄叫びを上げると、一瞬のうちにジュンキ達へ迫った。

「くっ…！」

ジュンキ、クレハ、カズキは身を投げ出すようにラージャンの突進を回避する。それだけラージャンの突進は速かったのだ。ジュンキは急いで身を起こし、ラージャンを探す。ラージャンは起き上がろうとしているクレハを狙っていた。

「クレハ！逃げろ！」

「えっ…？」

クレハはジュンキの声を聞いて振り向く。そこには巨大な拳が迫っていた。ラージャンの右手の拳が、クレハの腹に防具ごとめり込む。

「がは…っ！？」

唾液が口から飛び出した。クレハは身体を「つ」の字に曲げて、地面と平行に飛んでいった。

MH3rd　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　13

吹き飛ぶクレハの身体はやがて失速し、地面に触れると何度も回転し、やがて止まってそのまま動かなくなった。ラージャンは動かなくなったクレハには目もくれず、近くにいたジュンキへ目標を移す。
「ぜんいん…ころしてから…たべる…」
「クレハ！くそ…っ！」
早くクレハのもとへ駆けつけたい。しかし今そんなことをすれば、今度は自分が背後からラージャンに殴られてしまうだろう。そしてそれは、クレハも決して望んでいない。クレハは竜人だ。身体は一般的な人間よりも強固だからきっと大丈夫だと無理矢理納得し、目の前のラージャンへ意識を集中させる。
「俺も忘れるなよ化け物！」
カズキがラージャンの背中へ槍を突き立てる。痛みに怯んだラージャンに、ジュンキは太刀「エクディシス」を走らせる。怒りに身を委ねてはならない。あくまで冷静に、ラージャンへ攻撃を加える。ラージャンが振り下ろす拳を的確に避け、脇腹を的確に斬りつけながら背中側のカズキと合流する。
「カズキ、クレハが…」
「分かってる。だからこいつさ」
カズキはそう言ってアイテムポーチから閃光玉を取り出した。ラージャンが振り向いた時を狙って破裂させ、視界を奪う。
「さ、行ってこい。ここは俺が受け持つから」
「…すまない！」
ジュンキはカズキにラージャンを任せ、クレハのもとへと向かった。その姿を見て、カズキは人知れず微笑んだ。
「さてと、俺の相手はこいつだな」
カズキはそう言って、視界を奪われて暴れまわるラージャンへ「ブ

ラックテンペスト」を突き出したのだった。

ジュンキがクレハのもとへ駆け出した時には、クレハは自力で上半身を起こして回復薬を飲んでいた。ジュンキが近づいてきていることに気づいてか、空になった瓶の淵を左手の親指と中指で挟んで振っている。

「大丈夫か？」

「うん。痛かったけど、もう平気。でも…」

クレハはそう言って視線を下に向けた。ジュンキもクレハの視線を追う。そこにはボロボロになってしまった防具があった。クレハの装備しているレイアSの防具、その腹部が大きく凹み、リオレイアの甲殻にはヒビが入ってしまっている。

「これは修理だなぁ…」

「動きづらくはないか？」

「ううん、それは大丈夫。それより早く戻らないとカズキが持たないよ」

クレハはそう言いながら空瓶をアイテムポーチへ戻して駆け出す。途中で落としてしまった双剣「インセクトスライサー」を回収し、カズキの横へ並んだ。

「無理はするなよ」

カズキの言葉にクレハは無言で頷き、双剣を構える。遅れてジュンキが出てきたところでラージャンは視界を取り戻し、一度雄叫びを上げる。

「りゅうじん…じゃま…ころす…ころす…」

ラージャンはゆらゆらと身体を揺らしながらそう言い、一気に突進する。それをジュンキ、クレハ、カズキは最小限の移動で回避し、すれ違い様に一閃、一太刀、一突き入れる。そして背中を向けたままで立ち止まるラージャンにジュンキ達は刃を、槍を向ける。

あと少しでカズキの槍が、ジュンキの太刀がラージャンの背中に傷をつけるというところで、突然ラージャンが雄叫びを上げた。

「ぐっ…！」

ジュンキ、クレハ、カズキは両手で耳を塞いでその場に硬直してしまう。そこへラージャンが全身を器用に回転させ、3人を薙ぎ払った。ジュンキ、クレハ、カズキはそれぞれ別の方向へ飛ばされてしまう。

「くそっ…！」

ジュンキは急いで体勢を戻すために立ち上がったが、次の瞬間にはラージャンの拳が腹にめり込んでいた。クレハの時とは違い、今度は放物線を描いて吹き飛んだ。

「が…はぁ…ッ！」

口から唾液が飛び出す。そして岩の大地に墜落し、そのまま動かなくなった。

「ジュンキ…！」

先ほどジュンキがクレハを心配したように、クレハもジュンキを心配する。そしてジュンキならきっと大丈夫という、先ほどのジュンキと同じ結論に至って今は目の前のラージャンへと意識を傾けた。

「まずは…せんぶ…ころしてから…」

ラージャンの言葉がクレハの脳裏に響く。

「俺を忘れてんじゃねぇえええっ！」

カズキはクレハの方を向いたラージャンに、槍を突き立てる。するとラージャンは体勢を崩して転び、のたうち回った。そこへクレハが双剣「インセクトスライサー」を構えて肉薄する。

「はあああああっ！」

鬼人化、乱舞。ラージャンから血の噴水が上がる。

「おらあああっ！」

カズキがラージャンへ突進し、「ブラックテンペスト」の穂先を深々と突き刺す。するとラージャンはカズキの「ブラックテンペスト」を右手で掴んで自身の身体から抜き、カズキごと放り投げてしまった。

「わあああああっ！」

カズキが悲鳴を上げながら飛んでいき、地面に激突する。しかし受け身を取れたのか、カズキはすぐに起き上ってその場を離れた。再びラージャンがこちらを向く。クレハは唾を飲み込んだ。

「おいで」

クレハの言葉に反応して、ラージャンが殴りかかる。クレハはラージャンがどんなに近づいても逃げ出すことはなかった。

ＭＨ３ｒｄ　第3章　雪山、砂漠。沼地、火山。　１４

襲いかかるラージャンの拳。クレハはラージャンの一撃を紙一重で回避し、顔面を斬りつけた。ラージャンは悲鳴を上げて後退する。その隙にクレハはアイテムポーチに左手を突っ込み、中から閃光玉を取り出してラージャンへ投げつけた。閃光玉はラージャンの顔面で破裂し、再び視界を奪う。ラージャンが視界を失ったのを確認してから、クレハはジュンキのもとへと駆けようとした。しかしジュンキは既に立ち上がり、こちらに向かって歩き出していた。

「ジュンキ…！大丈夫なの？」

ジュンキはヘルムを被っているので表情は伺えないが、唯一露出している青色の瞳は笑っていた。

「何とか。でも…」

そう言ってジュンキは視線を落とす。そこにはクレハと同じようにボロボロになったレウスＳの防具があった。

「俺もボロボロだ」

ジュンキの言葉にクレハは思わず笑ってしまう。

「いこう？カズキが気を引いてくれているし」

カズキは視界を奪われたラージャンとひとりで迎え撃っていた。

「勝負はこれからだよ。ね？」

「ああ、もちろん」

ジュンキとクレハは互いに頷き合い、同時に駆けだす。そして2人がカズキと合流する直前に、カズキが突き出した「ブラックテンペスト」がラージャンの右目を抉った。ラージャンは悲鳴を上げて転倒し、激痛に悶える。

「やったな、カズキ」

「ジュンキ！動いて大丈夫なのか？」

「竜人の身体をなめるなよ？」

ジュンキが多少格好つけて言うと、カズキは声を上げずに笑ったの

が表情を見なくても分かった。
「ぐ…おお…！」
ラージャンが苦しそうな声を上げたので、ジュンキとクレハに緊張が走る。
「め…かたほう…みえない…。みえない…！ゆるさない…！ころす…。ころス…！コロスゥゥゥ…！！！」
ラージャンは今まで以上に大きな雄叫びを上げると、金色に染まった毛をさらに逆立て、全身に電気を纏った。
「な、なんだ…！？」
ジュンキ、クレハ、カズキは目の前の存在に本能が恐怖し、後ずさってしまう。
「ひきさく…！ねじきる…！くいちぎるゥゥゥ…！」
ラージャンは再び雄叫びを上げ、口から電撃を放ってきた。それは直線的に伸び、ジュンキ達に迫る。３人はあわててそれぞれ回避し、何とか事なきを得た。
「ば、化け物かよあいつは！？」
カズキの言葉はジュンキもクレハも同じだった。
「それでも、俺たちは奴を倒す。そうだろ？」
ジュンキがそう言うと、クレハもカズキも頷いてくれた。ラージャンが突進してきたので、３人はそれぞれ回避する。そしてラージャンが振り向く前に３人はそれぞれ一度ずつラージャンに攻撃を加えた。ただそれだけでラージャンは片膝をつく。
「カズキ！シビレ罠を使え！一気に倒そう！」
「おうよ！」
カズキの返事を聞く前に、ジュンキは駆けだす。直後にラージャンの拳が降り注ぎ、岩の大地に穴がいくつも開いた。
「こっちだよっ！」
クレハがわざとラージャンの視界を通って気を引く。ラージャンの気がクレハに移ると今度はジュンキがラージャンの気を引く。そうしているうちにカズキがシビレ罠の設置を終えたので、ジュンキと

クレハはラージャンを誘導しつつカズキと合流する。そしてラージャンはシビレ罠を踏み抜き、全身を痙攣させて動きを止めた。
「ジュンキ！今こそ…！」
「ああ！」
ジュンキとクレハは竜人化すると、目にも止まらない速さでラージャンを斬り刻んでゆく。
「う…おお…！ぐぬおおおおおっ！」
このまま倒せるかと誰もが思ったその時、ラージャンはシビレ罠の効力があるにもかかわらず右拳を振り上げ、ジュンキ目掛けて振り下ろした。
「なっ…！？」
ジュンキはラージャンの想定外の行動に驚き、無意識に手中の太刀「エクディシス」を大剣のように盾として構えてしまう。「エクディシス」はラージャンの拳に横からの圧力を加えられ、鈍い金属音を立てて真っ二つに折れてしまった。ラージャンはそのままジュンキを殴り殺そうとするが、ジュンキの目と鼻の先でラージャンの拳は動きを止めた。
「へへっ、カズキ様大活躍ってか」
背後から聞こえた声に振り向くとそこにはカズキがいて、「ブラックテンペスト」の穂先がラージャンの脳天を貫いていた。ジュンキは一気に力が抜けてしまい、その場へ倒れるように座ってしまう。
「ジュンキ！大丈夫！？」
すぐにクレハが駆けつけ、ジュンキに怪我がないことを確認して安堵のため息を吐いた。
「よかった、無事だった…」
「ああ、俺は大丈夫だよ。でも…」
そう言ってジュンキは右手の太刀を持ち上げる。それは刃の中央から折れていた。
「太刀…折れちゃったね…」
クレハが折れた刃先を拾いながら残念そうな声を上げた。

「まあ、命あっての物種だよ。カズキもありがとう。助かった」
「いいってことよ。はやいこと素材を剥ぎ取って、街に戻ろうぜ」
カズキはそう言って「ブラックテンペスト」を背中に戻し、代わりに剥ぎ取りナイフを抜いたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3646p/

モンスターハンター　～人と竜と竜人と～

2011年12月24日06時50分発行